

浅間火山活動記録の再調査

宮崎 務*

東京都防災顧問

Re-Examination of the Records of Activities of Asama Volcano

Tsutomu Miyazaki*

Disaster prevention advisor, Tokyo Metropolitan Government

Abstract

Mt. Asama is one of the most active volcanoes in Japan. We have had some reliable historical documents on its volcanic activity since as early as 1108 (around the end of the Heian era). These historical documents had been collected since the end of the Edo era: middle of the 19th century. In particular, from the Meiji era (1867-1912) until the present, several authors published eruption histories of Mt. Asama based on geophysical and geological observations conducted with modern technology.

To elucidate the long-term pattern of volcanic activity, we compared several publications on the eruption history of Mt. Asama. Eventually, we encountered contradictory and/or confused descriptions of many particular volcanic events among these publications, even in modern times. We investigated and corrected these erroneous records with the aid of some reliable research papers, and finally present the eruption history of Asama volcano from a unified viewpoint.

The volcanic activity of Mt. Asama can be summarized and described by subdividing the following four periods depending on the quality of descriptive data:

Period 1: 685-1879 AD. Two devastating eruptive activities occurred during this period according to historical documents.

Period 2: 1880-1933 AD. A volcanological observatory was established at Yuno-Taira on the western mountainside of the volcano, where observations were made during the summer. Mt. Asama started to experience strong activity from the beginning of the 20th century.

Period 3: 1934-1943 AD. A new volcanological observatory was established on the eastern mountainside by Earthquake Research Institute, the University of Tokyo. Full-time observations were conducted with modern volcanological instruments, which resulted in an empirical law for the forecasting of summit explosions in a typical andesite volcano. Mt. Asama erupted almost continuously during this period.

Period 4: 1944-1990 AD. During and just after World War II, the observation system was maintained at a minimal level, but never stopped. After the War, research activity reached the highest intensity, which contributed to the development of observation skills and instruments for volcanology. However, in the latter half of the period, the activity of Asama volcano greatly declined to be almost quiescent.

For periods 3 and 4, we attempted to introduce the classification of eruptive intensity.

Key words: Asama volcano, Volcanic activity, Records of eruptions, Re-examination of records, Eruptive history

* e-mail: miyazkt@nifty.com (〒190-0013 立川市富士見町6-28-503)

1. はじめに

日本本州中部、長野、群馬両県境に位置する浅間山は、日本における代表的な安山岩質火山できわめて活動的であり、有史後に多くの噴火記録が残されている。それらの記録については、現在までに多くの研究者によって整理され、活動史、噴火史、あるいは論文中などにまとめられている。20世紀に入ってから、科学的な観察記録、研究資料も蓄積され、詳細な活動記録が存在する。

今回、浅間火山の長期的な活動のパターンを解析する目的で、既存史料および観測資料にもとづき活動記録の整理と再考証をおこなった。その作業の過程で、現在噴火として報告されている活動記録中には、多くの疑問記録が含まれていて、活動史の間に混乱を生じていることも明らかになった。また、近代の噴火活動についての記録には、不正確な記述も散見された。

本報告は、今回解析の基礎資料として再整理した活動記録（活動史料）について述べるとともに、一部活動史に関する重大な疑問点については事由を指摘する。

2. 整理内容の説明

著者の意図することは、浅間火山の長期的活動パターンの解析である。そのために、古代より時の流れを追い、個々の活動記録については、可能な限り原記録に接することにした。したがって、多くの既存活動史を比較し検討して、その記録引用順を確認する作業より始めた。また、浅間火山の活動だけを記録した活動史に限らず、自然現象全般に関連した災害を記録した災害史についても、検討の対象とした。

新しく古文書を探して活動記録を発掘する作業は行わなかった。近代（19世紀末以降）における研究論説では、その文中に記載された活動史については議論するが、研究の内容そのものについての、検討は行わないことにした。

活動の記録に関しては、原記録をもとにして、それを引用した活動史を挙げ、その内容における問題点を論議する形式をとった。その点では、江戸時代（天明3年の大噴火以後）における浅間山関係の活動史には、その後編纂された活動史の基礎となるものが、丸山柯則、信濃国浅間岳之記（以後の引用には“浅間岳記”と略す）、および貝川井出貞道編、天明信上変異記（以後の引用には“信上変異記”と略す）の2篇があり、その文中では、ほとんど引用原典が明示されていない。そのため、両方ともに原典としての取り扱いとした。

3. 活動記録の記述について

活動記録の記述は次の要領でおこなった。

- i) とりまとめた記録で明らかに噴火記録と考えたものは、その年月日と原典記述の内容を明記する。
- ii) 何らかの問題を有する記録については、その疑問点を指摘し、取捨選択の理由を明らかにする。
- iii) 過去に何らかの形で噴火記録として呈示されたが、理由も不明のままいつの間にか消失した記録などについても、出来る限りその資料内容と背景、あるいは各種の討論、新事実の発見などを明らかにして、誤解を生じないようにした。この項目については、該当年代項に注、として記述する。

過去における活動史が整理、編纂された期間は、明治、大正、昭和3代にわたっている。その間、社会通念としての歴史観が変化し、活動史にも影響が及んでいるのは否定し得ないことである。その点が原因で活動史相互間に派生する問題については、本報告では議論しない。

活動記録和暦の西暦変換は内田（1981）によった。

4. 活動記録調査期間の分け方

活動記録の調査期間については以下の4つの期間に分類した。

第1期. 685年（天武天皇14年）～1879年（明治12年）

この期間の活動記録は、主として古文書によるもので、内容的にはかなり杜撰な記録も見受けられる。しかしながら、期間としてはもっとも長期間にわたる。この期間には、1108年（天仁元年）あるいは1783年（天明3年）の大噴火が生じている。噴火活動の長期的パターンを知る上には重要である。

第2期. 1880年（明治13年）～1933年（昭和8年）

この期間は近代火山学の黎明期にあたり、震災予防調査会関係の大森房吉をはじめとする多くの研究者が、浅間火山の調査、観測を開始した時期を含んでいる。とくに20世紀のはじめより、浅間火山は活発な活動をおこなっている。また、浅間山活動の古記録に関しても整理が始められた時期にあたる。

第3期. 1934年（昭和9年）～1943年（昭和18年）

この期間の初めは、東京大学地震研究所浅間火山観測所が開設され、新しい見地からの研究調査が開始された時期である。この期間のはじめ（1935年）より、噴火活動の強度について分類（この期間の開始時に内容を説明する）をおこなう。浅間火山も激しく噴火活動を続け、いろいろな観測、研究成果が得られた時期であるが、一方、期間後半には第2次大戦の影響で調査活動が停滞し、記録に若干の不充分さがみられる。

第4期. 1944年（昭和19年）～1990年（平成2年）

戦争の影響を受けて観測研究もある程度混乱したが、

活動の観測記録に大きな影響はみられていない。戦後にも大きな爆発的噴火が生じているが、全体的な傾向として、次第に浅間火山の活動度が低くなっていく期間である。一方、調査、観測の方法は次第に充実かつ進歩している。また防災上の見地より、噴火の予知が研究の対象となりつつある。

以上の各期間について、噴火活動記録を検討した。噴火記録には全期間の年代順に番号を付した。また注、についても同様に通じ番号を付してある。第1図には、浅間山を中心とする明治時代初期の古地図を示してある。

5. 第1期(685年~1879年)噴火活動記録

1) 685年の活動。最古の記録で、日本書紀、巻第29、天武天皇14年3月、

。是の月に、灰、信濃国に零れり。草木皆枯れぬ。

とある。信濃国における降灰の記録であって、火山名は明記されていない。古文書の“浅間岳記”および“信上変異記”は、この記録を浅間山の活動としている。Milne (1886)、をはじめほとんどの活動史は、この活動

を浅間山の噴火とみなしている。武者(1941)、増訂大日本史料(以後の引用は“増・地震史料”と略記する)では、浅間山と記して疑問符が付けられている。今村(1942)は、“草木枯死の関係か見てむしろ焼岳の方であったかも知れぬ”と述べている。考察してみる。

日本書紀、巻第29、天武天皇14年10月に、
みずのえうまのひ かるべのあそみ たるせ たかだのおびとにひのみ あらた おのむらじ
 。壬午に、輕部朝臣足瀬・高田首新家・荒田尾連
まろ しなの つかは かりみや つく けだ つかまの ゆ
 麻呂を信濃に遣して、行宮を造らしむ蓋し、東間温泉に
いでま おも
 幸さむと擬ほすか。

とある。ここに東間とは信濃国筑摩郡:長野県松本市の浅間温泉かという(坂本・他1980)。

685年4月の噴火が焼岳に生じたとする、気象、距離などの点で松本付近は影響の大きい地域と考えられる。その地域に同年11月、行宮が造られたことになる。むしろ“草木枯死”とする記録は、信濃側山麓に長倉、塩野、望月などの古代牧が存在した(川崎, 1974)浅間山にそぐうように思える。科学的根拠は乏しいが、状況より考えてこの記録を浅間山に関するものとした。

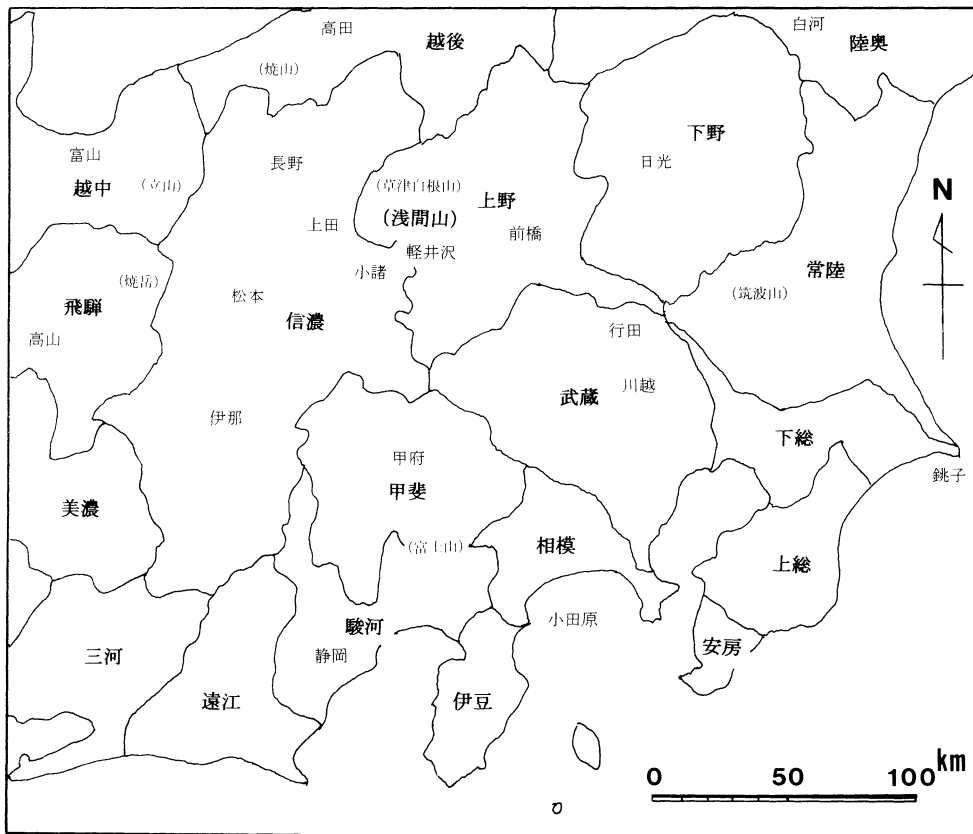


Fig 1. Map showing the regional names of the central part of Japan early in the Meiji era.

注1, 887年: この年浅間山が噴火したとする噴火史(例えば, 軽井沢測候所, 1956年, 浅間山爆発史集, 以後の引用は“爆発史集”と略記する. 気象庁観測部地震課火山係, 1959, 日本噴火誌, 以後の引用は“気・噴火誌”と略記する)は, 1950年代より現れる。「理科年表」でも, 1961年より1982年の期間, 疑問符付きの場合もあるが, 噴火記録に記載されている. この活動記録の出典は“浅間岳記”と考えられる. 同書には以下のように記されている.

“仁和三年七月三十日大山頽崩山河溢流六郡之城廬弘地漂流男女流死成丘 扶桑略記按に千曲川の変なるべし, 佐久, 小県, 埴科, 水内, 高井右六郡なり”

とある. この記事を引用した浅間山研究会編(1910), 浅間山, (以後“浅間山”と略記する)では, 上の記事に続けて“編者曰, 大山は浅岳成乎, 若し然らざるもその連嶺餘脈のことなるべし”

と記している. この記述が浅間山の活動として引用された主因と考えられる.

記録の原典である「扶桑略記」であるが, 比叡山の僧皇円が編纂した史書で, 嘉保元年(1094年)以後になったといわれる(久松, 1974; 松村, 1988). 「扶桑略記」中には

“仁和三年, 七月三十日辛丑, 申時, 地大震, 数刻不止, 天皇出仁寿殿, 御紫宸殿南庭, 命大蔵省, 立七丈帳二, 為御在所, 諸司舎屋, 及東西京廬舎, 往々顛覆, 圧殺者衆, 或有失神頓死者, 同日亥時, 又辛三度, 五畿七道諸国, 同日大振, 官舎多損, 海潮溢漲陸, 圧死者不可勝計, 其中攝津国尤甚, 信乃国, 大山頽崩, 巨河溢流, 六郡城廬弘地漂流, 牛馬男女流死成丘”(東京大学地震研究所編, 1981)

とある. この記録によって仁和3年7月30日(887年8月26日)には, 5畿7道に被害を生じたM=8.6の地震と, 信濃北部に被害を起こしたM=7.4の地震があったとされている(理科年表, 1962~1985年,).

この信濃北部地震説について荒川(1980)は, 六国史の一つである「日本三代実録, 巻50」の記録を基礎として, 「類聚三代格, 巻18, 赦除事」および「日本紀略, 前編20」による記事をあげ, 信乃国の山頽れ(崩れ)は仁和4年5月8日(888年6月24日)に発生しているとして, 仁和3年の地震説に疑問を呈している. ただし「類

聚三代格」あるいは「日本紀略」には, この山崩れの原因および場所の記述が無いので詳細は不明としている.

これらの点に関して河内(1983)は, 古記録による信濃の国の山崩れは, ハヶ岳中の天狗岳・稲子岳の東壁の崩壊により生じた大月川岩屑流(この崩壊により松原湖が形成された)を示すと考えている. また「扶桑略記」の記事は, 編者皇円の編纂の誤りであると指摘している. 同様の指摘は「信濃史料」(東京大学地震研究所編, 1981)中にもある.

また早津(1994)は, 新潟焼山火山の噴出物による活動年代の決定について, 地元の古文書の対比より, 仁和3年には同火山に噴火が発生したと推定している. 現在では887年に浅間山が噴火したとする論拠は認め難い.

2) 1108年9月5日(天仁元年7月21日)よりの活動. 「中右記」にある以下のような記録による.

“五日壬^{みづのえね}子, 左中辨長忠於陣頭談云, 近日上野国司進解状云, 国中有高山, 称麻間峯, 而從治曆間, 峯中細煙出來, 其後微々也, 從今月七月二十一日, 猛火烧山嶺, 其煙属天, 沙礫満国, 煨燼積庭, 国内田畑依之己以滅亡, 一国之災未有如此事, 依希有之怪所記置也.”

“八月二十五日寅卯時許, 東方天色甚赤.”

“九月三日, 天晴, 早旦東方天甚赤, 此七八日葉許如此, 誠為奇, 可尋知歟.”

ここに「中右記」とは中御門右大臣藤原宗忠の日記で, 1087年より1138年に至る約50年間の出来事が記されている(新村, 1983). この噴火が発生した当時の見聞記であり信憑性は高い. “増・地震史料”にはその他に「神皇正統録」, 「立川寺年代記」, 「興福寺年代記」などの関連記事がある.

この活動は, いわゆる1輪廻の活動で, 浅間Bテフラ, 追分火砕流, 舞台溶岩流等1km³を超える噴出物を噴出した前掛山火山の大噴火と考えられている(荒牧, 1981).

3) 1281年7月3日(弘安4年6月9日)の活動.

1108年大噴火説に対して, この活動記録が大噴火に相当するとする意見もある. しかし, 大森, (1918a): (日本噴火志, 以後の引用は“噴火志”と略記する)等は, この活動記録を無視, あるいは疑問視している. この活動記録は“浅間山”に次のように記されている.

弘安四年=皇紀一九十四一(御宇多天皇の御宇)

六月九日、暮方山より西黄なる雲出で、人倫草木迄金色の光となる。同夜、四ツ時より山焼出し、信州追分小諸より南四里の間灰降り、今に其跡残れり。北は山の麓まで押出し今に其處を石とまりと云。此辺亡村多し。「浅間焼大變記」

この「浅間焼大變記」という記録であるが、噴火の有様、被害の状況、社会の動向、風聞等を記したものである。群馬県史編さん委員会（1981）によると、この記録は県内各地に残されていて、すでに県史で調査済みのものだけでも30余点に及ぶとある。またこの記録類を検討すると、噴火の被害等には相違があるものの、半数は同文の書き出しで始まり、おそらく転写を重ねて流布したものと考えられている。著者もその記録のうち、群馬県引間、大山家蔵文書を披見したが、群馬県史に収録されているものとほとんど同文である。ここではこの記録の意味を評価するために、文書のはじめより弘安4年の記事までを群馬県史より引用して以下に記す。

天明三年九月 浅間焼出大變記写

浅間焼出大變記

一抑我朝は昔天竺最上国転輪聖王の御代=天地大地震有り、^{りやうしゅ}靈鷲山丑寅之隅ニみたらいと申山崩大海に沈、夫より式拾万千四百余年に伊弉諾、伊弉冊の尊、^{いざなぎ いざなみ}天の浮橋の上より此下に国やあらんと、天の鉾を下して海原をかきさがし給ふ、鉾を引上其下だりこりかたまって一つの島となる、天地別て陰陽の始葦原国となる、天神七代目之御神也、人王七代孝靈天王の御宇辛未年に、近江の国地さけて一夜の内に湖となる、此時富士山生ずるといふ、信州浅間嶽者持統天王の九年丙申、役の行者此山に登り給ふ、東北の山中に柳の井有、是に黒蛇居て毒水をはき、行者怪て本尊に祈誓し、利剣を以て是をたすく、夫より峰に登り巖石をたいらげ、自草の堂を構へ勤行す、百鬼の類来て宿衛せり、西北の方は無間谷、南の方者剣の峰、北に鬼岩屋、東に遠見坂、金亀岩山は神変無明の山、外浜内浜、其後久く登りし人なし、弘安四年六月九日の夕方、山より西に黄色成雲出で、皆人草木迄金色の光移、同夜四ツ時焼出し、信州追分小室より南へ四里余之間灰砂ふり、火石今にあり、北は山の麓まで押出し、今に此所石とまりという、誠に昔より焼山成か— 略。

字句に僅かの相違（例えば、小室一小諸、平安時代の末か鎌倉時代の初め頃、当地の豪族小室氏が現在の小諸城のところに館を営んだといわれている、川崎、1974）はあるが、“浅間山”が引用したのはこの記録と考えられ

る。文書中には神話、伝説の如き文を含み信頼できない内容である。

1281年噴火説をとる尾崎（1971）によると、古史伝（国学者、平田篤胤の著作、）の「あさまがたけ」に、弘安4年の活動について詳細に記録されているとある。著者は古史伝を閲読していないが、武者（1935）によると

“弘安四年六月九日の暮方山より西に黄なる雲出で人物草木皆金色の光を映ぜり、諸人山上を仰ぎ見れば、石とも木とも分らず、光炫ける楼閣門戸等見えけるが、其夜亥の刻より焼だして云々” 「古史伝」

とある。尾崎（1971）によると「古史伝」には

“その夜亥の刻より焼出して、追分。小諸より南四里余の間、灰砂ふり、大石今にあり、北は山の麓まで押出して、今に此所を石どまりと云うと云”

とあるという。この二つの記事を併せてみるかぎり「古史伝」の記事は、「浅間焼大變記」の記事を潤色してつくられたと推定される。何故なら「古史伝」は天明大噴火の42年後、1825年（文政8年）に完成した（新村、1983）ものである。一方、「浅間焼大變記」または「浅間焼出し大變記」は、天明の噴火後それほど年月をおかずに記されたことは、その内容より明らかである。したがって、先述の推定は当然といえる。

「浅間焼出し大變記」の弘安4年の活動記録についての疑問点は、この文書だけに記述されたことが、他の多くの文書には挙げられていない点にある。また、500年以前の出来事の記述としては、あまりにも具体的である。さらには元寇の年といった、いわば神がかり的な要因も存在する。これらの点を考慮して“噴火志”はこの記録を無視した（“噴火志”は“浅間山”の記録を多く引用している。当然この記録も考慮されたと考えられる）のであろう。

八木（1936）、浅間火山、（以後の引用には“浅間火山”と略記する）では、弘安4年の記録は記載（ただし出典を“浅間記”としているが“浅間記”中には弘安4年の活動記録は無い）しているが、活動史の説明文においては“彼の天仁元年（1108年）より大永7年（1527年）に至るまで、約400年間浅間山は、噴火記事を欠いているが、以下略”（219頁）とあり、弘安4年（1281年）の記録は黙殺している。

著者もこの噴火記録は信用しない。もし噴火として引用する場合には、当然疑問符をつけるべきと考える。

注2, 浅間Bテフラ等を噴出した大噴火については、1108年と1281年の2説がある。

坂口(1984)は、群馬県高崎市付近の遺跡で、浅間Bテフラにおおわれた水田址に残された足跡の存在原因を考察し、季節的な観点より1108年の記録が妥当であるとしている。古文書による記録以外に¹⁴C年代測定による研究結果もあり、1108年説に有利であるが決定的ではないとされている(荒牧, 1981)。

注3, 1427年7月7日(応永34年6月4日)の活動(?) “浅間岳記”に次のような記事がある。

“応永三十四年丁未六月四日富士山浅間山虹吹四月より雨ふりつづき六月大洪水川辺迪大破”

この文中の虹を煙の間違いとすれば、富士山と浅間山が活動したことになる。最初に虹を煙として疑問符を付したのは脇水(1892)である。この曖昧な点によって、解釈が分かれている。“噴火志”では噴火と認めていない。“浅間火山”では、記録を記載し虹(煙?)としているが、活動史説明文中では先述のように、噴火と認めていない。理科年表には1961年以降に、疑問符付きの噴火として記載されている。

この年、1427年には4, 5, 6, 7, 8, 9月に近畿・関東・奥羽地方で洪水の記録が多く残されている(小鹿島, 1894, 日本災異志, 以後“災異志”と略記する。:田口, 1943)。ここに川辺迪(道)とは、浅間山の北側、吾妻川沿いの道を指す。

著者はこの“浅間岳記”の記録は、霖雨・洪水に重点がおかれたものと推定する。したがって、虹は煙の誤記ではなくて何か別の意味を示すと考えている。噴火記録とは認められない。

4) 1450年(宝徳2年)の活動。“増・地震史料”に

宝徳二年、是年信濃国浅間山火燃(続本朝通鑑)

とある。「本朝通鑑」とは、徳川幕府の命により林羅山父子が編集したもので、1670年(寛文10年)に完成した(久松, 1974; 松村, 1988)。火山活動の内容はさだかでない。

注4, 1518年8月(永正15年7月)の活動。この年噴火があったとしている活動史がある(“爆発史集”: “気・噴火誌”: 村山, 1979; 理科年表, 1961~1964)。この記録

の出典は“浅間岳記”と推定される。つぎのように記されている。

“永正十五年^{つちのえとら}戊寅七月浅間山雪降”

これは明らかに降雪の記録である。“災異志”あるいは権藤(1932)によれば、永正14, 15, 16年と続けて諸国大飢饉の記録が残されている。日本における凶作の主原因は寒冷気候であろう。この年代、寒冷気候に見舞われたと推定される。そのため、夏浅間山に降雪があり、珍しいこととして記録されたと考える。雪→灰とすれば噴火であろうが、まさに白を黒とする論理である。1518年のこの記録は噴火ではあるまい。

5) 1527年5月(大永7年4月)の活動。この噴火については

大永七年^{ひのとい}丁亥年四月大焼石降。 “浅間岳記”
人皇百六代後奈良天皇の御宇大永七年丁亥四月大焼あり
しとぞ。 “信上変異記”

の二つの記録がある。ここで注意したいのは“浅間山”が「信上変異記」と誤記したために、“増・地震史料”では「信上変略記」となり、村山(1979)でもそのように記載されているので指摘しておく。活動の詳細は明らかでない。

6) 1528年(享禄元年)の活動。この記事は“災異記”にあり

“是歳信濃浅間山噴火”

と記されている。原典、活動の詳細いずれも明らかではない。

7) 1532年1月14日(享禄4年11月27日)の活動。この噴火は“信上変異記”につぎのように記されている。

“享禄四年^{かのとう}辛卯(天明三年迄二百五十年)十一月二十二日大雪にて、降り積ること六尺または七尺のところもあり。二十三日、二十四日晴天に而又二十五日より二十七日迄時々降りける。然るに二十七日浅間山大に焼け出し、大石小石麓二里の内雨の降る如く、中にも大原といふ所へ七間余の岩石ふりけり。是を七ひろ石と名づけて今にあり灰砂の降る事三十里に及べりとぞ。無間谷とい

へるは浅間山を引きまわし巖石峩々としておそろしき大谷なり。前掛山といふは、焼山を隠して佐久郡に向かふ。鬼の牙山黒生山の間谷と石の大雪降り積もりし所に焼石のほのほにて一時に消えたり。又二十七日七つ時より大雨となり二十九日まで昼夜のわかちなく降りたれば、山々の焼石谷々押出し麓の村々多く跡形無く流れしとぞ。其後街道不通路に成りしを、其時の領主近郷へ申付、小石ともかたよせ、四年が間に漸く道普請成就せり。今に至り山の半腹街道筋皆焼石のみなり。是降りたるにはあらず、其時押出せし石なり”

この記録の重要な点は、噴火噴出物による融雪、その後の降雨による土石流の発生についての具体的記述であろう。最近では1982年4月26日の噴火の際にも、小規模ではあるが、融雪による土石流発生が報告されている(下鶴・ほか, 1982)。積雪がある際の活動では充分注意すべき現象といえる。

“噴火志”にはこの記録が記載されていない。“浅間山”では記録文は“信上変異記”と同文であるが、引用は「天明信濃風土記」とある。このことが原因で“噴火志”がこの記録を棄却したとも考えられる。“浅間火山”では“信上変異記”の引用を明記している。

8) 1532年(天文元年)の活動。この記録は“災異志”にある

“是歳信濃国浅間山噴火”

によっている。各活動史もこの記録を引用している。“災異志”には出典、月日は明記されていない。

9) 1534年(天文3年)の活動。“増・地震史料”に

「続本朝通鑑」

天文三年、是年浅間山鳴動火燃。

とある。この記録以後およそ50年間活動の記録が見当たらない。

10) 1582年2月16日(天正10年1月14日)の活動。“増・地震史料”に

「天災地変に関する調査」

正月十四日信濃浅間山噴火、(晴豊記)

とあり、さらに同年中の記録として

天正10年6月4日(1582年7月3日)灰降る

「続常陸遺文」

六月四日己午時、焼はいのおおふり申候、何方も同前に候。

と記載されている。常陸地方(第1図参照)に降灰があったことがうかがえる。この降灰の原因として、浅間山噴火の可能性がもっとも高いと考えられる。これらの記録より、暫く休止していた浅間山の活動が再開されたと推定される。

11) 1590年(天正18年)の活動。“増・地震史料”に つぎの記録が挙げられている。

「當代記」

此春。天正十八年信州浅間山焼上、焰東の方えころふと云々。

12) 1591年(天正19年)の活動。“増・地震史料”に 2記録が記載されている。

「當代記」

此春中。天正十九年浅間山夥しく焼上。

および

天正19年10月14日(1591年11月29日)浅間山噴火し、武蔵国忍^{おし}灰降る。

「家忠日記」

十四日丙午夜五ツ時、信濃国浅間山大やけ候て、はい無際限ふり候てこし候。地震のごとくいへゆるぎ。

武蔵国忍とは、現在の行田市の旧市街のあたりである。また家忠とは松平家忠で、天正18年8月より文禄元年(1592年)2月に至るまで、武州忍の城主であった(武者注, “増・地震史料”)。この年浅間山は活発に活動したとみられる。

13) 1595年(文禄4年)の活動。“増・地震史料”に つぎの記事がある。

文禄4年4月23日(1595年6月1日)

武蔵国馬毛ノ如キモノ降ル

「當代記」

四月二十三日寅日未の刻、西上野氷降、間に大なる天目程なる氷あり。麦麻一円に損亡也。

武州東上野も少々損毛，其夜龍の毛とも馬の毛之様な物，雨に交り降。

いわゆる降毛の記録である。今村，(1944)は，これらの降毛現象と火山活動との関連性を論じた。この降毛記録についても，直接関係する火山は認め難いが，日本国内の火山活動と因果関係を有すると考え，火山活動記録の不備の可能性を暗示すると述べている。

著者は，翌年からの浅間山火山の活動活発化よりみて，活動の連続性という観点より，この降毛記録は浅間山の活動と関連した現象の可能性が高いと考える。

14) 1596年(慶長元年)の活動。この年の活動についての主要な記録は“信上変異記”と“浅間岳記”である。ただし両者の記述の違いにより，活動史間に混乱が見られる。

“信上変異記”

慶長元^{ひのえさき}年丙申四月四日より八日迄山鳴大焼八日午刻大石降七月八日大焼石近辺へ降人死。

“浅間岳記”

慶長元丙申年四月四日より全八日迄山鳴大に焼上る八日午刻大石降落人多く死す数不知。

この2記録の違いは，活動史によってつぎのように変化する。まず“浅間山”では

四月四日より同八日迄，山焼大に焼上る。八日午刻，大石降落人多死数不知。此石近国へ降人死。「信濃国浅間岳記」

とあり，さらに別の記録として
七月二十六日噴火。「浅間大焼無二物語」

が記されている。“噴火志”はこの“浅間山”の記載をそのまま用い“浅間山”よりの引用と明記している。“浅間火山”にはつぎのように記載されている。

慶長元年4月4日(1596年5月1日)
八日迄山鳴大に焼上る。八日午刻大石降落，人多く死し数不知，此石近国へ降り人死す。「天明信上変異記」
同年七月二十六日(1596年8月19日)噴火。

また“増・地震史料”では

慶長元年4月4日(1596年5月1日)ヨリ8日ニ至ルマテ浅間山噴火，8日噴石ノタメ多クノ死者ヲ生ゼリ。

「天明信上変異記」

慶長元丙午年四月四日より八日迄山鳴大焼，八日午刻大石降，七月八日大焼，石近辺に降，人死。

この他に7月26日の記録も挙げている。混乱を整理するために，他の記録も用いて推測をおこない統一解釈を求めてみた。

“浅間岳記”には，浅間山の活動年代を列举した後に，つぎのような文章が付されている。

“俗に曰，閏有年登山せずと云ふ，先代大やけ閏有年度々有”以下略。

この他活動年代についても，閏ある年は小文字を用いて添書してあり閏年の重視がうかがえる。ここに慶長元年は閏年で，閏は7月にあったことを記しておく。

次に地震(1930)の史料欄にある富沢久兵衛の「浅間記」に，以下のような記事がある。

浅間山津浪前代未聞大変実説之事

一，去る程に浅間嶽上野信濃両国境山なり，東鏡に往昔源頼朝公三原野浅間野御狩遊はされ候頃もほやはや焼けしとなり，元禄十四辛巳年信州小県郡と上州三原と山論の時御公儀様より国境墨付仰付られ候に焼る所は上州分それより南麓は中山道信州追分村へ四里北の麓は上州鎌原村峯迄壱里三十丁有る，峯に石地蔵あり，鎌原に浅間大明神社有り，別当浅間円命寺同村に有り，三原村より毎年四月八日参詣に登り釜の廻り壱里余の所を掛け念仏して廻り六拾年以前閏四月八日大に焼参詣の人夥敷死る。其後は閏年は決して参詣無用と云伝る。以下略。

この文書は天明3年(1783年)に書かれたものである。文中にある60年以前とは，享保9年(1724年)にあたらう。同年は閏年で閏は4月にある。暦年は一致しているが，同年にはそのような噴火記録は見当たらない。この二つの古文書による共通項として，閏年の4月8日という伝説が浮かび上がる。

つぎに，この多数の人死に関係する記録が“増・地震史料”に記載されている。

慶長三年四月八日(西暦1598年5月13日)
浅間山噴火シ，参詣人八百人程死ス
「當代記」
四月八日浅間山え参詣衆八百人程死云々，昨日大小之違

にて、今日是不縁日之由、山巔にて呼ると云へ共、只人間所謂也と心得不用之参詣處如此。

記事の内容からみて伝聞によることは明らかであり、出来事が生じた年が慶長3年である必要性もあるまい。

以上述べたような記録、伝説等を総合して判断すると、慶長元年(閏年)4月8日の参詣日(現在でも浅間山の山開きは5月8日におこなわれる)に、(近辺あるいは近国より集まった)多数の参詣人が、山頂付近で噴火に遭い多数の人死亡が出た“浅間岳記”とするのがもっとも確からしい。

さらに慶長元年の活動記録として“増・地震史料”に

慶長元年(西暦1596年)閏7月、浅間山噴火ス、降灰近江京伏見ニ及ブ。

「當代記」

前の七月の如浅間弥焼上、西の方へ焰ころふ。此故か近江京伏見其比灰細々降、其故にや秋毛少々凶と云々。信濃などは此灰一寸計^{ばかり}たまる。関東は不降、但是も同秋凶云々。

とある。この中にある“前の七月”の噴火が、“信上変異記”の7月8日のものか、あるいは“浅間山”および“災異志”にある7月26日であるかさだかではない。

このような記録をまとめると、1596年には

5月1日～5日活動、5月5日に人死

8月1日、同月19日噴火

9月にも噴火

の記述があり、大層活発に活動したと考えられる。またこのとしには降毛の記録も多い“増・地震史料”。慶長元年6月12日(1596年7月7日)、京都畿内関東諸国に土あるいは毛を降らしついで7月12日(8月4日)には津軽地方に、さらに閏7月に京畿関東および諸国に降毛の記録がある。これらの現象すべてが浅間山に起因するとは断定できないが、関連性は高いと考えられる。

15) 1597年(慶長2年)の活動。“増・地震史料”に

慶長二年三月一日(西暦1597年4月17日)浅間山噴火シ、夥シキ岩塊ヲ噴出ス。

「當代記」

三月。慶長二年、朔戌之刻、信濃国浅間山夥しく焼上る。其焰之中に如雷光無間ひかる。火の色青し。其山下へは大石を幾等と云不知数推出、西上野茶白天目程なる石多降。常陸国迄此如此と云々。

とある。また

「孝亮透宿禰日次記」

七月大四日、小雨、去一日昼泥降、又一日二日之昼迄毛降云々、一日二日両日共雨降る、泥降毛降等事不知実否。

という記録が記載されている。この京都での降毛記録について村山(1979)は浅間山の噴火と推定している。浅間山の活動が続いている時期であり、季節的にみても可能性はある。

16) 1598年(慶長3年)の活動。“浅間山”は“災異志”を引用し、この年浅間山噴火としている。しかし“災異志”には、この年浅間山活動の記載は無い。明らかに誤引用である。この年の活動記録としては、既に、1596年の活動記述に引用した「當代記」がある。同記録は先に述べたような不審点を有している。しかし後年にこの年の噴火を暗示した記録(21, 1609年の項参照)もある。また活動期にあると考えられるので、この年にも活動を続けたと推定される。ただし、4月8日(5月18日)にこだわる必然性はない。

17) 1599～1600年(慶長4年)の活動。“増・地震史料”に記載がある

慶長四年二月二十日(西暦1599年3月16日)浅間山鳴動甚シ。

「當代記」

二月二十日。慶長四年、午の刻、浅間鳴動夥し、去西三月如此鳴、雖然此度之鳴様、西の春より超過せり。又其夜寅の刻浅間鳴動甚、近年無比類之由、年寄之者云焉。

記録中の‘去西三月如此鳴’は慶長2年3月の活動を指すと考えられる。慶長2年の干支は丁酉である。また、同年の記録として“増・地震史料”に

慶長四年十一月二十八日(西暦1600年1月14日)ヨリ十二月十日マデ浅間山鳴動シ灰ヲ降ラス。

「當代記」

十一月二十八日。慶長四年、より12月十日まで浅間山鳴動、此故か灰無際限小幡筋降。

とある。この記録中の小幡筋とは、群馬県甘楽郡甘楽町付近であろう。

18) 1602年(慶長6年)の活動. “増・地震史料”に

「當代記」

同十日。慶長六年，閏十一月京都雨にまじり土ふる，喩へばかわらけの粉のようになると云々。

又十五日如斯，近江辺ふる。

とある。村山(1979)では，浅間山の活動に関連すると推定している。しかし季節的な気象条件を考慮すると，確信はできない。ただし，他火山の活動記録は見当たらない。

19) 1604年(慶長8～9年)の活動. “浅間火山”に

慶長8年十二月三日(1604年1月4日)四度鳴動。此響三州美濃へ聞ける「當代記」

とある。“増・地震史料”にも同記録が記載されている。慶長9年に入り“増・地震史料”に

「當代記」

二月十日(1604年3月10日)之夜，丑刻ニ魂打歟。魂打，又魂打ニ作ル。崖ノ崩ルルヲ云フ。トントント五六度鳴，其後ハタハタト云事夥シ。(武者注)按スルニ浅間山ノ破裂ナルベシ。

と記載されている。また“浅間火山”にもこの記録が引用され，その説明には“此記事には浅間山の名なきも多分同山の爆音ならん。音を聞いたのは駿河の府中である”と記されている。それに続けて“十一月(十二月)下旬より浅間山焼事多失然して午の正月より不焼。(當代記)”とある。この記録の引用は明らかに誤りである(1605年の項参照，後出)。以上の記録が，この年の浅間山の活動に関するものとして示されているものである。噴火だと断定し兼ねる点も含んでいる。ここで注意したいのは“増・地震史料”の慶長10年の項に

慶長十年二月十日(西暦1605年3月29日)駿河国府中，地震フ。

「當代記」

慶長十年二月十日之丑刻ニ，以下略。

とあって，以下の引用文は，慶長9年2月10日と全く同文である。この点は理解し難いことで検証が必要と考えられる。

20) 1605年(慶長10年)の活動. この年の記録として“災異志”に

慶長十年十一月

信濃浅間山噴火，^{つきをこえてやむ}躰月而熄「逸史」

とある。“浅間山”は“災異志”よりの引用を明示し，“噴火志”では「逸史」としている。

“増・地震史料”には

「逸史」

浅間嶽火発，^{つきをこえてひそむ}躰月而潜

「當代記」

十一月下旬ヨリ，信州浅間山焼事多之，然シテし午ノ正月末ヨリ不焼。慶長見聞書同ジ。

「台徳院殿実記」

又下旬。十一月，より信濃国浅間山焼ること甚しく，翌年の正月にいたるまでたえず。(寛永系図，家譜，異国日記)

と多くの引用があるが，内容は変わらない。19)において指摘した“浅間火山”の誤記であるが，上記“當代記”の記録“然して午の正月末より云々”を慶長9年のものとして混用したと考えられる。その理由は，慶長10年の干支は乙巳であって，当然翌慶長11年が丙午にあたるからである。

21) 1609年(慶長14年)の活動. “増・地震史料”に

慶長十四年(西暦1609年)春浅間山焼ク

「當代記」

三月朔日，信州浅間山此春焼事夥，往慶長元^{ころ}比二三年，打続如此焼ル事アリ。凶相タリシ間，此度モ下^げ臈危之。(注，下臈とは身分の低い人をいう)

「台徳院実記」

三月一日，又信濃の浅間山焼事甚し，慶長元年より二三年の間もかくの如し，天下大凶兆と下民妖言恟たり(創業記，慶長年録，家譜，寛永重脩譜，貞享言上，坂上院日記)

いずれも同じようなことが書かれている。これらの記録に共通して，慶長元年より2～3年続いた活動があったと記されている。16)において指摘した問題の論拠はこの点である。

この活動記録後暫く記録が見当たらず，活動休止期に入ったとも考えられる。

22) 1628年(寛永5年)の活動記録.“増・地震史料”に

「赤須上穂旧記録鈔」。長野県上伊那郡赤穂村(現在、南アルプス市)、村沢吟次郎編

寛永5年(皇紀二二八八年)10月18日、浅間山噴火

「近世郷土年表」

十一月一八日 浅間山噴火

(武者注;十月,十一月孰^{いづ}レガ正シキカ,尚精査ノ上決スベシ)

とある。この活動記録に関しては十分に吟味する必要がある。これらの年表は何らかの記録を用いて、後年に編纂されたのは明らかであるが、その基礎記録は示されていない。“増・地震史料”によると、この両年表ともに寛永4年10月4日に大地震があったとしているが、これは宝(寶)永4年10月4日の誤りであろうと、(武者注)に述べられている。いわゆる“魯魚の誤り”であろう。

著者は同じ論理でこの両年表が、宝永5年11月18日の浅間山噴火記録を誤写したものと推定する。理由としては、他の記録が全く見当たらないこと、さらにこの記録の前19年、後16年の間活動記録が存在しない点である。浅間山の活動の連続性より考えるとあまりにも不自然である。この活動記録には疑問符を付す。

23) 1644年(正保元年)の活動。この年の活動記録は“災異志”に

正保元年正月十三日、信濃浅間山噴火

とある。原典は明示されていない。各活動史もこれを引用している。この記録以後、噴火記録も連続する。

24) 1645年(正保2年)の活動。この年の活動について“浅間岳記”に

正保二年^{きのととり}乙酉四月二十六日大焼閏五月にあり全四年二月十九日大焼

とある。また“信上変異記”には

正保二年乙酉閏五月にあり四月二十六日大焼堂四年二月十九日大焼

となっている。ここで興味を引くのは“信上変異記”

が噴火と関係のない閏月を記している点である。14)で既に述べたように、閏の存在を“信上変異記”の編者も意識しているのか、あるいは“浅間岳記”の記録を参考としているのかのいずれかが考えられる。この他、同年の活動記録として“浅間山”には

正月二十六日大焼「浅間山大変記」

と記載がある。この記録は3)で述べた“浅間焼大変記”とは別物である。

25) 1647年(正保4年)の活動。この年の活動は“災異志”に

正保四年正月十四日、信濃浅間山噴火

とある。1647年2月18日にあたる。また、1645年の活動で記した“浅間岳記”および“信上変異記”に、この年2月19日(3月25日)に噴火したとある。活動の内容は明らかでない。

26) 1648~1649年(慶安元~2年)の活動。“浅間岳記”には

慶安元年^{つちのえね}戊子閏正月二十六日辰刻大焼、古老の曰、此時大雪四尺余雪解けて追分駅流出すと云、同七月十一日大焼、同二年^{つちのとうし}己丑七月十日大焼

とあり、“信上変異記”では

一、慶安元戊子年閏正月二十六日辰刻大焼

一、同二年己丑七月十日十一日大焼

となっていて、両記録が食い違っている。このため噴火年月日の引用出典で混乱した活動史が見られる。両記録により整理すると

1648年3月20日(閏正月26日)、浅間岳記、信上変異記

1648年8月30日(7月11日)、浅間岳記

1649年8月18日(7月10日)、浅間岳記、信上変異記

1649年8月19日(7月11日)、信上変異記

となる。3月20日の噴火により融雪して洪水が生じたとする言い伝えであるが、裏付けるような他の記録は見当たらない。

27) 1650年(慶安3年)の記録. この年6月4日(7月2日), 諸国に降毛の記録がある. 一書「統史愚抄」には7月4日となっているが, 今村(1944)は降毛の長さの表現より, おそらくは共通の現象と考えられるとしている. 浅間山には前年及び次年に活動記録がある. 活動の連続性, 季節要因の影響を考えると, 同山の噴火との関連が充分にある.

28) 1651年(慶安4年)の活動. この年の活動記録は“災異志”に

二月二十二日(4月12日) 信濃浅間山噴火

とある. 原典は明示されていない. また“増・地震史料”には

「赤須上穂旧記録鈔」 慶安四年(皇紀二三一一) 三月浅間山噴火

とある. 活動の内容は, いずれの記録も明らかでない.

29) 1652年(承応元年)の活動. “浅間岳記”および“信上変異記”に

承応元年 壬辰年三月四日大焼

とある. 新暦4月12日にあたる.“浅間火山”には承徳(注, 明らかに応を徳と誤植)元年三月四日(1652年4月12日)数日石ほとばしり麓を焼く. 「浅間山」

とあるが, “浅間山”には単に3月4日大焼と記されている. しかし引用記録は「浅間焼大変記」としていて理解にくるしむ. Kuno(1962)にはこの年の活動が記載されていない.

注5, 1653~1654年の活動. “気・噴火誌”および気象庁(1975)には, 1653年あるいは1654年(承応2または3年)噴火とある. この活動記録は出典がまったく不明である. 浅間山は, いわば活動期にあり噴火していても不思議ではないが, 史料が全然不明では活動として記録するには抵抗がある.

30) 1655年11月25日(明暦元年10月28日)の活動. この噴火記録は“災異志”の

明暦元年十月二十八日信濃浅間山噴火

による. この出典についても出典は明示されていない.

31) 1656年12月10日(明暦2年10月25日)の活動. この記録は“浅間岳記”にあり

明暦二乙未十月二十五日卯刻大焼

となっている.“浅間山”がこの記録を引用し, それ以後の活動史は“浅間山”を引用している. この記録の問題点は明暦2年の干支にある. 明暦2年の干支は丙申であって, 干支を重視すれば“浅間岳記”の乙未は明暦元年にあたる. 当時においては, 年号年と干支のいずれを重視したか不明なので判断し難い. ただし活動の連続性よりみれば, この年活動があっても当然といえる.

32) 1657年11月25日(明暦3年10月20日)の活動. この記録は“信上変異記”にあって

一, 明暦三丁酉十月二十日大焼

と記されている.“浅間山”が引用しそれ以後の活動史は“浅間山”と引用している.“増・地震史料”には, 10月噴火として「赤須上穂旧記録鈔」の記事が記載されている.

33) 1658年7月24日(万治元年6月24日)の活動. この活動は“災異志”に記録があり

万治元年六月二十四日, 信濃浅間山噴火

となっている. 出典は明らかでない.“増・地震史料”に同年の記録として

「赤須上穂旧記録鈔」. 長野県上伊那郡同. 万治元年十月浅間山噴火

とある.

34) 1659年7月24日(万治2年6月5日)の活動. この記録は“浅間岳記”と“信上変異記”にあり

万治二己亥六月五日卯刻大に鳴焼

ほぼ同文である。“浅間山”は“浅間岳記”を引用し、その他の活動史は“浅間山”を引用している。

35) 1660年4月4日(万治3年2月28日)の活動.

この記録は“災異志”に

万治三年二月二十八日、信濃浅間山噴火

とある。この記録も原典は記載されていない。活動史のすべてはこの記録を引用している。

36) 1661年(寛文元年)4月4日、14日、27日、10月21日の活動. “浅間岳記”に

寛文元^{かのとうし}辛丑三月十五日大焼、同二十八日大焼閏八月にあり

とある。“信上変異記”には

一、寛文元辛丑年三月五日大焼閏八月二十八日大焼

となっていて、両者が記録した活動史が異なっている。“浅間岳記”にある‘閏八月にあり’とする小文字の添え書きは閏の強調であって、噴火日とは関係がなさそうである。

この2記録にある通りとすると、1661年には三月五日(4月4日)、三月十五日(4月14日)、三月二十八日(4月27日)、閏八月二十八日(10月21日)の4回の活動が発生したことになる。しかし3回の噴火(三月十五日、三月二十八日、閏八月二十八日)としている噴火史が多い(“浅間山”、“噴火志”、“浅間火山”、“増・地震史料”)。この誤りの主原因は“浅間山”が“浅間岳記”だけの引用で、3回活動したと記載した点であろう。

37) 1669年(寛文9年)の活動. この年の活動記録は“災異志”による

寛文九年、是歳信濃浅間山噴火「統皇年代略記」

である。“浅間山”、“噴火志”はこの記事を引用している。

注6、1669年の活動について。“浅間火山”につきのような記事がある。

寛文9年(一六六九年)

三月五日卯刻(天明信上変異記)

三月十五日、同二十八日(信濃国浅間嶽之記)

この記事は明らかに寛文元年の記録の誤引用である。“気・噴火誌”はこの“浅間火山”の記録を引用している。またこの“浅間火山”の記事が、そのまま“増・地震史料”に記載されているため、村山(1979)も引用している。

38) 1695年(元禄8年)の活動. “増・地震史料”につきの記載がある

元禄八年五月十二日(西暦1695年6月23日)。日光降灰あり

「御番所日記」

今早天より灰降る。硫黄(原文は“ゆおう”)の匂ひ有之、御縁がわなどに白くたまり、少之所はき寄候處に一合斗り有之候。

降灰の記録で硫黄の匂ひ有りとすれば火山起源のものであろう。しかし近辺火山の活動記録は見当たらない。日光に降灰をもたらす可能性のある火山としては、浅間山、草津白根山、日光白根山、那須山などがあげられる。活動の頻度という点から考えれば、浅間山噴火の可能性がもっとも大きい。しかし浅間山は1669年(寛文9年)の活動記録より26年間噴火記録が見当たらない。

ところで浅間山の場合、暫く活動を休止した後、小噴火した際の火山灰は、活発な活動期における火山灰と違って臭気が強いと、故水上教授よりお聞きしている。その原因としては、静穏期間中に噴気の諸成分が、火口底の岩石、砂などに昇華付着し、それらが噴出するためと考えられている。最近においても、1982年4月26日に発生した噴火の際、山麓の降灰の臭気はきわめて強く、印象に残るものであった。したがって、日光における降灰に“ゆわう”の匂いがしたことより、浅間山が活動を再開した可能性が十分に推定される。

39) 1703年(元禄16年)より1704年(宝永元年)にかけての活動. “増・地震史料”につきのような記載がある。

元禄十六年(西暦1703年)ヨリ浅間山活動ヲ開始シ、翌宝永元年一月元日(西暦1704年2月5日)ヨリ大ニ焼ケ、三月マデ熄マズ

「常憲院実記」

また去年。元禄十六年より信州浅間山焼て、この正月元日より大にやけ、三月までやまず、牧野周防守康重が所領塩野村へ焼石ふる事数しらずとぞ聞こえし（日記、憲廟実録、天享東鑑）

ほとんどの活動史では、宝永元年1月元日よりの噴火が取り上げられているが、その噴火以前より活動が開始されていたというこの記録は興味深い。記録にある塩野村とは、現在の御代田町塩野であって、浅間山頂のほぼ南方6~7kmの地域であろう。

1704年の活動については“浅間岳記”に

宝永元^{きのえさる}甲申正月朔日大焼度々、同五年^{つちのえね}戊子十一月十八日の夜、江戸へ砂降御検使来る。閏正月にあり

とある。“信上変異記”にも同じような記録が残されている。“増・地震史料”には、その他につぎの記録が収録されている。

宝永元年一月五日（西暦1704年2月9日）日光降灰アリ「御番所日記」

正月五日卯中刻より辰中刻迄北西の方天暗灰降る。地にたまり、地色不見程候、南の方は晴不降候。（武者、注）按ズルニ浅間山ノ噴火ナルベシ。

浅間山噴火による降灰と考えるのが至当であろう。このような活動は4月頃まで続いたと考えられる。

40) 1706年（宝永3年）の活動。この年の記録は“災異志”に

宝永三年十月十六日、信濃浅間山噴火

とあり、原典は明示されていない。新暦11月20日にあたる。

41) 1708年12月29日（宝永5年11月18日）あるいは1709年1月8日（宝永5年11月28日）の活動。この活動は同一噴火と考えられるが、2種類の記録がある。

まず、宝永5年11月18日とする記録は“信上変異記”、“浅間岳記”（39、の記録参照）がある。“増・地震史料”には11月28日の活動として「温故年表」,「野史」,“浅間山”を記載している。しかし“浅間山”の引用は“浅間岳記”であるので11月18日である。

“噴火志”および“浅間火山”は11月28日説であるが、前者は「野史」と“浅間山”を引用し、後者は「野史」と“浅間岳記”を用いている。11月18日あるいは28日のいずれかであろう。この活動は関東に降灰をもたらしたことが複数の文書に記されている。

42) 1710年4月13日（宝永7年3月15日）の活動。この記録は“災異志”にあり

宝永七年三月十五日、信濃浅間山噴火

と記されている。この記録も原典明示はなされていない。

43) 1711年（正徳元年）の記録。“増・地震史料”に日光における降灰の記事が記載されている。

「御番所日記」

七日、辰上刻より砂灰降、終日曇、灰少々ふる也。

とある。2月7日（新3月25日）のことである。同じく2月中の記録として“信上変異記”に

一、正徳元^{かのとう}辛卯二月二十六日朝四ツ半大焼に而震動半時程灰ふること一寸。

と記されている。新暦4月13日のことである。降灰した場所はさだかでない。この時期に浅間山が活発に噴煙し、火山灰を噴出していたことがうかがえる。

44) 1713年（正徳3年）の記録。この年6月29日（新8月19日）に日光において降灰が記録されている。“増・地震史料”

「御番所日記」

六月二十九日、午刻白灰砂降。

いずれの火山よりもたらされたか明らかではないが、浅間山の可能性が高いといえる。

45) 1717年9月23日（享保2年8月19日）の活動。享保年間には活動記録が多く残されているが、この記録がそのはじめである。“災異志”に

享保二年八月十九日、信濃浅間山噴火

この記録をすべての活動史が引用している。原典は明示されていない。「増・地震史料」には「災異志」の記録のほかに「近世郷土年表」あるいは「赤須上穂旧記録鈔」などが記載されている。内容は変わらない。

46) 1718年9月26日(享保3年9月3日)の活動。

この記録は「浅間岳記」と「信上変異記」に記されている。

享保三^{つちのえいぬ} 戌 戌九月三日 前欠山より火玉南岳に飛び大に鳴る。

ほぼ同文の記録で、浅間山爆発の状況が簡潔に表現されている。「浅間山」は「浅間岳記」を引用し、「噴火志」は「浅間山」と引用している。

47) 1719年(享保4年)の活動。「増・地震史料」につき記載がある。

享保四年四月二十三日(西暦1719年6月10日)日光降灰アリ、翌二十四日マタ同ジ。
「御番所日記」

四月二十三日、夜中灰降ル。
四月二十四日、午中刻如灰之砂降ル。

他火山の活動記録も見当たらない。この降灰は浅間山起源と考えて間違いあるまい。

48) 1720年6月6日(享保5年5月1日)の活動。この記録は「災異志」にあり

享保五年五月朔日、信濃浅間山噴火

と記載されている。「浅間山」には「信上変異記」と引用されているが誤まりで、「信上変異記」にはこの年の活動記録は見当たらない。

49) 1721年(享保6年)の活動。この年の活動記録も月日が混乱している。「信上変異記」に

一、同六年(享保六年)辛^{かのとうし}丑五月八日大焼

とある。新暦6月3日にあたる。「浅間岳記」には同六年(享保六年)五月二十八日大焼人拾六人死閏七月にあり、俗に曰、本庄のもの参詣のよし。

と記されている。新暦6月22日である。「浅間山」は「浅間焼大変記」を引用し

五月二十八日昼大焼、此日関東のもの十六人石にあたり打殺され、中一人は半死、

としている。ただし3)で引用した「浅間焼出し大変記」中には、この記録は見当たらない。「噴火志」、「浅間火山」は「浅間山」を引用しているので5月28日としている。「増・地震史料」には「浅間山」の記事の他に

「月堂見聞集」

。六月二十八日、信州浅間山自然に燃、大石焼て落ること夥し、参詣のもの十五人石に當り焼死す

という記録が記載されている。結局、5月8日、5月28日または6月28日の人死のでた噴火の記録が残されていることになる。「気・噴火誌」は5月28日説であるが人死の数が5名と少ない。

ところで「増・地震史料」に、つぎの記録が収録されている。

享保六年五月二十八日(西暦1721年6月22日)日光地少シク震ヒ鳴動
「御番所日記」

享保六(五と誤記している)丑五月二十八日、巳中刻過少々地震、山鳴、此時光物辰巳より戌亥へ飛申候由也

これは浅間山爆発の鳴響が日光に届いた記録と考えてよい。浅間山と日光の直距離は100kmに満たず、川越あたりと同距離にあたる。御番所の記録であり日付は正確であるとしてよからう。また現象の発現した時刻も「浅間岳記」と矛盾はしないが、光物の飛んだ方向は浅間山・日光の位置関係よりみて疑わしい。噴火は5月28日(新6月22日)に発生したと考えて良からう。

50) 1722年(享保7年)の活動。「災異志」に

享保七年、信濃浅間山噴火

とある。「増・地震史料」にこの年の複数の記録が収録されているが、その一つ「塩尻」(随筆、天野信景著、1697年~1733年まで執筆。松村、1988)は「災異志」の総引用書中にもある。「増・地震史料」には

「塩尻」

信州浅間山はむかしより焼出て歌にも読み、今年^{みずのえとら}壬寅十月十日頃より煙りたち十三日より大にやけ侍る
神無月二十六日の夜より灰砂降る。是彼山の灰なり。先年富士山やけし時の如し。但し砂少し白し之より地鳴動する事夥しとなん。沼田城辺の人は人心地もなく侍るとかや。

「万年記」

十六日。十一月是夜丑刻有雷声。晴天雲無、今日以後毎日有響、後聞信州浅間山自先月焼云々。

などが収録されている。また11月3日には、日光に降灰したことが記録されている。「御番所日記」。この年の11月20日(新暦)頃より、浅間山の活動が激しくなったことが推定される。1707年(宝永4年)の富士山噴火による降灰と、浅間山よりの降灰との色の比較が述べられていて興味深い。

51) 1723年(享保8年)の活動。この年の活動記録は“浅間岳記”に
同八年(享保)癸卯^{みずのとう}正月朔日大焼、同8月二十六日大霜降作毛皆無

とある。また“信上変異記”に

一、同八年(享保)癸卯7月二十日大焼何事なし

とあって、2月5日(正月朔日)と8月20日(7月20日)に噴火記録がある。“浅間山”は正月朔日の噴火記録を「浅間焼大変記」よりと引用しているが理解し難い。

52) 1728年(享保13年)の活動。この活動記録は“災異志”にあり

享保十三年十月九日、信濃浅間山噴火

と記載されているが出典は明示されていない。新11月10日に相当する。1723年より5年間噴火記録を欠いているが、1727年7月1日に日光において原因不明の鳴動を感じたと「御番所日記」に残されている。浅間山との関連は不明である。

53) 1729年(享保14年)の活動。この年の記録は“信上変異記”にあり

一、同十四年(享保)^{つちのととり}己酉十月焼灰降り、但し初雪のごとし。鳴動の山も崩るごとし。

と記されている。“浅間山”では十月某日大焼と引用している。他の活動史はこの“浅間山”の記事を引用している。

注7、享保十六年五月二十八日(1731年7月2日)噴火という記載が“浅間火山”にある。

原典が明示されておらず、同書の噴火記事としては異例である。該当する記録は見当たらない。可能性として考えられるのは、享保6年5月28日の記録(複数)を誤記したことくらいである。“浅間火山”のこの記録を引用するには、十分な検証が必要であろう。

54) 1732年7月30日(享保17年6月9日)の活動。この記録は“災異志”にあり

享保十七年六月九日、信濃浅間山噴火

と記されている。これも原典明示はなされていない。すべての活動史はこの記録を引用している。

55) 1733年7月30日(享保18年6月20日)の活動。この噴火については、つぎのような記録がある。

同十八年(享保)^{みずのとうし}癸丑六月二十日夜四つ時大焼け黒野皆火になる“浅間岳記”

一、同十八年(享保)丑六月二十日夜大焼大鳴麓皆火になる“信上変異記”

いずれの記録にも山麓における山火事の発生が記述されている。“浅間山”にはつぎのように記されている。

“六月二十日夜大焼黒府みな火になる。此節前掛山不残われ其幅一尺二寸より五尺寸斗、湯の平に落ちた大石、立白障子の如し”。

とあって「浅間焼大変記」と引用している。“噴火志”、“浅間火山”は“浅間山”を引用している。ただし“浅間火山”では出典を“浅間岳記”としてあり、この例に限らず「浅間焼大変記」の名を意識的に避けているように考えられる。3)で引用した「浅間焼出し大変記」の中には上記の記事は無い。この噴火記録後しばらく(19年

間) 活動記録が見当たらない。

56) 1752年(宝暦2年)の活動. “信上変異記”の浅間山活動年代記事に

一、宝暦二年

とあって噴火であるかどうか不明であった。

1783年(天明3年)の大噴火の際に、多くの記録が残されているが「牧野八郎衛門書状」「信州小諸城主牧野遠江守家老牧野八郎衛門より、江戸知音(注、親友)勝野六太夫江返書写」という文書が“増・地震史料”に収録されている。その文中につぎのような記述がある。

此度浅間山大焼に而、江戸表も砂降候由に而、(中略)尤古今焼山の名山而、常々は煙立登り候迄の儀、宝暦二申年八月、大焼いたし候へ共、煙立登候中に、少々火の手見へ鳴動いたし候迄の事にて御座候。今度も五月二十六日より、申年の焼の如く度々焼候得共、砂降候事も無之候處、七月六日頃より鳴動強く焼出、以下略。

この書中にある宝暦2年(申年)の活動は、大噴火ではないが、明らかに噴火していることを示している。この年あたりより活動が再開したと考えられる。

57) 1754年(宝暦4年)の活動. 6月19日(新暦8月7日)の噴火については“浅間山”に

六月十九日大炎上、灰降る(無二物語)

とある。この記録はすべての活動史に引用されている。7月2日(新暦8月19日)には“浅間岳記”に

宝暦四^{きのえいぬ}甲戌七月二日大鳴焼、近国灰降、中にも佐久、小県一日煙地を這ひ朧にして時をしらず、作毛痛れ秋過迄度々焼。

とある。“浅間山”は“浅間岳記”を引用しているが、つぎの文を追加している。(前略)、秋過迄度々焼。此年は別して焼け無間が谷に竈新に生ずといふ。

この文は本来“浅間岳記”には無いものである。“増・地震史料”につぎのような記録が収録されている。

「熊谷家伝記」・信濃伊那

同戌年。宝暦四年、九月より十月迄、信州浅間山焼る音国々へ鉄砲之鳴ごとく聞ゆる。元来此山は往古より萌。(注、燃え)る山にて峯に煙り絶る事なし。然上焼地獄と云伝る事也。

これらの記録より浅間山は、1754年の夏より冬にかけて、噴火を繰り返したと考えられる。ただし、56)で引用した牧野八郎右衛門の書状中には、1752年(宝暦2年)の噴火が記されているだけである。古文書記録による噴火規模の比較は困難であることを示しているといえる。

注8、“浅間山”には「浅間焼大變記」による宝暦5年(1755年)の活動記録が記載されている。その記録によれば、大層激しい噴火であったとみられる。“気・噴火誌”では“天明に次ぐ大噴火か”としている程である。しかし“浅間山”によるこの記録は“噴火志”、“浅間火山”では全く無視されている。その理由について大森(1911)は、“宝暦5年5月26日乃至7月1日ニ噴火セリトノ説ハ疑ハシ”とだけ述べている。この噴火記録について考察する。

第1表に“浅間山”に記載されている宝暦5年(1755年)と、天明3年(1783年)の活動記録を比較表示した。同表で明らかのように、両年の活動の内容は酷似している。とくに6月29日、7月朔日の活動については天候、時刻(時間の表現を変えている)まで一致している。この点だけで十分に疑わしい。宝暦5年の記録に“此の節浅間山焼崩れ佐久郡滅亡といへり。(中略)住居不成立退き跡形なし”と浅間山周辺の状態を記述している。

五街道の一つとして慶長7年(1602年)に定められた中山道、その浅間山麓三宿(軽井沢、杓掛、追分)は、宝暦5年頃には大層栄えていたといわれる(川崎, 1974)。しかし、“佐久郡滅亡といへり”とする宝暦5年の噴火記録は、この“浅間山”に記載されたもの以外には、全く存在しない。同様に、浅間山北麓の村々の住居立ち退き云々の記述であるが、当時の社会制度より考えると記録が残されていないのが不思議である。

群馬県史(1981)には、吾妻郡下凶年覚書、「旗本領」(「抜書記録」吾妻郡吾妻町植栗 関緑氏蔵)という文書が収録されている。その記録には

宝暦五亥年秋毛不作、御年貢御上納之内御用捨

とあり不作年だったことが記録されている。しかし村

Table 1. Comparison of the records of the 1755 Horeki eruption with those of the 1783 Tenmei eruption.

月 日	宝暦5年(1755)	天明3年(1783)
5月 26日	鳴動(浅間焼大変記)	午前10時頃より焼出, 大地に轟き噴煙天に沖して数百丈, 幅2, 30間(36~54m)ほどに見え, 雲の峰を積むが如く, 練り綿を累るが如し. 直に山より東の方に折れて鼻田峠, 鎌原村, 六里ヶ原, 碓氷山続きへ横たはり, 見渡すに数十里もありき. 正午過ぎて出口の煙半分減り鳴りも静まりたり. 時に太陽暦6月24日(25日)なり.
6月 20日	夜 大焼(同上)	記事なし
6月 29日	晴れて午の中刻(12時)より大焼, 鳴音雷の如く(同上)	晴天, 正午に至り其音千百の雷よりも強く轟きて大焼, 5月26日のそれよりも劇し.
7月 朔日	晴天四ツ時(12時)曇り小雨降る. 未の刻(13~15時)より焼出し申の刻(15~17時)甚しく民家の戸障子を動かす, 暮合より鎮る体なり. 此の節, 浅間山焼崩れ, 佐久郡滅亡といへり. 大なる新山出来, 前掛山より高し. 浅間山より草津へ六里ヶ原6ヶ村, この辺5月26日より石砂降る. 住居不成立立ち退き跡形なし(同上) 注, 括弧内著者加筆.	晴天, 午前10時曇り小雨降る. 午後3時より焼出し, 4時より5時まで最も甚しく, 暮合に至り鎮る体なれども, 雲霧覆いて曆然とは知れず, 此焼さる29日より強し. 注, この記述は“信上変異記”によっていると考えられる.

人が在所を立ち退くような大事件は記述されていない。

つぎに状況について考察しよう。天明大噴火に際して、浅間山北麓住民が噴火に対応した記録のすべてに、僅か28年前にあったとする立ち退き経験に関する記述は見当たらない。残された記録よりうかがい知ることができるのは、噴火にたいする住民の経験不足である。

率直に言って“浅間山”の記事以外に、宝暦大噴火の存在を示す証拠はない。また“浅間山”がこの噴火記録として引用した「浅間焼大変記」であるが、3)で触れた「浅間焼出し大変記」中には宝暦5年の噴火記事は無い。

したがってこの宝暦5年の噴火記録は、なんらかの理由で創作されたものと断定するしかなかろう。“噴火志”、“浅間火山”等で無視されているのは当然である。ただしこの噴火記録が、理科年表(1961~1981年)など、往年の一部活動史に採録されているので嚴重に注意する必要がある。

注9, “増・地震史料”には、1759年7日~8日(宝暦9年3月10日~11日)につぎのような記載がある。

「本朝天文志」

九年。宝暦^{つちのと}己卯三月十日十一日霾^{ほい}（つちふる）、太陽無光映。柳宮秘鑑、年代記。

とある。場所は京都である。村山（1979）では、浅間山よりの降灰を示すのではないかと推定している。

この時期、日本における火山活動の記録は見当たらない。また世界の火山でも、上記現象を生ずるような大噴火発生は認められていない（Lamb, 1970）。自然現象として季節的な点より類推すると、大陸からの黄砂現象である可能性が大きいと考えられる。

注 10, Kuno (1962) では、1762 年（宝暦 12 年）4 月に噴火があったとしている。古記録には、この年の浅間山活動に関する記事は全く見当たらない。また、他の活動史すべても、この年の噴火記事を記載していない。したがってこの記録は、なんらかの手違いで記載されたものと考えられる。

注 11, 1769 年 8 月 6 日（明和 6 年 5 月 3 日）に京都および諸国に降毛、降灰の記録が多く残されている“増・地震史料”。この記録に関しては、今村（1944）も考察を加えているが、ある火山を特定し得ないとしている。可能性としては九州の霧島火山であり、浅間山と結びつけるのは無理があろう。

58) 1776 年 9 月 5 日（安永 5 年 7 月 23 日）と翌 1777 年の活動。この噴火は“浅間岳記”につきのように記されている。

安永五^{ひのえさる}丙申七月二十三日卯刻大焼、同六年焼事度々なり。

これらの活動は、それほど激しくはなかったらしい。“信上変異記”にはつぎのように表現されている。

天明大焼の事

浅間が岳常に煙立つ時は大焼まれなりとぞ、煙止る事久しければ硫黄の気つもる故にや大焼あり。其煙る所を釜といふ。一廻り一里中窪くして皆硫^{いむ}なり。しかるに五年以前少々の焼にて右の釜埋り平地となる。煙たへて立事なかりしに天明三年癸卯^{みずのとう}春より段々煙立のぼれり、云々。

天明 3 年（1783 年）の 5 年以前とは安永 7 年（1778

年）に当たるが、上記文中にある“少々の焼”は安永 5～6 年の活動と考えてよからう。これらの活動は、1783 年大噴火の前駆的活動と考えられる。

細かい点を注意すると、“浅間岳記”にある七月二十三日卯刻を“浅間山”が亥刻と誤記載したため、その後、この噴火記事を記載した活動史（“噴火志”、“浅間火山”、“増・地震史料”、村山、1979）ではすべて亥刻としている。このような事から引用順は容易に判断できる。

注 12, 安永 8 年（1779 年）8 月、信濃国伊那に降灰があった。“増・地震史料”によると

「赤須上穂旧記録鈔」長野県上伊那郡

安永八年八月焼砂（火山灰？）降る（近世郷土年表）

村山（1979）は、浅間山噴火（疑問符付き）としている。この降灰現象について関連性があると考えられるのは、伊豆大島火山である。同火山は安永 6 年より大規模な活動を開始し、1792 頃まで活動を続けた。上記の記録にある焼砂という形容は、大島火山のような玄武岩質火山よりの火山灰と考えるのが妥当ではあるまいか。同火山の灰が本州方面に流れるのは、季節的にも十分に納得できることである。

注 13, “増・地震史料”に天明 2 年 7 月浅間山大噴火の記録が記載されている。この記録は翌天明 3 年大噴火の誤記と判断される。

59) 1783 年（天明 3 年）の活動。この年浅間山に日本の火山活動史上特記すべき大噴火が発生した。その際、火山灰・軽石の大量噴出—火砕流発生—溶岩流出という順で、安山岩質火山の典型的な一輪廻の噴火が、一部現象を除き、詳細に記録された。同時にその記録は、大災害発生の記録でもあった。それらの記録に基づいて、野外における噴出物の科学的な観察、調査が実施された。その結果、天明大噴火の経過、規模等のほか、多くの火山学的特性が明らかにされた。ここでは活動の記述に先立ち、とくに大噴火の前兆を示す記録を挙げる。“浅間岳記”にはつぎのように記されている。

一、浅間か岳は絶頂凹にして底深くたとへば挿鉢の如し、是を釜と唱ふ、ふちのくり一里余有、中なる谷々より常に烟出るときは硫黄解て器物より覆^{おおう}か如くに流れける。然る所明和年中より以来釜の中次第にこほれ積り、又底よりも土龍の起す如く硫黄の気

にて砂石涌上り、数年大焼止ていよいよ埋り四五年
已来わけて埋ること数十丈深き大坑平地にひとし。
去寅年望見るに釜凸にして炭竈の如く巖石積上げ大
山となりぬ。近頃登山見る人毎に間のあたりや大や
けあらむ釜の中埋りたる事不審なりと口々に云ふ是
前表とや云はん。

とある。明和年間（1764～1771年）より火口底が上昇
してきたことが、人々に気付かれている。“浅間山”には
「天明雑変記」の著者佐藤将信が明和6年（1769年）に登
山した紀行の一部が記載されている。

“お鉢料（大坑の回り半里、之を俗にお鉢料といふ）より
前掛山を見上げる十二三丈高しと覚ゆ”

この状況と比較する目的で、天明2年（1782年）4月
8日（浅間山の山開き、参詣日に当たる）の登山者の観察
があり

“此年釜山、前掛山同高になりて、釜山東北の腹より、少
煙出る。乍去（さりながら）、焼出すべき気色も見えず”

と記されている。“浅間岳記”にある去寅年云々の記述
と一致し、マグマが次第に上昇する状態を良く表してい
る。

噴火活動を開始したのは、天明3年4月9日（1783年
5月9日）とする活動史が多いが、それ以前より小活動
が始まっていたとする記録もある。

浅間焼見聞実記（上の巻）

天明三の年 癸卯春二月の頃より信濃浅間山焼出し、三
月中頃迄は一日ふた日又は四五日間あってやけつつ卯月
十日頃より日毎に車ひくごとく鳴て黒煙り空へ吹あげ、
いとしましきありさまなり。 以下略。

この記録にある卯月（旧暦4月）10日頃に大噴火は開
始された。活動経過の概略を追ってみる。山崎（1911）、
大森（1911）を主とし、他の古文書も参考して要約して
ある。

1783年5月9日（天明3年4月9日）。以下年号を略す。
括弧内は旧暦。

40 kmほど離れた所でも鳴動が聞かれ、噴煙が上昇し
た。

6月25日（5月26日）

10時～12時、爆発的な噴火をした。噴煙は東方になび
いた。

7月17日（6月18日）

噴火、浅間山麓、田代、大笹、大前、鎌原へ小石3寸
ほど降る。

7月26日（6月27日）

16時頃鳴動、噴煙し煙東方になびく。薄暮になる頃勢
いを減ずる。

7月27日（6月28日）

16時頃噴煙天を覆い、また東方になびくが降雨激しく
て状況不明。

7月28日（6月29日）

12時頃鳴動、大噴煙、この活動は6月25日のものよ
り激しい。

7月29日（7月朔日）

15時頃より活動が強まり、16～17時頃まで激しく噴
火、前日より強い。

7月30日（7月2日）

13時頃噴火、前日よりやや弱い。14時頃その勢いを強
め其の後16時（或いは20時）頃さらに勢いを加え、
夜を徹して活動する。

7月31日（7月3日）

4時頃になってやや静かになったが、山麓の裾野は噴
出した火山岩礫に覆われたという。

8月1日（7月4日）

20時頃大噴火、噴出物北方に飛散する。

8月2日（7月5日）

12時頃噴火、安中では夕方より鳴響強く砂石が降る。
22時頃大鳴動。

8月3日（7月6日）

0時頃山上には火炎が燃えるよう、その間に電光がひ
らめいて連続的に噴火する。2時頃になって弱まる。
14時頃また大噴出、激烈な鳴動を伴う。活動は夜22
時にかけて益々激しく、山上紅焰色を呈し噴石が花火
のように飛散、^{ぎっば}牙山にも大小火石が降下する。火は裾
野に燃え広がる。高崎では夕方より降砂、夜に入って
鳴響激しい。この日16～17時頃より江戸でも鳴動が
聞こえ始める。

8月4日（7月7日）

8時頃より鳴動、江戸でも朝から降灰、噴火は時とと
もに激しくなり、杳掛、追分等の住民は逃げ出し始め
る。この日の午後、吾妻火砕流（0.1 km³）が流下した
とみられる（Aramaki, 1956, 1957; 荒牧, 1981）。この
午後、埼玉県深谷辺でも日中提灯が必要となり、夕刻
には真暗となる。この暮合より軽井沢宿に火石、巨大

軽石が落下しはじめ住民はパニック状態となり、あわてて逃げ出す。落石により焼失した家は軽井沢で50余、また降下堆積物の重みでつぶれた家は、軽井沢82、坂本90、松井田50等と記録されている。

8月5日(7月8日)

晴天、噴火の勢い頂点に達す。8時頃より11時頃までが最も激しかった。江戸においても10時から12時までは夜明け前のように暗くなったという。9時と10時の間に大爆発があり、同時に鎌原火砕流(0.01~0.001km³)が流下した(荒牧, 1981)。この火災流(噴火類れ)によって吾妻郡鎌原村、小宿村、西窪、大前の両村等が流失、埋没した。さらにこの火砕流は吾妻川に流れ込み、しばらくせき止めた後決壊し、段波を生じて流下し利根川に流れた。この泥流によって、利根川上流吾妻川沿岸に大きな被害が発生した。浅間山火山口からは、鎌原火砕流が流下後、ひき続き現在鬼押し出しと呼ばれている溶岩流が流出したと考えられているが、古文書にはこの溶岩流についての記述は見当たらない。この日の午後、噴火は次第におさまっていった。

この噴火による被害であるが、史料によって異なるため正確を期し難い。代表的な集計としては、大森(1911)による死者1151人、流失家屋1061戸が挙げられる。群馬県史によると死者1624人、流失家屋は1151軒と集計されているが、検討を要するとされている。以上であるが、この天明大噴火に関しては、他に多くの研究がなされているので、詳細な内容については、それらをお調べいただきたい。

60) 1803年(享和3年)の活動。この年3回の噴火記録が“浅間山”に記載されている。

7月4日(旧暦5月16日)

昼夜大焼岳北二里内降灰あり。上州大笹村の辺迄とす。此時軽井沢へは降らず。

11月7日(旧暦9月23日)

夜大焼、大石降り六里が原分^{わか}さりの茶屋一軒押し潰す。

11月20日(旧暦10月23日)

午前4時より焼出し7時過ぎまで小砂降る。江戸へも灰降りしといふ。

すべての活動史はこの記録を引用している。11月7日の記事にある分さりの茶屋は浅間山火山口の北東約6km地点である。

61) 1815年2月28日(文化12年1月20日)の活動。“浅間山”につぎのように記載されている。

正月20日、夜焼出し、11時過ぎより小砂降る事半時、此時離山より上州板鼻(安中市)に及ぶ。

この噴火の後51年間、浅間山噴火の記録は見当たらない。

注14, 1847年5月8日(弘化4年3月24日)の善光寺地震に際し浅間山が示した反応の記録がある。“増・地震史料”に

「武江年表」

弘化四年三月二十四日、信州大地震、人多く死す、江戸も此夜少しの地震有あり。

今年三月八日より、川中島善光寺如来の開帳ありて、諸国より参詣群集する事、稲麻のごとし。然るに浅間山煙、常よりも減たるを怪しみいたるに、三月二十四日、昼夜快晴にてありしが、夜四ツ時頃、俄に大地震ひ出し。以下略。

とある。大地震に際して近くの火山の挙動が観察された珍しい記録である。浅間山活動の一側面を示す現象であらう。

62) 1866~1867年(慶応2~3年)の活動。大森(1910)の論説中に、“日本災異志には破裂の記事を載せざれども、慶応2年(1866年)、明治2年(1869年)、明治22年(1889年)にも噴火せり”以下略。という記載がある。この論説は地学雑誌、東洋学芸雑誌にも寄稿されているが、その中では“理学士山崎直方氏に依るに慶応2年(西暦1866年)、以下は同文”。とあり調査者名を明記している。

このほかに、慶応2年に活動が発生したことを暗示する記録が存在する。

1869年(明治2年)の活動に際して、浅間山麓において爆発鎮護の勅祭が執行された。この勅祭に関する資料文書が“浅間火山”に収録されている。勅祭に先立つ調べに、追分宿役所の取締役、名主、組頭3者連名で提出した奉書中に、以下のように記されている。

前文略。(括弧内著者加筆)

一、同年(天明3年)田方畑方共少しも^{みのり}実法無之、不残皆無に御座候に付、12月より翌辰年信上武三ヶ国百姓騒動度々に御座候。

其後は浅間も別段鳴動と申儀も無御座候處、慶応二丙ひのえとら寅年四五頃より煙多く山鳴りいたし、一昨卯年昨辰年は格別之儀も無御座候、當巳年(明治2年)五月頃より煙しきりに立登り焼鳴事度々也。別而八月五日朝より大鳴にて灰降り申候。以下略。

とあって、慶応2年には人々の気付くような活動が開始されたことを示している。また別の文書(脇本陣の検名簿)には

前文略。

巳九月二十三日着二十六日迄御逗留

一、勅使 北小路神祇大祐様

福使 橋本神祇少史 様

附属 辻 新 蔵 様

右喪の五ヶ年以前より浅間山鳴動いたし、猶又昨年辰年以来烈敷當巳年四月以来度々砂石降らし鳴動不止、其五月より霖雨相続き冷気勝にて五穀不熟、以下略。

とあり浅間山の鳴動は、1869年の5年以前から始まっている。これらの記録より判断すると、1815年(文化12年)の噴火を最後に約50年間静穏を保った浅間山は、1864年頃より鳴動を開始し(マグマの上昇)、1866～1867年(慶応2～3年)には多くの人々が気付くような活動を行い、1869年の噴火に発展したとみられる。長い静穏期の後、活動を再開する場合の典型的パターンを示したと考えられる。1867年(慶応3年)の活動であるが、河野(1890)の報告には“慶応3年8月噴火、降灰10余里内外に達す”とある。河野(1890)の報告は、1867年より23年後に出されているが、当時河野は長野県一等測候所所長心得という立場であって、然るべき情報によっていると考えられる。

63) 1869年(明治2年)の活動。 この活動は既に前項で触れている。“浅間山”には

九月十九日當春より度々の大焼にて、此時に至るも歇まざりければ、勅使北小路神祇大祐、並に神祇官少史、鼻田峠にて浅間山の祭事を執行す。

とあり、多くの活動史はこのこの記事を引用している。記事にある鼻田峠とは“浅間山の東なる鼻田峠は上州大笹草津に通る道のちまたに夏秋水茶屋あり”と“浅間岳記”にあり、往時の草津街道の途中にあった。

64) 1875年(明治8年)6月14日の活動。 この噴火は“浅間山”に

六月十四日、朝大焼、降灰あり、木の葉白くなる。

と記されている。降灰した場所の記載はない。“噴火志”“浅間火山”などはこの記録を引用している。しかし、河野(1890)や脇水(1892)には記載されていない。

65) 1879年(明治12年)の活動。 この噴火記録も“浅間山”で

九月二十七日、朝十時大焼。

九月二十八日、又々焼出し鳴動を伴ふ。

と記載されている。“噴火志”“浅間火山”はこの記録を引用している。河野(1890)、脇水(1892)には記録されていない。64)、65)の記録であるが活動して間もない頃に出された河野(1890)や脇水(1892)に、噴火として記録されなかったのは、噴火活動としては、小さな活動だってことが推定されよう。

第2表には、これまでの浅間山活動記録年月とその出典を表示してある。

6. 第2期(1880年～1933年)噴火活動記録

1879年の噴火後、噴火の記事が絶え、つぎの活動の記録は10年後の1989年(明治22年)の活動から始まる。この時期より、浅間山近辺地域の噴火による影響が記録されるようになる。そこで、参考とするため第2図として、浅間山周辺の地名図(1966年頃)を挿入する。

66) 1889年(明治22年)の活動。 12月24日午前3時11分噴火、山麓(西長倉村)では始めに地震、約1分後に鳴動、同時に山頂より黒煙噴出、火の玉が飛散し全山ほとんど火に包まれたが、約2～3分でゆっくりと勢いを弱め、午前4時頃には鳴動も全く止み平静となった。

注15、この噴火については、河野(1890)による詳細な調査がおこなわれ、報告書が刊行されている。

67) 1890年(明治23年)の活動。 1月5日午後9時頃より浅間山再び鳴動、翌6日午前3時頃までに10余回の鳴動があった。その音はあたかも汽車が走るようで微かであった。

浅間火山活動記録の再調査

Table 2. Chronological table of eruptions of Asama volcano.

番号	噴火暦年		出典	備考
	和暦	西暦		
1	天武天皇14年	685年	日本書紀	降灰記録
2	天仁元年	1108年	中右記	大噴火
3	弘安4年	1281年	浅間焼大変記, “浅間山”	疑問記録
4	宝徳2年	1450年	続本朝通鑑	
5	大永7年	1527年	“浅間岳記”, “信上変異記”	
6	享禄元年	1528年	災異志	
7	享禄4年	1532年	“信上変異記”	土石流発生
8	天文元年	1532年	災異志	
9	天文3年	1534年	続本朝通鑑	
10	天正10年	1582年	晴豊記, 続常陸遺文	
11	天正18年	1590年	當代記	
12	天正19年	1591年	家忠日記, 當代記	
13	文禄4年	1595年	當代記	降毛記録
14	慶長元年	1596年	“浅間岳記”, “信上変異記”	死者多数
15	慶長2年	1597年	當代記, 他	
16	慶長3年	1598年	當代記	
17	慶長4年	1599~1600年	當代記	
18	慶長6年	1602年	當代記	
19	慶長8~9年	1604年	當代記	
20	慶長10年	1605年	逸史, 當代記, 他	
21	慶長14年	1609年	當代記, 他	
22	寛永5年	1628年	赤須上穂旧記録鈔	疑問記録
23	正保元年	1644年	災異志	
24	正保2年	1645年	“浅間岳記”, “信上変異記”	
25	正保4年	1647年	“浅間岳記”, “信上変異記”, 災異志	
26	慶安元~2年	1648~1649年	“浅間岳記”, “信上変異記”	
27	慶安3年	1650年	続史愚抄, 他	降毛記録
28	慶安4年	1651年	災異志	
29	承応元年	1652年	“浅間岳記”, “信上変異記”	
30	明暦元年	1655年	災異志	
31	明暦2年	1656年	“浅間岳記”	
32	明暦3年	1657年	“信上変異記”	

“追分駅よりの報告” 河野 (1890).

注 16, 佐藤 (1910) の論説に, “明治 24 年 (1891 年) 4 月 6 日午前 1 時よりはじまり, 11 日, 17 日, 18 日, 28 日, 29 日, 30 日の数回にわたって噴火す”, という記載がある. この記録は多分, 1894 年 (明治 27 年) の活動の誤りである. 活動日時が 1894 年に一致している.

注 17, 中村・山崎 (1911) の報告には, 1893 年 (明治 26 年) 頃の浅間山火口底の状況が描写されている.

68) 1894 年 (明治 27 年) の活動

4 月 6 日, 午前 10 時鳴動黒煙を噴出, ^{わかされ}分去茶屋付近では石, 灰を降らす, 渋川では午前 9 時頃雨が降り雨中に灰が混じる「明治 27 年 4 月 8 日上毛新聞」“噴火志”, “浅間火山” (地学, 1894a).

Table 2. continued.

33	万治元年	1658年	“信上変異記”	
34	万治2年	1659年	“浅間岳記”，“信上変異記”	
35	万治3年	1660年	災異志	
36	寛文元年	1661年	“浅間岳記”，“信上変異記”	
37	寛文9年	1669年	続皇年代略記，災異志	
38	元禄8年	1695年	御番所日記	日光での降灰
39	元禄16年～ 宝永元年	1703～ 1794年	常憲院実記， “浅間岳記”，他	
40	宝永3年	1706年	災異志	
41	宝永5年	1708, 1709年	“浅間岳記”，“信上変異記”	
42	宝永7年	1710年	災異志	
43	正徳元年	1711年	御番所日記，“信上変異記”	
44	正徳3年	1713年	御番所日記	日光での降灰
45	享保2年	1717年	災異志	
46	享保3年	1718年	“浅間岳記”，“信上変異記”	
47	享保4年	1719年	御番所日記	日光での降灰
48	享保5年	1720年	災異志	
49	享保6年	1721年	“浅間岳記”，“信上変異記”	
50	享保7年	1722年	御番所日記，塩尻，災異志	
51	享保8年	1723年	“浅間岳記”，“信上変異記”	
52	享保13年	1728年	災異志	
53	享保14年	1729年	“信上変異記”	
54	享保17年	1732年	災異志	
55	享保18年	1733年	“浅間岳記”，“信上変異記”	
56	宝暦2年	1752年	牧野八郎右衛門書状	
57	宝暦4年	1754年	“浅間岳記”，無二物語，他	
58	安永5～6年	1776～1777年	“浅間岳記”	
59	天明3年	1783年	記録多数	大噴火
60	享和3年	1893年	“浅間山”	分去茶屋潰れる
61	文化12年	1815年	“浅間山”	
62	慶応2～3年	1866～1867年	勅祭の書状（大森，河野論文）	
63	明治2年	1869年	勅祭の書状，“浅間山”	
64	明治8年	1875年	“浅間山”	
65	明治12年	1879年	“浅間山”	

4月11日，午後9時大鳴動降灰，火石を飛ばし黒煙天に
 沖して灰を降らせる。その状況極めて猛烈だが7～8
 分で止む。このような噴出は20数年来始めてのこと
 “噴火志”“浅間火山”。

注18，午前3時浅間山近傍で強震「長野測候所記録」“浅
 間火山”。

4月17日，午前噴煙甚だ多く噴出，黒煙は山頂より垂直
 に上昇小諸辺で仰ぎ見る高さは山の高さの7倍程に見
 受けられた。臼田から山梨県中巨摩郡では（10時頃
 迄）降灰した“浅間火山”，“噴火志”。この噴火の詳細
 は（地学，1894b）に記載がある。

4月18日，午後4時35分黒煙噴出，5，6分で白煙に戻
 る。黒煙より降砂山腹に落下，このようなことが日夜
 数回あるとのこと（地学，1894b）。

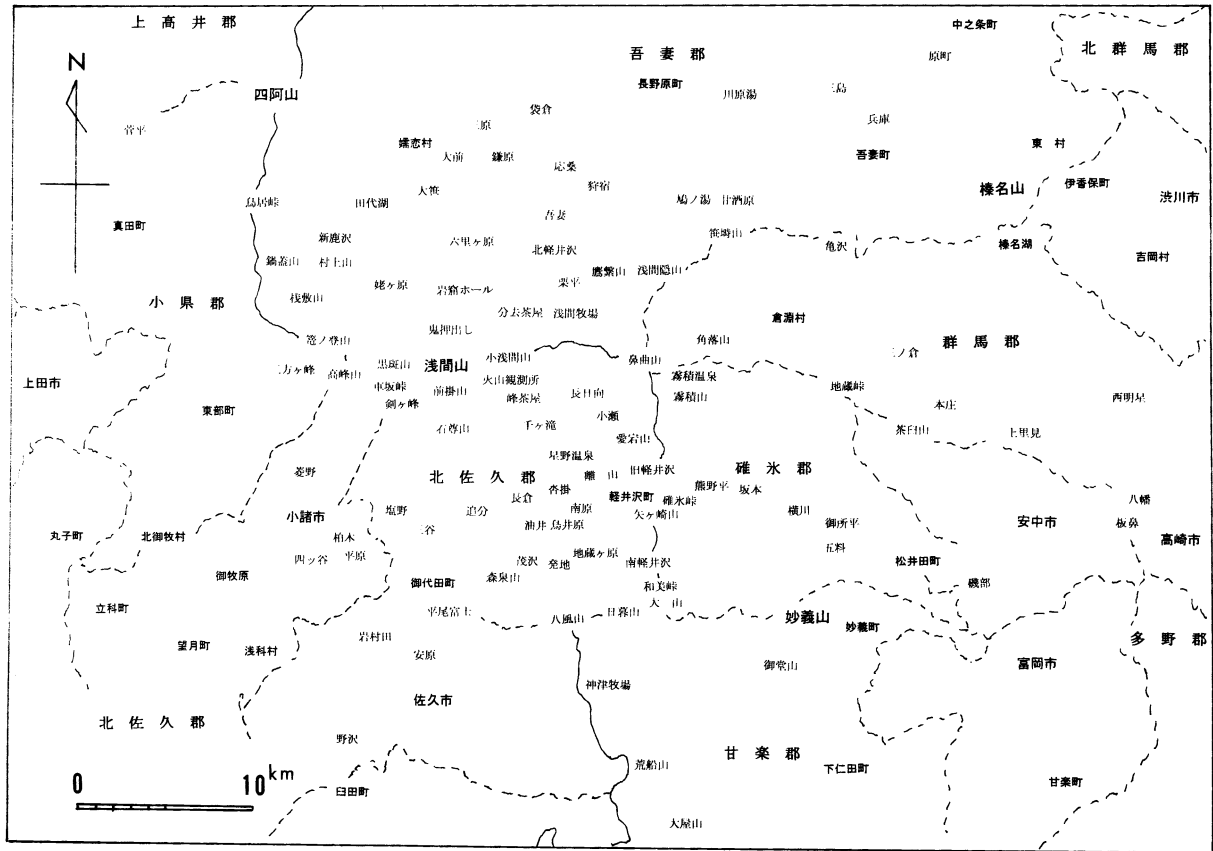


Fig 2. Map showing the locality of the Asama volcano and its vicinity in 1966.

4月28日, 午後6時30分浅間山多量の黒煙を噴出, およそ10分で止む.
 4月30日, 午前0時5分轟然とした鳴動とともに黒煙が昇騰し東北方に飛散した. 軽井沢では戸障子が振動した. この噴火は15分ほどで止んだ. 「長野測候所記録」“浅間火山”, “噴火志”, (地学, 1894b).
 5月5日, 午前7時15分噴煙, 微量の降灰があった. 「長野県報告」“噴火志”, “浅間火山”.
 5月13日, 噴煙, 群馬県安中地方に降灰した. 「5月16日東京日々新聞」“噴火志”.
 5月25日, 午後6時噴煙, 鳴動無し. 「長野県報告」“噴火志”, “浅間火山”.
 6月14日, 午前9時30分頃前橋および近傍で轟然と爆発音を聞き, 暫くして降灰, その間2時間余, 一分(2~3ミリ)ほど積もる. 高崎町およびその近傍でも大砲のような音声と建物の動揺を感じた. 10時30分より細砂を降らす. 降砂量は方3尺の場所で1匁6分(6gr)余を採集した. 降灰した地域, 安中, 松井田地方, 渋川町および付近(11時頃より降灰およそ3時間), 新田郡木崎町付近では11時後より3, 40分降灰, 伊勢崎町付近は木崎町と同様, 長野原付近(吾妻郡)でも

降灰, 鳴動激しく家屋振動“噴火志”“浅間火山”. この噴火については, 榎谷(1894a)に状態報告が記載されている.
 6月20日, 10時頃, 鳴動, 黒煙噴出.
 榎谷(1894b)に次の記事がある. “此登山に就き余の最幸なりしは同日即ち19日(注6月)にてありし其故は翌20日午前10時頃再び噴出したり. 此時は余小諸の布引と称する山にありしに14日の鳴動より少なりしも煙の量の大なること数倍に及びたれば若し1日後れ此日に登山せば或いは生命を失すの不幸に遭遇するも斗りがたかりし”
 1894年浅間山活動の要約
 4月6日, 11日, (14日地震), 17日, 18日, 28日(群馬県南部地方に降灰), 30日.
 5月5日, 13日(安中に降灰), 25日.
 6月14日(前橋, 高崎, 渋川, 木崎町, 伊勢崎, 長野原, 降灰), 20日.

69) 1899年(明治32年)の活動
 3月11日, 午後1時黒煙を上げ草津で鳴動5分間「明治

- 32年3月16日東京朝日新聞「噴火志」，“浅間火山”。
- 7月10日，夜噴火する。「明治32年7月12日時事新報」
「噴火志」，“浅間火山”。
- 7月15日，午前11時頃鳴動噴煙し長野原町付近に降灰
する。「明治32年7月19日上州新報」
「噴火志」，“浅間火山”。
- 8月7日，午後7時25分大きな鳴動，軽井沢では巨砲を
放つような大音響があり振動を感じた。7日夜，群馬
県前橋，高崎，伊勢崎，茨城県各地方も振動を感じ降
灰する。愛知県津島地方では同夜7時30分北東方に
あたり鳴動を聞く。群馬県下，碓氷・佐波・新田の各
郡に降灰する。8月8日午前3時頃新治郡石岡町付近
降灰あり“浅間火山”，“噴火志”。
- 8月11日，地学（1899）に次のように報じられている。
“又浅間山は越えて11日午後6時，2回の響鳴を発し
たるより近傍の人々戸外に出で見れば，同山より黒煙
数百丈の高さに噴出し，恰も奇岩の山頂に屹立せる
状を呈し，頗る奇観なりしも，凡そ20分にして止みた
る模様は去る明治28年（27年？）4月18日（28日？）
の噴出と同様なりという。尚その後数々灰を降らして
時には土砂を噴出することありという”。

1899年浅間山活動の要約

- 3月11日，噴煙，草津で鳴動。
- 7月10日，15日（降灰，長野原）。
- 8月7日，群馬県下各地，茨城県下に降灰，爆音愛知
県下で聞かれる。11日，噴煙。

70) 1900年（明治33年）の活動

- 1月22日，午前6時40分，轟然とした音響とともに爆
発，黒煙を高く噴出する。噴煙は上層の風向により，
始めは東20度南の方向に流れ後少し方位を変えたが，
千葉県茂原付近より太平洋に流れた。この間長野県北
佐久郡，群馬県碓氷郡，北甘楽郡，多野郡，佐波郡，
新田郡，邑楽郡，埼玉県児玉郡，大里郡，比企郡，秩
父郡，北埼玉郡，南埼玉郡，入間郡，北足立郡，東京
南足立，南葛飾，北葛飾，北豊島，千葉県東葛飾，千
葉，市原，山武郡，長生郡の各地に降灰した。この噴
火に関しては，気象要覧（1900）により詳細に報告さ
れている（地学，1900a）
「噴火志」，“浅間火山”。
- 1月31日，午後3時10分頃鳴動，黒煙噴出2時間，5時
頃少し止んだが再び黒煙噴出，30分後に止む。その後
もしばしば鳴動（地学，1900b）。
- 2月7日，18時05分遠雷のような響きとともに黒煙天
に漲りその中に電光，火球が見える。降灰区域の中央

- 軸は東15度北の方向で，村尾，日光，矢板などを経て
那須黒羽村付近にたつする。延長40里（約157km），
降灰面積凡そ180平方里（約2775.8km²）である「中
央气象台報告」
「噴火志」。
- 2月9日，19時30分頃西南より鳴動，20時までには2回
鳴動，14～5分後，勢多郡敷島村，群馬郡白郷井，長尾
両村および渋川付近に降灰「明治33年2月10日上毛
新聞」
「噴火志」。
- 2月14日，05時過ぎに噴火，連続1時間余にわたって噴
煙，煙は東10度南の方向をとり進行し前橋市の南半
分より桐生，栃木地方の一部を過ぎて水戸市に至る延
長45里（約176.7km），降灰区域の面積は230平方里
（約3547.3km²）に達した「中央气象台報告」
水戸では5時50分より降灰，7時20分頃最も甚だしく，7時
30分弱まる「明治33年2月16日東京日々新聞」
「噴
火志」。
- 2月19日，長野県北佐久郡小沼村では16時50分大鳴動
あり。この為，戸が外れるほどで17時頃までに数回
（地学，1900，によれば前後4回）鳴動，北佐久郡平根
村でも大砲のような音響数回，また汽車の走るような
響き数回聞える「明治33年2月22，23日，信濃毎日
新聞」
軽井沢方面は降灰あり大豆大の溶岩片を交え
る「長野県公報」
降灰区域は1月22日とほぼ同一だ
が噴煙がやや弱かったために岩槻より南には達しな
かった。延長30余里（117.8km余）で降灰面積は150
平方里（約2313.4km²）である「中央气象台報告」
「噴
火志」。なお“浅間山”では発生時間が16時となっ
ていて，およそ1時間異なる。
- 2月21日，群馬県安中町付近では19時30分より23時
まで降灰，上毛新聞1枚の上に積もった灰量は5勺で
13匁（48.8gr）であったという。群馬県の一部にも降
灰した「明治33年2月23日上毛新聞」
「噴火志」。20
時またまた遠雷のような鳴動と共に噴煙する“浅間
山”。
- 2月22日，8時10分大鳴動とともに黒煙大いに噴騰す
る“浅間山”。
- 2月26日，27日，26日22時，27日8時30分激しい噴
煙があった。前橋地方では，26日14時より16時頃ま
で降灰，瓦は勿論道路まで白くなり，一時は濛々とし
て先も見えない程であった“浅間山”。
- 3月1日，未明大噴煙があった「明治33年3月2日信濃
毎日新聞」
1日正午の噴煙は頗る凄まじく鳴動はド…
ドンと音がした。山麓の小沼村では殆ど毎日毎夜鳴動
が聞かれ，戸障子が振動するという「同上」
「噴火志」。
- 3月18日，4時宇都宮で轟然とした爆音が聞え，戸障子

が振動した「明治33年3月23日両毛実業新聞」“噴火志”。

3月21日, 0時過ぎ1回の鳴動があった。6時までには尚3回鳴動する。臼田警察署の一巡査が当時屋外にいたが、俄かに天が明るくなり火事と思う間もなく大鳴動があった。黒煙中に数多の電光が見られ、山腹には火の玉のように焼石が落下するのが見られた「明治33年3月27日信濃毎日新聞」“噴火志”。

注19, “浅間山”に次のような記事がある。

3月24日, 焼ける, 3時40分より7時頃迄5回の大噴煙と2回の震動があった。一日以降数回の噴煙があったが今回のは最も凄まじかった。夜に入り12時やや過ぎ頃1回の噴煙があったのを始めとして, 午前3時40分, 4時30分, 6時20分と都合4回の噴煙があった。殊に中の2回は最も甚だしかった。屋外にいた人の話によると火事と思われるくらい, 従って電光の様なもの数百千出現し, 山頂より少し下がった所に火の玉のようなものが転げ出すのを見た。云々, とある。記事の内容が21日の“噴火志”による噴火と良く似ていることを考えると同じ活動を日時を変えて記録している疑いがある。

3月31日, 15時10分頃大鳴動があり降灰する「明治33年4月5日中央新聞」“噴火志”。

4月6日, 11時頃より足利町に降灰あり“浅間山”。

7月19日, 軽井沢より来信, 数日来浅間山は異状で時々噴煙を噴出したが, 19日8時頃より20分ほど灰を降らし, そのため軽井沢付近は薄雪の降ったようである。山は雲霧に包まれて望めないが, その後毎日噴煙が上騰している模様, 云々, “浅間山”。

7月24日, 噴煙甚だしく当方にたなびく“浅間山”。

8月7日, 軽井沢からの来信によると8月7日15時より浅間山方面にあたり時々雷のような音響が聞えたが, 19時30分頃に巨砲を放ったような響きが聞えた。同時に非常な激震(追分では戸障子が外れ, 御代田では戸外に逃げ出した程)があった。浅間山の方面は一面の雲霧に包まれ数度の鳴動の後20時頃に止む。同じ頃東長倉村字小瀬より草津街道にかけては大鳴動の後10分程して小豆大の砂利をまじえた灰が10分程降った。磯部, 高崎辺でも多少の降灰があった模様“浅間山”。

8月30日, 18時23分噴煙する「明治33年9月3日報知新聞」“噴火志”。

11月19日, 16時半頃鳴動噴煙する「明治33年11月23日高田新聞」“噴火志”。

12月14日, 松井田では4時頃浅間山の小鳴動を聞き降灰があった「明治33年12月15日上毛新聞」“噴火志”, “浅間火山”。

12月21日, 17時頃噴煙する「明治33年12月23日信濃毎日新聞」“噴火志”。

1900年浅間山活動の要約

1月22日, 広範囲に降灰, 太平洋に達する(降灰方位は始め東25度南で後少し南に向う, 降灰区域面積約300平方里(4,626 km², 中央气象台)1月31日, 弱い爆音, 岩村田で家屋振動

2月7日, 降灰域, 足尾, 日光, 矢板等, 降灰主軸, 東15度北, 主軸延長40里(157 km), 面積, 180万里(2,775.8 km²). 2月9日, 降灰域, 群馬県勢多郡敷島村, 群馬郡白郷井, 長尾両村, 渋川付近. 2月14日, 降灰域, 前橋, 桐生, 栃木, 水戸, 降灰主軸, 東10度南, 主軸延長, 45里(176.7 km), 面積, 230万里(3,547.3 km²). 2月19日, 降灰域, 主軸は2月7日とほぼ同じ, 岩槻に達する. 面積, 150万里(2,313.4 km²). 2月21日, 降灰, 群馬県の一部, 安中町, 2月22日, 鳴動, 噴煙, 26日, 27日, 鳴動, 噴煙, 降灰, 前橋,

3月1日, 大噴煙, 鳴動, 連日小噴煙があった模様, 3月18日, 宇都宮で爆音, 戸障子震動, 3月21日, 鳴動, 黒煙, 火球噴出, 3月24日, 噴煙, 火玉噴出, 軽井沢降灰, 3月31日, 鳴動, 降灰,

4月6日, 足利に降灰.

7月19日, 黒煙噴出降灰, 軽井沢, 7月24日, 噴煙, 8月7日, 爆発, 空振, 降灰(小瀬, 磯部, 高崎), 8月30日, 噴煙, 降灰,

11月19日, 鳴動, 噴煙,

12月14日, 鳴動, 降灰, 12月21日, 噴煙,

71) 1901年(明治34年)の活動

3月11日, 15時10分噴煙する「明治34年3月12日信濃毎日新聞」“噴火志”。

4月20日, 12時25分, 同17時の2回噴煙し, 19時半頃より岩村田付近に降灰する。翌21日10時半頃噴煙「昭和34年4月25日東京日々新聞」“噴火志”。

5月25, 26日, 25日, 10時50分, 26日14時の2回噴煙し小沼村に降灰する「明治34年5月31日東北新聞」, 正午頃前橋市付近に降灰「明治34年5月30日群馬新聞」“噴火志”。

5月29日, 東京小石川, 本郷(文京区)方面は5月29日14時40分頃大雨雷鳴があった。雨が小止みになった

頃、指ヶ谷町、餌差町、白山御殿町より本郷駒込にかけて僅かな降灰があった「明治34年6月2日都新聞」“噴火志”。

6月10日、19時20分噴煙「明治34年6月12日信濃毎日新聞」、6月15日18時20分夥しく噴煙する「明治34年6月18日信濃毎日新聞」“噴火志”。

7月21日、夕暮れ噴煙し、軽井沢辺に夥しく降灰、岩村田にも微量の降灰「明治34年7月24日高田新聞」“噴火志”。

8月6日～8日、6日7時、14時、16時15分、18時05分、20時15分と5回噴煙する。7日午前2回、午後3回噴煙、8日7時にも噴煙、7日の19時30分の噴煙では約1時間後、南佐久郡中込原以南で降灰「明治34年8月8日、10日、信濃毎日新聞」“噴火志”。

8月15日、朝7時頃より9時まで噴煙「明治34年8月12日信濃毎日新聞」“噴火志”。

8月20日、21日、20日10時10分、同16時、21日5時25分頃噴煙「明治34年8月22日信濃毎日新聞」。長野原付近では21日7時半頃より降灰した「明治34年8月25日上毛新聞」“噴火志”。

10月13日、前橋に降灰あり「明治34年10月15日時事新報」“噴火志”。

1901年浅間山活動の要約

3月11日、噴煙、

4月20日、2回噴煙、岩村田に降灰、21日、噴煙、

5月25日、2回噴煙、小沼村、前橋に降灰、29日、午後、東京小石川、本郷に微量の降灰、

6月10日、噴煙、15日、噴煙、

7月21日、噴煙、軽井沢、岩村田に降灰、

8月6日、7日、8日、噴煙、7日には南佐久郡中込原に降灰、15日、噴煙、20日、21日、噴煙、21日、長野原に降灰、

10月13日、前橋に降灰、

72) 1902年(明治35年)の活動

2月7日、11時20分噴煙「明治35年2月7日信濃毎日新聞」“噴火志”。

8月5日、3時頃噴煙し、15時頃長野原地方に降灰「明治35年8月9日上毛新聞」“噴火志”。

8月20日、6時20分頃小噴出(佐藤、1910)。

73) 1903年(明治36年)の活動

5月28日、16時夥しく噴煙する「明治36年5月30日信濃毎日新聞」“噴火志”。

6月30日、8時頃噴煙する「明治36年7月日上毛新聞」“噴火志”。

74) 1904年(明治37年)の活動

8月4日、正午頃小諸地方に降灰する。荒町以西は微量だが、与良町付近はやや多かった「明治37年8月22日信濃毎日新聞」“噴火志”。

75) 1905年(明治38年)の活動

10月21日より28日まで間断なく鳴動する「昭和38年11月1日群馬新聞」“噴火志”。

地学(1906)によると、浅間山鳴動、越佐新聞「38年10月1日刊」所報に依れば同火山は38年9月21日より28日に至るまで間断なく鳴動す、とある。9月か10月、どちらが正しいか不明である。

76) 1906年(明治39年)の活動

4月6日、早朝より噴煙す「明治39年4月8日中央新聞」“噴火志”。

4月20日、早暁より鳴動し正午頃に一時止んだが、後再び鳴動を継続した「明治39年4月22日中央新聞」“噴火志”。同様の記事が地学(1906)にある。

77) 1907年(明治40年)の活動

1月18日、18日夜より19日朝まで噴火し火柱が立っているようであった「明治40年3月21日東京朝日新聞」“噴火志”。

3月28日、6時頃鳴動し、安中町地方に降灰す「明治40年3月30日時事新報」“噴火志”、「6月及び10月頃になって時々噴煙し、夜間は焰を認める」“噴火志”。

8月24日、早朝噴煙、降灰。

78) 1908年(明治41年)の活動

2月13日、夕刻噴煙(Omori, 1912)。

2月15日、東南東35kmの安中に降灰(Omori, 1912)。

2月19日、23時噴煙する。小諸に降灰(Omori, 1912)。

注20、5月26日、浅間山付近の地震、宇津(1981)によればM=5.5である。この地震で、浅間山の噴火口の周囲に、長さ5間乃至10間(18m)で巾1寸(3cm)程の亀裂を生じる。牙山中間の1小角岩、黒斑山鐘岩の上部の1角、前掛山の岩壁約25間(45m)崩落する。

8月5日、3時(英文報告では3pm)鳴動、噴煙“噴火志”。

8月16日, 20時噴火“噴火志”.
 9月21日, 21日より23日まで数回の鳴動があり, 小諸に降灰“噴火志”.

79) 1909年(明治42年)の活動

1月29日, 17時頃強く破裂し, 岩村田, 小諸, 御代田等では鳴動のために多少の損害をずる“噴火志”.
 2月2日, 14時より15時の間に鳴動2回, 噴煙する“噴火志”.
 4月2日, 浅間山噴煙(?)7時より約20分間高崎, 前橋に降灰“噴火志”.
 5月31日, 23時25分強く爆発し, 轟然とした劇響と一緒に火煙柱を高く噴き上げる. 20分で沈静する. 浅間山腹2合目長坂(小諸口登山道)では径5分くらいの小石が降った. 湯の平付近に降下した焼け石は大きなもので径1尺, 地面に径3尺, 深さ1~2尺の穴をあけたものがあつた. 山頂では長さ2~3間の大岩塊所々に横たわって, 噴出後5日間立ってもそばに長く居られぬ程熱かったという. この噴火の降灰面積は, ほぼ浅間山を中心として東北, 西南に延長する約14里(55km)の区域で, 鳴響が聞えたのは直径約20里(78.5km)の円形区域であつた“噴火志”.
 7月6日, 04時40分鳴動に続いて小石, 灰が降下した「分去茶屋」(Omori, 1912). 08時~10時, に栃木県, 茨城県下に降灰(Omori, 1912).
 7月7日, 浅間山噴煙し, 下野国足利, 佐野および常陸国真壁, 結城, 下館, 北条, 柿岡などに降灰する“噴火志”. 同じ噴火であろうが, どちらが正しいか不明である.
 8月18日, 04時, 噴火, 鳴動「分去茶屋」(Omori, 1912).
 8月21日, 18時長野原で鳴動を聞く, 約20分間継続, 黒煙を噴出する“噴火志”.
 9月23日, 16時30分噴火, 9月12日19時45分地震あり「分去茶屋」(Omori, 1912).
 9月25日, 山崎・中村(1911)の登山調査によると, 火口底の火孔より噴出した火山弾が火口丘上にまで飛ぶ事があつた.
 11月10日, 10時鳴動があつた. 噴煙に異状はなかつた“噴火志”.
 11月16日, 17時20分, 鳴動, 噴火, 「分去茶屋」(Omori, 1912).
 11月24日, 14時7分1回「ドーン」と鳴動があつた. 次いで15時10分, 同25分又鳴動があつた. 最後の鳴動に伴って小石交じりの砂を降らしたが, その大きいものは3寸(9cm)以上あつた「分去茶屋 土屋吉五

郎談」(中村・山崎, 1911).

11月25日, 02時07分, 鳴動, 03時10分, 鳴動, 03時25分, 鳴動後15分程して最大5インチ位の石を含む砂が降つた. 03時40分には多分火口壁の一部が崩れて落ちたような音が聞えた. 「分去茶屋」(Omori, 1912).
 12月5日, 13時以降, 灰を放出, 「分去茶屋」(Omori, 1912).
 12月6日, 10時55分, 黒煙噴出.
 12月7日, 19時45分, 強爆発, 山腹の山林で火災発生(前掛山山腹での山火事69町歩(68.4ヘクタール), 焼失, 野火67町歩(66.5ヘクタール), 草のみ, 山麓の長野県北佐久郡では, 音波によってガラス戸の破損, 鴨居の墜落, 戸障子の脱出等家屋に損害が発生した. 軽井沢では, 女性が一人一時意識不明となつた. 降灰区域は浅間山を頭として, 東端は190キロメートルで, 茨城県鹿島郡で太平洋に出た. 平均の巾は約27キロメートル程度で降灰区域の全面積は約500平方キロメートルである. 降灰区域の軸線は大体南82度東に向かっている(大森, 1910). 鳴響は仙台付近から美濃東部に達し, 東京でも音波のために家屋が強く振動した“噴火志”.

この噴火については, 上記大森論文のほかに, 佐藤(1910)に詳しく報告されている. また(Omori, 1912)にも, 詳細に記載されている.

注21, 震予調報告73号に次のような記事がある.

19時45分の噴火に先立って地震あり(山麓有感, 19時41分23秒, この時には浅間山異状なし, 小堀内技手長野測候所).

12月15日, 鳴動に続いて砂交じりの灰の放出があつた(Omori, 1912).

12月31日, 鳴動, 小岩片を北麓に放出(Omori, 1912).

1909年浅間山活動の要約

1月29日, 強爆発, 山麓で小被害,
 2月2日, 鳴動, 噴煙,
 4月2日, 鳴動, 降灰,
 5月31日, 大爆発, 噴石多量, 周辺降灰,
 7月6日, 噴火, 降灰, 7月7日, 噴火, 関東に降灰,
 8月18日, 噴火, 21日, 噴火,
 9月23日, 噴火, 9月25日頃, 火口底で小活動,
 11月10日, 鳴動, 24日, 25日, 噴火,
 12月5日, 噴煙, 6日, 黒煙, 12月7日, 大爆発, 山麓では空振被害, 降灰区域は東方太平洋に達し, 東京

でも音波で家屋が振動する。

注 22, 1909 年浅間山周辺の地震活動

5 月中, 松本地方に 8 回の局発地震,
6 月中, 浅間山近傍で軽震, 微震合わせて 10 数回,
9 月 12 日, 19 時 35 分より群馬県吾妻郡嬭恋村大字田代
字鹿沢温泉付近で 7 回の地震, そのうちの 1 回は強く時
計止まり, 棚上より物が落ちる, 20 時に群発止む。
10 月中, 長野, 群馬の県境で軽震 1 回, 微震 6 回。
12 月 2 日, 朝, 小県郡上田町に 2 回の微震, 同日, 21 時
57 分には上下動の強震, 同夜 23 時微震, 5 日, 17 時 35
分, 20 時 20 分及び 22 時頃の 3 回, 6 日, 02 時 45 分, 03
時 12 分, 04 時 40 分の計 6 回微震, 更級では 3 日 15 時
50 分頃にも微震。

80) 1910 年 (明治 43 年) の活動

1 月 9 日, 06 時 20 分大音響と共に爆発し噴煙する。音響
のために障子などの外れたところがあった「東京朝日
新聞電報欄」(中村・山崎, 1911)。
06 時 31 分, 鳴動, 小石, 砂を噴出, 「分去茶屋」(Omori,
1912)。

注 23, 1 月 22 日, 15 時頃, 長野県小県, 北佐久両郡に
亘って強震, 時計の止まったものがあつた (大森,
1910)。

2 月 11 日, 06 時より鳴響が始まり黒煙を噴出, その音は
雷鳴のようで絶え間なく 1 日中鳴り続け夜の 12 時に
止む「分去茶屋日記」(中村・山崎, 1911)。

12 日, 02 時より午前中, 軽井沢から群馬, 埼玉に降灰
(Omori, 1912)。

4 月 2 日, 08 時 25 分鳴動と共に砂石が北麓嬭恋村のほ
うに降下する「分去茶屋日記」(中村・山崎, 1911),
(Omori, 1912)。

4 月 13 日, 05 時 40 分鳴動, 降灰「分去茶屋」(Omori,
1912)。

4 月 16 日, 19 時 45 分鳴動「分去茶屋」(Omori, 1912)。

4 月 24 日, 07 時 45 分鳴動, 岩片噴出「分去茶屋」(Omori,
1912)。

4 月 25 日, 17 時 45 分鳴動「分去茶屋」(Omori, 1912)。

5 月 2 日, 09 時頃, 長野原町より嬭恋村地方にかけて大
きな鳴動があつた。戸障子の振動が激しかったが降雪
中で詳細不明 (大森, 1911)。

注 24, 5 月 7 日 08 時 01 分頃に浅間山の西方小諸, 上田

地方に強い地震があり, その震域は広く長径 100 里
(392.7 km), 短径 80 里 (314.2 km), 陸総面積 3430 方里
(52,900.5 km²) に達した。当日同地方では 08 時 19 分頃
にもやや強い地震があり, 11 時頃までに合計 10 数回の
震動を感じた。但し浅間山には異状を認めていない (大
森, 1911)。

5 月 7 日, 08 時 30 分, 噴火に伴って強い地震があつ
た。これに先行して 08 時 10 分に強い地震があり, その
後 5 回の小地震がその日にあつた「分去茶屋」(Omori,
1912)。

この記事と, 注 24, の内容とは大きく矛盾するが, い
ずれが正しいか不明。

6 月 25 日, 09 時 30 分, 大きな鳴動, 大岩片を西南山麓
に放出「分去茶屋」(Omori, 1912)。

6 月 27 日, 1 日中鳴動が続く「分去茶屋」(Omori, 1912)。

7 月 4 日, 10 時 30 分, 大鳴動「分去茶屋」(Omori, 1912)。

7 月 5 日, 10 時 50 分, 浅間山大きく鳴動して岩村田辺は
大音響のために戸障子震動する (大森, 1911)。

7 月 11 日, 23 時頃より長野原町方面で遠雷のような鳴
動を聞き, 山頂に僅かの火炎を見た。東麓 1 帯に降灰
(大森, 1911)。

注 25, 7 月 20 日, 11 時 05 分坂城で強震, 10 時 45 分上
田付近で微震の後強い水平動 (大森, 1911)。

注 26, 9 月 21 日より 10 月 3 日までの 2 週間, 水平動簡
単微動計による地震観測が湯の平火山館で行われた
(浅間山における最初の観測)。詳細は (Omori, 1914 a)
に記載されている。

9 月 24 日, 14 時 30 分, 微量の灰が降下する「分去茶屋」
(Omori, 1912)。

10 月 21 日, 15 時半頃に 1 分間の大鳴動があつた。山麓
の村落では戸障子外れ大混雑となつた (大森, 1911)。

11 月 7 日, 6 日の夜に鳴動があり, 小沼村付近では弱震
を感じただけだったが, 7 日に入って再び鳴動, 噴煙
した。噴煙は遠く群馬方面に数十里靡いた (大森,
1911)。

11 月 10 日, 強い爆発「分去茶屋」(Omori, 1912)。

12 月 2 日, 20 時 20 分 36 秒強く爆発する, 火炎を認め
ず, 栃木付近まで少量の降灰があつた。鳴響区域は
1909 年 12 月 7 日の噴火より少し小さい。東京では爆
音 2 回あり, やや強く遠い砲声を聞くようであつた。
“噴火志”, (Omori, 1912)。

12月15日、前橋、17時3分半第1回の鳴動約10秒間続いた後、12秒後に第2回目の鳴動4秒間続く、黒煙上がる。長野原町では17時15分45秒頃突然激しい鳴動があり、戸障子はミキミキ振動した。30分後微小な降灰があった。“噴火志”、音響は東南東140kmまで聞えた(Omori, 1912)。

12月16日、08時30分頃、長野原町では突然激烈な鳴動があり、戸障子はこのため「ビリー」と音を発して殆ど外れようとしたものがあつた。長野県下山麓各地で鳴響を聞いたのは08時13分頃である(大森, 1911)。

12月25日、前橋測候所の報告によると20時48分一回の音響を聞き、同時に戸障子震動し、引き続いてやや強い震動があつた。長野原、21時05分頃、激甚な爆音があり座って居る人も思わず尻を上げた(大森, 1911)。21時10分強爆発、砂が放出された。「分去茶屋」(Omori, 1912)。

1910年浅間山活動の要約

1月9日、強爆発、
2月11、12日、鳴動、噴火続ける、
4月2日、噴火、降灰、13日、鳴動、降灰、16日、鳴動、24日、鳴動、岩片噴出、25日、鳴動、
5月2日、大鳴動、雪中で詳細不明、7日、爆発、
6月25日、鳴動、岩片噴出、27日、1日中鳴動、
7月4日、鳴動、5日、鳴動、山麓で強い、11日、鳴動、降灰、
9月24日、降灰、
10月21日、大鳴動、
11月7日、鳴動、噴煙、10日、噴火、
12月2日、爆発、噴煙、東京空振、15日、鳴動、微量の降灰、16日、爆発、鳴動、

81) 1911年(明治44年)の活動

1月3日~5日、3日14時半より噴火し降灰、夜に入っても止まず4日朝になって止む。松井田、安中、藤岡より埼玉県下に降灰する。千葉県南葛飾郡関宿町方面では、4日11時頃より降灰する。同日夜は特に甚だしく霜に凍った地上に宛も白砂を敷き詰めたような状態であつた。茨城県稲敷郡岡田村大字柏田、及び岡見村付近では5日01時より砂のような灰降り道路、屋根に雪のように白く積もる(大森, 1911)。

1月6日、大前、01時35分溶岩見える。前橋、5日夜10時轟然たる2回の爆声があり、市民表に飛び出す。

6日01時10分再び大爆声、約3~4秒間戸障子を震

動、浅間山頂より黒煙、火焰が噴出する。熊谷には降灰(大森, 1911)。

富山県伏木測候所では01時18分に轟々とした地鳴りがあつた。約20秒間。噴煙し埼玉方面に降灰する。富山でも鳴響を聞いた“噴火志”。

1月8日、16時40分、鳴動、「分去茶屋」(Omori, 1912)。

1月16日、08時頃、前橋、2回の大鳴動があつた。坂本町、碓氷町付近では1坪に約4.6合(830ml)の降灰があつた。18時頃にも鳴動(大森, 1911)。

1月17日、前橋測候所報告、02時頃より甚だしく噴煙、06時04分頃(?)小鳴動を感じたが眼を覚ます程ではなかつた。17日朝、碓氷、坂本方面に降灰、埼玉県下にも降灰、長野原大音響と共に戸障子振動、13時頃、軽井沢で鳴動、降灰。17日夜より18日払暁の間に熊谷に微量の降灰、砂はやや黒味を帯びた細粒で河畔の砂のようであつた(大森, 1911)。

1月18日、13時30分頃、軽井沢で鳴響、震動を感じる。13時34分頃、前橋で遠雷のような鳴響、14時頃降灰。17時24分、前橋で鳴動6~7秒、戸障子振動、降灰、大前(北方約22km)、17時頃溶岩見える。長野原、17時20分激甚な爆音、噴煙は東南方に靡く、21時30分頃、臼田町、1大音響、やや強く振動、山頂から濛々と立ち上がる黒煙中に火焰が見えたという。大前、21時15分溶岩見える。長野原、21時13分激甚な(前回より強い)爆音があつた(大森, 1911)。

13時08分17秒前橋、宇都宮地方に降灰があつた。17時20分58秒鳴響は東南東125kmに達する(岐阜県東部でも鳴響聞える)前橋に降灰、21時27分49秒鳴響は東方に180kmに達する。宇都宮地方に降灰“噴火志”。

1月19日、01時15分18秒、鳴動、噴煙、“噴火志”。大前、01時溶岩見える。01時20分頃噴火し、小諸町で震動を感じる。前橋、01時19分鳴動があつた(大森, 1911)。

04時15分激甚な爆音が1回あつた(長野原)、大前、07時溶岩見える。長野原、07時27分爆発があり、前3回の爆発より音響激しい(大森, 1911)。

07時34分、噴火、小石、砂が降下「分去茶屋」。09時47分、噴火、鳴響にともなって火焰が見える。09時50分、噴火、砂石落下「分去茶屋」(Omori, 1912)、09時47分、鳴動、噴煙(火焰を認める)“噴火志”。

長野原、09時48分、爆発、臼田町では09時50分頃に前夜と同様の鳴響、振動があつた。小諸でも震動を感じ、軽井沢では少量の降灰、長野原より望見すると、18日の午後より19日朝までの4回の破裂ごとに噴火

口より黒煙と共に火の雨を降らしたという（大森, 1911).

14時17分45秒, 鳴動, 噴煙, “噴火志”, (Omori, 1912). 軽井沢に少量の降灰, 前橋では14時21分空砲を連発するような音響を感じ戸障子が振動する. 1分間は西方に遠雷のような音響が聞える（大森, 1911).

14時35分, 爆発, 「分去茶屋」(Omori, 1912). 長野原, 14時36分爆発があった. 音響は18日以来最強（大森, 1911). 19時20分, 爆発, 「分去茶屋」(Omori, 1912).

22時20分, 鳴響があり, 遠雷のようであった「芦平日記」(大森, 1911).

1月20日, 12時47分, 噴煙, 降灰, “噴火志”. 前橋, 12時50分, 低い鳴響, 戸障子微かに振動, 碓氷郡方面降灰, 大宮, 秩父でも微量の降灰, (大森, 1911).

1月21日, 埼玉県飯能町に降灰があった“噴火志”. 12時16分頃, 爆発する. 黒煙を噴く. 16時20分頃, 噴煙, 19時13分遠雷のような鳴響, それから2~3分後にも2回「芦の平日記」(大森, 1911).

12時16分35秒, 噴煙, 前橋で鳴響を聞く“噴火志”.

1月22日, 16時, 鳴動, 前橋に微量の降灰あり, “噴火志”. 17時半, 鳴動無しで噴煙, 前橋では17時35分より15分間降灰, 長野原, 15時15分激甚な爆音あり, 5分間で黒煙立ち昇ったが煙は東方になびき降灰は無し, 芦平, 18時57分頃, 激烈な噴煙あり, 煙は東方になびく. 長野原, 21時18分, 激烈な爆音, 煙は東方になびく（大森, 1911). 23時50分, 強爆発, 岩片, 灰が山の東の麓に降下する「分去茶屋」(Omori, 1912).

1月23日, 12時02分, 鳴響あり「芦の平日記」(大森, 1911).

14時15分, 爆発, 15時40分, 強爆発, 大きな岩石を北方に放出, 灰, 小岩片は東方に落下「分去茶屋」(Omori, 1912).

16時16分, 噴煙する, 前橋に微量の降灰あり“噴火志”.

16時15分頃, 軽井沢で鳴動を感じ少量の降灰. 19時15分, 20時30分, 大前, 溶岩噴出し壮観, (大森, 1911). 21時27分14秒, 噴煙, 鳴動する, 火焰を認める, 前橋, 高崎方面に降灰あり. “噴火志”. 21時35分, 鳴動して噴煙甚だしく長野原からは火気が見えた. 岩村田町では戸障子が3分間震動し噴火口より火気が見え電光が閃くのも見えた. 水戸で降灰微量（大森, 1911).

1月24日, 10時22分爆発する, 「芦の平日記」(大森, 1911).

17時30分, 鳴動, 「分去茶屋」(Omori, 1912).

注27, 大前(駐在)報告, 44年(1911年)1月以降の分に関して次のような記載, 備考, その他にも数多の小鳴動ありたり. 鳴動には必ず黒煙を伴ない, 夜間溶岩噴出降下の状をよく見ることが得, 時としては溶岩の火玉山麓まで転び落つことあり. 火口遠望別段異常なし(1月25日)(Omori, 1912).

1月25日, 21時, 鳴動, 爆発「分去茶屋」(Omori, 1912).

1月26日, 11時21分頃爆発する, 黒煙を見る. 「芦の平日記」(大森, 1911).

1月30日, 遠雷のような鳴響あり, 但し戸障子の振動は無かった, しかし岩村田ではかなり戸障子が振動した. 「芦の平日記」(大森, 1911).

2月4日, (終日), 鳴動, 噴煙する. 長野原, 熊谷等の方面に降灰する. 軽井沢, 02時40分, 鳴動を感じる. 長野原, 08時頃より午後にかけて, 絶えず音響を聞くがとくに異常なし. 川原湯方面に多少降灰, 利根郡, 14時半大鳴動を聞き人々は戸外に飛び出す. 14時50分頃より細微な灰を降らし地面に霜のように積もる. 熊谷測候所, 07時30分より降砂があり25分間で止む. 前橋測候所の報告によると, 両3日前より浅間山は盛んに黒煙を噴出していたが, 4日朝来, 殊に甚だしく, 午前10時頃より鳴動を伴ない, 遠雷のように絶えず継続して午後1時頃からは音響やや強く時々地響きを感じ夕刻になっても止まなかった（大森, 1911).

2月6日, 20時30分, 前橋, 高崎で爆声を聞く, “噴火志”. 夜8時半頃爆声あり, 前橋地方では格別な事は無かったが, 高崎付近は振動甚だしく人々は戸外に飛び出した程であった（大森, 1911).

2月10日, 05時30分, 高崎で鳴動を感じる“噴火志”.

注28, 山崎(1911)には浅間山の火口底の深さについての記載がある. それによると 1893年230 m(山崎), 1904年180 m(Bruce-Mitford), 1909年80 m(中村, 山崎) 1911年61 m(山崎), となっていて, 火口底にマグマが上昇してきた事が推定される. ちなみに1911年の測定は2月11日に行っている.

2月13日, 22時25分, 鳴動連続する. 前橋に降灰. 噴

- 火志、前橋では22時28分より24時を過ぎるまで殆ど間断なく遠雷のような長鳴動が聞えたが、14日朝7時29分より前橋地方にも降灰があり8時を過ぎた頃に止んだ(大森, 1911).
- 2月21日, 02時46分, 噴煙, 鳴動, 09時10分, 大鳴動, 降灰は埼玉県管内に及ぶ“噴火志”.
- 3月11日, 10時35分, 鳴動, 微弱「長野原警察分署報告」(大森, 1911).
- 3月15日, 03時20分, 鳴動(微弱). 09時10分, 鳴動(やや強). 16時30分, 鳴動(弱). 「長野原警察分署報告」(大森, 1911).
- 3月16日, 01時~午後, 降灰を伴った鳴動あり, 17, 18, 19日も同様な状態が続く(Omori, 1912). 06時04分及び25分の2回, 多量の黒煙を噴出する, 長野より望見(大森, 1911).
- 3月21日, 02時46分頃, 長野原町では03時頃浅間山の噴煙と共に砲声のような鳴動を感じた. 噴煙は火柱の様だったが降灰はない. 前橋でも鳴響が聞えた. 東京浅草でも大砲のような音響を聞いた(大森, 1911), “噴火志”.
- 09時10分30秒, 大鳴動, 降灰は埼玉県管内に及ぶ“噴火志”.
- 長野原町, 09時10分, 砲声のような鳴動とともに, 浅間山盛んに噴煙, 噴煙は3, 4分で止んだ, 何の被害もないが近来始めての大鳴動であった. その他, 前橋測候所, 高崎, 軽井沢, 小諸町でも音響を感じる(大森, 1911).
- 3月22日, (午後)数回の小噴煙があった“噴火志”.
- 長野測候所では, 14時03分, 14時08分, 14時24分, 15時33分, 15時45分の5回黒煙の噴出を望見, 前橋, 15時56分より18時24分まで降灰があった. 測候所で坪(3.3m²)あたり3匁6分(12.6gr)
- 3月23日, 09時, 遠雷のような音響約3分間, 黒煙噴出, 11時, 同様に5分間で黒煙噴出, 23時30分, 鳴動強, 震動する「長野原警察分署報告」(大森, 1911).
- 3月24日, 23時55分, 小鳴動, “噴火志”. 嬭恋村では23時55分浅間山の小鳴動を聞く. 長野原警察分署, 23時30分鳴動強い(大森, 1911).
- 3月25日, 23時03分30秒, 鳴動, 降灰, “噴火志”, 長野原よりの報告, 23時10分俄然地響きと共に浅間山が噴出, 鳴動は3分間で微量の降灰があった. 但し浅間山に近い集落には降灰多く, 山林原野鼠色に変わった. 前橋測候所, 23時6分微かな鳴響が2回聞えた. 雨中のため噴煙状況は不明, (大森, 1911).
- 4月2日, 21時50分, 22時20分, 鳴動“噴火志”.
- 長野原では午後9時50分頃突然に鳴動があり, 障子がビリーと振動した(雨天中), 長野原町, 午後19時29分前回よりやや大きい鳴動があった(大森, 1911).
- 4月3日, 11時55分, 小諸で大きな鳴動を感じたが, 雨天のため噴煙の状況不明, (大森, 1911).
- 13時52分30秒, 鳴動数回, 富山県(伏木測候所)で音響を聞く(西側外聴域). “噴火志”, (Omori, 1912).
- 14時05分, 鳴動, 噴火, 岩片北側に放出, (Omori, 1912),
- 4月4日, 08時42分, 鳴動数回あり, 越中国(富山県)でも音響を聞く“噴火志”.
- 08時50分, 大鳴動, 爆発, 噴石を北西に飛ばす, 砂灰三原村に降る「分去茶屋」(Omori, 1912). 長野原, 08時32分頃, 遠雷のような鳴動を感じる. 同時に浅間山頂より灰白色の煙を高く上げ近来にない大噴出(大森, 1911).
- 4月7日, 03時40分, 前橋で鳴動を感じる, “噴火志”.
- 前橋, 03時42分鳴響1回を聞く, 戸障子振動する. 長野, 当日好晴, 昼間に8回の黒煙噴出を望見する. 10時46分, 11時49分のもは頗る盛んであった(大森, 1911).
- 4月8日, 11時30分, 鳴動, 灰, 砂, 1cmくらいの小石が30分ほど降下「分去茶屋」(Omori, 1912). 13時—, 前橋, 熊谷などに降灰あり“噴火志”.
- 4月9日, 10時, 前橋に微量の降灰あり. 前橋, 10時15分より同30分まで微量の降灰あり(大森, 1911).
- 4月11日, 08時12分, 大鳴響“噴火志”.
- 08時17分, 大鳴動, 岩石を北側に放出する. 音響は09時40分まで続く(Omori, 1912).
- 4月12日, 05時30分, 直径3cmくらいの小石が降る「分去茶屋」(Omori, 1912).
- 4月13日, 02時, 前橋に微量の降灰あり“噴火志”.
- 4月16日, 16時40分, 熊谷に微量の降灰“噴火志”.
- 5月8日, 15時27分58秒, 強く爆発し溶岩塊を多量に放出する. 無間谷入口の石造小神祠は全く破壊して降石のために埋められる. 当日は恰も浅間山の山開きのため多数の登山者があり, 1名が死亡した. 遭難者の捜索に赴いた4人の1行は18時半の噴火に出会い2名が負傷した. 浅間山南麓の御代田, 小沼などでは空気波動のために多少家屋に損害がでた. 天井の落下1箇所, 鴨居の墜落2箇所, 戸障子の外れた家は60軒を数えた. 東京においても爆音が強く, やや強い地震の場合のように戸障子が振動した“噴火志”.
- この噴火による鳴響域, 降灰域については(Omori, 1912)に図示されている. 降灰の方向軸はほぼ南東に

当たる(地学, 1911 a, b) にこの噴火の記事がある。

5月9日, — 強い噴火, 石が降下, 「分去茶屋」(Omori, 1912).

6月7日, — 鳴動「分去茶屋」(Omori, 1912).

6月28日, 1回(B型の数, 10μ 以上), 「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

6月30日, 1回(B型の数, 10μ 以上), 「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

7月1日, 11時32分08秒, 小噴火「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

7月2日, 14時18分23秒, 小噴火, 他B型2回「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

7月3日, 3回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

7月6日, 1回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

7月7日, 1回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

7月8日, — 鳴動が昼頃から21時まで続いた「分去茶屋」(Omori, 1912).

10時16分04秒, 小噴火「湯の平観測点」(Omori, 1914 c).

7月9日, — 鳴動「分去茶屋」(Omori, 1912).

7月11日, 1回(B型の数, 10μ 以上) (Omori, 1914 a).

7月14日, 04時32分26秒, 小噴火「湯の平観測点」(Omori, 1914 c).

7月15日, 19時から鳴動が始まり翌朝まで続く「分去茶屋」(Omori, 1912).

7月20日, 2回(B型の数, 10μ 以上) (湯の平観測点) (Omori, 1914 a).

7月21日, 22時47分40秒, 小噴火, 他B型2回「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

注29, “気・噴火誌”によれば21日10時47分に噴火とある。地震計の最大振幅 23μ と記載されているが、これはOmori (1914 a) 中にあるB型地震(大森分類, 大森分類におけるB型地震は噴火に伴った地震である)の振幅であり、その時刻は表あるいは文中説明いずれにおいても10. 47. 40 pmとなっている。“爆発史集”では、午後10時47分40秒と記されている。

7月27日, 16時18分, 小噴火, “爆発史集”。

8月1日, 2回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

8月3日, 1回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」

(Omori, 1914 a).

8月5日, 2回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

8月6日, 1回(B型の数, 10μ 以上). 「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

8月15日, 04時42分50秒, 噴火, 他B型2回「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

この噴火により死者が生じた。幾つかの記録があるが、それらのうち、地学(1911 b). を引用する。“浅間山の爆発, 浅間山は8月15日午前4時30分小破裂をなし、ついで同6時より8時に亘りて前後4回の爆発を見たり。これらの爆発は極めて微弱なものにしてその音響の如きも山麓にては聴取し得ざりし程なりしに、同日は恰も1月後れの盃蘭盆に相当し、登山して日の出を拝せんとしたる者内外人を通じて約70名あり、爆発落下し来たれる岩片の為に死者内外人各1名、重軽傷者数十名を出すの惨事を見るに至れり。尚同月16日午後7時15分より、同20日午後6時頃よりも噴煙降灰せりという”。

(Omori, 1912)によれば、この噴火に於ける2名の死者のうち1人は日本人の警察官、1人の外国人はアメリカの宣教師である。その他に6人の外国人と14人の日本人が重軽傷を負っている。“気・噴火誌”, によればこの噴火による死者は多数となっているがそれは正しくない。また、“爆発史集”では遭難者多数とあり誤解を生じる恐れがある。

8月15日, 21時19分32秒, 噴火あり, と“爆発史集”にある。これは明らかに間違いで、この時刻に相当する噴火は8月19日に発生したものであって、15日同時刻に噴火は発生していない。(Omori, 1914 a)の観測表による。

8月16日, 1回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

8月17日, 1回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

8月18日, 4回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

8月19日, 11回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

8月20日, 03時38分59秒, 小噴火, 他B型2回「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

8月22日, 4回の噴火が生じたと“爆発史集”にある。この活動は(Omori, 1914 a)の観測表より引用したと考えられるが、同表によればB型の数は7回である。したがって、7回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測

点」(Omori, 1914 a).

8月23日, 5回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

8月29日, 20時35分53秒, 小噴火「湯の平観測点」(Omori, 1914 c).

9月6日, 5回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

9月9日, 11時49分21秒, 同59秒, 小噴火「湯の平観測点」(Omori, 1914 c).

9月25日, 1回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

9月28日, 2回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

10月18日, 1回(B型の数, 10μ 以上)「湯の平観測点」(Omori, 1914 a).

注30, 1911年(明治44年)湯の平に於ける地震観測は, 6月25日より10月20日の間行われた. この観測成果はOmori(1914 a)に詳細に記載されている. 使用した地震計は錘重量15 kg, 水平動, 自己周期約4秒, ペン先倍率100倍である. 芦の平で使用したものと同様である. なお1911年には, 芦の平浅間館において1月9日より3月5日まで, 56日間の地震観測が行われている.

10月22日, 03時46分04秒, 強爆発, 鳴響区域は浅間山より北東方, 信濃川に沿って205 kmの距離に達した. 長野原, 岩村田, 小諸では鳴響1回強く, 戸障子を激しく振動する. この噴火の特徴は, 鳴響が主として北東に及び, 新潟付近でも戸障子をゆすりその為人々は眠りからさめる程であった. “噴火志”, Omori(1912)には鳴響域が示されている.

12月3日, 03時16分, 強い鳴動, 灰, 火石を噴出する. 爆音は富山県に達する“噴火志”. 前橋, 03時16分に鳴動, 家屋微かに振動, 早朝降灰あり(少量). 長野原, 鳴響激しくガラスの破損多し. 電光(火花)を混え巨大な噴煙が山頂より昇騰するのが見えた. 03時24分, 伏木測候所で鳴響が聞える(Omori, 1912).

1911年浅間山活動の要約

1月3~5日, 連続的に活動, 6日, 爆発, 8日, 鳴動, 16日, 噴火, 坂本, 碓氷に降灰, 17日, 18日, 19日, 度々噴火, 20日, 21日, 22日, 23日, 24日, 25日, 26日何れも噴火,

2月4日, 終日噴煙降灰, 6日, 10日, 13日, 21日何れも噴火降灰,

3月11日, 鳴動, 15日, 16日, 17日, 18日, 19日何れも鳴動, 降灰(分去茶屋), 21日, 噴火, 降灰, 22日, 23日, 24日, 25日何れも噴火, 降灰, 4月2日, 3日, 4日, 何れも噴火, 3日, 4日の噴火鳴動は富山県に達する, 7日, 8日, 9日, 11日, 12日, 13日噴火続ける, 16日, 熊谷に降灰,

5月8日, 15時27分爆発, 登山者1名死亡, その捜索に当たった4人のうち2名は, 18時30分頃の噴火で負傷する, 山麓では空振による被害発生. 5月9日, 噴火, 6月7日, 鳴動, 28日, 30日噴火,

7月1日, 2日, 小活動, 3日, 6日, 7日, 噴火, 8日, 9日小活動, 11日, 噴火, 14日, 15日噴火, 20日, 小活動, 21日, 27日活動, 8月1日, 3日, 5日, 6日に小活動,

8月15日, 04時42分50秒に小爆発, 山頂に登山者多く死者2名(小諸警察署巡查1名, 米国人宣教師1名)負傷者20名(外国人6名, 日本人14名)の惨事となる.

8月16日, 17日, 18日, 活動, 19日, 噴煙, 降灰, 20日, 22日, 23日, 29日, 活動,

9月6日, 9日, 25日, 29日, 活動.

10月18日, 活動, 10月22日, 強爆発, 鳴響域は北東に延びる.

12月3日, 03時16分爆発, 山麓でガラス破損(長野原)

注31, 1911年中の浅間山活動に関する地震, 気圧などの観測の総合的解析結果が, Omori(1914 b)に報告されている.

82) 1912年(明治45年, 大正元年)の活動

1月14日, 爆発を伴う地震あり, やや顕著(14時41分余震あり). “爆発史集”, 爆発は疑問である.

1月28日, 06時30分~19時25分, 長野原, 前橋で爆音を聞く. 軽井沢付近, 熊谷等に降灰あり. “噴火志”, (気象要覧, 1912年1月).

2月8日, 14時25分鳴動, 高崎市に少量の降灰, (気象要覧, 1912年2月).

2月13日~14日, 22時(13日)~07時(14日), 小諸, 熊谷に降灰あり, “噴火志”, (Omori, 1914 c).

2月22日, 19時20分, 22時50分, 長野原で鳴動と爆音を聞く. “噴火志”, (Omori, 1914 c), 気象要覧(1912年2月).

4月9日, 12時35分, 長野原で鳴動を聞く. “噴火志”, (Omori, 1914 c).

4月15日, 19時50分, 長野原で低い鳴動音を聞く。“噴火志”, (Omori, 1914c).

注32, 1912年, 湯の平観測室における地震観測は, 5月16日より10月30日の間行われた。この観測による成果表は Omori (1914a) に詳細に記載されている。

6月30日, 1回 (B型の数, 10μ 以上) 「湯の平観測点」 (Omori, 1914a).

7月1日, 17時33分50秒, 小噴火, 「湯の平観測点」 (Omori, 1914c).

7月2日, 05時30分07秒, 小噴火, (湯の平観測点) (Omori, 1914c).

7月16日, 07時46分, 浅間山火山地震, 浅間山麓, 軽井沢, 小諸, 上田等では人々戸外に飛び出す。2回 (B型の数, 10μ 以上) (Omori, 1914a), (気象要覧, 1912年7月)。

7月21日, 1回 (B型の数, 10μ 以上) 「湯の平観測点」 (Omori, 1914a).

7月22日, 2回 (B型の数, 10μ 以上) 「湯の平観測点」 (Omori, 1914a).

7月30日, 1回 (B型の数, 10μ 以上) 「湯の平観測点」 (Omori, 1914a). この日より大正となる。

8月3日, 19時20分58秒, 同51分03秒, 小噴火, 「湯の平観測点」 (Omori, 1914c).

8月7日, 08時14分48秒, 09時43分23秒, 小噴火, 「湯の平観測点」 (Omori, 1914c).

8月22日, 05時25分50秒, 小噴火, 「湯の平観測点」 (Omori, 1914c).

8月23日, 15時14分01秒, 小噴火, 「湯の平観測点」 (Omori, 1914c).

8月26日, 1回 (B型の数, 10μ 以上) 「湯の平観測点」 (Omori, 1914c).

10月2日, 10時より19時40分まで, 長野原及び前橋で爆音を聞く。長野原には降灰あり。この連続した噴火のために浅間山の噴火孔の底面は平坦となり, 全体に著しく隆起して孔深を減じた“噴火志”。

10月3日~4日, 3日20時40分より4日10時まで長野原で低い爆音が聞える“噴火志”。

10月7日, 02時——軽井沢で爆音を聞く。熊谷に微量の降灰あり“噴火志”。

10月9日~10日, 9日21時30分より10日03時20分まで長野原で大きな爆音が聞える“噴火志”。

12月13日~14日, 噴火31時間継続する。多量の黒煙を噴出し, 赤熱の溶岩を花火のように山頂より放出し

た。浅間山より東北東, 太平洋沿岸で降灰あり。上野, 下野, 常陸, 武蔵, 下総, 相模, 伊豆, 駿河, 遠江, 信濃, 岩城, 岩代の各地で爆音を聞く。この連続した噴火のために浅間噴孔の溶岩底面はさらに昇騰し, 溶岩は殆ど噴孔壁の頂縁と同じ高さになる。山の9合目以上は黄鶯色の軽鬚な溶岩塊に覆われその有様を一変した“噴火志”。

注33, 分去茶屋の土谷氏の報告によれば, 火山鳴動は13日の08時20分より聞え, 同日11時40分と14時05分には噴火, 19時06分の音響以降は噴火活発となり夜を通して続き, 山頂は花火のように噴出する高熱岩石で覆われる。翌14日09時25分頃より噴火はさらに活発になり10時頃より戸障子が外れるほど鳴響大, 噴煙は風によって北東方に運ばれ, 小浅間付近には砂, 小石片及び薄白色の雪状の軽石 (最大径10cm) が落下, 爆発は昼頃より勢いを弱め15時50分頃止む。

東南東約11kmの軽井沢においては, 13日の23時頃より音響大となり家屋を震動し窓ガラスを破る程になる。14日の朝08時頃より火口より放出される岩塊が鳥の群れのように飛ぶのが肉眼でも見える。火口の南西13kmに位置する小諸より14日の朝10時頃撮った写真により推測すると噴出岩塊の直径は数mに及ぶものもある。火口の南南西16kmの岩村田においては, 鳴動は07時頃より聞え11時頃には非常に強くなり山頂の北西側に溶岩片が落下するのが観察され噴煙は東方に流れた。(Omori, 1914c) より要点を訳す。

1912年浅間山活動の要約

1月28日, 鳴動, 降灰 (軽井沢, 前橋),

2月8日, 降灰 (高崎少量), 2月13日20時より14日07時まで, 小諸, 熊谷に降灰, 2月22日, 鳴動 (長野原),

4月9日, 同15日, 鳴動 (長野原),

6月30日, 微噴火,

7月1日, 同2日, 小噴火, 同16日, 浅間山地震, 山麓有感, 7月21日, 22日, 同30日, 微噴火,

8月3日, 7日, 22日, 23日, 小噴火, 8月26日, 微噴火,

10月2日, 連続噴火, 鳴動, 降灰, この活動により火口底が上昇する。10月3日~4日, 爆音, 同7日, 爆音, 降灰, 同9日~10日, 大きな爆音 (長野原),

12月13日~14日, 噴火31時間継続, 岩石放出, 鳴動, 降灰, この噴火により火口底はさらに上昇。

注 34, 1912 年中の浅間山活動に関する地震, 気圧などの観測に関する総合的解析結果が, (Omori, 1914 b) に述べられている.

83) 1913 年 (大正 2 年) の活動

2 月 11 日, 14 時 15 分 40 秒, 爆発, 長野原, 前橋, 熊谷等で爆音を聞く“噴火志”.

北西方は長野に達する (気象要覧 1913 年 2 月).

4 月 18 日, 23 時 53 分 50 秒, 爆発, 前橋で爆音を聞く“噴火志”.

4 月 21 日~23 日, 噴火, 長野原, 前橋で数回爆音を聞く. 噴火志. 鳴動, 降砂があった (Omori, 1914 c).

5 月 16 日, 16 時 42 分, 強爆発, 長野原, 前橋, 熊谷で爆音を聞く“噴火志”. この噴火による鳴響域は, (Omori, 1914 c) に図示されている.

5 月 17 日, 21 時 40 分頃浅間全山鉄が灼熱したように紅を呈し, 山頂の空に 3 秒乃至 4 秒の間隔で火花を散らし, 約 1 分間は壮観であった (気象要覧, 1913 年 5 月).

5 月 27 日, 05 時 22 分 17 秒, 強爆発, 長野原, 草津, 小諸, 軽井沢で強い爆音を聞く“噴火志”. 05 時 25 分頃, 前橋測候所で西方浅間の鳴動と思われる小鳴動を聞く (象要覧, 1913 年 5 月), (Omori, 1917).

5 月 29 日, 強爆発, 長野原, 小諸, 前橋, 熊谷及び埼玉県内の 1 部 (内聴域), 遠江, 駿河, 三河, 尾張, 美濃 (外聴域) の各地で爆音を聞く. 長野原並びに越後中部の数箇所以降灰があった. 浅間山剣ヶ峰付近でこの噴火に遭遇した 2 名が死傷した“噴火志”.

直径 40~50 cm 以上の噴石, 前掛山麓に達する. 拳大の噴石, 湯の平に落下する. (Omori, 1914 c) に, 鳴響, 降灰域の図示あり.

6 月 13 日, 23 時 01 分 16 秒, 強爆発, 長野原で強い爆発音を聞く. “噴火志”, (Omori, 1917).

6 月 16 日, 爆発の記事がある (気象要覧, 1913 年 6 月).

6 月 17 日, 22 時 47 分 41 秒, 強爆発, 浅間湯の平観測所では爆音甚大で家を強く振動する. 忽ち前掛山全体は赫 (灼) 熱溶岩塊に覆われ, 盛んに炎陽を立てたので, 当時湯の平で観測に従事中西沢技師は, 溶岩流と熱泥流とが前掛山腹を降下して, 將に観測所を埋没するものと思ひ, 実際に決死の覚悟をしたという. 流星のように溶岩塊は観測所付近及びその下方はるか地点まで放射された. 火山灰は東方太平洋にまで降下し, 鳴響の 1 方は信濃, 越後, 上野, 下野, 武蔵, 下総, 常陸 (内聴域) の各地, また他方は能登, 越中, 加賀, 越前, 近江, 美濃, 尾張, 三河, 遠江, 駿河の各地 (外

聴域) に聞えた. “噴火志” (Omori, 1914 c), によれば 17 日の日中は極めて静かであったという. この噴火の鳴響, 降灰域は同論文に図示されている. また, 湯の平観測点における西沢技師の, この噴火に関する報告がある (西澤, 1913).

6 月 18 日, 06 時 21 分 03 秒, 強爆発, 長野原で爆音を聞く. “噴火志”, (Omori, 1917).

6 月 20 日, 04 時 06 分 47 秒, 強爆発, 東方では上野及び隣県数ヶ所で爆音を聞く. また西方では能登より尾張まで爆音が聞える. 降灰区域は東南東の方約 90 km に達する“噴火志”.

(Omori, 1914 c) にはこの噴火の鳴響, 降灰域が図示されている.

6 月 24 日, 11 時 37 分 34 秒, 強爆発, 長野原で爆音を聞く. 09 時 10 分頃 5 分間降灰あり. “噴火志”, (Omori, 1917).

23 時 34 分 17 秒, 強爆発, 「湯の平観測点」 (Omori, 1917).

6 月 26 日, 08 時 09 分 40 秒, 強爆発, 上野, 越後, 信濃の 1 部で爆音を聞く (内聴域).

また西方, 美濃, 尾張, 三河の 1 部でも爆音を聞く (外聴域). 降灰区域は東方前橋を限界とする“噴火志”. 噴石により山火事発生する (Omori, 1914 c). また, 鳴響, 降灰域の図示あり.

23 時 41 分 59 秒, 鳴響区域は前回の噴火と等しい. 前橋以降灰があった“噴火志”. 湯の平観測所では眠りより覚める「大森房吉」(Omori, 1914 c), 鳴響域の図示あり.

7 月 1 日, 12 時 17 分 01 秒, 爆発, にぶい音響を伴なう. 分去茶屋以降灰あり“噴火志”, (Omori, 1914 c).

7 月 7 日, 07 時 10 分 32 秒頃, 爆発, 長野原, 前橋で爆音を聞く“噴火志”. 湯の平の観測によれば, 爆発力は比較的弱く前掛山に溶岩塊の落下は見られなかった (Omori, 1914 c). 21 時 46 分 56 秒, 爆発, 長野原で強い爆音を聞く“噴火志”. 噴火後 15 分間山頂遠方の火事を見る様になる. 「湯の平観測点」 (Omori, 1914 c).

7 月 8 日, 05 時 25 分 25 秒, 爆発, 長野原で強い爆音を聞く“噴火志”.

この噴火は昨夕のものよりやや強い. 前掛山に落石の音を聞く. 「湯の平観測点」 (Omori, 1914 c).

7 月 13 日, 16 時 01 分 19 秒, 強爆発, 長野原以降灰があった. 爆音は主として南西方, 駿河より近江に亘って聞えた (外聴域). 浅間 4 周では僅かに山麓付近だけで鳴響を聞いた“噴火志”. 湯の平における観測によると, 朝来, 山は静かで僅かに白煙を噴出していた. 噴

- 出した溶岩塊によって、南側斜面塩野口方面、湯の平側に2、30分間山火事が生じた。観測所付近でも草が1部焼けた (Omori, 1914c).
- 7月18日, 02時08分34秒, 強爆発, 長野原で強い爆音を聞いた。尚西方加賀国金沢, 美濃国岐阜, 御嵩, 白鳥でも音響を聞いた“噴火志”。
- 湯の平における観察によれば、灼熱溶岩塊前掛山に落下する (Omori, 1914c).
- 7月19日, 12時54分03秒, 強爆発, 降石の為に湯の平観測所の窓ガラス板4枚破損する。観測所付近に落下した溶岩塊は地面に径6尺の孔を生じた。鳴響は3ヶ所 (浅間山周辺, 加賀の国, 遠江, 近江) の離れた地域に聞え、それらのうち最広なのは遠江より近江に亘る地域である“噴火志”。
- 湯の平における観察によると、大砲を1度に放ったような大音響であった。爆発後5分間音響が聞える (Omori, 1914c)。また音響域が図示されている。
- 群馬県下では鳴動の為戸障子の外れた所があった (気象要覧, 1913年7月)。
- 8月12日, 19時45分08秒, 強爆発, 長野原, 軽井沢, 岩村田, 小諸及び三河, 尾張, 加賀の1部で爆音を聞く“噴火志”。山頂霧のため見えず「湯の平観測点」 (Omori, 1914c)。
- 23時20分33秒, 大爆発, 強く爆発し湯の平観測所構内にも拳大の赫熱溶岩塊が落下。降灰区域は浅間山より東微南の方, 筑波山まで延長する。音響の聞えた範囲は前回と相似しているが面積が広い。東京 (小石川) でも爆音を聞いた。“噴火志”。湯の平における観察では、強烈な雷音のような爆発, 山頂上部は霧に覆われていたが、灼熱溶岩片は流星のように観測所付近に落下。火山館の屋根に穴があく (Omori, 1914c)。
- 8月13日, 17時41分40秒, 爆発「湯の平観測点」 (Omori, 1917)。
- 8月14日, 07時33分32秒~07時25分11秒, 連続活動, 07時33分32秒~07時51分11秒, 連続活動, 11時35分28秒~11時40分25秒, 連続活動, 14時22分38秒~14時31分12秒, 連続活動, 17時14分46秒~17時18分04秒, 連続活動, 17時26分32秒~17時27分04秒, 連続活動, 17時30分57秒~17時32分28秒, 連続活動, (Omori, 1917)。
- 埼玉, 群馬両県下に降灰あり (気象要覧, 1913年8月)。
- 8月15日, 09時59分11秒, 強く噴煙する。爆音無し“噴火志”。
- 09時52分40秒 ~ 10時02分34秒, 連続活動, (Omori, 1917)。
- 15時58分46秒, 強く噴煙する。爆音無し“噴火志”。
- 15時58分20秒~16時07分38秒, 連続活動, 16時48分47秒~16時59分14秒, 連続活動, 17時00分22秒~17時06分22秒, 連続活動, 17時08分54秒, 強く噴煙する。爆音無し。前掛山腹に溶岩片落下する (Omori, 1917)。
- 埼玉, 群馬両県下に降灰あり (気象要覧, 1913年8月)。
- 8月16日, 17日, 埼玉県, 群馬県に降灰あり (気象要覧, 1913年8月)。
- 9月21日, 13時50分59秒, 爆発, 爆音を聞いた区域は2個の面積より成り, 7月13日及び6月26日 (午前8時) 両回噴火の場合と似ている“噴火志”, (Omori, 1917) には, 鳴響域の図示がある。
- 10月7日, 11時32分33秒, 噴火, 鳴動を伴う (Omori, 1917)。
- 10月9日, 01時09分10秒, 強爆発, (Omori, 1917)。
- 10月15日, 22時43分3秒, 強爆発, 長野原, 岩村田, 前橋, 三ノ倉で爆音が聞かれる。“噴火志”, (Omori, 1917)。
- 10月17日, 15時27分47秒, 強爆発, 長野原, 草津, 前橋, 三ノ倉で爆音が聞かれる。“噴火志”, (Omori, 1917)。
- 10月22日, 03時55分42秒, 爆発, (Omori, 1917)。
- 10月26日, 03時14分38秒 (東京に於ける発震時, Omori, 1914c), 越後, 信濃, 上野, 武蔵, 常陸の1部で爆音を聞く。“噴火志”, (Omori, 1917) には鳴響域が図示されている。
- 11月3日, 02時25分38秒 (東京に於ける発震時, Omori, 1914c), 長野原及び岩村田で爆音を聞く。横浜付近において, 当日朝及び午後4時と5時との間に微量の降灰あり“噴火志”。
- 17時15分, 長野原及び岩村田で爆音を聞く“噴火志”。
- 11月4日, 08時35分, 長野原, 岩村田, 草津で爆音を聞く“噴火志”。
- 11月5日, 10時57分, 岩村田で爆音を聞く。同じく16時20分, 岩村田で爆音を聞く“噴火志”。
- 11月6日, 06時04分49秒 (東京に於ける発震時である, Omori, 1914c), 長野原及び前橋で爆音を聞く“噴火志”。
- 13時22分16秒 (東京に於ける発震時である, Omori, 1914c), 長野原及び前橋で爆音を聞く。栃木県塩原に微量の降灰あり“噴火志”。

19時36分16秒(東京に於ける発震時である, Omori, 1914c), 長野原, 三ノ倉及び高崎で爆音長く聞える. 群馬県利根郡に降灰あり“噴火志”.

11月14日, 11時11分55秒, 浅間牧場より噴火を望見する“噴火志”.

11月20日, 15時40分35秒, 前橋で遠雷のような爆音を聞く. 長野原に微量の降灰があった“噴火志”.

注 35, 1913年の浅間山地震観測は, 湯の平観測点で5月1日より8月31日, 芦の平においては9月1日より10月22日まで行われた. 地震観測表は(Omori, 1917)に記載されている.

1913年浅間山活動の要約

2月11日, 爆発,

4月18日, 爆発, 同21日~23日, 爆発数回, 鳴動, 降灰,

5月16日, 17日, 27日, 強爆発, 5月29日, かなりの噴火, 剣ヶ峯付近で死者1名, 負傷者1名を出す, 新潟県中部で降灰.

6月13日, 16日, 爆発, 17日, 強爆発, 鳴響域広く, 外聴域出現. 18日, 活動,

20日, 24日(2回), 26日(2回), 爆発,

7月1日, 7日(2回), 8日, 爆発, 13日, 爆発, 外聴域出現, 18日, 爆発, 外聴域西方, 南西方に出現, 7月19日, 強爆発, 山火事発生,

8月12日, 爆発, 2回, 23時20分, 大爆発, 東京でも爆音聞える, 13日, 爆発, 14日, 連続活動, 15日, 爆発2回, 16日, 降灰, (注, 7月, 8月は極めて噴火活動が多く, 全活動を網羅出来たとは考えられない).

9月21日, 爆発, 外聴域出現,

10月7日, 9日, 15日, 17日, 22日, 26日, 爆発,

11月3日, 4日, 5日, 6日, 14日, 20日, 爆発, 降灰.

84) 1914年(大正3年)の活動

1月11日, 06時16分30秒, 噴火, 岩村田, 三の倉, 前橋で爆音を聞く. 常陸国那珂郡小瀬でも鳴響があり降灰した“噴火志”.

東, 西長倉に微量の降灰. 前橋では戸障子軽く振動する(Omori, 1919).

1月12日, 02時30分頃, 噴火, 長野原及び岩村田で弱い爆音を聞く. 軽井沢付近に微量の降灰あり“噴火志”.

長野原では鳴動強く戸障子を振動し, 黒煙多量に火口

より噴出, 赤く見える. 火玉が山腹を転げ落ちて見事な光景であった. 東, 西長倉, 五箇村に降灰あり(Omori, 1919).

1月13日, 16時30分頃, 噴火, 長野原では遠雷のような鳴動が30秒程聞える. 黒煙柱をゆっくり噴出する. 17時頃にも同様な鳴動が聞えるが黒煙噴出なし(Omori, 1919).

1月23日, 17時30分頃, 噴火, 長野原では遠雷のような音響を伴って黒煙噴出を観察, 黒煙は翌朝9時まで出続ける. 降灰無し. 13時頃長野より多量の噴煙噴出を望見する(Omori, 1919).

1月26日, 06時45分頃, 噴火, 長野原, 岩村田, 軽井沢, 三の倉で爆音を聞く. 前橋には降砂あり, 三の倉, 宇都宮に降灰する“噴火志”.

前橋, 鳴動聞えず, 07時24分より08時13分降灰, 量, 11 gr/yard² (Omori, 1919). 16時40分, 前橋よりの報告によれば東方に噴煙噴出, 極微量の降灰があった(Omori, 1919).

1月27日, 06時30分, 噴火, 前橋, 多量の噴煙噴出を観察, 19時13分, 僅かの間山頂に火を見る. 三の倉, 08時25分より09時00分の間弱い鳴動を聞く(Omori, 1919).

19時20分, 岩村田, 弱い鳴動を聞く. 山頂に火が見える“噴火志”.

19時50分, 岩村田, 弱い爆音を聞く“噴火志”.

1月28日, 23時40分, 長野原, 及び前橋で爆音を聞く“噴火志”.

長野原, 山頂に噴石が花火のように飛ぶのが見える. 三の倉, 10時40分弱い鳴動を聞く(Omori, 1919).

1月29日, 23時52分頃, 強爆発, 爆音は信濃国, 軽井沢, 小諸, 岩村田等で強く聞えたが山頂付近の様子は霧のため確認出来なかった. 長野原では強烈な爆音で戸障子が激しく振動した. 上野, 越後, 佐渡, 越中, 下野, 武蔵, 常陸, 下総, 羽前, 陸前と広範囲の国々で音響が聞えた. 熊谷, 本庄, 羽生では軽度の降灰があった. 東京(小石川)でも振動に気付いた.“噴火志”, (Omori, 1919)には鳴響域が図示されている.

2月7日, 三の倉(群馬), 7日の昼より8日の14時の間に60~70回の弱い鳴動を聞く(Omori, 1919).

2月11日, 長野, 昼頃, 白色の大噴煙を望見する(Omori, 1919).

2月14日, 13時26分, 噴火, 上野, 武蔵両国で爆音が聞える“噴火志”.

前橋, 降灰無し, 三の倉, 熊谷, 大宮爆音が聞える(Omori, 1919).

- 2月24日, 22時16分, 噴火, 前橋で爆音を聞く“噴火志”。
岩村田では砲声のような音響, 山頂に火焰上がるのが見える。前橋, 22時18分強い爆音戸障子振動する。降灰無し (Omori, 1919)。
- 2月26日, 噴火, 長野原では14時45分より19時50分の間, 遠雷のような音響が聞え戸障子を震わすこと10回以上。岩村田よりの報告によれば, 25, 26日の両日, 白煙, 黒煙の噴出は通常より多量であった (Omori, 1919)。
- 2月27日, 05時27分, 噴火, 05時27分より06時04分までに前橋で爆音を聞く“噴火志”。
熊谷付近で05時と09時との間に降灰あり。本庄, 松山, (志木)に降灰あり (Omori, 1919)。
- 2月28日, 前橋気象観測所で遠雷のような鳴動を聞く。
3月1日, 06時測候所敷地内に降灰の痕跡あり (Omori, 1919)。
- 3月1日, 小諸, 22時30分から24時の間, 遠雷のような鳴動を聞く。山頂が時々赤くなる (Omori, 1919)。
- 3月3日, 前橋測候所, 01時44分と01時56分に遠雷のような音響を聞く。雨天のため山の状態は確認出来ず。降灰無し (Omori, 1919)。
21時50分, 強爆発, 爆音は信濃, 上野, 美濃の1部に聞え, 軽井沢では空気振動のために戸障子の外れたものがあつた“噴火志”。軽井沢, 遠雷のような鳴動20分くらい聞える。山頂霧のため詳細不明。御代田, 山頂赤くなり爆音強烈, 戸障子損傷, 町役場の戸1枚破損, 岩村田, 爆音及び空振は1913年6月17日のものより弱くない。北大井村, 爆音強烈, 小沼村, 強烈な爆音, 赤熱噴出物見える。塩野地域, 戸障子破損, 長野原, 爆音極めて強烈, 戸障子を振動, 火口は暫く赤く見え, 火の玉が山腹を転げ落ちるのが見える。降灰無し。(Omori, 1919)には鳴響域の図示がある。
- 3月13日, 噴火, 長野原, 08時30分より遠雷のような音響聞こえ, 11時15分頃とくに激しい。曇天のため山頂見えず。前橋, 12時04分遠雷のような音, 西方より聞える (Omori, 1919)。
- 3月14日, 07時56分, 噴火, 岩村田, 長野, 前橋で爆音を聞く。降雪雨のため山頂の様子確認出来ない。“噴火志”, (Omori, 1919)。
- 3月15日, 01時頃, 噴火, 軽井沢, 熊谷及び上野の1部で爆音を聞く。“噴火志”, 長野原では爆音激しく戸障子を振動する。黒煙昇騰, 山頂赤く見える。前橋, 01時頃, 大きな岩石が落ちたような音が4回聞え, 戸障子振動する (Omori, 1919)。
- 3月23日, 07時40分, 軽井沢, 熊谷, 前橋, 長野原, 三の倉等で爆音を聞く。“噴火志”, (Omori, 1919)。
- 3月25日, 02時36分, 噴火, 熊谷, 及び上野の1部で爆音を聞く“噴火志”。熊谷測候所, 02時40分より3秒間程遠雷のような鳴動を聞く。前橋測候所, 02時38分, 遠雷のような音を2回続けて感じる。曇天の為山頂部の状態は観察出来なかった。長野原では大砲のような音で, 戸障子強く振動した。遠雷のような音は前日の朝より聞かれた (Omori, 1919)。05時35分, 鳴動, 長野原では05時35分より遠雷のような音を数回感じた。その音に伴なって白煙を噴出 (Omori, 1919)。
- 3月29日, 噴煙, 大量の噴煙を日中長野より望見 (Omori, 1919)。
- 3月30日, 10時12分, 噴火, 長野原で遠方の砲声のような爆音を聞く。僅量の降灰あり。“噴火志”, (Omori, 1919)。
- 4月6日, 19時27分, 噴火, 北佐久郡, 熊谷付近, 及び上野で強い爆音があつた。長野及び横浜付近でも鳴響を聞く“噴火志”。
軽井沢, 鳴響は強烈, 山頂付近は濃い霧で覆われていたが, 山の中腹に溶岩片が落下するのが見えた。その他に爆音を感じた地域があつた。鳴響域の図示あり。神奈川県下に外聴域が出現し, その場所が表示されている (Omori, 1919)。
- 4月9日, 08時51分, 噴火, 北佐久郡, 前橋, 長野原で爆音を聞く“噴火志”。軽井沢, 岩村田, 小諸, 臼田 (南佐久), 小沼 (北佐久) などで爆音強い (Omori, 1919)。
- 5月4日, 多量の噴煙を長野より望見する (Omori, 1919)。
- 5月5日, 00時34分, 噴火, 北, 南佐久郡及び上野国の1部で爆音あり。東京でも鳴響を聞く“噴火志”。
岩村田, 灼熱溶岩片山頂付近に落下するのが見える (数分間) (Omori, 1919)。
- 5月9日, 16時07分, 噴火, 長野原, 前橋, 三の倉で爆音を聞く“噴火志”。
- 5月19日, 18時頃, 長野原で2, 3回続いて遠雷のような音響を聞く“噴火志”。
- 6月21日, 小活動か?, 08時26分51秒, 08時35分36秒, 「湯の平観測点記録」(Omori, 1917)。
- 6月24日, 14時05分, 長野より噴煙を望見する“噴火志”。

注36, 湯の平における地震観測によっても10月31日までにはさしたる活動は見られず。ちなみに1914年の湯

の平における地震観測は5月1日より10月31日の間行われた (Omori, 1917).

11月12日, 08時50分, 噴火, 岩村田, 臼田, 小諸及び上野国渋川で爆音を聞く. 黒煙を多量に噴出し, 臼田より望見するに山頂は1時火焰となったという“噴火志”. 軽井沢, 前橋では黒煙中の上がるのは見えたが爆音は聞えなかった. 渋川には少量の降灰があった (Omori, 1919).

20時35分, 群馬県前橋, 渋川, 鼻毛石で弱い爆音を聞く“噴火志”.

11月15日, 11時24分, 噴火, 長野県岩村田, 臼田, 小諸, 軽井沢, 埼玉県熊谷及び群馬県長野原, 渋川, 鼻毛石等で強い爆音を聞く. 草津に降灰あり. また長野市及び越後の一部で鳴響を聞く.“噴火志”, (Omori, 1919).

11月16日, 19時27分, 噴火, 軽井沢, 前橋で弱い爆音を聞く“噴火志”.

11月20日, 前橋, 17時少し前に少量の降灰があった (Omori, 1919).

12月14日, 15時35分, 噴火, 前橋で微かな爆音を聞く. 同日午前8時半並びに午後0時20分頃より浅間の黒煙はその量を増し, 午後3時35分の鳴動後は噴煙が1層盛んとなった“噴火志”.

13日14時より14日02時の間埼玉県熊谷, 若泉に少量の降灰があった. 同県本庄では13日の10時より14日の04時30分の間に23グラム/m²の降灰があった (Omori, 1919).

12月15日, 00時50分, 爆発, 美濃国岐阜 (測候所), 長嶺, 岩村, 板取, 大垣で北東にあたり爆音を聞く. また上総北西部の舞鶴の町では北西の方向よりの爆音を聞く“噴火志”. (Omori, 1919) には鳴響域が図示されている.

12月16日, 07時頃, 噴火, 美濃国加納, 席田, 岩村, 上村, 大垣, 板取, 気良, 御嵩, 八幡, 土岐等で北東あるいは東方からやや強い爆音を聞く.“噴火志”, (Omori, 1919).

1914年浅間山活動の要約

1月, 11日, 12日, 13日, 爆発, 23日, 26日, 爆発, 群馬, 栃木に降灰, 27日, 28日, 爆発, 29日, 強爆発, 鳴響域広範囲,

2月, 7日, 爆発, 11日, 噴煙, 14日, 24日, 26日, 27日, 28日, 爆発,

3月, 1日, 爆発, 3日, 強爆発, 山麓で空振による被

害発生, 13日, 14日, 15日, 23日, 25日, 爆発, 29日, 噴煙,

4月, 6日, 強爆発, 神奈川県で爆音を聞く, 9日, 爆発,

5月, 4日, 噴煙, 5日, 9日, 19日, 爆発,

6月, 21日, 24日, 活動,

7月, 8月, 9月, 10月, さしたる活動無し.

11月, 12日, 15日, 16日, 爆発, 20日, 前橋に降灰,

12月, 13~14日, 活動, 降灰, 15日, 16日, 爆発,

85) 1915年(大正4年)の活動

5月13日, 22時頂上に霧あり. これに薄く赤色を映じ出火を見るようだったが, 同20分止んだ“浅間火山”.

6月7日, 22時より同15分までと同30分より5, 6分間前掛の頂上淡紅色を呈する“浅間火山”.

8月27日, 19時半頃浅間の頂上に火焰昇り火柱の如し. 同40分黒煙昇り音響なし“浅間火山”.

注37, 1915年の湯の平観測所に於ける地震観測は5月1日より10月31日まで行われた. 同期間における地震観測の成果表は (Omori, 1917) に記載されている. また上記の観察記事は, その観測期間中に観測所において行われた観察によるものと考えられる. 8月27日の浅間山の状態に関しては, 加藤 (1915) の報告がある. その報告書中に“同日 (8月27日), 午後7時30分頃湯平観測所より浅間山頂を望見せるに煙は殆ど皆無なりしが真紅色の火焰が立ち昇るを見たり. その巾広きことあり. また火柱状をなし色も頗る濃厚なりき. その後2, 3分間霧の為見えず. 同40分に至り黒煙多量に昇騰す”とある. 浅間火山の記事はこの報告に基づいていると考えられる.

1915年浅間山活動の要約

5月13日, 山頂に火映あり, 6月7日, 山上火映あり, 8月27日, 山頂火映あり, 黒煙昇る. 年間を通じて爆発は無かった.

86) 1916年(大正5年)の活動

5月12日, 19時半頃, 噴火口北側方面薄赤色を認める“浅間火山”.

6月5日, 20時54分4秒「ドシン」と地鳴り聞こえ約2秒震動する“浅間火山”.

6月26日, 02時20分より5分間前掛山頂淡黄紅色乱雲に映ず“浅間火山”.

7月24日, 17時3分, 「ドドー」微音響と共に白煙前掛

山と同高上に昇騰し4分後に止む“浅間火山”。
 8月4日、白煙多量、15時頃噴煙猛烈“浅間火山”。
 9月8日、09時5分黒煙直立昇騰する“浅間火山”。
 10月2日、06時53分「ゴ——」音響に伴ない黒煙多量に昇り15分後白煙となる。13時53分やや多き黒煙昇り5分後白煙に化す“浅間火山”。
 10月5日、06時34分59秒、有感地震あり、尚06時22分50秒にも強震ありて、急激に「ドシン」「ガタ…」家屋動揺し、唐箕の口（蛇堀川に面する崖）崩落おびただし。“浅間火山”。
 10月5日の地震について（Omori, 1917）にある地震観測成果表では06時26分07秒、と06時51分29秒となっている。この食い違いの原因は不明。

注38、2月22日、18時12分、大笹地震、浅間山麓強震、 $M=6.2$, $36.5^{\circ}N$, $138.5^{\circ}E$, 嬭恋村で山崩れ、家屋全壊7、その他、大笹・大前などで半壊3、破損109、土蔵破損164、（理科年表、1997）。

注39、1916年における湯の平観測所の地震観測は、5月1日より11月1日まで実施されている。観測成果表は（Omori, 1917）に記載されている。

1916年浅間山活動の要約

5月12日、山頂火映、6月5日、地鳴り、地震か？、6月26日、火映、7月24日、白煙昇騰、8月4日、白煙多量、9月8日、黒煙昇騰、10月2日、黒煙昇騰、

87) 1917年（大正6年）の活動

5月3日、21時15分より時々赤色火事を見る如き噴煙昇る。23時40分「ドン」と突き上げる如き地震1回あり“浅間火山”。
 5月17日、15時53分黒煙天に押し夜は火事を望見する如し“浅間火山”。
 7月23日、夜より24日に亘り2日間、山頂火事を見る如く赤色を帯びる“浅間火山”。
 7月26日、やはり夜間山頂赤紅色に見え、09時24分2秒有感地震あり“浅間火山”。
 7月27、28、29、31日何れも夜間山頂赤紅色に見える“浅間火山”。

注40、上記記録は何れも湯の平観測所における観察と考えられる。1917年における浅間山の状況については、加藤（1917）および黒坂（1917）による報告がある。内容は主として火口内の状態についての詳細な観察説明で

ある。

1917年浅間山活動の要約

5月3日、火映、5月17日、黒煙昇騰、火映、7月23、24日、山頂火映、7月26日、山頂火映、7月27、28、29、31日、山頂火映、

88) 1918（大正7年）の活動

5月4日、06時50分轟々として鳴動と共に白煙噴出し東南に飛散せり（長野原警察分署報告）。
 6月25日、12時10分、浅間山は轟々として連続的に鳴動せるも暫時にて止みたりという（長野原警察分署報告）。

注41、上記記録は何れも、震予調記事（1918）“浅間山噴煙”として東洋学芸雑誌に記載されている。その他に同誌（1918）には、震災予防調査会記事として大森房吉による“浅間山噴火口の変遷”という記事が掲載されている。

1918年浅間山活動の要約

5月4日、白煙噴出、6月25日、鳴動、年間を通じて噴火は無かった。

89) 1919年（大正8年）の活動

3月3日、長野（08時45分）、屋代、中野、上田、須坂、小諸、松本、大町、中野等で異様な音響を聞く（原因不明）当日は快晴であった。震予調記事（1919）。
 3月14日、05時37分、爆発、山麓12、3里のところまでかなり大なる火山砂降り降灰は下総国銚子付近におよべり“浅間火山”。
 熊谷測候所、05時40分、地鳴り、06時12分より06時22分に至る約10分間焼け砂一坪に約一合（180ml）降る。
 前橋測候所、05時40分、鳴動噴煙、遠雷の如き音響、戸障子振動す。降灰無し。銚子測候所、07時40分頃より細微な降灰、08時05分止む。
 長野測候所管内として
 北佐久郡小諸町（警察分署報告）、3月13日午後10時15分、同25分、14日午前5時40分やや強震あり震動時間約3分間、午前5時40分、地震と同時に浅間山爆発す。
 北佐久郡長倉村（軽井沢分署報告）、14日午前5時半浅間山爆音を発し旧軽井沢に「コブシ」大より5厘銅貨大の石、雨の如く降下す、重量12、3匁（48gr位）

多少被害ある見込み。

同郡岩村田町(郡役所報告), 14日午前5時40分浅間山爆発す被害なき見込み。

他にも多くの地点に於ける観察報告がある。

注42, 上記の内容は震予調記事(1919)として, 東洋学芸雑誌に記載されている, 東京帝国大学地震学教室宛の長野測候所報告より抜粋した記事である。また同雑誌には詳しい現地調査報告が記載されている(黒坂, 1919)。

またこの噴火に関しては伊藤(1919)の報告がある。久し振りの噴火で調査がおこなわれたと考えられる。

5月3日, 12時04分より, 14分間黒煙6回噴出し北方に靡く“浅間火山”。この噴火については前橋測候所(1919)による調査結果があり, それらのうちの一部を抜粋する。

鳴動あり, 利根郡川湯村谷地, 安中町安中,

降灰あり, 利根郡川湯村谷地, 沼田町沼田, 片品村東小川, 吾妻郡岩島村, 原町, 中之条町(県庁への報告)。

7月23日, 朝, 噴煙前掛山の2倍の高さに昇騰す“浅間火山”。

8月27日(28日の間違い), 17時07分, 前橋において微弱なる浅間山の爆音を聞き, 雲を突破して噴煙の上昇せるを認めたり“浅間火山”。

注43, この記事は気象要覧(1919年8月)に記載された報告よりと考えられる。しかし同年8月30日付で前橋測候所が震災予防調査会に出した報告は次のようなものである。

浅間山噴煙(?)

8月30日付を以って前橋測候所より左の報告ありき。本月28日午後5時7分微弱なる浅間山の爆音を聞く当時同山付近層積雲ありしたため山況詳らかならず但し同雲を突破して噴煙の上昇せるを見る尚噴煙は日没頃迄継続せる模様なり。

(付記)

浅間火山観測所の報告によれば当日午後(夕方)より上層雲出現し且つ霧かかりしが浅間は甚だ静穏にして異状なかりしと云う。

1919年浅間山活動の要約

3月14日, 爆発, 降灰域東方に伸び銚子に達す, 5月3日, 黒煙噴出, 7月23日, 噴煙昇騰, 8月28日, 噴煙昇騰(?),

90) 1920年(大正9年)の活動

注44, 10月2日, 浅間火山観測所加藤常次郎氏は火口北方の孔縁最低部より火口内に降りて火口底を視察する。大変珍しい記録である(加藤, 1920)。

12月6日, 千葉県銚子測候所より千葉県下に降灰の報告あり(震予調記事, 1921a)。

12月10日, 12時10分16秒, 爆発, 雷鳴のような音がして黒煙が昇騰し約20分後止んだ。岩村田では10日11時50分, 黒煙の柱南東に崩れ, 軽井沢方面と思われる所に降灰が夕立のように降るのを見たという。然しながら軽井沢よりの通信には, 噴煙は盛んに天頂を覆ったが降灰は無かったという。前橋・高崎地方は戸障子震動し, 降灰があって屋上の残雪は黒変し, 婦人などは傘を用いて通行した“浅間火山”。

12月14日, 05時05分, 爆発, 黒煙天に押し爆発頻繁にて噴出する溶岩と落下する岩塊と衝突し, 電光閃閃沓掛(中軽井沢)方面に向かいたる山腹は紅烈々として壯観を呈す。小浅間の麓にある峰の茶屋(当時峰の茶屋は, 現在と道路を隔てた反対側にあった。東大地震研究所浅間火山観測所側)は落下焼石の為全焼す。軽井沢・沓掛・横川地方は地震6, 7分より15分間に亘る。降灰は沓掛にて白雪を緒く染め, 軽井沢にては多少の降下程度に止まりしも, 横川は積灰1分余に達す。当時小諸は恰も疾風の如く, また地震の如く不思議な音響起り, 戸障子を震動せしめ, 鳴動は30分くらい聞えたが降灰無し。前橋市にては5時32分より9分間降灰し, 北風に煽られ上空を蔽い降灰量一坪37匁5分(約140gr)を算す。この爆発前, 即ち11日払暁より2, 3回小爆発があって, 黒煙柱が天高く渦巻くが見えた。以下略“浅間火山”。

12月18日, 22時10分頃, 一大音響と共に爆発す。煙柱は風の加減にて南微東の方向に倒れる。志賀村付近, 湯呑み茶碗大の浮石降り屋内に逃げ込む。伍賀村辺, 灰とともに, 指頭大の降石あり, 岩村田, 小諸付近, 戸障子震動, 音響数十分に亘る。降下物は南南東に向って, 南佐久郡内に至る。追分付近, 間々2, 3寸大の硬石灰と混じり落下。沓掛, 軽井沢方面, カルメ焼きのごとき溶岩大なるもの2, 3尺より1, 2寸の大小共に降下, 雪を覆い田畑は白黒に彩る。製氷業者に被害“浅間火山”。

御殿場地方, 23時頃富士山麓地方夥しく降灰, 19日2時頃止む。1寸以上積もる。

沼津, 23時15分より19日3時20分まで降灰。神奈

川県足柄上郡、松田、関本、山北辺、箱根姥子、などに降灰した“浅間火山”。

12月19日、14時半頃、2分間に亘り地鳴りあり、黒煙は北上州方面へ横たわり、小諸辺より望見すれば、煙の先は高崎辺に達したるように見える。

16時40分頃、更に小銃発射の如き音とともに大噴煙あり。太陽既に西山に没する際の薄赤き光線が黒煙を射て一大美観を呈す“浅間火山”。

12月20日、19時半頃、音響なく濛々として火気を含める黒煙天に沖す“浅間火山”。

12月21日、08時10分頃、微音とともに大噴煙をなし、その流れは北上州方面に到り、1時間余にして止む。尚23時20分小諸方面より望見すると、黒煙上がり15分後止む“浅間火山”。

12月22日、17時35分、爆発、大爆音をなし、続いて19時にも大爆発ありて、火柱天に沖し全山火を以って包まれ、北上州方面に向って溶岩流出せし如く見え、前橋地方にては15時10分より鳴動、55分より約4分間降灰、坪量4匁8分(約18gr)を算す。

18時48分、爆発、大地震の如き音響と共に爆発し戸障子を震動す。噴煙は前橋・高崎の空を覆い22時に至るも止まず、市中は傘をさして通行せり。噴石は群馬県碓氷郡松井田、安中にも降下した。

19時頃、大爆発、全山火を以って包まれ強き鳴動あり、前掛山の森林1/3、沓掛保護区内の5町歩(約5ヘクタール)、軽井沢保護区の5町歩および吾妻牧場200町歩を焼き尽くした。長野県管内は被害少なく、軽井沢付近降灰なし。石尊山の中部の積雪は全く降灰に覆われる。草軽鉄道線路付近は降灰甚だしく、二度上駅付近に2銭銅貨大の小石降り、分去の茶屋付近に拳大の降石あり。近傍の山林原野数十町歩延焼損害多し“間火山”。

12月26日、この日は度々爆発した。“浅間火山”によって活動を記述するが、その他にも、多くの報告があるので注45、にまとめる。

- 1、10時36分20秒より爆発し、同48分まで鳴響「ゴ—」強し、噴煙は東南東に靡き倒れ、峰の茶屋付近には盃大の硬石無数落下する。
- 2、11時34分15秒、「ズドン」と大音響を発し、11時41分25秒まで継続する。第1回より弱い。
- 3、11時51分15秒、噴煙、
- 4、12時11分50秒、噴煙、
- 5、12時18分、噴煙、
- 6、12時21分、噴煙、
- 7、12時35分、噴煙、

- 8、13時11分50秒、噴煙、
- 9、13時53分30秒、噴煙、
- 10、14時11分20秒、噴煙、
- 11、14時53分20秒、噴煙、
- 12、16時51分20秒、噴煙、

以上のように多くの噴煙があった。しかし第1、第2の爆発に比せば極めて微弱なり群馬県長野原、松井田、安中地方に降灰し、前橋市付近には11時より降灰せり。

11時頃には神奈川県下松田、関本、山北辺で音響を聞き、11時45分頃には、箱根姥子でも戸障子振動、大砲のような音響を聞く。

注45、これらの噴火については、大森(1921a)、八木(1921)、および、震予調記事(1921b)などに詳しい報告がある。

とくに大森は、同論説中で1920年12月中の噴火は10日、14日、18日、22日、26日に生じた5回の爆発が主要な活動で、其の発生が4日の周期を示したと述べている。そして26日の噴火については、その周期から、噴火を予知し、あらかじめ用意をして観察したと記述している。このような周期的発生現象は火山活動でしばしば生ずる事であろう。

12月27日、16時15分より3分間および17時10分小爆発し、東北上州方面へ噴煙流れた“浅間火山”。

1920年浅間山活動の要約

- 12月6日、降灰(千葉県)、
 12月10日、爆発、群馬県降灰、
 12月14日、爆発、噴石により峰の茶屋全焼、軽井沢、前橋等に降灰、
 12月18日、爆発、噴煙は南微東に流れ山麓の南側に降石、降灰、富士山麓、箱根周辺にも降灰、
 12月19日、地鳴り、黒煙昇騰、
 12月20日、黒煙昇騰、
 12月21日、噴煙、
 12月22日、連続爆発3回、全山火に包まれ山火事発生、東方に噴煙流れ降灰多量。12月26日、度々爆発、音響は神奈川県でも聞かれる。
 12月27日、小爆発、

91) 1921年(大正10年)の活動

1月4日、日光付近では数回空振を感じ16日および17日にもまた爆声を聞いた(気象要覧、1921年1月)。

- 1月18日, 09時50分, 12時30分, 23時18分の3回爆発する。その性質は, 昨年12月中に発生したものより急激となり, 周囲6里内外に聞こえた音響は, 前回の如き緩やかなものではなく, 大砲を発射したような音響が聞こえ, 山麓小沼村においては, 家屋の震動が激甚のため, 人々は戸外に出た。軽井沢では, 10時40分頃より大豆, 小豆位の小石混じりの降灰があった。第2回後引き続き5回の爆発があったが, 最終のもの, 即ち同夜23時18分の爆発は, 震動最も甚だしく戸障子を数分振動させ, 破壊した所もあった。沓掛では降灰は無かったが地唸りを感じた。吾妻郡応桑村, 松井田, 安中, 高崎地方は降灰があった。臼田付近は戸障子の震動「ガタガタ」あったが長野原地方では, 黒煙多量で暗黒な空と変わった“浅間火山”。茨城, 千葉両県境界付近に於いては夕刻より降灰を見た(気象要覧, 1921年1月)。
- 1月22日, 19時55分, 小爆発ありて小諸にて微音響を聞く“浅間火山”。
- 1月24日, 06時45分, 大噴煙があつて岩村田では微かな空気波動を感じた。なお20時より15分間噴煙昇る“浅間火山”。
- 1月25日, 15時半, 16時にも大噴煙昇騰する“浅間火山”。
- 2月15日, 17時より18分間噴煙昇騰し, 嬬恋村辺は小砂地上1分の厚さに降下した“浅間火山”。
- 2月25日, 17時, 噴煙, 北上州に流れる。小諸で2分間地鳴りを聞く“浅間火山”。
- 2月27日, 下高井, 下水内両郡地方に雷鳴あり。28日降雨止み後中野町より北は木島平, 飯山町付近一帯の山野の雪は灰を蔽う“浅間火山”。
- 3月6日, 04時大噴煙, 前橋に降灰あり“浅間火山”。
- 3月25日, 23時50分, 自動車の走る如き音響聞こえ, 噴煙昇り20分後に北東に流れる“浅間火山”。
- 3月29日, 18時20分より5, 6分間に黒煙3回昇る“浅間火山”。
- 5月5日, 08時40分, 白煙噴出, 09時38分「ゴー」という鳴響約2分30秒続き止む。
10時23分多量の黒煙噴出鳴響約2分間聞く“浅間火山”。
- 5月16日, 08時35分50秒, 「ゴー——」という音響と共に噴煙, 前掛山辺まで小石飛散した。11時27分小噴煙「ゴー, ゴー」と2分間あった後白煙となる。小沼, 御代田付近降灰があり25分間に新聞紙一面を覆う。碓氷, 北甘楽, 利根, 南佐久の4郡に降灰あり。
22時6分11秒, 23時25分27秒, 17日16時38分3

秒および7時44分42秒に噴煙と共に微動あり“浅間火山”。

注46, 上記記事によれば16日に続き17日にも噴火があったとされている。この噴火に関しては, 他に幾つかの報告がある。震予調記事(1921c), に浅間山噴煙に関する件として次のような報告が記載されている。大正十年五月十六日浅間山噴煙に関し左記(下記)電報及び報告ありたり。

今八時五十分浅間山噴火猶鳴動す(大正十年五月十六日午後三時十五分長野測候発)五月十六日八時三十八分頃浅間山より非常に黒煙の直上するを認めたるも音響を聞かず煙頂は少し南方に傾斜しつつ上昇し次第に拡散して南方に流れ九時頃には南西方面に僅か残煙の流れるを認めるのみでその後異常なく降灰なし(大正十年五月十七日前橋測候所報告)

右(上記)噴煙に関し浅間山湯の平浅間火山観測所本会出張員より左(下記)の通り報告があった。

浅間山噴煙報告

五月十六日午前八時三十五分五六。五秒に浅間山ゴーたる轟鳴と共に爆発をして黒煙を多量に噴騰し, 小石を前掛山の頂上まで抛出するのを認む, 煙は降砂を伴ひつつ南方に靡き噴煙約二分間継続して止む。爆音は強からずドーンという性質のものではなく, ゴーゴーという継続的な轟鳴である, 微動計, 上下動計, 共にやや大きな振幅を記録した。殊に, 普通地震計の感震機は空気波動の為に振動し, 記録を始めた。微動計観測の結果は左の如し(微動計結果は省略)。この後噴煙は小量となったが更に(1)十時六分十一秒(2)十一時二十五分二十七秒(3)午後四時三十八分〇三秒(4)午後五時四十四分四十二秒の四回の噴煙微動を微動計で記録した。
内(2), (3)は黒煙多量に噴騰し, 徐々に南方に靡くのを目撃した(小諸警察署員の談によれば岩村田付近には降灰したという)。

大正十年五月十七日 浅間火山観測所にて

加藤常次郎

この報告によれば活動は16日の出来事である。また, 気象要覧(1921年5月)にも観測所報告をもとに, この噴火を記述している。また17日に活動したとの記述はない。したがって, “浅間火山”で17日の活動とした記述は明白な間違いで, 16日の噴火(時刻に注意)を17日としたものである。“浅間火山”を引用した活動史集は, とくに17日と引用しているので注意しなければいけない。

5月24日, 06時34分, 爆発, 時に降雪, 濃霧且北東の強風だったので音響を聞くことが出来なかった. 06時40分より2分間砂が降り, 小豆大のものを硝子戸に吹きつけ, 中の溝はそのために埋まる. 同9時10分頃降砂あり, 水槽の水白濁する「浅間山観測所」小県郡滋野, 弥津, 神川村には07時より10時頃迄の間に降灰があり1尺平方に1匁4分(約5.3gr)であった“浅間火山”.

5月25日, 01時24分9秒, 小爆発, 当時降雨中殊に濃霧で山頂は見えなかったが, 汽車が鉄橋を通過するような音響があり, 01時30分に至って止む. 煙は南東に靡き朝になって, 前掛山の白雪に噴石が落下して土砂を飛散させた跡を望見する“浅間火山”.

今朝1時24分浅間噴火すややつよし「大正10年5月25日午前8時10分浅間火山観測所発電」(震予調記事, 1921d).

6月4日, 大爆発, 同日快晴無比, 06時35分「ドーン」と一声の音響があり, 30秒後また一声聞こえたが, 噴煙は微かに昇るのを見るだけであったが, 午後になって噴煙前掛山を覆うかと思えば忽ち四散する等, 異常を感じていたが, 間もなく, 17時06分, 轟然とした一大音響をともなって大爆発をした. それより4, 5分間は轟々殷々の響きが継続して物凄い状態となったが, 10数分後には平穩に帰した. この音響のため, 観測所事務室全体の硝子障子は骨子ともに破壊したもの45, 台所入口の堅固な板戸は二つに折れ, 炉に吊してあった大鉄瓶(湯共重量2貫5百匁位)の自在鉤が伸び, 鉄瓶は炉中に落ちた. 抛出溶岩の到達距離の最も遠いのは南は塩野口登山路, 東は小浅間山の中腹迄であって, 大正2年(1913)6月17日午後10時48分の大爆発における最遠抛出岩が, 長坂に落下した距離より少し遠くに到達した. 9合目においては, 新たに落下した岩石のため, 大正8年(1919)3月14日の爆発により夥しく抛出した表面赭褐色を帯びたる岩石を全部埋没した. 天狗庭に落下した数の少なくないこと等より考察すると, 大正2年(1913)6月17日の爆発に匹敵し, また爆声はより大きかったようである. 前掛山と牙山との間に放出された溶岩中の大きなものは, 周囲8尺5寸(約2.55m), 丈2尺5寸(約75cm)位のもの, 周囲9尺(約2.7m)丈2尺6寸(約78cm)の火山弾様の形状をしたもの及び最大のものは, 長さ6尺(約1.8m)底3尺(約90cm)高3尺3寸(約1m)で, これの落下により穿かれた錐孔は長径21尺(約6.3m), 短径8尺(約2.4m)あった. また放出岩のため, 到る処に野火が生じたがその終点は剣ヶ峰南側, 火口

より2軒1/4までと, 石尊山頂上より僅か南下した点, 及び小浅間山におよんで南東方面は火口より約4軒弱に亘ったけれど, 南西より北西までの間は, 牙山頂上を境として湯の平北東端まで, 僅か1軒半に達しなかった. そして最も多かった地域は, 火口を基点として南57度西より, 南10度, 即ち剣ヶ峰より石尊山の東麓迄である. また空振の強かったのは, 小沼村清万より東長倉村杓掛に至る間である. 噴出物の多くは, 濃黒色の比重は大で玻璃質の多いもののみである. 岩村田では午後5時5分の爆発で戸障子数分間震動した. 杓掛, 御代田地方ではガラス障子の破壊したものがあつた. 前橋付近でも戸障子が振動し, 破壊したものがあつた. 降灰は8時になって止み, 坪97~8匁(364~367gr)に達して熱気を含んでいて大正元年12月頃の爆発に匹敵するという.“浅間火山”, 保田(1921a), 大森(1921b)には, この噴火の関連記事が記載されている.

6月21日, 17時40分, 爆発, 「ドシン」という音響と共に震動があつた. 4, 5秒後裏鳴りが聞こえ, 噴煙は前掛山の3倍の高さに昇る. 噴孔中央部黒煙柱の中央に, 垂直板状で淡紫色の縁には薄黄色の電光があり, 溶岩が山頂付近に放出, 落下する有様は, 恰も鴉の群れ飛ぶようであつた. 黒煙は北西に靡いて拡張した. 時間は午後5時45分を示した. 同48分, 黒煙は観測所の北より天頂を蓋い, 堅緻な2, 3耗大の溶岩約1分間降下したが, 観測所の屋根(27坪)に音を聞いたのは, 6, 7回庭前(21坪)に落下したものは6, 7個に過ぎなかった. そして礫の降下が止むと雷鳴が起こり1, 2分間継続した. 鳴響は午後6時頃まで「ゴーゴー」と聞こえ, 白煙に変わったのは6時20分である. その後やや強烈な黒煙は3回噴出した. 9合目は砂礫の噴出量が莫大で, 本月4日の爆発で放出した溶岩を悉く埋没し, 恰も砂原を行くように歩行が容易となった. 9合目より3分の2を登ると, 北西側の岩石の下より, 微かに噴出する噴気孔が多数あつて, 登るに従い摂氏32度, 56度, 76度と云うように温度が高くなった. この爆発により長野市には, 午後6時30分より降灰があり, 1坪当り7匁7分(29gr)であつた. 上田市では午後5時40分戸障子震動し, 屋代・須坂地方は6時過ぎ2, 30分より灰色の降灰があつた“浅間火山”. 大森(1921c)には, この噴火の関連記事がある. また, 黒坂(1921a)の観測報告もある.

6月29日, 08時31分3秒「ドンドー」黒煙の噴騰するを認めた. その高さ前掛山の1倍半となった“浅間火山”. この噴火については, 黒坂(1921b)による観測

報告がある。

8月12日, 18時30分, 黒煙昇騰す。爆音, 鳴響なし。
黒坂 (1921c).

9月13日, 14時41分遠雷の如き音響と共に爆発す。保
田 (1921b).

10月5日より数日間, しばしば黒煙噴出, 加藤 (1921).

1921年浅間山活動の要約

1月4日, 日光で爆音を聞く, 1月18日, 3回爆発, 山
麓降灰, 1月22日, 小爆発,

1月24日, 25日, 大噴煙昇騰,

2月15日, 噴煙昇騰, 2月25日, 噴煙, 2月27日, 降
灰,

3月6日, 噴煙, 前橋降灰, 3月25日, 29日, 噴煙昇
騰,

5月5日, 噴煙, 5月16日, 爆発, 降灰, 5月24日,
爆発, 降灰, 5月25日, 小爆発,

6月4日, 大爆発, 山麓で被害, 山火事発生, 6月21
日, 爆発, 6月29日, 小爆発,

8月12日, 黒煙昇騰,

9月13日, 小爆発,

10月5日~, 黒煙噴出,

92) 1922年(大正11年)の活動

1月14日, 12時11分音響と共に爆発する。大鳴動を感
じたのは3分間である。長野, 飯田でも音響を聞こえ,
戸障子が振動した。山麓の村落では稀に聞く爆音で戸
障子の破損が多く, 前橋市においては, 鳴動のため戸
外に飛び出したものもあった。戸障子は震動し小指大
の降石灰は12時35分より降下して屋上に積もった。
東京市に於いても硝子戸を動かしたと云う。この爆
発の音響は異様に強かったが, 噴出の灰砂は割合に
少なかった様である“浅間山”。

12時9分頃の爆発, 浅間山はすでに9日8時50分頃,
山麓, 小諸町地方を震動させた小局発地震があって,
少々活動勢力を鬱積した様子がうかがえたが, 14日
12時9分頃に至って大爆音とともに噴火した。時恰も
本州は殆ど曇天だったので, 其の空気振動及び爆音は
比較的明瞭に同山を中心として, 半径270乃至280軒
の遠方に到達した。今其の伝波区域区域を示すと東方
は同山より東北東, 福島県下, 梁川町, 中村より以南
の太平洋沿岸一帯に達し, 西方は信州, 上田平の盆地
の無声帯を距て越中富山湾地方より岐阜, 愛知県東春
日井郡に至り, 又再び, 能登, 加賀, 美濃及び名古屋,
桑名付近の第2無声地帯を隔てて若狭湾東部, 彦根,

伊勢湾沿岸の国府, 石薬師等一帯の地域, 即ち浅間山
を中心とした弧形状をつくる第2の伝達区域があり,
北方は長野県上高井郡の一部を限界とし, 南は長津
呂, 布良付近を除く太平洋沿岸一帯に到達した。そし
て是等の音波は, 概して明らかに空気振動を伴って多
くの地点で窓硝子, 障子等の振動を観測した。又此の
音響は, 信濃の西筑摩郡飛騨益田郡の一帯地方, 三河
の加茂付近, 福島県と栃木県の北方を包む地方, 銚子
より九十九里浜一帯地方等の各地方においては, 2回
若しくは3, 4回観測した。また降灰地域は浅間山を頂
点として正しく東方に水戸市に亘る狭長な地域であ
る。更に甲斐国上九一色付近でも微かな降灰が認めら
れた(気象要覧, 1922年1月)。

1月22日, 14時16分頃の爆発, この爆発は14日のもの
よりは勢力弱く, したがってその爆音伝波区域も小区
域に限られた。即ち長野県北佐久郡と南佐久郡の1部
および群馬県下を含む地域と浅間山より北東250km
を隔たる福島県伊達, 安達, 岩津の各郡の1部よりな
る小区域とのみである。降灰も単に群馬県白井町に微
かにあっただけである(気象要覧, 1922年1月)。

注47, 1月14日の活動についての気象要覧報告は, 原記
事が片仮名混じり文であるので, 現代文に直してあ
る。1月22日の噴火記事も同様の文章を現代文に直した
ものである。

2月5日, 19時15分, 小爆発し軽井沢においては戸障子が
5分間振動し, 同19時30分より, 米粒大の小石灰降
下すること15分間に及んだ“浅間火山”。

浅間山は, その後活動を継続し本月に至って5日19
時11分頃に一爆発をした。前橋測候所報告に依れば,
この際の噴煙は, 東南東に流れ同管内富岡町付近に少
量の降灰があった(気象要覧, 1922年2月)。

3月11日, 午後9時頃爆発したのを小諸より望見した
が, 前掛山より観測所(湯の平)一帯は灼熱した溶岩
に覆われたが, 約30分後には止んだ。抛出した当時の
形跡を実地調査した日誌によれば, 爆発の際落下した
溶岩の最遠到達距離は, 小諸登山路では長坂上, 並び
に釣鐘岩の下より少し浅間に近い一杯清水の辺まで
で, それより下方には小破片も認められない。次第に
登るに従って大きな溶岩があり, それらが地上に落下
して穿てる孔の大きさは, 観測所より南南西に1丁程
下った処に, 2間半位のものがあつた。観測所の直下
西方に長径約1間半の孔, 及びこの斜面約40間(約
72m)の所に約1間半の孔が2個連なり, 其の上に1

個あった。観測所の損害は北側屋根に約1尺5寸の孔を生じたが、溶岩は天井板に留まり入口屋根も破損した。北側の戸袋の引手の処は、積雪上を溶岩が飛んできたものか、高所が5寸平方位焦げていた。南西の柵、硝子戸が破損したが、観測所付近においては大きな溶岩は7個、火山館付近に於いては20個位の大円錐孔があった“浅間火山”。

21時10分浅間鳴動噴煙電光見ゆ（前橋測候所発）

11日午後9時20分浅間岳爆発、音響はあまり聞こえないのに障子少々振動、山上の黒煙は、例の様に時々火焰を見る、20分後砂（灰にあらず）が降る事凡そ25分（3月13日安中町小林喜三郎氏報）

午後9時5分浅間山爆発、当日は朝来珍しい晴天で至って平穩、浅間山の煙も殆ど絶えていたが、突然爆発当時風もなく黒煙濛々と太く凄い火柱火口より何百丈となく立ち昇り、稲光の如く非常に光を發し、其の勢は猛烈で約10分間継続した。そして次第に軽井沢方面に靡いて、大垂見辺より鼻田の坂にかけ30匁（約123gr）ばかりの石を降らし約15分で終わる「応桑村分去茶屋報告」

11日午後10時より翌12日午前間に、当地方に降灰があったが、鳴動もなくまた地震も無かった。当時の天候は快晴であって降灰の程度は丸屋根、黒板のような物体は稍灰色を呈した。別封標本添付及報告候也「3月12日銚子測候所」

11日午後9時7分海上郡高神村外川浦で俄然北西の方位に大砲のような音響を聞く。其の後約20秒程過ぎて再び同じような音響があり、前者は短く後者はやや長かった。降灰の時刻は明らかではないが翌朝になって降灰しているのを認めた「3月15日銚子測候所」。

以上は震予調記事（1922a）による。

3月16日、前橋測候所、07時10分及び08時39分の2回浅間山稍や多量に噴煙し08時48分多量に噴煙せり。煙は上昇し次第に東方に流れる、但し鳴響を聞かず、10時より降砂し同27分止み、10時45分より降灰12時20分止む、其の量1歩面（人間の1歩の距離の平方、と考えられる。したがって個人差がある）に2匁8分（10.5gr）の割合なり、管内鼻毛石地方にも降砂あり（気象要覧、1922年3月）。

3月17日、噴煙、前橋測候所—管内、渋川町では08時55分に噴煙天を覆うが降灰なし。

3月18日、爆発及び噴火、この日は数度の活動があった。

前橋測候所—11時前後から南西より西に亘って煙霧

發生、浅間山は見えなかったが、11時33分、同山爆発の小鳴動を聞く。噴煙は煙噴（？）を突破して直上し、同35分頃より次第に東北東に流れる、続いて同43分小鳴動を聞く、同47分噴煙の先端本所の北天に達し、それより流煙は南方に傾きつつ、進行し同50分頃より本所の頂天を通過し、55分頃より南方の半天に瀰漫（広がること）して、太陽面を覆い、12時05分より降砂し12時25分頃より朦朧とした天候となり、更に12時35分、浅間山の方向に噴煙らしきものの上昇するを認めた。12時40分頃より降灰があり、13時25分頃に至って止む。降砂灰の量1歩面に4匁8分（18gr）の割合なり。管内一般にも降灰、爆音があった。なかでも桐生市では降灰のため歩行することが出来ず、翌朝には、地上一面に灰色の砂を撒いたようだった（気象要覧、1922年3月）。

同日15時45分頃の爆発、前橋測候所—15時45分爆発、小鳴動をきく、同55分噴煙の先端本所の頂天を通過し、流煙は南天に広がっていった。16時35分頃より西南西の強風で降灰を伴ない、降る灰に満天朦朧として薄明となり硫黄の臭感があった。17時05分頃より朦朧の度合いを減じ17時20分に止む。降灰の量は1歩面に2匁8分（10.5gr）の割合である。管内一般に降灰があり、又宇都宮管内に於いても一般に多少の降灰、音響又は空振があり、足利郡御厨町地方では地上一面に銀世界を演ずる程度の降砂灰で一時は降雨の様であったとのことである。

白鳥森林測候所では22時降水が白濁したのを認める（気象要覧、1922年3月）。

3月19日、此の日も前日来の勢力を持続して数回の活動をおこなった。

前橋測候所—早朝浅間山の噴煙は、同山頂より東流して本所頂天を通過して（爆音が聞こえなかったので噴出及び通過時刻不明）東南東に亘り一条の黒煙がたなびいた（時間は5時25分である）。6時には続出する噴煙殆ど満天に広がったが6時20分頃より青空が多く認められるようになった。5時27分より砂を交えた灰が降ったが6時20分に止んだ。其のは量一歩面に22匁4（約84gr）の割合である。9時39分異様な音響が聞こえたが浅間山方面には異常なし。

11時45分頃、ふと浅間山方面を望むと山体は煙霧に包まれて見えなかったが、其れ以前に多量の噴煙をしたようで、山上より南東に黒煙が広がりつつ流れるのを認める。爆音は聞こえず煙は、漸次東南東に進み一時は太陽面を遮ったが、12時5分頃より日光が見えるようになった。12時19分より降砂があり、同53分に

止んだ。量は一步面に2匁4(9gr)の割合である。13時40分碓氷郡方面は暗黒で降灰しているように見えた、但し、爆音は聞こえなかったが、当時浅間山は尚見えなかった。16時観測の際、浅間山を遠望できるようになったが、山頂から白煙を少し吐き出しつつあって平常態に復したと認められる。管内にも音響、降灰があった。宇都宮管内なる足尾町、矢板町、日光(降灰す)においては音響あるいは空振等を感じた。

水戸管内、日立においては7時30分より約一時間半降灰があった(これは、或いは前日の爆発によるものかもしれない)、沼津管内小山町でも微震のように感じたという(気象要覧、1922年3月)。

4月25日、前橋測候所報告—25日17時23分、浅間山突然ゴロゴロと恰も雷鳴(稍や大)の如き音響(約30秒間続く)を伴って爆発、黒煙は多量だったが折柄、山上を被っていた層積雲中に突入し、之を突破して上昇し(見掛け上の高さ35度位)又層積雲中に隠れ、煙は山上より北北東に流れるようであったが層積雲の為、其の進行方向は不明となった。18時頃には、榛名山北西方より北東に亘り一面に煙に覆われたように観測された。其の後も尚、黒煙を継続噴出したせる模様であるが、26日6時には山頂より北西に白煙の流れるを見たのみで異常なし。降灰なし。管内の様子は

利根郡沼田町沼田、17時30分音響弱し、18時より降灰砂7分間継続す。

同 郡片品村東小川、18時30分音響弱し、18時30分より降灰(約20分程)

吾妻郡嬭恋村大前、17時25分音響強し、降灰なし、黒煙東方に向う。

同 郡長野原町大津、17時34分音響強し、風向により降灰砂なし、

同 郡草津町草津、17時32分音響強し、降灰なし、

同 郡澤田村四万、17時20分、雷鳴の如き強き音1回、戸障子振動、

同 郡中之条町伊勢町、17時25分、音響弱し、砂程の灰を約30分程降らす、群馬郡渋川町、17時15分音響強し、雲煙天を覆う、降灰なし、

碓氷郡安中町、17時27分音響強く地響きする、降灰なし、

北甘楽郡富岡町、17時、降灰なし、

多野郡藤岡町、17時26分音響やや大、降灰なし、

佐波郡伊勢崎町17時20分第1音(中位)21分第2音(弱)、降灰なし、

桐生市安楽土、17時25分大砲の如き音響やや強し、降灰なし、

北甘楽郡下仁田町、17時15分強し、地震の如く、地鳴りあり、降灰なし、

新田郡太田町、17時25分、音響弱し、降灰なし、浜松測候所管内

浜松、17時32分大なる物体の地上に落下したる如し1回。

見付、17時30分遠方に於ける大砲の音の如し1回あり。

気多、17時30分1回音あり。

徳山、17時30分1回音あり(気象要覧、1922年4月)。

注48、3月11日の活動以後の爆発については、殆どの活動史が取り上げていない。その原因としては“浅間火山”の267頁に、“大正11年4月より同15年までは、稀に黒煙の昇るを見しことあるも山は極めて静穏記すべきことなし(此項主として長野測候所の報告による時間は24時間制による)”とあり、この記述が影響を強く及ぼしているように考えられる。即ち上記の3月16日以後の気象要覧記事は採用されなかったことになる。おそらく“浅間火山”の著者は、この気象要覧記事の存在に気付かなかつたのではあるまいか。4月25日の活動については、和達・益田(1935)に記載されている。

また1922年中における浅間山火口の状況等の、浅間火山観測所職員による調査報告は、震予調記事(1922b)に詳しく掲載されている。

1922年浅間山活動の要約

1月14日、爆発、音響域広く東京でも空振を感じる、

1月22日、爆発、

2月5日、小爆発、

3月11日、爆発、観測所被害、噴石遠くに飛ぶ、3月

16日、噴煙、前橋降灰、3月17日、噴火、小規模、3

月18日、数回爆発及び噴火、前橋等の群馬県下に降

灰、3月19日、噴火、音響、降灰、

4月25日、爆発、群馬県下に降灰、

93) 1923年(大正12年)の活動

1923年の浅間山の活動に関する最初の記事は気象要覧(1923年2月)に記載されている浅間山麓の地震という記事である。

“浅間山麓の地震、此の山麓には本月に至り屢々地震発現せし事ありしも火山爆発に到らざりき。其の主なるものは17日16時3分頃及び18日3時半頃のものにして長野に於いて微震を感じり。火山活動に係するもの

如し “

とある。ついで同年7月の気象要覧の(焼岳の活動)という記事中に、“目下、浅間山は火口底非常に深く成り殆ど噴煙も休止し居れり”とある。浅間山の活動勢力が弱まり静穏状態を保っていると考えられる。

この年浅間火山に関する出来事で重要なことは山麓追分に観測所が出来た事である。梶間(1930)は次のように記載している。

“大正12年に冬季間の観測所として山麓に追分観測所が出来、山上の火山観測所と同様に微動計、簡単微動計等を据付け同年11月から観測を始めたが、大正14年以後は長野測候所単独で観測に当らなければならないことになったので、結局山麓追分の観測所が不断の浅間火山観測所となり、山上の火山観測所は臨時観測所として閉鎖の止むなきに至った。幸にして大正15年から中央気象台の援助により7月から9月までの3箇月間(大正15年は8、9月の2箇月)毎年山上の観測所で観測を行うことができたのである。”

1923年浅間山活動の要約

噴火活動は発現しなかった。むしろ火口底は深さを増し噴煙も休止状態となる(7月)。

94) 1924年(大正13年)の活動

9月7日、浅間山は7日より噴煙を始め小活動をおこなった。

前橋測候所調査報告—夏季浅間山は雲の為に遮られて見えなかったことが多かったが、当所より見ることが出来た限りでは、久しく白煙も黒煙も休止の状況にあったところ、9月7日7時に山頂より白煙が少し南方に靡くを見、その後10日10時20分頃、白煙が山頂より南東方に、山地に添って流れるを望見、同日14時2分より少し黒色を帯びた煙が南方に流れ、25分後其の量を減じて夕刻に至った。13日5時25分、黒煙を吐き山頂より東南東に進み、山頂を去ること僅かの距離に於いて黒色を失い、白煙状を呈して次第に瀰漫して、8時頃其の先端、遙かに東方に靡き山頂では少量の煙の噴出を継続していたが当地には降灰はなかった(気象要覧、1924年9月)。

10月29日、29日15時零分より約1分間に亘り前橋地方僅微の降灰があった。浅間山の小活動に依るものらしいと前橋測候所より報告があった(気象要覧、1924年10月)。

1924年浅間山活動の要約

9月7日、10日、噴煙、13日、黒色噴煙、

10月29日、前橋に降灰(微量)、

注49、1925年(大正14年)、1926年(大正15年、昭和元年)の兩年には、浅間山活動の記録が見当たらない。また火口内の状況等を示す記録は発見出来なかった。

95) 1927年(昭和2年)の活動

4月12日、08時12分、凄まじく黒煙噴騰“浅間火山”。

7月、不穏状態次第に加わり、その25日および31日夕刻黒煙噴騰、22日より30日まで山上観測所にて日々10数回の微動を観測する“浅間火山”。

8月、比較的静穏なりしも、30日頃より微動回数稍多し“浅間火山”。

9月、1日より18日迄日々数回の微動あり、連日噴煙旺盛、30日10時頃には火口内にて噴火していたので、山上に近づくことが出来なかった。この日午後3時頃鳴動あり、浅間館・清水館方面まで聞えた“浅間火山”。

注50、“浅間火山”の4月より9月までの活動状況については、10月12日の噴火についての長野測候所よりの報告(気象要覧、1927年10月)よりまとめたものと考えられる。

そこで関連する部分を気象要覧より正確に記載する。

“噴火前後の活動状態、浅間山は本年春以来時々噴煙し、殊に4月12日午前8時12分に凄まじい黒煙を吐いたのは既報の通りで7月1日山上(字高峯)観測所開所後は7月下旬に少々活動力を増して、その25日31日の夕刻にはこの観測所より前掛山を超えて噴煙昇騰するを見る。微動計は22日より30日まで日々10数回の微かなる地動を記象した。8月中は比較的静穏で30日には凡そ3回、各10数分間に亘る可なり噴煙があったようで緩慢な地動があった。9月1日より18日迄は地動の回数は、日に10回に達しなかったが日々明瞭なる微動を記録し、12日には6回、14日には5回あり、この後は連日噴煙が盛んで30日10時頃深瀬技手、山岸書記の登山した時には、盛んに噴火して火口付近は噴石、がしきりに落下して近寄ることが出来なかった。この日午後3時頃に約10分間鳴動があり、観測所は勿論中腹の浅間館、清水館へも聞えたと云う(追分支所ではこれは聞こえなかった)しかしながら、当時は山体密雲に包まれて噴煙の状況は詳らかに出来なかった。”

10月12日、09時20分の噴火、山頂付近と押出方面とに

溶岩を降らし、爆音は群馬県下にて所々に聴取せられ、降灰区域は軽井沢北部、長野原町の南部より遠くは足尾、小名浜に及ぶ。“浅間火山”（気象要覧、1927年10月）には詳細に各地点の状況が報告されている。12月7日、夜（時刻不明）小噴火爆音なきも、群馬県下に少量の降灰を見る“浅間火山”。12月29日朝、08時25分頃、前橋に微量の降灰あり“浅間火山”。

1927年浅間山活動の要約

4月12日、黒煙噴出、
7月、活動次第に勢力を増し25、31日黒煙噴出、
8月、比較的静穏、微動数増加、
9月、微動数増加、30日火口内活動、
10月12日、爆発、
12月7日、小噴火、12月29日、小噴火、

96) 1928年(昭和3年)の活動

2月23日、16時45分、爆発、噴火に伴う音響は1回「ドーン」と、大砲のような大音を発して噴火する。空振も感じた。噴石の落下は草津鉄道沿線の二度上付近で最も甚だしく大きなものは径6、7寸のものがあり、分去茶屋は焼失(浅間火山)した。この他草津鉄道沿線の雪囲いの焼失は約30間(54m)に達した。“浅間火山”，気象要覧(1928年2月)にはこの噴火の音響域、降灰の有無などの調査結果が詳細に記載されている。

この噴火に関する詳細な降灰状況報告が、2月分の追加として伊香保森林測候所よりなされている(気象要覧、1928年3月)。その報告の主要な部分を次ぎに記載する。

“昭和3年2月23日16時37分浅間山爆発し、伊香保に降灰あり。石粒の大なる事当所開所以来始めてである。此日朝来好晴で西乃北空にSK点在し、北越国境方面に少し乱雲を見るが、風は弱風の南西である。16時37分「ドオン」と言う爆音を西に聞き、家屋が動揺した。続いて「ゴーゴー」と地鳴りが約2分間続いた。16時56分、濃厚なる煙が、頭上に到来し、高さ目測地上1秆幅3秆位に亘るものようで、頭上を少し過ぎた南南東の空に雷鳴を1回低く聞き、電光は約3回弱いものを認める。縁辺赤黄色の灰、黒き煙、物凄く頭上を押し「火を降らす」かと騒いだ者もいたが、折柄の夕照に彩色されたものである。

16時58分、大形の石が降る長径20秆、重量3瓦に達するものがあり、堅い灰黒色の破片石で扁平形多角な

ものであり、大きなもの1坪に1、2粒の割合であり次第に小粒となった。17時00分、石粒径5秆以下となり、霰状に盛に降り、破片石のほか同質の焼けた軽石状を呈するものを混じた。17時05分、石粒1秆以下の径となり、灰を混じ煙は南西風に押され次第に赤城、双子山方面に流れ、南空は明るく煙次第に下降し付近の山頂を包む。

17時12分、煙は赤城山頂を包み、低下した煙は地上に達して、薄い亜硫酸瓦斯の臭気を発し、灰は室内にも舞込んだ。主となる煙の流れは伊香保北方利根の流れに沿い、2秆位の展望を得るのみである。灰は細かくて少し集塊状をしていて、地物に落ちて、2秆位に拡散するのを見た。微細粒で、水に融け泥状となる。17時37分、降灰止む。噴煙も弱いものようで、風は地表正南となり益々北方に押され、伊香保は降灰区域を脱したようである。地上4寸の積雪があったため、良く降灰状態を観察し得た。雪面灰黒色となったが全面を覆う程には至らなかった。当地方に於いては何等の被害なし。”(気象要覧、1928年3月)。

浅間山噴火による降灰状況の時間経過が極めて正確に描写されている報告である。

注51、“浅間火山”，“気・噴火誌”ではこの噴火の空振により山麓で被害があったと記載されているが、気象要覧に依れば、落下物による被害を除いて、そのようなことは報告されていない。

3月9日、噴煙多量、長日向に降灰少量、“爆発史集”，“気・噴火誌”。

3月13日夜より14日午前、鎌原分去茶屋でゴーゴー鳴動を聞く、降灰あり、“爆発史集”，“気・噴火誌”。

3月15日、長日向にて午前6時頃より音響(ドンドン)聞える、降灰あり(軽)、“爆発史集”，“気・噴火誌”。

3月16日、国境平、二度上に降灰あり、“爆発史集”，“気・噴火誌”。

3月16日～17日、鎌原分去茶屋付近で鳴動聞える、“爆発史集”，“気・噴火誌”。

3月23日、09時26分頃より暫くの間軽井沢で降灰、“爆発史集”，“気・噴火誌”。

6月20日、19時30分頃、(降雨が断続中だったので正確ではない)降灰あり、爆音を聞かず、降灰量1坪当たり5匁6分(21gr)の割合なり「前橋測候所」(気象要覧、1928年6月)，“浅間火山”。

7月1日以降、噴煙多量、“爆発史集”。

7月5日以降、噴煙減少する、鳴響強くなる“爆発史集”。

7月7日, 11時46分, 強く噴煙し火山観測所(山上)では大砲のような鳴響を聞いたが, 山麓地方では聞こえなかった. 茨城県下で微量の降灰を見る. 「浅間火山」, (気象要覧, 1928年7月).

浅間爆発 7日午前11時40分浅間山は一大音響と共に爆発し, 噴煙朦々と立ち上がり, たちまち小諸町の上空を蔽い, 煙は漸次風と共に軽井沢方面に流されたが噴煙状況は実に壮観で大正7年以来の大噴煙であった. 「東京日日, 昭和3年7月8日」(今村, 1931b).

注52, この7月7日の噴火, 続いて7月12日, 更に7月24日の活動について, 公的機関による報告と, いわゆる当時におけるニュースメディア情報の差の程度を理解することが出来よう. とくに注意したいのは, 7月24日の活動の新聞記事に該当する観測関係機関の報告は見当たらない点である.

7月12日, 09時11分の大噴煙, 浅間火山観測所よりの報告によれば, 此日の大噴煙は鳴響を伴ない, 空気振動あって降灰はなし「長野測候所」(気象要覧, 1928年7月).

浅間山また大噴火 浅間観測所の報告によれば12日午前9時11分30秒大爆発し, 小諸地方は戸障子となり時計止まり噴煙は小諸方面になびいた, 「報知, 昭和3年7月13日」(今村, 1931b).

7月24日, 25日, 浅間山爆発 浅間山は24日正午及び25日午前9時頃の2回にわたって大した程度でもないが爆発した. 浅間山麓の観測所から長野測候所に達した報告によると「前記2回の爆発あり降灰は山麓の観測所付近まで飛んで居るから登山者は危険を予想されるので見合わせたらよかろう」と「報知, 昭和3年7月26日」(今村, 1931b).

1928年浅間山活動の要約

2月23日, 爆発, 空振あり, 噴石は東方に遠く飛び, 二度上付近で被害, 分去茶屋焼失, 群馬県下に降灰.

3月9日, 13~14日, 15日, 16~17日, 23日, 小噴火が屢々発生, 鳴動, 降灰あり,

6月20日, 噴火, 降灰あり(前橋測候所),

7月1日~5日, 噴煙多量, 7月7日, 噴火, 噴煙多量, 降灰(茨城県), 7月12日, 14日, 小噴火,

97) 1929年(昭和4年)の活動

9月18日, 01時18分(08分が正しい)の大噴火, 近來にない大噴火であって火山観測所付近迄, 径2尺前後の溶岩が多数落下した. 山麓地方では空気振動が強

く, 窓ガラス, 戸障子の破損したもの多い. 音響及び降灰は, 東方群馬, 千葉, 埼玉の諸県に達し, 音響の外聴域は新潟, 愛知の諸県に存在した「浅間火山」.

長野測候所報告, 噴火の時刻は浅間山火山観測所の観測によると午前1時8分であって, 先ず地震に始まり, 数秒の後, 強烈な空気振動があり, 後数分間は震動と音響と岩石飛散の物凄い鳴音があった. また火孔方面は火光の為に物凄かった. 噴出物は, 岩石を主として火孔の南西方に噴出し, 火孔より南西方3秆に, 直径1尺乃至2尺位の岩石落下により生じた大きな摺鉢形の穴を地面に穿ったもの諸所にあった. 観測所付近(火口より2秆7)には其の数甚々多く, 更に湯ノ平に至れば直径2米に近い大石の放出があり, 此れ等の岩石は, 何れも高温で, 土中に埋もれて居るものより微かに煙を揚げるものが多い. 噴出砂礫の区域は, 南方はおよそ1.5秆, 西方は1秆以内, 東方は0.2秆に及んだようである. 浅間山以外の降石降灰区域は, 降石の最も多量の部分は正東の浅間越, 峯の茶屋付近に, 拳大の石の落下が多く, 樹皮樹葉の打ち落とされたものが夥しい数に達した. 峯の茶屋付近では次第にその数を減じて, 千ヶ滝付近は殆ど圏外にあると認められる. 草津鉄道長日向停車場付近には径5糎の礫がやや多く, 南方は小瀬温泉に大きなものは径3糎のものを混えた指頭大以下米粒位のもの1平方メートルにつき90瓦降下した. 又南方1秆余り三笠ホテル付近は降灰降石の様態なし. 旧碓氷峠の熊野神社では, 約5分間砂石が降下したと云う, (芥子粒大の粒, 火山灰1平米に就き凡そ400瓦, まれに指頭大又は径3糎大のものある). 栗平においては全く降石を認めず, 軽井沢町の北部山中での降灰が最も多かつた所でも, 地面を全く覆うような程度の所はない. 被害は火山観測所で窓ガラスの破損10数枚, 其の他戸障子の小破損があるのに止まり, 旅舎火山館には拳大の降石2個屋根を打ち貫き, 中1個は火を發したが消し止めた. 群馬県の部分, 黒斑山北側で山林火災を起こしたが, 損害は大したものではない. 浅間山周囲の町村に於いて, 空気振動の為窓ガラス戸障子の破損したもの少なくはないが, 人畜死傷は全くなかった模様である.

前橋測候所報告概要 浅間爆発に伴う降砂降灰は気流の関係上, 群馬県に尤も多し. 噴煙は火孔より, 正東よりも寧ろ稍々南に偏し, 略東微南の方向に向かい, 其の中心は碓氷郡細野村, 安中町の北方群馬郡長野村, 高崎市の上空を過ぎ, 前橋の南方を通り, 伊勢崎町の上空に至り, 尚太田町, 館林町, 海老瀬村の上空を通過したようである. 降灰降砂も略此の道筋の左

右に末広形を呈し、降灰区域の北端は利根郡桃野村、南方は多野郡藤岡町、佐波郡玉村町以南に迄及び、東は遠く茨城県下に迄及んだという。本県下の降灰降砂区域の面積は、約2,841平方秆以上に達した。降下物は堅質の緻密な暗緑色の岩石の破片で、比重2.44強である。前橋では午前1時50分より約1時間30分に亘り1坪に89匁6分(336gr)の降砂があった。大きさは芥子粒大である(気象要覧, 1929年9月)。

注53, この9月18日の噴火については、多くの調査報告がなされている。活動説明に引用したもの以外に(八木・中条, 1929, 1930a), 梶間(1930), 石川(1930), 堤・市川(1930), 市川(1930), 長野測候所追分支所(1930)などの報告書がある。また保田(1929)にも関連記事がある。

10月18日, 10時30分, 噴火, “気・噴火誌”。

又も浅間山大噴煙 浅間山は18日午前10時半頃、またも大噴煙をなし朦々たる煙は西北風に吹き乱されて太陽の光線をさえぎり壯観を呈した。9月18日以来の大噴煙で群馬県方面からは真っ黒になって見えたから群馬県には相当の灰が降ったらしい。なお軽井沢方面には相当に降灰があった。「中外, 4, 10, 19,」(今村, 1931b)。

11月15日, 11時半頃の浅間山噴煙「長野測候所」11時33分浅間山の噴煙多量長野よりも望見し得、其一部は吾妻山の上を這い登り同37分同山を通過後は山より殆ど煙眺められず、山麓峯の茶屋に行き取調べたが煙は同屋上も通過し極少量の降灰を齎したという。また噴煙に際して屋外では短時間ゴーゴーと鳴響を聞いた(気象要覧, 1929年11月)。

1929年浅間山活動の要約

9月18日, 爆発, 噴出物は黒斑山内側, 石尊山山麓, 東前掛, 押し出し上部まで飛ぶ。空振により山麓で被害, 降灰域は群馬, 栃木, 埼玉, 茨城, 千葉の一部などを含め太平洋に達す, 音響外聴域出現,

10月18日, 噴火, 噴煙大,

11月15日, 噴煙, 降灰(東方, 微量)。

98) 1930年(昭和5年)の活動

4月17日, 東方峰の茶屋で7時10分頃「ゴーゴー」と遠雷のような音響を聞き時々強く連続して翌日に及ぶ。追分では少量の白煙を認めたのみ(気象要覧, 1930年4月)。

4月18日, 追分で08時40分頃より「ゴーゴー」と鳴響を聞き断続夜に入る。峯の茶屋では前日来の鳴響続き, 午前中には白煙少量, 15時白色煙多量噴出するを見, 16時頃2~3分間に亘り極微量の降灰, 音響は18時15分頃一時止み以後断続夜半に及ぶ(気象要覧, 1930年4月)。

4月19日, 追分で10時頃鳴響, 沓掛峰の茶屋では06時頃灰白色の噴煙多量を見, 09時40分頃鳴響を聞き其の後鳴響なし(気象要覧, 1930年4月)。

6月11日, 08時10分頃, 爆発, 追分支所, 08時11分ドーン(午砲を近くで聞いた感じより少々大)と猛烈な音と共に戸障子カタカタと鳴り響き, 急激な空振を感じ約1分間継続する, 噴出物の内降石の限界は, 北西より西を経て南西までの方向は大体黒斑山, 牙山, 剣ヶ峰の線を限りとする。噴火の強さは, 山麓地方でも窓ガラスの破損もなく, 噴出物の量も昨年9月18日の噴火に比べて1/3に足らず飛散した距離もまた小さい, 降灰した場所, 前橋測候所管内, 利根郡沼田, 宇都宮測候所管内, 日光, 塩谷郡玉生村上寺島, 西方に外聴域出現, 鳴響, 降灰域図示あり。(気象要覧, 1930年6月), (八木・中条, 1930b)。

7月3日, 午後鳴動, 21時30分頃から火口が赤く見えた, “気・噴火誌”。

7月4日, 噴火, 音響あり, “気・噴火誌”。

7月16日, 噴火, 10時頃, 噴煙多量に出る, 煙は南東方に流れて千ヶ滝より沓掛軽井沢町辺は鳴響聞こえ, 11時頃より約1時間些少の降灰があったが, 却って火口に近い(火口より東方4秆を隔たる)峰の茶屋では当時鳴響も降灰も無かった, 「長野測候所報告」。

注54, 7月16日噴火の“爆発史集”, “気・噴火誌”記事には, 6月64回の局発地震を峰の茶屋で感じたとしているが, これは, 気象要覧の読み違い, 写し間違いであって, 地震を観測, 記録したのは追分である(気象要覧, 1930年7月)。

8月, この月に入って火山性地震発生増加を観測(追分), (気象要覧, 1930年8月)。

8月8日, 22時23分, 爆発, 山麓地方, 群馬県下, 埼玉, 千葉県及び東京府下に降灰する。

長野測候所報告 この噴火前追分では, 7月29日夕刻より8月2日夜まで降雨しその量202耗であった。この雨が止んだ後浅間山は火山性微動を増発, 即ち追分観測所微動計で, 噴火当日の8日まで123回の火山性地震を記録した。

熊谷測候所報告 9日02時頃降灰あり。
 前橋測候所報告 管内五料観測所に9日未明降灰、下仁田では9日3時降灰あり、
 銚子測候所では、松戸、千葉郡都村、佐倉、成東、東金に降灰あり、
 東京府下滝野川、降灰、(気象要覧、1930年8月)。
 8月10日、03時10分頃より04時まで噴煙あり、山腹の火山館に滞在した館林巡査によれば、この日払暁火口内に異常な鳴動が聞え、噴煙したが降灰は無かった。
 08時45分、爆発、追分支所の観測によると08時45分より09時20分頃まで噴煙多くドンドンと砲声を聞くような鳴響があった。音は9時に止み噴煙は東南東に靡く。峰の茶屋内堀氏は花火のようにドーンと17~8回音響を聞き、降灰は約30分続く。降灰は峰の茶屋を中心として浅間越以北である。前橋測候所、10日12時11分より14時14分に及ぶ2時間14分間降灰、(気象要覧、1930年8月)。
 8月11日、14時29分、噴火、大音響と共に爆発し黒煙天に押し壯観を極めた。軽井沢、西長倉方面、群馬方面に降灰ありたり「昭和5年8月12日、萬」(地震、1930年9月)。
 8月12日、15時30分頃、噴煙高く昇騰し長野市よりも望見された(気象要覧、1930年8月)。
 8月14日、14時10分、黒煙噴出軽井沢方面に流れる「岩村田町報告」、
 16時20分、噴煙多し「岩村田町報告」(気象要覧、1930年8月)。
 8月18日、14時頃より15時、黒煙杳掛方面に靡き小諸登山道一帯に降灰ありたる由なり(気象要覧、1930年8月)。
 18日午後3時20分頃、突然大爆発をなし黒煙濛々として山麓小諸町付近一帯に亘って降灰あり、一大壯観を呈した。通行人は目や口をあけて居られぬ位であった。「昭和5年8月19日、国民」(地震、1930年9月)。
 8月20日、08時40分、爆発、長野測候所報告 追分支所における観測によれば最初一大爆音と共に相当強き空気振動並びに微震を感じた。爆音は3尺玉の煙火の破裂に似ていた。直ちに浅間山を見ると物凄い黒煙天に押し「ゴーゴー」という鳴動と共に盛んに噴煙していた。鳴動は8日のものより遙かに小さく時間も短かった。噴火の直前08時頃朝来の雲が晴れたので望見した際は噴煙は殆ど無い状態であった。
 降灰は群馬県下及び栃木県足尾尾地方にあり、爆発の音響は山麓地方のほか、新潟県中頸城郡、東頸城郡、中魚沼郡に達した(気象要覧、1930年8月)。

20日午前8時10分頃爆発。山麓の五可、小沼、軽井沢、西長倉、御代田等にては震動あり、戸障子の外れたる所、時計の止まった所もあり、人々戸外に飛び出したものもあった。
 爆発後約30分を経て高崎市を中心に西上州一帯に降灰があった。爆発当時噴火口付近にあった男女6名は溶岩の為に撃たれて即死を遂げた。「昭和5年8月21日、東京日々、時事」(地震、1930年9月)。
 また浅間山大噴火(登山の男女6名即死。何れも前掛山で斃る)20日午前8時16分頃浅間山がまたまた大噴火した。小諸署では直ちに登山者の被害につき調査中であったが小諸口から登山した農家のものらしい女2人と鉄道従業員らしい男4人の一行6名が爆発30分前に火山館前を通過したことを確かめ人夫を派して調査の結果前記6名のうち、3名は噴火口の一部前掛山の頂上で、他の3名は前掛山の中腹で即死しているのを発見したがまだ何処のものともわからない。また軽井沢、杳掛口よりの登山者は峰の茶屋まで引き返したところで爆発に会ったので被害はないらしい。なお山麓六里ヶ原地方には灰がふり農作物には相当の被害あるもようである。「東京日々、昭和5年8月21日」(今村、1931b)。
 8月24日、午前中盛んに黒煙を吐き、杳掛口峯の茶屋方面に降灰があった。同夜小県郡長村に多量の降灰があり桑の葉に被害が出た(気象要覧、1930年9月)。
 10時17分大噴煙せり、10時50分止み11時頃より普通“爆発史集”。
 9月4日、13時30分頃及び15時頃小噴火あり黒煙高く噴騰(気象要覧、1930年9月)。4日午後01時45分大音響と共に爆発し黒煙天に押し、山麓の軽井沢及び上州一帯に相当降灰があった。「昭和5年9月5日、国民」(地震、1930年10月)。
 9月5日、05時01分、爆発、噴火の音響可なり強烈、北佐久郡の全部、南佐久郡の大半及び小県郡の北部に達す。地動の範囲は北佐久郡一円、空振はそれよりやや広範囲、降灰、軽井沢町の南部杳掛、古宿、塩沢、雨宮新田等に多く降下し坪当たり1升程度、範囲、千ヶ滝、小瀬、長日向、小量、峠町、長野原、二度上には降らず、西は借宿、追分には降らず、その西方小沼村字清万、御代田村の一部、三井村にも小量の降灰、灰の色は灰黒色(気象要覧、1930年9月)。
 5日午前5時爆発、噴煙南東に靡き軽井沢、杳掛方面、西上州一帯に大降灰あり、軽井沢警察署の調査によると降灰量坪当たり約8合あり農作物に相当の被害があった。降灰は遠く東京、横浜、千葉方面に迄及んだ。東

京では午前10時半頃より降り始め約1時間ばかり続いた。「昭和5年9月6日, 東京朝日, 国民」(地震, 1930年10号)。

同日, 14時50分雷鳴のような音と共に噴煙する。15時19分より28分まで極僅少の降灰があった。尚22時より6日6時迄の間に噴煙あり。当地(追分)に少量の降灰があった(気象要覧, 1930年9月)。

9月9日, 08時より同30分頃まで降灰微量。「伊香保森林測候所」,

9月10日, 06時より同40分頃まで降灰微量。「伊香保森林測候所」(気象要覧, 1930年9月)。

9月12日, 09時31分, 爆発, 噴煙と共に礫及び岩塊を噴出, 群馬, 栃木両県下に降灰, 長野測候所追分支所報告 浅間山は去る5日の噴火後, 極めて静穏となりことに7日より12日の噴火直前までの数日間は殆ど煙の無い状態で却って薄気味悪い感じがあったが, 10日の21時頃より浅間山の無感覚地震が陸続として出現, 又々2, 3日中に噴火あるを思わせた。11日夜には今晚噴火するのではないかと碌々眠れなかったが, その夜は無事に明けて12日の09時32分に至って, 俄然重い物体が高所より地上に落下したような「ドシン」という音と共に微震を伴ない噴火した。直ちに屋外に出て浅間山を見るに山上雲で明瞭ではなかったが「ゴーゴー」という鳴動と共に噴煙物凄く直上して昇騰しているのを認めた。屋外に出た時は既に浅間山の南西麓所々に山火事が発生しているのが見えた。火事は剣ヶ峯の南側のものと剣ヶ峯, 石尊山の中間のものが最も大きなものであった。……11時40分に再び大噴煙を噴出した。その時間は極く短かったが微かな鳴動があった。その他詳細な報告あり。

前橋測候所管内の降灰, 利根郡東小川, 11時33分より12時47分まで降灰, 量2耗作物(野菜)害あり, 利根郡谷地, 11時30分より約2時間に亘り降灰あり坪当たり約2畝(デシリットル)位, 晩秋蚕に被害ある見込みなり, 利根郡沼田, 10時55分より12時10分迄降灰あり沼田一帯に亘り量多し, 宇都宮測候所報告, 日光中宮祠に降灰, 12時5分より始まり同30分止む, この間新聞紙1枚の上に降下した量は1.5瓦, 白色で直径平均0.25耗微かに硫性を帯びる(気象要覧, 1930年9月)。

12日未明, 午前9時25分及び同11時30分の3回に亘り強き爆発あり, 山麓一帯に激しき震動を与え信州北佐久郡小沼村にては小学校の硝子戸が破壊され, 時計が止まった程であった。降灰は軽井沢方面に甚だしく相当大粒のもの落下し坪当たり約3升あった。「昭

和5年9月13日, 東京日々, 報知」(地震, 1930年10号)。

9月22日, 午後1時頃大音響と共に爆発。雨天のため噴煙の様子は判然せず。「昭和5年9月23日, 東京日々」(地震, 1930年10号)。

10月17日, 20時34分, 小噴火, 鳴動を伴ない千ヶ滝付近に降灰少量, 微動, 13日6時~14日6時迄6回, 17日17時より18日5時迄5回, (気象要覧, 1930年10月)。

1930年浅間山活動の要約

4月, 17日, 18日, 19日, 鳴響, 噴煙。

6月11日, 爆発, 外聴域出現, 沼田, 日光等に降灰, 山麓被害なし。

7月, 3日, 4日, 16日, 小噴火, 降灰。

8月8日, 爆発, 前橋等に降灰あり, 11日, 12日, 14日, 噴煙活動, 18日, 噴煙, 小諸に降灰, 20日, 爆発, この噴火により登山者6名死亡, 音響は山麓の他新潟県まで達す, 降灰は群馬, 埼玉, 千葉, 東京に及ぶ, 24日, 噴煙, 山麓降灰。

9月4日, 小噴火, 5日, 爆発, 音響強烈, 降灰量が多く遠く東京全市, 横浜, 千葉にも降る。

9日, 10日, 噴煙, 降灰(微), 12日, 爆発, 山火事発生, 群馬, 栃木両県下に降灰, 22日, 噴煙。

10月17日, 小噴火, 千ヶ滝付近に降灰(微)。

99) 1931年(昭和6年)の活動

3月31日, 08時20分, 長野測候所追分支所及び峰の茶屋よりの報告に依れば, 31日08時20分浅間山噴煙多量に出る。黒煙は北に流れ鬼押しし付近に降灰があった様子, 鳴響は無かったが地震計には微かに微動を記録した(気象要覧, 1931年3月)。

浅間山の活動 昨年の爆発以来沈黙を守っていた浅間山は31日午前7時50分頃突如大音響と共に薄曇の春空に黒煙を押し壯観を呈したが更に8時15分再び黒煙を吹き上げ折柄の西北の風にあふられて黒煙は山麓西長倉, 追分地方から北群馬方面に靡き多少の降灰を見たが被害はない模様である。「昭和6年3月31日, 東京日々」(地震, 1931年4号)。

6月9日, 浅間山の噴煙, 昨秋以来鳴りをしづめていた浅間山は9日午後2時10分(東京地方の地震と同時に)激しい水平動に伴なって音もなく噴煙高く天に沖し, 軽井沢北上州方面の天空をおおい約30分間つづいた。降灰なく被害なかったが強震のため時計は2時10分のところを指して止まった。登山者はない見込

- み。「昭和6年6月10日, 東京朝日, 大阪毎日」(地震, 1931年7号).
- 6月22日, 14時前後から噴煙多量, 南西に靡いたが同16時には南に同17時20分頃には南南東に靡き, 20時30分頃から約2時間追分地方に微量の降灰があった。但し地震, 鳴動等は少しもなかった。「追分支所」(気象要覧, 1931年6月).
- 浅間山の爆発, 22日午後3時半頃浅間山は俄然爆発して黒煙天に押し煙柱は20分程で東北風に追われて北軽井沢方面に折れた。小諸地方は午後4時頃降灰, 通行人は目をあけておられぬ程で屋根瓦は白くなった。北軽井沢方面は午後4時頃降灰甚だしく, 農作物の被害甚大の見込みである。「昭和6年6月23日, 都」(地震, 1931年7号).
- 6月23日, 09時50分頃噴煙あり。少量の降灰があった。「峰の茶屋」(気象要覧, 1931年6月).
- 6月25日, 浅間山の爆発 小諸通信によれば浅間山は25日午後7時頃大音響と共に爆発一, 上州方面に降灰ある模様である。「昭和6年6月26日, 読売」(地震, 1931年7号).
- 6月26日, 夜少量の降灰があった。「峰の茶屋」(気象要覧, 1931年6月).
- 6月28日, 朝少量の降灰が地物に付着しているのを認めた。「峰の茶屋」(気象要覧, 1931年6月).
- 6月29日, 09時25分, ドードーと自動車の通る様な音響2, 3分間聞こえ正午頃黒煙多量噴出し, 降灰は主として押し出し方面にあった様である。当地にも少量の降灰があった。「峰の茶屋」尚追分では地震, 鳴動等はなかった「以上長野測候所報告による」(気象要覧, 1931年6月).
- 11時30分, 噴煙多量, 山麓地方に降灰ありたらんと思われる“爆発史集”。
- 7月8日, 浅間山噴煙 前橋測候所報告「8日17時43分から35分間降灰があり, 其の量は坪当たり0.5匁であった」これは恐らく浅間山噴火による降灰と思われる(気象要覧, 1931年7月).
- 7月28日, 08時42分, 09時14分, 10時10分, 10時25分より小噴煙, 多少の降灰ありしと思われる“爆発史集”。
- 8月1日, 08時05分頃より約半時間噴煙多量, 地震鳴動なし。「追分支所」(気象要覧, 1931年8月).
- 8月4日, 08時より09時20分迄噴煙多量, 地震鳴動なし「追分支所」(気象要覧, 1931年8月).
- 8月5日, 15時55分より約20分間大噴煙あり, 東に流れてゴロゴロと鳴動聞こえ地震計には微動を記象せり。「追分支所」(気象要覧, 1931年8月).
- 〔小諸〕浅間山は5日午後3時40分突如無音にて爆発, 噴煙は高く天に沖して, 山麓一带に降灰甚だしく, 山は引き続き不穩状態を示している。「昭和6年8月7日, 国民」(地震, 1931年9号).
- 8月6日, 12時49分より約6分間噴煙多量東に流れ鳴動はなきも地震計には微動を記象せり。「追分支所」, 13時55分より約1時間大噴煙あり, 東に流れ微動を記象す。「追分支所」, 19時05分微かな空気振動と微震を伴ない噴火す, 最大振幅40 μ に達する。「追分支所」, 終日鳴動あり, 当地方少量降灰あるも主に田代, 押し出し方面に降る。「峰の茶屋」(気象要覧, 1931年8月).
- 〔岩村田〕浅間山は6日午後1時50分又爆発盛んに噴煙しつつあり, 煙は上州方面に靡きつつあり。「昭和6年8月7日, 萬」〔長野〕浅間山は6日午後7時5分地動及び鳴動と共に噴火があり多少灰を降らしつつあるが, 長野測候所では“浅間山はここ数日来黒煙を噴出し少量の灰を降らして居るが, 鳴動と地動を伴なう噴火は昨今珍しいことである”と云うて居る(地震, 1931年9号).
- 8月7日, 13時40分より約15分間15時12分より同30分迄噴煙多量東に流れ何れも微動を記象せり。「追分支所」(気象要覧, 1931年8月).
- 〔小諸〕6日午後8時頃と7日午前3時頃の2回, 浅間山は大音響と共に爆発し, 噴煙天を衝き, 折柄暁の夏の空に映じていいようなき壯観を呈した。山上派出所から小諸署に達した報告では, 頂上付近は3畳敷位の溶岩落下し, 火山館付近も小石が降った。5日以来噴煙が続くので登山は警戒していた為被害はなかった。今年の爆発は鳴動なく噴煙と降灰が特徴であったが, 爆音を伴った爆発は之が最初で, 7日朝の爆発は昨年7月6人の生命を奪ったときとやや同じ大きさのものである。「昭和6年8月7-8日, 時事, 東京朝日」(地震, 1931年9号).
- 8月8日, 04時半頃及び09時55分より約20分間噴煙あり, 東北東に流れ地震鳴動なし(気象要覧, 1931年8月).
- 8月9日, 04時40分より半時間余噴煙東に流る。「追分支所」(気象要覧, 1931年8月).
- 8月10日, 10時06分より噴煙多量東に流れ13時10分に至りて止む「追分支所」, 当日火山館付近に少量の降灰あり。「県保安課」(気象要覧, 1931年8月).
- 〔長野〕浅間山は10日午前10時03分大音響を起こし黒煙天に押し, 軽井沢方面に降灰した。「昭和6年8月

- 11日, 時事」(地震, 1931年9号).
- 8月11日, 15時05分より15分間黒煙多量噴出し南東に流れ軽井沢地方に降灰ありたりと「追分支所」(気象要覧, 1931年8月).
- 〔長野〕浅間山は11日午前10時頃から噴煙を増し, 午後3時と4時の2回に亘り, 大鳴動と共に爆発し, 黒煙は上州側に靡き, 同方面に降灰ある模様である。「昭和6年8月12日, 時事」(地震, 1931年9号).
- 8月12日, 正午より約半時間黒煙多量「追分支所」(気象要覧, 1931年8月).
- 8月14日, 09時09分より約10分間及び11時30分より23時頃迄噴煙多量, 鳴響は連続23時頃迄聞こえ, 14時35分より23時迄降灰あり. 多数の微動を記録す。「追分支所」この日追分にて記録せし微動回数は490回に達し1日間に斯く多数の微動を記録せるは, この地観測開始以来未曾有の事に属す. 峰の茶屋にてはこの日終日鳴動を聞き白色の灰多量降り, 浅間館より上は15日未明迄に降灰相当積もる(気象要覧, 1931年8月).
- 〔長野測候所発表〕14日午後3時40分追分支所発電によれば浅間山は本日午前11時30分噴火を始め時々鳴動あり微動多数にして, 同所据付の地震計には12日6回, 13日13回, 14日午前6時から15日午前3時まで376回(37回?)を記録した。「昭和6年8月15-16日, 都, 時事」(地震, 1931年9号).
- 8月15日, 15時35分より約半時間噴煙多量, 雲の為山の模様不明(気象要覧, 1931年8月).
- 8月16日, 09時14分より同20分まで, 11時過ぎ, 12時前後及び15時半頃何れも30分ばかり噴煙多量北東に流れる。「追分支所」(気象要覧, 1931年8月).
- 8月17日, 21時火口より火焰立ち昇り真紅に焼け20分後鳴動を伴う小噴火あり, 噴煙は極短時間にして2分後止み又鳴動も4分後には聞え, 煙は南西に流れ火焰は22時20分消散す。「追分支所」(気象要覧, 1931年8月).
- 8月18日, 06時56分より3分間噴煙し煙は西南西に流れる, 12時より鳴動聞こえ噴煙する「追分支所」. 18日14時頃より18時過ぎ迄約4時間長野市三輪町にて微量の降灰あり, 黒色微細なものにて新聞紙1枚に3瓦溜る。「堤技手」(気象要覧, 1931年8月).
- 8月19日, 08時14分, 爆発, 空振, 一大破裂音と共に弱震(弱き方)を伴ない爆発する. 北佐久郡全部, 南佐久及び小県の過半, 上下高井の殆ど全部埴科, 更級, 上水内の一部に及び長野でも聴く. 降灰は吾妻郡に多く, 小県の北部と上高井に降る.

- 地震計の最大振幅 232μ (東西動, 追分), 60μ (長野), (気象要覧, 1931年8月)に詳細な報告あり.
- 〔長野〕浅間山は19日午前8時15分頃大音響と共に大爆発をなし戸障子の震動甚だしく山麓の人々は何れも戸外に飛び出すと云う騒ぎを演じた. 長野測候所の調査によれば19日朝の爆発は午前8時13分39秒に地震計に感じ約4分50秒継続した. 最大動は全振幅は 58μ , 音響並びに噴煙は長野から認める事が出来た. 〔小諸〕浅間山爆発につき軽井沢, 西長倉, 伍賀, 小沼方面は戸障子が外れ時計の振子も殆ど止まった. 岩村田, 小諸等佐久平方面は鳴動に驚いて何れも戸外に飛び出し恐怖にかられて居る. 小諸口火山館, 沓掛口峰の茶屋付近には盛んに大石が落下した様である. 〔前橋〕19日午前8時14分頃浅間山は大音響と共に爆発, 黒煙は軽井沢から群馬県碓氷郡松井田町方面に流れ, 同県吾妻郡長野原町及び郡郡桑付近一帯並びに群馬, 長野両県境には約20分間に亘って小石混じりの灰が降り群馬県側の農作物及び桑園の被害は相応にある見込み。「昭和6年8月20日, 東京日々, 中央, 信濃毎日」(地震, 1931年9号).
- 8月20日, 03時21分大噴火ドドドーという音と弱震(弱き方)と空気振動とにより戸障子がガタガタという音に眼を覚ます. 浅間山上火の海となり, 噴煙は急騰しゴーゴー鳴り渡り, 前掛山上全部火に覆われ, 黒煙中より時々閃光を発し, 石尊山と剣ヶ峰との間の谷間は焼け石の落下で真紅となり, 所々燃え上がり野火となり一大壯観を呈す. 鳴動は03時35分頃止みたるも, 今度のものは割合鳴動大きく又上層は北風なりしと見え噴煙は当所の天頂に向って伸び03時29分には当所の天頂に其の先端は達せり.
- 地震計最大振幅東西動 317μ , 南北動 214μ である「追分支所」.
- 音響内聴域, 火口より半径約30km, 外聴域, 火口より半径約170km, 幅80km位, 石川, 福井, 岐阜, 滋賀, 愛知及び静岡県西部.
- 降灰域, 群馬, 埼玉, 栃木, 福島県西部, (気象要覧, 1931年8月).
- この噴火で登山者の遭難3名を生じる, 内訳, 重傷1名(救助)負傷2名(自力下山), (渡辺・藤原・深瀬, 1932).
- 注55, この噴火による遭難者を死者3名としている資料がある. 気象庁(1991, 日本活火山総覧, 第2版)においても死者3名となっているので注意する必要がある. 気象要覧(1931年8月)では重傷者3名としている.

8月20日, 09時43分, 爆発, 一大音響と共に弱震(弱き方)を伴ない噴火す。鳴響はドーンゴーと09時55分に始まり11時17分全く止む, 噴煙は緩やかに南東に流れ11時35分止む。追分支所地震計による最大振幅は 317μ (東西動)である。この振幅は03時21分の噴火と同一であり, 南北動の振幅は 252μ と異なるので, 東西動の振幅は振り切れているのかも知れない。

この噴火による降灰も大体群馬県側にあったようで, 火山館付近には降灰なく吾妻より草津方面に降り, 鬼押しし地方には焼け石を降らしたと峰の茶屋から報告があった。音響域は西側に外聴域が出現した(気象要覧, 1931年8月)。

浅間山は20日午前3時頃及び午前9時頃の両回に亘り強爆発をなし, 噴煙は東南方に靡いた。長野測候所の発表によれば「20日午前3時21分と9時44分とに浅間山は大噴火をなしたるが, 9時44分の噴火は噴煙を1万2千米余の高空に噴騰して頗る壯観を呈した。追分支所にて観測せる微動は昨19日朝6時より今朝6時までで23回に達し, 6時以後は長野にても多数の微動を観測した」。軽井沢よりの報告によれば午前3時21分爆発直後群馬県地籍並び軽井沢, 法政大学村避暑地及び嬭恋村付近一帯に拳大の岩石を混じえての降灰約1時間に亘り猛烈を極め, 野菜桑園は全滅す。当時山麓一帯の地方は雷鳴と共に約時間に亘り上下, 水平動の強震を感じた。小諸よりの情報によれば午前3時21分の爆発と同時に落下せる焼け石から発火, 追分原国有林数町歩を焼き午前7時過ぎ鎮火した。〔前橋〕20日払暁の浅間山大爆発で群馬県吾妻郡長野原地方は夥しき降灰があり続いて同日午前9時45分に再び激しい大音響と共に爆発, 噴煙は群馬県下に流れ西部地方一帯に約25分に亘って降灰があった。農作物の被害甚大の模様である。〔熊谷〕20日浅間山の大爆発で埼玉県地方に同夜から21日未明にかけて降灰あり, 熊谷測候所の観測によれば坪当り9グラムで桑葉は真白になり養蚕家は面食らっている。「昭和6年8月21日, 東京日々, 東京朝日, 信濃毎日, 報知」(地震, 1931年9号)。

8月22日, 03時03分頃, 小噴火, 火山館だけで知る。同地付近降灰なし。「県保安課」(気象要覧, 1931年8月)。

〔前橋〕22日午前3時頃浅間山はまたまた爆発し, 群馬県吾妻郡地方に鳴動あり, 午前5時から3時間に亘って大降灰あり, 桑園に被害ある見込「昭和6年8月23日, 報知」(地震, 1931年9号)。

8月27日, 20時33分, 噴火, 追分では最初微震で家屋ミシシと揺れ, 夜の事で山頂は真っ赤となり黒煙はモクモクと昇騰し, ゴーゴーと云う鳴動と共に火口より時々閃光を放射し, 焼け石は前掛山の中腹位迄降った(気象要覧, 1931年8月)。

21時6分頃再び噴火し鳴動はなかったが時々砲声のような音響と閃光があった。噴煙は同じく東に流れ同10分頃音は止み噴煙も同30分頃に止む。地震計による発震時は20時33分18秒8, 最大振幅, 東西 114μ 。「追分支所」。

長野では最大振幅 22μ である。この噴火により火山館の屋根には小焼石3, 4個落下し, 湯の平付近又小石降り小諸登山道6合目以上径2, 3尺の溶岩所々に落ちた。又峰の茶屋主人の報告によれば国境付近を中心に小浅間の西側より地蔵川, 分去茶屋, 二度上げ方面に大豆大の砂石が降ったという(気象要覧, 1931年8月)。

〔長野〕27日午後8時浅間山は又大音響と共に爆発し, 火焰天に沖し全山火にて覆われ非常な壯観を呈した。火山館付近に溶岩落下し煙は小諸町方面まで流れ, 軽井沢町付近にも相当降灰を見たが夜間の事とて登山者なく人畜には被害なき見込みである。「昭和6年8月28日, 東京日々」(地震, 1931年9号)。

8月28日, 09時30分頃より10時30分頃まで浅間山の噴火による降灰あり。1平方メートル24瓦の黒灰色細粒の降灰があったが被害なし。「伊香保森林測候所報告」(気象要覧, 1931年8月)。

8月29日, 06時頃噴煙多量北東に流れ動40分峰の茶屋付近に少量の降灰あり「峰の茶屋」。

8月31日, 14時頃大笹付近に降灰ありたりと聞く「峰の茶屋」(気象要覧, 1931年8月)。

9月2日, 13時17分頃追分では弱震の(弱き方)あり, 鳴動は道29分頃迄続き時々ガラガラという音が聞えた。峰の茶屋では音響と共に爆発し, 噴火後約6分には焼石が少し降下, 其の後約12, 3分間氷砂糖大の砂石がザーザーと降下したが, 分去茶屋付近には大したことはなかった。峠町ではドンドンと2回の音響あり, 戸障子振動, 13時37分頃大豆大の砂石が約5分間降った。沓掛, 国境方面には親指大の降石が会った由。前橋測候所報告によれば, 13時19分頃「ドシン」という唯一声で余韻を引かない音響と共に西方の窓が振動した。その後引き続き降雨に混じり灰や砂が降下した(気象要覧, 1931年9月)。

〔小諸〕この噴火に関する新聞記事がある「昭和6年9月3日, 時事」(地震, 1931年10号)。

9月3日, 07時頃2, 3回鳴動を聞き, 08時15分から約5分間黒色の降灰があった. 更に08時45分頃幾度か振動を感じ, 09時に鳴響あり, 09時10分から約10分間降灰があった「峰の茶屋」(気象要覧, 1931年9月).

9月4日, 10時40分頃小噴火, 軽井沢方面に降灰(気象要覧, 1931年9月).

9月5日, 13時頃峰の茶屋に降灰, 但し鳴響はなかった(気象要覧, 1931年9月).

9月6日, 12時29分, 鳴響を伴って噴火, 追分では微震を感じた. 軽井沢では大音響と共に戸障子振動. 峰の茶屋には約10分間余砂が降った. 押出し方面には直径1寸位の焼石が降下したとの事である(気象要覧, 1931年9月).

[前橋] 6日午後4時30分より35分迄の間に浅間山は大鳴動と共に爆発し, 群馬県吾妻郡長野原及び北軽井沢付近に米粒大の降石があり, 其の他長野原警察署管内全般に亘って目下降灰中である。「昭和6年9月7日, 読売」(地震, 1931年10号).

9月13日, 03時59分頃噴火, 追分では微震を感じ戸障子3分間余振動, 鳴動を聞いたが爆発に際しての爆音は聞かなかった. 峠町では音響が20分余聞え, 何れも降灰はなかった. 峰の茶屋では5分余振動, 火柱の立つのが見え, 山頂付近には沢山の焼石落下し, 噴煙は1時間余も続いた(気象要覧, 1931年9月).

[前橋] 浅間山は13日午前4時頃轟然爆発し, 長野原町, 原町, 嬭恋村方面には小石混じりの降灰があった.

[平町] 13日未明福島県岩城郡平町地方に粉雪の様な灰が降り, 屋根や地上が真白になった。「昭和6年9月14日, 東京日々, 時事」(地震, 1931年10号).

10月21日, 小噴火, (気象要覧, 1931年10月), “爆発史集”には, 10月22日13時57分黒煙少量噴火, 小さい鳴響「ゴー」とある.

10月23日, 小噴火, (気象要覧, 1931年10月), “爆発史集”には, 02時05分, 小噴火, 弱き空振, 小鳴動あり. 全山雲にて見えず. 06時52分小噴火, 小鳴動7分間あり. 19時15分火口上真っ赤に焼けるを認む.

12月8日, 07時34分, 爆発, 追分支所の観測によれば, 07時34分18秒3に発震し最大全振幅 193μ であって爆音はトントンと2回に連続して小銃を発射した様な音であった. 庁舎は地震と空振のためシンシンガタガタと振動して弱震の弱程度に観測された, 山は雲霧の為其の噴煙は不明であったが, 追分駅では窓ガラス12, 3枚罅が入り前掛山の中腹辺の芝草は少量焼けた. この爆発後にも12時0分と13時34分の2回小噴火があった. 音響聴取区域は長野県下では南北佐久

郡と埴科郡の一部, 群馬, 栃木, 茨城県及び千葉県, 神奈川県と東京府下の大部であって尚山より北東方面の外聴域は福島県下の大部, 西方では岐阜県加茂郡, 養老郡下である. 又降灰区域は浅間山より南東方に帯状をして群馬, 神奈川県下及び東京府下に達している(気象要覧, 1931年12月).

[小諸] 8日午前7時35分, 浅間山は突如大鳴動と共に大爆発をなし, 引き続き2回の小爆発があったが, 従来爆発に比べて相当大きい方で, 山麓一帯は霧におおわれて見えなかったが, 山頂は青空の中に顔を出して居り, 高く舞い上がった黒煙が大きな傘の様に乱れたのは, 従来爆発に見ない特徴で, 壯観を極めた. 黒煙はやがて群馬県方面に流れ去ったが, 峰の茶屋方面には相当落石があった模様. [軽井沢] 軽井沢方面は爆発後7時45分から約5分間小豆大の小石が降り, 後は静かになった. 軽井沢駅から鉄道省への報告によれば, 同駅付近には, 爆発後数分に亘り線路一帯に砂利が降り積もり, 一銭銅貨大の軽石も混じって居たが, 鳴動のため同駅舎, 官舎のガラス窓40枚にひびが入った. [前橋] 8日午前7時33分の浅間山爆発は, 前橋地方に於ける感じは, かつてない激動で, 市民は何れも戸外に飛び出した. 噴煙は折柄の西北風に南東に流れ, 群馬県吾妻郡及び碓氷, 北甘楽両郡下には, 午前7時45分頃から, 約20分に亘り降灰があり, 東方群馬県に面する山麓には, 数分間にわたり小石が落下した. [横浜] 8日午前11時半頃, 横浜地方に降灰があり, 折柄快晴, 微風にヒラヒラと, 行人の頭上に約20分余降り注いだ. [東京] 東京方面でも爆音を聞いた人もあり, 目黒, 渋谷方面には多少の降灰があった. 「昭和6年12月9日, 東京日々, 東京朝日, 読売等」(地震, 1932年1号).

1931年浅間山活動の要約

3月31日, 噴煙活動,
6月9日, 22日, 23日, 26日夜, 噴煙, 降灰, 29日, 黒煙噴出, 降灰.
7月8日, 前橋降灰, 28日, 小噴煙, 8月1日, 噴煙活動, 4日, 5日, 噴煙多量, 6日, 終日小噴火, 噴煙を繰り返す, 7日, 噴煙活動活発, 8日, 噴煙, 9日, 10日, 噴煙, 降灰, 11日, 噴煙活動活発, 山麓降灰, 12日, 噴煙多量, 14日, 連続的に噴煙, 降灰, 15日, 噴煙活動, 16日, 噴煙多量, 17日, 小噴火, 鳴動を伴なう, 18日, 鳴動, 噴煙, 長野に降灰, 19日, 爆発, 空振を伴ない聴域広い, 群馬県下に降灰.
8月20日, 03時20分, 爆発, 噴出物多く野火発生,

外聴域出現，登山者1名重傷，2名負傷する，09時43分，再び爆発，広範囲に降灰，22日，小噴火，28日，降灰（伊香保），29日，31日，噴煙，降灰，9月2日，爆発，空振，降灰，3日，鳴響，降灰，4日，5日，小噴火，降灰，6日，爆発，降砂，13日，爆発，空振，降灰。
10月21日，23日，小噴火。
12月8日，爆発，空振，鳴動を伴なう，空振により被害発生，音響は東京でも聞く，横浜，東京，降灰あり。

100) 1932年（昭和7年）の活動

2月15日，05時04分頃，鳴動を伴い，地震と空振とにより家屋が振動したが，鳴動はさほど大きくはなかった。峰の茶屋，峠町及び小瀬付近に少量の降灰。「追分支所」，06時55分頃，爆音を聞き，前回のよりやや強い空振及び地震を感じた。峰の茶屋，峠町付近に少量の降灰があった。「追分支所」。前橋でも微かな爆音を聴取し，同管内谷地，大前，中之条，安中，下仁田，鼻毛石等では鳴響或いは空振を感じ前橋，安中，鼻毛石には少量の降灰があった（気象要覧，1932年2月）。〔前橋〕暫く沈黙を守っていた浅間山は15日午前7時頃大爆発をなし群馬県，長野県方面は家屋震動した。噴煙は前橋方面に流れ，7時50分頃から9時迄，前橋地方には降灰があった。尚今時までの情報によれば，人畜其の他の被害は極めて僅少と見られて居り，農作物の被害も報告されて居ない。「昭和7年2月16日，読売，やまと」（地震，1932年3号）。

2月18日，00時45分頃，追分では微震を感じ，峰の茶屋，軽井沢，峠町等では強い爆音と空振を感じ，又微量の降灰があった。前橋では47分頃遠雷の様な鳴動を聞き障子が振動した。中之条にも降灰あり（気象要覧，1932年2月）。〔前橋〕18日午前零時45分浅間山はまたまた大音響と共に爆発し，群馬県下一帯に地震あり，吾妻方面には小石混じりの降灰あり，前橋，桐生方面一帯に降灰があった。前橋測候所の観測によれば最近の爆発中最大のものであると。〔熊谷〕18日午前零時50分埼玉県熊谷地方に，大鳴動と共に，戸障子物凄く震動し，深夜の夢を破られた。浅間山の大爆発らしい。「昭和7年2月19日，東京日々，他」（地震，1932年3号）。09時28分頃，追分では微音と共に微震を感じた。噴煙は多量で約6千米の高さに昇騰した。爆音は南佐久郡では可なり強く聞えたが，北佐久郡では北麓地方には強く聞え，峰の茶屋，軽井沢，峠町等では空振の為障子はガタガタ振動した。軽井沢では降灰，砂量坪当

り0.5合位，旧軽井沢東端付近では指頭大の軽石を混じり，稀には径4cm内外のものもあった（気象要覧，1932年2月）。22時06分頃，小噴火，追分では鳴動を聞き，空振も感じた（気象要覧，1932年2月）。2月19日，05時23分頃，小噴火，追分では2回程ドンドンと云う鳴響を聞いた。14時20分頃，黒色の噴煙昇騰，少量の降灰があった（気象要覧，1932年2月）。2月20日，10時12分，小噴火（気象要覧，1932年2月）。2月24日，10時18分頃，追分では爆音を聞き，微震を感じたが空振は感じなかった。爆音は今年に入って最大のものであった。鳴動は10時24分に終息。前掛山の南東麓には野火を發した。爆音は南北佐久郡に強く聞え，沓掛，峠町及び小瀬付近等に砂礫，灰等が降った。前橋測候所では10時21分頃爆音を聞いたが，大して強くなく，却って空気振動の方がやや強く，戸障子は可なりに振動した（気象要覧，1932年2月）。〔軽井沢〕浅間山は24日午前10時24分またまた大噴火をしたが，黒煙は西北の烈風に煽られて軽井沢，西長倉村一帯の南山麓の上空を覆い，10分間に亘って，軽井沢方面に，小砂利混じりの灰を降らし，更に硫黄を含んだ瓦斯を降らしたので，人々は何れも屋内に逃げ込み，堅く戸を閉じて，瓦斯の侵入を防ぎ，禽獣は一斉に悲鳴を挙げ，地に伏すもの，木陰に潜むものなどあり，奇観を呈した。噴出せる溶岩片落下の為，浅間山東南麓塩野新田国有林及び千ヶ滝遊園地に火災を起こし，折柄の烈風に煽られて猛威を振り，約10町歩を焼き午後3時30分漸く鎮火した。「昭和7年2月25日，東京日々」（地震，1932年3号）。17時47分頃，小噴火あり，“爆発史集”。18時15分頃，小噴火，僅少の降灰（気象要覧，1932年2月）。2月28日，10時15分頃，噴煙昇騰，峠町，旧軽井沢方面に降灰（気象要覧，1932年2月）。2月29日，03時16分頃及び18時頃峰の茶屋付近に少量の降灰（気象要覧，1932年2月）。3月1日，04時頃，峰の茶屋から20町位南方まで僅少の降灰，15時10分頃，および18時頃，音響微。峰の茶屋から南沓掛，旧軽井沢方面に少量の降灰，（気象要覧，1932年3月）。3月2日，09時11分頃，追分では「ドーン」という大音響を聞き，微震を感じ，戸障子は僅かに振動した。09時15分には鳴動止み堂50分には噴煙も全く終息した。沓掛方面では爆音及び空気振動著しく戸障子は殆

ど外れんばかりに振動し、火口から20余軒隔たった菅平でもガラス窓が著しく振動した(気象要覧, 1932年3月).

[軽井沢] 浅間山は2日午前9時10分頃一大音響と共に大爆発をなし、渦巻き返る黒煙天に沖し、壯観極まりなく、煙は西風にあおられて、上信国境を越えて、前橋方面に降灰せる模様である。爆発直後軽井沢、小瀬、長日向付近には15分間に亘って、砂利が降ったが数日前の爆発より更に一層大きいもので、峰の茶屋付近には2、3寸大の鉄石が約10分間に亘って降り、中腹峰の茶屋登山口上方には3尺より6尺四方の溶岩落下して、大穴を穿ち凄惨を極めた。「昭和7年3月3日、東京日々等」(地震, 1932年4号).

13時17分頃、追分では最初爆音聞えず、先ず戸障子振動し「ゴーゴー」と鳴動しつつ黒煙を噴出。噴煙中に閃光あり。時々「ドーン」「ドーン」と爆音あり、13時27分には鳴動が止んだ。峰の茶屋、小瀬駅付近には径6cm(拳大)以下の黒色堅質の溶岩が約10分間ふり、千ヶ滝遊園地付近でも径1.5cm位の溶岩に、稀に径5cmの軽石を混じたものが20分間くらい降った。峠町でも豆大の小石と砂降り、沓掛でも径1.5cm以下の小石が少数降下した。尚館野(茨城県)では15時25分頃から動40分頃まで少量の降灰が認められた(気象要覧, 1932年3月).

[高崎] 2日午後1時20分頃浅間山はまたもや爆発、爆音は高崎付近まで響いた。山全体の雪は降った焼け石のため、殆ど融け、山肌が見え始めた。高崎地方にはザラメ大の降灰があり、地上に薄く積もった。「昭和7年3月3日 都、他」(地震, 1932年4号).

23時30分頃、音響並びに噴煙。峰の茶屋付近少量の降灰(気象要覧, 1932年3月).

3月3日、04時55分頃、鳴動、噴煙。峰の茶屋付近に多量の降灰。09時20分頃、鳴動、黒煙。峰の茶屋付近には黒色の砂約20分間ふり、その量は新聞紙四つ切上に約6gr。小瀬駅でも米粒大の降砂少量(気象要覧, 1932年3月).

[前橋] 2日以来活動を続けて居た浅間山は同日午後から小鳴動止まず、3日午前9時18分またまた大爆発なし、山麓に焼け石を降らし、群馬県方面に多量の降灰を見たが、山麓民は引き続き地鳴りの継続に不安を感じている。「昭和7年3月4日、東京日々、時事」(地震, 1932年4号).

3月8日、06時20分頃、噴煙多量、峰の茶屋付近砂石降下。気象要覧, 3月.

3月10日、10時49分頃、噴煙、追分、沓掛では微かに

鳴動を聞き、峰の茶屋では4分間余小砂利降る。前橋では12時10分頃から同27分頃まで降灰あり、その量は1平方メートルに3.6gr位であった(気象要覧, 1932年3月).

[小諸] 浅間山は10日午前10時50分またまた大爆発をなし、噴煙は約15分に亘って5千尺に上がり、峰の茶屋付近は暗黒になる程小石を混えた降灰があった。噴煙は西風に煽られ、遠く上州方面に靡き、上州方面は相当被害ある模様である。「昭和7年3月11日、河北、北海タイムス、福岡日々」(地震, 1932年4号).

3月11日、16時08分頃、「ドシン」という爆音と共に噴火、追分では地震、鳴動あり、空気振動は甚だ強烈で窓ガラスも落ちるかと思はれる程であった。噴火勢力は直ちに衰え、16時40分には止んだ。長野測候所から測風気球用経緯儀を用いて測定した所に依ると、噴煙の上端は海拔6千5百メートル(山頂よりは4千米)の高さに達していた。爆音は軽井沢方面は云うまでもなく野辺山原(南佐久郡南牧村)でも聞えた。前橋測候所では鳴動と共に可なり著しい空振を感じ、17時12分頃から降灰があった(気象要覧, 1932年3月).

[前橋] 11日午後4時10分浅間山はまたまた轟然たる大音響と共に三回に亘り爆発し、前橋地方では大震動があった。山麓地方には焼く10分間小石が降り、森林地帯には相当被害ある模様で、黒煙は東に流れ、午後5時15分から約20分間前橋地方に大降灰があった。「昭和7年3月12日、大阪日々」(地震, 1932年4号).

3月12日、10時12分頃、噴煙(気象要覧, 1932年3月).

3月14日、08時30分頃、「ドードー」と鳴動し、押出し岩付近に砂灰降下した(象要覧, 1932年3月).

3月15日、08時05分頃、噴煙多量、小浅間、国境方面に2、30分間降灰(気象要覧, 1932年3月).

3月16日、08時07分頃、噴煙多量、前橋では09時25分頃から約30分間に亘り降灰、その量は1平方メートルに5gr程度であった(気象要覧, 1932年3月).

20時41分頃、追分では「ゴーゴー」という鳴動をきく、黒煙多量。21時04分止む。峰の茶屋付近には降砂あり、指頭大の礫も混じていた(気象要覧, 1932年3月).

3月18日、00時15分頃、追分ではかなり強い空気振動を感じた。黒煙昇騰、時々火口より閃光を発し、鳴動爆音盛んであった。零時23分には鳴動および赤熱溶岩の噴出止み、同50分には白煙のみとなった。最初の爆音は甚だ大きく、南方48kmの野辺山原でもかなり強く聴取された。千ヶ滝以北峰の茶屋付近には降灰

はなつたが重量3匁から16匁位の小石坪当たり5, 6個降下し、長野原町の南部栗平、二度上、軽井沢町の北部、小瀬方面には微量の降灰があった。前橋では2回連続してやや強い空気振動を感じた。同管内谷地、沼田、中之条、安中、下仁田、藤岡、伊勢崎、渋川等では爆音または空振を感じ、安中、伊勢崎には降灰があった。尚筑波山測候所では戸障子かなり振動し続いて爆音を聴取した者もあり、多少の降灰が認められた。水戸測候所では弱い空振を感じ戸障子振動した(気象要覧, 1932年3月)。

〔長野〕浅間山は18日午前零時15分大音響と共に爆発し、火柱が立ち、落下する石と噴出する石とが空中で衝突して、電光の様な火花を散らし壯観を呈した。煙は東の方に流れて、小諸町民等は音響に夢を破られたが、軽井沢町は8分間に亘る鳴動で時計も止まり、少量の灰が降った。「昭和7年3月19日、報知、中央」(地震, 1932年4号)。

3月25日, 20時23分頃, 数日前より微動盛んであったが果然強い噴火となった。追分では始め「ドシン」と云う非常に強い爆音あり、次に「ガタガタ」と庁舎振動した。山の中腹以上は赤熱溶岩に覆われ、火口上には高く火柱が立ったが僅か2分位で消失した。音響は南北佐久郡及び小県の全部に及び、空気振動を感じた区域も略同様で、分去茶屋では柱時計止まり、杓掛では戸障子の外れた所もあった。杓掛では米粒大から大豆大の砂礫1尺平方に約80gr, 離山では約40grの降下を見た。前橋でも相当強い爆音と共に激しい空気振動を感じた(気象要覧, 1932年3月)。

〔東京〕25日午後9時半頃から東京市内各所に夜目にも白く灰が降った。これは同日午後8時23分信州浅間山の爆発に伴う降灰が北西の風に乘じて帝都を夜襲したもの。「昭和7年3月26日、東京日々」(地震, 1932年4号)。

3月26日, 03時30分頃, 鳴動, 噴煙, 04時20分頃, 鳴動, 噴煙, 12時05分頃, 黒煙昇騰, 14時08分頃, 音響と共に噴煙, 峰の茶屋では粟粒大以下の灰に少量の小豆大の礫を混じたもの約3分間降下。分去茶屋, 浅間牧場でも少量の降灰があった。前橋では「ゴロゴロ」と自動車の通るような音響が聞え, 少量の降砂があった。同管内谷地, 大前, 中之条, 伊勢崎, 伊香保等では爆音を聴取し, 伊勢崎では降灰があった。16時20分頃, 黒煙昇騰, (気象要覧, 1932年3月)。

3月28日, 06時00分頃, 小噴火, 追分では空振及び鳴動を感ず。杓掛及び峰の茶屋では鳴動を聞き, 空気振動は菅平に及んだ。17時30分頃, 峰の茶屋では「ゴー

ー」と云う音を聞き, 噴煙は北に流れた(気象要覧, 1932年3月)。

3月30日, 16時頃, 追分では鳴動及び戸障子僅かに振動。黒煙昇騰。杓掛, 峰の茶屋では鳴動と軽い空気振動あり。付近に少量の降灰があった(気象要覧, 1932年3月)。

〔前橋〕30日午後4時3分, 15米の烈風中, 浅間山は大爆発をなし, 黒煙天に沖して物凄く3分の後, 前橋の上空に現われ, 天日ために暗く, 多量の灰を降らし, 近来にない大鳴動とて市民は屋外に飛び出して騒いでいる。〔高崎〕30日午後4時3分浅間山またまた爆発, 高崎地方に迄, 戸障子を震動させ, 黒煙高く舞い上がって壯観を呈した。午後5時前後に至り猛烈に降灰があった。「昭和7年3月31日, 萬」(地震, 1932年4号)。

3月31日, 06時02分頃, 「ドン, ビリビリ」と地響きして噴煙(気象要覧, 1932年3月)。

4月1日, 13時20分頃, 音響はなかったが, 黒煙を多量1時間余噴出し, 峰の茶屋から南方杓掛に至る間に多量の降灰があった(気象要覧, 1932年4月)。

〔長野〕浅間山は1日午後1時25分またもや大爆発し, 数十丈の黒煙はやがて東南方群馬方面に流れた。軽井沢には少量の降灰があった。「昭和7年4月2日, 報知」(地震, 1932年5号)。

4月2日, 20時09分頃, 朝から噴煙がなかったが同時刻頃から音響盛んとなり, 盛りに溶岩並びに黒煙を噴出した。煙火は20時40分頃には止んだが, 鳴動は21時頃迄も続いた。追分では地震, 空気振動何れも感ぜず, 野辺山では音響を聞いた。噴煙は南東に流れた為峰の茶屋付近及び杓掛方面には降石あり, 小瀬の南方から離山の中間を経て新軽井沢に至る地域には砂利混じりの降灰があった(気象要覧, 1932年4月)。

4月3日, 15時頃, 黒煙多量に噴出。追分, 峰の茶屋, 杓掛等では音響が聞えた(気象要覧, 1932年4月)。

4月4日, 13時頃, 小噴火, 噴煙, 13時50分頃, 噴煙, 14時47分頃から15時15分頃までに雷鳴の様な音響が数回聞こえ, 噴煙は22時頃迄も続いた。尚前橋地方では16時16分頃から17時31分頃迄1平方メートルに15gr位の降灰があった(気象要覧, 1932年4月)。

〔長野〕浅間山は3日午後3時20分頃小爆発をなし, 更に4日午後2時頃大爆発をなし, 物凄い噴煙は3時に至るも壯観を呈していた。1時間に亘る噴煙は近来希有のことである。「昭和7年4月5日, 時事」(地震, 1932年5号)。

4月5日, 20時頃, 小噴火, 鳴響, 噴煙多量, 小浅間及び国境付近に降灰があった。

4月6日, 11時05分頃, 同30分頃迄噴煙, (気象要覧, 1932年4月)。

4月13日, 17時30分頃, 噴煙多量, 火口付近並びに峰の茶屋方面には少量の降灰があった様である(気象要覧, 1932年4月)。

4月14日, 08時42分頃, 同9時頃迄噴煙, (気象要覧, 1932年4月)。

4月16日, 09時30分頃, 20分間ほど黒煙噴出, 南が岩方面に多少の降灰があった様である(気象要覧, 1932年4月)。

4月25日, 22時から翌26日の6時までの間に小噴火があったものの様で峰の茶屋付近には降灰があった(気象要覧, 1932年4月)。

4月26日, 21時30分頃, 黒煙多量噴出, 峰の茶屋から南東方面に降灰があった(象要覧, 1932年4月)。

5月1日, 13時57分頃, 突然黒煙多量噴出, 14時05分頃大砲の如き音響数回聞え, 同時に閃光が認められた。14時45分頃噴煙止む。峰の茶屋より南方数軒の地点に降灰, 峠町には降砂があった(気象要覧, 1932年5月)。

〔長野〕浅間山は1日午後2時10分頃大音響と共に大爆発をなし, 西北の強風に煽られて黒煙は軽井沢上空から上州方面に流れた。軽井沢地方は爆発後8分から20分にわたって, 粉雪の如き降灰あり, 暗夜の如き観を呈し, 一時は交通途絶した。「昭和7年5月2日, 時事, 大阪毎日」(地震, 1932年6号)。

5月5日, 06時09分頃, 噴煙極めて多量, 鳴動は余り大きくなく06時22分に止み, 06時50分には噴火は殆ど止み白煙のみとなった。前掛山中腹に野火が起こったが07時30分頃消えた。降灰箇所, 峠町, 旧軽井沢, 峰の茶屋(以上小砂利) 杓掛, 前橋, 渋川, 富岡, 藤岡, 伊勢崎, 熊谷, 玉井, 越谷, 松山, 羽生, 栗橋, 所沢, 槻川, 菖蒲, 杉戸, 岩槻, 本庄, 川越, 浦和, 越生, 宇都宮, 館野, 水戸, 音響聴取箇所, 栄, 北牧, 岩村田, 小諸, 小沼, 春日, 峠町, 新軽井沢, 旧軽井沢, 小瀬, 杓掛, 星野, 峰の茶屋, 追分, 菅平, 下仁田, 富岡, 藤岡, 玉井, 所沢, (気象要覧, 1932年5月)。

〔前橋〕浅間山は5日朝5時55分またまた大爆発をなし, 午前7時頃から群馬県中央部から南部方面にかけて大降灰あり, 特に南部方面では雨の降る様に音を立てて降灰し, 富岡町の如きは積灰約2分に達し, 宛然積雪の如き光景を呈した。春蚕掃立を開始した際であ

り大狼狽を来たしている, 桑葉の被害莫大の見込み。

〔熊谷〕5日午前6時8分頃の浅間山の大爆発のため, 同9時3分, 埼玉県利根川の沿岸を中心に, 中仙道沿線一帯にトタン屋根には音を立てるほどの猛烈な降灰がり, 09時50分迄続き真白になった。熊谷蚕業試験場では急遽桑葉を水洗いして乾燥の後給桑せよと注意した。「昭和7年5月6日, 時事, 報知, 大阪毎日」(地震, 1932年6号)。

5月8日, 20時頃, 黒煙, 前掛山付近に降灰(気象要覧, 1932年5月)。

5月9日, 07時00分, 08時15分頃迄小噴火, 閃光及び音響あり, 千ヶ滝, 小瀬, 峠町, 新旧軽井沢, 分去茶屋方面一帯に降灰(気象要覧, 1932年5月)。

〔高崎〕9日朝7時15分頃浅間山はまたもや爆発し, 高崎地方は朝8時頃から約時間にわたって未曾有の降灰あり, 見る間に通行人の肩に積もる程で, 眼をあい戸外を歩行出来ず, 傘をさす珍現象を呈し, 養蚕家は大恐慌を来たしている。「昭和7年5月10日, 報知, 大阪毎日」(地震, 1932年6号)。

5月10日, 09時50分頃, 小噴火, 追分, 峰の茶屋, 分去茶屋で音響を聞く。分去茶屋, 峰の茶屋, 千ヶ滝, 小瀬, 軽井沢方面に降灰(気象要覧, 1932年5月)。

5月11日, 14時57分頃, 鳴動と共に黒煙多量噴出, 15時14分頃迄鳴動, 噴煙は同35分頃止む。小瀬では新聞紙1枚上に150gr位, 旧軽井沢では1坪当り3升位の降砂があった(気象要覧, 1932年5月)。

〔小諸〕浅間山は11日午後2時頃またまた爆発, 近頃の例によって無音爆発であったが, 噴煙は非常に大量で, 30分余に亘って不気味な地鳴りを伴ない, 真黒な煙を噴いた。軽井沢地方では空一杯黒煙に蔽われ, 峰の茶屋から北寄りの地方は多量の降灰と砂礫に見舞われた。「昭和7年5月12日, 都」(地震, 1932年6号)。

5月13日, 06時02分頃, 15分間余噴煙, 南ヶ岩, 大久保沢? (大窪沢) 付近に降灰。

10時13分頃, 黒煙多量, 峰の茶屋では噴煙7分後爆音あり, 杓掛付近に降灰, 軽井沢方面には降砂があった。

12時43分頃及び同52分頃, 黒煙多量, (気象要覧, 1932年5月)。

5月16日, 20時15分頃, 灰色の噴煙少量, 東前掛山頂付近に降灰があったものの様である(気象要覧, 1932年5月)。

5月17日, 06時20分頃, 20時30分頃迄灰色の噴煙, 大窪沢付近に降灰(気象要覧, 1932年5月)。

5月18日, 05時35分頃, 約1時間余黒煙噴出, 小浅間

一帯、峰の茶屋付近迄降灰（気象要覧，1932年5月）。
5月19日，02時10分頃，黒煙，押出し方面に降灰があったようである。

13時25分頃，音響，噴煙多量，押出し，三原方面に少量の降灰（気象要覧，1932年5月）。

〔長野〕浅間山は19日午後1時20分頃爆発，噴煙は風に煽られて東北方面に流れ各方面には相当降灰があった模様である。尚18日午後6時30分にも爆発があった。「昭和7年5月20日，時事」（地震，1932年6号）。

5月20日，04時00分頃，約40分間噴煙，押出し方面に降灰（気象要覧，1932年5月）。

5月23日，15時頃，黒煙，小浅間付近に降灰，19時頃，黒煙（気象要覧，1932年5月）。

5月28日，07時50分頃，小噴火，上信国境より北方に降灰。13時19分頃，時々閃光及び破裂音あり，13時45分頃迄続く。峰の茶屋，杓掛，峠町及び岩村田では爆音強く聞え，杓掛，岩村田では鳴動及び空振あり，峠町では少量の降灰，上信国境から北方には砂利が降った。15時30分頃，分去茶屋付近に降灰（気象要覧，1932年5月）。

5月29日，03時45分頃，峰の茶屋付近には砂利降下，新滝方面には降灰があった。

04時28分頃，大爆音，鳴動は余り大きくなく同33分には止んだ。かなり遠距離の地点でも空気振動を感じ，浅間の北北西55軒の飯山町でも感じた程であった。長野市外七二会でも爆音を聴取した。前橋では3回連続して爆音聞こえ，空振もやや強かった（気象要覧，1932年5月）。

〔長野〕29日午前4時30分浅間山はまたまた大音響と共に大爆発，折から信越線追分杓掛間を進行中の上り旅客臨時列車は爆発で震動甚だしく進行不能に陥り遂に現場に約7分間立ち往生した。「昭和7年5月30日東京日々」（地震，1932年6号）。

6月4日，11時30分頃，小噴火。

20時25分頃，追分では音響と同時に微動を感じた。峰の茶屋では爆音を聞き，弱震程度の地震を感じ，噴火口付近から焼け石が盛りに飛び出るのが認められた。小浅間峰の茶屋方面にも降灰があった。爆音及び空気振動は長野管内では上田，菅平，北牧，長窪古等まで達し，降灰は峠町，国境付近，長窪古及び松本地方に及んだ。尚岐阜測候所では20時34分頃砲声の様な爆音を1回聞いた（気象要覧，1932年6月）。

6月5日，03時53分，鳴動と共に噴火，追分では戸障子が微かに振動した。

12時27分頃，鳴動，4日夜から5日朝に亘る噴火に依

る降灰は相当広範囲に及び，就中小県郡，更級郡，埴科郡，上高井郡の一部最も甚だしく，長野では坪当たり9勺，長窪古では1平方メートルに30grに達した（気象要覧，1932年6月）。

6月7日，14時00分頃，小噴火，峰の茶屋から北方に降灰（気象要覧，1932年6月）。

6月8日，08時00分頃，小噴火，峰の茶屋付近に少量の降灰（気象要覧，1932年6月）。

6月9日，20時20分頃，小噴火，小浅間，峰の茶屋付近に降灰（気象要覧，1932年6月）。

6月10日，02時頃，小噴火，東前掛山，大窪沢方面に降灰。06時18分頃，同40分頃迄鳴動（気象要覧，1932年6月）。

6月12日，07時30分頃，同12時頃迄鳴動，時々白煙上昇（気象要覧，1931年6月）。

6月13日，11時頃，鳴動，噴火，押出し方面に降灰（気象要覧，1932年6月）。

6月14日，17時09分頃，鳴動と共に黒煙多量噴出，追分では17時25分頃から同33分頃迄降灰あり。北佐久郡の大部分，南佐久郡の北部，及び小県郡の一部に降灰（気象要覧，1932年6月）。

6月24日，14時57分頃，小噴火，追分支所，峰の茶屋，杓掛等では微震を感じ，押出し岩と小浅間の中間には角砂糖大の降石があった。

19時43分頃，小噴火，追分では微震を感じ，分去茶屋方面には降灰があった様である（気象要覧，1932年6月）。

6月25日，12時頃，小噴火，千ヶ滝遊園地付近，杓掛方面に降灰。18時頃，小噴火，千ヶ滝遊園地付近に少量の降灰。22時45分頃，小噴火，追分では空気振動で戸障子振動した（気象要覧，1932年6月）。

浅間山の爆発 24日午後2時から25日午前7時迄に51回に亘り，浅間山は微動を発した。追分観測所の報告により付近は不安を感じ，小諸，軽井沢の両登山口では警戒していたが，25日午後2時頃爆発し，猛烈な噴煙は折柄の西風にあふられ，軽井沢町から群馬県方面にかけ，約30分に亘り多量の降灰があった。「昭和7年6月26日，中外」（地震，1932年7号）。

6月26日，04時55分頃，噴煙，峰の茶屋付近に降灰（気象要覧，1932年6月）。

6月28日，09時02分頃，音響噴煙，追分では弱震（弱き方）を感じた。爆音は相当大きくかなりの広範囲に亘って聞えた。前橋測候所では09時04分頃，伊吹山頂では09時15分頃何れも遠雷の様な爆音を聴取した。長野管内音響聴取箇所，杓掛，追分，岩村田，春

日、野沢、栄、北牧、南牧、長窪古、和田、上田、菅平、篠ノ井、七二会、戸隠、芋井、長沼、長野、飯山（気象要覧、1932年6月）。

18時21分頃、小噴火、峰の茶屋でも家屋振動し、鳴響を聞いた（気象要覧、1932年6月）。

〔前橋〕浅間山は28日午前9時4分2回に亘って大音響と共に大爆発したが、爆音は前橋地方にも戸障子にひびき、市民は驚いて戸外に飛び出した。〔秩父〕28日午前9時5分頃埼玉県秩父地方でも浅間山爆発の鳴動あり、人々は地震と間違え、戸外に飛び出した者も多数あり、戸障子がビリッと音を立てるほど近来にない大鳴動であった（地震、1932年7号）。

6月29日、04時28分、中噴火あり。“爆発史集”，気象要覧に無し。

浅間山の爆発 浅間山は29日午前4時28分またまた大爆発をなし、鳴動強く、長野測候所の地震計にも感じ、最大振幅14ミクロンで、空気振動は遠く岐阜県へも達した。山麓には降灰多く黎明の空に物凄き光景を呈した。この大鳴動に折柄追分沓掛間を進行中の上野運輸事務所主催の遊覧列車は震動甚だしきため進行不能に陥り、約7分間現場に停車するの止む無きに至った。「昭和7年6月30日、時事、東京日々」（地震、1932年8号）。

12時頃、小噴火、峰の茶屋、北軽井沢付近に降灰。

15時頃、峰の茶屋、鎌原分去茶屋方面に少量の降灰（気象要覧、1932年6月）。

注56、04時28分の噴火に関する（地震、1932年8号）

の新聞記事であるが、5月29日04時30分の噴火についても似たような記事（地震、1932年6号）が出ているので、大いに疑念も生ずる。真偽の程は確かめようも無いがおそらくは間違いであろう。

6月30日、14時頃、押し出し方面に降灰（気象要覧、1932年6月）。

7月1日、05時20分頃、小噴火、分去茶屋方面に降灰（気象要覧、1932年7月）。

7月2日、19時頃、小噴火、峰の茶屋付近に降灰、終日鳴動（気象要覧、1932年7月）。

7月3日、05時02分頃、爆音、鳴動約4分間継続。峠町では小音響聞こえ5分間余り降砂あり、沓掛では雷鳴の如き爆音聞え、震動も可なり大きく、峰の茶屋では「ズドン」と大きな鳴響を聞き拇指大の石交じりの降灰があった。

11時00分頃、小噴火、同30分頃迄噴煙、中途追分で

は1回「トン」と云う音が聞えた。

16時47分頃、小噴火、同17時30分頃迄噴煙（気象要覧、1932年7月）。

〔小諸〕浅間山は3日午前5時3分、大震動に伴ない爆発し、山麓の住民は戸外に飛び出した。黒煙は晴れわたった空に押し壯観を呈した。軽井沢上州方面に降灰があった模様であるが、北佐久方面は被害はなかった（地震、1932年8号）。

7月9日、18時30分頃、小噴火、（気象要覧、1932年7月）。

7月10日、04時20分頃、小噴火、04時37分頃、小噴火、峰の茶屋では鳴動聞こえ、2時間余に亘り降灰あり。

04時20分頃から同20時頃迄の間に9回余の小噴火あり（気象要覧、1932年7月）。

7月11日、10時16分頃、小噴火。

11時10分頃、小噴火、峰の茶屋付近に降灰。

14時07分頃、小噴火。

19時20分頃、小噴火、峰の茶屋方面に降灰。

20時20分頃、小噴火、峰の茶屋方面に砂利降下（気象要覧、1932年7月）。

7月12日、03時30分頃、約40分間噴煙。

13時50分頃、小噴火（気象要覧、1932年7月）。

7月15日、11時10分頃、小噴火、峰の茶屋付近に降灰。

14時頃、小噴火。

17時20分頃、小噴火（気象要覧、1932年7月）。

7月16日、08時頃、小噴火、峰の茶屋付近に少量の降灰。

11時頃、小噴火、峰の茶屋では鳴響聞こえ、少量の降灰あり（気象要覧、1932年7月）。

7月17日、09時頃から同16時頃迄の間に3回の小噴火あり、峰の茶屋付近に少量の降灰。

7月18日、03時36分頃、小噴火、峰の茶屋では鳴動聞こえ、少量の降灰あり。11時26分頃、鳴動、黒煙多量（気象要覧、1932年7月）。

7月19日、06時15分頃、小噴火、峰の茶屋に降灰多量。08時頃、小噴火、峰の茶屋付近降灰。

11時15分頃、小噴火、5合目付近迄降灰（気象要覧、1932年7月）。

7月23日、07時38分頃、12時33分頃、18時35分頃、小噴火（気象要覧、1932年7月）。

7月24日、11時30分頃、鳴動。15時40分頃、小噴火、黒煙多量。17時39分頃、鳴動（気象要覧、1932年7月）。

7月29日、14時10分頃、小噴火。

7月30日, 11時20分頃, 小噴火, 黒煙多量(気象要覧, 1932年7月).

8月中, 極めて静穏, (気象要覧, 1932年8月).

9月3日, 15時頃, 小噴火, “爆発史集”.

[高崎] 3日午後3時過ぎ浅間山は大音響と共に大爆発し, 噴煙は天に沖して物凄く, 太陽も一時姿を没した. 噴煙は東に流れ, 群馬県松井田町, 安中町地方に降灰し, 折柄秋蚕掃立中の養蚕家に多少の被害あり. 「昭和7年9月4日, 東京日々」(地震, 1932年10号).

9月20日, 16時00分頃, 小噴火, 鳴動と共に小噴火, 噴煙は少量であったが山頂付近には降灰, 降石があった模様である(気象要覧, 1932年9月).

9月21日, 10時58分頃, 小噴火, 長野から噴煙良く見え, 測風経緯儀によりその高さは海拔約4,100m(山頂より1,600m)位と推定された. 同12時50分頃にも小噴火がありその噴煙も長野から良く見えた(気象要覧, 1932年9月).

注57, “浅間火山”には, 浅間山の活動について次の様に述べている. “昭和7年8月以降は頓に静穏となれるが, 9月26日頃には火口底がゴウゴウと唸り, 物凄き状態にて噴煙降灰などもあり, 又々大に活動するならんと思いに, 10月1日午後2時突如として, 白根火山の活動を開始せる後は忽ち静穏となれり”.

この現象は良く一般の人々に記憶されていて, 屢々浅間山と白根山は交互に活動するかの様に語られる. 浅間山と草津白根山, あるいは焼岳のような近傍の火山には互いに活動に影響を及ぼすような現象があっても不思議ではなからう. 解明すべき問題である.

10月から12月にかけては噴火と云うような活動は発生しなかった(気象要覧, 1932年10月~12月).

1932年浅間山活動の要約

2月15日, 噴火2回, 18日, 噴火3回, 付近降灰, 19日, 小噴火2回, 20日, 小噴火, 24日, 爆発, 小噴火2回, 28日, 29日, 小噴火, 降灰,

3月1日, 小噴火3回, 付近降灰, 2日, 爆発, 群馬県下に降灰, 小噴火続く, 3日, 小噴火, 降灰, 2回, 8日, 10日, 小噴火, 降灰, 11日, 爆発, 前橋地方に降灰, 12日, 14日, 15日, 16日, 噴煙活動続き屢々降灰, 18日, 爆発, 降灰, 25日, 爆発, 降灰(東京にも), 26日, 噴煙, 鳴動, 降灰, 28日, 30日, 31日, 小噴火続き降灰あり.

4月1日, 2日, 3日, 4日, 5日, 6日, 小噴火続き近

辺降灰, 13日, 14日, 16日, 噴煙, 降灰, 25日, 26日, 黒煙噴出, 降灰.

5月1日, 爆発, 降灰, 5日, 爆発, 山上野火発生, 8日, 黒煙, 降灰, 9日, 10日, 11日, 小噴火, 降灰, 13日, 小噴火3回, 16日, 17日, 18日, 19日, 小噴火続く, 周辺降灰, 20日, 23日, 28日, 29日, 小噴火度々.

6月4日, 5日, 小噴火, 降灰多し, 7日, 8日, 9日, 10日, 小噴火続く, 12日, 13日, 14日, 鳴動, 小噴火, 降灰, 24日, 25日, 26日, 小噴火, 降灰, 28日, 爆発, 音響大, 29日, 小, 中噴火(?), 30日, 降灰. 7月1日, 2日, 3日, 鳴動, 小噴火, 降灰, 9日, 10日, 小噴火続く, 11日, 小噴火続き峰の茶屋付近に降灰, 12日, 小噴火, 15日, 16日, 17日, 18日, 19日, 小噴火続き, 付近に降灰, 23日, 24日, 小噴火, 鳴動, 29日, 30日, 小噴火. 8月中, 活動記録なし.

9月3日, 20日, 21日, 小噴火あり.

10月1日, 草津白根山の活動開始後静穏となる.

101) 1933年(昭和8年)の活動

浅間山はこの年, 全年を通じて静穏な状態を保った.

この年には, 火山観測の態勢に大きな変化が生じる.

1931~1932年と大変活発な活動を続けた浅間山について, 町民の不安と登山者の危険一掃のために軽井沢町では, 観測所の創設を考え東京大学とも相談し, 別荘地に居住する有力者その他の協力を得て, 1933年6月に新観測所建設に着手, 8月15日に開所式を挙行了. 翌1934年6月1日に建物一切が東京大学に寄付され, 正式に東京大学地震研究所浅間支所として発足した. 同年より水上 武が浅間支所に赴任して, この火山を実験室として地球物理学的研究に取り組むことになる. 活動の記録もより詳細になり内容も更に充実してゆくのである.

7. 第3期(1934年~1943年)噴火活動記録

この期間の記録を整理するために, 新しく導入する記録説明の方法について, 以下に述べることにする.

1. 1933年に浅間山火山観測所が浅間山の東側中腹に建設され, 翌1934年には東京大学地震研究所浅間支所として正式に発足した. この観測所開設以前より東京大学地震研究所は, 浅間山の地球物理学的研究を開始していたが, 地元で拠点を得て更に詳細な諸研究を手掛けることになる. 1934年には水上 武が浅間支所に赴任して, いわゆる水上時代の幕開けとなる.

1934年以降の活動も以前に続いて活動の記録記載を行うが, 噴火活動に関しての量的な観測も実施され,

それらの研究内容報告もなされているので、活動史的に重要と思われるものについては取り上げて記録することにする。

2. 1935年の活動からは、水上(1935c)の方法により、噴火の規模を分類する。また、活動監視機関である気象庁(中央气象台)の資料に加えて東京大学浅間火山観測所の観測資料(例えば噴火回数など, Minakami *et al.*, 1970)を年間活動数の要約の際に、比較のために記録する。

3. 噴火の分類, 水上(1935c)による噴火の分類は以下の通りである。

A: 猛烈な爆発で、内、外聴域が表れる程度の爆音を発し、無数の大小火山弾が火口より2,500m以上の遠距離に達し、火山灰は関東平野より太平洋上に散布し、空気振動または地動によって、山麓地方の沓掛(中軽井沢)、軽井沢、追分等の窓ガラスの一部を破壊する(著者注、噴火の運動エネルギーが $10^{19\sim 20}$ エルグの噴火に相当すると考えられる)。

B: 大なる爆音を伴い、火山弾、火山礫、火山灰は散布するが、量においてAより少なく空気振動を伴う場合と、伴わない場合があり、小火山弾、火山礫、火山灰は散布するが、山麓の窓ガラスを破損することはない(著者注、噴火の運動エネルギーが $10^{18\sim 19}$ エルグの噴火に相当すると考えられる)。

C: 小音響を伴う。A, Bは火口より30~40km以内にいる人は総べて、爆発を知るが、Cは時には知らない場合がある(著者注、噴火の運動エネルギーが $10^{17\sim 18}$ エルグに相当すると考えられる)。

D: 爆音を伴わない噴火で火山礫、火山灰のみを散布する。この噴火は火口方向を見ているか、あるいは火山灰の散布に注意しない限り山麓地方でも見逃すことがある(著者注、噴火の運動エネルギーが 10^{17} エルグあるいはそれ以下に相当すると考えられる)。

なお、これらの分類法は、Takahasi and Minakami (1937)による区別と、少し異なっている。

以上の分類法で噴火を4クラスに分けるが、厳密な定義による定量的な分類ではないので、要は比較の意味で導入した。分類の判断はすべて著者の責任である。

102) 1934年(昭和9年)の活動

注58, この年には極めて紛らわしい記録が残されている。そのため記録が混乱している。

その状況と原因について考察する。地震(1934年2

号)に次の記事が記載されている。

浅間山の爆発 1月9日、午後4時45分浅間山は大鳴動と共に密雲を破って爆発し、噴煙は東北の空を掩い、約5分の後沈静した。中腹まで砂礫を降らし、また小浅間及び山麓浅間スキー場一帯は猛烈な降灰で、山頂から東北山麓にかけ積雪は真っ黒になった。「昭和9年1月11日。東京朝日」。

同様の記事は、火山(1935)にも収録され、更に気象要覧(1934年1月)にも記載されている。次の記録は浅間山の爆発 暫く鳴りを鎮めていた浅間山は11日午前2時と、午前7時30分の二回に亘り、大鳴動と共に爆発し、黒褐色の猛烈な噴煙は西北方の峰の茶屋、六里ヶ原、北軽井沢から北上州方面に流れて天空を掩ひ、山の中腹から六里ヶ原付近は砂礫や降灰で真っ黒となった。「昭和9年2月12日、東京朝日、読売」。この記事も、地震(1934年3号)に記載され、また、火山(1935年1号)および、気象要覧(1934年2月)にも取り上げてある。さらに次の記録がある。

浅間山の爆発 [高崎] 上信国境浅間山は30日午後6時35分頃久し振りに爆発、噴煙は高く東南に流れた被害はなき見込み「昭和9年7月2日、東京朝日」。

この記事も同様に、地震(1934年8号)および火山(1935年2号)に記載されている。

これらの3つの記録が、後述する水上論文、あるいは“爆発史集”においては、認められていないのである。つまり浅間山麓にある浅間火山観測関係の観測研究機関の両方が、活動と認めていないのである。上記の噴火記事は新聞の報道記事を主体としていることが分かる。おそらくは誤記事、あるいは誤報と判断されたものと考えられる。

次に、地震(1935年10号)“昭和10年(1935)浅間山噴火資料、峯の茶屋の日記”，という資料が記載されている。その最初の記事を引用する。“2月9日小噴火 昭和7年(1932年)6月以来初めての小噴火にて国境付近に降灰、50cmの積雪上は黒くなり、通行人が発見する程度なり”。この噴火は昭和10年2月9日の事であり、その前年には殆ど活動らしきものは認められなかった様子がうかがえる。

また、同じ年に水上(1935c)は、その論説の緒言で“1932年以来約3ヶ年に亘って、全く活動を示さなかった浅間火山は、本年1月初旬より火山性微動が表れ、……”，と述べている。以上のように1934年1月9日、2月11日、6月30日に、大鳴動を伴って噴火したとの記事は何らかの誤り(活動は無かった)であって、その

事情を良く知る東京大学地震研究所浅間支所関係者、および軽井沢測候所関係者は活動を認めなかったと考えられる。著者もこれらの記録は噴火の記録としては認めることはできない。

注 59, この1934年1月, 2月, 6月の活動であるが, 気象庁(1984)日本活火山総覧, および気象庁(1991)日本活火山総覧(第2版)では, 1934年の活動記述において, 1月, 2月, 6月に1~2回噴火としているが, 年度別噴火回数表示の表中には1934年の噴火は認めていない。(第2版)では1934年11月に鳴動の記載が追加されている。次に述べる11月13日の小爆発に相当しよう。

11月13日, 08時13分, 小爆発, “11月初め頃より, 噴煙の量, 時には多く, 不規則であったが, 11月12日正午頃多量の噴煙放出していたが午後3時頃より褐色濃厚なる噴煙が, 極めて少量噴出するのみとなった。然るに, 翌13日午前8時13分山麓地方に達する音響を発して爆発し, 同時に黒煙を噴出したが, そのとき多少の火山灰が火口付近に散布した様である。この小爆発に依り, 火口の略々中央を南北に張られてあった直径3mmのワイヤーロープは切断された”。水上(1935d)による。

注 60, 当時火口底までの深さを測る目的で張られたワイヤーが切れてしまったということであり, この事実について著者は故水上 武教授より直接聞いている。“火口底の上昇, 観測所における傾斜観測, 火口における噴気の状態よりみて, 1934年10月頃より噴火の徴候が見えて来ていた”。Minakami(1935a), にある様に, 1934年の後半より次第に活動の高まりが認められるようになったと考えられる。

1934年浅間山活動の要約

11月13日, 小噴火, この噴火により火口底深さ測定用ワイヤーが切断された(東京大学地震研究所浅間火山観測所「AVO」噴火数, 11月; 0)。

103) 1935年(昭和10年)の活動

1月27日, 08時40分, 小噴火(C), 浅間山の爆発〔高崎〕浅間山は27日午前8時40分久しぶりに大爆発し噴煙は物凄く東方に流れ群馬県北甘楽郡地方に降灰があったが被害はなかった「昭和10年1月28日, 東京日々」地震(1935年2号), “爆発史集”。

2月9日, 小噴火(D), 昭和9年6月以来初めての小噴

火にて国境付近に降灰, 50cmの積雪上は黒くなり, 通行人が発見する程度なり。地震(1935年10号)。2月18日, 小噴火(D), 11時頃より約2時間噴煙のやや多量に東に靡くを見る“爆発史集”。

注 61, 1935年に入って浅間山は火山性微動の発現など次第に活動力を強め, ついに4月20日には近来稀な大爆発が発生した。これら4月, 5月の2ヶ月間に発生した大小多数の噴火に就いて, 水上(1935c)武は便宜的にA, B, C, Dの4種に分類したのである。

4月20日, 大噴火(A), 16時21分, 浅間山の爆発〔軽井沢〕久しく休止状態にあった浅間山は20日午後4時20分一大音響と共に爆発し, 噴煙は軟らかい西北の風に誘われて, 上信国境草津鉄道二度上駅を中心に軽井沢一帯の空から遠く高崎方面に向った。噴煙の移動と共に軽井沢一帯に小石が雨の如く降り, 傘をさして歩くという奇観を呈した。爆発後, 浅間山峰の茶屋付近には拳大から直径2寸位の両端のと尖った堅い石が降り, 約10分で小砂利になり約20分で止んだ。大爆発後5時30分までに十数回の小爆発あり壯観を極めた。

〔岩村田〕20日午後4時20分頃浅間山突如大爆発をなした。爆発と共に発した地響きは山麓一帯を揺り動かし, 当地方は棚の上の物が転げ落ちる程猛烈であった。

〔長野〕20日午後4時21分突如爆発した浅間山の噴火につき, 長野測候所では次の様に発表した。長野地方では障子が微動する程度で, 地震計には小地動を記した。噴煙は12,000m余に上り一大壯観を呈した。

〔東京〕葛飾区方面では20日午後9時頃から音もなく白灰粉が降り, 庭の八つ出の葉も往来する人の黒オーバー, 黒帽子も何時の間にか霜降りに変ずる有様に一時は何事ならんと大騒ぎをしたが浅間山の降灰と判明した。尚本郷地震学教室の微動計にはこの爆発は記録されて居なかった。(新聞による記事) 地震(1935年5号)。

“尚借宿では豆粒大(径1cm位)の軽石を少し混じた砂礫が約15分間降った。噴火後当所より見て前掛山の西面に多く溶岩の転落したような形跡がある。東西には一条の太い形跡が見える。当所には何の被害も無いが, 追分借宿では障子の外れたもの5, 6ヶ所, 追分の油屋では2, 3枚追分小学校では15枚程の硝子が破損したという。尚噴火後約5分程で山麓一帯に野火を発生官有林に延焼, なかでも石尊山付近が甚だしく全

- 村の消防その他消火に出動、午後9時ころ鎮火した。
 気象要覧(1935年4月)。
 この野火による焼失面積は139.35ヘクタールである
 (水上, 1935c)。
- 小噴火(D), 12時15分頃、モクモクと黒煙上がり10分位で止む。「峰の茶屋日記」(地震1935年10号)、“爆発史集”、
- 小噴火(C), 22時25分頃、ドウドウと云う音とズドンと共に爆発、大噴煙(黒色)が立ち上がり国境方面を中心に砂石を降らす。観測所付近には雹大のもの雨の如し。約5分後ズドンの一発は静かにして聞える程度なり被害無し「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。
- 4月22日, 小噴火(D), 5時30分頃より音も無く黒煙(灰色)立ち昇る。国境付近降灰約20分で止む「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。
- 小噴煙(D), 16時33分頃小噴煙あり。灰色の煙モクモクと上がり、噴煙約5分にして止む。「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。
- 4月23日, 小噴火(D), 11時37分頃灰色煙モクモクと昇る。微灰を降らした模様。「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。
- 小噴火(D), 15時37分頃灰色煙多量、頂上付近に微灰を降らした模様、5分位にして煤煙となる「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。
- 4月24日, 小噴火(D), 03時30分頃噴煙多量、黒煙にして灰を含み、国境方面へ灰を降らせるものの如し「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。
- 5月4日, 小噴火(D), 11時50分頃白煤煙が一時にモクモクと立ち昇りたり、小さい噴火の如し。爆発の前兆ではないかと思わる「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。
- 5月5日, 大爆発(B), 08時47分頃耳元近くで小銃音位の音響と共にズドンと爆発し、火山館、剣ヶ峰その他の方面に火山弾の大なるものが飛散し、前掛山頂付近には風呂桶大のものが降下したる如し。これ4月20日午後4時20分頃の爆発に次ぐ大爆発なり。噴煙は上空東に流れ小浅間山および国境方面を中心に拇指大の石を降らす。観測所付近には豆大のもの坪約1升位降る。
- この日登山者、前橋市百軒町289酒井方木澤栄太郎氏(34)が旧噴火口付近に到るや突如自分の前後に焼石が落下し、砂煙や水蒸気上がる故、山頂を見ると黒煙モクモクと昇る。噴火なりと思い逃げんとしたが足がすくみ焼石で打られると思ひながら一生懸命逃げて来た
- たと峰の茶屋で語れり「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。
 [追分支所報告]5日8時47分の噴火、音響(砲声の如し)空振あり。微動計による発震時は8時47分5秒6、(気象要覧, 1935年5月)。
 音響東京に聴こえ、関東地方に降灰在り。(水上, 1935c)。
- 小噴火(D), 11時18分頃山頂を眺めいたるに、雲多き山頂付近に白煙が上がりし故さて爆発せりと大声を出す。ゴウゴウと云う音響空に伝わり煙の中より聞こえ来る。国境付近に降灰の見込みなるが当所にも小豆大のものパラパラと降る。午前11時45分頃よりわか雨あり(小雨程度)来りその後降ったり止んだりしていたが12時30分頃にして止む「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。
 [追分支所報告]第二回の噴火は雷鳴の如く聞こえたり。11時17分「ゴウゴウ」という音響と共に黒煙噴出(気象要覧, 1935年5月)。
- 5月6日, 小噴火(D), 08時32分頃灰色煙モクモクと出て観測所付近に目を空に向けられない程度の灰を降らす。噴煙は約5分にして白煙となる「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。
- 小噴火(C), 19時50分頃小噴火して山頂付近がゴウゴウと唸り、北軽井沢、吾妻方面へ灰を降らす。ザラメ砂糖大のものなり、以下略「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。
- 5月11日, 小噴火(C), 02時36分頃ズドン、ガタガタ(戸障子の振動)と共に爆発、戸外に飛び出して見たるに、霧全く深く、山頂付近でゴウゴウと唸る音のみ聞こえ降灰もなく5分位の後ドウドウと云う音となる。ドウドウと云う音は噴火口より来り、ゴウゴウは噴煙の中より起こる音、このゴウゴウの音は暫く続く「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。
 音響東京に聞こえ、東京始め関東地方に降灰在り。(水上, 1935c)。
 [追分支所報告]11日2時33分の噴火「ドシン」と云う爆音を発し(大ならず)噴火、鳴動空振なし(気象要覧, 1935年5月)。
- 大噴火(B), 04時13分頃(04h006m42s)前回より少し大きい程度の音はズドンと一発来たれり。戸外に飛び出して見れば霧深くして山頂見えず、唯音のみであった。
- 噴火7, 8分の後沓掛方面へ小豆大の砂石が降ると駐在所より電話ありたり「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。

〔追分支所報告〕「ドシン」と前回よりやや強き爆音にて噴火、直後短時間の空振（気象要覧、1935年5月）。音響東京に聴こえ、東京始め関東地方に降灰在り（水上、1935c）。

大噴火の小（B）、06時27分頃（06h26m0s）又ズドンと一発、前回よりも少しく大きく一寸驚けり、2時間位置いて連続的3回爆発せり。これ新型なり。ゴウゴウ、ドウドウは前回よりよく聞こえ霧に包まれた山頂で唸り居れり。小諸方面よりよく噴煙が見えりと中村東日新聞記者より電話ありたり。

御代田方面から霧の晴れ間に山を見れば牙山、剣ヶ峰の草地に山火事を発見相当焼けて居るらしいとの事、その後霧雨で大部分消えたらしかりしも地元関係者多数出動せり。この原因は多分6時27分頃の爆発のためなりと見られる「峰の茶屋日記」（地震、1935年10号）。

この野火による焼失面積は10.00ヘクタールである（水上、1935c）。

大噴火（B）、06時25分「グラ」と動揺を感じたと思う次の瞬間「ドーン」と底力ある音を発して噴火す。その音響は4月20日16時21分のそれよりも幾分弱きも本朝中のものの内にては最大にして一回二回三回と順を追うに従って程度が大きくなれり、以下略“爆発史集”。

浅間山の爆発 浅間山は11日午前2時24分、同4時10分、同6時25分の三回に亘り、大爆発を為し、夢まどらかな山麓の人々を驚かした。山鳥の群れがこの音響に驚いて、一斉に飛び立ち、鳴き叫びつつ、軽井沢の空をかけめぐり、時ならぬ奇観を呈した。6時25分の爆発は軽井沢から噴煙を望む事は出来なかったが、2時24分と4時10分の爆発には、噴き上げる溶岩と、落下する溶岩と空中で衝突炸裂して大煙花を見るが如く壯観を極めた。爆発後15分乃至30分間に亘り、峰の茶屋及び軽井沢地方に盛んに降灰あり、処によりては1銭銅貨大の溶岩の落下を見た。この降灰は東京地方に迄達し目黒、渋谷、丸ノ内方面では午前6時より10時頃迄極めて薄く灰色に樹木、屋根などをおおった。「昭和10年5月12日、時事、万、報知、東京日々」（地震、1935年6号）。

小噴火（D）、08時頃またまたゴウゴウ唸りと共に小噴火せり。霧の中にて山頂も見えざりしが雪崩（雪崩の沢）の杓掛方面へ細かい灰を降らせるものの如し「峰の茶屋日記」（地震、1935年10号）。

小噴火（D）、14時37分頃ゴウゴウと小噴火をなし雪崩沢方面へ細かい灰を降らす「峰の茶屋日記」（地震、

1935年10号）。

小噴火（D）、16時15分頃又も小噴火、灰色煙を吹き出し、雪崩沢（浅間山東斜面に位置する）方面に降灰、「峰の茶屋日記」（地震、1935年10号）。

5月14日、小噴火（C）、08時26分ズドンと一発来る。

あたかも1,000mも先方で石割のハッパをかけた程度で注意して居ないと判らない程度なり。霧深くして山頂の様更に不明なれども南方へ煙が傾いて雪崩沢方面へ微灰を降らしたと察せられる「峰の茶屋日記」（地震、1935年10号）。

5月16日、大爆発（A）、21時15分頃ズドンと云う音響と共に戸障子を振動させたので、それ浅間と表へ飛び出せば全山焼石にて赤く、火山弾は相当多く噴出されたる模様にて、第三鳥居下まで飛散したものの如し。この度の噴火中最も晴たる夜の事とて壯観を呈し、4月20日の最初のものに次ぐ大爆発なり。5-6分の後ゴウゴウと唸る煙の中よりポツポツ立の先ぶれの様な音を立てて焼石が落ち始めたので山を眺めいたる人達も皆屋根の下にはいる、約3分にして焼石の落下が止みたり。表に出て落下した石を拾って見ると、大きなものは8cm位なものまでまだ暖かなりし故皆が握りあいて見たり。降灰の中心は小浅間、国境平駅方面らしい。爆発より約2時間の後晴たる空から俄か小雨あり。約10分位で止み17日午前0-1時頃は山頂付近は本曇りとなり、1時20分より小雨となる。

17日朝空に晴たる部分が多し山頂は昨夜の雨が雪となり、第三鳥居は真っ白なり「峰の茶屋日記」（地震、1935年10号）。

〔追分支所報告〕21時16分の噴火、朝来白煙少量噴出し次第にその量減じ、午後には少し青みを帯びた煙となり時々「ポカリ」と白煙を噴出するが如き程度なりしが、21時16分に至り突然「ドーン」と大砲の如き底力ある少々強き爆音にて噴火。前掛山は溶岩の噴出により物凄く火と化し、空振は爆音より約5秒遅れて感じ、硝子戸「ビリビリ」振動し同時に「ゴーゴー」の鳴動あり。21時25分頃鳴動止、噴煙は21時20分東南東方に崩れりしが噴煙中に閃光14回を見、小噴火らしきもの3回。噴火後間もなく石尊山と剣ヶ峰との間に野火を發せるも2時間程にして鎮火。当地付近降灰無（気象要覧、1935年5月）。

この野火による焼失面積は10.00ヘクタールである（水上、1935c）。

〔軽井沢〕浅間山は16日午後9時15分大音響と共に爆発し、闇の中に火柱は天に沖して、溶岩は中腹にまで落下し来り、全山火の海と化し、凄愴を極めた。溶

岩の落下による火災は山麓西長倉村地帯石尊山付近の山林に及び、剣ヶ峰方面の山林も盛んに燃えて居る。

〔東京〕16日午後9時23分頃東京西郊一帯に亘り、ドスンと重き物を急落せしめた如き音響を聞いたが、震動を伴はなかった故人々不思議に思って居た所、翌日の新聞紙上の報道により、浅間山の爆発による爆音なることが判明した。浅間山爆発の爆音が東京に迄達するは珍しき事にて、明治42年12月7日夜8時頃の爆発以来の事ではなかったかと思はる。16日爆発の地響き並びに爆音の振動は帝大地震学教室据付300倍微動計に記録されている「昭和10年5月17-18日、時事、国民、東京日々等」(地震、1935年6号)。

5月19日、小噴火(D)、08時30分頃微噴火あり。白煙モクモクと昇る、写真を撮る「峰の茶屋日記」(地震、1935年10号)。

5月20日、大噴火(B)、04時02分頃突如ズドンと共に戸障子を振動させた、それ浅間焼と表へ飛び出せば霧深くして山は見えずゴウゴウと云う音のみなり。音より察するに噴煙は東に流れ地蔵川原、分去茶屋方面へ灰を降らしたらしく思はる。この噴火は4月20日以来第3位の程度なり。爆発後約20分にしてパラパラ雨降り、06時頃より小雨程度の雨降りとなる「峰の茶屋日記」(地震、1935年10号)。

〔追分支所報告〕04時02分の噴火、「ドーン」と云う音響と共に戸障子の振動を感ず。

空振は20秒にして止む「ゴーゴー」と云う鳴動は7分にして止む。04時18分小銃を発せるが如き「ドーン」と云う音響あり(気象要覧、1935年5月)。

浅間山の爆発 20日午前4時3分頃約4分に亘り、大音響と共に爆発し、軽井沢地方には降灰はなかったが、群馬県地籍草津電鉄栗平駅付近より北軽井沢法政大学村付近は約10分間に亘って、小砂利を混えた降灰があった。以下略、「昭和10年5月21日、信濃毎日」(地震、1935年6号)。

小噴火(D)、08時30分頃深い霧の中から微灰が少し降る。「峰の茶屋日記」(地震、1935年10号)。

小噴火(D)、10時頃千ヶ滝方面へ灰を降らす「峰の茶屋日記」(地震、1935年10号)。

5月21日、小噴火(D)、16時13分頃噴煙多量、約2時間に亘り煙多く峰の茶屋付近へ灰を降らす「峰の茶屋日記」(地震、1935年10号)。

5月22日、大爆発(B)、11時23分頃(11h28m9s)噴煙全く少なくなったと思うと浅間山よりズドンの音と共に黒煙空高く昇り、火山弾が四方に飛散し三尾根山中腹には野火を何ヶ所も起こし握り拳を重ねた様な黒

煙が多量に噴出せり。腰を地におろして休んで居た人々には地動が感じ、噴煙よりは稲妻が発生す。噴煙の量は今回が一番多いらしく野火は昼頃盛んに燃えつつあると聞く。押出茶屋で音響より先に山頂を眺めていた人の話では音と野火と同じであったとのことなり。降灰は小浅間裏、国境方面にあり、その中には小豆大の砂石が多く、中には角砂糖大のもの若干あり、午後3時頃より約2時間小雨「峰の茶屋日記」(地震、1935年10号)。

この野火による焼失面積は10.00ヘクタールである。尚この噴火の音響東京で聴こえる(水上、1935c)。

「追分支所報告」11時24分の噴火、「ドシーン」と云う爆音にて噴火。山の東方一帯に降灰ありし模様。空振、鳴動共に強からず。前掛山中腹以上は少しく灰白等降下せるものの如し。当所付近には降灰等無(気象要覧、1935年5月)。

小噴火(D)、18時25分頃灰が峰の茶屋付近に降る。19時05分頃も微噴火(D)あり引き続き微噴火ありたり「峰の茶屋日記」(1935年10号)。

5月23日、小噴火(D)、04時25分頃灰色煙多く東南に流れ微灰を降らせた「峰の茶屋日記」(地震、1935年10号)。

小噴火(D)、11時45分頃微噴火、灰色煙モクモクと立ち上がる「峰の茶屋日記」(地震、1935年10号)。

小噴火(D)、12時0分頃灰煙モクモクと立ち昇り東南方へ流れ大噴火らしく見え、微灰を降らして居た「峰の茶屋日記」(地震、1935年10月)。

小噴火(C)、19時11分頃灰色煙に黒煙を混じりモクモクと立ち昇り噴煙多量、南東へ流れ微灰を降らす。噴煙約3分にしてドウドウと云う音あり。20分位多量の噴煙を続け居たり「峰の茶屋日記」(地震、1935年10号)。

19時10分頃の小噴火「追分支所報告」降灰あり(気象要覧、1935年5月)。

5月24日、小噴火(D)、10時23分頃灰色煙モクモクと立ち昇り3分位で又薄い煙となり、南東へ流れて行く「峰の茶屋日記」(地震、1935年10号)。

小噴火(D)、15時05分頃黒色煙に灰色煙を交へモクモクと音も地動もなく立ち昇り微灰を降らし居るものの如し。20分位にて白灰色煙のみとなり、南東へ流れ居たり。降灰は小沼方面へ降る。塩野、馬瀬口、御代田にも降灰「峰の茶屋日記」(地震、1935年10号)。

「岩村田町、北佐久農業校報告」「ズシーン」と戸障子にあたる音と共に小噴火(気象要覧、1935年5月)。

小噴火(D)、17時21分頃灰色煙少量モクモクと立ち

- 昇り約1分にて白煙、煤煙混じりの煙と変わる。「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号).
- 小噴火(D), 20時01分頃灰色煙モクモクと立ち昇り、晴れた空を南東に流る。大噴火らしく微灰を降らした模様、約20分の後煙は薄くなって行く「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号).
- 5月25日, 小噴火(D), 13時0分頃微噴火灰色煙モクモクと立ち昇り東南へ流れて山頂付近に灰を降らしたものの如し「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号).
- 小噴火(D), 14時25分頃灰色煙モクモクと立ち昇り東方へ流れ當観測所付近へ微灰降る「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号).
- 5月26日, 小噴火(D), 03時20分頃微噴火したらしく、3時半微灰が降り居たり。山頂一帯は本日曇りで判らず「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号).
- 小噴火(C), 14時30分頃微灰が降り居たり。約1時間に亘りて庭先に新聞紙を拵けて置けるに真っ黒になった。道行く人も口々に微灰が降って居ると語り会って行く「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号).
- 5月28日, 大爆発(B), 18時16分頃(18h15m37s)霧深き山上よりピシンと平常の大爆発より音響は小さく聞えたり。それとばかりに戸外に飛び出したるに、霧深くして見えず、東北へ流れて行くらしい爆煙の中よりゴウゴウと云う音のみ聞こえて居たり。約5-6分にして小石(白米位のもの)が降り始めポツポツから更にザーザーと盛んに降る。
- 4月20日以来この付近は降灰の量一番多いと思はる。煙の中心は国境にして相当降り居たり。降灰時間40分以上つづけり、この爆発中続いて2回ズドンがありたり。又降灰区域の幅の広さも一番大に十曲の沢から鬼押し出し岩までに亘りてこの度の噴火中の新記録なり。中略、観測所前にては新聞紙1枚に約4合程度降り。以下略「峰の茶屋日記」(地震, 1935年10号)。「ドシン」と底力のある爆音を聞く。空振、鳴動有。当地降灰無「追分支所報告」(気象要覧, 1935年5月)。
- 関東地方に降灰多し。音響東京に聴こえる。この噴火の野火による焼失面積は8.00ヘクタールである(水上, 1935c).
- 5月30日, 小噴火(D), 19時20分頃微噴火あり。(Minakami, 1935b).
- 6月16日, 小噴火(C), 20時30分頃小噴火、音響小諸、岩村田に聞こえる(Minakami, 1935b).
- 「ドーン」と自動車のパンクに似た底力ある音響で小噴火(気象要覧, 1935年6月).
- 6月18日, 小噴火(D), 19時20分頃微噴火あり、(Minakami, 1935b),
- 6月19日, 小噴火(D), 16時57分頃微噴火あり、(Minakami, 1935b).
- 6月23日, 小噴火(D), 19時40分頃微噴火あり、(Minakami, 1935b).
- 6月25日, 小噴火(D), 07時16分頃微噴火あり、(Minakami, 1935b).
- 6月27日, 小噴火(D), 10時頃微噴火あり、(Minakami, 1935b).
- 7月2日, 小噴火(C), 11時43分頃軽石、砂石観測所の庭に降る、(Minakami, 1935b).
- 遠雷の如き音響を発して噴出す。雲で様子不明、空振無し、鳴動4分、“爆発史集”。
- 〔前橋〕暫く沈黙を続けていた浅間山は2日午前10時44分爆発し、午前11時30分から午後0時30分迄、群馬県利根郡川田村、利南村、蓮根村、白沢村等の各村に多量の降灰があった。爆音は比較的小さく、前橋地方にはあまり響かなかった「昭和10年7月3日、中央」(地震, 1935年8号)。
- 7月4日, 小噴火(D), 17時35分頃微噴火あり、(Minakami, 1935b).
- 灰色の煙をやや多量「モクリ」と噴出、(気象要覧, 1935年7月)。
- 7月9日, 小噴火(D), 06時25分頃微噴火あり、(Minakami, 1935b).
- 7月25日, 小噴火(D), 10時50分頃微噴火あり、(Minakami, 1935b).
- 8月2日, 小噴火(D), 14時10分頃微噴火あり、(Minakami, 1935b).
- 小噴火(D), 14時29分頃微噴火あり、(Minakami, 1935b).
- 小噴火(D), 16時40分頃微噴火あり、(Minakami, 1935b).
- 8月4日, 小噴火(C), 07時30分頃北軽井沢で爆音聞こえる、(Minakami, 1935b).
- 「ドーン」と底力ある大砲の如き音響を発し爆発、軽井沢に少量の降灰あり、“爆発史集”。
- 注62, この爆発は、寺田(1935)の論文中に扱われた爆発の一例である。
- 8月5日, 小噴火(D), 10時40分頃微噴火あり、(Minakami, 1935b).
- 8月8日, 小噴火(D), 22時23分頃小噴火、“爆発史集”。

8月13日, 小噴火(D), 17時頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

8月15日, 小噴火(D), 05時頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

8月17日, 小噴火(C), 16時51分噴火, 礫, 砂, 灰, 沓掛に降る, (Minakami, 1935 b).

「追分支所報告」16時51分微かに地震を感じ雨戸「ガタガタ」と振動すると思う時「ゴゴー」と云う音響を聞く. 全山雲霧に包まれ山頂の模様並びに噴煙の状態は不明, 17時17分頃より降灰, 18時20分頃止む(気象要覧, 1935年8月).

浅間山は17日午後4時58分大爆発をなし大音響と共に黒煙天に押し壯観を呈した. 折柄の東風の為小諸御代田方面に約30分間に亘り小砂利混じりの降灰があり, 追分方面にも多量の降灰があった. 小諸口湯の平火山観測所付近には霰大の熱き小石が無数に落下した. 浅間山の降灰は遠く静岡県駿東郡に及び, 17日より18日にかけて薄霜程度のものが一面に地を蓋った. 沼津測候所長の談によると, 17日浅間山の爆発で吹き上げられた灰が上層気流に乗り, 北東風に送られて沼津及び駿東郡地方に降ったが, 愛鷹山々麓が殊にひどい様だ. 降灰は17日午後7時頃から同8時頃迄続いた様である「昭和10年8月18-21日, 東京朝日, 萬, 報知, 中外商業」(地震, 1935年9号).

8月18日, 小噴火(D), 07時50分頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

小噴火(D), 16時55分頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

8月19日, 小噴火(D), 13時20分頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

8月21日, 小噴火(D), 06時05分頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

小噴火(D), 07時頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

小噴火(D), 07時51分頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

小噴火(D), 16時50分頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

8月22日, 小噴火(D), 13時25分頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

8月26日, 小噴火(D), 15時40分頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

8月28日, 小噴火(C), 08時10分頃小噴火, 音響長野で聴こえる. (Minakami, 1935 b).

黒煙多量, 鳴動空振無し, “爆発史集”.

浅間山の爆発, 28日午前8時11分頃浅間山爆発, 物凄い黒煙は山上に棚引く雲を突き破って高く噴き上げ西方に靡いた. 長野測候所より観測した噴煙は6,400mの高さに達した「昭和10年8月20日, 信濃毎日」(地震, 1935年10号).

8月30日, 小噴火(D), 06時09分微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

8月30日, 小噴火(D), 07時25分頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

小噴火(D), 07時46分頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

小噴火(D), 09時03分頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

8月31日, 小噴火(D), 06時頃微噴火あり, (Minakami, 1935 b).

9月3日, 小噴火(D), 15時25分小噴火, 噴煙東に流れる, “爆発史集”, (気象要覧, 1935年9月).

9月4日, 小噴火(D), 09時47分頃黒煙「モクリ」と低く噴出, 東に流れる, “爆発史集”, (気象要覧, 1935年9月).

9月19日, 小爆発(C), 15時59分, 朝より晴れ, 噴煙少ない, 10時には青みのある煙微量, 静かで不気味であった, 15時59分「ズドン」と大音響を発して爆発, 空気振動も弱く20秒位で止む, “爆発史集”,

浅間山は19日朝から不気味な鳴動を続けていたが午後3時58分頃より約30分に亘り数回続けさまに爆発し, 秋空に高く噴煙が上がった. 峰の茶屋にある火山観測所の地震計は振幅南北動0.12 mm, 東西動0.22 mmを記録し, 地電流は盛んに活躍し, 小諸町に据付けある傾斜計も著しき変化を示した. 西北風により噴煙は上信国境方面に靡き, 草津電鉄二度上駅付近に約1時間に亘り降灰があったが, 被害は無い模様である「昭和10年9月20日, 東京日々, 東京朝日, 国民」(地震, 1935年10号).

小噴火(D), 18時15分頃微噴火あり, “爆発史集”,

10月10日, 小噴火(D), 09時07分黒煙多量に噴出, 東に靡く. 10時19分ころまで続く“爆発史集”.

小噴火(D), 14時15分黒煙少量噴出, 空気振動, 鳴動なし“爆発史集”.

10月20日, 小噴火(C), 09時51分頃微かに鳴動と空振を伴ない噴火, 窓ガラスが僅かに短時間「ガタガタ」という振動と「ゴーゴー」と自動車が橋上を通るに似た音響とともに黒煙を多量噴出, 鳴動2分で止む. 爆発史集, (気象要覧, 1935年10月).

浅間山は20日午前9時50分大音響と共に爆発した.

噴煙は約 20 分に亘り濛々と噴出，上州一帯に靡きて，大空を覆い，遠く茨城，栃木方面に及んだ。高崎地方は 10 時 20 分から約 1 時間に亘り，近年稀有の大降灰があった為，日光輝く街頭に雨傘をさす奇観を呈し，屋外は一面の降灰で化粧された「昭和 10 年 10 月 21 日。中央，国民，報知，時事」（地震，1935 年 11 号）。11 月 7 日，大噴火（B），12 時 08 分頃，「グラグラ」と地震を感じ間もなく「ドン」と大音響を発して噴火，空振弱く約 30 秒，鳴動「ゴーゴー」と約 10 分間，尚東南山麓では 5km³ に亘り枯れ草を焼いた。この日東京では午後 2 時頃から北西の一角が混濁し始め 3 時頃に至りいよいよ異様に曇った空から灰を降らし道行く人は目や鼻を被い，神宮球場の日米野球試合もタイムを要求するに至った“爆発史集”，“浅間火山”。

「軽井沢町峠町観測所報告」正午浅間山大爆発，大砲の如き音響と共に黒煙重畳天に沖し，5 分間に渉り天保銭大より小豆代の砂石降下あり。ために硝子は破壊し近年稀なる惨状を呈せり。砂石量は坪当たり 2, 3 合にして地上灰色となれり。

「前橋測候所報告」12 時 00 分可成り強き空振を感じ，直ちに西方浅間山を望むに黒煙濛々として立ち昇り茸状をなして南に傾きつつあり。12 時 14 分頃より襟巻き雲を観測せり。爆音降灰なし。

「富崎測候所報告」降灰あり。「筑波山測候所報告」降灰無し。東京降灰激しい（気象要覧，1935 年 11 月）。

〔小諸〕浅間山は 7 日午後 0 時 10 分頃，山鳴り，震動と共に大爆発をなし，天に沖する噴煙物凄く，山鳴りと共に爆発を続けること焼く 30 分，噴煙ははるか関東方面に流れている。〔軽井沢〕浅間山は 7 日午後 0 時 8 分，大音響と共に爆発，軽井沢地方一帯は 40 分に亘り小豆大の降灰あり，山麓一帯に山火事を起こした「昭和 10 年 11 月 8 日。東京日々，東京朝日，萬等」（地震，1935 年 12 号）。

1935 年浅間山活動の要約

1 月 27 日，小噴火（C），
2 月 9 日，18 日，小噴火（D），
4 月 20 日，大噴火（A）野火発生，東京，千葉など広範囲地域に降灰，21 日，22 日，小噴火（D），23 日，小噴火（D）2 回，24 日，小噴火（D），（4 月噴火回数，A；1 回，D；4 回）
5 月 4 日，小噴火（D），5 日，大噴火（B），6 日，小噴火（D），小噴火（C），11 日，小噴火（C），大噴火（B）3 回，小噴火（D）3 回，14 日，小噴火（C），16 日，大爆発（A）野火発生，19 日，小噴火（D），20 日，大噴

火（A），小噴火（D）2 回，21 日，小噴火（D），22 日，大噴火（B），小噴火（D）2 回，23 日，小噴火（D）3 回，小噴火（C），24 日小噴火（D）4 回，25 日，小噴火（D）2 回，26 日，小噴火（D），小噴火（C），28 日，大噴火（B），30 日，小噴火（D），（5 月噴火回数，A；2 回，B；4 回，C；5 回，D；21 回）
6 月 16 日，小噴火（C），18 日，19 日，23 日，25 日，27 日，小噴火（D），（6 月噴火回数，C；1 回，D；5 回）
7 月 2 日，小噴火（C），4 日，9 日，25 日，小噴火（D），（7 月噴火回数，C；1 回，D；3 回）
8 月 2 日，小噴火（D）3 回，4 日，小噴火（C），5 日，8 日，13 日，15 日，小噴火（D），17 日，小噴火（C）静岡県下に降灰あり，18 日，小噴火（D）2 回，19 日，小噴火（D），21 日，小噴火（D）4 回，22 日，26 日，小噴火（D），28 日，小噴火（C），30 日，小噴火（D）4 回，31 日，小噴火（D），（8 月噴火回数，C；3 回，D；21 回）
9 月 4 日，小噴火（D），19 日，小噴火（C），
10 月 10 日，小噴火（D），20 日，小噴火（C）高崎地方に降灰あり，
11 月 7 日，大噴火（B）東京地方に降灰あり，（AVO 噴火数，1 月；0 回，2 月；1 回，3 月；0 回，4 月；8 回，5 月；34 回，6 月；6 回，7 月；4 回，8 月；23 回，9 月；12 回，10 月；3 回，11 月；1 回，12 月；2 回）

104) 1936 年（昭和 11 年）の活動

2 月 7 日，大噴火（B），13 時 48 分頃大砲に似た大音響を發して噴火，空振やや強く外側の戸「ブルブル」と振動し約 4 分間の後止む，鳴動は「ゴーゴー」と約 10 分続く，山の中腹以上は雲が掛って見えない“爆発史集”，（気象要覧，1936 年 2 月）。

暫く沈黙していた浅間山は 7 日午後 1 時 42 分頃突如大音響と共に大爆発した。小諸地方では約 3 分間鳴動と共に戸障子を上下に震動，振り時計が止まり，棚の物が落ちる有様で，子供たちは余りの大音響と物凄い鳴動に泣き叫ぶ騒ぎを演じた。鳴動は約 10 分間続いた。前橋地方には 2 時 40 分頃から物凄い降灰があり，降雪は黒灰色に染まった。足利地方でも強き振動を感じ，降灰があった。東京地方でも午後 3 時半頃から降灰があった「昭和 11 年 2 年 8 日。東京朝日，読売，帝都日々，」（地震，1936 年 3 号）。

2 月 8 日，小噴火（D），08 時 13 分静かに噴火し噴煙は黒煙濛々として北東方面に流れる「岩村田北農報告」“爆発史集”。

2 月 10 日，小噴火（C），「追分」10 時 13 分に噴火す。7

- 日の噴火より遙かに小なり。空振約2秒あり。黒煙東に流れ26分にして白煙となる。鳴動、地震を感じず（気象要覧、1936年3月）。
- 2月11日、小噴火（D）、「追分」11時47分に10日のものと同程度の噴火あり。噴煙は「モクリ」とで出たるのみで東に流れ11時55分平常の白煙となる。地震、鳴動無し（気象要覧、1936年2月）。
- 2月12日、小噴火（D）、「追分」13時44分小音響と共に黒煙をやや多量に噴出す。48分白煙となり地震鳴動なく空振小なり（気象要覧、1936年2月）。
- 2月14日、小噴火（D）、17時50分小噴火“爆発史集”。
- 2月15日、小噴火（C）、15時57分大音響と共に噴出す。黒煙多量にして30分間噴出す。「ゴーゴー」と云う鳴動あり。鳴動は約5分後に止む“爆発史集”，浅間山の爆発、去る7日の強い爆発後、12日迄に爆発5回、微噴火4回の連続的活動をなせる浅間山は、14日午後5時50分頃またまた爆発、黄昏の雪空に濛々たる黒煙を揚げ、噴煙は北北西の風に煽られて、長野県の上空に流れた。15日午後3時57分又もや大爆発をなし、噴煙は軽井沢北方から前橋方面に流れ、小瀬温泉以北、国境平一帯は1銭銅貨大の溶岩、数分間落下し、人馬の交通を不能ならしめた。この爆発に於ける爆音は東京西郊にてかなり強く聞え、噴煙の流るを明瞭に見る事が出来た「昭和11年2月16日、東京朝日、国民、中央」（地震、1936年3号）。
- 2月16日、小噴火（D）、「追分」12時41分より音も無く灰色煙が「モクリモクリ」と同41分まで断続す。鳴動、空振、地震無し（気象要覧、1936年2月）。
- 3月5日、小噴火（C）、「追分」16時10分頃爆音有。低く「ドシン」と音し、同時に「ガタガタ」と戸窓振動す。空振数秒、地震無感、鳴動弱く「ゴー」と3分間続く。
「前橋」16時10分爆発す。爆音、空振大なり。灰雲南方を通過し降灰無し。
小噴火（D）、「追分」16時21分頃、音小銃に似たり「ゴーゴー」の鳴動3分間。
小噴火（D）、「追分」16時38分頃、無音、噴煙東乃至南に流れる。
小噴火（D）、「追分」16時46分頃、無音、噴煙東乃至南に流れる。
以上、（気象要覧、1936年3月）。
- 3月7日、大噴火（B）、「追分」10時30分噴火す。始め微震ありて後「ドーン」と爆音、続いて「ドシンドシン」と云う空振有。黒煙濛々と噴騰し「ゴーゴー」の鳴動やや強く15分間継続す。噴煙中数回の閃光あり。噴煙東へ靡く。
「前橋」10時30分爆発す。稀有の空振あり。灰雲は天頂北寄りを通り11時4分～11時30分降砂あり（気象要覧、1936年3月）。
- 小噴火（D）、10時46分頃小噴火、“爆発史集”。
- 小噴火（C）、「追分」12時41分頃噴火す。「ガタガタ」と窓振動し「ゴーゴー」と鳴動あり。噴煙東に靡く（気象要覧、1936年3月）。
- 小噴火（D）、12時43分頃、12時55分頃、12時57分頃、13時06分頃、13時10分頃にそれぞれ小噴火（気象要覧、1936年3月）。
- 「前橋」13時26分-14時10分降砂少量あり（気象要覧、1936年3月）。
- 〔前橋〕浅間山は7日午前10時33分、同46分、及び午後0時43分の3回に亘り大爆発をなした。雲の為に山容を見る事が出来なかったが、30分余りの後、黒煙濛々として前橋の上空に現われ、晴れた空は暗黒となり焼け砂が降り出し、バラバラと音をたてて物凄く、トタン屋根の家には不気味の音を立てて雨の様に降り積もり、舗道の上は車輪と足の跡がくっきりとついて、爆発の大を物語って居る。前橋市内では新聞紙一枚の上に1合余り積もった。山麓の吾妻郡長野原、嬭恋方面には盛んに焼け石が落下したが、積雪の為に山火事を起こさなかったのは幸いであった「昭和11、3、8。東京朝日、東京日々、中外商業」（地震、1936年4号）。
- 3月23日、小噴火（D）、12時15分小噴火、峰の茶屋付近にて約20分間降灰す。尚長日向駅付近細かい灰30分位降り続く“爆発史集”。
- 4月20日、小噴火（C）、「追分」1時20分軽く「ドーン」と音し窓振動す。噴煙は常と異なり火口中心より東に偏せる所に細長く直立す。後倒れる如く東漸す。山頂に溶岩噴出無し。鳴動弱く1分間続く。地震を感じず。「前橋」爆音空振強。噴煙稍多量。東北東に向かい1時36分本所上空北寄りを通す。降灰なし（気象要覧、1936年4月）。
- 〔軽井沢〕20日午前1時20分大音響と共に大爆発、噴煙は折柄の南の強風にあふられ、鬼押出しより西北方群馬県管内に靡き、約12分の後平穩に帰した。鬼押出し、吾妻、北軽井沢等には猛烈な降灰があった「昭和11年4月21日。時事」（地震、1936年5号）。
- 4月23日、小噴火（C）、「追分」08時17分、雷鳴に似たる音響を伴ない噴火す。灰黒色の噴煙余り高からず東南東へ靡く。鳴動3分間続く。地震、空振を感じず。「前橋」爆音気付かず。噴煙多量。08時36分本所北上

- 空に達す。08時52分-09時15分間微量の降砂あり（気象要覧，1936年4月）。
- 〔前橋〕23日午前8時20分頃浅間山はまたまた爆発し、折柄の西北強風の為め、噴煙は東南に靡き、前橋地方には相当の降灰があった「昭和11年4月24日、中外商業」（地震，1936年5号）。
- 5月，6月，噴火の記録なし。
- 7月10日，小噴火（D），「追分」07時30分頃無音爆発あり煙南東へ流る「岩村田北佐久農学校」（気象要覧，1936年7月）。
- 7月20日，小噴火（D），「追分」10時過ぎ小噴火あり。音響，鳴動，空振，地震等無し。
「前橋」爆音，空振，地震計記録なし，噴煙東南東に流る，管内於大前爆音不聴，於藤岡12時20分～14時50分降砂少量（気象要覧，1936年7月）。
- 7月21日，小噴火（C），「追分」09時47分少なる銃声の如き音（ポーン）と共に黒煙多量噴出，同時に微空振あり。09時50分及び10時08分に「トーン，トーン」と音有り。10時12分～10時16分鳴動「ゴーゴー」有り。噴煙高く昇騰し後東南東に靡き去る。地震無し。09時52分～10時15分噴煙中に雷鳴有り。黒煙09時47分～12時28分迄継続する。「前橋」爆音，空振，地震計記録なし。噴煙東に流れる。管内於大前爆音有り，降灰無し，於藤岡13時20分～15時05分迄少量の降灰有り，爆音無し。「長野」10時10分，測風経緯儀による噴煙測高値は海拔8,700mなり（気象要覧，1936年7月）。
- 7月22日，大噴火（B），「追分」21時20分9秒大音響「ドシン」及び雨戸の稍強振動「ブルブル」ありて噴火す。溶岩流れる如く噴出す。噴煙の昇騰急にして21時25分仰角15度以上あり。空振約15秒あり。22分～23.5分緩振動「ガタガタ」あり。噴煙中10数回の閃光，雷鳴あり。鳴動「ゴーゴー」10分間続く，地震無感，降灰無し，「長野」管内爆音聴取区域は佐久平，善光寺平の殆ど全部に及び降灰区域は珍しく北方にて下高井，下水内郡下にあり。「前橋」爆音，空振なし，地震計極微動を記録す。管内吾妻郡西部に多量の降灰あり。「名古屋」21時30分47秒北東に煙火の如き破裂音あり。空振あり硝子戸振動す。自記気圧計及び地震計に記録なし。管内にて音響を聴きたる場所およそ次の如し。津島，鍋田，豊明，西尾，安城，挙母，岡崎，大沼，豊富，国府，高里，新城，富岡，豊橋，坂下，等也。「輪島」21時30分5秒，東方に大なる異常音響有り大砲の如し。空振を伴ない窓硝子かなり振動する（気象要覧，1936年7月）。
- 7月23日，小噴火（D），「追分」02時11分，雷鳴の如く鳴動し噴火あり模様不明。
小噴火（D），「追分」02時44分，雷鳴の如く鳴動し噴火あり模様不明，
「前橋」02h11m19s5,02h41m15s55,02h44m50s8,各極微動あり。「新潟」4時半頃新聞紙一枚に0.2grの降灰有り。「山形」管内鶴岡市23日6時頃より約1時間，藤島町同日6時30分頃より約30分間降灰有り（気象要覧，1936年7月）。
- 7月24日，小噴火（D），「追分」13時38分雷鳴の如き音あり続いて太鼓の如き音響にて噴火す。地震，空振なし。「前橋」爆音，空振降灰なし。噴煙先端当所北方を15時22分通過す（気象要覧，1936年7月）。
- 7月25日，小噴火（D），08時05分小噴火あり。煙東方へ流れる「岩村田北佐久農学校」
「前橋」爆音，空振，降灰，地震計記録等なし（気象要覧，1936年7月）。
小噴火（D），「追分」14時45分黒煙多量に「ムクリ」と噴出し東に靡き去る。鳴動，空振，降灰，地震等なし。約12分にて常態に復帰す。
小噴火（D），「追分」16時38分黒煙多量に噴出す，東に靡き去る。鳴動，空振，降灰，地震等なし。約20分で常態に復帰す（気象要覧，1936年7月）。
- 7月26日，小噴火（C），「追分」08時51分先ず微震を感じ間もなく「ズドン」と爆音ありて噴火す。空振弱，鳴動約20秒続く，自記晴雨計変化なし。
小噴火（D），「追分」10時04分雷鳴の如く「ゴーゴー」と響きて噴火せり。地震，空振なし。
小噴火（D），12時10分無音小噴火あり。煙東へ流れる「北佐久農学校」。
小噴火（C），「追分」16時34分雷鳴の如く「ゴーゴー」と響きて噴火す。自記晴雨計変化なし（気象要覧，1936年7月）。
- 7月27日，中噴火（C），「追分」01時00分「ドシン」と大音響及び「ブルブル」と空振あり。噴煙奔騰し山頂紅し。弱鳴動約2分間有り。煙徐々に南東に靡く。地震無感，自己晴雨計変化なし。「前橋」管内於大前，爆音あり，降灰砂なし。「輪島」ガタンと窓硝子を叩きたる如き音す，方向不明。
小噴火（D），「追分」05時25分太鼓の如き音「ゴーゴー」に遠雷の如き音を伴ないて噴火す。空振微，自記晴雨計不変，「前橋」不聴。管内於大前，軽爆音あり，降灰砂なし。藤岡，爆音なし，夜半降灰あり，極微粒なれども地面一帯白色となる（気象要覧，1936年7月）。

7月29日, 大噴火 (B), 「追分」09時10分「ドーン」と大砲の如き音響あり。地震無感, 空振微, 降灰無し, 煙南東に靡き去る。低唸の如き鳴動約15分間続く。20日以来の噴火中最大なり。中腹まで噴出物有るを見る。山火事を発す。登山者1名死亡す“爆発史集”。

「前橋」爆音微に聞く。降灰砂なし。管内大前, 爆音あり大ならず, 降灰砂なし。藤岡, 爆音なし, 10時20分~11時降灰あり。新聞紙一枚に20grあり。鼻毛石, 爆音あり, 降灰砂なし。「銚子」降灰14時40分始まる, 15時15分上空青くなり15時40分再び降灰始まる。管内降灰有たる場所はおよそ次の如し。平群, 野田, 富勢, 旭, 布佐, 小御門, 佐原等。「横浜」19時30分~20時20分降灰あり(気象要覧, 1936年7月)。

浅間山の爆発, 29日午前9時11分浅間山は大爆発し, 山麓の杳掛, 追分付近には焼石が霰の如く降り, 森林地帯に山火事を起こし目下延焼中, 尚同30分頃第2回目の爆発があった「昭和11年7月30日。中外商業, 中央, 東京日々」(地震, 1936年9号)。

小噴火 (D), 「追分」09時27分「ゴージー」の音響と共に噴火す。鳴動5分間続く。噴煙多量南東へ靡く(気象要覧, 1936年7月)。

8月4日, 小噴火 (C), 「追分」04時20分モクツと微震を感じゴージーと鳴動を伴なって噴火した。空振はあまり強くなかったが窓戸等振動すること約20秒で止み, 鳴動約4分あり, その間二三回小破裂音を聴取した。噴煙, 山容等は霧の為不明であった。

「軽井沢町杳掛平田彦七氏報告」4時20分浅間山噴火, 音響はさほど大きくはなかったが震動烈しく, 地震の如くドンドンと響き, 約5分ばかり経て雷の様な音と同時に地震の如き震動が約1分間継続した。噴煙の様子は濃霧の為見えなかったが軽井沢では降灰も被害も無かった(気象要覧, 1936年8月)。

9月14日, 小噴火 (D), 「軽井沢町杳掛平田彦七氏報告」05時55分頃小噴火, 噴煙は僅少で5分位で止み, 降灰は浅間山中腹位までに止まった(気象要覧, 1936年9月)。

9月19日, 中噴火 (C), 「追分支所報告」18時16分46秒に「ドーン」と云う小音響とともに地震計室北側の雨戸が約5秒間微かに振動した。山頂は焼石の落下で紅く, 1分余り続いた。噴煙は黒褐色で量は中位, 東南東又は南東に流れた。噴火と同時に「ゴウゴウ」と云う鳴動が18時25分頃迄続いた。20時0分から23時30分まで黒褐色の極く小さな0.2mmくらいの灰が降り, 降灰量は3尺平方に6.0grであった。「前橋測候所報告」によると同所管内大前で爆音を聴取した由であ

る(気象要覧, 1936年9月)。

小噴火 (D), 18時25分小噴火あり, “爆発史集”。

10月1日, 小噴火 (D), 「追分支所報告」10時25分頃噴火, 山は終日雲霧に蔽われ詳細不明であったが, 10時25分頃小噴火した模様である。「前橋測候所報告」によると前橋では10時30分噴煙を見, 同所管内渋川では12時28分から13時20分迄微量の降灰があった。「宇都宮測候所」降灰あり。「水戸測候所」降灰あり(気象要覧, 1936年10月)。

10月15日, 大噴火 (B), 「追分支所報告」07時25分頃突如微かな空気振動と「ゴージー」と云う鳴動と共に噴火をし, 同27分頃から28分30秒頃まで「ゴージー」と云う鳴動があったが, 山の模様は濃霧の為不明, 8時28分頃雲が晴れて見ると黒煙が東に靡いていた。「軽井沢町杳掛平田彦七氏報告」杳掛では音響はさほど大きくは無く「ドン」と家屋に震動があって噴火を知った程度, 濃霧の為詳細は不明。「前橋測候所」では7時35分頃から多量の噴煙が東へ流れるのを認め, 8時21分から8時42分まで降砂あり, 1平方メートルに4.6gr, その後9時58分から10時17分まで又降灰があった(気象要覧, 1936年10月)。

10月17日, 小噴火 (C), 「追分支所報告」09時33分頃大音響と共に噴火, 空気振動はやや強く「ゴージー」と云う鳴動が約50秒継続した。「軽井沢町杳掛」では相当大きな爆音が聞え後5分余り「ゴージー」と物凄い鳴動が聞えたが降灰は無かった。「岩村田町」では小さな「ドーン」と云う音あり, 戸障子微かに動揺, 降灰は無かった。「前橋測候所」でもかなり強い空気振動を感じた。尚この噴火に際し登山中の学生3名中の1名(中央大学生)は噴出した岩石の為脚部に重傷を負い夕刻遂に死亡した(気象要覧, 1936年10月)。

10月20日, 小噴火 (D), 「軽井沢町杳掛平田彦七氏報告」17時40分頃小噴火, 噴煙は少量, 約10分間余噴出した(気象要覧, 1936年10月)。

11月5日, 噴煙活動 (D), 「追分支所報告」16時40分頃から約20分間大した音響も伴わず多量の黒褐色噴煙を噴出した(気象要覧, 1936年11月)。

1936年浅間山活動の要約

2月7日, 大噴火 (B) 東京に降灰, 8日, 小噴火 (D), 10日, 小噴火 (C), 11日, 小噴火 (D), 12日, 14日, 小噴火 (D), 15日小噴火 (C), 16日, 小噴火 (D), (2月噴火回数, B; 1回, C; 2回, D; 4回)

3月5日, 小噴火 (C), (D) 3回, 7日, 大噴火 (B), 小噴火 (C) 2回, 小噴火 (D) 2回, 23日, 小噴火 (D),

(3月噴火回数, B; 1回, C; 3回, D; 6回) 4月20日, 小噴火(C), 23日, 小噴火(C), (4月噴火回数, C; 2回)

5月, 6月, 噴火無し.

7月10日, 20日, 小噴火(D), 21日, 小噴火(C), 22日, 大噴火(B), 23日, 小噴火(D) 2回, 24日, 小噴火(D), 25日, 小噴火(D) 3回, 26日, 小噴火(C) 2回, (D) 2回, 27日, 中噴火(C), 小噴火(D), 29日, 大噴火(B) 死者1名, 小噴火(D), (7月噴火回数, B; 2回, C; 4回, D; 11回)

8月4日, 小噴火(C),

9月14日, 小噴火(D), 19日, 小噴火(C), 小噴火(D),

10月1日, 小噴火(D), 15日小噴火(C), 17日小噴火(C), 負傷後死亡1名, 20日, 小噴火(D), (10月噴火回数, C; 2回, D; 2回)

11月5日, 小噴火(D), (AVO噴火数, 1月; 0回, 2月; 14回, 3月; 5回, 4月; 4回, 5月; 0回, 6月; 0回, 7月; 30回, 8月; 4回, 9月; 4回, 10月; 3回, 11月; 2回, 12月; 0回)

105) 1937年(昭和12年)の活動

注 63, 1月中噴火と称するものは無かったが, 上旬及び中旬には山麓地方で時に鳴動が聞かれた. 盛んに火口内活動が発生していたと考えられる.

3日, 10時18分から10時21分迄と14時9分から14時15分迄の2回ゴーゴー遠雷のような音響が聞えた.

4日, 8時40分頃から終日音響あり.

16日, 4時頃より汽車の鉄橋を走る時の音の様な音響あり, 6時頃迄は断続的であったがその後次第に強くなり, 7時10分頃から9時迄休むことなく続いた. 9時15分から弱くなったが10時10分から再び強くなり, 10時25分より弱くなり, 10時35分には全く止んだ. 21時40分から再び弱い山鳴り「ゴーゴー」と聞え23時35分迄続いた. 微動等は無し.

18日, 2時50分鳴動かなり烈しく, それから強くなったが弱くなったりしながら終日続いた. 微動等無し.

19日, 山鳴りは前日より続き16時20分頃には全く止んだ. 白煙やや多量.

以上「追分支所報告」(気象要覧, 1937年1月).

2月20日, 7時30分から10時35分頃迄追分では遠雷の様な鳴動が聞えた.

21日, 22時13分から22日6時50分頃追分で鳴動が聞

えた. 21時30分頃追分から火口内部の紅焰が白い噴煙に映り薄紅く見えた.

「追分支所報告」(気象要覧, 1937年2月).

2月27日, 小噴火(C), 「追分支所」20時40分頃追分では戸障子振動, 次いで鳴動が聞こえ同50分には鳴動は止んだ. 全山霧の為詳細不明「爆発史集」.

「軽井沢町沓掛平田彦七氏報告」によると20時45分家屋動揺, 音響を聞き続いて鳴動が聞こえた. 峰の茶屋付近には最初は拇指大の石が降り後10分間ほど雨の様に小砂利が降った由である.

「岩村田北佐久農学校報告」20時40分頃噴火, 大爆音あり, 地震を伴い戸障子ビリビリと振動. 噴火後約10分間地鳴りが物凄かった.

「前橋測候所」21時前後に微量の降灰があった. 管内大前では約6分間鳴動, 鼻毛石では降灰があった(気象要覧, 1937年2月).

3月1日, 中噴火(C), 「追分支所」22時35分頃微震を感じ同時に強い鳴動あり, きわめて弱い爆音のような音も聞えた. 鳴動は22時55分には止んだ. 噴火後盛んに焼石を噴出し電光を生じた. 空気振動は弱かった.

「軽井沢町沓掛平田彦七氏報告」によると, 22時35分頃爆音相当大で, 震動もかなり烈しく2, 3分間家屋に響き「ガタガタ」と地震のようであった.

「前橋測候所」地震計による発現時22時35分11.3秒, 爆音不明, 降灰砂少なく, 同所管内大前, 大津では鳴動聞こえ, 谷地では爆音・空振あり, 沼田では空振を感じた(気象要覧, 1937年3月).

3月12日, 大噴火(B), 「追分支所」12時09分頃音響とともに黒煙多量噴出, 12時11分40秒に又微震を感じ家屋に空振を感じる程度の噴出あり, 13分又黒煙昇騰, 山頂の東側は降灰が積もった. 今回の噴火は鳴響の小さいのに比して噴煙の多量であった事は特筆に値する. 鳴動は21分には止み, 黒煙も24分には白色となった.

「軽井沢町沓掛平田彦七氏報告」12時10分頃噴火, 音響は大きくなかったが震動はかなり大であった. 噴煙多量, 四ツ星山方面(石尊山のこと, 沓掛付近の人々は, しばしば石尊山を三ツ星山と呼ぶ事があるので, 四ツ星山でも不思議ではないそうである: 軽井沢町在住, 元東京大学地震研究所浅間火山観測所所員行田紀也氏談)へは焼石無数に落下し, 峰の茶屋付近は拳大の岩石落下し硝子数枚破損, 小瀬方面には降灰があった.

「前橋測候所」では12時9分49.2秒地震計に微動を記

録, 12時45分から13時3分頃迄降灰があった. 同所管内大前, 藤岡では音響を聞き, 渋川・鼻毛石・桐生には降灰があった.

「足尾測候所」12時58分頃から13時22分頃迄降灰, 1平方メートルに就き約22.4grで, 大きいものは直径3.5mmのもあった(気象要覧, 1937年3月).

〔前橋〕数日来鳴動していた浅間山は12日午後0時10分突如大噴火し, 噴煙天に沖して物凄い情景を呈し, 噴煙は上州特有の北風に煽られ, 群馬県方面に流れ, 吾妻郡其の他各地に相当な降灰ある見込みで, 農作物にもかなりの被害ある模様である地震(1937年4号).

3月18日, 大噴火(A), 「追分支所」05時50分頃(49分)大音響と共に噴火, 同時に空振と鳴動あり, 06時03分には鳴動は止んだ. 音響の大きいことは昨年7月27日1時頃のものと同程度で今年に入ってから最大のものであった. 自記晴雨計は6.5mmの上昇と1.6mmの下降を記録した, この6.5mmの上昇は追分では新記録で追分では北側の障子は外れ又は破損したものがあり, 追分小学校の窓硝子は破損した.

「軽井沢沓掛平田彦七氏報告」音響は近来にない大きいものでヶ滝方面から旧軽井沢の一部に僅少の降灰あり, 又峰の茶屋小瀬方面では窓硝子の破損したのもあった. 軽井沢町では6時頃から約15分間大豆大の石を混じた降砂あり, 坪当たり約5合に達した.

「岩村田町北佐久農学校報告」3回引き続いた大音響と共に家屋障子著しく動揺, 南佐久郡北牧でも音響とともに戸障子振動.

「熊谷測候所報告」5時54分頃稍強い空振を感じ戸障子鳴動, 6時45分頃から7時頃迄降灰があった.

「前橋測候所」5時50分頃地鳴りのような鳴動を感じ続いて2, 3秒の後強い音響あり, 自記晴雨計は全振幅気圧3mmに相当する振動を示し, 地震計による発現時は5時49分19秒で尚5時51分20.7秒及び5時51分24.7秒の2回空振を記録した. 管内大前・大津・中之条・沼田・渋川・下仁田・鼻毛石・花輪・桐生・館林では爆音・空振あり, 五料・安中・藤岡では爆音・空振あり且降灰あり, 五料では新聞紙一枚上に40grあった.

「宇都宮測候所」5時58分頃から約30秒間窓硝子振動, 同所管内栗野・御厨・小山・真岡・平石等でも震動を感じた(気象要覧, 1937年3月).

3月26日, 小噴火(D), 「追分支所報告」16時11分頃の噴火, 爆音も鳴動も殆ど聞えなかったが黒煙多量噴出した. 地震振幅大(気象要覧, 1937年3月).

4月2日, 小噴火(D), 「追分支所報告」14時40分より

同47分まで9分間に亘り多量の噴煙あり, 噴煙は高く上らず東方に流れた(気象要覧, 1937年4月).

小噴火(D), 「追分支所報告」21時33分より22時15分迄42分間に亘り多量の黒煙を噴出した. 煙は高く上らず東方に流れた(気象要覧, 1937年4月).

4月6日, 小噴火(C), 「追分支所報告」20時14分音響なく噴火し火口の上は噴出せる焼石のため同15分迄紅くなった. 又同18分まで時々火口付近及び噴煙中に弱い閃光が見えた. 噴火と同時に「ゴーゴー」という鳴動があったが強くはなく21時まで続いた. 噴煙は黒く多量で東南東に流れ20時27分には止んだ. 地震, 空気振動, 降灰等もなく, 自記晴雨計の記象にも何等変化はなかった. この噴火の震動は長野測候所の地震計にも記録されている(気象要覧, 1937年4月).

4月16日, 大噴火(A), 「追分支所報告」噴火の直前微かな地震を感じ家屋が「ミシミシ」と鳴ったが, 0時02分「ドーン」という一大音響と共に噴火した. 噴火と同時に地震と空気振動とを感じ, 地震は前と同程度の「ガタガタ」とする程度の微震, 又空振は戸障子に響いてこれらを「ゴトゴト」と振動させた. 空振は2分から4分までと, 6分から8分までと2回感じた. 鳴動も噴火直後「ゴーゴー」とあり11分頃から「ドドド, ドドド」という様な響きがかなり強大に聞えた. 山の模様は霧の為不明であったが, 時々霧の中から「チカチカ」と閃光あり0時8分頃迄続いた. 自記晴雨計は4.5mmの上昇と0.2mmの下降とを記した.

「前橋測候所」0時04分「ドン」と一声大砲の如き爆音あり, 続いて強き空振あり, ウイーヘルト式地震計は0時02分00.2秒より微動を, 同04分15.2秒に空振をそれぞれ記録し, 記象は近頃稀に見る大きなものであったが, 前橋では降灰はなかった. 管内大前, 大津では5~6分間鳴動あり, 草津では弱い鳴動及び戸障子の振動を, 四萬及び藤岡では強い爆音を, 中之条では大鳴動及び戸障子の強い振動を, 沼田では鳴動及び軽震程度の震動を, 万場では鳴動及び震動を, それぞれ感じたが何れも降灰はなかった. 谷地では強い震動2回あり微量の降灰があったが, その時刻は不明である(気象要覧, 1937年4月).

浅間山の爆発 浅間山は16日午前0時2分30秒, 大音響と共に爆発し, 約20分間に亘り, 大鳴動と共に火柱天に沖し, 噴出した溶岩は山頂より行者戻し付近に落下し, 全山火の海と化した. 小浅間山西北から草津鉄道被分(分去か)茶屋, 鬼押し出方面一帯に亘り, 拳大の溶岩落下し, 3年来の大爆発であった. 〔前橋〕16日午前0時2分, 浅間山爆発, 物凄い爆音と激しい

震動があり、噴煙の通過した地方には多量の降灰砂があった。前橋測候所の地震計に現れた記録によると、近頃における最大のものと云われている「昭和12年4月17日、読売、東京朝日、大阪朝日」（地震、1937年5号）。

5月11日、小噴火（D）、「追分支所」09時30分より14分間地震空振鳴動等を伴うことなく黒煙を稍多量に噴出した。

5月21日、小噴火（D）、「追分支所」18時04分より20分間地震空振鳴動等を伴うことなく黒煙を稍多量に噴出した（気象要覧、1937年5月）。

6月7日、大噴火（B）、「追分支所」04時37分頃、噴火時霧の為山は見えなかったが「ゴーゴー」という鳴動と「ガタガタ」という戸障子の震動を感じた。振動は極く緩やかで、約50秒で止み、鳴動も4時54分全く止んだ。6時43分雲霧全くはれ白煙が多量北方に流れるのが認められた。

「軽井沢町平田彦七氏報告」4時40分より約10分間「ゴーゴー」と鳴動が聞えたが、噴煙は見えなかった。沓掛方面には降灰なく、峰の茶屋大ダルミ辺を中心に拳大の溶岩が降下し、小瀬、千ヶ滝及び軽井沢方面には小砂利交じりで拇指大の石が降下したが格別被害はなかったものと思われる。

「熊谷測候所報告」6時06分より2分間と同13分より24分迄と2回降灰あり、潤葉樹の葉上やトタン屋根に「サラサラ」と軽音を立てて降り、就中16分より19分間迄は降灰状態比較的旺盛であったが、蒸発計に採取せる降灰量は0.26グラムに過ぎなかった。又爆発に際しては音響空振等は何等感知しなかった。降灰は本県北部一帯に亘って多少あったが、南部にはなかった模様で、その被害も軽微と推測される。

「前橋測候所報告」前橋一最初の爆発による空振は僅かにあったが人体には感知せず、地震計は4時37分11秒より微動を記録し、その後又1回空振があった。降灰は5時50分より6時29分迄続き、その量は1平方米に27瓦であった。大前一鳴動約10分間、降灰5時10分より30分間。大津一鳴動約4分間、降灰あり。五料一降灰5時03分より15分間。藤岡一降灰5時30分より6時迄、空振弱。四万一降灰6時20分より約4～5分間、極少量（気象要覧、1937年6月）。

〔軽井沢〕7日午前4時39分、浅間山は物凄い鳴動と共に爆発し、軽井沢地方に約5分間に亘り、直径1糎位の溶岩粒落下した。〔前橋〕浅間山は今暁大音響とともに爆発し、折柄の南風に煽られて前橋地方に降灰があった「昭和12年6月8日、中央、東京日」（地震、

1937年7号）。

6月10日、小噴火（D）、「追分支所報告」08時0分、音もなく黒煙を多量噴出、

小噴火（D）、「追分支所報告」12時10分-47分、黒煙噴出、

小噴火（D）、「追分支所報告」12時52分-13時06分、黒煙噴出、

小噴火（D）、「追分支所報告」13時31分-56分、黒煙噴出、

小噴火（D）、「追分支所報告」14時46分-15時10分、黒煙噴出、

小噴火（D）、「追分支所報告」18時36分-19時10分、黒煙噴出、

これらの噴火による降灰は山頂特に東側に多く、地肌は灰色を呈したが西側には認められなかった（気象要覧、1937年6月）。

6月15日、小噴火（D）、「追分支所報告」19時08分より22時32分迄極めて微量の降灰があり、軽井沢町古宿、沓掛付近は屋根瓦の幾分白くなる程度であった。

6月20日、小噴火（D）、「追分支所報告」08時30分頃、灰色の噴煙多量噴出し北又は北北西に流れ15時15分迄続いた。浅間山の北西方小県郡長村字菅平及び上高井郡仁礼村に僅かの降灰があった（気象要覧、1937年6月）。

6月21日、小噴火（D）、「追分支所報告」05時38分頃、灰色の煙多量噴出し北方より北西方の間に流れ夜に入り南西方に変わり為に追分地方にも微量の降灰があった。22日10時50分頃煙の量は減じたが11時15分頃「ゴー」と微かな遠雷の如き鳴動1回あり、18時18分より「ゴー」と鳴動連続して聞こえ21時頃から一層烈しくなり同20分には火口上が薄紅く見えた。追分支所の調査によれば21日より22日にかけての爆発による降灰は上層気流に支配せられている事実が明瞭で、21日は浅間山の北西方に当る小県郡傍陽、長両村と上高井郡の大部分に微量の降灰あり、22日は浅間山の南西方に当る小県郡の上記両村を除く大部分の地及び北佐久郡の大部分、南佐久郡の北部等に微量の降灰があった「付図あり」（気象要覧、1937年6月）。

6月23日、小噴火（D）、「追分支所報告」13時40分頃、多量の噴煙あり南西に流れた。夜に入り追分地方に微量の降灰があった。追分支所の調査によればこの日3時頃から10時頃迄の間に山麓の伍賀、小沼、小諸、滋野、川辺、本牧、三岡の各村に少量の降灰があった（気象要覧、1937年6月）。

6月24日、鳴動、01時30分より07時15分迄「ゴー」

という鳴動を聞いた由。

6月26日、小噴火(D)、「追分支所報告」16時57分より同59分まで「ゴーゴー」と鳴動あり、当時は噴煙は少なかつたが同日21時頃より翌朝までの間に微量の降灰があつた(気象要覧, 1937年6月)。

6月28日、小噴火(D)、「追分支所」13時32分頃、底力のある「ゴト」という音響を聞き屋外に出て浅間山を望んだが全山雲に包まれて詳細不明。鳴動はなく、空振も微かに感ずる程度のものであつた(気象要覧, 1937年6月)。

6月30日、小噴火(D)、「追分支所」08時28分頃、この噴火は室内に居たものは全然気付かず、屋外に居た者の中でも特に注意深い人にもみ判る程度の弱い「ドーン」という音響が1回聞えただけで鳴動はなかつた。当時は降雨中で全山雲に蔽われ見えなかつた(気象要覧, 1937年6月)。

注64、「追分測候所報告」7月以降年末まで噴火と称するような活動は1回もなかつた。以下に順を追つて記述する。

7月1日、18時以降火山性微動が盛んに現れる。

7月2日、01時40分頃より鳴動あり、遠雷又は「ゴーゴー」というような音であつたが05時13分止んだ。山は雲霧の為見えなかつた。

7月3日、05時45分頃より鳴動あり、微動も亦盛んに出現した。鳴動は殆ど連続的で、正午頃及び15時頃には底力のある「ドドーン」というかなり強いものがあつた。日中山は雲霧に蔽われて見えなかつたが、夕刻より雲はれ、夜に入って山頂火口付近は鳴動と同時に薄紅く見えた。16時10分雲の間より灰色の噴煙南東に流れ、追分地方には此れが為16時10分より21時50分迄軽石の粉末様の微量の降灰があつた。降灰により葉面は白く見える程度となり、養蚕家には若干の被害がある見込み。4日も引き続き鳴動微動共に衰えず、灰色の噴煙少量上昇し東に流れ、5日08時43分に至つて全く止んだ。此の間少量の降灰等があつた。

7月7日、18時27分より「ゴーゴー」と鳴動あり、18時33分止んだ。当時少量の噴煙が東に流れてゐた。21時20分火口上が紅く見えた。

7月20日、05時17分頃より弱き鳴動あり、汽車の鉄橋を通る音に似て、終日時々聞え、21日06時50分頃より稍強く盛んとなり、07時00分より再び弱くなり、08時20分に至つて止んだ。7月中に発生した火山性微動の総数は1267回を数えた。就中3日には610回

が発生し月中の半数に達した。

8月には下旬に時々弱い鳴動を聞いた程度で、噴火と称するものは1回も無かつた。

9月中には1日早朝より3日夕刻にかけて弱い鳴動を聞いた程度である。

10月中、9日09時02分より同11時47分迄及び10日20時30分頃より11日18時40分頃迄、時々弱い鳴動を発生した以外は異常なかつた。

11月及び12月は静穏に終始した(気象要覧, 1937年7月~12月)。

1937年浅間山活動の要約

1月上旬、中旬には火口内活動、山麓で鳴動が聞かれる。

2月20~21日、鳴動、火映、27日、小噴火(C)、(噴火回数、C; 1回)

3月1日、小噴火(C)、12日、大噴火(B)小瀬、群馬県下渋川、桐生等に降灰、18日、大噴火(A)、追分小学校の窓硝子破損、軽井沢町降灰砂、群馬県下降灰、26日、小噴火(D)、(3月噴火回数、A; 1回、B; 1回、C; 1回、D; 1回)

4月2日、小噴火(D)、6日、小噴火(D)、16日、大噴火(A)、爆発音強烈、爆発地震振幅大、(4月噴火回数、A; 1回、D; 2回)

5月11日、小噴火(D)、21日、小噴火(D)、

6月7日、大噴火(B)、群馬県下降灰、10日、小噴火(D)、6回、15日、20日、21日、23日、26日、28日、30日、小噴火(D)が発生した。(6月噴火回数、B; 1回、D; 13回)

7月中、噴火は無かつたが初旬にはしばしば鳴動が聞え、微かな降灰があつた。

8月、9月、10月には時折弱い鳴動が聞かれた。

11月、12月は静穏であつた。

(AVO噴火数、1月; 0回、2月; 3回、3月; 13回、4月; 6回、5月; 1回、6月; 8回、7月; 0回、8月; 0回、9月; 0回、10月; 0回、11月; 0回、12月; 0回)

106) 1938年(昭和13年)の活動

注65、1月及び2月中には噴火と称するような活動は見られず白煙を噴出するだけであつた。追分支所の報告によれば、3月に入つても静穏な状態が続いたが、18日朝より噴煙の状態が異常を示し薄い灰色の噴煙少量となる。23、24日と火山性微動が増加し25日の爆発となる。

3月25日、大噴火(B)00時15分の噴火、「追分支所」始め地震を感じ、間もなく「ドカーン」と大爆音あり、戸、窓振動する。濃霧のため噴煙状態は見えなかったが、噴出した岩石が閃光を発し、弱い雷鳴が聞えた。鳴動は強烈だったが00時22分頃より次第に弱まり、25分には止んだ。閃光も00時21分頃迄続いた。相当の噴出物があったと思われる。降灰は無かった(気象要覧、1938年3月)。

浅間山の爆発 久しく鳴りを鎮めて居た浅間山は3月25日午前0時12分頃大音響と共に爆発、約20分間鳴動を続け、噴煙は群馬県側に靡いた。峰の茶屋浅間火山観測所々員の談によれば、去年4月16日爆発以来のもので鳴動は25分間続いた。山頂から横道付近に相当な溶岩落下し、鬼押し出し方面には猛烈に砂礫が降った。

浅間山は3月に入ってより、不規則な噴煙を続け、去る12日朝から地震計に微動を記録し、警戒していた「昭和13年3月26日、中央、読売、東京朝日、東京日々」(地震、1938年4号)。

4月20日、大噴火(A)、03時47分頃の噴火、「追分支所」浅間山は19日早朝より少量の白煙を上げていたが、20日03時47分頃噴火した。微震を伴い、「ドーン」という音響があり、戸、窓に弱い空振を感じた。屋外に出て見れば、中腹以上は全山火の海と化し、湯ノ平、剣ヶ峰の東麓地帯には野火が発生し盛んに燃焼していた。黒煙は多量で天に沖し、噴煙中に盛んに「チカ、チカ」と閃光があり弱い雷鳴を伴った。鳴動は盛んに聞え、03時49分頃と同50分頃の2回に亘って小噴火した。この2回の噴火では、噴出溶岩は火の柱となり火口の南西方向に多く噴出した(第1回噴火の溶岩は落下後に見たので模様分らず)。一面火の海を呈した山も03時55分頃より次第に鎮まり、04時頃には野火だけとなる。閃光は03時59分、雷鳴は04時00分頃には止んだ。黒煙は東南東に流れ、04時05分には少量となったが白煙にはならなかった。中腹以上は相当の積雪があった所に噴火した為、積雪が一時に溶流して、頂上よりかなり大きな溝を生じた。野火は朝になっても鎮火せず、10時頃迄には剣ヶ峰の東側斜面全部を焼いた。

「岩村田観測所報告」軽く「ドーン」と遠い砲声の様な音があり、戸障子の振動極めて僅かで気付いた者は極く少数であった。煙は東に倒れ、噴煙中に閃光閃き、月光の夜空澄み渡って良く望見できた。石尊山の辺まで溶岩落下して赤く照り輝き、前掛山の裏手も赤く光り壯観を呈した。噴火後は地鳴り僅かにあり、地震な

し。

「軽井沢町沓掛一平田彦七氏報告」「ドン」と著しい爆音あり、後雷鳴数分間鳴り響いた。噴煙極めて多量で、静かな南東の風によって、峰の茶屋より2、3町南を中心に5、6寸位の扁平な金石落下し、拇指大の小石が地面の見えない位降った。落下物は山より遠ざかるにしたがって順次小さくなり、小瀬、長日向方面には2寸角位の扁平石混じりの小砂利降った。このため峰の茶屋南方の国有林の樹木は枝折れ、相当の被害がある模様。

「前橋測候所報告」前橋では米粒大の降灰が烈しい。噴煙真東に流れて、その速さは約2斤/分。降灰は04時45分止んだ。以下5月号による追加報告、03時49分空振あり。灰雲は04時10分本所の真上を通過し東に向かう。04時15分より米粒大の黒灰色安山岩の破片降下し始め、時と共に次第に小粒となり粒数を増したが、終わりには粉状となって、04時42分止んだ。粒の最大のもの長径8.3mm短径5.4mmもあったが、直径1.8mm前後のものが最も多かった。降砂量206gr/m²、今回の降砂量は明治30年当所創立以来の最大記録である。管内各観測所における状況は、三ノ倉；降灰砂567gr/m²、粒の最大なものは長径32mm短径20mm質量5grに及ぶ。桐生；降灰砂187.8gr/m²、粒の最大長径1.5mm。0.7mm程度のもの最も多し。伊勢崎；降灰砂47.7gr/m²、粒の最大0.15mm。他略。

「水戸測候所報告」08時20分より同50分まで降灰があった。

「横浜測候所報告」07-8時の間に微量の降灰があった。以上(気象要覧、1938年4月)。

浅間山の爆発 4月20日午前3時47分、浅間山は大音響と共に爆発し、噴煙天に沖し、折柄の月光に反映して壯観を呈した。鳴動は約30分間継続し、噴煙は群馬県方面に靡いた。爆発と同時に多数の溶岩を噴出し、山頂から中腹は一面火の山と化し、前掛山並びに石尊山の中腹、小浅間付近の国有林に火災を起こし、岩村田営林署から急派せる30余人の人夫の努力により漸く正午頃鎮火した。前橋地方一帯は午前4時15分頃から42分頃にかけて、物凄い降灰があった。前橋測候所の調査によると、降灰量は1平方メートルにつき206瓦で、近頃になき多量のものであった。昭和13年4月21日、東京日々、読売、国民、二六、報知、都、東京朝日等(地震、1938年5号)。

4月20日、小噴火(D)、14時18分頃の噴火、「追分支所」14時18分頃音響、鳴動、地震等を伴わずに黒煙を多量に噴出した。黒煙は東に流れ、14時31分再び元

- の灰色の煙となり、後同 57 分頃には青味がかった薄煙が少量ポカリポカリと緩やかに上昇していた（気象要覧、1938 年 4 月）。
- 4 月 23 日、大噴火（B）、02 時 21 分頃の噴火、「追分支所」02 時 21 分頃ゴトゴトという底力ある音響と共に浅間山噴火し、微かに空振を感じた人もあった。当時降雨中であつたので山は見えなかつた。尚 20 日 14 時 18 分の噴火後浅間山は平常の通り白煙を多量噴出してた（気象要覧、1938 年 4 月）。
- 4 月 24 日、小噴火（C）、14 時 40 分頃の噴火、「追分支所」14 時 40 分頃ゴーゴーと云う鳴動を聞き、41 分 20 秒頃からドーンと宛ら野砲を発射するような音響始まり 44 分に止んだ。朝から中腹以上は雲に包まれて見えず、噴火時も山頂には雲があつたが、次第に東に流れ、雲間より黒煙多量に噴出し東に靡くのが望見された。噴煙中には閃光が見られた。山頂付近（特に火口の東側）には降灰甚だしく、山肌は灰白色となった。噴火の噴煙は 14 時 48 分頃終煙となったが、尚 15 時 20 分頃迄に黒色の噴煙が 3 回あつた（気象要覧、1938 年 4 月）。
- 5 月 1 日、大噴火（B）、10 時 07 分頃の噴火、「追分支所報告」浅間山は 4 月 30 日早朝頃より薄煙少量となつていたが、5 月 1 日 09 時頃更に少量となり、噴火直前 10 時の観測中には噴煙殆ど無き状態であつた。10 時 07 分観測の未だ終わらざる中、ドーンと いう弱い音響と共に噴火した。暗褐色の噴煙多量直上し、10 時 12 分頃に南南東に拡がり、やがて上方は東南東に流れ、下部は北東乃至東に流れた。噴火と同時にゴーゴーと弱い鳴動があり、10 時 18 分迄継続して止み、噴煙は 10 時 30 分頃止んだ。この噴火は火口の東部より発し、噴出物も岩石は少ない模様。
- 「軽井沢観測所報告」噴煙は垂直に約 3,000 m 上昇し、初め南東後東南東に流れる。暗灰色で灰を含む模様である。
- 「前橋測候所」噴煙の先端は 10 時 45 分本所の正南を通り南東に向う。帯状の灰雲は全体として仰角次第に高くなり、11 時 30 分その北縁は本所の真上に来て 12 時 44 分砂状粒状混合した微細な降灰が始まる。13 時 19 分降灰止む。管内観測所一大前；鳴動強く 5 分間続き、少量の降灰あり。大津；音響頗る大きく戸障子微かに振動し 10 時 30 分より 5 分間微粒の降灰あり（気象要覧、1938 年 5 月）。
- 5 月 4 日、小噴火（D）、15 時 10 分頃、黒煙多量噴出、15 時 37 分頃止む。
- 小噴火（D）、16 時 44 分頃、黒煙多量噴出、東に流れ、
- 16 時 51 分止む。
- 5 月 5 日、小噴火（D）、04 時 45 分頃、薄い噴煙少量噴出、東南東に流れる。
- 5 月 9 日、小噴火（D）、05 時 46 分頃、黒煙多量噴出、東に流れる。05 時 57 分止む。
- 小噴火（D）、12 時 23 分頃、黒煙多量噴出、東に流れる。12 時 31 分止む。
- 小噴火（D）、16 時 34 分頃、黒煙多量噴出、東に流れる。16 時 44 分止む。
- 5 月 16 日、小噴火（D）、17 時 55 分頃、黒煙多量噴出、北東に流れる。18 時 06 分止む。
- 5 月 20 日、小噴火（D）、05 時 27 分頃、黒煙多量噴出、07 時 20 分止む。
- 以上「追分支所報告」（気象要覧、1938 年 5 月）。
- 5 月 21 日、大噴火（A）、17 時 39 分頃の噴火、「追分支所報告」パーンと自動車のタイヤがパンクした時のような一大音響と共に噴火する。中腹以上は雲に包まれて山頂の様子は不明だが、黒煙多量天に沖して南東に崩れて行くのを雲間より望見する。噴煙は灰を降らせつつ東南東に流れ去つた。噴火と同時にゴーゴーと鳴動あり 47 分まで聞えた。この噴火の爆音は昨年 3 月 18 日 5 時 49 分のものより遙かに大きく、松林などは波を打ち近年稀な大きさであつた。
- 噴火と同時に山火事が起こり、南面東方は大窪沢の上、西方は石尊山の裏付近より全山濛々とした煙に蔽われる。この噴火により追分部落では追分小学校の硝子障子 7 枚が破損し、住家の北側の雨戸或いは障子の外れたもの 4 戸、障子全体の張替えを要する程度の被害をうけたもの 1 戸を生じた。
- 「軽井沢観測所報告」爆音は一声砲声のようであつた。噴煙は瞬間に 5,000 m 位上昇した。初めは急速に南東に流れ、後東南東に流れた。山腹南側 1,500 m 付近には落石による山火事が起こる。降砂降灰なし。
- 「岩村田観測所報告」大砲のような大爆音があり、同時に戸障子家屋等震動し、窓硝子の破壊したものがあつた。噴火後山頂よりゴツゴツと約 3 分間明瞭に地鳴りを聞く。噴煙は雲間に大きく昇り東南東の方角に流れる。降灰無し。硝子戸僅少破損。
- 「前橋測候所報告」ドドドダーンと近来に無い大爆音を聞く。降灰無し。管内観測所よりの報告によると、五料；17 時 55 分より 18 時 20 分迄米粒大の降灰あり、降灰量新聞紙全紙面に 25 gr. 大津、沼田；弱震程度の震動を感じた。大爆音あり。大前、中之条；鳴動、大爆音あり。
- 「熊谷測候所報告」爆音と共に極めて顕著な空振が

あった。窓硝子・ドア等振動した。18時50分降砂始まり、19時40分止む。

「甲府測候所報告」17時40分頃北方に大砲の音のような異常に大きい爆音を聞き、戸障子、窓硝子等の震動は破壊を懸念する程であった。市内では戸外に飛び出した者が相当多かった。

「輪島測候所報告」17時50分頃弱い空振があり数秒後一大音響を観測し、地響きと共に窓硝子ビリビリと振動し直ぐに止んだ。

東京市内に於いても所により弱い爆音と相当強い空振とを観測し、また降灰らしいものがあった(気象要覧, 1938年5月)。

浅間山の爆発 5月21日午後5時50分頃、浅間山は大音響と共に大爆発をした。小諸方面にては家屋が上下に激動し、小児等は泣き叫び、家畜も右往左往に駆け回る有様であった。噴煙は折柄全山を包んでいた夕焼け雲を突き破って、天に押し、夕陽に照り映えて壮観を呈した。岩村田町では空振の為硝子障子の破壊された所が至る処にあった。爆音は遠く前橋、甲府、東京方面迄聞こえ、群馬、埼玉両県下に大降灰あり、碓氷、北甘楽の各地には米粒大の焼砂が降った。北佐久教育会の調査によると昭和4年1月(9月)18日大爆発以来のものであった。この大爆発後引き続き小爆発を繰り返して22日に及び、峰の茶屋付近では時々爆音、鳴動が聞え、降灰がある「昭和13年5月23日、東京朝日、国民、都、中外商業等」(地震、1938年6号)。

5月22日、小噴火(D)、09時50分、噴煙急速に東に流れる。微量の灰を含有する模様、「軽井沢観測所」

5月24日、小噴火(D)、10時43分、噴煙遅くESEに流れる。灰を含有せず「軽井沢観測所」

小噴火(D)、12時00分頃黒色噴煙稍多量噴出、東方に流れる、12時20分頃止む。

小噴火(D)、12時52分頃黒色噴煙稍多量噴出、東方に流れる、12時59分頃止む。

小噴火(D)、15時47分頃黒色噴煙稍多量噴出、東方に流れる、15時55分頃止む。

小噴火(D)、17時43分頃黒色噴煙稍多量噴出、東方に流れる、18時04分頃止む。

小噴火(D)、20時04分頃黒色噴煙稍多量噴出、東方に流れる、20時25分頃止む。

5月25日、小噴火(D)、12時00分頃暗褐色噴煙稍多量噴出、東方に流れる、12時10分頃止む。

5月26日、小噴火(D)、08時22分頃黒色噴煙多量噴出、東方に流れる、08時38分頃止む。

5月31日、小噴火(D)、06時33分頃黒色噴煙多量噴出、東方に流れる、06時47分頃止む。

「追分観測所報告」(気象要覧、1938年5月)。

これらの小噴火の他に、7日には2回に亘り微量の降灰が軽井沢観測所で観測され、29日22時より30日05時の間に追分支所において極めて微量の降灰が観測されている(気象要覧、1938年5月)。

6月2日、小噴火(D)、12時30分頃暗褐色噴煙稍多量噴出、東方に流れる。火口東部より噴出。

6月3日、小噴火(D)、17時21分頃灰色噴煙稍多量噴出、東方に流れる。17時37分頃止む。

6月4日、小噴火(D)、07時39分頃灰色噴煙稍多量噴出、東方に流れる。07時49分頃噴煙少量となる。夜に入り付近幾分赤く見える(気象要覧、1938年6月)。

6月7日、大噴火(A)、06時24分頃の噴火、「追分支所報告」浅間山は3日午後より薄煙少量となり、7日06時24分ドーンと底力のある爆音と共に噴火した。同時に空気振動と鳴動があり、鳴動は06時33分に止んだ。当時、山は雲霧のため見えなかったが、07時14分頃雲が切れ、暗褐色の噴煙が多量ESEに流れているのを望見した。06時40分頃より山は再び雲に蔽われて状況不明となったが、その頃迄噴煙は止まなかった。噴火の直前より噴火後まで30余回全振幅1-2μ程度の微動があった。

「岩村田観測所報告」ズドンと一声爆音があり、続いて家屋戸障子が動揺する。山頂で約2分間ゴーゴと鳴動があり、降灰はなかった。詳細は曇天の為不明、尚、この日07時45分及び13時15分にも噴火があり噴煙は東に流れた。この日は終日噴煙多く、連続的に噴火した。

「軽井沢観測所報告」爆音はドーンと一声砲声のようで、あまり大きくはなかった。また空振も極めて微弱であった。噴煙は朝霧のため明瞭ではないが数km以上上昇した様だ。急速に始めは南東、後東南東に流れたようだ。噴煙中の所々で雷鳴が起こり、2分余り継続した。沓掛付近は降灰砂は無かったが、軽井沢方面には微量の降灰があり、北方は星野温泉付近より降砂始まり、峰の茶屋一带には拳大の降石があり同茶屋の屋根数ヶ所が破壊された。また小浅間一带には人頭大の火山弾数ヶ所に落下し、十数ヶ所に野火を起こしたが被害は軽微の由。小浅間北方の山林中には落葉松の樹頭枯死したものが多数ある。東前掛山南方には高さ20m以上の大岩石が落下し、沓掛軽井沢方面よりも明瞭に認められる。

「前橋測候所報告」06時27分稍大きい爆音ドンドン

と2回続けて聞える。噴煙は多量東に流れ、先端は06時42分10秒本所の真上に達する。その後噴煙は全体として次第に南東にながれ、07時30分本所の南方約45°の高さに東西に亘って棚引いた。本所の西南、南、南東の方向一帯は07時50分頃降灰している様で、視程が頗る悪かった。その他、「熊谷測候所」では07時44分頃より降灰始まり、08時35分止む。また「筑波山測候所」に於いても山麓、山頂両方で降灰があった。「中央气象台、東京」に於いても降灰が観測された(気象要覧、1938年6月)。

浅間山の爆発〔軽井沢〕6月7日午前6時25分頃一大音響と共に爆発、噴煙天に押し、軽井沢の上空は一面に墨を流した様になり、壁を隔てて鼠の騒ぐ音を聞く様な鳴動約30分間継続多量の降灰砂があった。躑躅ヶ原付近には多数の溶岩片落下し、火災を起こしたが間もなく消し止めた。〔前橋〕浅間山爆発の噴煙は東南に靡き、群馬県下の碓氷、多野、北甘楽、高崎、新田、佐波、邑楽等各地に降灰があった。春蚕は丁度上ぞく期にあり被害は無かった。〔高崎〕7日午前7時頃から高崎地方に降灰があり、折柄登校中の生徒、児童は皆傘をさしての往来となり奇観であった。桑その他農作物には多少の被害がある見込み。〔浦和〕7日午前9時25分頃より浦和市一帯にかなりの降灰があった。通行人の衣服が真っ白になった「昭和13年10月4日、読売、国民、東京日々、東京朝日、報知等」(地震、1938年7号)。

注66、水上、(1940)の論説中に、この6月7日の爆発について、次のように述べられている。

“ここでは主として最近4年間中最も著しい爆発によって噴出せる火山弾の落下分布の1,2の例を示し、其の分布域の形状及びその面積は、噴出速度は勿論火口底溶岩面の高さ、溶岩面上爆発地点の位置及び火口壁の高さ等に関係する事を示し、爆発の機械的エネルギーを噴出溶岩量とその噴出速度から算出した結果を示そうと思う。

最近4ヵ年に亘る活動期に於いて最大の噴火は昭和13年6月7日のものであるがそれを除けば、ここに挙げた昭和10年4月20日及び昭和12年4月16日の爆発は最も著しいものに属している。”上記の文中にある様に、この6月7日の爆発は機械的エネルギーより見て、最大級の噴火に属するものであったと考えてよからう。それに関して水上は、北佐久郡志自然篇(1955)において次の様に述べている。

“このようにして浅間山の爆発の大きさをエネルギー

或いは爆発時の圧力を以て表現し得るようになったのであるが、この様にして調査した結果による最近20~30年に起こった爆発の中で、最大のものは昭和13年6月7日に起こったもので、そのエネルギーは 1.7×10^{20} エルグ、圧力563気圧に達する極めて激しいものであった”。

この点に関して、著者が、故水上教授より聞いた話では、“この噴火の際に、トンを超えると想定される大火山弾が浅間火山観測所上空を白糸の滝の方向に飛んだのを目撃した”，そうであって、強烈な印象を受けられたらしい。以上のようにこの1938年6月7日の爆発は、記憶するに値する大爆発であったと考えられる。浅間山の噴火の機械的(運動)エネルギーの算定の詳細については、Minakami(1942)、を参照いただきたい。

6月7日、小噴火(D)、12時07分頃暗褐色噴煙多量噴出、東方に流れる。12時30分頃止む。「追分支所」(気象要覧、1938年6月)。

小噴火(D)13時12分頃暗褐色噴煙多量噴出、東方に流れる。爆音、鳴動等なく噴煙モクリモクリと高く昇る「追分支所」。

6月11日、小噴火(D)、05時40分過ぎより降灰微量、葉面に幾分痕跡を認める程度。11時30分頃止む。「追分支所」

6月19日、小噴火(D)、06時02分頃黒色微粒の降灰、06時08分止む“爆発史集”。

6月26日、小噴火(D)、07時45分頃黒煙多量噴出東北東に流れる。08時00分頃青白色の煙となる「追分支所」。

小噴火(D)、09時33分頃灰色煙多量に噴出、東北東に流れる。09時44分再び灰色煙稍多量噴出する。

小噴火(D)、16時26分頃暗黒色噴煙多量噴出、東方に流れる。16時45分青白色となる「追分支所」。

6月30日、小噴火(C)、「追分支所報告」13時35分頃噴火し、36分頃より弱い鳴動が短時間あり、40分頃ポコンという小音響があったが霧のため山容不明。

「軽井沢観測所報告」爆音はあまり大きくはなく、鳴動は顕著で長く継続した。濃霧の為噴煙状態は不明だが、東に流れたようだ。14時18分より極微量の降灰があった。白色で樹葉に点々と付着した(気象要覧、1938年6月)。

7月3日、鳴動「追分支所」10時50分頃鳴動約2分間、山は霧で不明。

小噴火(C)、11時28分頃爆音、鳴動、空振等無し、全山雲に覆われ噴煙不明。7月4日、小噴火(C)、「追分支所報告」02時17分頃、降雨中で噴煙不明、小爆音

と戸障子に弱い空振を感じる。

7月8日、小噴火(D)、「追分支所報告」01時56分頃噴火、爆音空振等感じない。

7月10日、小噴火(D)、「追分支所報告」17時45分頃微量の降灰あり「軽井沢観測所」。

18時35分-19時10分白色微粒降灰、点々として僅かに認められる程度、星野付近には降灰数回あった由。

7月15日、小噴火(D)、「軽井沢観測所」8時50分-9時30分、11時20分-12時05分、微粒の降灰あり、灰白色で点々と地物に付着した。

7月16日、大噴火(B)、13時01分頃、大爆音と共に噴火山頂を覆った積雲を貫いて約6km昇騰した噴煙は徐々に南乃至南西に流れ、長野・山梨両県下に多量の降灰があった。降灰区域は浅間山の正南方幅平均15km長さ約135kmの細長い地帯で、降灰の最も甚だしかったのは浅間山の南麓の小沼村及び伍賀村の一部で、降灰量の最大の所では700gr/m²を越えた。このため桑葉に甚大な被害を生じた。また当時多数の登山者があり、遭難者若干名を出した(気象要覧、1938年7月)。

「追分支所報告」13時01分頃、大音響あり、中腹以上は雲に蔽われて詳細不明であるが、黒煙多量雲上に昇騰して間もなく南南西の方向に傾いた。13時11分噴煙中に弱い鳴動1回を聞く。噴火と同時に激しい鳴動があり、13時04分より次第に弱まり同14分に全く止んだ。13時34分より微粒の降灰があり、20時36分迄続き降灰量は80gr/m²である。

「軽井沢観測所報告」爆音はドーンと一声砲声のようでありあまり大きくはなかった、空振も極めて微弱であった。噴煙は約6km上昇し、徐々にSに流れ後SWに流れた。なお13時04分及び13時10分頃にも小爆発があった。軽井沢付近は地上の西風に送られて極微粒の降灰があり灰白色で降灰量は20gr/m²である。

「甲府測候所報告」甲府では爆音は観測されなかったが、北巨摩郡の大部分、中巨摩郡の釜無川流域等では観測された(気象要覧、1938年7月)。

〔小諸〕久しく沈黙状態にあった浅間山は7月16日午後1時頃、物凄い大音響と共に爆破した。あまりの大音響と空気振動による建物の激しき上下動の為め、小諸地方の人々は戸外に飛び出し、子供たちは立ち踏み、泣き叫び、大混雑を呈した。山上を包んだ雲をつき抜けて噴煙は天に押し壯観を呈した〔(昭和13年7月17日、東京朝日)(地震、1938年8号)〕。

注67、7月16日の噴火による火山灰降下状況について

は、(気象要覧、1938年7月)、にその降下分布図及び降灰量等が記載されている。

7月17日、小噴火(D)、「軽井沢観測所」13時10分-14時05分、少量の降灰があった、前日より稍粗粒5gr/m²程度(気象要覧、1938年7月)。

小噴火(D)、「追分観測所」16時19分頃暗褐色の噴煙多量噴出、東に流れる。

7月18日、小噴火(D)、「軽井沢観測所」09時55分頃、噴煙中量、少量の降灰があった模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所」10時23分頃、噴煙少量、微量の灰を含む。

小噴火(C)、「追分支所報告」17時48分頃、底力のある爆音に続き短時間弱い空振を感じ、弱い鳴動を聞く。帯白色の噴煙多量に雲表に昇騰し、拡大しつつ緩やかに南東に流れる。同53分噴煙一旦止み、17時59分より再び白煙多量に上昇する。「軽井沢観測所報告」爆音は一声砲声のようでありあまり大きくはなかった。噴煙は約5km上昇し、徐々に南東に流れ、当地には降灰はないが所により降灰があった模様(気象要覧、1938年7月)。

7月20日、小噴火(D)、「追分支所報告」11時30分頃暗褐色の噴煙多量噴出、南南東に流れる。爆音及び鳴動聞えず、噴煙12時頃止む(気象要覧、1938年7月)。

小噴火(D)、「軽井沢観測所」12時33分-13時15分、降灰あり、極微粒灰黒色、7gr/m²、21時頃も昼間より稍多量の降灰があった由。

小噴火(D)、「追分支所報告」15時40分頃、降灰17時15分迄続く。

7月21日、小噴火(C)「追分支所報告」18時37分頃、あまり大きくない爆音に続き弱い鳴動あり。同38分20秒頃より鳴動激しくなり、時々トントンという音を聞く。50分頃鳴動止む。全山見えないが、18時46分になって灰白色の噴煙を多量に雲上に突出して南に流れるのを見る。

「軽井沢観測所報告」噴煙は約3km上昇して18時40分ころ徐々に南に流れる。通路の下に当る地域には降灰のある模様である。

「甲府測候所報告」21時35分より霧雨のような降灰があり、23時40分頃迄続き新聞全紙に約3gr程度の降灰量があつた。灰黒色で最大直径0.1mm程度の微粒である。県下における降灰区域は北巨摩郡東半分、甲府市、西山梨・中巨摩両郡の大部分及び南巨摩郡の富士川流域に亘る広範囲で、鵜沢付近が最も多かったようだ。尚各地とも爆音を聞かず(気象要覧、1938年7

- 月).
- 7月22日, 小噴火 (D), 「追分支所報告」17時34分頃, 噴煙多量噴出, 南方に流れる.
- 7月23日, 小噴火 (D), 「追分支所報告」06時03分頃及び同55分頃の2回噴煙噴出したが全天雲に覆われて状況不明, 06時23分より降灰があり08時15分に止む.
- 小噴火 (D), 「追分支所報告」09時14分頃噴煙, 09時36分より同54分迄降灰あり「軽井沢観測所」. 10時03分-10時08分降灰があった.
- 「甲府測候所報告」08時20分より霧雨のような降灰始まり10時10分頃止む. 形状は21日夜のものと同しく, 降灰量は新聞全紙に2grていど (気象要覧, 1938年7月).
- 7月24日, 小噴火 (D), 「追分支所報告」06時15分頃灰褐色の噴煙多量噴出, 南西に流れる. 10時頃には灰色の薄煙となる.
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」引き続いて長時間多量の噴煙があり, 09時04分-09時13分には爆発的に多量となる. 10時05分よりは普通のように少量となる.
- 小噴火 (D), 「追分支所報告」11時23分頃灰褐色の噴煙稍多量噴出, 南西に流れる.
- 12時15分より同50分迄降灰続く (気象要覧, 1938年7月).
- 7月25日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」07時頃, 山麓南部に降灰があった由.
- 小噴火 (D), 「追分支所報告」12時46分頃灰褐色の噴煙多量に噴出, 南西に流れる.
- 13時10分より14時40分まで降灰続く. 「軽井沢観測所報告」にも同時刻に小噴火が報告されている (気象要覧, 1938年7月).
- 7月29日, 小噴火 (D), 29日未明よりの噴火の噴煙は西方に流れたため, 同日未明より30日に亘り北信地方に降灰があった.
- 小噴火 (D), 「追分支所報告」04時35分頃灰色噴煙稍多量に噴出, 西南西に流れる. 05時55分頃, 前回の噴火が終わらないうちにこの時噴火する, 灰褐色の噴煙多量に噴出する, 8時頃より中腹以上は雲に蔽われる.
- 小噴火 (D), 「追分支所報告」12時54分頃噴火, 13時頃より暫時雲上に灰褐色の噴煙を見る. 後雲の為不明.
- 小噴火 (D), 「追分支所報告」16時30分頃白色噴煙稍多量噴で, 東北東に流れる (気象要覧, 1938年7月).
- 注68, 7月29日より30日にかけて北信地方に降灰があったが, 長野県下各地の降灰の状況は次の通りである.
- 下高井郡南部, 上高井・埴科両郡の一部, 29日又は30日短時間の降灰あり, 辛うじて認めうる程度. 小県郡全部, 北佐久郡西半部; 29日暁方より10時迄に, 降灰した所が多い. 屋根, 道路上等に認められる程度. 菅平; 29日11時より17時迄降灰があり, 14-15時最も烈しく空を仰ぎ得ない位. 西内; 29日5時より15時迄降灰あり. 小諸及び付近; 降灰量一町役場付近50gr/m². 芦田村役場付近70gr/m². 分布図は, (気象要覧, 1938年7月)に記載されている.
- 8月7日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」17時15分頃, 小諸で小爆発を確認, 軽井沢では雲のため不明 (気象要覧, 1938年8月).
- 浅間山の爆発 [小諸] 浅間山は8月7日午後5時10分小爆発をなした. 噴煙は西風に煽られ, 山麓佐久地方に降灰があった「昭和13, 8, 8, 東京朝日」(地震, 1938年9号).
- 8月12日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」15時, 小諸で小爆発を観測し, 15時30分-17時降灰があった由.
- 8月13日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」06時50分頃, 降灰は無い模様.
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」07時40分頃, 降灰は無い模様.
- 8月14日, 小噴火 (D), 「追分支所報告」08時28分頃, 灰色噴煙多量噴出, 北北東または北東に流れる. 噴火直前には白煙多量北に流れていた.
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」10時03分頃, 灰黒色噴煙中量噴出, 東北東に流れる, 噴煙の通路には少量の降灰がある模様 (気象要覧, 1938年8月).
- 8月18日, 小噴火 (D), 「追分支所報告」18時37分頃ゴージーという鳴動を聞く. 中腹以上は雲につつまれて火口付近の様子は見えなかったが雲間に噴煙を見る. 30分頃ドンという音響があり噴煙を認める.
- 「岩村田町北佐久農学校報告」鳴動無く突如大噴火し噴煙は北東に流れる.
- 8月19日, 小噴火 (C), 「追分支所報告」17時15分頃ゴージーという鳴動を聞く. 山頂は雲に蔽われていたが噴煙は雲表高く昇騰し, 後17分および19分にも黒煙が多量に上昇しているのを見た. 噴火は火口の東部で発生した様子. 噴煙は一時少量となったが07時27分頃, またまた黒煙多量噴出し東北東に流れ, 08時20

分止む。

「岩村田町北佐久農学校報告」音響なく噴火し噴煙は北西に流れる。07時50分頃にも小噴火あり。

「軽井沢観測所報告」07時15分頃、灰黒色噴煙中量噴出、東北東乃至北東に流れる、噴煙の通路には少量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」07時20分頃灰黒色噴煙中量噴出、東北東乃至北東に流れる、噴煙の通路には少量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」07時37分頃灰黒色噴煙中量噴出、東北東乃至北東に流れる。噴煙の通路には少量の降灰ある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」09時00分頃噴煙中量噴出、北東に流れる、噴煙中に灰の含有量は少ない。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」14時03分頃噴煙少量噴出、北東に流れる、噴煙中に灰の含有量は少ない。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」14時03分頃噴煙少量噴出、北東に流れる、噴煙中に灰の含有量は微量。

尚これらの噴火の噴煙は長野よりも望見された(気象要覧, 1938年8月)。

8月21日、小噴火(D)、「追分支所報告」08時37分頃、戸障子ガタガタと動き瞬間空振を感じたが爆音はなし。約2分間に亘りゴトゴトと鳴動があった。山頂は雲に蔽われて見えなかったが雲間より灰白色の噴煙が多量緩やかに上昇した。08時48分全山雲に蔽われて全く見えなくなった。9時頃再び雲の切れ間より噴煙が緩やかに北西乃至西北西に流れるのが見えた。

小噴火(D)、09時31分、噴煙は北方乃至西北西に流れる。

小噴火(D)、10時00分、噴煙は北方乃至西北西に流れる。

「高田測候所報告」11時頃より13時30分頃まで高田地方一帯に恰も微雨のような降灰があった。本所における降灰量は 3.12 gr/m^2 である(気象要覧, 1938年8月)。

浅間山の爆発〔小諸〕浅間山は8月21日午後(前)8時17分、同8時35分、同9時30分、同9時35分の4回に亘り爆発、噴煙は秋空高く天に沖して物凄く、第2回目のものは音響と鳴動が約5分間続いた「昭和13年8月22日、読売、東京、朝日」(地震, 1938年9号)。

8月23日、小噴火(D)、「軽井沢測候所報告」06時03分頃、噴煙中量噴出北東に流れる。噴煙の通路には微量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢測候所報告」06時38分頃、噴煙

中量噴出北東に流れる。降灰無い模様。

小噴火(D)、「追分支所報告」14時57分頃、灰色噴煙稍多量に噴出北北東乃至北東に流れる。15時35分より後は山頂雲に蔽われて見えず。

8月24日、小噴火(D)、「追分支所報告」18時12分頃、灰色噴煙多量に噴出、北西に流れる。夜に入り火口上紅く見える。

8月27日、小噴火(D)、「追分支所報告」16時56分頃、短時間空振を感じる。爆音は聞こえず、山は雲霧に蔽われて噴煙状況は不明、また降雨中で風などのため鳴動聞こえず(気象要覧, 1938年8月)。

9月3日、大噴火(B)、「追分支所報告」07時41分22秒ドーンという大音響と共に噴火し、戸障子にガタガタと空気振動を感じる。噴火後にドドンという小音があったが雲のため噴火の様子は不明。弱い鳴動07時54分まで続ける。

「軽井沢観測所報告」爆音はドンと一声砲声のようで余韻なし。家屋は短時間急激に震動する。雨のため詳細は不明(気象要覧, 1938年9月)。

大噴火(B)、「追分支所報告」12時10分頃、ゴトンという微かな音響を聞いたが空振は感じなかった。13分頃より前掛山方面に焼石の落下するような砂煙が見える。27分頃には白煙少量となる。

「軽井沢観測所報告」爆音はダンダンと二声低く砲声のようで空振を伴わなかった。雲多く噴煙の詳細は不明だが、大体北東に流れ降灰がある模様。

小噴火(C)、「追分支所報告」15時53分頃、爆音ドーンとともに極く短い時間(約5,6秒間)ゴーゴーと鳴動を聞いたが全山雲に蔽われて不明、前2回の噴火に比して最小の噴火である“爆発史集”。

「軽井沢観測所報告」砲声のような爆音を聞く。微かな空振あり。

9月4日、大噴火(B)、「追分支所報告」10時18分頃の噴火、19分10秒頃ドシンと底力のある大音響と共に噴火し戸障子に空振を感じる。噴火と同時にドンという音が火口付近に聞こえたが、山頂付近は雲のため判然とせず、雲の中から山の中腹まで岩石が転落し砂煙が立ちの昇るのが見えた。弱い鳴動は33分頃まで続く。灰白色の噴煙が多量急速に上昇し、火口上3,000mに達した。

「軽井沢観測所報告」約1秒間隔でダンダンと二声鈍い爆音があった。噴煙は雲間に高く上昇し弱い雷鳴が聞こえた。空振はかなり大きかった。噴煙は始め東後北東に極めて遅く流れる。通路にはかなり多量の降灰砂がある模様である(気象要覧, 1938年9月)。

- 浅間山の爆発〔小諸〕9月4日午前10時20分頃、浅間山は大音響と共に爆発し、約20分に亘り、鳴動とともに噴煙高く上昇して壯観を極めた。噴煙は北方に流れ、群馬県方面に多量の降灰があった〔昭和13年9月5日、東京朝日〕(地震、1938年10号)。
- 9月5日、降灰、長野測候所よりの報告によれば、5日10時頃より上高井郡西部、上水内郡東部及び下水内郡全部に亘って降灰があった。上高井郡小布施・須坂・山田・下水内郡飯山・豊井・埴科郡松代の各地では10時頃より30分ないし2時間に亘って降灰があり、小布施方面では縁側、トタン屋根等に認められる程度で、積灰量は61 gr/m²、その他の各地でも辛うじて認められる程度である(気象要覧、1938年9月)。
- 9月7日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」08時05分、噴煙中量北東に流れる。
- 9月10日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」12時43分頃、稍大きい爆音約1秒間隔で2回あり、弱い空振があった。北東方に降灰がある模様。
「追分支所報告」空振稍強く鳴動あり、トトンと岩石の噴出するような音が聞こえたが雲で山は見え、鳴動は49分まで続く。
- 9月12日、小噴火(C)、「追分支所報告」11時16分頃、黒煙多量噴出、噴煙は相当高く昇る。東北東に流れる。「軽井沢観測所報告」爆発程度中位、雲のため詳細は不明。
- 9月14日、小噴火(D)、「追分支所報告」06時19分頃噴煙黒色多量噴出、東北東に流れる。
「軽井沢観測所報告」爆発程度小、曇天で詳細不明。
- 9月18日、小噴火(D)、「追分支所報告」04時59分頃、黒色噴煙稍多量噴出南に流れる。05時20分頃より微量の降灰あり(気象要覧、1938年9月)。
- 9月20日、小噴火(D)、「追分支所報告」02時01分頃、微動計だけに感じる。
小噴火(C)、「追分支所報告」03時32分頃、プスーンという小噴火音があり、空振を感じる。弱い鳴動約3分間続く。降雨中で詳細は不明。
大噴火(B)、「追分支所報告」07時25分頃、ピシャンという様な一大音響と共に空振があった。降雨中で山容は不明だったが、岩石の噴出したような音約2分間聞こえる。鳴動は弱く、約3分間で止む。この噴火により追分小学校と借宿の村で北側向きの窓ガラス一枚ずつ破損した。
「軽井沢観測所報告」ダンと一声砲声のような爆音があったが余韻は少なかった。空振があり家屋はかなり振動した。雨中のため詳細は不明。
- 尚この日8時(7時?)32分頃筑波山測候所で鈍い雷鳴のような音響と共に戸障子の振動するのを認めた由で、その状況は宛も震度1程度の地震のようであったという。この噴火の空振かと思われる(気象要覧、1938年9月)。
- 浅間山の爆発〔小諸〕浅間山は9月20日午前7時25分頃大音響と共に爆発した。降雨のため噴煙その他の模様は全然判明せざりしが、4里離れた小諸町地方では戸障子が鳴り響いた〔昭和13年9月21日、読売〕(地震、1938年10号)。
- 9月25日、小噴火(D)、「追分支所報告」14時33分頃、灰白色の噴煙稍多量噴出、東に流れる。
- 9月26日、小噴火(D)、「追分支所報告」09時53分頃、灰色噴煙稍多量噴出、東に流れる。
小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」10時08分頃、中量の噴煙噴出、東北東に流れる。噴煙の通路に微量の降灰がある模様。
大噴火(B)、「追分支所報告」13時43分頃、一大音響と共に噴火しドンドンと連続した爆音と共に黒煙が多量噴出したが空振は感じなかった。噴煙は東に流れ、13時56分頃より稍少量となったが、14時56分頃からまた黒煙多量に噴出し、火山弾は付近に落下して山火事を起こした。爆音は近年になく大きく、かなり遠くまで聞こえたという。
「軽井沢観測所報告」43分06秒ドンと一声砲声のような大爆音があり、近年では稀で大きかった。空振があり家屋がかなり振動した。噴煙は比較的少なく、東に徐々に流れ、先端は13時55分当地真北を通過した。降灰砂は比較的少ないが、峰の茶屋、六里ヶ原方面には一時パラパラと音を立てて降下した由である。1,700 m以上の山側には多数の火山弾が落下し、剣が峰南方2,000 m付近に10数個、弥陀ヶ城岩西方1,800 m付近に相当大きなものが数個、石尊山北東方1,800 m付近に数個あり、何れも山火事を起こしたのを望見できた。これらは何れも14時半頃までに自然に鎮火した。火山弾は尚山の周囲に相当多数あると思われるが雲のために不明である。噴煙は間もなく止んだ。
「筑波山測候所報告」13時51分頃山腹両観測所で戸障子がガタガタ振動するのを1回認め、中腹観測所においては同時に地震に伴う地鳴りのような音響が聞こえた。地震計、晴雨計には何の痕跡もなく、降灰も無かった。
- 尚、長野測候所でもこの噴火の爆音が聞こえ、噴煙が望見された。噴煙の高さは8,200mと測定された。(気象要覧、1938年9月)。

浅間山の爆発〔小諸〕浅間山は9月26日午後1時43分、大音響とともに爆発し、小諸町地方では戸障子が上下に震動し、爆発に馴れ切った人々もあまりの大音響に戸外に飛び出した。噴煙は5～6分の後群馬県方面に靡いた。長野市地方でも大音響に驚かされ、戸外に飛び出したものが多かった。この爆発は去る6月7日の大爆発に次ぐものである〔昭和13年9月27日、読売、都、中央〕(地震、1938年10号)。

小噴火(D)、「追分支所報告」14時09分頃、灰白色噴煙多量噴出する。

小噴火(C)、「追分支所報告」14時54分頃、黒色噴煙を多量に噴出する。山頂付近に岩石が落下した模様。「軽井沢観測所報告」爆発程度中、噴煙東に流れる。爆発後約2分間鳴動があった。

9月29日、小噴火(D)、「追分支所報告」05時44分頃、黒色噴煙多量に噴出、東に流れる。06時40分灰色の薄煙少量となる。

10月3日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」15時45分頃、噴煙噴出し東に流れる。

10月4日、大噴火(A)、「追分支所」20時21分頃、一大音響と共に噴火する。音響の大きいことは、昭和10年4月20日の噴火以上である。鳴動及び空振は音響の割りには小さく、空振は10～15、6秒間感じ、鳴動は23分頃止む。25分に先行1回を認める。噴煙は南東に流れたようだ。尚この日13時40分及び14時20分頃多量の噴煙を噴出したが爆音、空振等は全く感じなかった。

「軽井沢観測所」爆音一声頗る大きく稍長い余韻があり、同時に急激な空振があり、家屋は著しく震動し、壁土のようなものがパラパラと落下した。千ヶ滝方面には窓ガラスの破壊した家屋もあった。山頂付近は層雲のため不明だが火山弾が多数落下し、大窪沢の上方弥陀ヶ城岩下端の1,700m付近に山火事を起こしたものが多数あった。22分頃噴煙の下端南東側に十数個の幕電様の電光が見えたが、雷鳴は聞こえなかった。25分層雲が薄らぐとその切れ間より数個の赤熱火山弾が線光を描いて上昇するのが見えた。噴煙は比較的少なく極めて遅く東南東に流れ、当地上空より稍北方を通過した。新旧軽井沢方面には多量の降砂があり、大きなものは径8mmに達した。

「前橋測候所」爆音は小、噴煙は速やかに南東に流れ、稍多量だが降灰なし。

「筑波山測候所」27分頃中腹観測所で微震程度の空振を感じた。地震計及び自己晴雨計には痕跡を認めず。

「水戸測候所」29分頃空振があった。ワイーヘルト式

地震計3成分には20時29分40秒より約1分半に亘り短周期微動を記録した。自己晴雨計にも全振幅0.8mmHg程度の微動が現れた。

「甲府測候所」25分頃強い爆音と空振があった。

また長野県北佐久郡望月高女より報告によると、同地でも大音響し戸障子に震動を感じ、黒煙の上昇するのが望見された。この噴火の空振は熊谷でも観測され、また東京でも27分頃微かな爆音が聞こえ空振を感じた。降灰もあり、中央气象台における降灰量は4.1gr/m²である(気象要覧、1938年10月)。

浅間山の爆発〔小諸〕浅間山は10月4日午後8時22分頃、大音響と共に爆発、小諸町地方の戸障子は震動し、人々は戸外に飛び出した。爆発と同時に火柱天に押し引き続き約3分間に亘って火花散る壮観が眺められた。噴煙は軽井沢町上空に靡き、約20分間小豆大の溶岩を混えた降灰があった。〔長野〕浅間山は10月4日午後8時20分頃轟然たる音響と共に大爆発し、噴煙は雨晴れの秋の夜空に火花を散らして一大壮観を呈した。〔東京〕10月4日午後9時10分頃から約30分に亘り雨上がりの東京市内に灰が降った。灰はしんと音もなく降り、雨上がりの街路は忽ち薄化粧して初雪めいた風情をみせたが、10時閉店まぎわに買物を急ぐ行人らは頭から灰を被り、耳も口もすっかり開けられぬ始末に折角つぼめた傘をあわててまたさすという騒ぎであった。この降灰は午後8時20分爆発した浅間山の噴煙中に含まれたもので北西風に乗じて約1時間の後帝都を襲ふたものであった。中央气象台の発表によると、爆発は猛烈で溶岩を多量噴出し、山腹には山火事を起こしている。爆音は頗る大きく、前橋、甲府までも聞こえ、東京でも8時27分頃微かに聞こえた所もあった〔昭和13年10月5日、読売、報知、国民、都、東京日々、東京朝日等〕(地震、1938年11号)。

10月5日、小噴火(D)、「軽井沢観測所」14時41分頃、噴煙量中位灰を含む噴出。東南東に流れる。噴煙通路に降灰がある模様、ひき続き稍多量の噴煙があり、15時10分頃少量になった。

10月6日、大噴火(B)、「追分支所」00時26分頃、ドカンと底力のある一大音響と共に噴火し、かなり強い空振があった。鳴動は約1分間続く。黒煙はかなり高く上昇し、火口上に約10分間閃光を認める。煙は南東に流れつつその付近に焼石を落下して、中腹2、3ヶ所に山火事が起こった。

「軽井沢観測所」26分稍大きい爆音と激しい空振を感じる。噴煙比較的になく東に流れる。含灰量は中程

度で通路には降灰がある模様である。海拔 1,800～2,000 m 付近の山腹には焼石が落下して山火事が発生したようだが、間もなく自然消火した。電光は見えなかった。

「前橋測候所」噴煙は稍多量で、23.1 gr/m² の降灰があった。降灰時刻は不明（気象要覧、1938 年 10 月）。浅間山の爆発（軽井沢）浅間山は 10 月 6 日午前 0 時 28 分、大音響とともに爆発、噴出溶岩は中腹迄落下して、全山を火の海と化した。噴煙は折からの月空に輝いて閃光と共に中空に立ち昇り、壯観を極め、東南方に靡いた。鳴動は約 5 分間続き、軽井沢、小瀬温泉付近、上信国境付近には相当の降灰があった「昭和 13 年 10 月 6 日、東京日日」（地震、1938 年 11 号）。

小噴火 (C), 「軽井沢観測所」13 時 42 分頃、中爆発、噴煙通路に降灰がある模様、続いて 13 時 43 分、13 時 45 分、13 時 52 分と次第に稍大規模な爆発があり 14 時 05 分頃より噴煙極少量となる。

小噴火 (C), 「軽井沢観測所」14 時 21 分頃、中程度の爆発、13 時 41 分のものより稍大規模で、ひき続き 14 時 25 分、14 時 34 分にも連続して小爆発があり、14 時 50 分頃噴煙が絶えた。

小噴火 (C), 「軽井沢観測所」15 時 11 分頃、小爆発の噴火、ひき続き 15 時 14 分にこれより稍大きな爆発があった。本日の爆発は小規模の割合に多量の降灰を伴った模様（気象要覧、1938 年 10 月）。

10 月 7 日、小噴火 (D), 「軽井沢観測所」09 時 24 分頃、小噴煙噴出東北東に流れる。

10 月 8 日、小噴火 (D), 「軽井沢観測所」09 時 45 分頃、小噴煙噴出東に流れる。降灰ない模様（気象要覧、1938 年 10 月）。

10 月 10 日、大噴火 (B), 「追分支所」07 時 57 分頃、ドーンという爆音とともに噴火し、2、3 秒間空振を感じる。鳴動があり 08 時 10 分まで続く。山頂は雲のため不明だが上空の雲間より黒煙が多量に南東に流れるのが見えた。

「軽井沢観測所」爆音一声稍大きく空振があり戸障子はかなり激しく振動した。噴煙は稍多量で、かなり早く東に流れ相当の降灰がある模様。08 時 15 分頃より噴煙全く絶える。

「前橋測候所」ドーンと短い 1 回の小爆音が聞こえ、稍多量の噴煙が流れる。降灰はなかった（気象要覧、1938 年 10 月）。

小噴火 (D), 「軽井沢観測所」09 時 45 分頃、小噴火噴煙少量北東後東に流れる。

小噴火 (D), 「軽井沢観測所」15 時 20 分頃、噴煙少量

噴出、東に流れる。少量の降灰ある模様。

小噴火 (D), 16 時 45 分頃、噴煙少量噴出、東に流れる。（気象要覧、1938 年 10 月）。

10 月 11 日、小噴火 (D), 「軽井沢観測所」08 時 10 分頃、小噴火、時刻不確実、噴煙はかなり長く稍多量であった。08 時 50 分噴煙絶える。

10 月 17 日、小噴火 (D), 「軽井沢観測所」11 時 42 分頃、小噴火噴煙少量東に流れる（気象要覧、1938 年 10 月）。

10 月 19 日、小噴火 (C), 「追分支所」23 時 35 分頃、山頂は終日雲に蔽われて見えなかったが 23 時 35 分頃ドドと小爆音があり、後ドーンという大爆音と同時に稍強い空振を感じる。

「軽井沢観測所」弱い爆音と共に弱い空振があった。夜中でしかも山頂は雲に蔽われていたため詳細は不明（気象要覧、1938 年 10 月）。

10 月 27 日、小噴火 (D), 「追分」05 時 15 分頃、小噴火、極めて弱い空振あり。鳴動もあったが時間は不明“爆発史集”。

小噴火 (D), 「追分」06 時 30 分頃、黒煙多量に噴出したが空振、鳴動、地震ともになし“爆発史集”。

小噴火 (C), 「追分支所」10 時 09 分頃、突如ゴーという不気味な鳴動を伴って黒煙が多量直上し、後次第に南東に流れつつ山頂付近に落下し、白煙の上がるのが見えた。噴火後約 40 秒ほどで黒煙中に 1 回閃光を認めた。鳴動は 15 分迄続いた。約 10 分後再び前よりも稍西に偏した所から黒煙が多量に噴出し、約 10 分間鳴動を伴ったが噴煙は次第に減じ 11 時頃には白煙に変わった。

「軽井沢観測所」爆音はなし。噴火後約 2 分間ゴーゴーという稍顕著な鳴動と弱い空振があった。噴煙は稍多量で東南東に流れた。引き続き多量の噴煙があり、千ヶ滝方面には降灰があった由である。

「前橋測候所」爆音なく少量の噴煙流れる。降灰なし。小噴火 (D), 「追分」10 時 23 分頃、小噴火“爆発史集”。

10 月 28 日、小噴火 (D), 「追分」09 時 35 分頃、小噴火、爆音、鳴動等無し“爆発史集”。

小噴火 (D), 「軽井沢観測所、追分」10 時 30 分頃、小噴火、降灰なき模様、此れより以前にも時々小爆発があったようだが山は雲のため不明（気象要覧、1938 年 10 月），“爆発史集”。

小噴火 (C), 「追分支所」21 時 54 分頃、微かな空振と鳴動とを伴って噴火し、黒煙を多量に昇騰する。58 分頃火柱が立ち、後崩れて山頂は火の海となり壯観を呈

した。噴煙は南東より東に流れたようで、噴煙中にも3回の閃光を認めた。

「前橋」爆音無く噴煙も不詳だが、同日夜半頃より29日未明にかけて6.6 gr/m²の降灰があった（気象要覧、1938年10月）。

10月29日、小噴火(D)、「軽井沢観測所」09時05分頃、小噴火、噴煙通路下には少量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所」09時09分頃、小噴火、噴煙通路下には少量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所」09時22分頃、小噴火、噴煙通路下には少量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所」09時28分頃、小噴火、噴煙通路下には少量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所」10時00分頃、極小噴火、噴煙通路下には少量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所」10時13分頃、小噴火、噴煙通路下には少量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所」11時07分頃、小噴火、噴煙通路下には少量の降灰がある模様（気象要覧、1938年10月）。

10月30日、小噴火(C)、「追分支所」03時32分頃、砲声のような音響と共に5、6秒間空振があった。山頂は雲に蔽われ、且降雨中のために詳細は不明である。

「前橋測候所」中程度の爆音があり、ドドドドーと約10秒間聞える。噴煙の状況は不明。降灰はなし。

小噴火(C)、「軽井沢観測所」16時28分頃、爆音は小さく聞き取り難い程度だが空振は、かなり大きく戸障子を激しく振動した。約20秒間ゴーゴーと弱い鳴動があった。噴煙は中量で急速に東に流れつつあるのを雲間より観測した。降灰は少ない模様（気象要覧、1938年10月）。

小噴火(D)、「追分」16時45分頃、小噴火“爆発史集”。

10月31日、小噴火(D)、「軽井沢観測所」15時00分頃、小噴火、噴煙量稍多い、引き続いて稍多量の噴煙があり降灰ある模様。

注69、1938年11月中の活動に関しては、気象要覧（1938年12月号）に11月の活動記録が一部追加記載されているので注意する必要がある。

11月4日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」11時12分頃、小規模の爆発噴煙東に流れる。引き続いて多量の噴煙があり。11時21分頃止む。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」15時13分頃、小爆

発。噴煙東に流れる。噴煙通路下には少量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」15時23分頃、小爆発、噴煙東に流れる、噴煙通路下には少量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」15時26分頃、小爆発、噴煙東に流れる、噴煙通路下には少量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」15時32分頃、小爆発、噴煙東に流れる、噴煙通路下には少量の降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」17時08分頃、小爆発、噴煙東に流れる、噴煙通路下には少量の降灰がある模様（気象要覧、1938年12月）。

11月5日、大噴火(B)、「追分支所報告」21時41分頃の噴火、微かな空振に次いで42分頃よりゴウゴウという鳴響が聞え火柱が天に沖して赤熱した溶岩が山肌に崩れ落ちる様子は筆紙に尽くし難いほど壮観であった。尚この噴火に際し自記晴雨計は1.0mmの上昇と0.5mmの下降とを記録した。北佐久農学校の報告によれば岩村田町でも、戸障子振動し、山の中腹に真紅の溶岩が流下するのが見られ凄まじい噴煙中に電光が輝くのが認められた（気象要覧、1938年11月）。

「軽井沢観測所報告」21時44分頃、中程度の爆発、爆音は稍大きい。空振が強烈で戸障子が激しく振動した。噴煙は南東に流れ降灰は無かった。山側1,800m付近に山火事が起こったが間もなく鎮火した。21時46分頃噴煙の中程に電光1回見えた。雷鳴は無かった（気象要覧、1938年12月）。

浅間山の爆発〔軽井沢〕11月5日朝来不穏状態にあった浅間山は同日午後9時45分、大音響と共に爆発、噴煙天に沖して壮観を極めた。遠雷の如き鳴動約4分間継続し、その不気味さに人々戸外に飛び出した「昭和13年11月7日、中外商業」（地震、1938年12号）。

11月6日、大噴火(B)、「追分支所報告」00時31分頃の噴火、噴火の当時は全山雲に包まれて追分支所では噴火の模様を見る事は出来なかったが、空振と鳴動とを微かに感じ、自記晴雨計は1.3mmの上昇と0.4mmの下降とを記録した。尚岩村田町ではこの噴火に際して爆音を聴取したという。尚東京でも微量の降灰がみとめられた（気象要覧、1938年11月）。

「軽井沢観測所報告」00時31分、爆音、空振ともに稍大きかった。噴煙は多量で、7~8km以上上昇した様子で、雲の切れ間より見えた。相当多量の落石がある

- 模様である。鳴動は約4分間続いた。00時50分～59分米粒大の降砂があり、其の量は86 gr/m²である（気象要覧, 1938年12月）。
- 11月7日, 小噴火 (C), 「軽井沢観測所報告」13時08分頃, 噴煙中量噴出東に流れる。約1分間鳴動があった。噴煙の通路の下では降灰があり模様である（気象要覧, 1938年12月）。
- 11月10日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」15時05分頃, 噴煙量中, 急速に東に流れる。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」15時17分頃, 噴煙量中, 急速に東に流れる。爆発後約2分間鳴動があり, 噴煙の通路の下には少量の降灰がある模様。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」15時19分頃, 噴煙量中, 急速に東に流れる（気象要覧, 1938年12月）。
- 11月14日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」10時44分?, 噴煙量少, 東に流れる。降灰少ない模様（気象要覧, 1938年12月）。
- 11月15日, 大噴火 (B) 「追分支所報告」16時04分頃, 底力のある爆音と約1分間の鳴動を聞き, 始め大火柱が立ち昇り, それから真紅の溶岩が落下し, 黒煙が多量東に流れる。自記晴雨計は2mmの上昇と0.9mmの下降を記録した。
- 「筑波山測候所報告」筑波山中腹と山頂の観測所で16時11分頃戸障子がガタガタと振動し, 微震程度の地震のような空振を感じた（気象要覧, 1938年11月）。
- 「軽井沢観測所報告」中程度の爆発で爆音は小さかった。空振は弱く, 噴煙量も中量で噴煙は短時間で止んだ。降灰は少量の模様（気象要覧, 1938年12月）。
- 大噴火 (B), 「追分支所報告」17時17分頃の噴火, 追分では一大爆音を聞き, 黒煙が立ち昇り其の中に閃光を2回認めた。自記晴雨計は3.8mmの上昇と0.8mmの下降を示した（気象要覧, 1938年11月）。
- 「筑波山測候所報告」17時25分頃空振を感じた。戸障子ガタガタ強く振動し軽震程度の地震の様であった。地震計並びに自記晴雨計には痕跡を認めなかった（気象要覧, 1938年11月）。
- 「軽井沢観測所報告」17時18分頃の噴火, 17分37秒爆音に続き著しい空振があり鳴動は聞えなかった。噴煙の西側は火口上約100mまで真紅に彩られ, 其の中に赤熱した火山弾盛んに昇降し, 其の有様は恰も大火災を遠望する様で頗る壯観を呈した。山頂付近は一面に赤くなったが間もなく消失し, 常のように山火事は発生しなかった模様である。18分35秒噴煙の中程より閃光電光（幕電状）が1回あった。雷鳴は聞えず噴煙は約5km以上に上昇し急速に東に流れた。降灰は少ない模様。引き続いて稍多量の噴煙があった（気象要覧, 1938年12月）。
- 浅間山の爆発〔小諸〕11月15日午後4時4分及び同5時10分の2回に亘り, 浅間山は大音響と共に爆発, 火柱は晴れ渡った初冬の空高く立ち上がり壯観を極めた。噴煙は群馬県方面に流れた。〔東京〕中央气象台発表。軽井沢, 追分, 前橋等の報告によると, 先般来時々噴火した浅間山は, 15日午後4時4分頃小噴火をなし, 続いて同5時17分頃再び噴火した。この噴火は爆音頗る大に, 東京にても5時24分頃, これによる空気振動の為, 窓硝子や戸障子の振動した所もあった「昭和13年11月16日, 読売, 都」(地震, 1938年12号)。
- 11月16日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」09時28分頃, 小爆発, 噴煙少量東北東に流れる。微量の降灰がある模様（気象要覧, 1938年12月）。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」13時45分頃, 小爆発, 噴煙少量東北東に流れる（気象要覧, 1938年12月）。
- 11月25日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」09時07分頃, 小爆発, 噴煙中量東に流れる。少量の降灰がある模様（気象要覧, 1938年12月）。
- 小噴火 (C), 「追分支所報告」15時41分頃, 噴火に際して多量の黒煙を噴出し, 南東に流れさった。山頂付近には噴き上げられた岩石の落下による土煙の立つのが見えた。鳴響は弱く約20秒間で止んだ。自記晴雨計はこの噴火で0.9mmの上昇と0.1mmの下降を記録した（気象要覧, 1938年11月）。
- 「軽井沢観測所観測」15時55分頃, 中位の爆発, 噴煙量中量で東に流れた。鳴動あり。噴煙の通路下には降灰がある模様（気象要覧, 1938年12月）。
- 11月28日, 大噴火 (B), 「追分支所報告」20時38分頃, 突如砲声のような大音響を發して噴火し, 赤熱溶岩を盛んに噴出すること約1分間, 壯観を呈した。空気振動は5, 6秒間で僅かに戸障子が振動した。鳴響は約1分間聞え噴出した噴煙は南東に流れた。自記晴雨計は2.0mmの上昇と0.8mmの下降を示した（気象要覧, 1938年11月）。
- 「筑波山測候所報告」20時44分頃空振を感じた。家屋がガタガタし, 軽震程度の地震のようであった。其の前に弱く地鳴りのような音響を聞く。
- 「東京滝野川喜多氏報告」20時44分頃空振を感じ5秒間継続した（気象要覧, 1938年11月）。
- 「軽井沢観測所報告」20時38分頃, 稍大きい爆発である。38分31秒稍長い余韻のある砲声の様な爆音があった。空振により戸障子は激しく振動した。噴煙は

約3 km直上した後徐々に東に流れつつ高度を増し約7~8 kmまで上昇した。其の通路の下には相当多量の降灰があると思われる。噴煙の西側は幅約100 m、高さ200~300 mの部分真紅に燃え、その中を赤熱した火山弾が火の子のように盛んに上下し、山頂付近一帯は一面赤色となり頗る壯観を呈したが、20時41分頃全く消失した。これらの火山弾あるいは焼け石は火口付近より中腹にいたる間に多数落下し、殊に石尊山付近にはかなり大きいものも落下したが間もなく自然に鎮火した。20時39分30秒及び55分の2回噴煙の中程より斜め左方に向けて1回ずつの電光があり、普通の電光よりも青色強く時間も短くて僅かに一閃するのを認めた。注意したが雷鳴は聞え無かった(気象要覧, 1938年12月)。

「富山県竹内喜平氏報告」富山県射水郡大江村西高木、竹内喜平氏より次のような報告があった。当地(浅間山よりの距離264 km)にて28日20時45分及び21時05分頃の2回、遠い砲声のような重い音響とともに家屋の鳴動があり、前のは軽震程度、後のは微震程度に感じた(気象要覧, 1938年12月)。

浅間山の爆発〔前橋〕11月28日午後8時38分頃、浅間山は大音響と共に爆発、前橋市内は家屋の動揺甚だしく、人々戸外に飛び出した。この爆発は本年に入って第22回のもので、最大のものであった。〔東京〕中央气象台発表、28日午後8時37分頃浅間山が爆発した。軽井沢観測所よりの報告によると、かなり大なる溶岩を噴出し、電光物凄く現れた由。東京にては午後8時45分頃空気振動で戸障子がかかなり振動した「昭和13年11月20日、東京朝日、国民、読売、報知等」(地震, 1939年1号)。

11月29日、小噴火(C)、「軽井沢観測所報告」爆発の程度は中位、噴煙量は中量で東北東に流れた。噴煙の通路の下では少量の降灰がある模様。13時50分までに数回連続して小噴火を繰り返す。13時55分より噴煙絶える(気象要覧, 1938年12月)。

「長野測候所報告」小県郡和田村において梶間技師は浅間山の上空に多量の黒煙の噴騰するのを見たが、約5分後にはこの噴煙は全く低平となり、層積雲と区別し難くなった。恐らく13時45分頃に噴火したものと思われる(気象要覧, 1938年11月)。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」15時35分頃、小爆発あり噴煙少量東北東に流れる。降灰少ない模様(気象要覧, 1938年12月)。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」17時15分頃、小爆発あり噴煙少量東北東に流れる(気象要覧, 1938年12月)。

月)。

12月2日、大噴火(B)、「軽井沢観測所」02時42分頃、41分45秒頃砲声のような爆音があった。空振は弱かった。噴煙は約7~8 km上昇し、徐々に東に流れた。刷毛目状の條痕を描きつつ落下する降灰の様子は夜目にも明瞭に認められた。噴火の火花は43分30秒には全く消えた。中腹付近には各所に多数の焼け石が落下し山火事を起こしたが、間もなく自然鎮火した。噴煙の中程よりゴーゴーという鳴動物凄く聞え43分頃一時止んだが、44分30秒、45分05秒、及び46分10秒の3回雷鳴のようなゴーゴーと高低のある鳴動が聞え、各20~30秒で止んだ。電光は認めず、引き続いて多量の降灰があった。

「筑波山」2時49分頃空振あり、戸障子ゴトゴトと鳴る(気象要覧, 1938年12月)。

浅間山の爆発〔前橋〕12月2日午前2時40分頃大音響と共に浅間山は爆発、噴煙は北東に流れ、山麓の長野原から前橋市一帯に降灰があったが、被害はない模様「昭和13年12月3日、都」(地震, 1939年1号)。

12月4日、大噴火(B)、「軽井沢観測所報告」22時46分頃、46分04秒鈍い余韻の爆音と共に稍大きい噴火、空振は稍強く戸障子がかかなり振動する。当時山頂付近は雲に蔽われ詳細不明だが22時49分頃迄ゴーゴーという鳴動が聞えた(気象要覧, 1938年12月)。

12月8日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」17時10分頃、小爆発あり、噴煙の量は中量で東に流れる。降灰がある模様。

12月11日、大噴火(B)、「追分支所報告」18時21分頃の噴火、ドシンという物体の落下したような爆音があり鳴動と空振を伴う。鳴動は約10秒、空振は3~4秒で止む。山は霧に蔽われて詳細不明、19時10分頃再び鳴動が始まり21分迄続く。

「軽井沢観測所」22分31秒約0.5秒間隔で鈍い砲声のような頗る大きな爆音があり、始めのは殊に大きく、後のものの2倍程度あった。戸障子激しく振動し、所によっては窓硝子の破壊されたものもある模様である。噴煙は雲が低く垂れ込めていた為詳細は不明だが、夕刻煙の流れていた模様より東南東に流れたものと推定される。相当多量の降砂灰があった様子だが、当地には全く無かった。この爆音及び空振は本年第一のものである。

「山形測候所報告」山形測候所管内では各所で、この噴火の音響を観測した。分布図が添付されている。地名、小国本、坂谷、米沢、小松、高島、宮内、長井、山形(測)、寒河江、溝延(気象要覧, 1938年12月)。

「東京滝野川」18時27分50秒弱い空振を感じる。同日22時以降12日6時迄の間に降灰があり、雨量計で捕集した降灰量は6.5gr/m²である。

「中央气象台」微震程度の空振を感じ戸障子が鳴動した。地震計には記録せず。11日夜より12日朝迄の降灰量は3.3gr/m²である。

他に各測候所管内で次のように空振を観測した。「横浜管内」中野(軽震程度)「宇都宮管内」栗野(地鳴りあり、微震程度)、(気象要覧、1938年12月)。

浅間山の爆発 12月11日午後6時11分頃、浅間山は大音響と共に爆発した。物凄い鳴動、噴煙は約4分間継続した。軽井沢西長倉方面では戸障子の外れた所もあり、人々は戸外に飛び出した。折柄の降雪中にて噴煙は見えざりしも、西北山麓一帯には溶岩礫の落下が相当あった模様。峰の茶屋、軽井沢警察署間の電話線は切断された「昭和13年12月12日、東京朝日」(地震、1939年1号)。

12月12日、小噴火(D)、00時10分頃、僅かに「ゴーゴー」という遠雷の様な鳴動があり、引き続いて夜明け(4時30分頃)まで時々鳴動を聞き、とくに3時前後が最も強く聞えた“爆発史集”。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」11時35分頃、小爆発、噴煙中量東に流れる。降灰がある模様。

小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」14時05分頃、小爆発、噴煙中量東に流れる。降灰がある模様(気象要覧、1938年12月)。

12月15日、小噴火(C)、「軽井沢観測所報告」17時12分頃、中噴火、爆発後約2分間ゴーゴーという鳴動あり。噴煙は東に流れる。降灰は少ない模様。

「追分支所報告」17時11分頃、爆音鳴動等なく灰色の噴煙多量噴出する。

12月17日、小噴火(C)、「追分支所報告」16時50分頃、ドシンという一大音響と共に多量の黒煙を噴出し、同時に鳴動あり15、6秒で止む。噴煙は南東に倒れ黒煙の流出は17時08分頃全く止む。山頂は雲に蔽われ詳細不明。

「軽井沢観測所報告」17時25分頃、一声砲声のような爆音と共に噴火し、噴煙は東に流れる。相当の降灰がある模様である。爆発程度は中。

尚、前橋、宇都宮各測候所管内では次の各地で爆音或いは空振を観測した。

「宇都宮管内」鹿沼(弱震程度)、「前橋管内」沼田(16時59分頃)、新羽(16時55分頃)(以上軽震程度)、「前橋管内」五料(16時57分10秒)、下仁田(16時57分頃)「宇都宮管内」栗野、小山(以上微震程度)。

浅間山の爆発〔前橋〕12月17日午後4時54分46.1秒、浅間山は大音響と共に爆発し、噴煙は南東に流れている。被害はなき模様「昭和13年12月18日、国民」(地震、1939年2号)。

小噴火(D)、17時25分頃、一声砲声のような爆音と共に噴火し、噴煙は東に流れた。相当の降灰がある模様“爆発史集”。

12月28日、小噴火(C)、「追分支所報告」23時15分頃の噴火、ドシンという底力のある音響と共に噴火し、瞬時戸障子に僅かに空振を感じる。同時に鳴動あり、30~40秒継続する。山は雲にて不明、尚29日6時頃には既に白煙に変わり東に流れていた。

「軽井沢観測所報告」ダンダーンと約0.5秒間隔で2回の爆音があり、弱い空振を感じた。山は雲のため不明だが、かなり多量の焼石を噴出した模様である。

「筑波山」23時22分頃戸障子コトコトとする程度の空振を感じる。

「東京滝野川」23時22分09秒弱い空振を感じる。

「中央气象台」23時22分頃微震程度の空振を感じる。尚、金沢測候所管内二宮では23時過ぎ弱震程度の震動を感じ、又岐阜測候所管内神土では23時20分頃軽震程度の震動を感じた(気象要覧、1938年12月)。

「飯田測候所報告」23時20分頃屋内に静止せる者の大部分に感じる程度の音響あり。最初ドドド……と地鳴りを聞き、硝子戸僅かに振動する。音は自動車の通過する時のように、吸い込まれる様に弱くなり、7、8秒で止む。管内和田でも同様の音響を観測する(気象要覧、1939年1月)。

浅間山の爆発〔小諸〕12月28日午後11時15分頃、浅間山は大音響と共に爆発した。家屋強く動揺し、山麓の人々は皆戸外に飛び出し、小沼、西長倉地方では戸障子の外れた所もあった「昭和13年12月29日、東京朝日」(地震、1939年2号)。

1938年浅間山活動の要約

1月及び2月には噴火と見られるような活動は認められなかった。3月下旬に入ると噴煙の状態に異常が見られ、火山性微動が増加し噴火発生に至る。

3月25日、大噴火(B)、

4月20日、大噴火(A)、群馬県下の降灰では前橋測候所において、明治30年創立以来の記録となる降砂量、水戸、横浜にも降灰、23日、大噴火(B)、小噴火(D)各1回、24日、小噴火(D)1回、(4月噴火回数、A; 1回、B; 1回、D; 2回)

5月1日、中噴火(B)、4日、小噴火(D)2回、5日、

小噴火 (D) 1回, 9日, 小噴火 (D) 3回, 5月16日, 小噴火 (D) 1回, 5月20日, 小噴火 (D) 1回, 21日, 大噴火 (A) 山麓で窓硝子破損の被害発生, 東京, 輪島で空振を感じる. 22日, 小噴火 (D) 1回, 24日, 小噴火 (D) 6回, 25日, 26日, 小噴火 (D) 各1回, 31日, 小噴火 (D) 1回, (5月噴火回数, A; 1回, B; 1回, D; 18回)

6月2日, 3日, 4日, 小噴火 (D) 各1回, 7日, 大噴火 (A) 噴火活動のエネルギーより考えて20~30年来最大級の活動である(水上, 1955), 小噴火 (D) 2回, 11日, 小噴火 (D) 1回, 19日, 小噴火 (D) 1回, 26日, 小噴火 (D) 3回, 30日, 小噴火 (C) 1回, (6月噴火回数, A; 1回, C; 1回, D; 10回)

7月3日, 小噴火 (C) 1回, 4日, 小噴火 (C) 1回, 8日, 小噴火 (D) 1回, 10日, 小噴火 (D) 1回, 15日, 小噴火 (D) 1回, 16日, 大噴火 (B) 遭難者(内容不明)若干名, 浅間山の正南方方向の長野県, 山梨県下に帯状に降灰する, 17日, 小噴火 (D) 2回, 18日, 小噴火 (D) 2回, (C) 1回, 20日, 小噴火 (D) 1回, 21日, 小噴火 (C) 1回, 22日, 小噴火 (D) 1回, 23日, 小噴火 (D) 2回, 24日, 小噴火 (D) 3回, 25日, 小噴火 (D) 2回, 29日, 小噴火 (D) 4回, (7月噴火回数, B; 1回, C; 4回, D; 22回)

8月7日, 小噴火 (D) 1回, 12日, 小噴火 (D) 1回, 13日, 小噴火 (D) 2回, 14日, 小噴火 (D) 2回, 18日, 小噴火 (D) 1回, 19日, 小噴火 (C) 1回, (D) 4回, 21日, 小噴火 (D) 1回, 23日, 小噴火 (D) 3回, 24日, 小噴火 (D) 1回, 27日, 小噴火 (D) 1回, (8月噴火回数, C; 1回, D; 17回)

9月3日, 大噴火 (B) 2回, 小噴火 (C) 1回, 4日, 大噴火 (B) 1回, 5日, 周辺降灰, 7日, 小噴火 (D) 1回, 10日, 小噴火 (C) 1回, 12日, 小噴火 (C) 1回, 14日, 15日, 小噴火 (D) 各1回, 18日, 小噴火 (D) 1回, 20日, 大噴火 (B) 1回, 小噴火 (C) 1回, (D) 1回, 25日, 小噴火 (D) 1回, 26日, 大噴火 (B) 1回, 小噴火 (C) 1回, (D) 3回, 29日, 小噴火 (D) 1回, (9月噴火回数, B; 5回, C; 5回, D; 10回)

10月3日, 小噴火 (D) 1回, 4日, 大噴火 (B) 1回, 5日, 小噴火 (D) 1回, 6日, 大噴火 (B) 1回, (C) 2回, 7日, 8日, 小噴火 (D) 各1回, 10日, 小噴火 (C) 1回, 小噴火 (D) 3回, 11日, 小噴火 (D) 1回, 17日, 小噴火 (D) 1回, 19日, 小噴火 (C) 1回, 27日, 小噴火 (C) 1回, (D) 3回, 28日, 小噴火 (C) 1回 (D) 2回, 29日, 小噴火 (D) 7回, 30日, 中噴火 (C) 1回, 小噴火 (C) 1回, (D) 1回, 月31日,

小噴火 (D) 1回, (10月噴火回数, B; 2回, C; 6回, D; 20回)

11月4日, 小噴火 (D) 6回, 5日, 大噴火 (B) 1回, 6日, 大噴火 (B) 1回, 7日, 小噴火 (C) 1回, 10日, 小噴火 (D) 3回, 14日, 小噴火 (D) 1回, 15日, 大噴火 (B) 2回, 16日, 小噴火 (D) 2回, 25日, 小噴火 (C) 1回, 小噴火 (D) 1回, 28日, 大噴火 (B) 1回, 29日, 小噴火 (C) 1回, 小噴火 (D) 2回, (11月噴火回数, B; 5回, C; 3回, D; 15回)

12月2日, 大噴火 (B) 1回, 4日, 大噴火 (B) 1回, 8日, 小噴火 (D) 1回, 11日, 大噴火 (B) 1回, 山形で音響聞える. 12日, 小噴火 (D) 3回, 15日, 小噴火 (C) 1回, 17日, 小噴火 (C) 1回, 小噴火 (D) 1回, 28日, 中噴火 (C) 1回, (12月噴火回数, B; 3回, C; 3回, D; 5回)

(AVO噴火数, 1月; 0回, 2月; 0回, 3月; 1回, 4月; 8回, 5月; 24回, 6月; 20回, 7月; 22回, 8月; 10回, 9月; 26回, 10月; 17回, 11月; 8回, 12月; 9回)

107) 1939年(昭和14年)の活動

1月11日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所観測」04時19分頃, 小噴火あり, 爆音も小,

1月12日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所観測」早朝降灰を発見する. 積雪面灰色となる. 頗る微粒で灰白色を呈す. 降灰量 156 gr/m^2 , 硫黄臭甚だしい.

1月14日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所観測」11時42分頃, 小爆発, 噴煙少量東に流れる. 噴煙の通路下には少量の降灰がある模様.

小噴火 (D), 「軽井沢観測所観測」12時50分頃, 小爆発, 噴煙少量東に流れる. 噴煙の通路下には少量の降灰がある模様.

1月25日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所観測」10時50分頃, 小爆発, 噴煙は著しく黒色を帯び, 相当の降灰を伴う模様(気象要覧, 1939年1月).

2月2日, 大噴火 (A), 「追分支所報告」21時46分頃の噴火, 浅間山は2日午後より噴煙極めて少量となり, 甚だ不気味な状態にあったが, 21時46分遂に一大音響と共に爆発した. ドカーンという物凄い音響と同時にガラガラという異様な音を発し, 戸障子に相当強い空振を感じた. 黒煙多量昇騰しその高さは山の1倍半に達し, 次第に東南東に靡いた. ゴーゴーという雷鳴に似た鳴動が約3分間続いた. 焼石が多量噴出されたが約5分間で止んだ. 閃光は殆ど火口付近に限られたが, その回数極めて多く, 数えられたもののみでも65回に及び, 不明瞭なものも加えると70回近くに達し

た。

「軽井沢観測所報告」46分13秒ダーンと一声鈍い砲声のような頗る大きい爆音があり、同時に顕著な空振を伴って戸障子が激しく振動して、壁土のようなものがパラパラと落ちた。所によっては窓硝子の破損したものも多数あり、人々は皆戸外に飛び出した。噴煙は多量で5~8km上昇し、急速に東南東に流れ、山腹の東側に黒色の條痕を描きつつ火山灰砂の落下する状況は、折柄の月明かりによってよく望みされた。48分10秒最初の電光が噴煙の下方東側に見えた。それは青味を帯びた閃光で、パッと一閃した。閃光は続いて48分30秒再び同一場所付近に起こり、更に50~53分の間は連続して多数の電光が見えた。それらの中にはパッと閃光を放つものも多く、時には線電様のものもあった。ゴロンゴロンと砲車の橋上を渡るような雷鳴が間断なく聞えた。また山上の噴煙の西側には数百米に及ぶ火柱があり、盛んに奔騰して火花を散らし壯観を極めた。この火柱は53分に至って全く消失し、焼石による山火事は起こらなかった模様であるが、山腹の積雪面に焼石が落下して放つシューシューという音は遠く当観測所迄も聞えた。

引き続いて多量の噴煙があり、北軽井沢方面には多量の降灰があった由である。尚数日後山腹2,000m付近の山肌に崖崩れ様の変化を望見したが詳細は不明である。

「前橋測候所」爆音は近來になく大きく激しい空振を伴った。噴煙の流向は東より南に亘り、その速度は毎分3.2km、噴煙の先端は二つに分かれ、一つは東、他は東南東に向かい、前者が当所の天頂に達したのは22時01分、後者が真南に來たのは同2分であった。噴煙はかなり多量であったが、当地には降灰はなく、また光象も認めなかった。管内観測所では次の様な状況である。

大前; 爆音大, 鼻毛石; 爆音大, 空振及び地鳴り激しい, 安中; 爆音大, 22時10分より少量の降灰あり, 太田; 爆音大, 22時20分~38分降灰あり, 伊勢崎; 爆音大, 22時20分~35分砂利粒程度の降灰あり, 新羽; 爆音大, 空振激しい, 万場; 爆音大, 空振2回あり, 下仁田; 爆音稍大, 花輪, 大津, 渋川; 各地爆音大, 沼田, 五料; 各爆音小, 藤岡; 爆音あり, 弱震程度, 降灰多量あり, 桐生; 爆音小, その他, 東京を含めた関東各地で空振, 地鳴りを感じている(気象要覧, 1939年2月)。浅間山の爆発〔前橋〕2月2日午後9時半頃, 大音響と共に浅間山は爆発し, 噴煙は東南方に流れた。近年稀な大爆発で, 前橋市内では窓硝子の破壊された所も

あり, 人々は戸外に飛び出した。前橋測候所では昨年5月以来の大爆発であると語った。

〔東京〕2月2日午後9時半頃火薬庫の破裂せし時の如きかなり強き音響を聴き, 硝子障子を震撼させたが, やがて浅間山爆発と判明した「昭和14年2月3日, 国民, 報知等」(地震, 1939年3号)。

2月3日, 小噴火(C), 「軽井沢観測所報告」16時05分頃, 噴火噴煙稍多量東に流れる。少量の降灰がある模様, 16時12分頃ゴロゴロという鳴動1回起こる。

小噴火(D), 「軽井沢観測所報告」16時40分頃, 小噴火し噴煙東に流れる。

2月10日, 小噴火(D), 「軽井沢観測所報告」18時55分頃, 小噴火し噴煙南東に流れる。10時00分小鳴動あり(気象要覧, 1939年2月)。

2月15日, 大噴火(B), 「追分支所報告」09時19分頃の噴火, 浅間山は14日頃より噴煙量を減じていたが, 15日09時19分ドシーンという一大音響と共に噴火した。当時山頂は雲のため詳細不明であったが, 後次第に雲晴れ, 中腹より上の山容を望見することが出来た。噴煙は多量で東北東に流れ, ゴーゴーという鳴動約7分間続き, 空振も短時間あった。09時30分頃白煙に変わった。

「軽井沢観測所報告」爆音はドンと一声余り大きくなかったし, 空振も中程度であった。噴煙は黒色を帯びかなり多量の砂灰を含むもようで, 5~6km上昇し急速に東に流れた。約2分間ゴーゴーという鳴動があった。山頂の左方に火山弾の盛んに落下するのが望みされた。

「前橋測候所報告」ドンドンとかなり大きな連続3回の爆音が聞え, 空振もかなり強かった。09時37分頃噴煙は当所の天頂より約10°の辺に達した。10時23分より同41分迄18分間降灰があり降灰量8.8gr/m², 粒の大きさ径は0.1~0.3mm程度である。管内各観測所における状況は次の通りである。

万場; 爆音大, 空振連続2回あり, 沼田; 爆音小, 大砲発射の如き音, 五料; 爆音小, 空振は激しい, 下仁田; 爆音小, 鼻毛石; 爆音大, 降灰あり, 大前; 爆音大, 伊勢崎; 爆音大, 降灰あり, 安中; 爆音大, 連続2回の爆音あり, 太田; 爆音大, 空振甚だしい, 中之条; 爆音大, 戸障子振動する。

「筑波山測候所」09時28分頃西側の戸障子に軽震程度の地震の如き空振を感じたが, 地震計・自記晴雨計共に記象なく, 降灰も無かった。

他に熊谷測候所管内小鹿野; 硝子戸など相当大きな響きを立てる程度の空振あり。横浜測候所管内青山; 遠

- 雷の如き響き有り，水戸測候所管内石岡；地鳴り起こる，戸障子僅かに動く（気象要覧，1939年2月）。
- 2月19日，小噴火（D），「軽井沢観測所報告」17時56分頃，小噴火し噴煙東北東に流れる。降灰殆ど無い模様。
- 2月24日，小噴火（C），21時03分頃「ドーン」という底力のある音と共に「ゴウゴウ」という不気味な鳴動が続き黒煙モクモクと立ち昇り多量の焼石を噴出する，空気振動は殆ど認めず，鳴動は約13分で止んだ，閃光は60回近くあった模様である。ゴロゴロという音1回聞える。焼石は約10分で止む“爆発史集”。
- 3月6日，小噴火（D），「軽井沢観測所報告」10時18分頃，小噴火あり噴煙少量東南東に流れる。降灰少ない模様。
- 3月8日，小噴火（D），「軽井沢観測所報告」15時56分頃，小噴火あり噴煙少量東に流れる。降灰少ない模様。
- 3月15日，小噴火（D），「軽井沢観測所報告」21時40分頃，小噴火あり噴煙中量東南東に流れる。詳細不明。
- 3月16日，小噴火（D），「軽井沢観測所報告」06時10分頃，小噴火あり噴煙少量東南東に流れる。詳細不明。
- 3月17日，小噴火（D），「軽井沢観測所報告」18時02分頃，小噴火あり噴煙中量東に流れる。詳細不明。
- 3月25日，降灰，「軽井沢観測所報告」夜中微量の降灰あり，時刻不詳（気象要覧，1939年3月）。
- 4月14日，小噴火（D），「軽井沢観測所報告」小噴火あり，時刻不詳，降灰あり。5月14日，18時02分頃，小噴火あり，詳細不明“爆発史集”。
- 5月15日，小噴火（C），〔軽井沢〕5月13日以来不穏の状態にありし浅間山は，15日午後5時45分大噴煙をなし，黒煙は約20分間に亘り，西北方に靡き，鬼押し出しより北上州方面に多量の降灰があったが，人畜には被害はなかった「昭和14年5月18日，東京朝日」（地震，1939年6号）。
- 5月24日，大噴火（B），「追分支所」21時03分頃の噴火，一大音響と共に噴火した。ドーンという底力ある爆音と共にゴーゴーという鳴動続き，黒煙濛々と立ち昇り，多量の焼石が噴出された。空振は殆ど感ぜず，鳴動は約13分で止んだ。黒煙は次第に東に流れ，30分後には極少量となった。閃光は60回位あった模様である。ゴロゴロという弱雷の如き音が1回きこえ，焼石は10分で止んだ。日記晴雨計には記象しなかった。
- 「軽井沢観測所報告」21時03分頃トーンという中程度の音響と共に爆発した。戸障子が僅かに振動し，黒煙高く冲天し後南東に流れた。赤熱の溶岩が花火の如く放出され，為に山頂は火の海と化し壯観を呈した。鳴動・閃光共に10分間続き，閃光は相当多く噴煙中150m位の高さ迄認められた。躑躅ヶ原方面に降灰あり，溶岩は押し出し中腹迄流出したという（著者注，恐らくは小規模の火砕流が流下したものと考えられる）。日記晴雨計には1.8mmHg程度の振動を記録した（気象要覧，1939年5月）。
- この噴火の爆音或いは空振は長野・前橋・熊谷・東京・浜松・亀山などの各地で観測された。
- 東京；21時10分頃戸障子ガタガタと振動す。音響を聞いた人もある。地動及び空振はウイーヘルト式地震計に明瞭に記録された。
- 浜松；21時13分頃北方の窓硝子ビリビリと2，3回振動す。
- 亀山；21時18分頃ドスンと壁に人の凭れ掛かった時の様な音あり。
- 浅間山の爆発〔小諸〕5月24日午後9時5分，浅間山は大音響と共に爆発，強き上下動を伴い，人々は戸外に飛び出した。火柱天に押し壯観を極めた。噴煙は上信国境より群馬県方面に流れ，降灰甚だしい「昭和14年5月25日，報知，東京日々，東京朝日」（地震，1939年7号）。
- 6月3日，小噴火（D），08時27分，噴煙全然音も無く多量の黒煙を噴出し9時18分まで続き東北東に流れ去る。鳴動無し。“爆発史集”，（気象要覧，1939年6月）。
- 6月8日，小噴火（D），06時15分頃，小噴火噴煙東に流れる。爆発史集，（気象要覧1939年6月）。
- 6月10日，小噴火（D），06時21分頃或いは35分頃，噴煙音も無く黒煙の多量を噴出した。噴煙は10時25分-30分頃より漸減，21時頃止む。高さ1,600m幅4kmに及ぶ（気象要覧，1939年6月）。
- 浅間山の爆発〔小諸〕6月10日午前6時40分，浅間山は小爆発し，噴煙は峰の茶屋方面から群馬県方面に流れ，引き続き8時10分頃迄噴煙をつづけたり「昭和14年6月11日，都」（地震，1939年7号）。
- 6月20日，小噴火（D），噴煙，14時の観測の時，黒煙多量噴出上昇後南南西に流れるを認めた，鳴動，音響，空振など更に感じなかった。14時48分頃白煙となる。追分，小諸方面に降灰ある模様。“爆発史集”，（気象要覧，1939年6月）。
- 6月25日，大噴火（B），「追分支所報告」00時58分頃の噴火，ドーンという爆音と共に噴火したが，全山雲に包まれて山容を認め得ず。鳴動は約20分間継続し，ゴーゴーという中にゴトゴトという音響あり，空振は戸障子を僅かに振動させたのみで約2分間で止んだ。閃光も認めず，降灰もなく，日記晴雨計にも記象を認

めなかった。

「軽井沢観測所報告」ドカンという音と共に爆発したが、雲霧の為に詳細は不明である。軽井沢町旧道方面には降灰があった由である。自記晴雨計には1.9 mmHg程度の微動を観測した。爆発程度一中。

「輪島測候所報告」0時58分ビリビリと南側？の障子に稍判然たる空振あり、引き続き南西方に当って重い物体が地上に落下せる時の如き音響あり、地響きを伴った稍強い単調な音であった。同時に家屋が不気味に軋むのが感ぜられた。引き続き第二の空振あり、後5, 6秒で再び前と同程度の音響が聞えた。空振はワイヘルト式地震計に記録された。

以上の他、名古屋管内奥町では殆ど全部の人が音響を聞き、名古屋市内でも一部聞いた由である。又福井県勝山町勝山森林治水試験地でも0時57分頃微震程度の空振(継続時間30秒)を観測した(気象要覧, 1939年6月)。

浅間山の爆発〔小諸〕6月25日午前1時、浅間山は突如大爆発し、山麓民の夢を破った。濃霧のため、噴煙は見えざりしが、湯ノ平火山館の戸障子は空気振動の為破壊し、付近数ヶ所に溶岩落下した「昭和14年6月27日、毎夕」(地震, 1939年8号)。

7月7日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」雲霧の為不明、08時30分~08時35分微量の降灰あり。

7月12日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」09時17分頃、爆発程度小、爆音も無く黒煙多量噴出東に流れる。ツツジヶ原方面は降灰がある模様。

7月13日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」14時22分頃、爆発程度小、爆音も無く噴煙中量噴出南東に流れる。降灰はない模様(気象要覧, 1939年7月)。

7月14日、大噴火(B)、「追分支所報告」21時07分頃の噴火、低き音響と共に突然噴火し、同時に戸障子にガタガタと空振を感じず。ゴーゴーという稍強き鳴動25分まで続き、多量の焼石が山腹の南側に噴出された。黒煙極めて多量に噴出し、暫く昇騰して後南に流れた。20分頃より全山層雲に蔽われ、その後の模様は不明。黒煙中に何回も閃光あり、又17分頃より十数回電雷があった。22分頃より多量の降灰あり、56分頃止む。降灰量新聞紙一枚あたり650 gr (0.145 gr/cm²)。自記晴雨計には記象せず。

「軽井沢観測所報告」黒煙400~500 m直上して後南南東に流れる。鳴動は7分間に及び、噴煙中に雷鳴盛んに起こる。初めは降灰微量なれども21時48分頃より稍多量となり22時19分止む。降灰量54 cm×40 cm紙上に8.5 gr (0.039 gr/cm²)、全く砂分を含まず。桑、

野菜類の被害多少あり。

「船津観測所報告」15日6時観測所付近一帯にかなりの降灰を認める。前夜来の風向は略北西風速は約1米であった(気象要覧, 1939年7月)。

7月30日、大噴火(B)、「追分支所報告」18時30分頃の噴火、31分ドシンと言う稍強き音響と同時に戸障子にガタガタと空振を感じ5, 6秒にして止む。噴火と同時にゴウゴウと云う強い鳴動あり、約20分にして止む。黒煙多量初めは南南東後南東に流れ、後再び南南東となる。18時52分頃より降灰あり、14日の時より少量にして細かく、一時は濃霧の掛かれる如し。山は噴火前より層雲に包まれて見えす。黒煙中に2, 3回電雷あり。黒煙は19時35分頃より少量となる。自記晴雨計には記象せず。

「軽井沢観測所報告」ドンと野砲の如き音と共に地鳴りあり、噴煙は稍遅く約200 m上昇して後南東に流れ、当所の上約1,600 mに昇る。噴煙中に雷鳴あり、12分間に及ぶ。18時52分より降砂雨の如き音をたてて落下す。18時59分音止み、次第に量を減じ19時09分全く止む。降砂量54 cm×40 cm紙上に11.6 gr (0.054 gr/cm²)。

「松本」市内にて爆音を聞いた者あり(時刻不詳)、18時39分東方袴腰連山上にムクムクと急昇する積乱雲状の噴煙を見る。18時42分頃噴煙最も高く、頂部は鉄トコ状となり、その高さ9°47' (海拔9,628 m)、方向はN75°30', 19時10分消失す。

尚、神奈川県測候所よりの報告によれば同所管内に降灰あり、概況次の通り。

吉野 31日早朝付近一帯薄霜程度の降灰に気付く。

中野 30日22時頃より曇り、31日5時30分晴れる。この間に降灰あり、樹葉・屋根等一面薄霜の如く白くなる。顕微鏡にて検査せるに粒子透明にして大小あり、硝子片の如し(気象要覧, 1939年7月)。

大山 当町内に白鼠色の降灰あり、阿夫利神社下社境内建物の屋根は白く目立ち当町内天幕の上等には積灰6 mm位に及んだ所もある。

浅間山の爆発〔軽井沢〕7月30日午後6時32分、浅間山は大音響と共に爆発、数百尺の高さに噴き上げられた噴煙は雨上がりの夕空に映えて一大壯観を呈した。央気象台軽井沢観測所の発表によれば、「雷鳴に伴った鳴動は約10分間続いた。去る5月24日午後9時3分の爆発程度で、今夏初めての大爆発であった」。午後7時頃から山麓軽井沢、沓掛方面に米粒大の降灰あり、人々傘をさして往来して居る「昭和14年7月31日、読売」(地震, 1939年9号)。

- 8月15日, 小噴火(D), 「軽井沢観測所報告」18時——, 小噴火がある模様で18時頃噴煙を望見す.
- 8月18日, 小噴火(D), 「軽井沢観測所報告」06時19分頃, 小噴火あり, 噴煙中量, 初め約50m直上し後東に靡く. 流出速度小. 中腹以上に多少の降灰ある模様.
- 8月24日, 小噴火(D), 「軽井沢観測所報告」05時34分頃, 小噴火あり, 噴煙は初め約100m程西寄りに上昇, 後南東に流れる, 流出速度特に小.
- 8月26日, 小噴火(C), 「追分支所」15時27分頃の噴火, ズドンという大音響と共に噴火し, 弱い空振2~3秒間あり. 噴火前より全山雲に包まれ噴火直前の状態は不明であったが, 2~3分後噴煙漸く雲上に現れモクモクと上昇し, 次第に南南東に流れ去った. 雲は依然として去らず, その後の状況も不明であるが, 稍強い鳴動が約5分間聞えた. 自記晴雨計には記象せず. 「軽井沢観測所報告」ドーンという大なる砲声の如き音と共に戸障子激しく振動し, 鳴動約1分半継続す. 噴煙は遅く, 6.0m/s程度の速さで初め南東に流れ, 高さ2,500m辺より南に曲転, この時噴煙の高度は頭上1,800m位. 噴煙は16時15分頃より減少し同30分止む. 上層はかなり強風の模様で当地方には降灰はなかった(気象要覧, 1939年8月).
- 浅間山の爆発〔軽井沢〕8月26日午後3時27分, 浅間山が爆発した. この朝火山測量の為登山した陸地測量技手土橋忠則氏, 及び佐久間氏, 森田氏等は同時刻八合目, 東前掛付近にて作業中と推定され, その安否を気遣って, 帝大浅間火山観測所の水上氏及び峰の茶屋主人等は, 午後4時山頂に向け出発した(地震, 1939年10号).
- 8月31日, 小噴火(D), 「軽井沢観測所報告」08時16分頃, 小噴火し黒色の噴煙中量北に流れる. 南よりの強風の為幅広く流れる(気象要覧, 1939年8月).
- 9月3日, 小噴火(D), 「軽井沢観測所報告」05時34分頃, 無音の小噴火する, 噴煙は約1,500mの高度で追分方面に流れる. 降灰ない模様.
- 9月6日, 小噴火(D), 「軽井沢観測所報告」16時34分頃, 16時34分頃山頂一帯の積雲去る頃, 黒煙南方に流れるを認める, 噴煙の先端は西方より南方に亘る積雲中に入り詳細不明.
- 9月14日, 小噴火(D), 「軽井沢観測所報告」08時45分頃, 黒煙北東寄りに天頂に昇り, 08時48分頃緩やかに北東に流れ始める, 08時58分頃黒煙全く止み, 極青白色少量の噴煙となる(気象要覧, 1939年9月).
- 10月4日, 小噴火(D), 05時40分頃, 小噴火“爆発史集”.
- 小噴火(D), 06時27分頃, 小噴火“爆発史集”.
- 10月13日, 小噴火(D), 12時13分頃, 小噴火, 噴煙は少量づつ噴出し一部は緩やかに東方に流れ大部分は南方に流れる. 噴煙の前半より竜巻の如く漏斗状に広がり秋空に美観を呈す.“爆発史集”(気象要覧, 1939年10月).
- 10月14日, 小噴火(D), 07時34分頃, 小噴火, 噴煙は昇騰し南方に流れる. 高度1,800m“爆発史集”.
- 小噴火(D), 10時41分頃, 灰色の噴煙火口一杯に出るが10時50分頃噴煙止む“爆発史集”.
- 小噴火(D), 13時24分頃, 黒煙少量ポツと出てその後出ず“爆発史集”.
- 10月17日, 小噴火(D), 13時16分頃, 黒灰色の煙稍多量性南西の斜面に沿い流れ前掛山に当り再び上昇13時35分噴煙次第に減少“爆発史集”.
- 10月21日, 小噴火(D), 13時30分頃, 噴煙南東に靡く“爆発史集”.
- 11月11日, 小噴火(C), 「追分支所報告」19時02分頃の噴火, 空振と共に鳴動ゴォーという音響あり, 黒煙多量に噴出東に流れた. 鳴動15分にして止み, 閃光を数回望見する. 雉子盛んに鳴き喚き, 時々小銃の如きトーンという音響を聞く. 25分頃より時々遠方にて大砲を発射せる如き響き起こり, 間もなく止みたり. 33分またまた空振を感じ, 鳴動起こり火口上には火柱奔騰し黒煙多量に噴出せり.
- 「軽井沢観測所報告」19時10分頃多量の黒煙東南東に流れ碓氷峠を越える. 19時19分3回閃光弱音あり. 爆発前微震あり戸障子鳴る. 先の噴煙流出衰え始める頃19時33分再び中程度の無音爆発あり火柱, 雷鳴を伴う. 黒煙は同じく東南東に流れ降灰無き, 見込み. 19時40分, 19時41分に雷鳴(弱)あり.
- 「前橋測候所報告」爆音, 空振共に無し. 夜間の為, 噴煙状況不明. 20時30分~同45分まで10gr/m²の降灰あり. 次いで21時50分~22時33分迄再び33gr/m²の降灰を観測する(気象要覧, 1939年11月).
- 11月17日, 小噴火(D), 「軽井沢観測所報告」13時46分頃の噴火, 黒煙東北東に流れ, 13時54分頃より稍多量となり, 14時12分に至り減少し, 黒煙は白煙に变ず. 中腹付近では降灰ある模様なり.
- 11月20日, 小噴火(D), 「軽井沢観測所報告」13時46分頃の噴火, 中程度の噴煙は稍多量に南東へ緩やかに流れ, 高度は約2,000mなり. 14時20分頃噴煙は減少し, 14時35分頃東南東に転向す. 16時05分頃雲霧に包まれ, その後の状況不明なり(気象要覧, 1939年11月).

12月5日, 小噴火 (C), 「軽井沢観測所報告」13時29分頃の噴火, ゴー」と響き微震と共に噴火す. 戸障子鳴り付近の雉盛んに鳴く. 噴煙は稍赤味ある黒灰色で, 火口より斜めに南東に流れ, 碓氷峠方面に至る. 高度は約2,500mで, 千ヶ滝, 旧道方面に降灰盛んなる模様である. 13時45分頃噴煙は白色と変化し, 14時頃には普通の状態となった. 自記晴雨計には+2mmの微動が記録された(気象要覧, 1939年12月). 浅間山の爆発〔前橋〕久しく鳴りを鎮めて居た浅間山は12月5日午後1時29分頃, 大音響と共に爆発, 噴煙天に押し, 約1時間に亘り, 前橋地方に降灰があったが, 被害はない見込みである. なお西北風にあふられ桐生地方にも相当の降灰を見た「昭和14年12月6日, 中央, 報知」(地震, 1940年1号).

1939年浅間山活動の要約

1月11日, 12日, 各小噴火 (D) 1回, 14日, 小噴火 (D) 2回, 25日, 小噴火 (D), (1月噴火回数, D; 5回)
 2月2日, 大噴火 (A), 3日, 小噴火 (C), 小噴火 (D), 10日, 小噴火 (D), 15日, 大噴火 (B), 19日, 小噴火 (D), 24日, 小噴火 (D), (2月噴火回数, A; 1回, B; 1回, C; 1回, D; 4回)
 3月6日, 小噴火 (D), 3月8日, 小噴火 (D), 3月15日, 16日, 17日, 小噴火 (D) 各1回, 3月25日, 降灰, (3月噴火回数, D; 5回)
 4月14日, 小噴火 (D),
 5月14日, 小噴火?, 15日, 小噴火 (C), 24日, 大噴火 (B), 小規模の火砕流が流下したと推定される記録あり. (5月噴火回数, B; 1回, C; 1回)
 6月3日, 小噴火 (D), 8日, 小噴火 (D), 10日, 小噴火 (D), 20日, 小噴火 (D), 25日, 大噴火 (B), 名古屋で空振を感じる. (6月噴火回数, B; 1回, D; 4回)
 7月7日, 小噴火 (D), 12日, 13日, 小噴火 (D), 各1回, 14日, 大噴火 (B), 30日, 大噴火 (B), (7月噴火回数, B; 2回, D; 3回)
 8月15日, 小噴火 (D), 18日, 小噴火 (D), 24日, 小噴火 (D), 26日, 小噴火 (C), 31日, 小噴火 (D), (8月噴火回数, C; 1回, D; 4回)
 9月3日, 小噴火 (D), 6日, 小噴火 (D), 14日, 小噴火 (D),
 10月4日, 小噴火 (D) 2回, 13日, 小噴火 (D), 14日, 小噴火 (D) 3回, 17日, 小噴火 (D), 21日, 小噴火 (D), (10月噴火回数, D; 8回)
 11月11日, 小噴火 (C), 17日, 小噴火 (D), 20日,

小噴火 (D), (11月噴火回数, C; 1回, D; 2回)

12月5日, 小噴火 (D),
 (AVO噴火数, 1月; 1回, 2月; 17回, 3月; 7回, 4月; 11回, 5月; 6回, 6月; 6回, 7月; 13回, 8月; 5回, 9月; 3回, 10月; 2回, 11月; 0回, 12月; 0回)

108) 1940年(昭和15年)の活動

1月, 本月浅間山では噴火らしい活動は1回も観察されなかった(気象要覧, 1940年1月).
 2月9日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」13時29分頃, 小噴火, 輪雲一個南方に飛流する(気象要覧, 1940年2月).
 2月16日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」15時40分頃, 噴煙灰色, 旧道(軽井沢)方面降灰あり(気象要覧, 1940年2月).
 2月27日, 大爆発 (B), 「追分支所報告」04時31分頃の爆発, ゴーゴトと云う鳴動があったが, 全山雲に包まれれ状況不明. 夜明け後雲晴れると白煙を噴出していた. 降灰は多量あったようで, 前掛山中腹辺まで積雪灰色となる. 尚地震計は上下動のみ記録し, 最大全振幅42 μ , 総振動時間9分, 晴雨計自記器は約3.5mm上昇す.
 「軽井沢観測所報告」ドーンと一大音響と共に爆発す. ゴーゴーの山鳴り雑音が9分継続し後沈静に戻ったが, 詳細は雲霧の為不明. 雲霧消散後, 降灰の為追分口下方まで積雪は真っ黒となっているのが望見される. 付近の降灰状態を調査するに, その分布は火口より石尊山付近までは南進し, それよりは東に転向したものの如く, 当所より約1,000m北をかなりの幅をもって東進した. 降下物には今回は軽石とか赤味ある溶岩灰等は全然無く, 玻璃質火山岩の黒味のあるもの或いは多少白く焼けたものばかりであった. 尚旧道方面の人の言によれば, 爆発後大体10分後大夕立の如く降砂約5~6分間襲来し, 道路上は薄く砂利を布いたように堆積した. 又斯かる大きな火山礫降下は初めてであったと言う.
 「前橋測候所報告」04時34分頃浅間山爆発の空振あり. ドドンと短いながら音響は大きく, 噴煙は稍多量に直上し, 後東南東に帯状をなし, 毎分3.5km位にて流れ, 4時45分57秒には当所南方を高度35度通過した. 当所降灰無く, 噴煙は5時30分頃迄噴出され後急激に衰えた. 前橋管内での観測報告は次の通り
 大前; 4時32分, 音響大, 降灰なし, 鳴動およそ7分,
 中之条; 4時35分, 音響大, 降灰なし, 大鳴動と地震あり,
 渋川; 4時40分, 降灰なし, 安中; 4時30分, 大

砲の如し、降灰なし、五料; 4時40分、降灰石4時45分~55分。降石大豆1倍半より米粒位まで。降雨計に入りたる量1平方メートル約223瓦。鼻毛石; 4時45分、鳴動50秒、伊勢崎; 4時35分、降灰なし、谷地; 4時49分、空振10秒間、沼田; 4時35分、大砲発射の音、地鳴りあり、大津; 空振1分、新羽; 4時38分、空振3秒間、藤岡; 4時35分、空振1分10秒間、降灰有り、「東京」空振を感じたる人あり。本丸の皇宮警察官によれば7時頃天空俄に曇り、かなりの降灰があった。当朝朝アスファルト路上白く、自動車の轍の跡あり。

その他水戸測候所管内でも空振を感じ、銚子では6時30分降灰があった(気象要覧, 1940年2月)。

浅間山の爆発〔軽井沢〕2月27日午前4時30分、浅間山は大爆発し、溶岩の流出物凄く山頂は火の海となった。約15分間鳴動をつづけ、轟音と共に拇指大の火山礫が猛烈に吹きつけ、軽井沢方面の住宅の窓ガラスなど多数破壊された。

〔小諸〕浅間山は2月27日午前4時15分頃、大音響と共に爆発濛々たる噴煙は月明の空に押し、物凄い壮観を呈した。噴煙は約5分を経て軽井沢から群馬県方面に靡き降灰で白雪を染めた。

〔前橋〕2月27日午前4時30分頃、浅間山爆発群馬県の一部及び千葉県銚子付近に降灰あり、昭和13年5月以来の大なるものであった「昭和15年2月28日、読売、東京朝日、都等」(地震, 1940年4号)。

3月、本月の浅間山は全く静穏で小噴火も認められなかった(気象要覧, 1940年3月)。

4月16日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」09時12分頃、早朝より煙が無かったが、突然黒煙の一塊が北東に流れ、その後再び噴煙なし。

4月22日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」17時30分頃、噴火黒煙多量噴出、高度約2,600m、煙の噴出かなり続く。

4月24日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」16時55分頃、噴火灰色煙多量噴出、高度約2,700m、18時10分頃微かになる(気象要覧, 1940年4月)。

5月21日、小噴火(D)、08時54分頃小噴火する“爆発史集”。

5月25日、小噴火(D)、12時20分頃、雲霧のため終日見えなかったが正午頃草軽鉄道路線に降灰かなりあった由(新聞報告による)“爆発史集”。

5月30日、小噴火(D)、07時50分、暫く静穏であった浅間山も本日未明1、2回の火山性微動を発現し午前6時頃4~50分間の継続せる微動ありて遂に7時50分ゴォーという音響を伴って黒煙を多量に噴出、東北

東或いは東に靡きたり。9時40分全く白煙となったがその前8時17分「ドーンドーン」という大砲の如き音響を2回程聞きたり“爆発史集”。

小噴火(D)、08時38分頃、小噴火あり“爆発史集”。6月3日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」18時50分頃、小噴火し黒灰色噴煙中量噴出北東に流れる。19時50分平常に戻る。

6月15日、小噴火(D)、「軽井沢観測所報告」18時40分頃、中噴火し黒煙多量噴出北東に流れる。19時45分平常に戻る(気象要覧, 1940年6月)。

7月、8月、両月とも浅間山は静穏であった(気象要覧, 1940年7月、8月)。

注70、1940年に入り気象要覧の記述に疑問が生じる。浅間山の噴火活動に関して、噴火と爆発の2種類の表現が見られるが、問題は爆発現象というものの定義に関することである。1940年3月、の気象要覧では“無音の小噴火すら認められなかった”と記述されている。これは火山学的には正しい表現と考えられる。

同じく1940年7月、の気象要覧では“無音の爆発すら無く”とあり、同じく9月、には“無音の爆発は3回に及んだ”と記述されていて爆発=噴火の意味に使われている。同様の記述は1941年にも続き1月、には“総べて無音であったが小爆発が頻発し”とあり、とくに目立つのは3月、で“爆発回数は軽井沢17回、前橋では11回いずれも爆音、空振は観測されなかった”とある。

ところで、爆発的噴火現象とは火山噴火現象の1形態に過ぎず、爆発現象というためには、例えば急激な気圧変化を伴うであろう。その結果、音響あるいは空気振動などが発生するのは当然であり、無音爆発という表現は、浅間山噴火をただ単に噴火=爆発といった意味に使用していると考えられる。

それらの点を考えて著者はすべて噴火に統一している。爆発というためには、爆発噴火の定義を定める必要があるが、少なくとも爆音あるいは空振の程度、場合によっては噴火地震の強さ等を考慮した方式を検討する必要がある。ちなみに櫻島火山では、現在爆発の定義として或る観測点の気圧変化振幅および噴火地震の振幅の規模が使用されている(京大防災研火山活動研究センター井口助教授談)。

ただし、本活動史における浅間山の、1900年代より30年代に至る間に使われた大爆発あるいは強爆発などの記述は当然そのままにしておく。まさしく爆発の表現に値する噴火を爆発としているからである。

9月11日, 小噴火(D), 「軽井沢観測所報告」08時55分頃, 爆音なく黒灰色噴煙中量噴出, 南西に流れる. 11時頃より薄くなり12時に平常となる. 12時20分再び黒灰色噴煙あるも5分間で平常の白色煙となる.

9月13日, 小噴火(D)「軽井沢観測所報告」11時40分頃, 「ポッ」と煙出て型に広がる. 11時50分止む(気象要覧, 1940年9月).

9月24日, 小噴火(C)「軽井沢観測所報告」14時03分頃, 煙は朝より爆発まで出ず, 爆発と同時に黒灰色の噴煙は頸部が蜂の頭の如くなって天頂高く昇る. 上昇速度極めて遅し. 20分頃北東及び西にカナトコ状に広がる. 高度700~800m. 26分噴煙赤褐色となるも勢い依然たり. 36分赤味多くなり, 15時00分頃灰色となり, 同21分頃煙, 量, 色共に普通となる. 尚噴煙は31分頃500m位より西に流れ, 58分頃勢い弱まると火口上50m位より西に流れる. 鹿沢方面, 剣ヶ峰方面に降灰があるらしい(気象要覧, 1940年9月).

浅間山の爆発〔小諸〕9月24日午後2時10分頃, 浅間山は突如大爆発, 物凄い噴煙天に押し, 群馬県側に盛んに灰を降らせた. 小諸警察署浅間火山館派出所からの電話によれば, 火山館付近には小砂利を混じた灰が降って居り, 鬼押し出し方面に盛んに降灰があった. 登山者は何れも下山後で被害はない模様「昭和15年9月25日, 東京朝日」(地震, 1940年12号).

10月14日, 大爆発(B)「追分支所報告」17時30分浅間山は突然噴火す. 空振, 地震, 鳴動を感じたが, 降雨にて全山雲に覆われ噴煙は望まれなかった. ゴーゴーたる鳴動は時々電光を交えて東に流れた模様で, 17時36分北北東, 同38分北東に移動する如く音のみ聞えた. 晴雨計は1.5mmの上昇を記録す. 尚その後17時40分, 同44分, 47分, 57分等時々小噴火があったが, 詳細は雲にて不明である. 又爆発直前に弱震があった(気象要覧, 1940年10月).

「軽井沢観測所報告」17時29分浅間山大爆発す. 戸障子相当揺れる. 爆発数秒前地震あり, 雲霧にて詳細不明. ゴーゴーたる雑音により噴煙北東に流れた模様. 小浅間山頂方向に雑音多し. 山頂方に連続的に17時38分~同55分に亘って雷鳴電光あり, その間17時42分に小爆発あり, 戸障子微かに揺れる. 17時55分頃雑音全く終わる. 自記晴雨計に3mmの記録あり. 「前橋測候所報告」空振殆ど感ぜず, 余り大きくない地響きのする遠雷の如き爆音を聞く. 降灰砂なし. 区内の中之条では18時頃降灰稍大にして多量なり. 爆音空振なし.

「小名浜測候所報告」17時47分南西方向に大砲の如き

音響あり, 硝子戸の震動甚だし. ウイーヘルト地震計に空振記録す. 発現時17時42分02.5秒, 総振動時間44.4秒, 最大全振幅8.4ミクロン. 管内泉村下川では20時27分頃より約30分間に亘り降灰甚だしく暫時開眼至難の程度であった. 同川前村にも相当の降灰があった.

「白河測候所報告」20時50分から28分に亘り東, 西白河両郡一帯に降灰があった(気象要覧, 1940年10月).

浅間山の爆発〔小諸〕浅間山は10月14日午後5時29分頃爆発, 山麓の戸障子を揺るがせて, 鳴動約30分続いた. 峰の茶屋の帝大観測所の地震計は数日前から微動が著しく現れ, 警戒されていた. 雨天のため, 山頂の様子は不明. 「軽井沢」2月27日の大爆発以来無音の爆発を繰り返していた浅間山は, 10月4日午後5時半突如大音響と共に大爆発し, 地震の如き家鳴り震動に山麓の人々を驚かした. 沼田町地方は火山灰が音を立てて降り注ぎ, 傘をささねば歩行出来ざる程で, 異様な臭気さへ感ぜられた. 「前橋」10月14日午後5時過ぎ頃, 浅間山が久方振りに爆発し, 音響は前橋測候所の地震計にも感じたが, 当日は雨天のため詳細不明. 「福島」10月14日午後8時頃福島県白河地方に火山灰が降り, 一時は交通困難であった. 田村郡船引町方面にも降灰があった. 平市では同日夕5時半頃大爆音を聞いた. 「宇都宮」10月14日午後6時半頃栃木県日光, 黒磯地方に相当量の降灰あり, 太田原地方にも少し降った. 「日光」浅間山爆発のため, 日光では午後7時から約15分間に亘り相当の降灰があり, 傘につもる程度であったが, 次第にまばらとなり雨の中に消えた「昭和15年10月16日, 読売, 報知, 東京日々, 東京朝日」(地震, 1940年12号).

11月17日, 小噴火(C)「追分支所報告」00時23分頃の無音噴火, 微かな空気振動を伴って噴火す. 晴れ渡った秋空に噴煙が稍高く上がり直ちに東へ靡き去る. 前掛山頂へ火山弾の落下するのが望見された. 噴煙は50分後に常態に復した. 晴雨計異変なし.

「軽井沢観測所報告」山頂火炎に包まれ火柱直上した由(気象要覧, 1940年11月).

11月19日, 小噴火(C)「追分支所報告」14時40分頃の無音噴火, ガタガタと云う戸障子の振動と共に黒煙多量に噴出す. この日6時には白煙少量東へ流れ8時頃から煙が全く見えなくなって爆発時に至った. 晴雨計異変なし.

「軽井沢観測所報告」黒煙は山頂より東方へ約60度傾斜上昇し, 5分過ぎには先端部水平に流れ出す. 高度

- 約 2,000 m, 10 m/s の速度で 2 時 55 分には碓氷峠上空に達す。15 時には黒煙は濃灰色に変じ、15 時 02 分漸次衰え出し同 09 分平常の白煙となる。噴煙通過の所は多量の降灰のある様なれど被害なき模様である。当日 6 時には白煙北方に低流していたが、その後全く停止していた。
- 「前橋測候所報告」爆音空振なし。噴煙多量に直上し次第に東北東に傾き帯状をなして 2.5 km/m の速さで東進し、その先端は 14 時 59 分 54 秒測候所上空（真上より東方）を通過して東方に移動す。16 時頃には全天殆ど噴煙無く東北東山頂付近に僅かに認められるのみであった。16 時 24 分降灰始まり 17 時 40 分までに 5.2 gr/m² の降灰があった（気象要覧, 1940 年 11 月）。
- 11 月 21 日, 小噴火 (D) 「軽井沢観測所報告」18 時 35 分頃の噴火, 爆音無く暗褐色噴煙多量に噴出, 東北東に流れ碓氷峠を越える。高度 700~800 m. 煙速早し。旧軽井沢方面に降灰あり。19 時 50 分噴煙止む。
- 11 月 22 日, 小噴火 (D) 「軽井沢観測所報告」16 時 33 分頃の無音噴火, 強風の為火口より上昇せず真っ黒の煙は東側に流下し 600~700 m の高度で碓氷峠を越えた。17 時 13 分迄続き普通に帰る。
- 「前橋測候所報告」17 時 32 分頃小爆発あり, 稍多量の噴煙は東南東に靡き当所上空（真上より南方）を通過して東方に進む。噴煙は極淡くなりたるも, 18 時頃微量の降灰あった (1.9 gr/m²)。
- 小噴火 (D) 「軽井沢観測所報告」18 時 50 分頃, 黒煙多量噴出, 東に流れ先端碓氷峠を越える。19 時 25 分噴煙止む。
- 11 月 27 日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」09 時 30 分頃の無音噴火, 黒灰色噴煙噴出, 東南東に山肌に沿って流れ, 9 時 38 分噴煙止む。
- 「前橋測候所報告」17 時 25 分頃より降灰始まり, 12.0 gr/m² の降灰があった（気象要覧, 1940 年 11 月）。
- 11 月 28 日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」07 時 17 分頃, 黒色噴煙噴出, 東方へ山肌に沿って流下する。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」08 時 21 分頃, 黒色噴煙次々と東方に流れる。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」11 時 10 分頃, 黒色噴煙トギレ, トギレに噴出, 東北東に流れる。11 時 20 分平常となる（気象要覧, 1940 年 11 月）。
- 12 月 3 日, 小噴火 (C), 「軽井沢観測所報告」02 時 32 分頃, 山頂雲にて不明, 爆音あり噴煙北東? に流れる。微震あり, 旧道方面に降灰あり。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」10 時 40 分頃, 無音で黒煙雲を破り, 南に流れるのを見る。降灰なし。
- 12 月 9 日, 小噴火 (D) 「軽井沢観測所報告」05 時 00 分頃, 無音噴火, 噴煙量中, 東に流れる。降灰なし。
- 12 月 18 日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」16 時 35 分頃, 無音噴火, 噴煙茶褐色中量高度 1.7 km で東に流れる。17 時に平常になる。降灰なし。
- 12 月 19 日, 小噴火 (C) 「追分支所報告」08 時 40 分頃, 空振と鳴動を伴って噴火す。「ゴーゴー」という鳴動約 1 分間つづく。短時間空振あり, 戸障子「ガタガタ」振動す。晴雨計に記録なし。
- 「軽井沢観測所報告」08 時 46 分頃, グーンと音がする, 雲にて不明, 09 時 20 分雲の切れ間より白煙多量南東に流れるを見る。自記晴雨計 0.8 mm の上昇あり。軽井沢及び発地にて降灰積雪上に薄黒し。
- 12 月 21 日, 小噴火 (C), 「軽井沢観測所報告」03 時 17 分頃, ドーンと爆発後, ゴーゴーという音響続く。3 時 25 分頃時々弱くなり, 3 時 32 分再び強く 3 時 42 分止む。雲霧にて不明なれども, 音により南東に流れるを知る。降灰量 28.0 瓦/坪。
- 「追分支所報告」03 時 18 分頃, 空振鳴動あり, 共に約 1 分位にて止む。晴雨計記録なし（気象要覧, 1940 年 12 月）。
- 12 月 22 日, 小噴火 (D), 「追分支所報告」09 時 30 分頃, 無音噴火あり。黒煙多量東に流れる。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」09 時 52 分頃, 無音噴火噴煙多量噴出南東に流れる。高度 1.5 km, 速度 8.0 m/s, 13 分後 4 分間降灰微量。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」13 時 13 分頃, 無音噴火, 煙北東に流れる。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」14 時 23 分頃, 無音噴火, 噴煙量少量。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」15 時 13 分頃, 無音噴火, 噴煙量少量。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」15 時 23 分頃, 無音噴火, 噴煙量少量。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」15 時 57 分頃, 無音噴火, 噴煙量少量。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」16 時 08 分頃, 無音噴火, 噴煙量少量。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」19 時 28 分頃, 無音噴火, 噴煙量少量。
- 12 月 24 日, 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」15 時 44 分頃, 無音噴火, 噴煙量多量, 東に流れる。16 時 03 分普通となる。
- 小噴火 (D), 「軽井沢観測所報告」16 時 39 分頃, 無音噴火, 噴煙量多量, 東南東に流れる。16 時 48 分迄山腹

を流下、それより離山、17時再び黒煙昇る。17時10分止む（気象要覧、1940年12月）。

12月25日、小噴火（D）、「軽井沢観測所報告」15時19分頃、無音噴火、噴煙量多量、東に流れる。赤味をおびた黒煙先端二又にわかれて流れる。15時22分白煙（多量）となる。

小噴火（C）、「軽井沢観測所報告」20時34分頃、稍大きい噴火で音あり、黒煙中量噴出、鳴動はなし。自記晴雨計（+）3mm、（-）2mmを記録。

「追分支所報告」20時35分頃、空振鳴動あり、共に約1分位で止む。晴雨計記録なし。

12月31日、小噴火（D）、「軽井沢観測所報告」09時14分頃、無音噴火、噴煙中量南東に流れる。降灰あり。茶褐色煙9時47分白煙となる。

小噴火（D）、13時00分頃、無音噴火、噴煙中量南東に流れる。降灰あり。黒灰色煙13時48分灰白色になり、16時03分平常の白煙となる。高度1.5km。（気象要覧、1940年12月）。

1940年浅間山活動の要約

1月、活動無し、

2月4日、小噴火（D）、16日、小噴火（D）、27日、大爆発の小（B）、銚子、東京等に降灰あり、（2月噴火回数、B；1回、D；2回）

3月、活動無し、

4月16日、小噴火（D）、22日、小噴火（D）、24日、小噴火（D）、

5月21日、小噴火（D）、25日、小噴火（D）、30日、小噴火（D）2回、

6月3日、小噴火（D）、15日、小噴火（D）、

7月、8月、両月活動無し、

9月11日、小噴火（D）、13日、小噴火（D）、24日、小噴火（D）、

10月14日、大爆発（B）、北東方向、栃木県日光、福島県下などに降灰あり、

11月17日、小噴火（C）、19日、小噴火（C）、21日、小噴火（D）、22日、小噴火（D）2回、27日、小噴火（D）、28日、小噴火（D）3回、（11月噴火回数、C；2回、D；7回）

12月3日、小噴火（C）（D）各1回、9日、小噴火（D）、18日、小噴火（D）、19日、小噴火（C）、21日、小噴火（C）、22日、小噴火（D）9回、24日、小噴火（D）2回、25日、小噴火（C）（D）各1回、31日、小噴火（D）2回、（12月噴火回数、C；4回、D；17回）

（AVO噴火数、1月；2回、2月；0回、3月；0回、4月；0

回、5月；2回、6月；0回、7月；0回、8月；1回、9月；1回、10月；2回、11月；17回、12月；27回）

109) 1941年（昭和16年）の活動

本年1月、浅間山には近来にない異常な活動が生じた。すべて無音であるが小噴火が頻発し、その回数は全月を通じて107回（気象要覧）に達した。活動の概況は月のはじめ並びに中旬にやや活気を呈し、ことに18日は最盛活動を示して軽井沢では21回、前橋では11回の噴煙、噴火が観測された。17日及び18日の夜には、軽井沢では火口上がうす赤くなる程度の火柱が観測された。降灰は軽井沢では3～6日、15日、16～28日及び30日にあり、多くは山麓まで、稀には観測所までも達した。なお25日、28日及び30日には前橋に微量の降灰があった。この活動中、軽井沢・前橋には空振がなく、軽井沢で鳴動が聞えたのは28日だけであった。気象要覧では、全部の活動の記載が省略されているので、“爆発史集”に記載された全活動表より引用して次に記しておく。

1月3日、小噴火（D）、07時40分、灰色噴煙中量噴出、東南東に流れる。降灰無し。

小噴火（D）、08時55分、灰色噴煙中量噴出、東南東に流れる。降灰無し。

小噴火（D）、09時21分、灰色噴煙少量噴出、東南東に流れる。降灰無し。

小噴火（D）、09時31分、灰色噴煙多量噴出、東南東に流れる。降灰有り。

小噴火（D）、09時37分、灰色噴煙少量噴出、東南東に流れる。降灰無し。

小噴火（D）、09時51分、灰白色噴煙少量噴出、東南東に流れる。降灰無し。小噴火（D）、09時56分、灰白色噴煙少量噴出、東南東に流れる。降灰無し。小噴火（D）、10時01分、灰色噴煙少量噴出、東南東に流れる。降灰無し。

浅間山の爆発〔長野〕久しく鳴りを鎮めて居た浅間山は最近に至り活動を始め、1月3日午前7時46分、同8時50分、同9時23分、同10時33分の4回に亘って、鳴動なき爆発をなしたが、8時50分のは噴煙天に沖して折柄の快晴に壮観を呈し、噴煙は東に流れた。〔小諸〕浅間山は1月3日午前7時40分、8時55分、9時21分、10時30分の4回に亘り、連続爆発した。山腹一帯に降灰あり、本年の初噴火である「昭和16年1月4日、東京日々、国民」（地震、1941年2号）。

1月4日、小噴火（D）、08時48分、灰色噴煙中量噴出、南東に流れる。降灰有り。

小噴火（D）、15時04分、灰色噴煙少量噴出、東南東

- に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 15 時 41 分, 灰色噴煙少量噴出, 南南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 17 時 13 分, 灰色噴煙少量噴出, 南南東に流れる。降灰無し。
- 1 月 5 日, 小噴火 (D), 10 時 36 分, 灰白色噴煙少量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 21 時 38 分, 灰色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。降灰有り。
- 1 月 6 日, 小噴火 (D), 12 時 52 分, 灰色噴煙中量噴出, 南方に流れる。降灰有り。
- 1 月 15 日, 小噴火 (D), 06 時 57 分, 黒灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 10 時 50 分, 灰白色噴煙極少量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
- 1 月 17 日, 小噴火 (D), 13 時 51 分, 灰色噴煙極少量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 16 時 55 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 18 時 13 分頃, 黒灰色噴煙極少量噴出, 南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 19 時 55 分, 灰色噴煙中量噴出, 南南東-南に流れる。降灰無し。
- 1 月 18 日, 小噴火 (D), 04 時 50 分, 灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 06 時 36 分, 灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 06 時 55 分頃, 灰色噴煙極少量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 07 時 40 分, 灰色噴煙中量噴出, 東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 09 時 08 分, 灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 09 時 41 分, 灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 09 時 54 分, 灰色噴煙極少量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 11 時 11 分, 灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 11 時 42 分, 灰色噴煙極少量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 11 時 50 分, 灰色噴煙極少量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 12 時 27 分, 灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
- 小噴火 (D), 13 時 43 分, 灰色噴煙中量噴出, 東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 15 時 01 分, 灰色噴煙少量噴出, 東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 15 時 03 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 16 時 26 分, 灰色噴煙中量噴出, 東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 18 時 29 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。 小噴火 (D), 19 時 42 分, 黒色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 19 時 49 分, 黒色噴煙少量噴出, 東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 20 時 36 分, 灰色噴煙少量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 21 時 39 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。 小噴火 (D), 22 時 33 分, 灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
- 1 月 19 日, 小噴火 (D), 05 時 31 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 06 時 54 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。 小噴火 (D), 08 時 03 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東~南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 08 時 11 分, 黒灰色噴煙極少量噴出, 北東~東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 08 時 50 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。 小噴火 (D), 09 時 27 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。 小噴火 (D), 11 時 36 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 13 時 14 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 14 時 35 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 14 時 50 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 15 時 23 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 19 時 10 分頃, 灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 21 時 12 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南南西~南方に流れる。降灰有り。
- 1 月 20 日, 小噴火 (D), 06 時 25 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 07 時 43 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南

- 東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 09 時 47 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 21 時 10 分, 黒色噴煙中量噴出, 南方に流れる。降灰有り。
- 1 月 21 日, 小噴火 (D), 09 時 00 分, 灰色噴煙中量噴出, 南方に流れる。降灰有り。
- 1 月 22 日, 小噴火 (D), 04 時 47 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 07 時 01 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 09 時 18 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 09 時 45 分, 灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 10 時 31 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 12 時 52 分, 灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 14 時 25 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東～東方に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 14 時 37 分, 灰色噴煙極少量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。
- 1 月 23 日, 小噴火 (D), 15 時 13 分頃, 噴煙中量噴出, 南方に流れる。降灰有り。
- 1 月 24 日, 小噴火 (D), 09 時 45 分, 灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる。降灰有り。
- 1 月 25 日, 小噴火 (D), 09 時 51 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 11 時 52 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 13 時 52 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 16 時 10 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 19 時 56 分, 黒色噴煙少量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
- 1 月 26 日, 小噴火 (D), 07 時 33 分, 灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 13 時 15 分頃, 茶褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 17 時 21 分, 茶褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 19 時 33 分, 灰茶色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。降灰無し。
- 1 月 27 日, 小噴火 (D), 06 時 25 分頃, 黒茶色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 06 時 58 分, 黒茶色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 09 時 22 分, 茶褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 10 時 38 分頃, 茶褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 11 時 57 分, 茶褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 13 時 51 分, 茶褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 16 時 27 分, 灰色噴煙極少量噴出, 東南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 18 時 02 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 21 時 06 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。降灰無し。
 小噴火 (D), 22 時 24 分, 黒色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。降灰無し。
- 1 月 28 日, 小噴火 (D), 04 時 48 分頃, 黒色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 05 時 58 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 07 時 48 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 10 時 08 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 13 時 10 分, 黒褐色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 14 時 30 分, 黒褐色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 16 時 44 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南南東～東方に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 19 時 10 分, 黒色噴煙中量噴出, 南東に流れる。降灰有り。
- 1 月 29 日, 小噴火 (D), 04 時 58 分, 灰色噴煙噴出, 南東に流れる。降灰有り。
- 1 月 30 日, 小噴火 (D), 06 時 38 分, 灰褐色噴煙噴出, 東南東に流れる。降灰有り。
 小噴火 (D), 07 時 37 分, 茶褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰有り。
 本年 2 月の浅間山は 1 月に引き続き全く異常な活動を示し, 噴火回数は 127 回に達している。概して月の前半に活発で, 殊に 13 日には噴火回数は 15 回に上った

た。月末に至って噴火回数は減少した。噴火は総べて無音で、黒色～灰色しばしば褐色をおびた噴煙をあげ、多少の降灰を伴った。軽井沢観測所に於いて降灰のあったのは、10、11、13、25の各日であった。降灰量は少なく、各日30瓦/坪程度であった。軽井沢観測所と前橋観測所とで観測された噴火を次に挙げる。両観測点における観測時間を考慮して、同一と見られる噴火に就いては、「軽井沢観測所」の資料を挙げてある（気象要覧、1941年2月）。

2月1日、小噴火(D)、06時10分、小噴火、「前橋観測」。

2月2日、小噴火(D)、05時48分、灰色噴煙中量噴出、南方に流れる。

小噴火(D)、07時37分、灰色噴煙中量噴出、南東に流れる。

小噴火(D)、09時43分、黒灰色噴煙中量噴出、南南東～南方に流れる。

小噴火(D)、10時18分、灰色噴煙極少量噴出、流向不明。

小噴火(D)、12時36分、茶褐色噴煙少量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、13時25分、茶褐色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、15時20分、茶褐色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、16時49分、茶褐色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、18時56分、黒灰色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、20時15分、黒色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、20時39分、灰褐色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

2月3日、小噴火(D)、05時35分、黒灰色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、07時23分、灰褐色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、08時37分、茶褐色噴煙中量噴出、南方に流れる。

小噴火(D)、10時54分頃、灰褐色噴煙中量噴出、東南東～南南東に流れる。

小噴火(D)、12時53分、灰褐色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、13時36分、灰褐色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、14時30分、黒灰色噴煙中量噴出、南南

東に流れる。

小噴火(D)、15時34分、黒灰色噴煙中量噴出、東南東に流れる。

小噴火(D)、17時08分、噴煙東方に流れる。微量の降灰「前橋観測」。

小噴火(D)、18時03分、小噴火、「前橋観測」。

小噴火(D)、19時14分、黒褐色噴煙中量噴出、東南東に流れる。

小噴火(D)、21時41分、黒灰色噴煙中量噴出、東方に流れる。

2月4日、小噴火(D)、06時20分、灰褐色噴煙中量噴出、南方に流れる。

小噴火(D)、08時01分、灰褐色噴煙中量噴出、南方に流れる。

小噴火(D)、09時21分、茶褐色噴煙中量噴出、東方に流れる。

小噴火(D)、10時42分、黒褐色噴煙中量噴出、西方に流れる。

小噴火(D)、12時28分、灰褐色噴煙中量噴出、西方に流れる。

小噴火(D)、15時01分、灰褐色噴煙中量噴出、西南西に流れる。

小噴火(D)、17時48分、黒色?噴煙中量噴出、南西に流れる。

小噴火(D)、18時40分、黒灰色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、21時38分、黒灰色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

2月5日、小噴火(D)、08時40分、灰褐色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、09時25分、灰褐色噴煙中量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、10時25分、灰褐色噴煙中量噴出、東南東に流れる。

小噴火(D)、11時03分頃、灰色噴煙中量噴出、東南東に流れる。

小噴火(D)、13時31分、灰白色噴煙少量噴出、東方に流れる。

小噴火(D)、13時43分、茶褐色噴煙少量噴出、南南東に流れる。

小噴火(D)、14時35分、灰色噴煙少量噴出、北東に流れる。

小噴火(D)、16時40分、灰褐色噴煙中量噴出、北東に流れる。

小噴火(D)、17時20分、茶褐色噴煙中量噴出、北東

- に流れる。
 小噴火 (D), 17 時 36 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
- 2 月 6 日, 小噴火 (D), 13 時 04 分, 黒褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (D), 16 時 45 分頃, 黒灰色噴煙中量噴出, 北東に流れる。
 小噴火 (D), 17 時 36 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 北東に流れる。
- 2 月 7 日, 小噴火 (D), 06 時 41 分, 黒灰色噴煙稍中量噴出, 北東に流れる。
 小噴火 (D), 07 時 04 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 北東に流れる。
 小噴火 (D), 07 時 14 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 北東～南南東に流れる。
 小噴火 (D), 07 時 49 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 北東～南南東に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 10 分, 黒灰色噴煙少量噴出, 北東～南南東に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 16 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 北東～南南東に流れる。
 小噴火 (D), 10 時 40 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 北東～南南東に流れる。
 小噴火 (D), 14 時 28 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 北東～南南東に流れる。
 小噴火 (D), 15 時 35 分頃, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 17 時 35 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 17 時 43 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 20 時 15 分, 小噴火, 噴煙南東に流れる「前橋観測」。
- 2 月 8 日, 小噴火 (D), 05 時 30 分, 小噴火, 噴煙南東に流れる「前橋観測」。
 小噴火 (D), 08 時 19 分, 茶褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる。
 小噴火 (D), 08 時 51 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 10 時 24 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東～南南東に流れる。
 小噴火 (D), 12 時 47 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 15 時 09 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東～南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 15 時 39 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東～南南東に流れる。
 小噴火 (D), 16 時 42 分, 灰色噴煙中量噴出, 北東～東南東に流れる。
 小噴火 (D), 17 時 26 分, 黒色噴煙多量噴出, 南南東に流れる。
 小噴火 (D), 18 時 45 分, 黒色噴煙中量噴出, 東南東～南南東に流れる。
 小噴火 (D), 20 時 03 分, 灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 21 時 25 分, 黒色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。
- 2 月 9 日, 小噴火 (D), 06 時 45 分, 黒色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 20 分, 黒色噴煙中量噴出, 流向不明。
 小噴火 (D), 12 時 16 分, 灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 14 時 46 分, 灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる。
 小噴火 (D), 16 時 57 分, 黒色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 17 時 56 分, 黒色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 18 時 15 分頃, 小噴火, 噴出噴煙東に流れる「前橋観測」。
 小噴火 (D), 21 時 52 分, 噴出噴煙量不明, 南東に流れる。
- 2 月 10 日, 小噴火 (D), 時刻不明, 微量の降灰有り「前橋観測」。
 小噴火 (D), 10 時 05 分頃, 小噴火, 噴出噴煙南東に流れる「前橋観測」。
 小噴火 (D), 13 時 29 分, 灰色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。
 小噴火 (D), 15 時 16 分, 茶灰色噴煙中量噴出, 東に流れる。
 小噴火 (D), 15 時 25 分, 灰色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。
 小噴火 (D), 16 時 20 分頃, 小噴火, 噴出噴煙南東に流れる「前橋観測」。
 小噴火 (D), 17 時 59 分, 小噴火, 噴出噴煙南東に流れる「前橋観測」。
- 2 月 11 日, 小噴火 (D), 05 時 20 分, 小噴火, 噴出噴煙南東に流れる「前橋観測」。
 小噴火 (D), 06 時 40 分, 小噴火, 噴出噴煙南方に流

- れる「前橋観測」。
- 小噴火 (D), 11 時 28 分頃, 灰色噴煙少量噴出, 南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 12 時 09 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 12 時 30 分, 灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる。
- 小噴火 (D), 13 時 30 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 14 時 15 分, 灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 15 時 01 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 15 時 29 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
- 小噴火 (D), 16 時 15 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東北東に流れる。
- 小噴火 (D), 17 時 17 分, 濃黒色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 19 時 30 分, 灰色噴煙極少量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 20 時 35 分, 灰色噴煙少量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 21 時 14 分, 灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる。
- 小噴火 (D), 21 時 54 分, 灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる。
- 小噴火 (D), 22 時 47 分, 黒色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
- 2 月 12 日, 小噴火 (D), 05 時 32 分, 灰色噴煙少量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 08 時 32 分, 灰色噴煙少量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 14 時 58 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
- 小噴火 (D), 16 時 47 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 19 時 25 分, 黒灰色噴煙少量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 19 時 36 分, 灰色噴煙少量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 21 時 54 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
- 2 月 13 日, 小噴火 (D), 07 時 12 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 09 時 28 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南方に流れる。
- 小噴火 (D), 11 時 04 分, 黒褐色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 13 時 35 分, 黒褐色噴煙中量噴出, 南～南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 15 時 31 分, 褐色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 15 時 35 分, 褐色噴煙少量噴出, 南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 15 時 39 分, 褐色噴煙少量噴出, 南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 15 時 41 分, 褐色噴煙少量噴出, 南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 16 時 28 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 北東に流れる。
- 小噴火 (D), 17 時 06 分, 灰色噴煙中量噴出, 北東に流れる。
- 小噴火 (D), 17 時 09 分, 灰色噴煙極少量噴出, 北東に流れる。
- 小噴火 (D), 18 時 11 分, 黒褐色噴煙中量噴出, 北東に流れる。
- 小噴火 (D), 18 時 23 分, 黒褐色噴煙中量噴出, 北東に流れる。
- 小噴火 (D), 19 時 18 分, 黒色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 19 時 52 分, 灰色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 21 時 00 分, 小噴火, 噴出噴煙南東に流れる「前橋観測」。
- 2 月 14 日, 小噴火 (D), 12 時 06 分, 小噴火, 噴出噴煙東北東に流れる「前橋観測」。
- 2 月 15 日, 小噴火 (D), 10 時 51 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。小噴火 (D), 12 時 22 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 12 時 28 分, 灰色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 13 時 15 分, 茶褐色噴煙極少量噴出, 東方に流れる。
- 小噴火 (D), 13 時 24 分, 茶褐色噴煙極少量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 13 時 29 分, 茶褐色噴煙極少量噴出, 東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 16 時 46 分, 灰色噴煙極少量噴出, 東方に流れる。

小噴火 (D), 16 時 47 分, 灰褐色噴煙極少量噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (D), 21 時 56 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。
 2 月 16 日, 小噴火 (D), 11 時 06 分, 灰色噴煙少量噴出, 南南東に流れる。
 小噴火 (D), 14 時 47 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる。
 2 月 18 日, 小噴火 (D), 08 時 25 分, 小噴火, 噴出噴煙北東に流れる「前橋観測」。
 2 月 23 日, 小噴火 (D), 灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 17 時 03 分, 灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 18 時 24 分, 灰色噴煙少量, 東方に流れる。
 小噴火 (D), 19 時 03 分, 灰色噴煙少量, 東方に流れる。
 2 月 25 日, 小噴火 (D), 11 時 23 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。

注 71, 1941 年 1 月, 2 月には, 小噴火が続発した。これらの活動が記録された時間帯を良く見ると, 深夜, 未明等の発生が割合として極めて少ない。噴火の殆どが無音活動であり, 観測者の監視から漏れてしまった噴火がかなりあったと想像するのが自然であろう。当然のこととして, 観測者の責任の問題ではない。その点を考慮すれば, 表面的な噴火の回数に関しての, 厳密な議論は避けるべきであると思う。浅間山の活動パターンには, 無音の小噴火が続く活動機構が出来る場合があることを認識する事がより重要であろう。

本 3 月, 浅間山は中旬以後は霧がちで, 山の様子は明らかではなかったが, 全月概ね灰色の煙を噴出したようである。それらのうち, 6 日, 14 日, 17 日には黒灰色煙があがり, 5 日, 6 日には千ヶ滝・離山方面に降灰があった(気象要覧, 1941 年 3 月)。

3 月に入って活動の回数は減少の傾向を見せる。2 月と同様に, 「軽井沢観測所」の観測資料のほかに「前橋観測所」における観測を記載する。
 3 月 2 日, 小噴火 (D), 09 時 25 分, 灰白色噴煙少量噴出, 東北東に流れる。降灰あり?
 3 月 5 日, 小噴火 (D), 09 時 14 分, 褐灰色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。噴煙千ヶ滝方面になびく。降灰あり。

小噴火 (D), 11 時 05 分, 灰白色噴煙少量上方に噴出。
 小噴火 (D), 11 時 59 分, 褐灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。降灰あり。
 小噴火 (D), 16 時 46 分, 小噴火あり「前橋観測」。
 小噴火 (D), 20 時 30 分, 小噴火あり「前橋観測」。
 3 月 6 日, 小噴火 (D), 06 時 30 分, 黒灰色噴煙少量噴出, 南方に流れる。
 小噴火 (D), 06 時 59 分, 灰白色噴煙少量噴出, 南方に流れる。降灰あり?。噴煙とぎれとぎれに出る。
 小噴火 (D), 09 時 13 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。千ヶ滝降灰。
 小噴火 (D), 10 時 28 分, 褐灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる。降灰あり。
 小噴火 (D), 13 時 23 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東北東に流れる。降灰あり。
 小噴火 (D), 13 時 59 分, 褐灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる。降灰あり。
 小噴火 (D), 15 時 52 分, 褐灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる。爆音あり?。降灰あり。
 小噴火 (D), 16 時 09 分, 噴煙東方に流れる。
 3 月 8 日, 小噴火 (D), 12 時 18 分, 灰色噴煙極少量噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (D), 13 時 25 分, 灰色噴煙極少量噴出, 東南東に流れる。
 3 月 10 日, 小噴火 (D), 14 時 05 分頃, 小噴火あり「前橋観測」。
 3 月 13 日, 小噴火 (D), 09 時 31 分, 褐灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 10 時一頃, 小噴火あり「前橋観測」。
 3 月 14 日, 小噴火 (D), 14 時 27 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南南東に流れる。
 3 月 17 日, 小噴火 (D), 16 時 29 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 3 月 19 日, 小噴火 (D), 18 時 00 分, 小噴火あり。
 本 4 月, 浅間山は全月概ね灰色煙をあげ, 1・10・29 の各日には黒灰色煙を噴出した。このうち, 1 日 06 時 09 分頃の爆発が全月中で最も大きかった(気象要覧, 1941 年 4 月)。活動の概況に就いては軽井沢観測所報告を中心に記載してある。
 4 月 1 日, 大爆発 (B), 06 時 09 分頃, はじめ突然「ドーン」という砲声のような爆音, ついで鳴動が聞え, 多量の黒灰色煙が噴出された。この噴煙は海拔約 1,000 米の高さに達し, 以後東方に流れながら海拔 1,800 米の高さまでのぼり, 離山北方に盛んに降灰しつつ群馬県方面に向かい前橋に少量の火山灰を降らせた。噴煙

は次第に白色を増し、6時31分には全く元のように白煙になった（気象要覧、1941年4月）。

注72、気象要覧によるこの噴火の記述には多分に理解し難い点がある。それは浅間山火口より噴出した噴煙が海拔1,000mの高さに達したとある事である。海拔とは、標準海水面よりの高さを表す言葉である。海拔（或いは標高ともいう）2,500mを越える高さを持つ浅間山火口より噴出した噴煙が、海拔1,000mに達したとする記述は、明らかにおかしい。したがって、海拔で表現するのであれば、海拔3,500mの高さに達したとするのが正しいのであろう。噴煙は、火口より上方1,000mから1,800mの高さに達したとの意味と理解しよう。“爆発史集”でもこの海拔の誤用は正されていないので注意が必要である。

「軽井沢観測所」耳の鼓膜が強く痛く感ずる程度の「ドーン」という爆音後5分間鳴動がつづく。空振があり。山に面した北側の家の柱時計は止まり、窓硝子の破損が多かった。「追分支所」「ドーン」という底力のある大音響後、約1分間「ゴーゴー」という鳴動あり。空振のため戸障子振動し、追分、借宿の戸障子はづれる。晴雨計記象+4.0mm, -3.7mm。

「前橋測候所」「ドーン」という稍大きい爆音後「ドドド」という余韻あり。戸障子激しく振動、晴雨計記象+1.0mm, -0.7mm。06時44分～06時48分、降灰少量あり。

- 4月10日、小噴火(D)、13時22分、黒灰色噴煙極少量噴出、北東に流れる。降灰あり。
- 4月14日、小噴火(D)、11時00分、灰色噴煙極少量噴出、東方に流れる。降灰なし？
- 4月16日、小噴火(D)、16時54分、灰褐色噴煙極少量噴出、東方に流れる。降灰なし。
- 4月17日、小噴火(D)、08時52分、灰褐色噴煙極少量噴出、東方に流れる。降灰なし。
- 4月19日、小噴火(D)、09時53分、灰褐色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰あり。
- 4月20日、小噴火(D)、13時38分、灰茶色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰あり。
- 4月23日、小噴火(D)、13時13分、灰色噴煙極少量噴出、東方に流れる。降灰なし。
- 小噴火(D)、17時35分、茶褐色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰なし。
- 4月25日、小噴火(D)、15時25分、灰茶色噴煙少量噴出、東北東に流れる。降灰なし。

- 4月29日、小噴火(D)、08時28分、黒灰色噴煙多量噴出、東北東に流れる。降灰あり。
- 4月30日、小噴火(D)、10時04分、灰茶色噴煙中量噴出、東方に流れる。降灰あり。
- 小噴火(D)、15時54分、灰茶色噴煙少量噴出、東北東に流れる。降灰あり。
- 5月は先月より活動が衰えたが、上旬および中旬に亘って灰色をおびた噴煙をあげ、6日・19日・20日には黒灰色の噴煙をあげた。此の間、極小～中程度の降灰砂があった。活動の概況は、主として「軽井沢観測所報告」による（気象要覧、1941年5月）。
- 5月1日、小噴火(D)、17時00分、茶褐色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰なし。
- 5月2日、小噴火(D)、05時48分、茶灰色噴煙少量噴出、東南東に流れる。降灰あり。
- 小噴火(D)、08時07分、褐灰色噴煙少量噴出、東南東に流れる。降灰あり。
- 小噴火(D)、10時36分、褐灰色噴煙少量噴出、東南東に流れる。降灰なし。
- 小噴火(D)、11時47分、褐灰色噴煙極少量噴出、東南東に流れる。降灰なし。
- 5月5日、小噴火(D)、07時23分、灰色噴煙中量噴出、北東に流れる。降灰あり。
- 5月6日、小噴火(D)、07時00分、黒灰色噴煙極少量噴出、東方に流れる。降灰あり。
- 小噴火(D)、10時53分、褐灰色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰なし。
- 小噴火(D)、17時30分、褐灰色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰なし。
- 5月7日、小噴火(D)、12時58分、褐灰色噴煙少量噴出、南南東に流れる。降灰あり。
- 小噴火(D)、15時58分、灰色噴煙少量噴出、流向不詳。降灰あり。
- 小噴火(D)、18時53分、灰色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰あり。
- 5月9日、小噴火(D)、10時11分、褐灰色噴煙中量噴出、東北東に流れる。降灰あり。
- 小噴火(D)、17時20分、褐灰色噴煙中量噴出、北東に流れる。降灰あり。
- 5月12日、小噴火(D)、16時46分、小噴火、「追分臨時出張所観測」。
- 5月19日、小噴火(D)、15時56分、黒灰色噴煙中量噴出、北東に流れる。降灰あり。
- 5月20日、小噴火(D)、05時40分、黒灰色噴煙少量噴出、北東に流れる。降灰あり。

5月21日, 小噴火(D), 08時09分, 褐色噴煙少量噴出, 上方に上る. 降灰あり.

小噴火(D), 10時08分, 小噴火, 「追分臨時出張所観測」.

6月, 浅間山は下旬に活気を呈し, 灰色をおびた噴煙をあげ, しばしば山岳地帯に降灰砂をみせた. このうち, 24日22時52分頃の活動が全月中最大であった(気象要覧, 1941年6月).

6月1日, 小噴火(D), 19時24分, 灰褐色噴煙少量噴出, 南方に流れる. 降灰なし.

6月24日, 小噴火(D), 18時15分, 爆音あり, 褐色噴煙中量噴出, 上方~東南東に流れる. 鳴動を伴い, 約3分後白煙となる. 追分に降灰なし.

小噴火(C), 22時52分, はじめ爆音が聞え, 戸障子が振動した. ついで「ゴーゴー」という鳴動とともに, 黒煙が噴出された. この噴煙は海拔?(火口上の意であろう) 1,800mの高さまで直上してのち, 東~東南東に流れた. この噴煙の東及び南側は幅約100m, 高さ200~300mの部分が真紅に彩られて文字通りの火柱となり, その上電光・閃光があらわれ, 赤熱噴石はあたかも火の粉をまき散らす如く, この落石のために, 山頂一帯は一面に赤色となり, 頗る壮観であった. この活動は23時20分ごろには衰え, 23時35分ごろには噴煙量も減少した. この噴火噴煙の通過地帯にはかなり多量の降灰砂があった.

浅間山の爆発〔軽井沢〕6月24日午後10時52分, 浅間山は大音響と地震を伴い大爆発した. 鳴動と爆音は約15分間つづき, 火焰は約1,800mの上空に達し, 遠く群馬県方面に流れ, 軽井沢町, 小瀬温泉, 長日向より上信国境一帯には5分間に亘り砂礫大の溶岩降り注ぎそそぎ, 山は同10時半頃平静に復したが, 夜間のため被害の程度不明「昭和16年6月25日, 東京朝日」(地震, 1941年7号).

6月25日, 小噴火(D), 05時45分, 褐色噴煙少量噴出, 上方~東南東に流れる. 山岳方面降灰あり.

小噴火(D), 06時37分, 灰色噴煙少量噴出, 東南東に流れる. 降灰あり.

小噴火(D), 10時38分, 淡黒色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰あり.

小噴火(D), 16時04分, 茶灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 山岳方面降灰.

7月, 浅間山は雨霧の日が多くて噴煙が観測された日が少なかったが, 1日, 9日, 13日, 21日, 22日及び25日には爆発的に活動し, 追分付近には空振があり, 軽井沢付近に降灰砂があった. このうち, 13日には火口付近

に焼石が落下し, 登山者が3名遭難, 死者1名, 重傷者2名を出した(気象要覧, 1941年7月).

7月1日, 小噴火(D), 17時33分, 褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる. 降灰は山岳方面のみ, 17時41分平常に戻る. 濃霧のため詳細は不明「軽井沢観測所報告」.

7月9日, 小噴火(D), 23時32分, ドーンという底力のある音とともに噴火, 戸障子の振動約23秒くらい続き, 鳴動は1分で止む. 全山霧に包まれて詳細不明. 晴雨計記象約1.0mm昇降「追分観測所報告」.

7月13日, 小噴火(C), 13時06分, 「ドーン」という底力ある音とともに, 突然戸障子が稍強く振動を感じ約5.6秒にして止む. 時恰も全山霧にて詳細不明なり. 晴雨計記象1.5mmの上昇を記録「追分観測所観測」. 尚, “この爆発当時山頂にありし4名中3名は追分, 大笹に下山せしも, 他の1名は火口近くで死体となり, 焼石のため「クシャクシャ」となって居た. 尚, 追分に下山した遭難者酒井氏(新潟鉄道局員)も焼石のために数箇所負傷せり. この語るところによると, 爆発前少々鳴動を感じたるも火山に無経験のため歩む振動かと思ひ居たりという. 当時は霧のために火口全く望み得ざりしも爆発後大部霧が晴れた如く感じた. 火口付近は西風にて噴煙は東に流れた如く, 煙にあわざりしは不幸中の幸いなりと付近一帯焼石落下盛んなりしも降灰なし. 尚爆発前火口に接近するほど暖かく感じたりと“爆発史集”.

この噴火により登山者が3名遭難, 死者1名, 重傷者2名を出した(気象要覧1941年7月),

7月21日, 小噴火(C), 19時58分頃, 「ドーン」という底力のある音に「ゴーゴー」という弱い鳴動があり, 約50分間継続, 戸障子「ガタガタ」と振動する. 全山霧, 晴雨計記象0.5mm上昇する「追分観測所報告」 「軽井沢観測所報告」雲霧のため詳細不明.

7月22日, 小噴火(C), 01時28分頃, 「ドーン」という底力のある音とともに噴火, 戸障子「ガタガタ」と僅かに振動する. 全山霧, 晴雨計記象0.5mmの上昇「追分観測所報告」.

01時28分頃, 爆音あり, 噴煙流向は東?. 濃霧で詳細不明, 旧道, 峠町付近降灰, 樹葉白くなる「軽井沢観測所報告」.

7月25日, 小噴火(C), 08時40分頃, 「ドーン」という音とともに黒灰色の噴煙多量に噴出, 東方に流れる. 「ゴーゴー」というかなり顕著鳴動が加わり9分間続く, 降灰極微樹葉に点々と附着する「軽井沢観測所報告」.

「ゴトゴト」という遠雷音様鳴動とともに黒煙多量噴出、08時44分、47分、53分、59分に遠雷音様鳴動とともに「ドーン」という音あり。9時頃白煙になる「追分観測所報告」(気象要覧、1941年7月)。

尚、「爆発史集」によれば、25日09時44分、18時47分、18時53分、18時59分にも噴火が記録されている。今回の噴火は鳴動に比べて噴煙量の多さが特徴であるとしている。

浅間山の爆発〔小諸〕7月25日朝8時40分頃、浅間山は大音響と共に爆発、山軸をゆるがす不気味な鳴動は約4分間続き、30分間に亘って盛んに噴き上げる溶岩は曇天に押し壯観を極めた。噴煙は北東の風にあおられて群馬県吾妻郡方面に靡いたので、同方面の降灰は相当量と見られ、桑園農作物の被害を憂慮されている「昭和16年7月25日、読売」(地震、1941年8号)。

8月、浅間山は2日・19～20日・25～28日に活気を呈し、2日及び26日には黒煙を、26日及び27日には茶褐色煙を噴出した。鳴動は2日に軽井沢及び追分で、19日には追分で観測された。降灰砂は2日・19・20日・25～27日にあり、2日には群馬県群馬郡伊香保及び元総社村では降灰砂、同県前橋では降灰があった。20日朝には福島県白河に微粒の降砂があった(気象要覧、1941年8月)。

8月2日、小噴火(C)、10時35分、無感地震が1回あり、ついで「ゴーゴー」という弱い鳴動(軽井沢・追分)とともに多量の黒煙が噴出された。

小噴火(C)、10時38分、爆音あり。

小噴火(C)、10時44分、爆音あり。3回連続の噴火だが雲霧のため詳細不明、鳴動11分継続し、雷鳴盛んに起こり(10時44分-10時46分)、噴煙は上信国境を越えて流れる。降灰あり。

浅間山の爆発〔小諸〕8月2日午前10時35分頃、浅間山爆発し、約12分間鳴動を続け、噴煙天に押し、壯観を極めた。小諸地方は爆発の為め震動を感じた。〔長野〕8月2日午前10時40分頃、浅間山大爆発し、十数分間に亘って爆音轟き、噴煙は晴朗なる夏の空に押し、壯観を呈した。約20分の後噴煙は東北方に靡き、群馬県方面には相当降灰があった模様である「昭和16年8月3日、東京朝日、読売、中外商業」(地震、1941年9号)。

8月19日、小噴火(C)、23時33分、空振あり。「ゴーゴー」という鳴動約7分間続く。暗夜のため噴煙不明、空振により瞬間的に戸障子「ガタガタ」と振動する。晴雨計記象変化なし、23時36分・39分同程度の活動あり「追分観測所報告」。

8月25日、小噴火(D)、14時47分、黒色噴煙多量に噴出、北北東に流れる。望遠では噴石認められず、噴火直前薄煙少量白煙時々噴出、自記晴雨計変化なし「軽井沢観測所報告」。

小噴火(D)、黒色噴煙多量に噴出、東方に流れる「軽井沢観測所報告」。

8月26日、小噴火(D)、04時32分、噴出噴煙色量不明、東方に流れる。降灰砂あり「軽井沢観測所報告」。

小噴火(D)、07時32分、茶褐色噴煙中量噴出、東方に流れる。降灰不明「軽井沢観測所報告」。

8月27日、小噴火(D)、09時48分、茶褐色噴煙中量噴出、南東に流れる。山頂雲霧のため不明、降灰あり「軽井沢観測所報告」。

8月28日、小噴火(D)、17時30分頃より2筋の噴煙あがる。爆音なし。18時40分暗夜にかくれる「軽井沢観測所報告」。

9月、浅間山は5日・6日・25日及び27日に黒灰色煙を、3日・4日・7日・9日・22日・26日お呼び30日には褐色を帯びた噴煙をあげ、しばしば山麓に降灰があった(気象要覧、1941年9月)。以下の報告は主として同要覧中の「軽井沢観測所」による。

9月3日、小噴火(D)、09時50分、茶褐色噴煙中量噴出、南方に流れる。10時07分雲で詳細不明、追分方面降灰あり。

9月3～4日、降灰、4日朝、浅間山東方～軽井沢町方面降灰、薄白し。

9月4日、小噴火(D)、10時01分、茶褐色噴煙中量噴出、南東に流れる。千ヶ滝方面に降灰。

9月5日、小噴火(D)、21時44分、黒灰色噴煙噴出、南西に流れる。噴煙は低く流れ、22時03分噴煙止む。

9月6日、小噴火(D)、16時15分、黒灰色噴煙噴出、東方に流れる。降灰あるらしい。16時17分、16時21分再び噴煙、16時22分平常となる。

9月7日、小噴火(D)、09時43分、灰褐色噴煙中量噴出、東方に流れる。降灰あるらしい。噴煙山肌に沿って低く流れる。

小噴火(D)、13時29分、茶褐色噴煙稍少量噴出、東方に流れる。13時44分白煙となる。軽井沢降灰、小浅間～小瀬路方面降灰あるらし。

9月9日、小噴火(D)、08時14分、茶褐色噴煙中量噴出、東方に流れる。火口上雲霧、山岳方面降灰あり。

9月13日、小噴火(D)、08時47分、噴煙流向不明。08時49分白煙となる。

9月19日、小噴火(D)、噴火時刻不明、噴煙南西～西に流れる。大里方面に降灰。

浅間火山活動記録の再調査

- 9月22日, 小噴火 (D), 09時17分, 茶褐色噴煙噴出, 東方に流れる. 積雲上に噴煙頂部のみ見える.
- 9月25日, 小噴火 (D), 16時53分, 黒灰色噴煙多量に噴出, 東南東に流れる. 山岳方面降灰あるらし, 17時02分噴煙平常となる.
- 9月26日, 小噴火 (D), 10時40分, 茶褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる.
- 9月27日, 小噴火 (D), 13時21分, 黒灰色噴煙噴出, 東方に流れる. 火口付近雲霧のため詳細不明.
小噴火 (D), 16時59分, 黒灰色噴煙噴出, 17時05分灰白色噴煙になる.
- 9月30日, 小噴火 (D), 09時23分, 灰褐色噴煙噴出, 噴煙頂部雲霧間に見える.
10月, この月は先9月より活動が活気を呈した. 6日・15日・16日・20日・21日・24日お呼び25日には黒灰色煙, 2日には灰色煙, 5日・7~8日・10~11日・14日・17日・19日・22~23日及び27~29日には褐色をおびた噴煙をあげた. 此の間, 2日及び9日には軽井沢に降灰があり, 7~8日・11日・14日・16~17日及び19~29日には山岳方面に降灰があったらしく, 音響は全月軽井沢・追分方面に聞えなかった (気象要覧, 1941年10月). 以下の活動概況は主として同要覧中の「軽井沢観測所」報告による.
- 10月2日, 小噴火 (D), 14時04分, 灰色噴煙中量噴出, 南西に流れる. 降灰あり. 観測所にて硫黄臭強し.
- 10月5日, 小噴火 (D), 17時44分, 茶褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 朝来噴煙不出, 時々微量噴出する程度.
- 10月6日, 小噴火 (D), 10時10分, 黒灰色噴煙少量噴出, 上方に上る. 降灰なし.
- 10月7日, 小噴火 (D), 09時58分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れ, 降灰あるらし.
- 10月8日, 小噴火 (D), 13時59分, 灰褐色噴煙多量噴出, 東方に流れ, 降灰あるらし.
- 10月9日, 小噴火 (D), 夜, 小噴火, 噴煙南東に流れ, 降灰あり.
- 10月10日, 小噴火 (D), 11時09分, 灰褐色噴煙少量噴出, 上方に上り後南西に流れる. 降灰あるらし.
小噴火 (D), 16時51分, 灰褐色噴煙少量噴出, 上方に上り, 降灰なし.
- 10月11日, 小噴火 (D), 08時30分頃, 茶褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる.
小噴火 (D), 14時16分, 茶褐色噴煙多量噴出, 東方に流れ, 降灰あるらし.
小噴火 (D), 15時44分, 茶褐色噴煙少量噴出, 東方に流れ, 降灰あるらし.
- 10月14日, 小噴火 (D), 10時17分, 茶褐色噴煙少量噴出, 東方にながれ, 降灰あるらし.
- 10月15日, 小噴火 (D), 09時48分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる.
小噴火 (D), 13時03分, 黒灰色噴煙多量噴出, 東方に流れる. 雲で詳細不明.
小噴火 (D), 14時40分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 雲で詳細不明.
- 10月16日, 小噴火 (D), 14時48分, 黒灰色噴煙多量噴出, 東~東南東に流れる. 降灰あるらし.
- 10月17日, 小噴火 (D), 08時13分, 茶褐色噴煙中量噴出, 東~上方に流れ, 降灰あるらし.
小噴火 (D), 12時27分, 茶褐色噴煙多量噴出, 東方に流れ, 降灰あるらし.
- 10月19日, 小噴火 (D), 12時50分頃, 灰褐色噴煙多量噴出, 東方に流れ, 降灰あるらし.
小噴火 (D), 14時50分, 灰褐色噴煙少量噴出, 南東に流れ, 降灰あるらし.
- 10月20日, 小噴火 (D), 10時00分, 茶褐色噴煙多量噴出, 東方に流れ, 降灰あるらし.
小噴火 (D), 11時29分, 茶褐色噴煙中量噴出, 東方に流れ, 降灰あるらし.
小噴火 (D), 15時00分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東方に流れ, 降灰あるらし.
小噴火 (D), 15時07分, 茶褐色噴煙多量噴出, 東方に流れ, 降灰あるらし.
小噴火 (D), 20時04分頃, 黒色噴煙多量噴出, 南東に流れ, 降灰あるらし.
- 10月21日, 小噴火 (D), 04時53分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東~上方に流れ, 降灰あるらし. 噴煙矢ヶ崎山を越える.
小噴火 (D), 14時14分, 黒褐色噴煙多量噴出, 東方に流れ, 降灰あるらし.
小噴火 (D), 19時15分頃, 黒灰色噴煙多量噴出, 南南東に流れ, 降灰あるらし.
- 10月22日, 小噴火 (D), 08時05分, 茶褐色噴煙噴出, 東北東に流れ, 降灰あるらし.
小噴火 (D), 14時35分, 茶褐色噴煙多量噴出, 東北東に流れ, 降灰あるらし.
- 10月23日, 小噴火 (D), 05時40分, 茶褐色噴煙多量噴出, 上方~東南東に流れ, 降灰あるらし.
小噴火 (D), 17時18分, 黒褐色噴煙中量噴出, 上方

～東に流れ、降灰あるらし。
 10月24日、小噴火(D)、05時40分、黒灰色噴煙中量噴出、南西に流れ、降灰あるらし。
 小噴火(D)、09時05分頃、茶褐色噴煙少量噴出、上方に上る、降灰なし。
 小噴火(D)、10時15分、黒褐色噴煙中量噴出、上方～東に流れ、降灰あるらし。
 小噴火(D)、14時02分、黒褐色噴煙多量噴出、東方に流れ、降灰あるらし。
 10月25日、小噴火(D)、11時00分、黒灰色噴煙中量噴出、東方に流れ、降灰あるらし。
 10月27日、小噴火(D)、17時48分、黒褐色噴煙多量噴出、北東に流れ、降灰あるらし。
 10月28日、小噴火(D)、11時10分、茶褐色噴煙少量噴出、北東に流れ、降灰あるらし。
 小噴火(D)、16時18分、灰褐色噴煙少量噴出、東方に流れ、降灰あるらし。
 10月29日、小噴火(D)、12時07分、灰褐色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰なし。
 小噴火(D)、16時53分、黒褐色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰あるらし。
 11月、1～17日には褐色をおびた噴煙を、18～20日には黒灰色煙あるいは黒煙を噴出し、追分観測所で20日に微弱雷様の音、21日には砲声のような音響、21～22日には鳴動が聞えた。5日には千ヶ滝方面に降灰があった。2日・7日・10日及び13日には噴煙の量は極少なく、山頂上に現れないこともあった(気象要覧、1941年11月)。以下の活動の概況は、主として「軽井沢観測所報告」による。
 11月1日、小噴火(D)、10時04分、灰褐色噴煙中量噴出、東方に流れる。降灰なし。
 11月3日、小噴火(D)、13時51分、灰褐色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰なし。
 11月5日、小噴火(D)、13時09分、黒褐色噴煙多量噴出、東方に流れる。千ヶ滝方面に降灰あり。
 11月11日、小噴火(D)、16時40分、灰褐色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰なし。
 11月14日、小噴火(D)、13時45分、山頂雲のため不明、降灰あり。
 11月16日、小噴火(D)、07時27分、茶褐色噴煙中量噴出、南西に流れる。降灰なし。
 小噴火(D)、16時40分、茶褐色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰なし。
 11月17日、小噴火(D)、10時03分、灰褐色噴煙少量噴出、上方に上る。降灰なし。

小噴火(D)、10時30分、灰褐色噴煙少量噴出、南東に流れる。降灰なし。
 小噴火(D)、12時16分、灰褐色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰なし。
 11月18日、小噴火(D)、13時50分、黒灰色噴煙多量噴出、東方に流れる。降灰なし。
 11月19日、小噴火(D)、18時30分、黒色噴煙多量噴出、東方に流れる。降灰なし。
 11月20日、小噴火(D)、04時40分、黒灰色噴煙多量噴出、東方に流れる。降灰なし。
 小噴火(D)、15時29分、黒灰色噴煙多量噴出、東方に流れる。降灰なし。
 11月21日、小噴火(C)、05時01分、2回「ドーンドーン」という音響あり、のち2～3秒「ゴーゴー」という鳴動聞える。空振あり、戸障子2～3秒「ガタガタ」ゆれる。自記晴雨計記象なし、山体雲で不明「追分観測所報告」。
 小噴火(D)、20時32分、数秒間鳴動あり、空振6～7秒、自記晴雨計記象なし、雨にて山体不明「追分観測所報告」。
 11月22日、小噴火(D)、03時20分、数秒間鳴動あり、空振7～8秒、自記晴雨計記象なし、雲のため山体不明、降灰あり「追分観測所報告」。
 12月、浅間山は8日及び19日には黒灰色煙を、5日・8日・14日・15日・17日・18日・20日・25日及び30日には褐色をおびた噴煙をあげ、4日には赤熱噴石をあげて本月の最盛活動を示した(気象要覧、1941年12月)。以下の活動については主として同要覧中の「軽井沢観測所報告」による。
 12月4日、小噴火(D)、22時10分、噴煙少量噴出、東方に流れる。
 大噴火(B)、22時18分、爆音とともに烈しく噴煙、山頂は落石のため真っ赤になる、噴石は外輪山に達する、20分～22分小爆発と共に噴石、噴煙離山上空(山より約10km)に達し、30分頃噴煙量減じて平常に帰す。
 浅間山の爆発〔小諸発〕12月4日午後10時20分、浅間山大爆発、小諸口湯の平旧噴火口には相当大きな溶岩落下し、軽井沢口峰の茶屋には拳大の石が降った。噴煙は東方へ靡いたので、上信国境方面には相当の降灰あった模様、5日午前4時35分、大轟音と共に爆発し、軽井沢方面は激しい上下動を感じ、町民は暁の夢を破られた「昭和16年12月5-6日、東京日々、読売」(地震、1942年2号)。
 12月5日、小噴火(C)、04時36分、「ドーン」という音

響と共に相当の振動あり、噴石はあったらしいが、雲霧のため詳細不明。この活動では前橋で噴煙が望見され、降灰（前橋、降灰；05時09分-05時15分、降灰量；12.9gr/m²）があった。これら4日・5日の活動時の噴出物は主に浅間山山頂から東方分去茶屋・峰の茶屋及び千ヶ滝方面に分布された。この噴出物は溶岩塊及び火山灰砂が主なものであり、なかには火山毛が含まれた軽石があった。

小噴火（D）、14時58分、噴煙詳細不明。

小噴火（D）、15時04分、茶褐色噴煙噴出、南南東に流れる。

小噴火（D）、15時06分、茶褐色噴煙噴出、南南東に流れる。

小噴火（D）、15時28分、音響あり、噴煙詳細不明。

小噴火（D）、16時38分、黒褐色噴煙噴出、東方に流れ、16時43分小浅間上空に達す。

小噴火（D）、18時00分、茶褐色噴煙噴出、東方に流れ、18時06分小浅間上空に達す。

12月8日、小噴火（D）、05時58分、濃褐色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、10時10分、黒褐色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、10時29分、灰褐色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、13時57分、灰褐色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、18時14分、黒褐色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、19時20分、黒灰色噴煙噴出、東方に流れる。

12月9日、小噴火（D）、08時20分、噴煙噴出、詳細不明。

12月10日、小噴火（D）、12時55分、噴煙、詳細不明。

12月14日、小噴火（D）、09時22分、噴煙噴出、噴煙09時27分離山上空に達す。

小噴火（D）、09時29分、音響あり、黒褐色噴煙極多量噴出、流向不明、旧道方面降灰あり。

12月15日、小噴火（D）、08時48分、茶褐色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、10時07分、噴煙噴出、詳細不明。

小噴火（D）、12時03分、茶褐色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、12時42分、白～茶褐色噴出、東方に流れる。山頂方面降灰模様。

12月17日、小噴火（D）、09時05分、褐色噴煙噴出、東

方に流れる。

小噴火（D）、09時10分、白褐色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、降灰、12時05分、噴煙流向東南東、降灰あり。12時52分、降灰量少なくなる「前橋観測所」。

小噴火（D）、18時05分、黒褐色噴煙噴出、東南東に流れる。16分噴煙止む。

12月18日、小噴火（D）、07時20分、灰褐色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、08時20分、灰褐色噴煙噴出、南西に流れる。

小噴火（D）、16時15分、灰褐色噴煙多量噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、16時50分、噴煙噴出、詳細不明。

小噴火（D）、22時45分、灰褐色噴煙噴出、東方に流れる。

12月19日、小噴火（D）、06時00分、黒灰色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、08時54分、黒灰色噴煙多量噴出、流向不明。

小噴火（D）、13時19分、茶褐色噴煙噴出、東方に流れる。前橋に降灰；14時40分-15時50分、降灰量微「前橋観測所」。

小噴火（D）、13時58分、灰色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、22時01分、噴煙、詳細不明。

12月20日、小噴火（D）、06時30分、灰褐色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、09時52分、黒褐色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火（D）、14時00分、黒褐色噴煙噴出、東方に流れる。

12月25日、小噴火（D）、14時16分、黒褐、茶褐色噴煙噴出。

12月29日、小噴火（D）、16時30分、噴煙、詳細不明。

12月30日、小噴火（D）、15時12分、茶褐色噴煙多量噴出、南東に流れる。15時18分沓掛上空に達す。

1941年浅間山活動の要約

1月には小活動（無音小噴火）を頻発した。その傾向は2月になっても続いた。

1月3日、小噴火（D）8回、4日、小噴火（D）4回、5日、小噴火（D）2回、6日、小噴火（D）、15日、小噴火（D）2回、17日、小噴火（D）4回、18日、小噴火（D）21回、19日、小噴火（D）13回、20日、小噴

火 (D) 3回, 21日, 小噴火 (D), 22日, 小噴火 (D) 8回, 23, 24日, 小噴火 (D) 各1回, 25日, 小噴火 (D) 5回, 26日, 小噴火 (D) 4回, 27日, 小噴火 (D) 10回, 28日, 小噴火 (D) 8回, 29日, 小噴火 (D), 30日, 小噴火 (D) 2回, (1月噴火回数, D; 99回) 2月にも1月同様小活動が続いた。

2月1日, 2日, 小噴火 (D) 各1回, 3日, 小噴火 (D) 13回, 4日, 小噴火 (D) 9回, 5日, 小噴火 (D) 10回, 6日, 小噴火 (D) 3回, 7日, 小噴火 (D) 12回, 8日, 小噴火 (D) 12回, 9日, 小噴火 (D) 8回, 10日, 小噴火 (D) 7回, 11日, 小噴火 (D) 16回, 12日, 小噴火 (D) 7回, 13日, 小噴火 (D) 16回, 14日, 小噴火 (D), 15日, 小噴火 (D) 9回, 16日, 小噴火 (D) 2回, 18日, 小噴火 (D), 23日, 小噴火 (D) 4回, 25日, 小噴火 (D), (2月噴火回数, D; 131回)

3月は前半に小活動が続いた。

3月2日, 小噴火 (D), 5日, 小噴火 (D) 5回, 6日, 小活動 (D) 8回, 8日, 小噴火 (D) 2回, 10日, 小噴火 (D), 13日, 小噴火 (D) 2回, 14日, 17日, 19日, 小噴火 (D) 各1回, (3月噴火回数, D; 22回)

4月の始め暫く活動が止まった後にかなりの爆発が発生した。

4月1日, 小噴火 (D), 大爆発 (B), 噴石を飛ばす。10日, 14日, 16日, 17日, 19日, 20日, 小噴火 (D) 各1回, 23日, 小噴火 (D) 2回, 25日, 29日, 小噴火 (D) 各1回, 30日, 小噴火 (D) 2回, (4月噴火回数, B; 1回, D; 13回)

5月には前月より活動が衰えた。

5月1日, 小噴火 (D), 2日, 小噴火 (D) 4回, 5日, 小噴火 (D), 6日, 小噴火 (D) 3回, 7日, 小噴火 (D) 3回, 9日, 小噴火 (D) 2回, 12日, 19日, 20日, 小噴火 (D) 各1回, 21日, 小噴火 (D) 2回, (5月噴火回数, D; 19回)

6月には下旬に活動が活発になった。

6月1日, 小噴火 (D), 24日, 小噴火 (D), (C) 各1回, 山頂部に噴石降下し真紅となる。25日, 小噴火 (D) 4回, (6月噴火回数, C; 1回, D; 6回) 7月には割合爆発的な活動が適当な間隔で発生し山頂部に噴石が落下, 犠牲者を出した。

7月1日, 小噴火 (D), 9日, 小噴火 (D), 13日, 小噴火 (C), この噴火により山頂付近にいた登山者に死者1名, 重傷者2名の遭難者が生じた。21日, 小噴火 (C), 25日, 小噴火 (C), (7月噴火回数, C; 3回, D; 6回)

8月には7月と同様な活動が続いた。

8月2日, 小噴火 (C) 3回, この噴火では群馬県下 (伊香保等) に降灰があった。19日, 小噴火 (C), 25日, 小噴火 (D) 2回, 26日, 小噴火 (D) 2回, 27日, 28日, 小噴火 (D) 各1回, (8月噴火回数, C; 4回, D; 6回)

9月も同じような活動が続いた。

9月3日, 4日, 小噴火 (D) 各1回以上, 軽井沢に降灰, 5日, 6日, 小噴火 (D) 各1回, 7日, 小噴火 (D) 2回, 9日, 13日, 19日, 22日, 25日, 26日, 小噴火 (D) 各1回, 27日, 小噴火 (D) 2回, 30日, 小噴火 (D), (9月噴火回数, D; 15回以上)

10月に入ると, 活動はかなり活発化した。

10月2日, 5日, 6日, 7日, 8日, 9日, 小噴火 (D) 各1回, 10日, 小噴火 (D) 2回, 11日, 小噴火 (D) 4回, 14回, 小噴火 (D), 15日, 小噴火 (D) 3回, 16日, 小噴火 (D), 17日, 19日, 小噴火 (D) 各2回, 20日, 小噴火 (D) 5回, 21日, 小噴火 (D) 3回, 22日, 23日, 小噴火 (D) 各2回, 24日, 小噴火 (D) 3回, 25日, 27日, 小噴火 (D) 各1回, 28日, 29日, 小噴火 (D) 各2回, (10月噴火回数, D; 41回)

11月1日, 3日, 5日, 11日, 14日, 小噴火 (D) 各1回, 16日, 小噴火 (D) 2回, 17日, 小噴火 (D) 3回, 18日, 19日, 小噴火 (D) 各1回, 20日, 21日, 小噴火 (C), (D) 各1回, 22日, 小噴火 (D), (11月噴火回数, C; 1回, D; 15回)

12月の活動は11月に比べてはるかに活気を呈した。

12月4日, 小噴火 (D), 大噴火 (B), 5日, 小噴火 (C), (D) 6回, 8日, 小噴火 (D) 6回, 9日, 10日, 小噴火 (D) 各1回, 14日, 小噴火 (D) 2回, 15日, 17日, 小噴火 (D) 各4回, 18日, 19日, 小噴火 (D) 各5回, 20日, 小噴火 (D) 3回, 25日, 29日, 30日, 小噴火 (D) 各1回, (12月噴火回数, B; 1回, C; 1回, D; 41回)

(AVO 噴火数, 1月; 95回, 2月; 109回, 3月; 21回, 4月; 12回, 5月; 18回, 6月; 5回, 7月; 11回, 8月; 12回, 9月; 13回, 10月; 19回, 11月; 21回, 12月; 55回)

110) 1942年(昭和17年)の活動

1月, この月にも全年同様に無音小噴火が多発し, 降灰を伴うこともあった。活動の概略は, 気象要覧(1942年1月)「軽井沢観測所報告」を主体として記述している。

1月2日, 小噴火 (D), 07時40分, 褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる。降灰あり。

浅間火山活動記録の再調査

1月6日, 小噴火 (D), 07時38分, 灰白色噴煙多量噴出, 南東に流れる. 降灰あり.
小噴火 (D), 12時04分, 噴煙少量噴出.
小噴火 (D), 12時57分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 15時34分, 灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
1月8日, 小噴火 (D), 07時31分, 灰褐色噴煙少量噴出, 南東に流れる. 降灰あり.
1月9日, 小噴火 (D), 07時55分, 褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる. 山岳方面降灰.
小噴火 (D), 11時30分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
1月10日, 小噴火 (D), 17時18分, 灰褐色噴煙中量噴出, 流向不明.
1月11日, 小噴火 (D), 09時05分, 黒褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
1月17日, 小噴火 (D), 07時35分, 灰色噴煙多量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 16時23分, 黒灰色噴煙噴出, 東南東に流れる. 降灰なし.
1月19日, 小噴火 (D), 05時53分, 黒灰色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 06時01分, 灰色噴煙噴出, 南東に流れる.
1月20日, 小噴火 (D), 08時34分, 黒灰色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰あり.
小噴火 (D), 11時58分, 黒灰色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰あり.
小噴火 (D), 12時07分, 黒灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
1月21日, 小噴火 (D), 12時46分, 黒褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
1月22日, 小噴火 (D), 07時06分, 黒褐色噴煙噴出, 北東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 15時15分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 19時13分, 灰色噴煙少量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
1月23日, 小噴火 (D), 11時10分, 灰色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
1月24日, 小噴火 (D), 04時36分, 噴煙噴出, 東方に流れる. 暗夜で詳細不明.
小噴火 (D), 12時16分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

小噴火 (D), 13時49分, 灰色噴煙噴出, 東方に流れる, 降灰なし.
1月25日, 小噴火 (D), 17時30分, 黒褐色噴煙少量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
1月26日, 小噴火 (D), 06時02分, 黒褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 10時18分, 灰色噴煙噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
1月28日, 小噴火 (D), 08時30分, 灰色噴煙噴出, 東南東に流れる. 降灰なし.
1月30日, 小噴火 (D), 14時45分, 灰色噴煙少量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 16時45分, 黒灰色噴煙少量噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.
2月, 前月に比べると少し活動が衰えたようである.
活動の概略は, 気象要覧 (1942年2月)「軽井沢観測所報告」を主体として記述している.
2月4日, 小噴火 (D), 09時00分, 灰褐色噴煙中量噴出, 北東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 13時40分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる. 降灰あり.
小噴火 (D), 15時11分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰山岳のみ.
2月5日, 小噴火 (D), 06時05分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰あり.
小噴火 (D), 11時27分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
2月6日, 小噴火 (D), 13時51分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
2月7日, 小噴火 (D), 05時48分, 黒褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
2月8日, 小噴火 (D), 09時43分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 14時56分, 灰褐色噴煙多量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 19時35分, 黒色噴煙噴出, 南東に流れる, 降灰なし.
2月9日, 小噴火 (D), 04時59分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 07時51分, 灰色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 08時41分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 17時17分, 灰褐色噴煙多量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.

2月10日, 小噴火 (D), 15時11分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.

2月11日, 小噴火 (D), 07時59分, 黒褐色噴煙多量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.

2月14日, 小噴火 (D), 06時11分, 灰褐色噴煙噴出, 東南東に流れる. 降灰なし.

小噴火 (D), 07時25分, 灰褐色噴煙噴出, 東南東に流れる. 降灰なし.

小噴火 (D), 13時48分, 灰褐色噴煙噴出, 東南東に流れる. 降灰なし.

2月16日, 小噴火 (D), 09時47分, 灰褐色噴煙噴出, 東北東に流れる. 降灰なし.

小噴火 (D), 19時03分, 黒灰色噴煙多量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.

小噴火 (D), 22時29分, 黒灰色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.

2月17日, 小噴火 (D), 19時35分, 黒灰色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.

2月18日, 小噴火 (D), 06時58分, 灰色噴煙噴出, 南方に流れる. 降灰なし.

小噴火 (D), 07時47分, 灰色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.

小噴火 (D), 19時58分, 黒灰色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.

2月22日, 小噴火 (D), 08時10分, 灰褐色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.

小噴火 (D), 13時40分, 灰褐色噴煙噴出, 東北東に流れる. 降灰なし.

小噴火 (D), 14時53分, 灰褐色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.

2月23日, 小噴火 (D), 05時48分, 灰褐色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.

小噴火 (D), 10時58分, 灰褐色噴煙多量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.

小噴火 (D), 17時15分, 褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.

2月25日, 小噴火 (D), 05時40分, 黒灰色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰あり.

小噴火 (D), 14時17分, 褐色噴煙噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

2月27日, 小噴火 (D), 14時08分, 黒灰色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.

2月28日, 小噴火 (D), 21時30分, 黒色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.

3月, 前月同様に無音小活動を続けた. 31日の活動時

には, 軽井沢で音響が聞えた. 活動の概略は, 気象要覧 (1942年3月)「軽井沢観測所報告」を主体として記述している.

3月1日, 小噴火 (D), 05時30分, 灰褐色噴煙噴出, 東南東に流れる.

小噴火 (D), 09時30分, 灰色噴煙噴出, 東方に流れる.

3月3日, 小噴火 (D), 05時57分, 噴煙噴出, 南東に流れる.

3月4日, 小噴火 (D), 10時46分, 黒灰色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰あり.

小噴火 (D), 17時38分, 灰褐色噴煙噴出, 南南東に流れる.

3月5日, 小噴火 (D), 07時40分, 灰褐色噴煙噴出, 東南東に流れる.

3月7日, 小噴火 (D), 11時05分, 灰褐色噴煙噴出.

3月8日, 小噴火 (D), 01時37分?, 雲のため詳細不明, 降灰あり.

小噴火 (D), 07時20分, 暗黒色噴煙噴出, 南方に流れる. 降灰あり.

小噴火 (D), 11時47分, 黒灰色噴煙稍多量噴出, 東南東に流れる.

小噴火 (D), 17時38分, 灰色噴煙極少量噴出, 南東に流れる.

3月9日, 小噴火 (D), 10時48分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる.

3月11日, 小噴火 (D), 04時50分, 灰褐色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰あり?.

小噴火 (D), 07時43分, 灰褐色噴煙噴出, 南南東に流れる.

小噴火 (D), 14時35分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 当所硫黄臭?.

3月12日, 小噴火 (D), 04時17分?, 雲霧の為詳細不明, 南南東に流れる?降灰あり.

小噴火 (D), 17時53分, 灰褐色噴煙噴出, 東~南南東に流れる. 降灰微量.

3月19日, 小噴火 (D), 10時50分, 雲のため詳細不明.

小噴火 (D), 17時41分, 灰褐色噴煙多量噴出, 北東に流れる.

3月20日, 小噴火 (D), 09時09分, 噴煙噴出, 西南西に流れる.

小噴火 (D), 12時18分, 噴煙噴出, 南南西に流れる.

小噴火 (D), 15時14分, 噴煙噴出, 南南西に流れる.

3月21日, 小噴火 (D), 05時10分頃, 黒褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる.

- 小噴火 (D), 11 時 03 分, 灰褐色噴煙噴出。
 小噴火 (D), 14 時 50 分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる。
- 3 月 22 日, 小噴火 (D), 16 時 25 分, 灰褐色噴煙噴出, 北東に流れる。
 小噴火 (D), 18 時 53 分, 灰褐色噴煙噴出, 東南東に流れる。山岳部降灰あり。3 月 31 日, 小噴火 (D), 06 時 45 分, 音響あり, 黒灰色噴煙を多量に噴出, 南南東に流れる。
 小噴火 (D), 19 時 06 分, 黒灰色噴煙噴出, 南方に流れる。
- 4 月, 前月同様に無音小噴火を続けたが, 7 日には軽井沢と追分で鳴動と音響が, 17 日には追分で鳴動が聞えた。活動の概略は, 気象要覧 (1942 年 4 月)「軽井沢観測所報告」を主体として記述している。
- 4 月 2 日, 小噴火 (D), 05 時 58 分, 黒灰色噴煙噴出, 東方に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 07 時 18 分, 黒灰色噴煙噴出, 降灰なし。
 小噴火 (D), 09 時 55 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 18 時 30 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 南東に流れる。降灰なし。
- 4 月 3 日, 小噴火 (D), 07 時 59 分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる。噴煙通路降灰あり?。
 小噴火 (D), 10 時 40 分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる。噴煙通路降灰あり?。
 小噴火 (D), 12 時 14 分, 茶褐色噴煙噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (D), 13 時 58 分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる。
- 4 月 4 日, 小噴火 (D), 06 時 09 分, 茶褐色噴煙噴出, 東北東に流れる。山頂降灰あり?。
 小噴火 (D), 08 時 20 分, 黒灰色噴煙噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 53 分, 黒灰色噴煙噴出, 北東に流れる。
 小噴火 (D), 10 時 50 分, 灰褐色噴煙噴出, 北東に流れる。
 小噴火 (D), 13 時 40 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 14 時 40 分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる。
- 4 月 5 日, 小噴火 (D), 11 時 43 分, 灰色噴煙噴出, 北北東に流れる。
- 4 月 7 日, 小噴火 (C), 00 時 32 分, 雲霧のため詳細不明, 「ドーン」という砲声のような音あり, 降灰あるらし, 自記晴雨計記象 $+ - 1.8 \text{ mm}$ 。「追分観測所」砲声様の音と鳴動約 40 秒, 空振により戸障子やや強く振動, 自記晴雨計記象 $+ 2.5 \text{ mm}, - 3.0 \text{ mm}$ 。
 小噴火 (D), 07 時 16 分, 黒灰色噴煙多量噴出, 南東に流れる。噴煙通路降灰あるらし。
 小噴火 (D), 15 時 36 分, 灰茶色噴煙噴出, 南東に流れる。
- 4 月 8 日, 小噴火 (D), 13 時 57 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。噴煙続出。
 4 月 9 日, 小噴火 (D), 18 時 10 分, 灰褐色噴煙噴出, 東南東に流れる。
 4 月 10 日, 小噴火 (D), 06 時 08 分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる。雲霧詳細不明。
 4 月 11 日, 小噴火 (D), 07 時 15 分, 灰褐色噴煙噴出, 南方に流れる。
 小噴火 (D), 17 時 59 分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる。
- 4 月 12 日, 小噴火 (D), 08 時 57 分, 灰褐色噴煙噴出, 北方に流れる。
 4 月 13 日, 小噴火 (D), 06 時 59 分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる。
 4 月 14 日, 小噴火 (D), 12 時 27 分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる。
 4 月 15 日, 小噴火 (D), 05 時 18 分, 灰褐色噴煙噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 10 分, 灰色噴煙多量噴出, 南東に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 26 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 南東に流れる。
 小噴火 (D), 10 時 07 分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる。
- 4 月 16 日, 小噴火 (D), 05 時 37 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 30 分, 黒褐色噴煙噴出。
 小噴火 (D), 14 時 45 分, 黒灰色噴煙噴出, 東南東に流れる。
- 4 月 17 日, 小噴火 (D), 05 時 40 分, 灰褐色噴煙噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 19 時 35 分, 灰褐色噴煙稍多量噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (D), 21 時 26 分, 雲霧のため詳細不明。「追分観測所」鳴動約 2 分間, 火花 3 回あり, 暗くて噴煙不明。
- 4 月 18 日, 小噴火 (D), 11 時 21 分, 灰褐色噴煙噴出。

4月19日, 小噴火 (D), 15時54分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる。
 4月20日, 小噴火 (D), 07時03分, 灰褐色噴煙噴出, 西方に流れる。
 4月22日, 小噴火 (D), 19時09分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる。
 4月23日, 小噴火 (D), 10時54分, 灰褐色噴煙噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 16時10分, 灰色噴煙噴出, 東南東に流れる。
 4月26日, 小噴火 (D), 13時01分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (D), 18時37分, 灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
 5月, 浅間山の活動は前月より活発化し, 9日には山麓では砲声様音と鳴動が音響と空振は遠方の各地でも観測され, 17日には追分, 軽井沢の両観測所において赤熱噴石の噴出を伴う活動が観察された。活動の概略は, 気象要覧(1942年5月)「軽井沢観測所報告」を主体として記述する。
 5月1日, 小噴火 (D), 22時05分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南西に流れる。降灰なし。
 5月2日, 小噴火 (D), 07時04分, 灰褐色噴煙噴出, 南西に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 10時13分, 灰褐色噴煙噴出, 南南東に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 14時53分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる。降灰なし。
 5月4日, 小噴火 (D), 07時56分, 雲霧のため詳細不明。
 小噴火 (D), 13時48分, 灰褐色噴煙噴出, 東北東に流れる。
 5月6日, 小噴火 (D), 17時20分頃, 灰褐色噴煙噴出, 北東に流れる。降灰なし。
 5月9日, 小噴火 (D), 09時45分, 噴煙色不明噴出, 南東に流れる。降灰09時53分~10時00分。
 大噴火 (B), 21時04分, 砲声様の音響と共に空振あり, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東南東に流れる。鳴動1分30秒, 山頂雲霧のため詳細は不明。「追分観測所」「ドドン」という砲声様音と鳴動あり, 戸障子振動は瞬時, 日記晴雨計記象+5mm, -2.5mm, 音響による被害極微, 雲にて山容不明。「前橋測候所」音響と同時に南面硝子「ガタガタ」となる。「白河測候所」「ドーン」という砲声様音, 振動軽震程度, 全町感ず, 日記晴雨計記象痕跡。「福井測候所」砲声様音数分間に4回

聞える。「敦賀測候所」重砲声様音2回, 空振あり, 戸障子振動す。「春照測候所」東方に爆発音2回, 第2回目の音響継続約10秒戸障子振動せる家あり(気象要覧, 1942年5月)。
 浅間山の爆発〔長野〕浅間山は5月9日午後9時頃, 大音響と共に爆発し, 山麓地方一帯に微震を伴い, 家屋振動し, 人々何れも戸外に飛び出す騒ぎで, 近來になき大爆発であった「昭和17年5月10-11日, 都, 大阪朝日」(地震, 1942年6号)。
 5月10日, 小噴火 (D), 08時40分, 灰色噴煙少量噴出, 南南東に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 09時51分, 灰色少量噴出, 北東に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 11時10分, 灰色噴煙噴出, 降灰なし。
 小噴火 (D), 12時35分, 灰色噴煙噴出, 南東に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 13時15分, 灰色噴煙噴出, 南東に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 14時01分, 灰色噴煙噴出, 南東に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 16時01分, 灰色噴煙噴出, 噴煙1塊, 降灰なし。
 5月11日, 小噴火 (D), 05時54分, 黒灰色噴煙噴出, 南南東に流れる。降灰なし。
 5月12日, 小噴火 (D), 07時47分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 08時42分, 灰色噴煙噴出, 東方に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 08時52分, 灰色噴煙噴出, 東方に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 10時03分, 灰色噴煙噴出, 東方に流れる。降灰なし。
 5月14日, 小噴火 (D), 14時53分, 灰色噴煙噴出, 東方に流れる。降灰なし。
 5月15日, 小噴火 (D), 09時35分, 灰色噴煙噴出, 東方に流れる。降灰なし。
 小噴火 (D), 15時36分, 黒褐色噴煙多量噴出, 南東に流れる。噴煙通路に降灰盛ん。
 5月16日, 小噴火 (D), 22時30分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。降灰なし。
 5月17日, 大噴火 (B), 01時04分, 空振あり, 鳴動約6分間, 赤熱噴石・火柱などが観測され, 溶岩真っ赤にみえた。山火事が発生, 爆発前4分に火柱あがる。「追分観測所」「ドーン」という底力のある弱い砲声様の爆音と同時に「ゴーゴー」という鳴動盛ん, 4分間継

続、赤熱噴石のため山頂火の海の如く真っ赤になる。火柱あらわれ、噴煙中に盛んに閃光あり弱雷鳴を伴う。野火を生ずる。戸窓弱く振動、自記晴雨計記象+6.3mm, -0.2mm, 活動継続約10分の後衰える。本活動前は白煙極少(気象要覧, 1942年5月)。

6月、浅間山の活動は前月より衰えたようで噴火の数も減った。しかし9日にはかなりの長時間に亘る噴煙活動を行い群馬県下に降灰をもたらした。活動の概略記述は、気象要覧(1942年6月)「軽井沢測候所報告」を主体としている。

6月3日、小噴火(C), 21時05分、音響があり、灰褐色噴煙多量で電光が盛んに見られたが空振は観測されなかった。噴煙は北東に流れた。「追分観測所」遠雷様音約4分間継続、暗夜にて噴煙は不明だが電光は盛んで約15分継続、空振により窓「ガタガタ」振動する。06時・10時・14時には噴煙みえず。

6月9日、小噴火(C), 17時44分、音響があり、黒褐色噴煙が多量に噴出、北東に流れる。雷声・電光が盛んに生じ鳴動を伴う。噴煙噴出長時間(1時間22分)続く。「追分観測所」17時44分、噴煙黒色多量に噴出、東方に流れる。鳴動約50分間継続する。空振はなかった。

浅間山の爆発〔小諸〕浅間山は6月9日午後5時55分頃突如大爆発、噴煙は上信国境の空を蔽い、峰の茶屋付近には小豆大、国境方面には拇指大の溶岩を盛んに降らせ、爆発を続ける事約1時間で漸く鎮静したが、故老も驚く長時間の爆発であった。〔前橋〕6月9日午後9(5の誤字か)時50分、浅間山が爆発した。噴火は近来にないもので、大降灰が約4時間にわたり、群馬県西上州地方に雨の如く降りそそぎ、高崎前橋の如きは傘をささなければ歩行が出来ない程であった。県下一帯降灰で真っ白となり養蚕家は平坦部では既に上ぞくを終わったので被害は少ないが、山間部は上ぞく間際で、結桑?(繭)に支障を来し、県では灰を落として与える様極力希望している。降灰量は碓氷郡九十九村で坪当たり1升2合、北甘楽郡富岡町で坪当たり6合であった「昭和17年6月10~11日、東京日々、報知」(地震, 1942年7号)。

注73、気象要覧報告ではこの噴火の降灰の事に関して、殆ど触れられていないのであるが、これは調査が充分に出来なかったのであろう。当時の社会情勢を考慮すれば理解できる。

新聞記事のうち大爆発というのは常用句であって、無音噴火を大爆発と表現するのも不思議ではない。ただ、こ

の新聞記事により、この6月9日の連続噴火は、多量の火山灰を噴出したことがうかがえる事は重要である。

6月11日、小噴火(D), 06時40分、白色噴煙少量噴出、東方に流れる。

小噴火(D), 16時55分、黒褐色噴煙少量噴出、東方に流れる。

6月12日、小噴火(D), 04時30分、茶褐色噴煙少量噴出、南方に流れる。05時40分~06時06分降灰あり。

小噴火(D), 08時44分、淡灰色噴煙少量噴出、西方に流れる。降灰なし。

6月13日、小噴火(D), 08時54分、灰褐色噴煙噴出、東方に流れる。

小噴火(D), 10時22分、噴煙、北方に流れる。

7月、浅間山の活動は前月に比較して衰えを見せた。

12日・13日・24日および25日には軽井沢に降灰があった。活動の概略記述は、気象要覧(1942年7月)「軽井沢観測所報告」を主体としている。

7月9日、小噴火(D), 12時50分、灰褐色噴煙噴出、東方に流れる。降灰なし。

7月12日、小噴火(D), 09時25分、灰褐色噴煙中量噴出、南東に流れる。降灰あり。

7月13日、小噴火(D), 18時15分、噴煙少量噴出、南東に流れる。降灰あり。

7月17日、小噴火(D), 09時32分、灰褐色噴煙少量噴出、南東に流れる。降灰なし。

7月22日、小噴火(D), 09時52分、灰色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰なし。

7月24日、小噴火(D), 22時後に噴火した模様、25日6時の観測時に降灰を発見、作物に被害ある見込み。

7月25日、小噴火(D), 09時10分、灰色噴煙中量噴出、南東に流れる。降灰なし。

7月26日、小噴火(D), 06時32分、灰褐色噴煙少量噴出、東方に流れる。降灰なし。

7月29日、小噴火(D), 灰白色噴煙少量噴出、南方に流れる。降灰なし。

7月30日、小噴火(D), 11時37分、爆音あり、黒灰色噴煙中量噴出、南東に流れる。降灰なし。

8月、浅間山は本日も度々無音噴火を発生した。5日・10日・11日・12日・13日・18日・19日及び21日には軽井沢観測所に降灰があり、16日夜には山頂上に火柱が現れた。活動の概略記述は、気象要覧(1942年8月)「軽井沢観測所報告」を主体としている。

8月1日、小噴火(D), 06時43分、灰褐色噴煙少量噴出、南東に流れる。降灰なし。

- 8月3日, 小噴火 (D), 07時27分, 黒色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
- 8月5日, 小噴火 (D), 11時47分頃, 浅間山の小活動を前掛山より観察した報告が, 気象要覧(1942年8月)にの記載されている.
小噴火 (D), 13時52分, 雲霧のため詳細不明, 軽井沢観測所に降灰あり.
- 8月9日, 小噴火 (D), 10時32分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 12時10分, 黒灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
- 8月10日, 小噴火 (D), 10時38分, 山頂雲霧のため不明, 10時48分~11時25分, 降灰あり.
- 8月11日, 小噴火 (D), 09時50分, 灰褐色噴煙少量噴出, 南方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 12時30分, 雲霧のため噴煙見えず, 12時55分~13時25分, 降灰微量.
小噴火 (D), 19時頃, 山頂雲霧, 降灰19時30分.
- 8月12日, 小噴火 (D), 07時45分, 灰褐色噴煙多量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 10時35分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 23時頃?, 23時25分, 軽井沢観測所に降灰, 降灰量5.4瓦/坪.
- 8月13日, 小噴火 (D), 08時03分, 灰色噴煙多量噴出, 東南東に流れる. 降灰09時55分.
- 8月14日, 小噴火 (D), 11時21分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 15時05分, 灰褐色噴煙噴出, 南方に流れる. 降灰なし.
- 8月15日, 小噴火 (D), 08時23分, 褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 12時00分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 14時27分, 灰褐色噴煙少量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
- 8月16日, 小噴火 (D), 09時40分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 14時20分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰あるらし.
小噴火 (D), 17時42分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
- 8月17日, 小噴火 (D), 04時46分, 灰褐色少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 12時04分, 灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
- 8月19日, 小噴火 (D), 15時10分, 下層雲の為噴煙不明, 降灰あり.
- 8月20日, 小噴火 (D), 20時28分, 黒灰色噴煙噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
- 8月21日, 小噴火 (D), 06時58分, 灰褐色噴出, 東方に流れる. 降灰あり.
小噴火 (D), 10時04分, 灰色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.
- 8月22日, 小噴火 (D), 07時00分, 灰褐色噴煙噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 10時11分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 17時25分, 灰褐色噴煙噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 18時40分, 褐色噴煙噴出, 南方に流れる. 降灰なし.
- 8月23日, 小噴火 (D), 07時02分, 灰褐色噴煙噴出, 東南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 17時10分, 白色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 10時27分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 14時32分, 黒灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
- 8月25日, 小噴火 (D), 11時45分, 雲霧のため詳細不明.
小噴火 (D), 09時20分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 15時50分, 下層雲のため詳細不明.
- 8月29日, 小噴火 (D), 12時08分, 灰褐色噴煙少量噴出, 北方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 13時53分, 黒灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
- 8月31日, 小噴火 (D), 14時57分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる. 降灰なし.
9月, 浅間山は本月も前月同様に無音噴火を続けたが, 16日の活動時には軽井沢で音響が聞こえた. その他特記するような活動は発生しなかった. 活動の概略記述は, 気象要覧(1942年9月)「軽井沢観測所報告」を主体としている.
- 9月1日, 小噴火 (D), 15時57分, 噴煙中量噴出, 東南東に流れる. 下層雲の為詳細不明. 降灰なし.
- 9月3日, 小噴火 (D), 08時38分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

浅間火山活動記録の再調査

9月8日, 小噴火 (D), 05時20分, 灰褐色噴煙極少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 16時49分, 黒灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

9月9日, 小噴火 (D), 07時20分, 灰褐色噴煙少量噴出, 北東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 17時30分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 19時09分, 黒灰色噴煙少量噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.

9月10日, 小噴火 (D), 04時34分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 08時07分, 灰褐色噴煙少量噴出, 南南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 16時52分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる. 小浅間上空降灰あるらし.

9月11日, 小噴火 (D), 09時25分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 10時25分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 15時33分, 灰褐色噴煙極少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

9月13日, 小噴火 (D), 11時58分, 灰褐色噴煙多量噴出, 北東に流れる. 降灰なし.

9月14日, 小噴火 (D), 05時24分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 13時45分, 茶褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

9月16日, 小噴火 (D), 09時18分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 14時32分, 音響を伴い黒褐色噴煙多量噴出, 東北東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 22時11分, 黒褐色噴煙噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

9月17日, 小噴火 (D), 08時08分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

9月18日, 小噴火 (D), 12時40分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

9月19日, 小噴火 (D), 08時39分, 黒褐色噴煙噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

9月23日, 小噴火 (D), 10時37分, 灰褐色噴煙中量噴出, 北東に流れる. 降灰なし.

9月24日, 小噴火 (D), 10時45分, 茶褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

9月25日, 小噴火 (D), 06時55分, 茶褐色噴煙少量噴

出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 09時48分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

9月26日, 小噴火 (D), 07時09分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

9月28日, 小噴火 (D), 08時50分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 13時25分, 黒灰色噴煙少量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.

9月30日, 小噴火 (D), 16時52分, 黒褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
10月, 前月同様に無音小噴火を続けたが, 次第に発生数を減じる傾向がある. 6日・7日・11日および14日には軽井沢に降灰があった. 活動の概略記述は, 気象要覧(1942年10月)「軽井沢観測所報告」を主体としている.

10月1日, 小噴火 (D), 08時00分, 黒褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

10月2日, 小噴火 (D), 08時40分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

10月3日, 小噴火 (D), 10時28分, 灰褐色噴煙少量噴出, 西方に流れる. 石尊山付近降灰あるらし.
小噴火 (D), 17時28分, 灰色噴煙少量噴出, 南南西に流れる. 降灰なし.

10月4日, 小噴火 (D), 11時14分, 茶褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

10月5日, 小噴火 (D), 08時26分, 灰白色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 15時19分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南方に流れる. 降灰なし.

10月6日, 小噴火 (D), 22時38分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南方に流れる. 降灰なし.

10月7日, 小噴火 (D), 15時50分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.

10月9日, 小噴火 (D), 06時23分, 黒灰色噴煙中量噴出, 北東に流れる. 降灰なし.
小噴火 (D), 06時55分, 灰色噴煙少量噴出, 北東に流れる. 噴火?.

小噴火 (D), 14時31分, 黒褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

小噴火 (D), 15時20分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

10月11日, 小噴火 (D), 14時15分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる. 軽井沢町一帯に降灰あり.

10月12日, 小噴火 (D), 08時45分, 黒灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 小浅間上空降灰あり?.

10月13日, 小噴火(D), 16時17分, 黒灰色噴煙少量噴出, 北東に流れる. 降灰なし.

10月14日, 小噴火(D), 11時55分, 噴煙少量噴出, 雲のため山頂は不明. 降灰あり.

10月15日, 小噴火(D), 茶褐色噴煙少量噴出, 南方に流れる. 降灰なし.

10月19日, 小噴火(D), 12時14分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

10月29日, 小噴火(D), 11時01分, 茶褐色噴煙少量噴出, 南東に流れる. 降灰なし.

11月, 本月には活動は衰え, 噴火として見るべきものは殆ど無かった. 気象要覧(1942年11月)では噴火として記載していないが, 気象要覧(1942年)の年間火山活動表の中に次の2回の活動を噴火としている.

11月5日, 15時35分, 灰褐色噴煙極少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

11月10日, 09時55分, 茶褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

12月, 本月も活動は衰えた状態が続き, 気象要覧(1942年12月)では, 特に噴火を挙げていないが, 前月同様に, 気象要覧(1942年)の年間火山活動表に次の2回の活動を噴火としている.

12月14日, 10時20分, 灰色噴煙極少量噴出, 西方に流れる. 降灰なし.

12月15日, 10時00分, 灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる. 降灰なし.

1942年浅間山活動の要約

1月には無音小噴火を頻発した.

1月2日, 小噴火(D)1回, 6日, 小噴火(D)4回, 8日, 小噴火(D)1回, 9日, 小噴火(D)2回, 10日・11日, 小噴火(D)各1回, 17日, 小噴火(D)2回, 19日, 小噴火(D)2回, 20日, 小噴火(D)3回, 21日, 小噴火(D)1回, 22日, 小噴火(D)3回, 23日, 小噴火(D)1回, 24日, 小噴火(D)4回, 25日, 小噴火(D)1回, 26日, 小噴火(D)2回, 28日, 小噴火(D)1回, 30日, 小噴火(D)2回, (1月噴火回数, D; 32回)

2月には前月より活動の衰えが目立った.

2月4日, 小噴火(D)3回, 5日, 小噴火(D)2回, 6日・7日, 小噴火(D)各1回, 8日, 小噴火(D)3回, 9日, 小噴火(D)4回, 10日・11日, 小噴火(D)各1回, 14日・16日, 小噴火(D)各3回, 17日, 小噴火(D)1回, 18日・22日・23日, 各3回, 25日, 小噴火(D)2回, 27日・28日, 小噴火(D)各1回,

(2月噴火回数, D; 34回)

3月も同様に無音小噴火を続けた.

3月1日, 小噴火(D)2回, 3日, 小噴火(D)1回, 4日, 小噴火(D)2回, 5日・7日, 小噴火(D)2回, 8日, 小噴火(D)4回, 9日, 小噴火(D)1回, 11日, 小噴火3回, 12日・19日, 小噴火(D)各2回, 20日・21日, 小噴火(D)各3回, 22日・31日, 小噴火(D)各2回, (3月噴火回数, D; 29回)

4月も前月同様に小噴火を続ける.

4月2日・3日, 小噴火(D)各4回, 4日, 小噴火(D)6回, 5日, 小噴火(D)1回, 7日, 小噴火(C)1回(D)2回, 8日・9日・10日, 小噴火(D)各1回, 11日, 小噴火(D)2回, 12日・13日・14日, 小噴火各1回, 15日, 小噴火(D)4回, 16日・17日, 小噴火(D)各3回, 18日・19日・20日・22日・小噴火(D)各1回, 23日・26日, 小噴火(D)各2回, (4月噴火回数, C; 1回, D; 43回)

5月には活動が活発化する傾向が見られた.

5月1日, 小噴火(D)1回, 2日, 小噴火(D)3回, 4日, 小噴火(D)2回, 6日, 小噴火(D)1回, 9日, 小噴火(D)1回, 大噴火の小(B)1回; 福井, 敦賀, 白河等で音響を感じる. 10日, 小噴火(D)7回, 11日, 小噴火(D)1回, 12日, 小噴火(D)4回, 14日, 小噴火(D)1回, 15日, 小噴火(D)2回, 16日, 小噴火(D)1回, 17日, 大噴火の小(B)1回; 噴石により山火事が発生する. (5月噴火回数, B; 2回, D; 24回)

6月, 前月より衰えをみせるが, それでもかなり活発に活動した.

6月3日, 小噴火(C)1回, 9日, 小噴火(C)1回; 群馬県下にかんりの降灰があった. 11日・12日・13日, 小噴火(D)各2回, (6月噴火回数, C; 2回, D; 6回)

7月, 前月より衰えを見せる.

7月12日・13日・17日・22日・24日・25日・26日・29日・30日, 小噴火(D)各1回, (7月噴火回数, D; 9回)

8月, 無音小噴火を続ける.

8月1日・3日, 小噴火(D)各1回, 5日・9日, 小噴火(D)各2回, 10日, 小噴火(D)1回, 11日・12日, 小噴火(D)各3回, 13日, 小噴火(D)1回, 14日, 小噴火(D)2回, 15日・16日, 小噴火(D)各3回, 17日, 小噴火(D)2回, 19日・20日, 小噴火(D)各1回, 21日, 小噴火(D)2回, 22日・23日, 小噴火(D)各4回, 25日, 小噴火(D)3回, 26日, 小噴

火 (D) 2回, 31日, 小噴火 (D) 1回, (8月噴火回数, D; 42回)

9月, 無音小噴火を続ける。

9月1日・3日, 小噴火 (D) 各1回, 8日, 小噴火 (D) 2回, 9日・10日・11日, 小噴火 (D) 各3回, 13日・14日, 小噴火 (D) 各2回, 16日, 小噴火 (D) 3回, 17日・18日・19日・23日・24日, 小噴火 (D) 各1回, 25日, 小噴火 (D) 2回, 26日, 小噴火 (D) 1回, 28日, 小噴火 (D) 2回, 30日, 小噴火 (D) 1回, (9月噴火回数, D; 32回)

10月, 噴火発生数が減少する傾向を見せる。

10月1日・2日, 小噴火 (D) 各1回, 3日, 小噴火 (D) 2回, 4日, 小噴火 (D) 1回, 5日, 小噴火 (D) 2回, 6日・7日, 小噴火 (D) 各1回, 9日, 小噴火 (D) 4回, 11日・12日・13日・14日・15日・19日・29日, 小噴火 (D) 各1回, (10月噴火回数, D; 20回)
11月, 12月には噴火として見るべきものは, 両月共に2回程であって, 活動は明らかに衰退の徴候を示し始めた。

(AVO噴火数, 1月; 62回, 2月; 42回, 3月; 54回, 4月; 74回, 5月; 18回, 6月; 6回, 7月; 10回, 8月; 56回, 9月; 50回, 10月; 21回, 11月; 0回, 12月; 0回)

111) 1943年(昭和18年)の活動

1月より活動の低下は著しく, 噴煙にときおり灰色の煙が混じる程度で噴火とみなせるような活動は観察されなくなった。このような傾向は1943年を通じて続いた(気象要覧, 1943年1月~12月)。1944年以降の活動については, 次の第4期の活動に述べる。

8. 第4期(1944年~1990年)噴火活動記録

この期間は戦争末期より戦後の社会的混乱期を含むので, 記録も決して充分とはいえないが, 観測者の熱意によって活動の推移を十分に知るだけの記録は残されている。戦後になると, 次第に観測が充実されていくが, 活動監視もしばらくは不十分な時代が続き, 山上における人身被害が発生する。1950年代になって観測もようやく安定し, 火山活動について, 注意を喚起できるようになる。1958年11月10日に発生した20世紀でも有数の浅間山の噴火は, 観測陣により, 始めて現実に予告された噴火となる。その後, 浅間山の活動は次第に弱まる傾向をみせ, 静穏な期間が永くなっていった。

112) 1944年(昭和19年)の活動

1月には黒灰色煙を噴出する等の活動が見受けられた。

2月にも褐色煙を噴くなどの変化が見られたが, 全体として平穏であった。

3月穏やかに終始した。

4月時折灰褐色煙を噴くこともあったが平穏であった。

5月は全月に亘って穏かな噴煙状態で終始した。

6月有色煙の噴出が3日, 5日, 22日, 23日, 24日に観測された。

7月10日~12日及び18日には黒灰色煙が観察され, 其の他にも有色煙が認められた。なお追分観測所で火山性微動が2回観測された。以上(気象要覧, 1944年1月~7月)。

8月に入ると活動が活発になり噴煙が高く昇るようになった。

8月7日, 小噴火 (C), 10時18分頃, 軽井沢測候所では圧迫感のある爆音がきこえたが, 層雲のために山頂は不明であった。小諸からは, 無音爆発して黒灰色煙が多量に噴出されたのが見えた。この噴煙は雲の中に入ったが, 西北西に流れたようであった(気象要覧, 1944年8月)。

8月14日, 小噴火 (C), 07時12分頃, 極濃の黒灰色の噴煙を極多量に噴出し, 南東に流れた。軽井沢では鳴動が07時17分~25分, 降灰が07時50分~08時25分, 降灰量が1,000 gr/m²観測された。この降灰のために浅間山が灰色になった。

小噴火 (C), 09時10分頃, 極濃の黒灰色煙を極多量噴出し, 南東に流れた。降灰09時45分~10時43分, 降灰量1,065 gr/m²(気象要覧, 1944年8月)。

“爆発史集”によれば, 09時10分頃小噴火爆発音なく灰黒色煙多量噴出南東に流れ9時54分より降灰始む, 10時43分止む, 降灰量新聞紙一枚213グラム, 坪当り1,700グラム。とある。この記事は追分支所におけるものと考えられよう。

注74, 上記噴火記事のように, 気象要覧記事と“爆発史集”記事が微妙に食い違う場合がある。これは爆発史集で, 軽井沢測候所と追分観測所における観測を, どちらのものか明らかにしないで収録している場合であろう。“爆発史集”の記事には気象要覧の記事(軽井沢測候所が主体であって, 追分観測所の記録の場合にはそのように記してある)そのままのものもあるのでその点注意が必要である。なお, 気象庁の制度的には軽井沢測候所は, 1950年6月1日に軽井沢測候所と改称された(飯島, 2002)のであるが, 1944年8月以後の気象要覧では,

軽井沢測候所としているので、本記録では測候所として記載する。

8月15日, 小噴火 (C), 05時20分頃, 雲に覆われ山体の様相不明である。降灰は05時45分~06時55分, 降灰量, 1,550 gr/m² (気象要覧, 1944年8月)。

8月22日, 小噴火 (D), 18時45分頃, 活動の状況は雲により不明。

8月23日, 小噴火 (D), 04時40分頃, 濃い噴煙が多量に噴出され, 山頂上約1,000mの高さまで上昇して東に流れた。

8月28日, 小噴火 (C), 雲のため山頂は見えなかった。鳴動約10分間つづき, 降灰は01時30分~02時35分, 降灰量, 590 gr/m²。

9月2日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」04時00分頃, 雲のため詳細不明, 極少量の降灰があった (気象要覧, 1944年9月)。“爆発史集”によれば, 9月1日の04時00分小噴火, 雲にて不見降灰極少量あり, となっている。

9月3日, 小噴火 (C), 「軽井沢測候所」10時10分頃, 小噴火, 雲のため詳細不明, 遠雷のような鳴動が10分間続いた。

9月18日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」12時45分~13時12分, 濃黒褐色噴煙が大量に噴出, 東方に流れる (気象要覧, 1944年9月)。

小噴火 (D), 16時42分, 小噴火 “爆発史集”。

9月19日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」04時59分~05時12分, 白褐色の噴煙大量噴出, 東方に流れる。

小噴火 (D), 「軽井沢測候所」05時41分~06時35分, 白褐色の噴煙大量に噴出, 東方に流れる。

小噴火 (D), 「軽井沢測候所」05時41分~06時35分, 白褐色の噴煙大量に噴出, 東方に流れる。

小噴火 (D), 「軽井沢測候所」06時53分~08時01分, 灰褐色の噴煙大量に噴出, 東方に流れる。

小噴火 (D), 「軽井沢測候所」08時01分~09時39分, 灰褐色の噴煙大量に噴出, 東方に流れる。

小噴火 (D), 「軽井沢測候所」09時39分~12時54分, 灰褐色の噴煙大量に噴出, 東方に流れる (気象要覧, 1944年9月)。

小噴火 (D), 小噴火, “爆発史集”。

9月20日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」17時19分~17時50分, 噴煙色不明, 東方に流れる (気象要覧, 1944年9月)。

小噴火 (D), 21時50分頃小噴火, “爆発史集”。

9月21日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」08時30分~09

時55分, 噴煙色不明, 東方に流れる。降灰, 09時02分~09時20分, 降灰量, 17.3 gr/m²。

小噴火 (D), 08時55分, 中噴火黒褐色煙多量南に流れ軽井沢町沓掛方面に10時13分より30分間降灰あり坪当り782グラム “爆発史集”。

小噴火 (D), 「軽井沢測候所」09時55分~, 噴煙色不明, 噴煙南方に流れる。降灰, 10時13分~10時43分, 降灰量, 26.0 gr/m²。

小噴火 (D), 「軽井沢測候所」19時10分~22日08時07分, 中噴火, 噴煙色不明, 噴煙南方に流れる。降灰07時40分~08時10分, 11.5 gr/m²。

9月22日, 小噴火 (D), 07時30分, 中噴火噴煙南南東に流れ07時30分より08時10分まで降灰坪当り34.7瓦, 鳴動なし “爆発史集”。

小噴火 (D), 08時25分~08時58分, 白褐色噴煙多量噴出, 南方に流れる。

小噴火 (D), 11時24分~11時40分, 噴煙色不明, 多量噴出, 南方に流れる (象要覧, 1944年9月)。

小噴火 (D), 11時42分, 小噴火, “爆発史集”。

9月23日, 小噴火 (D), 11時頃, 小噴火, “爆発史集”。

小噴火 (D), 「軽井沢測候所」13時55分~14時20分, 灰褐色噴煙多量噴出, 北北西に流れる (気象要覧, 1944年9月)。

小噴火 (D), 「軽井沢測候所」15時29分~15時43分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 北方に流れる (気象要覧, 1944年9月)。

9月24日, 小噴火 (D), 09時48分, 中噴火噴煙北方に流れる “爆発史集”。小噴火 (D), 「軽井沢測候所」10時04分~13時10分, 灰色噴煙中量噴出, 西南西に流れる。鳴動が10分間続く (気象要覧, 1944年9月)。

小噴火 (D), 10時30分, 小噴火, “爆発史集”。

小噴火 (D), 「軽井沢測候所」17時43分~18時50分, 噴煙色不明, 北方に流れる (気象要覧, 1944年9月)。

9月26日, 小噴火 (D), 05時30分, 小噴火, “爆発史集”。

9月27日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」22時~, 噴火について記載なし (気象要覧, 1944年9月)。“爆発史集”では, 9月27日~28日, 時刻不明22時以後夜間時刻不明なるも噴火降灰あり, 噴煙南に流れし模様 (降灰極少), とある。

9月29日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」06時22分~06時42分, 灰褐色噴煙多量噴出, 東方に流れる。降灰があった (気象要覧, 1944年9月)。

小噴火 (D), 「軽井沢測候所」17時33分~21時40分, 灰黒色噴煙中量噴出, 東方に流れる (気象要覧, 1944

- 年9月).
- 10月11日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」17時30分～17時40分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 東方に流れる.
- 10月14日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」05時35分～, 雲のため詳細不明, 極少量の降灰があった.
小噴火(D), 「軽井沢測候所」14時(17時)47分～18時57分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 東方に流れる(気象要覧, 1944年10月), ()内は“爆発史集”.
- 10月15日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」06時01分～07時31分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 南方に流れる.
小噴火(D), 「軽井沢測候所」07時31分～13時10分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 東方に流れる.
小噴火(D), 「軽井沢測候所」13時10分～13時10分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 東方に流れる(気象要覧, 1944年10月).
- 10月16日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」09時20分～10時40分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 東方に流れる.
小噴火(D), 「軽井沢測候所」13時01分～14時17分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 東方に流れる. 降灰東方に多く, 山体の東面が灰色となった(気象要覧, 1944年10月).
- 10月18日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」03時40分～?, 噴火した模様, 雲のため不明, 04時10分～04時25分降灰.
小噴火(D), 「軽井沢測候所」05時00分～06時00分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 南方に流れる.
- 10月19日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」17時00分～?, 山頂雲で詳細不明, 噴煙多量噴出, 東方に流れる.
- 10月20日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」10時50分～11時07分, 山頂雲で詳細不明, 噴煙多量噴出, 東方に流れる. 極少量の降灰があった.
- 10月21日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」08時00分～08時30分, 小活動, 山体雲に蔽われて詳細は不明.
- 10月21日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」17時15分～18時00分, 噴火鳴動大きかったが山体雲に蔽われて詳細不明, 極少量の降灰あり(気象要覧, 1944年10月).
- 10月22日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」10時00分～10時20分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東方に流れる.
小噴火(D), 12時50分～13時00分, 灰褐色噴煙極多量に噴出, 東南東に流れる.
小噴火(D), 13時00分～13時14分, 灰褐色噴煙極多量に噴出, 東南東に流れる.
小噴火(D), 14時08分～14時12分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東方に流れる.
- 小噴火(D), 18時35分～18時40分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東方に流れる(気象要覧, 1944年10月).
- 小噴火(D), 21時45分頃, 小噴火するも闇にて詳細不明, “爆発史集”.
- 10月24日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」09時30分～10時05分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる.
- 10月26日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」08時02分～08時09分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる.
小噴火(D), 「軽井沢測候所」10時17分～10時30分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる(気象要覧, 1944年10月).
- 10月27日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」10時05分～10時10分, 噴煙色雲により不明, (気象要覧, 1944年10月). なお“爆発史集”では, 28日になっている.
- 11月1日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」06時10分～06時40分, 雲により詳細不明, 噴煙南東に流れる. 06時25分～37分, 降灰極少量.
小噴火(D), 16時03分, 小噴火ありたる模様, 降灰16時13分～35分, 少量“爆発史集”.
- 11月2日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」17時10分～19時20分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 低く南方に流れる. 17時20分噴煙が山体をおおった.
- 11月5日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」11時15分～11時20分, 灰褐色噴煙中量噴出, 下向き東北東に流れる(気象要覧, 1944年11月).
- 11月7日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」13時30分～13時50分, 灰褐色噴煙中量噴出, 低く東方に流れる.
小噴火(D), 「軽井沢測候所」17時10分～17時20分, 灰褐色噴煙極少量噴出, 東方に流れる. 杳掛に降灰があった.
- 11月9日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」05時30分～09時00分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東方に流れる.
小噴火(D), 「軽井沢測候所」16時02分～16時10分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東方に流れる. 山頂を蔽った雲の上に噴煙が見えた(気象要覧, 1944年11月).
- 11月11日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」11時22分～11時35分, 黒褐色噴煙多量に噴出, 東南東に流れる.
小噴火(D), 「軽井沢測候所」13時50分～14時00分, 黒褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる.
小噴火(D), 「軽井沢測候所」16時55分～17時20分, 黒色噴煙多量に噴出, 東南東に流れる(気象要覧, 1944年11月).
- 11月12日, 小噴火(D), 「軽井沢測候所」06時45分～07時05分, 灰褐色噴煙中量噴出, 低く東方に流れる.

- 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」09 時 00 分～09 時 10 分, 暗黒色噴煙中量噴出, 東方に流れる (気象要覧, 1944 年 11 月).
- 11 月 14 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」15 時 10 分～16 時 28 分, 灰白色噴煙中量噴出, 東方に流れる.
- 11 月 15 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」14 時 35 分～14 時 40 分, 灰褐色噴煙極多量に噴出, 東方に流れる.
- 11 月 17 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」11 時 40 分～15 時 20 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東南東に流れる.
- 11 月 19 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」05 時 40 分～05 時 54 分, 灰褐色噴煙極多量に噴出, 東方に流れる. 噴煙, 東に 12km 位流れた.
- 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」05 時 54 分～06 時 05 分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 東方に流れる.
- 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」14 時 35 分～14 時 55 分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 東方に流れる. 東方 6km (気象要覧, 1944 年 11 月), なお, “爆発史集” では 18 日になっている.
- 11 月 20 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」17 時 30 分～20 時 05 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 低く東南東に流れる.
- 11 月 22 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」09 時 15 分～09 時 45 分, 灰褐色噴煙極多量に噴出, 下向き東南東に流れる. なお, “爆発史集” では 21 日になっている.
- 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」17 時 40 分～17 時 50 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東南東に流れる (気象要覧, 1944 年 11 月).
- 11 月 23 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」06 時 51 分～07 時 30 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東南東に流れる.
- 11 月 24 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」09 時 11 分～09 時 45 分, 灰褐色噴煙極多量に噴出, 東方に流れる. 東に 12km 位流れた.
- 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」13 時 45 分～14 時 15 分, 灰褐色噴煙多量に噴出する.
- 11 月 25 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」17 時 10 分～18 時 20 分, 暗黒色噴煙中量噴出, 南東に流れる,
- 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」20 時 45 分～22 時 15 分, 暗黒色噴煙中量噴出, 東方に流れる.
- 11 月 26 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」18 時 07 分～18 時 25 分, 灰白色噴煙多量に噴出, 東方に流れる (気象要覧, 1944 年 11 月).
- 12 月 1 日, 小噴火 (D), 06 時 40 分小噴火灰褐色噴煙多量東方に流れる “爆発史集”.
- 12 月 4 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」13 時 24 分～13 時 37 分, 黒褐色噴煙多量に噴出, 東方に流れる (気象要覧, 1944 年 12 月).
- 小噴火 (D), 13 時 38 分～13 時 55 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東北東に流れる.
- 12 月 5 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」07 時 50 分～08 時 00 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東方に流れる.
- 小噴火 (D), 21 時 35 分～22 時 42 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる.
- 12 月 7 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」14 時 16 分～, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東方に流れる.
- 小噴火 (D), 15 時 31 分～16 時 50 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東北東に流れる.
- 12 月 8 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」10 時 05 分～12 時 00 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東方に流れる (気象要覧, 1944 年 12 月).
- 12 月 10 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」10 時 40 分～12 時 55 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる.
- 小噴火 (D), 12 時 55 分～13 時 10 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東方に流れる.
- 12 月 11 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」14 時 50 分～15 時 23 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる (気象要覧, 1944 年 12 月).
- 小噴火 (D), 15 時 23 分～15 時 30 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる.
- 12 月 12 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」06 時 45 分～15 時 40 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東方に流れる.
- 12 月 21 日, 小噴火 (D), 「軽井沢測候所」11 時 50 分～13 時 10 分, 灰褐色極多量に噴出, 南東に流れる.
- 小噴火 (D), 18 時 10 分～22 時 00 分, 灰褐色噴煙極多量に噴出, 南東に流れる (気象要覧, 1944 年 12 月).
- 1944 年浅間山活動の要約
- 1 月より 6 月までは時折有色煙を噴出することもあったが, 比較的静穏な状態が続いた.
- 7 月に入ると次第に活動が活発化する徴候が見られ, 8 月には小噴火が観察されるようになった.
- 8 月 7 日, 小噴火 (C) 1 回, 14 日, 小噴火 (C) 2 回, 15 日, 小噴火 (C) 1 回, 22 日・23 日, 小噴火 (D) 各 1 回, 28 日, 小噴火 (C) 1 回, (8 月噴火回数, C; 5 回, (D); 2 回)
- 9 月 2 日, 小噴火 (D) 1 回, 3 日, 小噴火 (C) 1 回, 18 日, 小噴火 (D) 2 回, 19 日, 小噴火 (D) 7 回, 20 日, 小噴火 (D) 2 回, 21 日, 小噴火 (D) 4 回, 22 日, 小噴火 (D) 4 回, 23 日, 小噴火 (D) 3 回, 24 日, 小噴火 (D) 4 回, 26 日・27 日, 小噴火 (D) 各 1 回, 29 日, 小噴火 (D) 2 回, (9 月噴火回数, C; 1 回, D; 31

回)

10月1日, 小噴火(D)1回, 14日, 小噴火(D)2回, 15日, 小噴火(D)3回, 16日, 小噴火(D)2回, 18日, 小噴火(D)2回, 19日・20日, 小噴火(D)各1回, 21日, 小噴火(D)2回, 22日, 小噴火(D)6回, 24日, 小噴火(D)1回, 26日, 小噴火(D)2回, 27日, 小噴火(D)1回, (10月噴火回数, D; 24回)

11月1日, 小噴火(D)2回, 2日・5日, 小噴火(D)各1回, 7日・9日, 小噴火(D)各2回, 11日, 小噴火(D)3回, 12日, 小噴火(D)2回, 14日・15日・17日, 小噴火(D)各1回, 19日, 小噴火(D)3回, 20日, 小噴火(D)1回, 22日, 小噴火(D)2回, 23日, 小噴火(D)1回, 24日・25日, 小噴火(D)各2回, 26日, 小噴火(D)1回, (11月噴火回数, D; 27回)

12月1日, 小噴火(D)1回, 4日・5日・7日, 小噴火(D)各2回, 8日, 小噴火(D)1回, 10日・11日, 小噴火(D)各2回, 12日, 小噴火(D)1回, 21日, 小噴火(D)2回, (12月噴火回数, D; 15回)

(AVO噴火数, 1月; 0回, 2月; 0回, 3月; 0回, 4月; 0回, 5月; 0回, 6月; 0回, 7月; 0回, 8月; 1回, 9月; 19回, 10月; 52回, 11月; 28回, 12月; 18回)

113) 1945年(昭和20年)の活動

1月3日, 小噴火(D), 17時40分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 東方に流れる(気象要覧, 1945年1月).

1月4日, 小噴火(D), 17時40分, 灰褐色噴煙中量噴出する.

1月8日, 小噴火(D), 17時40分, 灰褐色噴煙濃く中量噴出, 低く南東に流れる“爆発史集”.

1月9日, 小噴火(D), 05時30分, 灰褐色噴煙中量噴出, 低く南東に流れる“爆発史集”.

1月11日, 小噴火(D), 20時00分, 灰褐色噴煙濃く中量噴出, 南東に流れる(象要覧, 1945年1月), “爆発史集”.

1月14日, 小噴火(D), 11時50分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 下向き東北東に流れる.

小噴火(D), 17時47分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる“爆発史集”.

1月19日, 小噴火(D), 17時05分, 灰褐色噴煙中量噴出する(気象要覧, 1945年1月)

注75, 1945年(昭和20年)の気象要覧では, 噴火記事において噴煙の流向記事が記載されていない. 噴煙の流れた方向は降灰に關与する点で重要な意味を持ち, そ

の方位の季節的な変動等は統計的に吟味して, 将来の噴火降灰の被害想定に役立てるべきものと考え.

とくに1944年, 1945年のように, 小噴火が連続する場合には事例として多くの記録を残しておくことが必要と思われる.

一方, “爆発史集”には噴煙の流向が明記されているので, 噴火噴煙の流向については, “爆発史集”に記載されている噴煙流向方位を記録しておく.

1月22日, 小噴火(D), 21時10分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる. この記事“爆発史集”では1月23日となっている. 本報告では, 日時については気象要覧記事を優先してある.

1月25日, 小噴火(D), 07時35分, 黒灰色噴煙極多量雲上に噴出, 東方に流れる. 鳴動が聞える.

1月27日, 小噴火(D), 21時50分, 黒煙濃く極多量噴出する“爆発史集”.

1月28日, 小噴火(D), 15時30分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる.

小噴火(D), 16時00分, 灰褐色噴煙中量噴出, 北東に流れる. 北東に降灰あり.

小噴火(D), 17時30分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 南東に流れる.

1月29日, 小噴火(D), 05時40分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる.

小噴火(D), 06時00分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる.

小噴火(D), 18時50分, 黒灰色噴煙極多量に噴出, 南東に流れる. 鳴動10分間続く(気象要覧, 1945年1月), “爆発史集”.

小噴火(D), 21時50分, 黒褐色噴煙極多量に噴出, 南東に流れる.

小噴火(D), 22時05分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる.

1月30日, 小噴火(D), 13時52分, 黒灰色噴煙極多量に噴出, 東南東に流れる.

小噴火(D), 16時40分, 黒灰色噴煙多量に噴出, 東南東に流れる.

小噴火(D), 17時54分, 黒灰色噴煙多量に噴出, 東南東に流れる.

1月31日, 小噴火(D), 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる(気象要覧, 1945年1月), “爆発史集”.

2月1日, 小噴火(D), 11時30分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東北東に流れる.

小噴火(D), 22時05分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東方

- に流れる。
- 2月3日, 小噴火 (D), 05時50分, 灰褐色噴煙中量(雲上に)噴出, 東南東に流れる。
- 2月6日, 小噴火 (D), 15時20分, 黒灰色噴煙多量に噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 16時27分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 16時52分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 17時50分, 灰褐色噴煙極多量に噴出, 1,000m位に昇り東南東に流れる。
 小噴火 (D), 19時10分, 濃黒色噴煙極多量に噴出, 1,000m位に昇り東南東に流れる(気象要覧, 1945年2月), “爆発史集”。
- 2月8日, 小噴火 (D), 11時27分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (D), 14時50分, 鳴動があったが雲のため詳細不明, 噴煙は東南東に流れた模様, 当所(軽井沢)に15時15分より15分間少量の降灰あり。
- 2月9日, 小噴火 (D), 06時30分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (C), 爆音を伴う, 灰白色噴煙多量に噴出, 1,500mに昇り東南東に流れる。鳴動5分間続く。
 小噴火 (D), 15時55分, 灰褐色噴煙中量噴出, 北東に流れる。
 小噴火 (D), 17時50分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる。
 小噴火 (D), 18時15分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (D), 18時35分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (D), 19時13分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる。
 小噴火 (D), 21時50分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
- 2月10日, 小噴火 (D), 21時45分, 灰褐色噴煙少量噴出する。
- 2月11日, 小噴火 (D), 14時30分, 灰褐色噴煙中量噴出する。
 小噴火 (D), 16時40分, 灰褐色噴煙少量噴出する。
- 2月12日, 小噴火 (D), 11時45分, 灰褐色噴煙中量噴出する。
- 2月14日, 小噴火 (D), 17時50分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。2月15日, 小噴火 (D), 11時40分, 灰黒色噴煙中量噴出, 東南東に流れる “爆発史集”。
- 2月16日, 小噴火 (D), 12時10分, 黒灰色噴煙少量噴出, 東北東に流れる。小噴火 (D), 13時55分, 灰褐色噴煙中量噴出する。
- 2月17日, 小噴火 (D), 03時50分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。小噴火 (D), 07時35分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。
 小噴火 (D), 13時52分, 灰褐色噴煙中量噴出, 600m昇り東方に流れる。小噴火 (D), 17時40分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東南東に流れる。
- 2月18日, 小噴火 (D), 03時40分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる。
 小噴火 (D), 07時55分, 黒灰色噴煙多量に噴出, 南東に流れる。
- 2月20日, 小噴火 (C), 10時35分, 黒灰色噴煙極多量に噴出, 南東に流れる。沓掛, 離山方面降灰多く, 当所に10時50分~11時14分降灰あり “爆発史集”。
 小噴火 (C), 11時00分, 灰褐色噴煙極多量に噴出, 南方に流れる。11時10分より5分間降灰する。
 小噴火 (D), 12時40分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる。
 小噴火 (C), 14時45分, 灰褐色噴煙極多量に噴出, 南東に流れる。当所(軽井沢測候所)に微量の降灰あり。
 小噴火 (D), 14時55分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (C), 17時45分, 黒灰色噴煙極多量に噴出, 東方に流れる。
- 2月21日, 小噴火 (D), 15時00分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる。
- 2月23日, 小噴火 (D), 05時40分, 灰褐色噴煙中量噴出, 下向き東方に流れる。
 小噴火 (C), 08時05分, 爆音を伴い噴火, 黒灰色噴煙多量に噴出, 1,500m上昇する。鳴動約5分間続く “爆発史集”。
 小噴火 (D), 11時20分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
 小噴火 (C), 21時07分, 爆発音を伴い噴火, 灰褐色噴煙多量に噴出, 南東に流れる “爆発史集”。
- 2月25日, 小噴火 (D), 09時50分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
- 2月26日, 小噴火 (D), 09時59分, 黒灰色噴煙中量噴出, 低く南方に流れる。
 小噴火 (D), 10時05分, 灰褐色噴煙中量噴出, 低く東方に流れる。
 小噴火 (D), 17時15分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方

浅間火山活動記録の再調査

- に流れる。
小噴火 (D), 21 時 50 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
- 2 月 27 日, 小噴火 (C), 11 時 57 分, 灰褐色噴煙極多量に噴出, 低く東方に流れる。
小噴火 (D), 14 時 20 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる。
小噴火 (D), 14 時 30 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる “爆発史集”。
- 3 月 5 日, 小噴火 (D), 13 時 20 分, 黒灰色噴煙多量に噴出, 東方に流れる。
- 3 月 9 日, 小噴火 (D), 09 時 40 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 低く東方に流れる。
- 3 月 10 日, 小噴火 (C), 18 時 55 分, 黒灰色噴煙極多量に噴出, 約 5 分間鳴動する “爆発史集”, なお (気象要覧, 1945 年 3 月) では 3 月 9 日になっている。
- 3 月 13 日, 小噴火 (D), 15 時 55 分, 黒灰色噴煙多量に噴出, 東方に流れる。
小噴火 (D), 19 時 10 分, 黒灰色噴煙多量に噴出, 南東に流れる。
- 3 月 14 日, 小噴火?, (気象要覧, 1945 年 3 月) では, 大噴火, 大爆音とある。しかし “爆発史集” には 14 日の記録はない “爆発史集” では, 3 月 15 日 05 時 55 分, 大噴火, 全山雲にて詳細不明なり (爆音あり) とある。
小噴火 (D), 15 時 55 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 低く東方に流れる。
- 3 月 16 日, 小噴火 (D), 09 時 20 分, 黒灰色噴煙多量に噴出, 東方に流れる。
小噴火 (D), 10 時 10 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東方に流れる。
- 3 月 17 日, 小噴火 (D), 13 時 40 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる “爆発史集”。
小噴火 (D), 17 時 38 分, 灰褐色噴煙多量に噴出する (気象要覧, 1945 年 3 月)。“爆発史集” にこの記録はない。
小噴火 (D), 18 時 07 分, 黒灰色噴煙多量に噴出する (気象要覧, 1945 年 3 月)。“爆発史集” にこの記録はない。
小噴火 (D), 19 時 25 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 低く東方に流れる。
- 3 月 19 日, 小噴火 (D), 11 時 59 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 南方に流れる。小噴火 (D), 13 時 59 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 200 m 昇り東方に流れる。
小噴火 (D), 16 時 08 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 16 時 45 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
小噴火 (D), 16 時 58 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 東方に流れる。
小噴火 (D), 17 時 45 分, 黒灰色噴煙少量噴出, 東方に流れる。
- 3 月 21 日, 小噴火 (D), 04 時 30 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南方に流れる。
小噴火 (D), 05 時 50 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南方に流れる (気象要覧, 1945 年 3 月)。“爆発史集”。
- 4 月 1 日, 小噴火 (D), 10 時 10 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
- 4 月 3 日, 小噴火 (D), 08 時 50 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
- 4 月 6 日, 小噴火 (C), 04 時 10 分, 大音響と共に灰褐色噴煙極多量噴出, 1,200 m まで昇り東方に流れる。電光 10 分間あり (気象要覧, 1945 年 4 月)。“爆発史集”。
小噴火 (D), 17 時 20 分, 噴火, 全山雲にて詳細不明 “爆発史集”。
小噴火 (D), 17 時 52 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南方に流れる。
- 4 月 7 日, 小噴火 (D), 05 時 40 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南方に流れる。
小噴火 (D), 06 時 15 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南方に流れる。
小噴火 (D), 12 時 56 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 南東に流れる。
- 4 月 8 日, 小噴火 (D), 04 時 57 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
- 4 月 16 日, 小噴火 (D), 04 時 45 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
小噴火 (D), 07 時 15 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 東方後南方に流れる。
- 4 月 17 日, 小噴火 (D), 13 時 55 分, 灰白色噴煙中量噴出, 南方に流れる。
- 4 月 21 日, 小噴火 (D), 08 時 17 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる。
- 4 月 24 日, 小噴火 (D), 09 時 52 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 500 m 昇り南東に流れる。
- 4 月 30 日, 小噴火 (D), 10 時 07 分, 灰白色噴煙中量噴出, 南方に流れる (気象要覧, 1945 年 4 月)。“爆発史集”。
- 5 月 3 日, 小噴火 (D), 18 時 47 分, 黒灰色噴煙中量噴出, 低く東方に流れる。
小噴火 (D), 21 時 30 分, 濃黒色噴煙多量に噴出, 南

方後東方に流れる。21時50分～22時10分まで極少量の降灰あり。(気象要覧, 1945年5月), “爆発史集”では5月4日となっている。

5月19日, 小噴火(D), 灰褐色噴煙極少量噴出, 東南東に流れる。“爆発史集”では5月10日になっている。

6月9日, 小噴火(D), 灰褐色噴煙多量に噴出, 南東に流れる。10時10分～10時30分, 当所に極少量の降灰(気象要覧, 1945年6月), “爆発史集”。

6月27日, 小噴火(D), 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。

6月28日, 小噴火(D), 灰色の噴煙中量噴出, 1,500m 昇り東方に流れる。

7月4日, 小噴火(D), 11時00分, 雲で見えなかったが, 噴煙雲上に出て灰褐色の噴煙中量, 東南東に流れる“爆発史集”。

7月13日, 小噴火(D), 18時14分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 1,500m に昇り東南東に流れる(気象要覧, 1945年7月), “爆発史集”。

7月18日, 小噴火(D), 山頂雲にて見えず, 噴煙雲上に出て灰褐色の煙東南東に流れる。

小噴火(D), 16時50分, 灰褐色噴煙少量噴出, 50m 昇り東南東に流れる。

7月28日, 小噴火(D), 黒色の噴煙多量に噴出する。

小噴火(D), 16時15分, 黒灰色噴煙中量噴出, 北東に流れる(気象要覧, 1945年7月), “爆発史集”。

8月7日, 小噴火(D), 淡褐色噴煙中量噴出, 北北東に流れる。

8月10日, 小噴火(D), 赤灰色噴煙多量に噴出, 東方に流れる(気象要覧, 1945年8月), “爆発史集”。

9月, 雲に覆われて観測できない日が多かったが, 全月穏かであった(気象要覧, 1945年9月)。

10月14日, 小噴火(D), 14時41分, 灰白色噴煙中量噴出, 北東に流れる。

10月17日, 小噴火(D), 早朝小噴火があった模様, 当所(軽井沢測候所)に降灰あり(気象要覧, 1945年10月), “爆発史集”。

11月3日, 小噴火(D), 15時00分, 灰白色噴煙稍多量に噴出, 北東に流れる。

11月10日, 小噴火(D), 07時55分, 黒灰色噴煙中量噴出, 南東に流れる。

11月12日, 小噴火(D), 白色噴煙少量噴出, 南東に流れる(気象要覧, 1945年11月), “爆発史集”。

12月, 噴火は認められなかった(気象要覧, 1945年12月)。

1945年浅間山活動の要約

1月3日, 4日・8日・9日・11日, 小噴火(D)各1回, 14日, 小噴火(D)2回, 19日・22日・25日・27日, 小噴火(D)各1回, 28日, 小噴火(D)3回, 29日, 小噴火(D)5回, 30日, 小噴火(D)3回, 31日, 小噴火(D)1回, (1月噴火回数, D; 23回)

2月1日, 小噴火(D)2回, 3日, 小噴火(D)1回, 6日, 小噴火(D)5回, 8日, 小噴火(D)2回, 9日, 小噴火(C)1回, (D)7回, 10日, 小噴火(D)1回, 11日, 小噴火(D)2回, 12日・14日・15日, 小噴火(D)各1回, 16日, 小噴火(D)2回, 17日, 小噴火(D)4回, 18日, 小噴火(D)2回, 20日, 小噴火(C)4回, (D)2回, 21日, 小噴火(D)1回, 23日, 小噴火(C)2回, (D)2回, 25日, 小噴火(D)1回, 26日, 小噴火(D)4回, 27日, 小噴火(C)1回, (D)2回, (2月噴火回数, C; 8回, D; 43回)

3月5日, 9日, 小噴火(D)各1回, 10日, 小噴火(C)1回, 13日・14日・16日, 小噴火(D)各2回, 17日, 小噴火(D)4回, 19日, 小噴火(D)6回, 21日, 小噴火(D)2回, (3月噴火回数, C; 1回, D; 20回)

4月1日, 3日, 小噴火(D)各1回, 6日, 小噴火(C)1回, (D)2回, 7日, 小噴火(D)3回, 8日, 小噴火(D)1回, 16日, 小噴火(D)2回, 17日・21日・24日・30日, 小噴火(D)各1回, (4月噴火回数, C; 1回, D; 14回)

5月3日, 小噴火(D)2回, 19日, 小噴火(D)1回, (5月噴火回数, D; 3回)

6月9日, 27日・28日, 小噴火(D)各1回, (6月噴火回数, D; 3回)

7月4日, 13日・18日, 小噴火(D)各1回, 28日, 小噴火(D)2回, (7月噴火回数, D; 5回)

8月7日, 10日, 小噴火(D)各1回, 計2回,

9月, 活動は認められず。

10月14日, 17日, 小噴火(D)各1回, 計2回,

11月3日, 10日, 12日, 小噴火(D)各1回, 計3回, 12月, 噴火は認められず。

(AVO 噴火回数, 1月; 22回, 2月; 42回, 3月; 19回, 4月; 14回, 5月; 3回, 6月; 3回, 7月; 6回, 8月; 2回, 9月; 0回, 10月; 2回, 11月; 3回, 12月; 0回)

114) 1946年(昭和21年)の活動

1月より9月に至る期間は穏かな状態が続いた(気象要覧, 1946年1月～9月)。

10月29日, 小噴火(D), 08時51分, 灰褐色噴煙中量噴

出、東北東に流れる。山頂付近には少量の降灰があった。

10月30日、小噴火(D)、11時30分、噴煙量少、山頂付近に少量の降灰があった。(気象要覧, 1946年10月)、この2回の噴火はAVOでは記録していない。

11月および12月は穏かな状態が続いた。

115) 1947年(昭和22年)の活動

1月より6月にかけては、時折有色煙を噴くこともあったが噴火とは認められず、静穏な状態が続いた(気象要覧, 1947年1月~6月)。

この間の出来事として、“爆発史集”に次の記事がある。

6月1日、14時20分全山雲で不明なるも小諸町では浅間山の噴煙が多量北東~東北東に流れるのが認められ、追分観測所では同14時6分~17時30分と19時30分の2回に地震計に微動を記録した。音響空振は観測されなかった。とある。

7月6日、小噴火(C)、12時33分頃、朝来浅間山は雲に覆われて不明であったが、12時33分頃「ドーン」という大きな砲声様音をたてて爆発し、ほぼ同時に地震および「ゴーゴー」という小鳴動が観測された。

軽井沢観測所ではこの砲声様音とともに空振があり、ガラス戸が「ブルブル」と瞬時振動し、自記晴雨計が0.4mm上昇し、鳴動は12時45分まで聞こえ12時54分頃雲の切れ間から灰色煙が観測された。この噴煙の流向は不明であって軽井沢町には降灰石はなかった。

この間、12時38分ころに15時34分よりやや小さい程度の爆発があったようであるが、雲のため不明であった。なお同所では、13時16分には雲の切れ間から浅間山の白煙が噴出して、群馬県方面に流れるのが観測された(気象要覧, 1947年7月)。

8月14日、大噴火(B)、12時17分、ドーンという砲声を立てて爆発し、黒灰色煙をモクモクと多量噴出した。この音響は長野県軽井沢・追分・菅平・諏訪郡北谷村および石川県輪島にもきこえ、噴煙は東方および北方にながれ、前橋および山田温泉に降灰があった。

この爆発時には、噴石が山頂付近に落ち、この落石のために山頂から約2km離れた西側山腹の湯の平では山火事(この山火事により湯の平火山観測所の建物は焼失した。飯島, 2002, による。)がおこり、登山者中に9名の死者がでた。

軽井沢(沓掛): 砲声音と同時に空振があり、自記晴雨計には2.0mmの上昇が記録せられ、ゴーゴーという小鳴動が観測された。この鳴動は12時32分まできこ

え、噴煙は約12,000mまで急速に上昇して12時21分頃やや南南東にかたむき、12時22分頃から北東にながれはじめ、12時42分頃褐色稍少量になって次第に減少した。なお、12時23分30秒・12時25分および12時26分30秒の3回に小爆音がきこえ、爆発したようである。このほかに、12時25分30秒頃、12時27分30秒頃、12時30分および12時32分頃の4回に小雷鳴が観測された。山頂付近には相当に噴石が落下し、砂塵のたちのぼるのが観測された。

小諸・岩村田: ドーンという爆発音とともに噴煙・噴石のあがるのが認められ、同時に空振のために窓硝子戸が振動した。

長野: 爆発音を聞いたものがなく、爆発数分後には黒煙が東にながれていた。この噴煙は13時25分頃には菅平の山岳地方に達したらしく一同方面が暗黒になって視程が次第にわるくなった。13時27分頃には松代方面まで帯状にひろがり、13時29分頃には長野市上空一面にひろがりつつ北西に流れていったが、13時31分頃から視程が次第によくはじめて13時53分頃に消散した。

この他に、上諏訪・松本・立山山頂・乗鞍岳・輪島・前橋および本庄における観察状況が記録されている。なお、前橋と本庄においては、微量の降灰が記録されている(気象要覧, 1947年8月)。

注76、この8月14日の噴火では登山者に9名の死者が生じたことが報告されている(気象要覧, 1947年8月)。ところで“爆発史集”によれば、登山者中に11名の死者を出したとある。また死亡者の氏名が報告されているが、その人数は10名である。死亡者名を記入する際に遺漏があったのか、或いは10名が正しいのか判断に苦しむところである。日本活火山総覧(気象庁編, 初版, 1984年, 第2版, 1991年)では死者11名としている。軽井沢町史(1987)によれば、焼死7名うち1名は軽井沢町民とある。資料の明記はない。

9月より年末にかけては時折有色煙を噴くことがあるものの、噴火とは認められず、静穏に推移した(気象要覧, 1947年9月~12月)。

1947年浅間山活動の要約

1月より6月にかけては平穏に終始した。

6月1日には小諸町より浅間山の噴煙が望見された。

7月6日、小噴火(C)1回、

8月14日、大噴火(B)1回、山火事発生、登山者に遭

難者 11 (10) 名を生ずる。

9 月以降, 静穏,

(AVO 噴火回数, 1 月; 0 回, 2 月; 0 回, 3 月; 0 回, 4 月; 0 回, 5 月; 0 回, 6 月 0 回, 7 月; 1 回, 8 月; 1 回, 9 月; 0 回, 10 月; 0 回, 11 月; 0 回, 12 月; 0 回)

116) 1948 年 (昭和 23 年) の活動

年間を通じて穏かな状態が続いた (気象要覧, 1948 年 1 月~12 月)。

(AVO においてもこの年には噴火を確認していない, Minakami *et al.*, 1970)。

117) 1949 年 (昭和 24 年) の活動

1 月 8 日から白煙を稍多量に噴出し, 9 日には高さを増し, 14 時頃より夜半にかけて亜硫酸ガスの臭気が軽井沢でかなり強かった。

2 月には噴煙活動が活発化し, 軽井沢において観測される火山性微動の数も増加した。

3 月上旬には噴煙活動が続いたが 10 日よりは活気を呈し, 微噴火が観測されるようになった (気象要覧, 1949 年 1 月~3 月)。

3 月 10 日, 小噴火 (D), 10 時 20 分~23 時, 雲と霧により山の状態不明, 山頂より東 9 km の国境平付近に降灰。

3 月 13 日, 小噴火 (D), 早朝に活動, 雲と霧で山の状態不明, 山頂北東 9 km の栗平, 北軽井沢付近降灰 (気象要覧, 1949 年 3 月)。

3 月 14 日, 小噴火 (D), 08 時, 山頂 4 km の大窪沢付近降灰?。

3 月 15 日, 小噴火 (D), 朝, 東 3 km の横道付近降灰。小噴火 (D), 10 時 01 分, 黒灰色濃く 200 m 噴出, 東 3 km の横道付近降灰, 続いて 10 時 03 分, 10 時 04 分, 10 時 09 分, 10 時 11 分, 10 時 13 分, 10 時 14 分 黒灰色煙が出た。

小噴火 (D), 10 時 19 分, 濃灰白色噴煙 200 m 噴出, 東 3 km の横道付近降灰, 続いて 10 時 21 分, 10 時 25 分, 10 時 28 分, 10 時 29 分, 10 時 30 分, 10 時 35 分に灰白色煙が出た。

注 77, 3 月 15 日の活動説明中に山頂東 3 km の横道という地名が出てくるが, 軽井沢側登山道において横道と呼ばれる地点は, 峰の茶屋より見ると, 東前掛山の山頂に近い標高 2,300 m 付近で, 登山道路が山頂に対して横に向うように見える場所を指す。同地点は山頂よりの距離が 1 km 前後であり, 東 3 km とある地点は小浅間山

の西麓付近, 行者戻しと呼ばれる地域に当る。

3 月 17 日, 小噴火 (D), 12 時 40 分, 濃黒灰色噴煙 500 m 噴出, 北 5 km 鬼押出方面降灰。

小噴火 (D), 14 時 02 分, 灰色煙 120 m 噴出, 北 5 km 鬼押出方面降灰。

3 月 18 日, 小噴火 (D), 10 時 20 分, 雲と霧のため詳細不明。

小噴火 (D), 11 時, 雲と霧で不明, 東 5 (4) km 峰の茶屋付近降灰, 噴火不見。

3 月 19 日, 小噴火 (D), 朝, 雲と霧で詳細不明, 南東 4 km 大窪沢付近降灰。

3 月 20 日, 小噴火 (D), 05 時 50 分, 濃灰白色噴煙噴出, 山頂近くの南方面に降灰。

小噴火 (D), 18 時 20 分, 濃灰色噴煙噴出, 峰の茶屋付近極少量の降灰。

小噴火 (D), 19 時 50 分~20 時 25 分, 峰の茶屋付近極少量の降灰。

小噴火 (D), 21 時 27 分, 南 2 km 弥陀ヶ城岩 (仏岩) 付近約 30 分間降灰。

3 月 22 日, 小噴火 (D), 16 時 50 分, 濃黒褐色噴煙 250 m 噴出, 約 40 分間噴煙著し。

3 月 23 日, 小噴火 (D), 夜, 峰の茶屋付近降灰。

3 月 24 日, 小噴火 (D), 黒灰色噴煙 600 m 噴出, 噴煙極多量, 東南東 14 km 軽井沢付近降灰。

小噴火 (D), 夜, 南東 8~14 km 千ヶ滝, 軽井沢付近降灰。浅間農場から赤熱噴石が見えたという。

3 月 28 日, 小噴火 (D), 02 時, 雲と霧で不明, 南東 9 km 杓掛付近降灰,

3 月 30 日, 小噴火 (D), 夜, 微噴火 (気象要覧, 1949 年 3 月)。

4 月 8 日, 小噴火 (D), 08 時頃, 微噴火, 濃白煙 350 m に上昇 (気象要覧, 1949 年 4 月)。

4 月 20 日, 小噴火 (D), 16 時頃, 淡灰色噴煙 350 m 上昇, 降灰が小範囲にあった (気象要覧, 1949 年 4 月)。

5 月, 6 月と噴煙活動が続き, 時折は有色煙を噴出した (気象要覧, 1949 年 5 月, 6 月)。

7 月 12 日, 小噴火 (D), 03 時頃, 無音微噴火, 灰色の噴煙東方に流れる “爆発史集”。

7 月 15 日, 小噴火 (D), 02 時頃, 無音微噴火, 雲にて詳細不明。

7 月 30 日, 小噴火 (D), 00 時 30 分頃, 無音小噴火, (夜間のため詳細不明)。

小噴火 (D), 03 時 56 分頃, 無音小噴火, (層雲のため詳細不明)。

- 小噴火 (D), 07 時 39 分頃, 黒褐色煙濃いのを極めて多量に噴出, 雲のため詳細不明.
- 小噴火 (D), 08 時 20 分, 無音微噴火, 雲のため詳細不明.
- 小噴火 (D), 10 時 25 分, 濃い黒褐色煙極めて多量に噴出, 雲のため詳細不明.
- 7 月 31 日, 小噴火 (D), 18 時 40 分頃, 微噴火があったと思われる (気象要覧, 1949 年 7 月).
- 8 月 5 日, 小噴火 (D), 18 時頃, 濃い灰褐色煙多量に噴出, 雲のため詳細不明.
- 8 月 8 日, 小噴火 (D), 17 時 40 分, 濃い灰白色噴煙多量に噴出, 15,50 m 上昇後, 東北東に流れる, 降灰あり (気象要覧, 1949 年 8 月), “爆発史集”.
- 小噴火 (D), 18 時 20 分, 濃い灰白色噴煙多量に噴出, 1,500 m 上昇後, 東北東に流れる. 降灰あり.
- 小噴火 (D), 19 時 15 分, 濃い灰色噴煙極多量に噴出, 1,200 m 上昇, 降灰あり.
- 8 月 10 日, 小噴火 (D), 11 時 40 分, 小噴火, 雲のため詳細不明.
- 8 月 14 日, 小噴火 (D), 17 時 30 分, 無音小噴火, 雲のため詳細不明, 北信一帯に降灰, 被害僅少の見込み “爆発史集”,
- 小噴火 (D), 18 時 46 分, 濃い黒褐色噴煙多量に噴出, 南西に流れる, 降灰あり.
- 小噴火 (D), 18 時 57 分, 濃い黒褐色噴煙中量噴出, 南西に流れる, 降灰あり.
- 小噴火 (D), 19 時 02 分, 濃い黒褐色噴煙多量に噴出, 南西に流れる, 降灰あり.
- 8 月 15 日, 小噴火 (C), 02 時 35 分, 02 時 35 分頃, 高さ 50 m 位の火柱が突然黒煙とともに噴出, シューという爆発音を伴った. それから 10 分後に米粒大の砂礫が雨のように降ってきた (峰の茶屋). 浅間山の北方直線距離 10 km の大笹郵便局で 2 時頃地震があり戸障子が震動し, ゴーゴーという鳴動があったという. 浅間山の西～北にかけて降灰があり, 西方 25 km の青木湖, 北方 17 km の中野あたりまでの地域に降灰が及んだ (気象要覧, 1949 年 8 月).
- 小噴火 (D), 02 時 55 分, 03 時 00 分, 03 時 06 分, 03 時 12 分と噴火があり, とくに 03 時 06 分が大きかった. 噴火時に転倒をして顔面其の他に負傷した者 4 名 (間接的) がでた “爆発史集”.
- 小噴火 (D), 06 時 10 分, 微噴火 “爆発史集”.
- 小噴火 (D), 06 時 18 分, 濃灰褐色噴煙多量に噴出, 700 m 上昇西に流れる.
- 小噴火 (D), 07 時 36 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 上昇西に流れる.
- 小噴火 (D), 07 時 50 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 550 m 上昇西に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 07 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 450 m 上昇西に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 12 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 450 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 18 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 550 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 36 分, 濃灰褐色噴煙稍多量に噴出, 350 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 45 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 400 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 56 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 550 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 17 分, 濃灰褐色噴煙稍多量噴出, 450 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 23 分, 濃灰褐色噴煙稍多量噴出, 500 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 29 分, 濃灰褐色噴煙稍多量噴出, 400 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 33 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 450 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 38 分, 濃灰褐色噴煙稍多量噴出, 450 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 50 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 58 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 14 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 450 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 19 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 27 分, 濃灰褐色噴煙稍多量噴出, 600 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 34 分, 濃灰褐色噴煙稍多量噴出, 550 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 40 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 45 分, 黒褐色噴煙稍多量噴出, 500 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 52 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 上昇西北西に流れる.
- 小噴火 (D), 11 時 01 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 450 m 上昇西北西に流れる. 小噴火 (D), 11 時 09 分, 濃灰

- 褐色噴煙中量噴出，450 m 上昇西北西に流れる。
 小噴火 (D)，11 時 20 分，濃灰褐色噴煙中量噴出，450 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，11 時 27 分，灰褐色噴煙多量噴出，500 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，11 時 33 分，濃灰褐色噴煙中量噴出，500 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，11 時 41 分，濃灰褐色噴煙中量噴出，500 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，11 時 42 分，濃灰褐色噴煙稍多量噴出，500 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，11 時 49 分，濃灰褐色噴煙稍多量噴出，500 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，11 時 53 分，濃灰褐色噴煙稍多量噴出，500 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，11 時 58 分，濃灰褐色噴煙稍多量噴出，500 m 上昇北西に流れる。
 8 月 15 日，小噴火 (D)，12 時 01 分，灰褐色噴煙中量噴出，500 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，12 時 08 分，灰褐色噴煙中量噴出，500 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，12 時 19 分，灰褐色噴煙中量噴出，400 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，12 時 47 分，灰褐色噴煙中量噴出，300 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，12 時 49 分，黒褐色噴煙中量噴出，400 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，13 時 12 分，濃灰褐色噴煙中量噴出，500 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，13 時 17 分，灰褐色噴煙稍多量噴出，500 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，13 時 23 分，灰褐色噴煙稍多量噴出，500 m 上昇北西に流れる。
 小噴火 (D)，13 時 43 分，濃灰褐色噴煙中量噴出，400 m 上昇北北西の流れる。
 小噴火 (D)，13 時 50 分，濃灰褐色噴煙中量噴出，400 m 上昇北北西に流れる。
 小噴火 (D)，13 時 57 分，濃灰褐色噴煙中量噴出，400 m 上昇北北西に流れる。
 小噴火 (D)，14 時 02 分，濃灰褐色噴煙多量噴出，500 m 上昇北北西に流れる。
 小噴火 (D)，14 時 17 分，濃灰褐色噴煙中量噴出，雲で不明。
 小噴火 (D)，14 時 46 分，濃灰褐色噴煙中量噴出，雲で不明。
 小噴火 (D)，15 時 05 分，濃灰褐色噴煙中量噴出，雲で不明 (気象要覧，1949 年 8 月)，“爆発史集”。
 8 月 17 日，小噴火 (D)，夜，雲のため不明。
 8 月 18 日，小噴火 (D)，08 時 29 分，淡灰褐色噴煙中量噴出，1,800 m 上昇南南西に流れる。
 小噴火 (D)，08 時 41 分，灰褐色噴煙中量噴出，850 m 上昇南南西に流れる。
 小噴火 (D)，09 時 19 分，灰褐色噴煙中量噴出，950 m 上昇南南西に流れる。
 小噴火 (D)，09 時 25 分，灰褐色噴煙中量噴出，800 m 上昇南南西に流れる。
 小噴火 (D)，09 時 27 分，灰褐色噴煙中量噴出，800 m 上昇南南西に流れる。
 小噴火 (D)，09 時 50 分，灰褐色噴煙中量噴出，雲のため詳細不明。
 小噴火 (D)，11 時 15 分，灰褐色噴煙中量噴出，1,200 m 上昇東南東に流れる。11 時 22 分山鳴り始める。
 小噴火 (D)，11 時 24 分，淡灰褐色噴煙少量噴出，800 m 上昇南東に流れる。鳴動あり。
 小噴火 (D)，11 時 43 分，灰褐色噴煙中量噴出，1,000 m 上昇東南東に流れる。鳴動あり。
 小噴火 (D)，12 時 33 分，灰褐色噴煙中量噴出，800 m 上昇東南東に流れる。鳴動あり。
 小噴火 (D)，13 時 25 分，黒褐色噴煙中量噴出，900 m 上昇東南東に流れる。鳴動あり。
 小噴火 (D)，13 時 41 分，灰褐色噴煙中量噴出，600 m 上昇東南東に流れる。鳴動あり。14 時 55 分，鳴動止む。
 小噴火 (D)，15 時 48 分，褐白色噴煙中量噴出，900 m 上昇東方に流れる。
 小噴火 (D)，16 時 00 分，灰褐色噴煙中量噴出，1,000 m 上昇東方に流れる。
 小噴火 (D)，16 時 20 分，灰褐色噴煙中量噴出，800 m 上昇東方に流れる。
 小噴火 (D)，16 時 31 分，灰褐色噴煙中量噴出，1,000 m 上昇東方に流れる。
 小噴火 (D)，16 時 38 分，灰褐色噴煙中量噴出，600 m 上昇東方に流れる。
 小噴火 (D)，17 時 01 分，灰褐色噴煙中量噴出，600 m 上昇東方に流れる。
 小噴火 (D)，17 時 04 分，灰褐色噴煙中量噴出，800 m 上昇東方に流れる。
 小噴火 (D)，17 時 35 分，灰褐色噴煙中量噴出，450 m 上昇東方に流れる。
 8 月 20 日，小噴火 (D)，05 時 41 分，灰白色噴煙稍多量

- 噴出, 2,350 m に直上する.
- 小噴火 (D), 05 時 51 分, 灰白色噴煙多量に噴出, 1,150 m に上昇, 追分に僅かの降灰を認めた (気象要覧, 1949 年 8 月), “爆発史集”.
- 8 月 21 日, 小噴火 (D), 06 時 20 分, 灰白色噴煙多量に噴出, 1,500 m 直上する.
- 07 時 13 分降灰始まり, 同 33 分降灰止む.
- 8 月 25 日, 小噴火 (D), 小噴火あり, 雲霧のため詳細不明.
- 9 月 1 日, 小噴火 (D), 16 時 57 分, 濃灰褐色噴煙多量 170 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰砂あり.
- 小噴火 (D), 16 時 58 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 170 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰砂あり.
- 小噴火 (D), 16 時 59 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 170 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰砂あり.
- 小噴火 (D), 17 時 00 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 170 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰砂あり.
- 小噴火 (D), 17 時 02 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 170 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰砂あり.
- 小噴火 (D), 17 時 03 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 170 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰砂あり.
- 小噴火 (D), 17 時 05 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 210 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰砂あり.
- 小噴火 (D), 17 時 06 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 170 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰砂あり. 小噴火続く模様であるが霧のため見えなくなる.
- 小噴火 (D), 17 時 15 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 200 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰あり.
- 小噴火 (D), 17 時 16 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 200 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰あり.
- 小噴火 (D), 17 時 18 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 200 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰あり.
- 小噴火 (D), 17 時 19 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 200 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰あり.
- 小噴火 (D), 17 時 20 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 200 m 上昇, 東北東に流れる. 降灰あり.
- 小噴火 (D), 17 時 39 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 450 m 上昇, 東方に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 40 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 160 m 上昇, 北東に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 40 分 30 秒, 濃灰褐色噴煙稍多量 180 m 上昇, 北東に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 41 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 200 m 上昇, 北東に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 42 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 200 m 上昇, 北東に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 44 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 160 m 上昇, 北東に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 45 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 160 m 上昇, 北東に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 47 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 180 m 上昇, 北北東に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 49 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 150 m 上昇, 北北東に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 50 分, 濃灰褐色噴煙稍多量 100 m 上昇, 北北東に流れる. (気象要覧, 1949 年 9 月), “爆発史集”.
- 9 月 3 日, 大噴火 (B), 07 時 05 分, ドーンという一大砲声音と共に爆発, 昭和 21 年 (22 年の間違い) 8 月以来の初めての有声爆発であった. 軽井沢では戸障子がガタガタと鳴り, ドーンという鳴動と共に濃黒褐色の噴煙が極多量に 8,700 m に上昇した. 07 時 14 分に雷鳴あり, 20 分には灰褐色の噴煙が 2,000 m になり, 小浅間付近に降灰が始まった. 降灰は山の北東 50 km の沼田, 北西 50 km の長野で観測されたが, 中心は山の東北～東にかけて 10 km 位の範囲であった. 爆音の聞えた範囲は大体山を中心に北東～南西に延び, 北西～南東に短い楕円形で長軸 40 km, 短軸 30 km 程度の内聴域と (但し東 80 km の栃木県御厨できこえている) 外聴域が表れた. 外聴域は石川県東大半, 福井市付近, 岐阜, 亀山で山から北西～西～南西方面で距離 160 km の石川県くりから (地名, 俱利伽羅) から 250 km 位の亀山に及んでいる.
- 空振は御厨, 草津, 石川県石動, 大杉等で感じ, 自記気圧計による空振記録は軽井沢+2.0, -0.7 (mm) で前橋+0.6, -0.5 mm だった (気象要覧, 1949 年 9 月).
- 小噴火 (D), 16 時 40 分, 濃灰色噴煙多量 960 m に上昇, 北西に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 20 分, 濃灰色噴煙多量 850 m に上昇, 北西に流れる.
- 9 月 6 日, 小噴火 (D), 08 時 05 分, 濃灰白色噴煙中量 700 m に上昇する.
- 小噴火 (D), 08 時 47 分, 淡灰褐色噴煙中量噴出, 西南西に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 20 分, 淡灰白色噴煙中量 500 m に上昇, 西南西に流れる.
- 9 月 7 日, 小噴火 (D), 03 時 40 分頃, 不詳, 峰の茶屋で報告.
- 小噴火 (D), 05 時 24 分頃, 不詳, 峰の茶屋で報告 “爆発史集”.

- 小噴火 (D), 05 時 50 分, 淡灰白色噴煙中量 650 m に上昇, 南南西に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 12 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出 800 m 直上する.
- 小噴火 (D), 08 時 29 分, 濃灰白色噴煙中量噴出 700 m 直上する.
- 小噴火 (D), 08 時 57 分, 灰白色噴煙中量噴出 1,000 m 直上する.
- 小噴火 (D), 09 時 22 分, 濃灰褐色噴煙多量に噴出, 3,000 m 上昇, 南に流れる. 降灰あり.
- 小噴火 (D), 10 時 22 分, 濃白色煙少量噴出 300 m 直上する.
- 小噴火 (D), 10 時 44 分, 濃白色煙少量噴出 300 m 直上する.
- 小噴火 (D), 13 時 42 分, 灰色噴煙中量噴出 1,300 m 直上する.
- 小噴火 (D), 13 時 50 分, 濃灰色噴煙中量噴出 1,200 m 上昇, 東方に流れる. 小噴火 (D), 14 時 03 分, 灰白色噴煙噴出 1,050 m 上昇, 東方に流れる.
- 9 月 8 日, 小噴火 (D), 05 時 19 分, 淡灰褐色噴煙中量噴出 700 m 直上後南東に流れる.
- 小噴火 (D), 06 時 49 分, 微噴火, 南東に流れる “爆発史集”.
- 小噴火 (D), 06 時 59 分, 無音微噴火.
- 小噴火 (D), 07 時 13 分, 灰白色噴煙 400 m に上昇, 南東に流れる.
- 小噴火 (D), 07 時 19 分, 灰白色噴煙, 南東に流れる.
- 小噴火 (D), 07 時 22 分, 無音微噴火.
- 小噴火 (D), 07 時 50 分, 無音微噴火, 噴煙南東に流れる.
- 小噴火 (D), 07 時 56 分, 無音微噴火, 噴煙南東に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 09 分, 無音微噴火, 噴煙南東に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 13 分, 無音微噴火, 噴煙南東に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 24 分, 無音微噴火, 噴煙東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 46 分, 無音微噴火, 噴煙東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 58 分, 無音微噴火, 噴煙東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 21 分, 無音微噴火, 噴煙東南東に流れる “爆発史集”.
- 小噴火 (D), 09 時 45 分, 灰褐色噴煙噴出, 鳴動 4 秒間 “爆発史集”.
- 小噴火 (D), 12 時 12 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 700 m 直上する.
- 小噴火 (D), 13 時 20 分, 濃灰褐色噴煙少量噴出, 440 m 直上する.
- 小噴火 (D), 13 時 54 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 750 m 直上する.
- 小噴火 (D), 17 時 52 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 900 m 直上後東に流れる. 山頂赤く見える (気象要覧, 1949 年 9 月), “爆発史集”.
- 小噴火 (D), 20 時 16 分, 灰色噴煙中量噴出, 400 m 上昇東南東に流れる. 9 月 9 日, 小噴火 (D), 05 時 13 分, 濃灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる.
- 小噴火 (D), 05 時 40 分, 濃灰色噴煙中量噴出, 東方に流れる.
- 小噴火 (D), 05 時 52 分, 濃灰色噴煙多量に噴出, 500 m 直上する.
- 小噴火 (D), 10 時 02 分, 濃灰色噴煙多量に噴出, 480 m 直上東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 04 分, 濃灰色噴煙多量に噴出, 510 m 東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 25 分, 濃灰色噴煙多量に噴出, 470 m 東北東に流れる.
- 9 月 14 日, 小噴火 (D), 早朝のため詳細不明. 鳥井原方面に微量の降灰あり.
- 9 月 15 日, 小噴火 (D), 06 時 31 分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 1,000 m 北方に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 23 分, 灰色噴煙中量噴出, 650 m 上昇する.
- 小噴火 (D), 10 時 33 分, 灰色噴煙中量噴出, 790 m 上昇する.
- 小噴火 (D), 10 時 52 分, 極淡灰白色噴煙噴出, 700 m 上昇する.
- 小噴火 (D), 12 時 55 分, 灰色噴煙中量噴出, 北東に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 17 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 北北東に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 42 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 760 m 頂上する.
- 9 月 21 日, 13 時 43 分, 大噴火 (B), 一大爆音と共に爆発した. 軽井沢では霧のために見えず不明だが, 小諸では白煙が 10,000 m 以上に上昇したのが望見された. 降灰は群馬県の伊香保, 嬬恋村, 五料などの山の近傍と長野県牧郷で観測され, 空振は自記気圧計で, 軽井沢 (+) 0.6, (-) 0.2 mm 記象あり, 山近傍と御厨と

- 石川県のくりから、別宮等の山の西方 170 km まで空振が観測された。
- 爆音を聞いた内聴域は山の北方 60 km 長野県山岡、長野、野沢、群馬県草津、および御厨一帯で、外聴域は西方 100 km のくりから、中宮、南西の岐阜県美濃、愛知県足助、200 km 位の石川県大聖寺・230 km の福井県愛勝で観測され、東では白河できこえた（気象要覧、1949 年 9 月）。
- 9 月 25 日、小噴火 (D)、04 時 32 分、雲にて山見えず、鳴動あり。
- 小噴火 (D)、05 時 08 分、雲にて山見えず、詳細不明。
- 小噴火 (D)、08 時 28 分、濃灰色噴煙多量に噴出、1,500 m 上り南方に流れる。
- 9 月 26 日、大噴火 (B)、15 時 06 分 30 秒、爆発、濃黒褐色噴煙が極多量 12,000 m の高さまで昇った。空振は軽井沢で 2 分間続き、自記気圧計で +1.7、-0.3 mm 記象し、前橋では +0.2、-0.5 mm 記象した。降灰は軽井沢、宇都宮、小名浜で観測された（気象要覧、1949 年 9 月）。
- 9 月 27 日、小噴火 (D)、16 時 47 分、灰褐色噴煙中量噴出、東北東に流れる。
- 小噴火 (D)、16 時 54 分、灰褐色噴煙少量噴出、210 m 上昇東北東に流れる。
- 小噴火 (D)、16 時 56 分、灰褐色噴煙中量噴出、300 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、16 時 57 分、灰褐色噴煙中量噴出、340 m 上昇東北東に流れる。
- 小噴火 (D)、16 時 58 分、灰褐色噴煙少量噴出、140 m 上昇東北東に流れる。
- 小噴火 (D)、16 時 59 分、灰褐色噴煙中量噴出、280 m 上昇東北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 00 分、濃黒灰色噴煙少量噴出、170 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 08 分、濃黒褐色噴煙噴出、220 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 09 分、黒灰色噴煙噴出、230 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 11 分、濃黒灰色噴煙噴出、300 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 16 分、濃黒灰色噴煙少量噴出、170 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 17 分、濃黒灰色噴煙少量噴出、170 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 18 分、濃黒灰色噴煙少量噴出、170 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 19 分、濃黒褐色噴煙少量噴出、北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 19 分、濃黒褐色噴煙少量噴出、北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 20 分、淡黒褐色噴煙少量噴出、北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 21 分、灰黒色噴煙少量噴出、140 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 21 分、灰黒色噴煙少量噴出、140 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 22 分、灰黒色噴煙少量噴出、140 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 23 分、灰黒色噴煙少量噴出、110 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 24 分、灰黒色噴煙少量噴出、110 m 上昇北東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 25 分、灰黒色噴煙少量噴出、220 m 上昇北東に流れる。
- 9 月 28 日、小噴火 (D)、08 時 41 分、濃灰白色噴煙中量噴出、620 m 東方に流れる。
- 小噴火 (C)、10 時 00 分、09 時 59 分 50 秒に爆発、鳴動があり灰褐色の噴煙 3,000 m に昇り、10 時 8 分頃峰の茶屋付近に降灰が始まった。軽井沢自記気圧計では + - 0.1 mm の記象があった（気象要覧、1949 年 9 月）。
- 小噴火 (D)、10 時 05 分、灰褐色噴煙多量に噴出、1,000 m 上昇東方に流れる。
- 小噴火 (D)、10 時 10 分、灰白色噴煙中量噴出、600 m 上昇東方に流れる。
- 小噴火 (D)、10 時 16 分、灰白色噴煙中量噴出、500 m 上昇東方に流れる。
- 9 月 29 日、小噴火 (D)、06 時 06 分、灰褐色噴煙中量噴出、500 m 上昇東方に流れる。
- 小噴火 (D)、09 時 16 分、灰白色噴煙中量噴出、600 m 上昇東方に流れる。
- 小噴火 (D)、09 時 25 分、灰白色噴煙多量に噴出、600 m 上昇東方に流れる。
- 小噴火 (D)、09 時 42 分、灰白色噴煙中量噴出、600 m 上昇東方に流れる。
- 小噴火 (D)、10 時 50 分、白色噴煙中量噴出、650 m 上昇東方に流れる（気象要覧、1949 年 9 月），“爆発史集”。
- 10 月 2 日、小噴火 (D)、17 時 25 分、濃灰褐色噴煙多量に噴出、900 m に上昇南東に流れる。
- 小噴火 (D)、17 時 46 分、濃灰褐色噴煙多量に噴出、

900 m 上昇南東に流れる。
 10月7日、小噴火 (D)、17時03分、灰色噴煙多量に噴出、700 m 上昇南南東に流れる。
 小噴火 (D)、17時07分、濃灰色噴煙多量に噴出、800 m 上昇南南東に流れる。
 小噴火 (D)、17時08分、濃灰白色噴煙多量噴出、800 m 上昇南南東に流れる。
 小噴火 (D)、17時10分、濃灰白色噴煙多量噴出、800 m 上昇南南東に流れる。
 小噴火 (D)、17時13分、濃灰白色噴煙多量噴出、600 m 上昇南南東に流れる。
 小噴火 (D)、17時20分、濃灰白色噴煙多量噴出、800 m 上昇南南東に流れる。
 小噴火 (D)、17時28分、濃灰白色噴煙多量噴出、700 m 上昇南南東に流れる。
 小噴火 (D)、17時54分、灰白色噴煙多量噴出、1,300 m 直上する。
 小噴火 (D)、19時20分、黒褐色噴煙多量噴出、1,000 m 直上する。
 10月8日、小噴火 (D)、14時35分、黒褐色噴煙多量噴出、1,000 m 直上する。
 小噴火 (D)、14時?分、黒褐色噴煙多量噴出、400 m 直上する。
 10月12日、小噴火 (D)、13時46分、濃灰色噴煙中量噴出、900 m 上昇する。
 10月13日、小噴火 (D)、17時20分、詳細不明。
 10月24日、小噴火 (D)、08時36分、灰色噴煙中量噴出、630 m 上昇する (気象要覧, 1949年10月)。
 11月、全月に亘って噴煙活動が観察されたが噴火と認められる活動はなかった。また時折は鳴動が軽井沢測候所で聞かれた (気象要覧, 1949年11月)。
 12月、全月に亘って平穏であった (気象要覧, 1949年12月)。

注 78, “爆発史集” では 1949 年の記載より噴火の程度の表現として、微噴火という規模が現れる。しかし微噴火と小噴火との間にとくに計量的な規準があって両者が区別されているとは考えられない。微噴火という表現は、峰の茶屋側において使用していたと思う。ところで現在までに噴火の程度としての表現には、大爆発、中爆発、小爆発、大噴火、中噴火、小噴火などがあり、とくに計量的な規準はなく、規模の決定は観察者の感覚的な判断によることが多いと考えられる。水上 (1935c) による A, B, C, D, の分け方は山麓における被害を主とした規準にしている。したがって、時代と共に被害程度が変化

(構造物の強化などが行われれば、被害程度は変わる) すれば規準が変化する恐れがある。噴火の規模を決定するためには、空気圧変化の強さ、噴火地震の規模、噴出物の量等の要素を組み合わせた規準が必要と考えられるが、噴火により、それぞれの要素が変動するので、かなり複雑なものとなろう。

1949 年浅間山活動の要約

1月より2月にかけては噴煙活動だけで噴火は認められなかった。
 3月10日、小噴火 (D) 1回、13日・14日、小噴火 (D) 各1回、15日、小噴火 (D) 3回以上、17日・18日、小噴火 (D) 各2回、19日、小噴火 (D) 1回、20日、小噴火 (D) 4回、22日・23日、小噴火 (D) 各1回、24日、小噴火 (D) 2回、28日・30日、小噴火 (D) 各1回、(3月噴火回数, D; 21回以上)
 4月4日、小噴火 (D) 1回、
 5月、6月は平穏に経過した。
 7月12日・15日、小噴火 (D) 各1回、30日、小噴火 (D) 5回、31日、小噴火 (D) 1回、(7月噴火回数, D; 8回)
 8月5日、小噴火 (D) 1回、8日、小噴火 (D) 3回、10日、小噴火 (D) 1回、14日、小噴火 (D) 4回、15日、小噴火 (C) 1回、(D) 53回、噴火の際にあわてて転倒して負傷した者4名が出た。浅間山の西から北の方角にかけて降灰、17日、
 小噴火 (D) 1回、18日、小噴火 (D) 20回、20日、小噴火 (D) 2回、21日・25日、
 小噴火 (D) 各1回、(8月噴火回数, C; 1回, D; 87回)
 9月1日、小噴火 (D) 23回、3日、大噴火 (B) 1回、内、外聴域出現、小噴火 (D) 2回、6日、小噴火 (D) 3回、7日、小噴火 (D) 12回、8日、小噴火 (D) 20回、9日、小噴火 (D) 6回、14日、小噴火 (D) 1回、15日、小噴火 (D) 7回、21日、大噴火 (B) 1回、内、外聴域出現、25日、小噴火 (D) 3回、26日、大噴火 (B) 1回、東方に降灰、27日、小噴火 (D) 22回、28日、小噴火 (C) 1回、(D) 4回、29日、小噴火 (D) 5回、(9月噴火回数, B; 3回, C; 1回, D; 108回)
 10月2日、小噴火 (D) 2回、7日、小噴火 (D) 9回、12日・13日・24日、小噴火 (D) 各1回、(10月噴火回数, D; 14回)
 11月、12月は噴火は記録されなかった。
 (AVO 噴火回数, 1月; 0回, 2月; 0回, 3月; 20回, 4月; 1回, 5月; 0回, 6月; 1回, 7月; 4回, 8月; 56回, 9月; 41回, 10月; 5回, 11月; 0回, 12月; 0回)

118) 1950年(昭和25年)の活動

1月より6月にかけては噴煙活動のみで平穏であった(気象要覧, 1950年1月~6月).

7月25日21時30分頃には火口付近がうす赤く見えた(火映現象).

8月に入っても穏かだったが15日夜には火口付近が赤く見えた.

9月上旬, 中旬とも噴煙が穏かに噴出していたが, 23日に突然噴火した(気象要覧, 1950年7月~9月).

9月23日, 大噴火(A), 04時37分頃, 一大音響と共に大噴火し, 電光を伴う濃い黒色 煙は極めて多量, 6,000mの高さにまでも達した. 噴火に伴う強力な爆風により軽井沢測候所では, 追分分室および官舎を含めガラス窓などを破壊され, 壁4坪を打ち抜かれた“爆発史集”.

この噴火の際に, 軽井沢ではやや強い鳴動が05時30分頃まで聞こえ, 降灰が05時25分から08時30分まで続き, 硫黄臭が05時から05時30分まで感じられた. この噴火噴煙流路下の軽井沢・前橋・熊谷・宇都宮・筑波山・水戸・秩父・東京の一带にかけて降灰があり, 軽井沢・長野・小諸・飯田・諏訪・前橋・秩父・東京・金沢・福井・敦賀・彦根・岐阜・名古屋・浜松・御前崎では爆音, 軽井沢・長野・前橋・甲府・秩父・東京・宇都宮・筑波山・水戸・鉾子・小名浜・亀山・津では空振があった. また長野・飯田・東京・鉾子・小名浜で囲まれた音響の内聴域と, 金沢・彦根・津・御前崎・岐阜などで囲まれた外聴域とが認められた.

噴石は火口付近では径数m, 東側7合目付近では径約1m, 東方9kmの草軽電鉄沿線長日向(ながひなた)では径約6cm, 東南東約7kmの千ヶ滝, グリーンホテル付近では径約2cmの大きさのものが落下した.

降灰砂は浅間山付近では, 北軽井沢から信越線付近までひろがり, 降灰砂量は火口付近で3~4m積もる程度であり, 軽井沢(沓掛)では約60gr/m², 前橋では約88gr/m², 東京では約1.2gr/m²であった. この噴火のため関東地方の全部, 中部地方の大部分, 奥羽地方の一部に地震を感じ, その最大振幅は軽井沢(沓掛)では, 237 μ , 前橋では160 μ であった. 人身被害は死者1名, 負傷者6名が生じた. また長日向では噴石のため屋根が打ち抜かれ, 火口から10km離れた山麓の信越線沿線では窓ガラスや戸障子がこわれた(気象要覧, 1950年9月).

注79, この噴火による犠牲者は小諸口より山頂を目指した高校生の一行で, 湯の平から山頂に斜めに向う登山道の途中でこの難に遭っている. 噴火に気づき登山道を駆け下りる途中で運悪く噴石が命中して1名の生命を奪った.

注80, 現在でも望見することが出来るが, 浅間山北側火口縁(鬼押し出し, 岩窟ホール付近より良く見える)に存在する巨大な岩石は, この9月23日の噴火の際に放出されたもので当時は大層話題になった. この岩石は全体(2, 3個に割れている)で, その大きさを計測して比重2.5で計算すると3,000トン(2,700トン以上)近い重量があった. この噴石を東京大学地震研究所浅間火山観測所では3,000トン岩と称している. このような巨大な噴石は, 1938年6月7日の噴火の際にも噴出した(1938年6月7日の噴火, 参照).

注81, この9月23日の噴火による浅間山山麓におけるガラス破損状況被害等に関しては, Sakuma (1954), に詳細に報告されている. 同報告による要約を次に記載する.

- (1) 被害は火口からの距離が大きくなるにつれ急にへり, 火口から約18kmが有被害の限界であった.
- (2) 被害は家屋や部落の立地条件に著しく左右され, 火口に直面する位置では被害が大きい一方, 樹木其他の小地物の遮蔽効果が著しいらしく, 火口から10km以内でも被害の軽かった部落もある.
- (3) 被害は家屋の方向の中では火口に直面する方向は著しいが, それ以外の方向にも被害のある例が多い. これは家屋付近の地物による空気波の反射や回折を考えれば大体説明出来る. 又, もっと大きい地形又は噴出時の条件と思われる様な, 広い範囲にわたっての被害方位の偏りがある.
- (4) 被害から直ちに空気波の性質を量的に論ずることは難しいが, 原子爆弾被害の類推から有被害の限界地付近では約 $1\sim 2\times 10^{-2}$ 気圧程度の圧力振幅であったと推定される.

9月25日, 小噴火(C), 05時07分頃, 濃黒灰色煙を多量に4,000mの高さに噴出し, 軽井沢では06時50分から08時40分頃まで降灰があった.

小噴火(D), 07時05分, 微噴火して, 灰褐色噴煙を多量・350mの高さに噴出した(気象要覧, 1950年9月).

10月4日, 大噴火(B), 15時14分頃, 軽井沢測候所で

は降雨中で詳細は判らなかつたが、爆音が2回聞え、約3分間鳴動が聞え、戸障子がかすかに振動した。この噴火で、火口付近には多量の噴石があり、火口の北東9kmの北軽井沢付近ではダイズ大の降石があり、火口の西2.5kmの湯の平では、爆風によって火山館の一部が破壊された。長野では15時14分38秒3に震動を感じ、2分間に巨り空振を感じ戸障子が振動した。降灰は無い。前橋では15時16分爆発音響があり空振を晴雨計、および地震計に感じた。熊谷・東京でも音響を感じ、彦根・岐阜などの狭い範囲で外聴域が現れた(気象要覧, 1950年10月), “爆発史集”。

11月は穏かな状態が続いた。気象要覧(1950)11月, 12月21日, 小噴火(D), 05時05分頃?, 黒褐色噴煙噴出, 低く山に沿い北に流れた。山の北側の吾妻, 栗平方面には少量の降灰があった。噴火時には峰の茶屋で爆発音が2回聞えた。軽井沢測候所から噴火は見えなかつた(気象要覧, 1950年12月)。

1950年浅間山活動の要約

1月より6月にかけては静穏, 7月, 8月には火映現象が観察された。

9月23日, 大噴火(A)1回, 近年稀な強爆発により山麓部で空気波による大きな被害が発生した。登山者に死者1名, 負傷者6名の遭難を生じた。25日, 小噴火(C)1回, (D)1回, (9月噴火回数, 大噴火(A)1回, 小噴火(C), (D)各1回)

10月4日, 大噴火(B)1回,

12月21日, 小噴火(D)1回,
(AVO噴火回数, 1月;0回, 2月;0回, 3月;0回, 4月;0回, 5月;0回, 6月;0回, 7月;0回, 8月;0回, 9月;2回, 10月;2回, 11月;0回, 12月;1回)

119) 1951年(昭和26年)の活動

1月, 静穏であつた(気象要覧, 1951年1月)。

2月6日, 小噴火(D), 09時30分頃から14時40分頃にかけて山頂付近に降灰あり。

2月12日, 小噴火(D), 09時40分灰白色噴煙噴出, 700mで東方に流れる。09時55分頃峰の茶屋に微量の降灰あり。

2月27日, 小噴火(D), 08時22分, 濃灰色噴煙中量噴出, 900mの高度で北東に流れる。降灰ない模様。

小噴火(D), 08時36分, 濃灰色噴煙中量噴出, 700m昇り北東に流れる。降灰はない模様。

小噴火(D), 09時52分, 黒色噴煙少量噴出, 400m昇り北西に流れる。降灰はない模様(気象要覧, 1951年

2月), “爆発史集”。

3月5日, 小噴火(D), 11時38分頃, 濃灰色煙少量噴出, 750m昇り東方に流れる。山頂付近降灰少量(気象要覧, 1951年3月), “爆発史集”。

4月14日, 小噴火(D), 10時03分, 淡灰色噴煙中量噴出, 300mに昇り東方に流れる。山頂付近少量降灰あり。

小噴火(D), 15時30分, 黒灰色噴煙中量噴出, 350mに昇り東方に流れる。山頂付近のみ降灰ある見込み。

4月15日, 小噴火(D), 11時47分, 黒灰色噴煙多量に噴出, 350mに昇り東南東に流れる。

小噴火(D), 15時05分, 黒灰色噴煙中量噴出, 1,800mに昇り東南東に流れる。

4月21日, 小噴火(D), 05時27分, 濃灰白色噴煙中量噴出, 一塊400mに昇り北~北東に流れる(気象要覧, 1951年4月), “爆発史集”。

5月14日, 小噴火(D), 05時15分, 灰白色噴煙多量に噴出, 400mに昇り北北東に流れる。降灰なし(気象要覧, 1951年5月), “爆発史集”。

6月17日, 小噴火(D), 13時31分頃, 褐色噴煙多量に噴出, 1,000mに昇り北北東に流れる。山頂付近に降灰あり(気象要覧, 1951年6月), “爆発史集”。

7月以降年末に至るまで活動は静穏に終始した(気象要覧, 1951年7月~12月)。

1951年浅間山活動の要約

1月, 静穏に終始した。

2月6日・12日, 小噴火(D), 各1回, 27日, 小噴火(D), 3回,

3月5日, 小噴火(D), 1回,

4月14日, 小噴火(D)2回, 15日, 小噴火(D)2回, 21日, 小噴火(D)1回, (4月噴火回数, 小噴火(D)5回)

5月14日, 小噴火(D), 1回,

6月17日, 小噴火(D), 1回,

7月~12月, 静穏に終始した。

(AVO噴火回数, 1月;0回, 2月;1回, 3月;0回, 4月;4回, 5月;1回, 6月;0回, 7月;1回, 8月;0回, 9月;0回, 10月;0回, 11月;0回, 12月;0回)

120) 1952年(昭和27年)の活動

1月より5月にかけては静穏に終始した(気象要覧, 1952年1月~5月)。

6月7日, 小噴火(D), 14時29分, 灰褐色噴煙多量に噴出, 1,200mに昇り東北東に流れる。山頂付近に降灰

あり。

6月13日, 小噴火 (D), 18時33分, 濃褐色噴煙中量噴出, 800mに昇り東北東に流れる。山頂付近降灰あり。
6月14日, 小噴火 (D), 09時46分, 灰白色の噴煙中量噴出, 東方に流れる (信濃毎日記者談)。峰の茶屋では微噴火と確認 (気象要覧, 1952年6月), “爆発史集”。
7月から12月末まで静穏に終始した (気象要覧, 1952年7月~12月)。

注 82, 軽井沢測候所追分分室は大正12年 (1923年) 11月に開設された。開所以来地震観測には固有周期6sec, 基本倍率70-100倍の大森式微動計が使用されていた。この年昭和27年 (1952年) 9月には固有周期1sec, 基本倍率300-350倍の石本式高倍率地震計が併設された。昭和32年8月からは, 臨時として石本式地震計を改造して光学式の3,500倍地震計として使用したことがある (関谷, 1959, による)。

1952年浅間山活動の要約

1月~5月, 静穏状態が続いた。
6月7日・13日・14日, 小噴火 (D) 各1回, (6月噴火回数, 小噴火 (D) 3回)
7月~12月, 静穏状態が続いた。
(AVO噴火回数, 1月;1回, 2月;0回, 3月;0回, 4月;0回, 5月;0回, 6月;1回, 7月;0回, 8月;0回, 9月;0回, 10月;0回, 11月;0回, 12月;0回)

121) 1953年 (昭和28年) の活動

1月より11月にかけて静穏に終始した (気象要覧, 1953年1月~11月)。
12月27日, 小噴火 (D), 13時41分, 灰色噴煙多量に噴出, 200m昇り東方に流れる。峰の茶屋付近微量の降灰あり。
小噴火 (D), 16時45分, 灰色噴煙多量に噴出, 200m昇り東方に流れる。峰の茶屋に降灰なし。
12月28日, 小噴火 (D), 08時00分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 200m昇り東北東に流れる。山頂降灰あり。
12月29日, 小噴火 (D), 08時40分, 濃黒灰色噴煙多量に噴出, 600m昇り東方に流れる。東側降灰認める。
小噴火 (D), 10時23分, 濃黒灰色噴煙多量に噴出, 300m昇り東方に流れる。山頂東側に降灰認める。
12月30日, 小噴火 (D), 20時頃, 夜間, 雲で詳細不明, 21時25分頃まで微量の降灰があった (気象要覧, 1953年12月), “爆発史集”。

1953年浅間山活動の要約

1月~11月, 静穏に終始した。
12月27日, 小噴火 (D) 2回, 28日, 小噴火 (D) 1回, 29日, 小噴火 (D) 2回, 30日, 小噴火 (D) 1回, (12月噴火回数, 小噴火 (D) 6回)
(AVO噴火回数, 1月;0回, 2月;0回, 3月;0回, 4月;0回, 5月;0回, 6月;0回, 7月;0回, 8月;0回, 9月;0回, 10月;0回, 11月;0回, 12月;13回)

122) 1954年 (昭和29年) の活動

1月4日, 小噴火 (D), 15時30分, 黒灰色噴煙噴出, 600m昇り南西に流れる。
1月7日, 小噴火 (D), 15時30分, 黒灰色噴煙噴出, 700m昇り南西に流れる。
小噴火 (D), 15時34分, 黒灰色噴煙噴出, 700m昇り南西に流れる。
1月8日, 小噴火 (D), 06時55分, 山体雲に蔽われて不明, 噴煙南西に流れ, 07時30分~08時まで新道, 旧道, 杳掛に降灰。
小噴火 (D), 09時06分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,600m昇り南西に流れる。
小噴火 (D), 09時23分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 750m昇り南西に流れる。
小噴火 (D), 10時01分, 濃黒褐色噴煙多量噴出, 1,400m昇り南西に流れる。
小噴火 (D), 10時29分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 400m昇り南西に流れる。
小噴火 (D), 11時02分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 200m昇り南西に流れる。
小噴火 (D), 11時33分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,900m昇り南西に流れる。
小噴火 (D), 11時45分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 200m昇り東南東に流れる。
小噴火 (D), 12時22分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 200m昇り東方に流れる。
小噴火 (D), 12時51分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 350m昇り東方に流れる。
小噴火 (D), 12時54分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600m昇り東南東に流れる。
小噴火 (D), 13時01分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 350m昇り東南東に流れる。
小噴火 (D), 13時50分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 250m昇り東南東に流れる。
小噴火 (D), 15時44分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 250m昇り北東に流れる。

- 小噴火 (D), 17 時 02 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 100 m 昇り東方に流れる.
- 1 月 9 日, 小噴火 (D), 07 時 59 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 100 m 昇り北東に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 34 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 100 m 昇り東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 41 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 100 m 昇り東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 06 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東北東に流れる.
- 1 月 10 日, 小噴火 (D), 11 時 19 分頃, 薄褐色噴煙噴出, 東方に流れる.
- 1 月 11 日, 小噴火 (D), 05 時 58 分, 濃黒灰色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東方に流れる. 降灰不明.
- 小噴火 (D), 07 時 58 分, 濃黒灰色噴煙多量噴出, 900 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 11 時 01 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 580 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 11 時 11 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 14 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 450 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 15 時 02 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 200 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 16 時 29 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 昇り東南東に流れる. 千ヶ滝, 旧道付近に降灰あり.
- 小噴火 (D), 17 時 38 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 300 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 30 分頃, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り東南東に流れる. 山頂付近降灰ある模様.
- 1 月 12 日, 小噴火 (C), 10 時 35 分, 無音噴火, 山頂は見えなかったが灰褐色噴煙 4,400 m 上昇, 10 時 45 分~11 時頃千ヶ滝付近栗粒大の降灰あり.
- 小噴火 (D), 11 時 39 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,800 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 13 分, 濃黒褐色噴煙多量噴出, 2,450 m 上昇し東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 45 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 14 時 57 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 04 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 400 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 18 時 42 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東方に流れる.
- 1 月 13 日, 小噴火 (D), 07 時 20 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 100 m 昇り東北東に流れる.
- 1 月 14 日, 小噴火 (D), 07 時 30 分頃, 山体見えず, 08 時頃軽井沢駅付近降灰.
- 1 月 16 日, 小噴火 (D), 07 時 45 分, 灰色噴煙中量噴出, 250 m 昇り東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 08 分, 灰色噴煙中量噴出, 100 m 昇り東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 22 分, 灰色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 45 分, 灰色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 11 時 03 分, 灰色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 12 時 31 分, 灰色噴煙中量噴出, 100 m 昇り東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 43 分, 灰色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 15 時 44 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 2,300 m に上昇東北東に流れる. 峰の茶屋付近に栗粒大の降砂 3 分間続く.
- 小噴火 (D), 17 時 13 分, 灰色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東北東に流れる.
- 1 月 17 日, 小噴火 (D), 11 時 50 分頃, 山体見えず, 12 時頃旧道付近微量降灰.
- 小噴火 (D), 17 時 20 分, 山体見えず, 19 時頃旧道付近に降灰.
- 1 月 18 日, 小噴火 (D), 08 時 10 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東方に流れる.
- 1 月 19 日, 小噴火 (D), 08 時 53 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 01 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 16 時 00 分, 濃灰色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東北東に流れる.
- 小噴火 (D), 16 時 38 分, 灰色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東北東に流れる.
- 1 月 20 日, 小噴火 (D), 12 時 31 分, 濃黒灰色噴煙多量噴出, 1,200 m 上昇東方に流れる. 山頂降灰あり.
- 小噴火 (D), 12 時 58 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 100 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 14 時 10 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 1,100 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 15 時 58 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 350 m

昇り東方に流れる。

小噴火 (D), 16 時 41 分, 黒灰色噴煙多量噴出, 1,100 m 上昇東方に流れる。

1 月 22 日, 小噴火 (D), 14 時 58 分, 濃灰色噴煙中量噴出, 500 m 昇り東方に流れる。

1 月 23 日, 小噴火 (D), 時刻不詳, 桐生に降灰あり (気象要覧, 1954 年 1 月)。

注 83, 1 月中の噴火については爆発史集の記録を用いている。気象要覧には 1 月中の噴火回数として 72 回 (軽井沢) が報告されている。その報告中に 1 月 23 日の桐生における降灰の記事がある。爆発史集には 1 月 23 日の活動記録は無い。

1 月 24 日, 小噴火 (D), 山体見えず, 20 時 20 分~40 分, 杓掛で降灰微量。

1 月 25 日, 小噴火 (D), 山体見えず, 07 時 50 分~08 時 10 分杓掛降灰微量。

1 月 26 日, 小噴火 (D), 16 時 43 分, 濃灰褐色噴煙多量に噴出, 100 m 昇り南東に流れる。

1 月 28 日, 小噴火 (D), 23 時 45 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。

1 月 30 日, 小噴火 (D), 山体見えず, 15 時 20 分~40 分, 旧道付近微量の降灰あり。

小噴火 (D), 山体見えず, 16 時 30 分~17 時 07 分, 旧道付近微量の降灰あり。

1 月 31 日, 小噴火 (D), 03 時 04 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 東南東に流れる。

2 月 (気象要覧, 1954 年 2 月) には以下のように報告されている。

浅間山 全月中に 84 回の噴火が観測された。これらの噴火では黒かつ色~灰色の噴煙が 300~3,000 m の高さまで上がった。ときどき山ろくまで降灰があったが, まれには前橋 (3 日, 11 日), 東京 (15 日), 熊谷 (23 日) でも微量の降灰を観測した。

“爆発史集” による噴火の記事を以下に記載する。

2 月 1 日, 小噴火 (D), 10 時 52 分, 濃黒灰色噴煙多量噴出, 1,200 m 昇り東南東に流れる。

2 月 2 日, 小噴火 (D), 11 時 23 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り東南東に流れる。

2 月 3 日, 小噴火 (D), 08 時 18 分, 濃灰色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東南東に流れる。

小噴火 (D), 13 時 50 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 3,000 m 上昇東南東に流れる。東側山麓に降灰あるを望見, 16 時 5 分~30 分前橋市に微量の降灰。

小噴火 (D), 16 時 42 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 2,000 m 上昇東南東に流れる。16 時 47 分頃東側 4 合目に降灰砂を望見。

小噴火 (D), 17 時 15 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇東南東に流れる。

小噴火 (D), 17 時 42 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東南東に流れる。

2 月 4 日, 小噴火 (D), 05 時 30 分, 灰褐色噴煙東方上空に漂う。

小噴火 (D), 06 時 10 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 600 m 昇り東南東に流れる。

小噴火 (D), 08 時 10 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り南東に流れる。南東側の仏岩及び大窪沢付近に降灰を望見。

小噴火 (D), 09 時 26 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,200 m 上昇南側に傾き仏岩付近より東南東に流れる。

小噴火 (D), 15 時 31 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 山頂雲で噴煙下部不詳だが雲上に噴煙が現れる。2,300 m 程度東方に流れる。

小噴火 (D), 16 時 13 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 1,200 m 上昇東方に流れる。

2 月 5 日, 小噴火 (D), 09 時 59 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 1,600 m 上昇東南東に流れる。

小噴火 (D), 10 時 47 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 700 m 昇り東南東に流れる。

小噴火 (D), 13 時 09 分, 黒褐色噴煙多量噴出, 1,500 m 上昇東南東に流れる。

小噴火 (D), 16 時 19 分, 黒褐色噴煙多量噴出, 1,500 m 上昇南方に流れる。

小噴火 (D), 17 時 13 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇南方に流れる。

小噴火 (D), 18 時 28 分頃, 暗屋で詳細不明, 降灰あり。

小噴火 (D), 20 時 23 分, 暗夜のため詳細不明。

2 月 6 日, 小噴火 (D), 06 時 12 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 上昇南東に流れる。

小噴火 (D), 雲で不明, 離山付近に 09 時 15 分より微量の降灰。

小噴火 (D), 15 時 40 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 800 m に昇り東方に流れる。

小噴火 (D), 17 時 37 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,200 m 上昇東方に流れる。

小噴火 (D), 23 時 23 分, 濃灰褐色噴煙少量噴出, 300 m 昇り東南東に流れる。

2 月 7 日, 小噴火 (D), 08 時 12 分, 濃灰褐色噴煙多量噴

- 出, 1,500 m 上昇東南東に流れる。中腹以上に降灰を認める。
- 小噴火 (D), 10 時 47 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,100 m 上昇東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 11 時 14 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 13 時 39 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,200 m 上昇東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 13 時 58 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 高さ不明東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 17 時 42 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,100 m 上昇東南東に流れる。
- 2 月 8 日, 小噴火 (D), 07 時 11 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 07 時 55 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 09 時 01 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 高さ不明東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 15 時 57 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇東南東に流れる。16 時 10 分軽井沢旧道降灰あり。
- 2 月 9 日, 小噴火 (D), 10 時 58 分, 灰色噴煙多量噴出, 1,200 m 上昇東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 12 時 50 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,500 m 上昇東南東に流れる。12 時 51 分, 5 合目以上降灰始まる。
- 小噴火 (D), 12 時 55 分, 灰色噴煙多量噴出, 800 m 昇り東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 13 時 25 分, 灰色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 13 時 30 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,500 m 上昇東南東に流れる。13 時 33 分, 4 合目以上降灰始まる。
- 小噴火 (D), 14 時 14 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,800 m 上昇東南東に流れる。山頂降灰あり。
- 2 月 10 日, 小噴火 (D), 09 時 22 分, 灰色噴煙中量噴出, 500 m 昇り東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 14 時 51 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 750 m 昇り東南東に流れる。
- 2 月 11 日, 小噴火 (D), 06 時 41 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 700 m 昇り東南東に流れる。鳴動 2 分続く。山頂付近降灰あり。
- 小噴火 (D), 08 時 20 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 昇り東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 09 時 16 分, 灰白色噴煙少量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 35 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 11 時 36 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 3,500 m 上昇東南東に流れる。小浅間上空降灰砂多い模様, 噴煙継続 23 分間。
- 小噴火 (D), 12 時 20 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 3,400 m 上昇東南東に流れる。2 合目以上降灰認めむ。
- 小噴火 (D), 13 時 01 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 13 時 53 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 200 m 昇り東北東に流れる。
- 小噴火 (D), 14 時 58 分, 濃黒褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東北東に流れる。
- 小噴火 (D), 15 時 26 分, 黒褐色噴煙稍多量噴出, 250 m 昇り東方に流れる。
- 2 月 12 日, 小噴火 (D), 15 時 07 分, 灰色噴煙中量噴出, 100 m 昇り東方に流れる。
- 2 月 13 日, 小噴火 (D), 07 時 17 分 30 秒, 灰褐色噴煙多量噴出, 300 m 昇り東北東に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 15 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 11 時 06 分, 濃黒灰色噴煙多量噴出, 1,900 m 上昇東南東に流れる。5 合目付近迄降灰夕立の雨足の如く見える。
- 小噴火 (D), 11 時 18 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 100 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 17 時 03 分, 濃黒灰色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇東方に流れる。5 合目付近迄降灰夕立の雨足の如く見える。
- 小噴火 (D), 17 時 25 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 450 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 時刻不詳, 降雪中で山体見えず, 追分降灰あり。
- 小噴火 (D), 時刻不詳, 降雪中で山体見えず, 追分微量降灰あり。
- 小噴火 (D), 21 時 34 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 150 m 昇り南東に流れる。
- 2 月 14 日, 小噴火 (D), 21 時 46 分, 灰褐色噴煙南東に流れる。小諸にて観測。
- 2 月 15 日, 小噴火 (C), 06 時 23 分, 早朝に見えなかったが噴火があり, 山麓千ヶ滝地区方面に 06 時 30 分降礫あり (分岐付近) また追分では地震計に火山性地震の記録あり, 噴火と推定, 尚噴煙は東京方面に流れ 08 時 30 分頃より 10 時頃までに 1 平方メートル 0.3 gr の

降灰があった（中央気象台地震課火山係調査）。

小噴火（D）、07時15分、灰褐色噴煙南東に流れる。
小諸にて観測。

小噴火（D）、10時20分、濃灰褐色噴煙噴出、500m昇り東南東に流れる。27分までゴーゴーと鳴動あり。

小噴火（D）、14時41分、濃灰褐色噴煙少量噴出、200m昇り東南東に流れる。

小噴火（D）、17時59分、灰褐色噴煙中量噴出、200m昇り東南東に流れる。

2月19日、小噴火（D）、06時22分、濃灰褐色噴煙中量噴出、500m昇り東方に流れる。

小噴火（D）、15時06分、濃灰褐色噴煙多量噴出、1,000m上昇東南東一東方に流れる。

小噴火（D）、16時26分、濃灰褐色噴煙多量噴出、1,400m上昇東南東一東方に流れる。6合目以上降灰を認める。

小噴火（D）、16時48分、濃灰褐色噴煙中量噴出、250m昇り東南東に流れる。

2月21日、小噴火（D）、11時18分、濃灰褐色噴煙稍多量噴出、200m昇り東方に流れる。

2月22日、小噴火（D）、07時35分、濃灰褐色噴煙多量噴出、600m上昇南南東に流れる。

小噴火（D）、14時10分、濃灰褐色噴煙多量噴出、700m昇り南南東に流れる。

2月23日、小噴火（D）、09時27分、濃灰褐色噴煙多量噴出、1,200m上昇東南東に流れる。7合目以上降灰認める。

小噴火（D）、10時34分、濃灰褐色噴煙多量噴出、4,700m上昇東南東一南東に流れる。山頂より小浅間にかけて箒目のように砂灰の降るのを認める。噴煙6分間、（気象要覧による熊谷の降灰はこの噴火によると見られる。）

2月24日、小噴火（D）、12時21分、淡灰褐色噴煙少量噴出、1,000m上昇東方に流れる。

小噴火（D）、13時12分、淡灰褐色噴煙少量噴出、400m昇り東方に流れる。

小噴火（D）、16時24分、濃灰褐色噴煙中量噴出、100m昇り東南東に流れる。

2月26日、小噴火（D）、10時00分、濃灰褐色噴煙多量噴出、400m昇り東方に流れる。

3月（気象要覧、1954年3月）には以下のように報告されている。

浅間山 全月活動し、37回の噴火が観測された。これらの噴火では黒かつ色～灰色の噴煙が200～2,700mの高さに上がり、ときどき山ろくまで降灰があった。

“爆発史集”による噴火の記事を以下に記載する。

3月1日、小噴火（D）、09時14分、灰褐色噴煙稍中量噴出、400m昇り東北東に流れる。

小噴火（D）、10時28分、灰褐色噴煙稍中量噴出、300m昇り東南東に流れる。

小噴火（D）、12時00分、灰褐色噴煙稍中量噴出、600m昇り東南東に流れる。

3月3日、小噴火（D）、時刻不明、山体見えなかったが、2日21時頃より3日8時前降。

小噴火（D）、11時45分、濃灰褐色噴煙多量噴出、1,000m上昇東南東に流れる。6合目以上降灰を認める。

小噴火（D）、12時54分、灰褐色噴煙中量噴出、400m昇り東方に流れる。

小噴火（D）、17時30分、灰褐色噴煙中量噴出、200m昇り東北東に流れる。

3月9日、小噴火（D）、08時52分、灰褐色噴煙中量噴出、400m昇り東方に流れる。

小噴火（D）、13時41分、灰褐色噴煙中量噴出、1,550m上昇東南東に流れる。

3月10日、小噴火（D）、09時11分、灰褐色噴煙中量噴出、400m昇り東方に流れる。

小噴火（D）、13時40分、灰褐色噴煙中量噴出、150m昇り東北東に流れる。

3月14日、小噴火（D）、07時40分、濃灰褐色噴煙多量噴出、700m昇り東方に流れる。3合目以上降灰。

小噴火（D）、11時48分、灰色噴煙中量噴出、300m昇り東方に流れる。

小噴火（D）、12時33分、灰色噴煙中量噴出、300m昇り東方に流れる。

小噴火（D）、12時49分、灰褐色噴煙中量噴出、500m昇り東方に流れる。

3月17日、小噴火（D）、14時29分、濃灰褐色噴煙多量噴出、1,800m上昇東南東に流れる。4合目以上降灰を認める。

小噴火（D）、14時52分、灰色噴煙中量噴出、250m昇り東南東に流れる。

小噴火（D）、18時02分、濃灰褐色噴煙中量噴出、700m昇り当南東に流れる。

3月19日、小噴火（D）、08時10分、灰褐色噴煙中量噴出、600m昇り東方に流れる。

小噴火（D）、11時20分、濃灰褐色噴煙中量噴出、500m昇り東方に流れる。

小噴火（D）、11時26分、灰褐色噴煙中量噴出、300m昇り東方に流れる。

3月21日, 小噴火(D), 13時50分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 1,000m 上昇東南東に流れる.

3月22日, 小噴火(D), 15時39分, 濃黒褐色噴煙多量噴出, 2,700m 上昇東北東に流れる. 5合目以上夕立の雨足のように降灰する.

小噴火(D), 15時59分, 黒褐色噴煙多量噴出, 1,200m 上昇東北東に流れる.

3月23日, 小噴火(D), 07時36分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 900m 昇り東南東に流れる.

小噴火(D), 07時45分, 灰褐色噴煙中量噴出, 600m 昇り東南東に流れる.

小噴火(D), 08時09分, 灰褐色噴煙中量噴出, 800m 昇り東南東に流れる.

小噴火(D), 15時38分, 灰色噴煙中量噴出, 500m 昇り東方に流れる.

3月24日, 小噴火(D), 07時11分, 灰褐色噴煙中量噴出, 600m 昇り東方に流れる.

小噴火(D), 10時36分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,700m 上昇東南東に流れる. 離山の上空まで雨足のごとく降灰砂が見える. 小瀬, 長日向に降灰.

小噴火(D), 16時26分, 濃黒灰色噴煙多量噴出, 2,700m 上昇東南東に流れる. 火口より旧軽井沢まで雨足のように降灰砂あり. 中心は大窪沢, 峰の茶屋の中間を通り千ヶ滝観翠楼通り旧軽井沢通りの線.

小噴火(D), 17時13分, 灰褐色噴煙中量噴出, 500m 昇り東南東に流れる.

3月25日, 小噴火(D), 06時08分, 灰褐色噴煙中量噴出, 1,000m 上昇東南東に流れる. 5合目まで降灰.

小噴火(D), 09時09分, 灰褐色噴煙中量噴出, 400m 昇り東南東に流れる.

小噴火(D), 12時09分, 灰褐色噴煙中量噴出, 1,900m 上昇東南東に流れる.

3月27日, 小噴火(D), 14時19分, 濃黒灰色噴煙多量噴出, 1,500m 上昇東方に流れる. 3合目以上雨足のように降灰するのが見えた.

4月(気象要覧, 1954年4月)には以下のように報告されている.

浅間山 ときどき噴火をくり返し, 全月中に25回の噴火が観測された. いずれも同火山としては小さな噴火で, 爆発音は山ろくの軽井沢まで聞えなかった.

“爆発史集”による噴火の記事を記載する.

4月4日, 小噴火(D), 10時14分, 灰色噴煙中量噴出, 600m 昇り北西に流れる.

小噴火(D), 13時08分, 灰色噴煙中量噴出, 300m 昇り西北西に流れる.

小噴火(D), 時刻不明, 21時以後5日5時までには当所内に降灰あり.

4月8日, 小噴火(D), 14時57分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,000m 上昇東方に流れる. 軽井沢では見えず, 追分所見.

4月11日, 小噴火(D), 05時49分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,000m 上昇東方に流れる. 7合目以上降灰.

4月16日, 小噴火(D), 08時18分, 灰色噴煙中量噴出, 100m 昇り東方に流れる.

4月19日, 小噴火(D), 08時45分, 灰褐色噴煙中量噴出, 100m 昇り東北東に流れる.

小噴火(D), 13時51分, 灰褐色噴煙中量噴出, 100m 昇り東北東に流れる.

4月20日, 小噴火(D), 06時00分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 400m 東方に流れる.

小噴火(D), 16時03分, 濃黒褐色噴煙多量噴出, 1,900m 東方に流れる.

小噴火(D), 16時20分, 濃灰色噴煙多量噴出, 850m 昇り東北東に流れる.

小噴火(D), 17時10分, 濃灰色噴煙多量噴出, 1,000m 上昇東方に流れる.

4月23日, 小噴火(D), 05時54分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,000m 上昇西方に流れる.

小噴火(D), 15時13分, 灰褐色噴煙中量噴出, 700m 昇り北北東に流れる.

4月24日, 小噴火(D), 12時14分, 灰色噴煙中量噴出, 400m 昇り東方に流れる.

4月25日, 小噴火(D), 09時30分, 灰色噴煙中量噴出, 100m 昇り東北東に流れる.

4月26日, 小噴火(D), 08時00分, 灰色噴煙中量噴出, 150m 昇り北東に流れる.

4月28日, 小噴火(D), 05時25分, 灰色噴煙多量噴出, 700m 昇り東南東に流れる.

小噴火(D), 08時01分, 濃灰色噴煙多量噴出, 2,000m 上昇東南東に流れる. 3合目以上に降灰を認める.

小噴火(D), 10時59分, 灰褐色噴煙中量噴出, 200m 昇り東方に流れる.

小噴火(D), 11時07分, 灰褐色噴煙中量噴出, 250m 昇り東方に流れる.

小噴火(D), 12時15分, 灰色噴煙中量噴出, 140m 昇り東南東に流れる.

小噴火(D), 16時56分, 灰褐色噴煙多量噴出, 800m 昇り東方に流れる.

注84, “爆発史集”表示の備考欄に, 次の様な現象があっ

たことが記載されている。

“昨夜（備考の書かれている位置より考えて4月27日のことと考えられる）は噴火ないが、19時20分頃より夜半過ぎまで、火焰山頂を色どり時々弱くなったり強くなったり（約1分の周期あり火口上80m位）する。20時頃は一時かなり強くなった。”

このような現象は、浅間山が小噴火を頻発するような活動の形態を示す場合に見られることが多い。上昇したマグマが、火口内において単数、まれには複数の火孔で小活動を行っていると考えられている。ときには噴石が火口外に飛び出す場合もあるが、この時の活動はそれほど大きくないのであろう。火焰というのは噴煙に活動が映りあかかも火の柱のように望見されることであらう。火山ガスが燃えているわけではない。

4月30日、小噴火(D)、16時48分、灰褐色噴煙多量噴出、1,000m上昇東南東に流れる。山頂付近微量の降灰あり。

5月（気象要覧、1954年5月）には以下のように報告されている。

浅間山 全月中に約26回の噴火が観測され、ときどき山ろくまで降灰があった。いずれの噴火でも軽井沢測候所では爆発音は聞かれなかった。同火山は常時白～灰白煙を50～100mの高さにあげていた。

“爆発史集”による噴火記事を記載する。

5月2日、小噴火(D)、14時29分、濃黒灰色噴煙多量噴出、1,400m上昇東方から東南東に流れる。雨足のよう千ヶ滝、離山方向降灰が見えた。

5月8日、小噴火(D)、時刻不詳、7日21時以後8日5時前小規模の降灰あり。

小噴火(D)、08時35分、灰褐色噴煙多量噴出、600m上昇南東に流れる。

小噴火(D)、14時28分、灰褐色噴煙中量噴出、500m上昇東方に流れる。

小噴火(D)、17時41分、灰褐色噴煙中量噴出、300m上昇東方に流れる。

5月12日、小噴火(D)、06時35分、灰褐色噴煙中量噴出、700m上昇東南東に流れる。

小噴火(D)、09時38分、灰褐色噴煙中量噴出、1,100m上昇東方に流れる。

小噴火(D)、19時30分、灰褐色噴煙中量噴出、300m上昇南東に流れる。

5月13日、小噴火(D)、10時07分、灰褐色噴煙中量噴出、600m上昇東方に流れる。

小噴火(D)、10時41分、灰褐色噴煙中量噴出、400m

上昇東方に流れる。

小噴火(D)、11時37分、灰褐色噴煙中量噴出、900m上昇東方に流れる。

小噴火(D)、12時33分、灰褐色噴煙中量噴出、500m上昇東方に流れる。

5月15日、小噴火(D)、10時25分、灰褐色噴煙中量噴出、500m上昇南方に流れる。

小噴火(D)、14時30分、灰褐色噴煙中量噴出、高さ不詳南方に流れる。

5月18日、小噴火(D)、10時17分、濃灰褐色噴煙中量噴出、1,400m上昇東方に流れる。8合目付近まで降灰するを望見。

小噴火(D)、11時00分、濃灰褐色噴煙中量噴出、1,400m上昇東方に流れる。6合目付近でも降灰するのを望見。

5月19日、小噴火(D)、14時59分、濃灰褐色噴煙多量噴出、1,000m上昇東方に流れる。

5月24日、小噴火(D)、06時03分、灰褐色噴煙中量噴出、400m上昇東方に流れる。

小噴火(D)、08時30分、灰褐色噴煙中量噴出、200m上昇東方に流れる。5月26日、小噴火(D)、08時40分、灰褐色噴煙中量噴出、400m上昇南東に流れる。

5月28日、小噴火(D)、09時26分、濃灰褐色噴煙中量噴出、800m上昇南南西に流れる。

小噴火(D)、17時00分、灰褐色噴煙中量噴出、500m上昇南西に流れる。

5月29日、小噴火(D)、05時55分、灰褐色噴煙中量噴出、600m上昇南西に流れる。

小噴火(D)、08時58分、灰褐色噴煙中量噴出、1,000m上昇東方に流れる。

6月（気象要覧、1954年6月）には以下のように報告されている。

浅間山 全月中に軽井沢測候所では約10回の噴火を観測した。いずれも爆発音は山ろくの軽井沢まで聞えなかった。24日09時24分の噴火はやや大きなもので、火口の南東170kmの千葉県木更津市まで降灰があった。

“爆発史集”による噴火記事を記載する。

6月5日、小噴火(D)、07時32分、灰色噴煙中量噴出、100m上昇東南東に流れる。

6月12日、小噴火(D)、13時37分、灰色噴煙中量噴出、200m上昇東方に流れる。

6月16日、小噴火(D)、不明、15日21時より16日05時前、この間降灰あり。

6月19日、小噴火(D)、06時30分、灰色噴煙中量噴出、80m上昇東北東に流れる。

- 小噴火 (D), 08 時 08 分, 灰色噴煙中量噴出, 80 m 昇り東北東に流れる.
- 6 月 21 日, 小噴火 (D), 17 時 07 分, 灰色噴煙中量噴出, 600 m 昇り東北東に流れる.
- 6 月 24 日, 小噴火 (D), 06 時 24 分~09 時 40 分, 濃霧のため不明なるも噴煙南に流れ, 測候所に 8.6 gr/m² の降灰あり, 09 時 37 分急に北の空が暗くなる. 10 時より 10 時 26 分まで降灰あり. 硫黄臭 10 時 05 分~11 時 30 分.
測候所は霧の為, 峰の茶屋に連絡, 噴火時刻は 09 時 24 分より 09 時 40 分まで続き噴煙は高さ 500 m 南に流れた由, また東京中央気象台の調査によれば, 東京に 12 時頃約 1 時間に亘って降灰, 下仁田付近 09 時 50 分頃より 20~30 分, 秩父 12 時から約 10 分間降灰, 木更津 12 時 30 分過ぎ, 横浜 14 時~15 時頃まで降灰があった.
小噴火 (D), 13 時 50 分, 14 時まで降灰あり, 48 gr/m² 軽井沢測候所.
- 6 月 25 日, 小噴火 (D), 14 時 57 分前, 詳細不明, 降灰微量.
7 月 (気象要覧, 1954 年 7 月) には以下のように報告されている.
浅間山 小爆発が全月を通じて約 20 回軽井沢から観測された. 爆発時には灰色または灰白色の噴煙が 100~700 m の高さにあがり, 山ろくまで降灰をもたらしたこともたびたびあったが, 山ろくでは爆発音は聞えなかった. 静穏時には白色~灰白色の噴煙が約 100 m の高さにあがった.
“爆発史集” による噴火記事を記載する.
- 7 月 2 日, 小噴火 (D), 17 時 28 分頃, 灰褐色噴煙少量噴出, 高さ不明東方に流れる.
小噴火 (D), 17 時 50 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 700 m 昇り東方に流れる.
- 7 月 3 日, 小噴火 (D), 12 時 00 分頃, 灰白色噴煙多量噴出, 300 m 昇り西方に流れる.
- 7 月 5 日, 小噴火 (D), 05 時 40 分, 灰白色噴煙多量噴出, 300 m 昇り西方に流れる.
- 7 月 7 日, 小噴火 (D), 07 時 20 分頃, 雲で見えなかったが, 07 時以後 08 時前に降灰あり. 1.6 gr/m².
- 7 月 22 日, 小噴火 (D), 05 時 30 分, 灰白色噴煙中量噴出, 300 m 昇り西南西に流れる.
小噴火 (D), 06 時 00 分, 灰色噴煙中量噴出, 300 m 昇り西南西に流れる.
小噴火 (D), 07 時 10 分, 灰色噴煙稍多量噴出, 300 m 昇り西南西に流れる.
- 小噴火 (D), 07 時 20 分, 灰白色噴煙多量噴出, 300 m 昇り西南西に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 15 分, 灰色噴煙中量噴出, 300 m 昇り西南西に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 49 分, 灰色噴煙中量噴出, 300 m 昇り西南西に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 45 分, 灰色噴煙中量噴出, 300 m 昇り西南西に流れる.
- 7 月 23 日, 小噴火 (D), 終日見えず, 07 時 05 分~15 分降灰, 2.0 gr/m².
小噴火 (D), 08 時頃推定, 08 時 12 分~10 時, 降灰, 5.6 gr/m².
小噴火 (D), 14 時 20 分頃, 降灰, 0.4 gr/m².
- 7 月 26 日, 小噴火 (D), 10 時 33 分, 淡灰色噴煙少量噴出, 100 m 昇る.
- 7 月 27 日, 小噴火 (D), 13 時 37 分, 灰色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東方に流れる.
小噴火 (D), 14 時 07 分, 灰色噴煙少量噴出, 100 m 昇り東方に流れる.
小噴火 (D), 14 時 29 分, 灰色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東方に流れる.
小噴火 (D), 15 時 44 分, 灰色噴煙中量噴出, 100 m 昇り東北東に流れる.
- 8 月 (気象要覧, 1954 年 8 月) と “爆発史集” により噴火記事を記載する.
- 8 月 2 日, 小噴火 (D), 19 時 30 分, 茶褐色噴煙少量噴出, 100 m 昇り北方に流れる.
- 8 月 5 日, 小噴火 (D), 山体不明, 12 時 20 分頃軽井沢町旧道に降灰.
- 8 月 16 日, 小噴火 (D), 10 時 00 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 600 m 昇り北北西に流れる.
小噴火 (D), 13 時 05 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,600 m 上昇北西に流れる.
- 8 月 20 日, 小噴火 (D), 17 時 04 分, 淡灰色噴煙少量噴出, 150 m 昇り東方に流れる.
小噴火 (D), 18 時 30 分, 淡灰色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東北東に流れる.
- 8 月 28 日, 小噴火 (D), 06 時 30 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り北東に流れる.
9 月, 浅間山は 6 日 17 時 59 分噴煙を 8,000 m にあげて爆発した. この爆発の音響は山麓軽井沢で聞え, 火山灰が火口から北東山麓にかけて降った (気象要覧, 1954 年 9 月).
- 9 月 6 日, 大噴火 (B), 17 時 59 分 16 秒頃, 「ドーン」とような音と鳴動ゴーゴーと 2 分 30 秒間くらい続き,

空振のため硝子戸が振動する。爆発の際は全山層雲に覆われて詳細不明だが、雲間より噴煙先端が望みできた。黒褐色の噴煙濃く多量 8,000 m に上昇、北北東に流れる。地震計最大振幅（東西動）37 ミクロン、自記気圧計には 2.2 mm の上昇があった“爆発史集”。

観測所職員の踏査報告によれば、山頂周辺には多少噴石があり、東大の牙山観測所の付近までも、少ないが噴石が飛んでいた。降灰砂は峰の茶屋と北軽井沢駅を結ぶ線が東の境界線として北東方に分布している“爆発史集”。

10 月、噴煙または噴気活動を続けたが噴火はなかった（気象要覧、1954 年 10 月）。

11 月（気象要覧、1954 年 11 月）によれば、6 回の噴火が表示されている。

“爆発史集”による噴火記事を以下に記載する。

11 月 2 日、小噴火 (D)、13 時 45 分、濃灰色噴煙中量噴出、400 m 昇り東方に流れる。

11 月 4 日、小噴火 (D)、13 時 50 分、灰色噴煙多量噴出、南南東に流れる。

11 月 9 日、小噴火 (D)、18 時 51 分、噴煙多量噴出、東方に流れる。

11 月 17 日、小噴火 (D)、07 時 59 分、灰褐色噴煙多量噴出、400 m 昇り東方に流れる。

11 月 23 日、小噴火 (D)、08 時 12 分、灰褐色噴煙中量噴出、300 m 昇り東北東に流れる。

11 月 24 日、小噴火 (D)、09 時 58 分、灰褐色噴煙中量噴出、400 m 昇り東北東に流れる。

12 月（気象要覧、1954 年 12 月）によれば、3 回の噴火が認められている。

“爆発史集”による噴火記事を記載する。

12 月 4 日、小噴火 (D)、09 時 50 分頃、詳細不明、松井田より連絡あり。

小噴火 (D)、11 時 34 分、灰色噴煙中量噴出、650 m 昇り東方に流れる。

12 月 29 日、小噴火 (D)、13 時 25 分、灰色噴煙中量噴出、500 m 昇り東方に流れる。

1954 年浅間山活動の要約

1 月 4 日、小噴火 (D) 1 回、7 日、小噴火 (D) 2 回、8 日、小噴火 (D) 15 回、9 日、小噴火 (D) 4 回、10 日、小噴火 (D) 1 回、11 日、小噴火 (D) 9 回、12 日、小噴火 (C) 1 回、(D) 6 回、13 日・14 日、小噴火 (D) 各 1 回、16 日、小噴火 (D) 9 回、17 日、小噴火 (D) 2 回、18 日、小噴火 (D) 1 回、19 日、小噴火 (D) 4 回、20 日、小噴火 (D) 5 回、22 日・23 日・24 日・25

日・26 日・28 日、小噴火 (D) 各 1 回、30 日、小噴火 (D) 2 回、31 日、小噴火 (D) 1 回、(1 月噴火回数、小噴火 (C) 1 回、(D) 73 回)

2 月 1 日・2 日、小噴火 (D) 各 1 回、3 日・4 日、小噴火 (D) 各 5 回、5 日、小噴火 (D) 7 回、6 日、小噴火 (D) 5 回、7 日、小噴火 (D) 6 回、8 日、小噴火 (D) 4 回、9 日、小噴火 (D) 6 回、10 日、小噴火 (D) 2 回、11 日、小噴火 (D) 10 回、12 日、小噴火 (D) 1 回、13 日、小噴火 (D) 9 回、14 日、小噴火 (D) 1 回、15 日、小噴火 (C) 1 回、(D) 4 回、19 日、小噴火 (D) 4 回、21 日・22 日、小噴火 (D) 各 1 回、23 日、小噴火 (D) 2 回、24 日、小噴火 (D) 3 回、26 日、小噴火 (D) 1 回、(2 月噴火回数、小噴火 (C) 1 回、(D) 79 回)

3 月 1 日、小噴火 (D) 3 回、3 日、小噴火 (D) 4 回、9 日、小噴火 (D) 2 回、10 日、小噴火 (D) 2 回、14 日、小噴火 (D) 4 回、17 日、小噴火 (D) 3 回、19 日、小噴火 (D) 3 回、21 日、小噴火 (D) 1 回、22 日、小噴火 (D) 2 回、23 日・24 日、小噴火 (D) 各 4 回、25 日、小噴火 (D) 3 回、27 日、小噴火 (D) 1 回、(3 月噴火回数、小噴火 (D) 36 回)

4 月 4 日、小噴火 (D) 3 回、8 日・11 日・16 日、小噴火 (D) 各 1 回、19 日、小噴火 (D) 2 回、20 日、小噴火 (D) 4 回、23 日、小噴火 (D) 2 回、24 日・25 日・26 日、小噴火 (D) 各 1 回、28 日、小噴火 (D) 6 回、30 日、小噴火 (D) 1 回、(4 月噴火回数、小噴火 (D) 24 回)

5 月 2 日、小噴火 (D) 1 回、8 日、小噴火 (D) 4 回、12 日、小噴火 (D) 3 回、13 日、小噴火 (D) 4 回、15 日・18 日、小噴火 (D) 各 2 回、19 日、小噴火 (D) 1 回、24 日、小噴火 (D) 2 回、26 日、小噴火 (D) 1 回、28 日・29 日、小噴火 (D) 各 2 回、(5 月噴火回数、小噴火 (D) 24 回)

6 月 5 日・12 日・16 日、小噴火 (D) 各 1 回、19 日、小噴火 (D) 2 回、21 日、小噴火 (D) 1 回、24 日、小噴火 (D) 2 回、東京、木更津に降灰、25 日、小噴火 (D) 1 回、(6 月噴火回数、小噴火 (D) 9 回)

7 月 2 日、小噴火 (D) 2 回、3 日・5 日・7 日、小噴火 (D) 各 1 回、22 日、小噴火 (D) 7 回、23 日、小噴火 (D) 3 回、26 日、小噴火 (D) 1 回、27 日、小噴火 (D) 4 回、(7 月噴火回数、小噴火 (D) 20 回)

8 月 2 日・5 日、小噴火 (D) 各 1 回、16 日・20 日、小噴火 (D) 各 2 回、28 日、小噴火 (D) 1 回、(8 月噴火回数、小噴火 (D) 7 回)

9 月 6 日、大噴火 (B)、爆発音山麓に聞える。北東山麓降灰あり。

10月、噴火活動を認めず。

11月2日・4日・9日・17日・23日・24日、小噴火(D)各1回、

12月4日、小噴火(D)2回、29日、小噴火(D)1回、(AVO噴火回数、1月;85回、2月;76回、3月;38回、4月;25回、5月;34回、6月;25回、7月;24回、8月;12回、9月;1回、10月;0回、11月;3回、12月;1回)

123) 1955年(昭和30年)の活動

1月6日、小噴火(D)、17時24分、灰褐色噴煙中量噴出、約800m昇り東南東に流れる。その他の日は穏かであった(気象要覧、1955年1月)、“爆発史集”。

2月10日、小噴火(D)、14時40分、灰褐色噴煙中量噴出、高さ不明、東方に流れる(気象要覧、1955年2月)、“爆発史集”。

2月19日、小噴火(D)、09時18分、灰色噴煙中量噴出、500m昇り東北東に流れる(気象要覧、1955年2月)、“爆発史集”。

3月12日、小噴火(D)、16時13分、灰色噴煙中量噴出、200m昇り北東に流れる。

3月16日、小噴火(D)、16時34分、灰褐色噴煙多量噴出、500m昇り東北東に流れる。山頂付近に降灰(気象要覧、1955年3月)、“爆発史集”。

4月5日、小噴火(D)、08時16分、灰褐色噴煙多量噴出、高さ不詳南南東に流れる。
小噴火(D)、20時25分、濃灰褐色噴煙中量噴出、700m昇り東南東に流れる。

4月6日、小噴火(D)、11時25分、濃茶褐色噴煙少量噴出、500m昇り東方に流れる。

4月7日、小噴火(D)、12時29分、灰色噴煙中量噴出、500m昇り北東に流れる。

4月8日、小噴火(D)、08時14分、灰色噴煙中量噴出、400m昇り北東に流れる。

小噴火(D)、10時53分、濃灰褐色噴煙多量噴出、1,200m上昇東方に流れる。山頂より東側雨足の如く降灰(気象要覧、1955年4月)、“爆発史集”。

小噴火(D)、12時40分、濃灰褐色噴煙中量噴出、700m昇り東方に流れる。

小噴火(D)、16時43分、濃灰褐色噴煙中量噴出、400m昇り東北東に流れる。

4月9日、小噴火(D)、07時25分、濃灰褐色噴煙中量噴出、1,200m上昇南方に流れる(気象要覧、1955年4月)、“爆発史集”。

小噴火(D)、09時28分、濃灰褐色噴煙中量噴出、1,200m上昇南方に流れる。

4月12日、小噴火(D)、08時50分、濃灰褐色噴煙少量噴出、700m昇り東方に流れる。

小噴火(D)、15時53分、淡灰色噴煙少量噴出、300m昇り北東に流れる。

小噴火(D)、16時34分、淡灰色噴煙少量噴出、300m昇り北東に流れる。

小噴火(D)、18時16分、灰褐色噴煙少量噴出、600m昇り北東に流れる。

4月13日、小噴火(D)、09時05分、灰色噴煙少量噴出、300m昇り東方に流れる。

小噴火(D)、16時00分、灰褐色噴煙少量噴出、400m昇り東北東に流れる。

4月28日、小噴火(D)、02時51分、詳細不明、岩村田でドーンという爆発音を聞き噴煙の立ち昇るのを見たという(気象要覧、1955年4月)、“爆発史集”。

小噴火(D)、08時05分、濃灰褐色噴煙少量噴出、300m昇り北東に流れる。

小噴火(D)、08時33分、濃灰褐色噴煙少量噴出、300m昇り北東に流れる。

小噴火(D)、17時47分、濃灰褐色噴煙多量噴出、2,000m上昇東方に流れる。

噴火後間もなく雲により見えなくなる。5合目以上降灰ある模様。

小噴火(D)、18時55分、濃灰褐色噴煙多量上昇、1,500m上昇東南東に流れる。5合目以上降灰ある模様(気象要覧、1955年4月)、“爆発史集”。

4月30日、小噴火(D)、08時10分、灰白色噴煙少量噴出、500m昇り東方に流れる。

小噴火(D)、09時57分、灰色噴煙少量噴出、300m昇り東方に流れる。

5月9日、小噴火(D)、07時34分、灰褐色噴煙少量噴出、400m昇り東方に流れる。

5月11日、小噴火(D)、05時05分、灰色噴煙中量噴出、300m昇り北東に流れる。

小噴火(D)、08時04分、濃灰褐色噴煙中量噴出、400m昇り東方に流れる。

5月14日、小噴火(D)、05時34分、灰褐色噴煙多量噴出、2,500m上昇東南東に流れる。06時20分~06時40分頃迄微量の降灰(杓掛)あり“爆発史集”。

5月15日、小噴火(D)、18時42分、灰褐色噴煙中量噴出、800m昇り東方に流れる。

5月21日、小噴火(D)、09時32分、淡灰色噴煙少量噴出、500m昇り東方に流れる。

小噴火(D)、11時47分、淡灰色噴煙少量噴出、400m昇り東北東に流れる。

5月23日, 小噴火(D), 16時39分, 灰白色噴煙中量噴出, 400m 昇り東方に流れる.

5月29日, 小噴火(D), 08時44分, 濃灰白色噴煙中量噴出, 300m 昇り東方に流れる(気象要覧, 1955年5月), “爆発史集”.

6月1日, 小噴火(D), 07時14分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 400m 昇り東方に流れる. それに続き約39回の小噴火が続発した(気象要覧, 1955年6月).

6月5日, 小噴火(D), 08時24分, 灰色噴煙中量噴出, 800m 昇り南東に流れる.

小噴火(D), 09時58分, 灰褐色噴煙中量噴出, 1,400m 上昇南東に流れる.

小噴火(D), 11時42分, 灰色噴煙中量噴出, 800m 昇り南東に流れる.

小噴火(D), 13時頃, 灰色噴煙中量噴出, 800m 昇り南東に流れる(気象要覧, 1955年6月), “爆発史集”.

6月11日, 大噴火(B), 19時46分, 終日山は見えなかった. 19時46分, 近くの砲声のようなドーンという音と一緒に空振があり, 人々は大部分戸外に出る程度であったが, 被害は無かった. 軽井沢測候所の観測によれば, 約3分間にわたって鳴動が聞かれ, 松代, 追分, 秩父, 前橋, 宇都宮でかこまれた内聴域と, 金沢, 福井, 敦賀, 彦根, 名古屋, 伊良湖でかこまれた外聴域とが現れ, 空振は軽井沢測候所(自記気圧計に2.2mm), 追分分室(+3.0mm, -0.2mm), 金沢測候所(微圧計に+-2mm)で記録された. また, この噴火による火山性地震は, 長野, 松代, 松本, 追分, 前橋, 宇都宮, 熊谷, 秩父, 甲府, 船津, 東京で記録された. 火口付近にはたくさんの火山弾が放出され, 直径約4mのものが火口から約1kmの距離まで飛ばされ, 降灰は北東山ろくに多かったが, 被害はなかった(気象要覧, 1955年6月), “爆発史集”.

7月13日, 小噴火(D), 09時25分, 灰色噴煙を1,000mの高さに噴出した. 7月における活動はこの1回である(気象要覧, 1955年7月).

8月以降年末12月までの期間, 浅間山には噴火と認識できるような活動は発生しなかった(気象要覧, 1955年8月~12月).

1955年浅間山活動の要約

1月6日, 小噴火(D) 1回,

2月10日・19日, 小噴火(D) 各1回,

3月12日・16日, 小噴火(D) 各1回,

4月5日, 小噴火(D) 2回, 7日, 小噴火(D) 1回,

8日, 小噴火(D) 4回, 9日, 小噴火(D) 2回, 12日,

小噴火(D) 4回, 13日, 小噴火(D) 2回, 28日, 小噴火(D) 5回, 30日, 小噴火(D) 2回, (4月噴火回数, 小噴火(D) 22回)

5月9日, 小噴火(D) 1回, 11日, 小噴火(D) 2回, 14日・15日, 小噴火(D) 各1回, 21日, 小噴火(D) 2回, 23日・29日, 小噴火(D) 各1回, (5月噴火回数, 小噴火(D) 9回)

6月1日, 小噴火(D), 1回, それに続き小噴火が39回連続した. 6月5日, 小噴火(D) 4回, 11日, 大噴火(B) 1回, 内外聴域出現, 被害なし. (6月噴火回数, 大噴火(B) 1回, 小噴火(D) 小噴火(D) 5回, +小噴火39回)

7月13日, 小噴火(D) 1回,

8月~12月, 噴火なし.

(AVO 噴火回数, 1月; 1回, 2月; 2回, 3月; 2回, 4月; 24回, 5月; 10回, 6月; 45回, 7月; 1回, 8月; 0回, 9月; 0回, 10月; 0回, 11月; 0回, 12月; 0回)

注85, 1954年の連続噴火に続き1955年7月までの活動の間, 浅間山の地震観測について大きな進歩があった. 東京大学地震研究所浅間火山観測所では, 1954年の試験的観測に続き1955年には遠隔記録を始めて実用化し, 群列方式観測のさきがけとなった. この点について, 1967年刊行の地震20巻記念特集号の第3篇, 観測および実験に基づく研究, のうち遠隔記録の筆者宮村撰三は次のように述べている.

“地震計換振器の電氣的出力をそのまま電線で記録装置までつたえることは, 出力が微弱なばあいはかならずしも容易ではない. 1950年代初期にはシールドキャプタイヤをもちいて数kmの観測用線を架設して観測することは研究者にとって経済的労力的に困難であった. 特に臨時的観測のばあいは無理とおもわれた. 微小地震観測のような増幅器をつかった高感度観測におけるシールドキャプタイヤによる1km以上の伝送は, 浅間山米軍演習地接收反対と関連して, 1953年浅間山西麓で表俊一郎が実験的におこなったのが最初で, 当時あまり例がなかった. ただ土地の乾燥した火山地帯では, 比較的低感度の観測をおこなう火山地震観測では普通の電信線で交流ハムの混入なしで1kmをこえる伝送が可能なので, 1955年には最長3kmにおよぶ直結電磁地震計の集中記録が浅間火山観測所で実用化された(水上ほか, 1959).”

実用観測には技術的に大変難しい点もあったが, その困難を工夫(とくに石本式携帯微動計を改造した大出力の電磁式換振器による)が多かった. 乗り越えたこの遠隔記録の成功により, 火山地震の観測は格段の進歩を

とげ、次の浅間山噴火活動である 1958 年代の噴火予知に大成功をおさめることになった。その頃には、観測技術もさらに進歩し、費用の嵩む光学的記録方式に代わって、増幅器使用による煤描きドラム観測に移行していた。

124) 1956 年(昭和 31 年)～1957 年(昭和 32 年)の活動

1955 年 8 月以降浅間山は極めて穏かな状態を続けた。このように長期に亘り活動を休止することは、20 世紀に入ってからでは大層珍しいことである。僅かに 1957 年 7 月に火山性地震の活動が活発化した現象がみられた。

注 86, 既に注 85, で説明したように東大地震研究所浅間山観測所では、この間、東前掛山観測点(火口よりの距離: 0.9 km, 標高: 2,350 m), 三の鳥居観測点(火口よりの距離: 2.5 km, 標高: 1,780 m), および中の沢観測点(火口よりの距離: 3.9 km, 標高: 1,380 m)における地震集中遠隔記録(観測倍率: 4,000 倍)を観測所で常時実施し、静穏期における地震活動度を明らかにするとともに、その後続く活動活発化の前兆を知るための統計処理をおこなう基礎資料を蓄積していったのである。

125) 1958 年(昭和 33 年)の活動

1958 年に入っても浅間山は活動の徴候を見せなかった。しかし 7 月下旬にはいと、火山性地震の発生が増加しはじめ、火山内部の活動の活発化が推定された。1955 年 7 月の小噴火を最後に 3 年に及ぶ静穏状態を保った浅間山も再び活動の気配を見せ始めたのである。

これら火山性地震活動の動静は、東京大学地震研究所浅間山観測所の遠隔地震観測ネットにより詳細に観測されている。注 85, 86, で述べたように 1956 年～1957 年の静穏期の地震活動と明らかに異なる 1958 年 7 月下旬以後の地震活動を水上, 他(1959 a) は、噴火前兆期の活動とよび、それ以前の地震活動を静穏期の活動とした。噴火前兆期の地震活動に更なる変化が見えたのが 9 月末のことで、急激な地震数の増加が起こり、10 月 3 日の噴火活動開始につながるのである。地震活動の変化と同時に火口に於いても鳴動の発生などの変化が観察されるようになっていった。この 1958 年活動の予知は、火山地震活動の変化を観測する予知方法の典型的な成功例であった。

注 87, 浅間山のような安山岩質火山に発生する火山性地震のうちで、噴火前に多発し始める地震は B 型地震

(例えば、水上・他, 1959 b) と呼ばれる火口浅部で発生する地震である。同様に噴火前にも発生することが多いが、火山体深部に震源を有する地震を A 型地震と呼んでいる。これらの呼称分類は主として大学関係の火山研究者が使用することが多い。現在では、火山に発生する地震について多くの研究が行われ、その分類も多岐にわたっている。

火山の活動活発化などのニュースに火山性地震の多発などある場合、その噴火可能性の判断の規準として、発生している地震の種類を理解することが必要である事は云うまでもない。

10 月 3 日, 小噴火(D), 時刻不詳, 峰の茶屋に降灰あり。

10 月 8 日, 小噴火(D), 時刻不詳, 峰の茶屋に降灰あり。

10 月 9 日, 小噴火(D), 時刻不詳, 峰の茶屋に降灰あり。

10 月 10 日, 小噴火(D), 12 時 50 分～13 時 05 分: 千ヶ滝に降灰あり。

10 月 11 日, 小噴火(D), 06 時前: 測候所に降灰。

小噴火(D), 07 時 53 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇南南西に流れる(気象要覧, 1958, 10 月), “爆発史集追録 1 号”。

小噴火(D), 08 時 21 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 900 m 昇り南南西に流れる。

小噴火(D), 08 時 27 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇南方に流れる。

小噴火(D), 09 時 03 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 800 m 昇り南方に流れる。

小噴火(D), 09 時 35 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 700 m 昇り南方に流れる。

小噴火(D), 10 時 06 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り南方に流れる。

小噴火(D), 10 時 24 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 400 m 昇り南方に流れる。

小噴火(D), 10 時 30 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 400 m 昇り南方に流れる。

小噴火(D), 10 時 38 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 昇り南方に流れる。

小噴火(D), 10 時 54 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。

小噴火(D), 11 時 00 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 600 m 昇り東方に流れる。

小噴火(D), 11 時 54 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 600 m 昇り東方に流れる。

小噴火(D), 12 時 20 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 450 m 昇り東方に流れる。

- 小噴火 (D), 14 時 25 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇東方に流れる.
- 小噴火 (D), 15 時 31 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 昇り東方に流れる.
- 10 月 19 日, 小噴火 (D), 12 時 50 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 1,000 m 上昇南東に流れる (気象要覧, 1958 年 10 月), “爆発史集追録 1 号”.
- 小噴火 (D), 14 時 53 分, 濃灰色噴煙極多量噴出, 600 m 昇り南東に流れる.
- 小噴火 (D), 15 時 49 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 800 m 昇り東南東に流れる.
- 10 月 20 日, 小噴火 (D), 17 時 33 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 1,000 m 上昇東方に流れる. 東側山腹に降灰の様 (気象要覧, 1958 年 10 月).
- 10 月 27 日, 小噴火 (D), 10 時 15 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 1,500 m 上昇南方に流れる. 南側山ろく一帯降灰.
- 小噴火 (D), 16 時 17 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 1,500 m 上昇東南東に流れる. 東南東側山ろく一帯降灰.
- 小噴火 (D), 16 時 51 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 600 m 昇り東南東に流れる. 東南東側山ろく一帯に降灰.
- 10 月 28 日, 小噴火 (D), 14 時 22 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 高度雲のため不明東北東に流れる.
- 10 月 29 日, 小噴火 (D), 10 時 03 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇南方に流れる.
- 10 月 30 日, 小噴火 (D), 07 時 16 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 500 m 昇り東方に流れる (気象要覧, 1958 年 10 月), “爆発史集追録 1 号”.
- 11 月 1 日, 小噴火 (D), 09 時 54 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東方に流れる.
- 11 月 3 日, 小噴火 (D), 12 時 13 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東北東に流れる “爆発史集追録 1 号”.
- 小噴火 (D), 13 時 55 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 1,000 m 上昇東北東に流れる (気象要覧, 1958 年 11 月), “爆発史集追録 1 号”.
- 11 月 6 日, 小噴火 (D), 13 時 49 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 900 m 昇り東方に流れる “爆発史集追録 1 号”.
- 11 月 10 日, 大噴火 (A), 22 時 50 分, 強烈な爆発的噴火で濃い黒色の噴煙を高度 6,000~8,000 m まで噴出, 噴煙は東南東に流れる (“爆発史集追録 1 号”, しかし降灰域の中心軸の方向は東北東である).

噴煙流路下の前橋から小名浜にかけて火山灰が降り, 降灰域は太平洋に達している. さらに, 爆発音・空振は非常に広範囲まで感じられ, 中部地方の東部から関東地方の大部分が内聴域, 中部地方の西部から南部及び近畿地方東部, 奥羽地方が外聴域となった. また, 爆発による気圧振動は, 遠く 910 km も離れた鹿児島地方気象台の微気圧計にも記録されたほどであった. そのほか, 爆発に伴う地震は中部・関東両地方の全般及び近畿・奥羽両地方の一部の地震計にも記録された.

爆発による火山弾は火口から約 3.5 km 離れた地域にまで落下し, さらにそれより小さい小豆大のものは, 山ろく軽井沢にも落下した. 爆風及び火山弾の小片のため軽井沢を含む山麓一帯の地域では窓ガラス・戸障子などに相当の被害を生じた.

爆発の状況, (気象要覧, 1958 年 11 月) による. たまたま火口を眺めていた軽井沢町下発地の依田泰正氏や測候所員の観察を総合すると次のようである.

最初に上下につき上げるような震動 (震度 2) を感じ, 同時に浅間山頂から黒煙がむくむく昇り始めたが, その速度は非常に速く, 黒雲の下には物凄い火柱が立ち, その瞬間, 山の嶺線がくっきりと夜空に描き出された. そして, 火花のような火山弾が飛び始め, 全山を真っ赤に明るくする程であった. 黒雲は真直に上昇していたが, 数秒くらい上昇した頃から, 電光が輝き始め, 飛び散る火山弾と電光のひらめきは目もくらむばかりの凄まじさであった. そのころ流れ出すように南側斜面に火の帯が見え, その帯が丁度前掛を下るころ, 強い爆発音と強い爆風を感じ, 耳が強くたたかれたように, しばらくは何も聞えなかった. このときの爆風がガラス戸などに被害を与えた. 山麓の森林限界線では, このころ山火事が数か所で起こり, 爆発後の 1 時間は全山真っ赤に燃え上がった. 噴煙は山頂上 7,000 m の高さに達し, 次第に東に流れ始めた. しかし, 噴煙の中の電光は県境を越えて, 群馬県上空に達するまで続いていた. そして, 物すごいゴーゴーという鳴動は約 10 分間続いた.

追分の自記気圧計の記録: はじめ+5.0 mb で, 次に-4.0 mb の引きとなっている.

軽井沢の微気圧計の記録: はじめ+4.1 mb で, 次に-2.6 mb の引きとなり, 約 1 分間振動を続けた.

追分の地震計の記録: 最大全振幅で南北動 516 ミクロン, 東西動 665 ミクロン.

窓ガラスの被害: 山麓一帯の窓ガラスは, 山に面した方は例外なく押しで破られ, 反対側にあるものは, 外

側に倒れているほか、ほとんど被害を受けてない。

噴出物: 今回噴出した噴石で最大のものは、南側火口縁に直径 6 m、高さ 4 m のものがあり、上層風の影響を受けてないと思われる噴石の最大飛散距離は火口から 3.65 km (地の滝付近) で、この火山弾で同地点に東西 6.4 m、南北 7.8 m、深さ 2.1 m の穴がうがたれた (気象要覧, 1958 年 11 月)。

被害: “爆発史集追録 1 号” による。

人命被害, ガラスで手足を切った人が数名, 他なし。

建物などの被害, 被害域の総面積, 430 km²

被害戸数, 2,305 戸

ガラスの破損枚数, 28,154 枚

戸障子などの被害数, 2,509 枚

壁の破損, 50 坪

その他屋根瓦, カモイなどの被害が若干あった。

注 88, “爆発史集追録 1 号” には人命に危険を及ぼすような被害は記載されていない。しかし著者は、この噴火により重大な事故につながる出来事発生を聞き、当時東京大学地震研究所浅間火山観測所所員であった故内堀貞雄氏と共にその調査に赴いている。

その出来事は次の様な状況下で発生した。当時千ヶ滝に環翠楼という旅館があり、この旅館の浴場は窓ガラス越しに浅間山を望める位置にあった。この噴火は 22 時 50 分に発生したが、折悪しく同旅館の女性従業員が 2 名入浴中であった。噴火の爆風により砕け飛び散ったガラス片は 2 名の女性の半身に突き刺さり傷つけて鮮血淋漓となる惨状を呈したという。我々が調査に赴いた時点では、既にガラス窓は修理されていたが、窓の上部の狭い部分に嵌めてあったステンドグラスが半分ほど足りなくなっていて、状態を想像する事が可能であった。一般的に観光関係者はこのような出来事を明らかにすることを好まず、当然この事件も世間には知らされなかった。

現在浅間山麓には多くの山荘、保養所などが建てられて多くの人々が滞在している。そして、それらの建物は噴火に対する配慮が不足しているように思える。さらに、それらの建物を使用する人々は噴火の恐ろしさはおろか、噴火そのものさえ知らない人が増加しているのである。浅間山は現在静穏状態を保っているが、いずれは活動を再開しよう。浅間山の強爆発はどのような影響をもたらすか、この地域に住む人々に対して徹底した啓発を行い悲惨な被害者の発生を防がなければいけないと思うのである。

注 89, 既に注 86, で述べた東京大学地震研究所浅間火山

観測所の東前掛観測点は、この噴火による大きな火山弾の直撃を受けた。そのため、ブロックで造られた観測孔は完全に破壊され、内部に設置してあった換振器も押し潰されて使用不能となった。この破壊された換振器は後に科学博物館に引き取られた。当時、浅間火山観測所所員行田紀也氏とともに、この観測点の修復に向った著者は、あまりの酷さに驚いたことを思い出す。とくに信号搬送用電線は切断された上、熱い火山弾が融着して下方の登山道まで丸まって転げ落ちていた。また同観測点の下方、標高およそ 2,000 m の地点には大火山弾により直径 10 m にも及ぶ浅い播鉢型の穴があいていた。

三の鳥居観測点も入口の屋根の部分に直径 30 cm 位の火山弾が落下して天井に罅割れが生じたが観測には支障はなかった。

注 90, 1958 年 11 月 10 日の爆発後、軽井沢測候所関谷博は浅間山噴火活動の周期を解析して噴火の予知に成功したと発表した (関谷, 1959)。しかし、水上、・他 (1959) は、浅間山の活動にははっきりとした周期は認められない事、さらにそのような不確かなことで、現実に社会的に影響のある予報を出す事の危険性についての懸念を指摘している。

ところで、本報告の注 45, で触れているが、1920 年 12 月に発生した大きな活動は、10 日、14 日、18 日、22 日、26 日と 4 日おきに生じたが、この 4 日の周期に着目した大森房吉は、26 日の噴火は観測の用意をして観察したと地学雑誌に記している。このような短期的連続活動の間に、ある短い周期で活動が発生することはしばしば火山で見られる現象であり、関谷の論じた周期とは全く異なるものである。噴火がある短い期間、間欠泉のような活動メカニズムに支配された場合、そのような活動パターンを示すと考えられよう。4 日の間隔に着目した大森房吉の注意力が優れていたといえよう。

1958 年 11 月 10 日の活動以後の浅間山の活動間隔自体は、関谷が述べている活動周期とは一致していないことは明らかである。長期的な活動周期解析の方法はよほど研究、改良を加えぬ限り、実用的な予知手段とはなり得ないであろう。

11 月 11 日, 小噴火 (C), 03 時 25 分, 小爆発, ドーンという音響があり濃黒色噴煙多量に噴出, 5,000 m 上昇東方に流れる。ゴーという鳴動を感じ噴煙中に火花あり。地震動最大振幅 ±5.4 μ。 “爆発史集追録 1 号”。
小噴火 (D), 05 時 43 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,500 m 上昇東南東に流れる。

- 小噴火 (D), 06 時 17 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 900 m 昇り南東に流れる.
- 小噴火 (D), 06 時 41 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 07 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東方に流れる. 地震動最大振幅 $\pm 1.0\mu$.
- 小噴火 (D), 08 時 24 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 10 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 56 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 10 時 14 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,500 m 上昇東南東に流れる. 先端 21 分に沓掛上空に達する“爆発史集追録 1 号”.
- 小噴火 (D), 11 時 55 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 900 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 12 時 58 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 14 時 48 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 15 時 28 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 16 時 10 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 900 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 29 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,100 m 上昇東方に流れる.
- 11 月 12 日, 小噴火 (D), 11 時 56 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東南東に流れる. 軽井沢では見えず峰の茶屋で観測“爆発史集追録 1 号”.
- 小噴火 (D), 12 時 10 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 12 時 12 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 12 時 33 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 12 時 41 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる. 軽井沢では見えず峰の茶屋にて観測.
- 小噴火 (D), 13 時 13 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 50 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 14 時 40 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 900 m 昇り東南東に流れる. 東側 5 合目以上に降灰あり
- “爆発史集追録 1 号”.
- 小噴火 (D), 14 時 55 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 15 時 06 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 15 時 16 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 15 時 27 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,600 m 上昇東方に流れる.
- 小噴火 (D), 16 時 10 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 16 時 35 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 16 時 43 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東方に流れる.
- 11 月 16 日, 小噴火 (D), 08 時 43 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り南東に流れる. 山頂付近で測候所員観測“爆発史集追録 1 号”.
- 小噴火 (D), 10 時 04 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り南東に流れる.
- 小噴火 (D), 11 時 55 分, 灰褐色噴煙噴出, 南東に流れる. 山頂観測.
- 11 月 17 日, 小噴火 (D), 06 時 40 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り東南東に流れる. 小諸にて観測, 千ヶ滝方面降灰有り“爆発史集追録 1 号”.
- 小噴火 (D), 11 時 14 分, 淡灰褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東南東に流れる.
- 11 月 18 日, 小噴火 (D), 06 時 20 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 300 m 昇り東方に流れる.
- 11 月 19 日, 小噴火 (D), 08 時 37 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り南東に流れる. 地震動最大全振幅 $\pm 1.0\mu$. “爆発史集追録 1 号”.
- 小噴火 (D), 13 時 20 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り南東に流れる.
- 小噴火 (D), 17 時 15 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 3,500 m 上昇南東に流れる. 17 時 50 分頃軽井沢旧道に降灰あり, 同日は桐生, 前橋にも降灰あり.
- 11 月 20 日, 小噴火 (D), 08 時 01 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 3,500 m 上昇東南東に流れる. 地震動最大全振幅 $\pm 1.1\mu$.
- 11 月 21 日, 小噴火 (D), 06 時 56 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 07 時 31 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 08 時 34 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出,

- 2,500 m 上昇東方に流れる。小浅間より上降灰を認める“爆発史集”。
- 小噴火 (D), 08 時 40 分, 淡灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 09 時 23 分, 微かにボンという音響を伴う。濃灰褐色噴煙多量噴出, 3,000 m 上昇東方に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 0.9\mu$ 。
- 小噴火 (D), 09 時 35 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 01 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り南東に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 05 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り南東に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 08 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り南東に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 12 分, 淡灰色噴煙多量噴出, 600 m 昇り南東に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 17 分, 淡灰色噴煙多量噴出, 500 m 昇り南東に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 19 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り南東に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 24 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り南東に流れる。地震動最大全振幅プラスマイナス 1.5μ 。
- 小噴火 (D), 10 時 38 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り南東に流れる。
- 小噴火 (D), 11 時 05 分, 灰色噴煙多量噴出, 400 m 昇り南東に流れる。
- 小噴火 (D), 11 時 18 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 2,000 m 上昇南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 1.5\mu$ 。“爆発史集追録 1 号”。
- 小噴火 (D), 11 時 34 分, 濃灰色噴煙多量噴出, 800 m 昇り東南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 1.5\mu$ 。
- 小噴火 (D), 11 時 52 分, 灰色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 13 時 18 分, 灰色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 14 時 24 分, 灰色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇東南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 1.8\mu$ 。
- 小噴火 (D), 14 時 47 分, 灰色噴煙中量噴出, 1,000 m 上昇東南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 0.8\mu$ 。
- 11 月 22 日, 小噴火 (D), 06 時 36 分, 濃灰色噴煙中量噴出, 400 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 06 時 44 分, 濃灰色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 03 分, 濃灰色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 11 時 09 分, 濃灰色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 11 時 37 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 900 m 昇り東方に流れる。山麓一帯に降灰。地震最大全振幅 $\pm 1.4\mu$ 。
- 小噴火 (D), 11 時 48 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東方に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 1.4\mu$ 。
- 小噴火 (D), 12 時 53 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 14 時 47 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 14 時 52 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 15 時 16 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 15 時 35 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東南東に流れる。
- 小噴火 (D), 15 時 50 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 300 m 昇り東南東に流れる。
- 11 月 23 日, 小噴火 (D), 06 時 03 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り南東に流れる。
- 小噴火 (D), 06 時 26 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,200 m 上昇南東に流れる。南東側山麓に降灰を認める。地震動最大全振幅 $\pm 1.3\mu$ 。“爆発史集追録 1 号”。
- 小噴火 (D), 07 時 25 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,300 m 上昇南東に流れる。
- 小噴火 (D), 08 時 08 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 2,500 m 上昇南東に流れる。08 時 32 分, 09 時 47 分沓掛に微量の降灰有り。
- 小噴火 (D), 09 時 24 分, 灰色噴煙多量噴出, 600 m 昇り南東に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 07 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,400 m 上昇南南東に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 20 分, 灰色噴煙多量噴出, 400 m 昇り南南西に流れる, 10 時 34 分~10 時 45 分沓掛に降灰有り。
- 11 月 24 日, 小噴火 (D), 08 時 14 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 800 m 昇り東北東に流れる“爆発史集追録 1 号”。
- 小噴火 (D), 08 時 52 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 500 m 昇り東北東に流れる。
- 小噴火 (D), 09 時 13 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 300 m 昇り東北東に流れる。
- 小噴火 (D), 10 時 10 分, 灰色噴煙少量噴出, 300 m 昇

- り東北東に流れる。
 小噴火 (D), 10 時 25 分, 灰色噴煙少量噴出, 200 m 昇り東北東に流れる。
 小噴火 (D), 10 時 59 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 500 m 昇り東北東に流れる。
 小噴火 (D), 12 時 15 分, 濃灰褐色噴煙少量噴出, 400 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 15 時 46 分, 濃灰色噴煙少量噴出, 600 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 16 時 28 分, 灰色噴煙中量噴出, 500 m 昇り東方に流れる。
 11 月 25 日, 小噴火 (D), 09 時 01 分, 灰色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。
 11 月 26 日, 小噴火 (D), 09 時 03 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇南南東に流れる。09 時 30 分~09 時 35 分降灰微量, 地震動最大全振幅±1.8 μ 。
 小噴火 (D), 10 時 14 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇南南東に流れる。地震動最大全振幅±1.7 μ 。
 小噴火 (D), 10 時 49 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り南南東に流れる。
 小噴火 (D), 11 時 44 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り南南東に流れる。
 小噴火 (D), 14 時 15 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇南南東に流れる。
 小噴火 (D), 16 時 58 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,700 m 上昇東南東に流れる。地震動最大全振幅±0.8 μ 。“爆発史集追録 1 号”。
 11 月 27 日, 小噴火 (D), 08 時 08 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 08 時 55 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 昇り東方に流れる。
 11 月 28 日, 小噴火 (D), 10 時 10 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 10 時 17 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 11 時 12 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東方に流れる。
 11 月 29 日, 小噴火 (D), 07 時 55 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,200 m 上昇東方に流れる。
 小噴火 (D), 22 時 25 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 上昇東方に流れる。
 11 月 30 日, 小噴火 (D), 07 時 58 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 08 時 29 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 200 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 08 時 31 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 08 時 54 分, 灰黒色噴煙少量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。地震動最大全振幅±0.8 μ 。
 小噴火 (D), 09 時 26 分, 濃灰黒色噴煙中量噴出, 600 m 昇り東方に流れる。地震動最大全振幅±0.7 μ 。“爆発史集追録 1 号”。
 12 月 1 日, 小噴火 (D), 16 時 07 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り南方に流れる。16 時 22 分~16 時 31 分降灰あり“爆発史集追録 1 号”。
 12 月 2 日, 小噴火 (D), 09 時 51 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 400 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 10 時 24 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,300 m 上昇東方に流れる。地震動最大全振幅±1.0 μ 。
 小噴火 (D), 11 時 23 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,100 m 上昇東方に流れる。
 小噴火 (D), 13 時 56 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,200 m 上昇東方に流れる。地震動最大全振幅±1.0 μ 。
 小噴火 (D), 14 時 08 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 14 時 36 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 14 時 41 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇東方に流れる。
 小噴火 (D), 15 時 11 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 15 時 31 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 15 時 40 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 16 時 24 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 17 時 00 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東方に流れる。
 12 月 2 日の夜, 西南西の風, 噴煙極微量噴煙が明るく見えた“爆発史集追録 1 号”。
 12 月 3 日, 小噴火 (D), 06 時 20 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東北東に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 53 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる。
 小噴火 (D), 13 時 01 分, 灰色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる。
 12 月 4 日, 小噴火 (C), 07 時 02 分, 小爆発, ドーンと

いう爆音で窓ガラス振動，濃灰褐色噴煙多量噴出，4,500 m 上昇東方に流れる。鳴動1分間，火山弾は8合目付近迄飛んでいる模様である。群馬県方面に降灰がある様子。地震動最大全振幅 32μ (E~W)， 20μ (N~S)，気圧振幅，軽井沢(上1.9，下0.9mb)，追分(上2.6，下0.5mb)，前橋地方気象台では07時04分に爆発音が聞え，07時40分~07時50分，降灰少量“爆発史集追録1号”，(気象要覧，1958年12月)。

小噴火(C)，07時05分，弱い音響あり，かすかに鳴動を感ずる。濃灰褐色噴煙多量噴出，4,000 m 上昇東方に流れる。地震動最大全振幅 29μ (E~W)， 19μ (N~S)，気圧振幅軽井沢 ± 0.4 mb，(上0.2，下0.2)。

宇都宮地方気象台では4日07時10分弱い空振を感ず，08時20分~09時15分降灰あり“爆発史集追録1号”，(気象要覧，1958年12月)。

小噴火(D)，07時31分，濃灰褐色噴煙多量噴出，1,200 m 上昇東方に流れる。

大噴火(B)，11時46分，小爆発，ドーンと窓ガラス振動，濃灰黒色噴煙多量噴出，4,500 m 上昇東南東に流れる。ゴウーゴウーという鳴動1分30秒間続き，火山弾7合目付近まで達する。地震動最大振幅 48μ (E~W)， 27μ (N~S)，気圧振幅軽井沢上1.5，下0.9mb，追分上2.5，下1.6mb，

前橋地方気象台では，4日11時48分爆発音が聞える。12時16分，降灰， 10 gr/m^2 。

熊谷地方気象台，4日14時10分少量の降灰あり“爆発史集追録1号”，(気象要覧，1958年12月)。

小噴火(D)，11時55分，濃灰褐色噴煙多量噴出，2,000 m 上昇東南東に流れる。同日前橋，熊谷，宇都宮に降灰あり。地震動最大振幅 $\pm 1.0\mu$ 。

小噴火(D)，12時27分，灰褐色噴煙多量噴出，700 m 昇り東南東に流れる。

小噴火(D)，13時08分，灰褐色噴煙多量噴出，600 m 昇り東南東に流れる。

小噴火(D)，13時36分，灰褐色噴煙多量噴出，600 m 昇り東南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 1.1\mu$ 。

小噴火(D)，13時50分，灰色噴煙多量噴出，400 m 昇り東南東に流れる。

小噴火(D)，13時59分，濃灰褐色噴煙多量噴出，1,000 m 上昇東南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 2.0\mu$ 。

小噴火(D)，14時44分，灰褐色噴煙中量噴出，400 m 昇り東南東に流れる。

小噴火(D)，15時29分，濃灰褐色噴煙多量噴出，500 m 昇り東南東に流れる。

小噴火(D)，15時38分，濃灰褐色噴煙多量噴出，800 m 昇り東南東に流れる。

小噴火(D)，15時54分，灰褐色噴煙中量噴出，400 m 昇り東南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 0.8\mu$ 。

小噴火(D)，16時07分，濃灰褐色噴煙多量噴出，700 m 昇り東南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 0.6\mu$ 。

小噴火(D)，16時47分，灰褐色噴煙中量噴出，300 m 昇り東南東に流れる。

小噴火(D)，16時57分，濃灰褐色噴煙多量噴出，400 m 昇り東南東に流れる。

12月5日，小噴火(D)，13時03分，濃灰褐色噴煙多量噴出，1,000 m 上昇東南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 2.8\mu$ 。

大噴火(B)，13時08分，小爆発，大砲のようにドシンと窓ガラスを振動し濃黒褐色噴煙多量噴出，5,600 m 上昇東南東に流れる。鳴動は5分間継続し，火山弾は7合目付近迄落ちるのが見える。13分頃噴煙先端杓掛上空に達す。13時25分千ヶ滝にザーザーと音を立てて降灰砂(5分間)あり。地震動最大振幅 44μ (E~W)， 29μ (N~S)，気圧振動，軽井沢+1.5， -0.9 ± 2.4 mb，追分+3.7， -0.2 ± 3.9 mb，である。中軽井沢ではガラスの破損約50枚，同日熊谷に降灰あり。

前橋地方気象台：5日13時11分降灰，気圧計に0.8mb記録。

宇都宮地方気象台：5日13時14分(空振，五十里観測所)，5日13時20分(気圧計に0.8mb記録，五十里観測所)。

熊谷地方気象台：5日13時20分(爆発音，空振，噴煙)，5日14時45分(降灰)“爆発史集追録1号”，(気象要覧，1958年12月)。

小噴火(D)，13時24分，濃灰褐色噴煙多量噴出，1,800 m 上昇東南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 0.8\mu$ 。

小噴火(D)，13時40分，濃灰褐色噴煙多量噴出，1,300 m 上昇東南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 0.9\mu$ 。

小噴火(D)，13時51分，濃灰褐色噴煙多量噴出，1,700 m 上昇東南東に流れる。地震計最大全振幅 $\pm 2.0\mu$ 。

小噴火(D)，18時26分，濃灰褐色噴煙多量噴出，700 m 昇り東南東に流れる。

12月6日，小噴火(D)，05時50分頃，濃灰褐色噴煙多量噴出，高度不明で東南東に流れる。

小噴火(D)，06時50分頃，濃灰褐色噴煙多量噴出，2,500 m 上昇東南東に流れる。

- 小噴火 (D), 10 時 27 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 150 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 11 時 23 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 3,000 m 上昇南東に流れる. 噴煙先端南東水平線に達する. 千ヶ滝方面米粒大の降砂あり, 旧道方面 20 分位かなりの降灰あり (屋根が真っ白になる程度). 地震動最大全振幅 $\pm 1.2\mu$, 東京に降灰あり (6 日 15 時~15 時 30 分).
- 小噴火 (D), 11 時 48 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 400 m 昇り南東に流れる.
- 小噴火 (D), 11 時 55 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り南東に流れる.
- 小噴火 (D), 11 時 58 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り南東に流れる.
- 小噴火 (D), 12 時 10 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り南東に流れる.
- 小噴火 (D), 12 時 24 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り南東に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 00 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り南東に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 20 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 昇り南東に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 33 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m 昇り南東に流れる. 地震動最大全振幅 $\pm 1.7\mu$.
- 小噴火 (D), 14 時 17 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 高度不明南南東に流れる.
- 小噴火 (D), 14 時 41 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り南南東に流れる. 地震動最大全振幅 $\pm 1.1\mu$.
- 小噴火 (D), 15 時 52 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 900 m 昇り南南東に流れる. 地震動最大全振幅 $\pm 1.3\mu$.
- 12 月 8 日, 小噴火 (D), 20 時 41 分, ゴーという鳴動あり, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東南東に流れる. 地震動最大全振幅 $\pm 1.2\mu$.
- 12 月 11 日, 小噴火 (D), 10 時 26 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 100 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 14 時 57 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 16 時 24 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 16 時 49 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 400 m 昇り東方に流れる.
- 12 月 12 日, 小噴火 (D), 11 時 52 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる.
- 12 月 14 日, 小噴火 (C), 11 時 55 分, ドーンという爆発音あり. 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 4,000 m 上昇東南東に流れる. 鳴動はゴーと弱い感じで約 30 秒, 弱い電光も見える. 地震動最大全振幅, 74μ (N~S), 67μ (E~W), 気圧振動, 軽井沢, $\pm 1.2\text{mb}$ (+0.8, -0.4), 追分, $\pm 1.9\text{mb}$ (+1.5, -0.4), 長野地方气象台: 14 日 12 時 (噴煙を見る). 宇都宮地方气象台: 14 日 14 時 00 分~17 時 00 分 (降灰少量) “爆発史集追録 1 号”, (気象要覧, 1958 年 12 月).
- 小噴火 (D), 13 時 01 分, ドーンという弱い音あり, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 2,000 m 上昇東方に流れる. 地震動最大全振幅 $\pm 1.0\mu$, 宇都宮に降灰あり.
- 小噴火 (D), 13 時 17 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 42 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 52 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 14 時 34 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 300 m 昇り東方に流れる. 小噴火 (D), 15 時 05 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 15 時 18 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 16 時 15 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 16 時 43 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる.
- 12 月 15 日, 小噴火 (D), 05 時 40 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 800 m 昇り東南東に流れる.
- 小噴火 (D), 06 時 57 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる. 熊谷地方气象台: 15 日 07 時 30 分 (降灰).
- 小噴火 (D), 08 時 21 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 09 時 42 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東方に流れる. 熊谷地方气象台: 15 日 11 時 06 分 (降灰).
- 小噴火 (D), 11 時 12 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東方に流れる.
- 小噴火 (D), 13 時 02 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる. 地震動最大全振幅 $\pm 0.9\mu$.
- 小噴火 (D), 13 時 42 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる. 地震動最大全振幅 $\pm 0.7\mu$.
- 小噴火 (D), 14 時 25 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる. 地震動最大全振幅 $\pm 1.6\mu$.
- 小噴火 (D), 14 時 44 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m

- 昇り東南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 0.8\mu$ 。
 小噴火 (D), 15 時 37 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m
 昇り南東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 1.1\mu$ 。“爆発史
 集追録 1 号”。
 小噴火 (D), 17 時 12 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m
 昇り南東に流れる。
- 12 月 16 日, 筑波山測候所: 16 日 08 時 00 分 (降灰少量)
 (気象要覧, 1958 年 12 月)。
 小噴火 (D), 12 時 12 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 250 m
 昇り東北東に流れる。
 小噴火 (D), 16 時 30 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 250 m
 昇り東北東に流れる。
- 12 月 17 日, 小噴火 (D), 07 時 58 分, 灰褐色噴煙少量噴
 出, 100 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 22 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 500
 m 昇り東南東に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 35 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600
 m 昇り東南東に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 54 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 500 m
 昇り東南東に流れる。
 小噴火 (D), 10 時 27 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600
 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 10 時 40 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 250 m
 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 10 時 59 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 300 m
 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 13 時 17 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 250 m
 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 14 時 01 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m
 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 14 時 06 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 400 m
 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 16 時 54 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 500
 m 昇り東方に流れる。
- 12 月 18 日, 小噴火 (D), 07 時 37 分, 灰褐色噴煙中量噴
 出, 300 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 08 時 10 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 200 m
 昇り東方に流れる。
- 12 月 19 日, 小噴火 (D), 09 時 35 分, 灰褐色噴煙少量噴
 出, 100 m 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 10 時 08 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 100 m
 昇り東方に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 0.8\mu$ 。
 小噴火 (D), 10 時 45 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 150 m
 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 12 時 28 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 200 m
 昇り東方に流れる。
- 小噴火 (D), 12 時 43 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m
 昇り東北東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 0.6\mu$ 。
 小噴火 (D), 13 時 03 分, 灰褐色噴煙少量噴出, 100 m
 昇り東北東に流れる。
 小噴火 (D), 13 時 45 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 260 m
 昇り東北東に流れる。
 小噴火 (D), 15 時 18 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 200
 m 昇り東北東に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 0.6\mu$ 。
 小噴火 (D), 16 時 13 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 400
 m 昇り東北東に流れる。
- 12 月 20 日, 小噴火 (D), 07 時 54 分, 灰褐色噴煙噴出,
 山頂見えず詳細不明東方に流れる。地震動最大全振幅
 $\pm 1.0\mu$ 。
- 12 月 22 日, 小噴火 (D), 13 時 29 分, 灰褐色噴煙中量噴
 出, 300 m 昇り東方に流れる。地震動最大全振幅 ± 1.0
 μ 。
 小噴火 (D), 13 時 35 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m
 昇り東方に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 1.5\mu$ 。
 小噴火 (D), 13 時 39 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m
 昇り東方に流れる。
 小噴火 (D), 14 時 51 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m
 昇り東方に流れる。地震動最大全振幅 $\pm 1.0\mu$ 。
 小噴火 (D), 17 時 05 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m
 昇り北東に流れる。
- 12 月 23 日, 小噴火 (D), 09 時 42 分, 濃灰褐色噴煙多量
 噴出, 600 m 昇り東方に流れる。地震動最大全振幅 \pm
 0.7μ 。
 小噴火 (D), 10 時 15 分, 濃灰褐色中量噴出, 600 m 昇
 り東方に流れる。
- 12 月 24 日, 小噴火 (D), 06 時 00 分前, 山頂見えず詳細
 不明。06 時前降灰。小噴火 (D), 07 時 43 分, 灰褐色
 噴煙多量噴出, 雲のため詳細は不明, 噴煙南方に流れ
 る。降灰 07 時 55 分~08 時 30 分, 地震動最大全振幅
 0.7μ 。
 小噴火 (D), 08 時 50 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 150
 m 昇り南方に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 13 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m
 昇り南方に流れる。
 小噴火 (D), 09 時 25 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 400 m
 昇り南方に流れる。
 小噴火 (D), 13 時 38 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m
 昇り南方に流れる。
 小噴火 (D), 14 時 52 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m
 昇り南方に流れる。

12月25日, 小噴火(D), 09時26分, 灰色噴煙中量噴出, 500m 昇り南方に流れる. 08時40分~10時00分, 硫黄臭.

小噴火(D), 10時14分, 灰色噴煙中量噴出, 500m 昇り南方に流れる.

小噴火(D), 10時58分, 灰色噴煙中量噴出, 400m 昇り南方に流れる (気象要覧, 1958年12月), “爆発史集追録第1号”(1956年~1958年).

1958年浅間山活動の要約

約3年の静穏期間を経て活動を再開する.

10月3日・8日・9日・10日, 小噴火(D)各1回, 11日, 小噴火(D)16回, 19日, 小噴火(D)3回, 20日, 小噴火(D)1回, 27日, 小噴火(D)3回, 28日・29日・30日, 小噴火(D)各1回, (10月噴火回数, D: 30回)

11月1日, 小噴火(D)1回, 3日, 小噴火(D)2回, 6日, 小噴火(D)1回, 10日, 大噴火(A)1回, 浅間山における第1級の強爆発である. 爆発音の可聴域は広く空気圧による山麓の被害は記録上最大で, ガラスの破損は20,000枚以上に達した.

11日, 小噴火(C)1回, (D)14回, 12日, 小噴火(D)15回, 16日, 小噴火(D)3回, 17日, 小噴火(D)2回, 18日, 小噴火(D)1回, 19日, 小噴火(D)3回, 20日, 小噴火(D)1回, 21日, 小噴火(D)21回, 22日, 小噴火(D)12回, 23日, 小噴火(D)7回, 24日, 小噴火(D)9回, 25日, 小噴火(D)1回, 26日, 小噴火(D)6回, 27日, 小噴火(D)2回, 28日, 小噴火(D)3回, 29日, 小噴火(D)2回, 30日, 小噴火(D)5回, (11月噴火回数, 大噴火(A): 1回, 小噴火(C): 1回, 小噴火(D): 111回)

12月1日, 小噴火(D)1回, 2日, 小噴火(D)12回, 3日, 小噴火(D)3回, 4日, 小噴火(B)1回, (C)2回, (D)14回, 5日, 大噴火(B)1回, 空気圧により中軽井沢でガラス50枚程破損, 小噴火(D)5回, 6日, 小噴火(D)15回, 8日, 小噴火(D)1回, 11日, 小噴火(D)4回, 12日, 小噴火(D)1回, 14日, 小噴火(C)1回, (D)9回, 15日, 小噴火(D)11回, 16日, 小噴火(D)3回, 17日, 小噴火(D)11回, 18日, 小噴火(D)2回, 19日, 小噴火(D)9回, 20日, 小噴火(D)1回, 22日, 小噴火(D)5回, 23日, 小噴火(D)2回, 24日, 小噴火(D)7回, 25日, 小噴火(D)3回, (12月噴火回数, 大噴火(B): 1回, 小噴火(C): 4回, (D): 119回)

(AVO噴火回数, 1月より9月まで, 0回, 10月: 20

回, 11月: 84回, 12月: 74回)

126) 1959年(昭和34年)の活動

1月, 2月は噴気活動のみで静穏であった. しかし2月7日の夜には火口上が赤く見えた.

3月10日, 小噴火(C), 19時00分, にぶい「ドスン」という音と同時に戸障子がかかり揺れた. しかし鳴動は聞えず, 小雨が降っていて詳細は判らなかつた. その後の調査の結果六里ヶ原から北軽井沢にかけて降灰砂があり, 最大粒は大豆大であった.

地震動最大振幅(追分) E~W, 36 μ , N~S, 34 μ , 気圧振動, 軽井沢, ± 0.6 mb (+0.3mb, -0.3mb), 追分, ± 0.7 mb (+0.5mb, -0.2mb) “爆発史集追録第2号”(1959年1月~7月).

4月14日, 大爆発(B), 20時29分, 爆発, がたがたと地震を感じ「ドーン」という爆発音の後ゴーゴーという物凄い鳴動が始まり8分間続く. 噴煙は濃黒色で多量噴出, また地震とも空振ともつかない様な振動で家が揺れ動く. 浅間山からは火柱がたち溶岩塊や火山弾がしきりに飛ぶ. 黒い噴煙は非常な速度で真直ぐに昇り, 北西の上層風に流されこちら(軽井沢沓掛)に向ってくるように見える. 浅間山の標高1,800m以上は火の海となり真っ赤に燃え約7分間赤くなっていた. また標高1,600m付近の山腹では山火事が数十ヶ所に発生し火勢は次第に強くなる. 特に剣ヶ峰の東側, 一杯水付近は翌朝も盛んに燃え続け関係市町村の消防団が出勤し正午頃になって下火となる.

火山弾は特に南側に多く降り, 噴煙は約7,000mの高さまで上昇し, 東に流れ沓掛の上空を通り, 当所では20時57分から3分間直径1-2cmの火山礫がパラパラ音を立てて降る. 21時15分から灰白の煙に変わる.

噴火地震(追分) 震度 1,

発震時刻 20時29分51, 7秒,

P~S 1.8^{SEC}

地震動最大振幅 E~W, 65 μ , N~S, 67 μ ,

空気振動 追分 ± 3.3 mb (+2.2mb, -1.1mb)

軽井沢 ± 2.4 mb (+1.6mb, -0.8mb)

被害, 山腹に山火事が発生し, 国有林60.6ヘクタールが焼失した. また火山礫が軽井沢中学校前を走っていた自動車にあたり風防ガラスが破損した. しかし登山禁止中であつたので人畜の被害はなかつた “爆発史集追録第2号”(1959年1月~7月).

4月14日, 小噴火(D), 23時24分, 濃灰黒色噴煙多量噴出, 2,000m 昇り南東に流れる. 当所(沓掛)降灰なし.

- 4月19日, 小噴火 (D), 灰色噴煙多量噴出, 300 m 昇り北東に流れる “爆発史集追録第 2 号” (1959 年 1 月~7 月), (気象要覧, 1959 年 4 月).
- 5月8日, 小噴火 (D), 05 時 45 分, 灰色噴煙極多量噴出, 1,000 m 上昇北西に流れる.
- 5月15日, 小噴火 (D), 11 時 29 分, 濃灰色噴煙中量噴出, 400 m 昇り東北東に流れる.
小噴火 (D), 11 時 58 分, 濃灰色噴煙中量噴出, 300 m 昇り北方に流れる.
小噴火 (D), 13 時 20 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り北方に流れる.
小噴火 (D), 13 時 45 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り北北東に流れる.
小噴火 (D), 14 時 00 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り北北東に流れる.
- 5月20日, 小噴火 (D), 06 時 30 分, 淡灰褐色噴煙極多量噴出, 400 m 昇り南南西に流れる.
小噴火 (D), 12 時 37 分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 400 m 昇り南南西に流れる.
小噴火 (D), 19 時 27 分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 400 m 昇り南南西に流れる.
- 5月21日, 小噴火 (D), 10 時 00 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 600 m 昇り東方に流れる “爆発史集追録第 2 号” (1959 年 1 月~7 月).
- 6月13日, 小噴火 (D), 濃灰褐色噴煙多量噴出, 900 m 昇り東方に流れる.
- 6月15日, 小噴火 (D), 07 時 27 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 800 m 昇り東方に流れる.
小噴火 (D), 08 時 50 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東方に流れる.
- 6月20日, 小噴火 (D), 09 時 59 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 約 3,000 m 上昇東方に流れる. 地震動最大全振幅 1.5μ .
- 6月25日, 小噴火 (C), ドーンという爆発音とともに噴火, 山は見えなかったが雲の間から, 濃灰褐色の噴煙が多量, 上昇しているのが見えた. 噴煙は 5,000 m に上昇し北東に流れた. 鳴動が 7 分間続いた. 分去茶屋付近を中心に大豆大の火山礫を降らせた.
地震動最大振幅 (追分): E~W, 29μ , N~S, 17μ ,
空気振動 追分 $\pm 1.6\text{ mb}$ (+1.3 mb, -0.3 mb)
軽井沢 $\pm 1.4\text{ mb}$ (+1.1 mb, -0.3 mb)
現地調査の結果によれば, 火山弾の飛んだ方向は湯の平の東大地震研究所浅間火山観測所の地震観測小屋 (湯の平観測点) 付近が最も多かったという. 他の方位にはあまり噴石が見られなかったとの事である “爆発史集追録第 2 号” (1959 年 1 月~7 月).
- 6月30日, 小噴火 (C), 06 時 24 分, ドーンという音を伴う空気振動あり戸障子揺れる (前回より弱い感じ). 噴煙は濃い黒褐色多量 4,500 m 噴出し東南東に流れた. 火山岩塊その他の噴出物の状況は山頂付近が雲のためわからないが, 六里ヶ原から群馬県北部にかけて降灰砂礫あり, 鳴動は 1 分間続く.
地震動最大振幅 (追分): E~W, 24μ , N~S, 19μ ,
空気振動 追分 $\pm 1.3\text{ mb}$ (+1.0 mb, -0.3 mb)
軽井沢 $\pm 1.0\text{ mb}$ (+0.7 mb, -0.3 mb)
“爆発史集追録第 2 号” (1959 年 1 月~) 7 月.
- 7月6日, 小噴火 (D), 07 時 50 分, 黒色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東方に流れる.
- 7月7日, 小噴火 (D), 16 時 31 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400 m 昇り東北東に流れる.
小噴火 (D), 16 時 51 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東北東に流れる.
- 7月11日, 小噴火 (D), 14 時 22 分, 灰褐色噴煙噴出, 高度, 量不明東方に流れる.
- 7月16日, 小噴火 (C), 15 時 31 分, ドーンという音を伴う空気振動あり, 詳細は雲のために判らないが, 雲の間から極多量の噴煙の上昇していくのが見えた. 気象要覧 (1959 年 7 月) によれば, 高度 4,000 m まで上昇, 爆発に先立って当所 (軽井沢測候所の露場) には微量の降灰があった. 爆発に伴う降灰は千ヶ滝を中心として南東に流れた.
地震動最大振幅 (追分): ± 0.9 : E~W, 19μ , N~S, 10μ ,
空気振動 追分 $\pm 0.9\text{ mb}$ (+0.8 mb, -0.1 mb)
軽井沢 $\pm 0.7\text{ mb}$ (+0.5 mb, -0.2 mb)
登山禁止中の浅間山に登った大阪府豊中市の会社員 1 名は, 東前掛で爆発に遭遇し火傷を負った “爆発史集追録第 2 号”, (気象要覧, 1959 年 7 月).
- 7月21日, 小噴火 (C), 08 時 29 分, ドーンという爆発音を伴い 3 分間鳴動あり. 戸障子振動する. 噴煙は灰褐色で多量噴出, 4,300 m 上昇南南西より南東に変わり, 08 時 40 分当所 (軽井沢測候所) 上空に達し, 群馬県下仁田方面に流れる. 降灰は沓掛, 塩沢, 鳥井原が中心で北の端は東部小学校付近, 南は発地であった. この降灰は軽石を粉にしたようなもので白味を帯び, 桑野菜に若干の被害があった.
地震動最大振幅 (追分): \pm E~W, 16μ , N~S, 13μ ,
気圧振動 追分 $\pm 1.0\text{ mb}$ (+0.8 mb, -0.2 mb)
軽井沢 $\pm 1.3\text{ mb}$ (+0.9 mb, -0.4 mb)
“爆発史集追録第 2 号”.
小噴火 (D), 08 時 55 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,000

m 上昇南東に流れる。降灰微量。

小噴火 (D), 09 時 27 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 昇り南東に流れる。

小噴火 (D), 09 時 37 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇南東に流れる。

7 月 22 日, 小噴火 (D), 09 時 38 分, 音を伴わなかったが地震動の規模は今までの爆発以上のものであった。地震動最大振幅 (追分): E~W, 80 μ , N~S, 42 μ 。

7 月 28 日, 小噴火 (D), 12 時 13 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 2,000 m 上昇南方に流れる。13 時 10 分~13 時 25 分, 降灰, 降灰は黒味を帯びていて 21 日の噴火のものとは異なった“爆発史集追録第 2 号”。

小噴火 (D), 19 時 26 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 500 m 昇り南南西に流れる。

7 月 29 日, 小噴火 (D), 12 時 23 分, 灰褐色噴煙中量噴出, 700 m 昇り南西に流れる。

7 月 30 日, 小噴火 (D), 12 時 07 分, 濃灰色噴煙多量噴出, 1,000 m 上昇東方に流れる。

7 月 31 日, 小噴火 (D), 09 時 58 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,600 m 上昇東南東に流れる。

小噴火 (D), 14 時 38 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東南東に流れる。

小噴火 (D), 19 時 36 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東南東に流れる“爆発史集追録第 2 号”。

8 月 1 日, 小噴火 (D), 10 時 10 分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 2,000 m 上昇東方に流れる。南東山麓 (三笠方面) に降灰あり。

8 月 5 日, 小噴火 (D), 18 時 07 分, 灰色噴煙中量噴出, 600 m 昇り南方に流れる。

8 月 10 日, 小噴火 (D), 12 時 25 分, 灰色噴煙中量噴出, 雲のために噴煙高度不詳, 南側山麓一帯に降灰あり (気象要覧, 1959 年 8 月), “爆発史集追録第 3 号” (1959 年 8 月~1962 年 7 月)。

1959 年 9 月以降は穏かな状態が続くようになった (気象要覧, 1959 年 9 月~12 月)。

1959 年浅間山活動の要約

1 月, 2 月は静穏であったが, 2 月 7 日夜には火口上が赤く見えた。

3 月 10 日, 小噴火 (C), 1 回,

4 月 14 日, 大噴火 (B), 1 回, 標高 1,800 m 以上は真っ赤になる。標高 1,600 m 付近では山火事が発生, 翌日まで燃えた。14 日・19 日, 小噴火 (D) 各 1 回, (4 月噴火回数, 大噴火 (B): 1 回, 小噴火 (D): 2 回)

5 月 8 日, 小噴火 (D) 1 回, 15 日, 小噴火 (D) 5 回,

20 日, 小噴火 (D) 3 回, 21 日, 小噴火 (D) 1 回, (5 月噴火回数, 小噴火 (D): 10 回)

6 月 13 日, 小噴火 (D) 1 回, 15 日, 小噴火 (D) 2 回, 20 日, 小噴火 (D) 1 回, 25 日, 小噴火 (C) 1 回, 30 日, 小噴火 (C) 1 回, (6 月噴火回数, 小噴火 (C): 2 回, 小噴火 (D): 4 回)

7 月 6 日, 小噴火 (D) 1 回, 7 日, 小噴火 (D) 2 回, 11 日, 小噴火 (D) 1 回, 16 日, 小噴火 (C) 1 回, 東前掛で火傷 1 名, 登山禁止中, 21 日, 小噴火 (C) 1 回, 小噴火 (D) 3 回, 22 日, 小噴火 (D) 1 回, 28 日, 小噴火 (D) 2 回, 29 日・30 日, 小噴火 (D) 各 1 回, 31 日, 小噴火 (D) 3 回, (7 月噴火回数, 小噴火 (C): 2 回, 小噴火 (D): 15 回)

8 月 1 日・5 日・10 日, 小噴火 (D) 各 1 回, (8 月噴火回数, 小噴火 (D): 3 回)

9 月・10 月・11 月・12 月は静かな状態が続いた。

(AVO 噴火回数, 1 月・2 月, 0 回, 3 月: 1 回, 4 月: 3 回, 5 月: 8 回, 6 月: 5 回, 7 月: 18 回, 8 月: 9 回, 9 月・10 月・11 月・12 月は 0 回)

127) 1960 年 (昭和 35 年) ~1961 年 (昭和 36 年) の活動

1960 年は年間を通じて静穏であった。気象要覧 (1960 年 1 月~12 月) には, 浅間山に関する記事が見当たらない。1961 年を迎えてもその傾向は変わらなかった。しかし 8 月に入って, 地震以外に, とくに目立った前兆もなく 18 日に噴火が発生した。

8 月 18 日, 大噴火 (B), 14 時 41 分, 当日の天気は晴れていたが, 11 時 17 分から浅間山方面は雷雨となり, 山頂から東方一帯はかなりはげしい雨が降った。この雷雨は群馬県西部に移動, その後一時天気は回復し浅間山の噴煙が見えたが 14 時頃から浅間山の方面に積乱雲が発達し 14 時 42 分の爆発の際浅間山は積乱雲に覆われていた。

14 時 42 分突如ドーンという爆発音の後ゴーゴーという物凄い鳴動が始まり 17 分間続いた。雷雲に包まれているため詳細は不明であるが, 海拔 1,800 m 位迄火山弾の落ちるのが見えた。黒褐色の噴煙は約 7,000 m に達し, 南東に流れるのが雷雲の中から見え, 14 時 50 分には測候所構内にパラパラ音を立てて 2 糶大の砂礫が降り始め, 15 時 10 分には砂灰と変わり, 雷雨と共に降り付近一帯を暗くして物凄い強雷雨となった。また群馬県側からの観測によると, 噴出の状態は上層風が弱かったせいもあるが, 垂直に上昇するものの他に, 横に広がるような噴煙が同時に発生し

た。空気振動は殆ど瞬間的であったことが微気圧計の振動の上に現れている。

地震動最大振幅（追分）E~W, 58.9 μ , N~S, 53.9 μ ,
空気振動（軽井沢） ± 3.2 mb, 不明瞭。

降灰砂礫の量 追分 65g/m²（14時53分~15時13分）
軽井沢 1,370g/m²（14時50分~15時10分）

この爆発により登山者が1名行方不明になった（登山規制中）。軽井沢付近には降灰砂礫著しく、降灰地域は南東（南南東）にのびて太平洋に達した。降灰により野菜・桑園・牧草その他に被害が生じた。

降灰地域：軽井沢・秩父・甲府・船津・東京西部・三島・網代。

爆音聴取地域：軽井沢・長野・前橋，（気象要覧，1961年8月），“爆発史集追録第3号”。

注91，8月18日の噴火の際行方不明となった登山者は、翌年輕井沢口登山道付近において死体で発見され、遺族の検証により東京都のY氏であることが判明した。

8月19日，小噴火，(D)，07時50分，濃黒褐色噴煙極多量噴出，4,000m上昇南東に流れる。08時05分離山上空に達する。

8月20日，小噴火，(D)，詳細不明，峰の茶屋降灰，“爆発史集追録3号”。

9月5日，小噴火，(D)，06時55分，灰褐色噴煙中量噴出，400m昇り東北東に流れる。

小噴火，(D)，07時01分，灰褐色噴煙中量噴出，400m昇り東北東に流れる。

小噴火，(D)，09時21分，灰褐色噴煙中量噴出，400m昇り東北東に流れる。

小噴火，(D)，10時13分，灰褐色噴煙中量噴出，700m昇り東北東に流れる。

9月9日，小噴火，(D)，06時40分，灰褐色噴煙中量噴出，300m昇り北東に流れる。

小噴火，(D)，08時15分，灰褐色噴煙中量噴出，200m昇り北東に流れる。

小噴火，(D)，08時58分，灰褐色噴煙中量噴出，200m昇り北東に流れる。

9月10日，小噴火，(D)，10時29分，灰褐色噴煙多量噴出，1,000m昇り東方に流れる。

9月15日，小噴火，(C)，20時17分，降雨中のために詳細不明であるが，突如ボンという爆発音が2度起こり爆発する。

地震動最大振幅（追分）E~W, 31.7 μ , N~S, 18.7 μ .
気圧振動（軽井沢） ± 1.2 mb, (追分) ± 0.9 mb. 自記

気圧計記録“爆発史集追録第3号”，（気象要覧，1961年9月）。

9月18日，小噴火，(D)，13時28分，灰褐色噴煙多量噴出，400m昇り東北東に流れる。

9月19日，小噴火，(D)，08時10分，灰褐色噴煙多量噴出，1,000m上昇東南東に流れる。

“爆発史集追録第3号”によれば，16時10分まで連続小噴火，03時04分より09時35分まで火山性微動連続，09時35分以後火山性微動断続する。

注92，この頃より浅間山火口底にマグマが上昇し，しばしば火口内においてストロンボリ式活動を開始する。噴出した火山岩片などの大部分は火口内に落下するが，時によりその一部，火山灰などは火口外に放出される（Minakami *et al.*, 1970）。このような現象は，たとえば，1909年9月25日には，火口丘上にまで時折火山弾が飛ぶのが観察されているが（山崎・中村，1911），それと同様な状態にあると考えられる。

9月19日，小噴火，(D)，08時23分，灰褐色噴煙多量噴出，1,200m上昇東南東に流れる。

小噴火，(D)，09時18分，灰色噴煙多量噴出，1,000m上昇東南東に流れる。

小噴火，(D)，10時48分，灰褐色噴煙多量噴出，1,200m上昇東南東に流れる。

小噴火，(D)，10時54分，灰色噴煙極多量噴出，1,200m上昇東南東に流れる。

小噴火，(D)，10時58分，灰褐色噴煙極多量噴出，1,000m上昇東南東に流れる。

小噴火，(D)，11時40分，灰褐色噴煙極多量噴出，800m昇り東南東に流れる。

小噴火，(D)，13時50分，灰褐色噴煙極多量噴出，400m昇り東方に流れる。

小噴火，(D)，15時54分，灰褐色噴煙極多量噴出，1,400m上昇東方に流れる。

9月20日，小噴火，(D)，04時55分，灰色噴煙多量噴出，800m昇り東南東に流れる。

小噴火，(D)，05時41分，灰色噴煙多量噴出，600m昇り東方に流れる。

小噴火，(D)，06時01分，灰白色噴煙中量噴出，300m昇り東方に流れる。

小噴火，(D)，06時53分，灰白色噴煙中量噴出，600m昇り東方に流れる。

小噴火，(D)，07時02分，灰白色噴煙中量噴出，600m昇り東方に流れる。

- 小噴火, (D), 09 時 05 分, 灰白色噴煙中量噴出, 400 m 昇り東南東に流れる。
以後微噴火連続する“爆発史集追録第 3 号”。
- 小噴火, (D), 14 時 21 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 1,700 m 上昇東南東に流れる“爆発史集追録第 3 号”。
- 10 月, 気象要覧(1962 年 10 月)には, 合計 11 回の噴火があったと記されているだけである。“爆発史集追録第 3 号”により 10 月の記録を記載する。
- 10 月 1 日, 小噴火, (D), 14 時 06 分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 2,500 m 上昇東北東に流れる。小諸にて観測。
- 10 月 3 日, 小噴火, (C), 「ドン」という爆発音聞こえる。霧のため詳細不明。
地震動最大振幅(追分) E~W, 18.9 μ , N~S, 10.4 μ .
気圧振動 (軽井沢) ± 1.5 mb.
- 10 月 6 日, 小噴火, (C), 00 時 12 分, 真夜中で就寝中のために詳細は不明。
地震動最大振幅(追分) E~W, 15.6 μ , N~S, 8.6 μ .
気圧振動 (軽井沢) ± 0.9 mb.
- 小噴火, (C), 02 時 58 分, 真夜中で就寝中のため爆発音不明, 戸障子がガタガタと動きゴーゴーという遠雷のような鳴動が約 2 分間あり。
地震動最大振幅(追分) E~W, 22.0 μ , N~S, 12.8 μ .
気圧振動 (軽井沢) ± 0.9 mb.
- 小噴火, (D), 03 時 36 分, 詳細不明, 噴煙 1,000 m 上昇南東に流れる。
- 小噴火, (D), 07 時 02 分, 濃灰白色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東北東に流れる。
- 小噴火, (D), 08 時 09 分, 濃灰白色噴煙極多量噴出, 1,300 m 上昇東北東に流れる。
- 小噴火, (D), 09 時 03 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 300 m 昇り東北東に流れる。
- 10 月 7 日, 小噴火 (C), 17 時 05 分, 山頂は見えなかったが, ドンという爆発音がした。
後 7 秒して 2 度目のドンという爆発音, 弱い鳴動が 17 時 05 分~17 時 06 分間こえた。
濃灰褐色の噴煙が極多量噴出, 4,000 m 上昇東方に流れる。
地震動最大振幅(追分) E~W, 37.9 μ , N~S, 23.2 μ .
気圧振動 (軽井沢) ± 1.8 mb.
- 10 月 12 日, 小噴火, (D), 15 時 00 分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東南東に流れる。
- 10 月 13 日, 小噴火, (D), 07 時 33 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 600 m 昇り東南東に流れる。
以後, 微噴火連続する。
小噴火, (D), 12 時 22 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 800 m 昇り東南東に流れる。
- 10 月 24 日, 小噴火, (D), 16 時 20 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 600 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火, (D), 16 時 46 分, 濃灰褐色噴煙多量噴出, 700 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火, (D), 17 時 12 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 800 m 昇り東方に流れる。
- 10 月 30 日, 小噴火, (D), 12 時 00 分。
- 10 月 31 日, 小噴火, (D), 00 時 00 分,
- (1) 降灰: 国土計画 KK 鬼押し出し園の話によると, 30 日正午頃から六里ヶ原方面に火山灰が連続的に降り 31 日早朝まで続き, 一面にセメントを撒き散らしたようになる。
 - (2) 鳴動: 29 日 21 時頃から時々聞こえ, 30 日 21 時頃前後に最盛期となり夜半頃まで続く。
 - (3) 火山性地震: 29 日 19 時頃から地震頻発し始め, 30 日 1 時頃から連続的となり, 21 時頃最盛期(全振幅 20 μ 程度)となる。その後 22 時 30 分頃より次第に衰え 23 時 30 分頃より急激に減少する。31 日 1 時頃平常に戻る“爆発史集追録第 3 号”。
- 11 月, 気象要覧(1961 年 11 月)には, 浅間山に全月中に合計 40 回の爆発があったとある。“爆発史集追録第 3 号”により活動を記録する。
- 11 月 5 日, 小噴火, (C), 07 時 52 分, 雲のため見えないがドーンという爆発音とともに戸障子がゆれた。鳴動はなかった。
地震動最大振幅(追分) E~W, 55.6 μ , N~S, 31.7 μ .
気圧振動 (軽井沢) ± 1.8 mb.
- 小噴火, (D), 09 時 18 分, 雲のため見えないが峰の茶屋より連絡, 降灰, 09 時 50 分~10 時 10 分, 追分震動全振幅 4 μ .
- 11 月 6 日, 小噴火, (D), 11 時 49 分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 600 m 昇り東北東に流れる。
- 小噴火, (D), 15 時 02 分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 600 m 昇り東方に流れる。
- 11 月 7 日, 小噴火, (D), 11 時 57 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 400 m 昇り東北東に流れる。
- 小噴火, (D), 14 時 10 分, 濃灰褐色噴煙中量噴出, 200 m 昇り東方に流れる。
- 小噴火, (D), 15 時 10 分, 灰白色噴煙中量噴出, 100 m 昇り西南西に流れる。
- 小噴火, (D), 15 時 58 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 800 m 昇り南西に流れる。
- 小噴火, (D), 16 時 07 分, 濃灰褐色噴煙極多量噴出, 800 m 昇り南南西に流れる。

小噴火, (C), 21時53分, 天気良く爆発の様に見える。かなり大きなドンという爆発音に続いて鳴動5分間, 濃灰褐色の噴煙極多量噴出, 3,000m上昇南東に流れる。軽井沢には火山礫の落下22時04分~22時14分, 降水量: 軽井沢では42g/m², 追分では: 微量, 火山礫の大きさ, 軽井沢駅構内1cm, 22時20分より一杯水(剣ヶ峰東側)付近より山火事発生し8日4時頃, 消防団により消火, 焼失面積: 30ヘクタール。地震動最大振幅(追分) E~W, 37.8 μ , N~S, 26.1 μ 。気圧振動 (軽井沢) ± 2.9 mb。

“爆発史集追録第3号”

11月14日, 小噴火, (D), 10時40分, 灰褐色噴煙中量噴出, 700m昇り南方に流れる。

11月15日, 小噴火, (D), 11時23分, 灰褐色噴煙多量噴出, 400m昇り南方に流れる。

小噴火, (D), 13時24分, 灰褐色噴煙多量噴出, 700m昇り東方に流れる。

小噴火, (D), 13時55分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600m昇り東方に流れる。

小噴火, (D), 13時58分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600m昇り東方に流れる。

小噴火, (D), 14時32分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600m昇り東方に流れる。

小噴火, (D), 15時26分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,000m上昇東方に流れる。

小噴火, (D), 15時53分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600m昇り東方に流れる。

小噴火, (D), 16時02分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600m昇り東方に流れる。

小噴火, (D), 17時00分, 灰褐色噴煙多量噴出, 800m昇り東方に流れる。

小噴火, (D), 17時16分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,000m上昇東方に流れる。

小噴火, (D), 20時58分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 800m昇り東方に流れる。

11月16日, 小噴火, (D), 06時32分, 灰褐色噴煙中量噴出, 600m昇り南南西に流れる。

小噴火, (D), 06時38分, 灰褐色噴煙中量噴出, 600m昇り南南西に流れる。

小噴火, (D), 08時15分, 灰褐色噴煙多量噴出, 1,000m上昇南方に流れる。

軽井沢測候所に微量の降灰, 08時34分~08時52分。

小噴火, (D), 08時26分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 700m昇り南方に流れる。

小噴火, (D), 09時40分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600

m昇り南南東に流れる。

小噴火, (D), 09時59分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 1,000m上昇南東に流れる。微かに鳴動を聞く。

小噴火, (D), 10時06分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 800m昇り南東に流れる。

小噴火, (D), 10時33分, 灰褐色噴煙多量噴出, 600m昇り南東に流れる。

小噴火, (D), 10時46分, 灰色噴煙極多量噴出, 700m昇り南東に流れる。

小噴火, (D), 11時08分, 濃灰色噴煙極多量噴出, 800m昇り東南東に流れる。

小噴火, (D), 11時12分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 800m昇り東南東に流れる。

小噴火, (D), 11時24分, 灰褐色噴煙極多量噴出, 1,000m上昇東方に流れる。

小噴火, (D), 11時56分, 濃灰色噴煙極多量噴出, 700m昇り東方に流れる。

小噴火, (D), 12時04分, 濃灰色噴煙極多量噴出, 800m昇り東方に流れる。

小噴火, (D), 12時08分, 濃灰色噴煙多量噴出, 600m昇り東方に流れる。

小噴火, (D), 12時26分, 淡灰褐色噴煙多量噴出, 600m昇り東方に流れる。

小噴火, (D), 12時31分, 淡灰褐色噴煙極多量噴出, 800m昇り東方に流れる。

小噴火, (D), 12時56分, 淡灰褐色噴煙多量噴出, 600m昇り東北東に流れる。

小噴火, (D), 13時15分, 淡灰褐色噴煙極多量噴出, 800m昇り東北東に流れる。

小噴火, (D), 15時10分, 濃灰色噴煙中量噴出, 600m昇り東北東に流れる。

12月11日, 火炎現象, 19時30分~22時の間に断続。

12月31日, 火炎現象, 18時20分~22時30分の間に断続 “爆発史集追録第3号”。

注93, 注92で述べたように, この時期浅間山火口底にはマグマが上昇していたことは多くの観察から明らかである。1961年内に活動が衰え, 火口底には上昇してそのまま冷えたマグマがドーナツ状に残っていた。このような冷えた溶岩は次の噴火により火口外に放出されることになる。

1961年浅間山活動の要約

1960年に引き続き1961年前半は静穏な状態が続いた。8月を迎えて活動を再開する。

8月18日、大噴火(B)雲中で詳細不明、噴煙南東に流れる。行方不明者1名を出し、翌年遺体発見される。

19日・20日、小噴火(D)各1回、(8月噴火回数、大噴火(B);1回、小噴火(D):2回)

9月5日、小噴火(D)4回、9日、小噴火(D)3回、10日、小噴火(D)1回、15日、小噴火(C)1回、18日、小噴火(D)1回、19日、小噴火(D)9回、連続小噴火続く、微動連続、ストロンボリ式噴火を火口内で続けていると推定される。20日、小噴火(D)7回、微噴火連続、(9月噴火回数、小噴火(C)1回、(D)26回以上)

10月1日、小噴火(D)1回、3日、小噴火(C)1回、6日、小噴火(C)2回、(D)4回、7日、小噴火(C)1回、12日、小噴火(D)1回、13日、小噴火(D)2回、24日、小噴火(D)3回、30日、小噴火(D)1回、31日、小噴火(D)1回、29日夜より30日の22時頃まで地震連続、降灰を伴う(微噴火連続)(10月噴火回数、小噴火(C):4回、(D):13回以上)

11月5日、小噴火(C)1回、(D)2回、6日、小噴火(D)2回、7日、小噴火(C)1回、(D)5回、14日、小噴火(D)1回、15日、小噴火、(D)11回、16日、小噴火(D)20回、(11月噴火回数、小噴火(C):2回、(D):41回以上)

12月、11日、31日に火炎現象。

(AVO噴火回数、1月~7月、0回、8月:8回*、9月:16回*、10月:8回*、11月:8回*、12月:0回、*印は連続小噴火を除外してある)

注94、1964年(昭和39年)4月1日、追分観測所を統合して軽井沢測候所となる。場所は追分観測所のあった位置に移転する。元の軽井沢測候所は廃止する。

128) 1965年(昭和40年)の活動

1961年の活動が衰退した後、浅間山に再び弱い噴火が発生したのは1965年の事である。しかし微噴火を1回生じただけで再び静穏な状態に戻った。

1965年5月23日、小噴火(D)、14時49分頃、小爆発(小噴火のことであろう)があり、灰白色の噴煙を1,000mの高さに噴き上げた。降灰は極めて僅かで被害はなかった。この爆発(噴火)は昭和36年11月16日以来のものである。これ以来時々多量の噴煙を噴出した。また火口底では鳴動が発生した(気象要覧、1965年5月)。

1965年浅間山活動の要約

5月23日に小噴火をおこなったが、この活動は本格的にマグマが火口に上昇して生じたものではなくて、火口内の噴気孔が詰まって発生したものと推定される。火映現象なども観察されなかったのは当然といえる。

129) 1973年(昭和48年)の活動

1972年11月末、弱い火映現象が北側より望見され活動再開の兆しが現れた。同じ頃より火山性地震の発生数が少しずつ増加し始めた。年を越えて噴煙量の増加の傾向は続き、地震数の増加傾向は止まなかったが、1月末には発生数の異常な減少が生じた。しかし、2月1日早朝に火映が観察され、火山性地震が頻発し始めて噴火につながった。

2月1日、大噴火(B)、19時20分、大きな爆発音を伴って爆発した。この爆発は昭和40年5月23日の小さな活動を除けば、昭和36年11月16日の噴火以来約11年3ヶ月ぶりの本格的な活動である。山頂火口の南東6~7kmの地点でコブシ大の噴石が降下し、空振のためガラス戸の破損もあった(気圧計による気圧変化は4.1mbである)。火山灰は南東に流れ太平洋岸に達した。気象要覧(1973年2月)では、噴火の規模を便宜的に大きい方から大爆発・中爆発・小爆発・小噴火・微噴火に分類している。その分類によると、この噴火は中爆発である(気象要覧、1973年2月)。

大きな爆発音によって窓ガラス、建物が揺れ、さらに鳴動を伴って噴煙を噴き上げた。爆発当時は、山頂は薄雲に覆われ、暗闇のため爆発の全容は明らかではないが、雲の切れ間から見ると、標高2,200m付近から山頂にかけて赤熱の噴出物が望見されたが短い時間で消えた。立ち昇る噴煙の中に火山雷が発生し、北側斜面には赤いすじのようなものが見えたという。翌日の観察によれば小規模の火砕流であった。噴煙の高さは明らかでないが、西北西の風によって富士見坂、雪崩の沢、千ヶ滝、万山望、小瀬、旧軽井沢方面に流れていった。峰の茶屋付近は噴煙の主軸から外れ、降灰、礫の量は少なく、噴火後約2分程で、大豆から鶏卵大の礫が1m²あたり1~2個降下しただけであった。道路上に落下した約500gの噴石の一つはアスファルトを溶かして路面に食い込むものもあった。

火口から1,650m(水平距離)、標高2,230mの地点にある富士見坂(注、この地名は浅間火山観測所のスタッフが便宜的につけたもので、戦前の論文には富士見平と呼ばれている地点の僅か下方にあたると考えられる)観測点の地震計は、信号搬送用の通信線が観測点の近くで、この噴火の噴石により傷つき観測に支

障を来たした。また、噴火発生後 170 秒で観測所は停電となった。これは、火口から約 5.2 km、標高 1,340 m の地点で、噴石降下により電力送電線が切断されたためである。この噴火の運動エネルギーは地震計記録の振幅による水上の公式 (Minakami, 1942) によると、 1.2×10^{19} エルグである (下鶴・他, 1975)。

注 95、この 2 月 1 日の噴火では、1959 年 4 月 19 日の噴火に続いて、新しいタイプの被害が発生した。それは自動車のフロントガラスの破損である。とくに公式の調査を実施したわけではないが、軽井沢町だけでも 20 台を越える車が被災したとの事である。この事実は故内堀貞雄氏が調べられたものである。走行中に径数 cm 以下でも硬質の礫が落下してフロントガラスにあたると割れてしまうとのことで、今後の噴火の際には、出来るだけ噴煙流路下は走行しないように注意する必要がある。

2 月 3 日、小噴火 (D)、06 時 20 分～08 時 20 分、黒灰色噴煙稍多量噴出し 400 m 上昇する。降灰を伴った。

小噴火 (D)、09 時 50 分～11 時 30 分、黒灰色噴煙多量噴出し 300 m 昇り東側に流れた。降灰あり (気象要覧, 1973 年 2 月)。

2 月 5 日、小噴火 (D)、22 時 26 分～22 時 31 分、夜間のため詳細不明、山の北から東側にかけて降灰あり (気象要覧, 1973 年, 2 月)。

2 月 6 日、小噴火 (D)、16 時 27 分、黒灰色噴煙中量噴出する。噴煙 200 m 昇る。

小噴火 (C)、16 時 28 分、爆発音は小さく、空振も小 (気圧計変化 0.1 mb)、黒褐色噴煙極多量噴出し 2,500 m 上昇する (気象要覧, 1973 年 2 月)。

小噴火 (D)、16 時 32 分、黒褐色噴煙極多量噴出し、2,500 m 上昇する (気象要覧, 1973 年 2 月)。

東京大学地震研究所浅間火山観測所における観測によれば、噴火発生時は 16 時 27 分 20 秒と 16 時 32 分の 2 回に分かれ、大きな爆発音を伴わず、鳴動を伴って黒煙を噴き上げた。最初は穏かな噴火で始まり、鳴動を次第に増しながら噴煙量を増していった。5 分程して最初の噴煙がやや収まりかけた頃、再び鳴動を伴って大量の黒煙を 3 分間程噴出した。

爆発地震は他の単発的噴火と異なって、やや短周期で、振幅が次第に増大する形である。

噴煙は東北東に流れ、噴煙流の南端にあたる峰の茶屋付近でも最大 1 cm 径の礫や細かい灰が多く降った。噴煙の軸にあたる国道ゲート付近では、大小の礫や火山灰が積もった。

この噴火で小規模の火砕流が発生し、山頂釜山付近を覆い、一部は南西側の前掛山を越え、北側山腹では、火口から 400～500 m 程流下した。噴煙は遠方まで流れ、前橋や高崎でも一時、視界が落ちる程度に降灰があり、自動車はライトをつけて走行したほどであると報告されている。噴火後も大振幅の脈動が発生し、21 時頃の調査では、ゲート (西部有料道路料金徴収所) 付近で、サンサンと灰が降った。7 日 02 時 40 分まで脈動が時々大となることから考えると、連続的に微噴火を続けていた模様であり、翌日の 02 時頃まで降灰が続いた。

地震動による (水上公式) 運動エネルギーは前の噴火が 1.8×10^{18} エルグであり、後の噴火が 1.0×10^{18} エルグである (下鶴・他, 1975)。による。

小噴火 (D)、16 時 52 分～18 時 00 分、黒灰色噴煙極多量噴出、300 m 昇る。

小噴火 (D)、23 時 34 分、夜間詳細不明、東側に降灰あり (気象要覧, 1973 年 2 月)。

2 月 8 日、小噴火 (D)、06 時 45 分～07 時 10 分、灰褐色噴煙稍多量噴出し、300 m 昇る (気象要覧, 1973 年 2 月)。

2 月 9 日、小噴火 (D)、09 時 10 分、灰褐色噴煙多量噴出し、1,500 m 上昇する (気象要覧, 1973 年 2 月)。

この噴火は、下鶴・他 (1975) では 08 時 58 分 40 秒と表示されている。

小噴火 (D)、09 時 40 分、灰褐色噴煙多量噴出し、300 m 昇る。

小噴火 (D)、09 時 15 分、灰褐色噴煙多量噴出し、300 m 昇る。

小噴火 (D)、09 時 18 分～09 時 38 分、灰褐色噴煙稍多量噴出し、300 m 昇る。

小噴火 (D)、10 時 30 分～10 時 48 分、灰褐色噴煙多量噴出し、300 m 昇る。

小噴火 (D)、10 時 50 分～10 時 55 分、灰褐色噴煙稍多量噴出し、300 m 昇る。

小噴火 (D)、10 時 58 分～11 時 06 分、灰褐色噴煙稍多量噴出し、300 m 昇る。

小噴火 (D)、11 時 08 分～11 時 45 分、灰褐色噴煙稍多量噴出し、300 m 昇る。

小噴火 (D)、11 時 47 分～12 時 56 分、灰褐色噴煙稍多量噴出し、300 m 昇る。

小噴火 (D)、13 時 06 分～13 時 10 分、灰褐色噴煙稍多量噴出し、200 m 昇る (気象要覧, 1973 年 2 月)。

2 月 10 日、小噴火 (D)、13 時 34 分～13 時 43 分、灰白色噴煙稍多量噴出し、300 m 昇る。

小噴火 (D), 13 時 50 分~13 時 57 分, 灰白色噴煙多量噴出し, 250 m 昇る.

小噴火 (D), 16 時 20 分~16 時 23 分, 灰白色噴煙中量噴出し, 150 m 昇る.

2 月 11 日, 小噴火 (C), 04 時 20 分, 早朝のため詳細は不明, 爆発音はそれほど大きくはなかった. 空振も小さく (気圧計による記録 0.4 mb), 鳴動も僅かであった. 東側に火山礫, 灰が降った (気象要覧, 1973 年 2 月).

この噴火を著者は, 浅間火山観測所で体験した. 就寝中であつたが, 爆音によって目を覚ましたが, とくに大きな噴火と思えなかつた. 噴煙は観測所付近上空にながれ火山礫の落下音が聞こえたがその数はさほど多くなかつた. 降灰も少量であつた.

この噴火を御代田町より写真撮影した人がいて, その写真によると, 山頂より南側山腹にかけて赤熱噴出物が分布し, とくに釜山付近から東前掛山あたりまで真っ赤であり, 中に点々と大きい赤熱の火山弾らしいものが見られる. また火柱があり火山雷も発生していた. この噴火の地震計振幅による運動エネルギーは 1.5×10^{18} エルグである (下鶴・他, 1975).

小噴火 (D), 04 時 23 分~05 時 55 分, 灰白色噴煙多量噴出し, 300 m 昇る. 小微動を伴う (軽井沢測候所 A 観測点).

小噴火 (D), 06 時 13 分~06 時 22 分, 灰褐色噴煙多量噴出し, 300 m 昇る.

小噴火 (D), 06 時 55 分~07 時 17 分, 灰褐色噴煙稍多量噴出し, 250 m 昇る.

小噴火 (D), 07 時 55 分, 黒褐色噴煙多量噴出し, 600 m 昇る.

小噴火 (D), 07 時 56 分~09 時 37 分, 灰褐色噴煙稍多量噴出し, 300 m 昇る.

小噴火 (D), 17 時 08 分~17 時 45 分, 灰白色噴煙稍多量噴出し, 300 m 昇る.

小噴火 (D), 18 時 34 分~18 時 44 分, 灰白色噴煙稍多量噴出し, 200 m 昇る.

2 月 13 日 (D), 小噴火 (D), 09 時 43 分~09 時 45 分, 灰白色噴煙稍多量噴出し, 300 m 昇る (気象要覧, 1973 年 2 月).

小噴火 (D), 12 時 59 分, 灰白色噴煙中量噴出し, 500 m 昇る.

小噴火 (D), 15 時 13 分~16 時 11 分, 灰白色噴煙稍多量噴出し, 300 m 昇る. 降灰あり (北側).

小噴火 (D), 16 時 22 分~16 時 32 分, 褐色噴煙稍多量噴出し, 300 m 昇る.

小噴火 (D), 16 時 42 分~16 時 45 分, 灰白色噴煙稍多量噴出し, 300 m 昇る.

小噴火 (D), 16 時 55 分~17 時 02 分, 灰白色噴煙稍多量噴出し, 250 m 昇る.

小噴火 (D), 17 時 13 分~17 時 59 分, 灰白色噴煙中量噴出し, 300 m 昇る.

2 月 14 日, 小噴火 (C), 11 時 35 分, 爆発音に続いて鳴動を伴いながら黒灰色の噴煙をあげた. 噴煙の高さは 2,000 m に達し, 西風により峰の茶屋方面に流れた. 鳴動に混じり雷鳴のような音も聞こえた. 空振は弱かつたが, 窓ガラスなどをビリビリと振動させた. 標高 2,000 m より上の山体のところどころに, 火山弾落下による土煙が見えた. 噴煙が高く上昇し頭上 (火山観測所) を通過して間もなく礫の降下が始まり, 続いて火山灰が降ってきた. 噴煙の主軸は東北東に流れ, 火口から 4 km の付近では最大直径 3 cm 程度の火山礫と多くの灰が降った. 観測所近辺では径 1 cm 程度の礫が降った. 松井田, 前橋, 栃木県方面に降灰があつたと報告されている. この噴火の水上公式による運動エネルギーは 2.0×10^{18} エルグである (下鶴・他, 1975) および著者の観察. この噴火の気圧計による気圧変化は 0.4 mb である (気象要覧, 1973 年 2 月).

小噴火 (D), 14 時 52 分~15 時 06 分, 灰色噴煙稍多量噴出し, 200 m 昇る.

小噴火 (D), 15 時 15 分~16 時 05 分, 灰色噴煙稍多量噴出し, 200 m 昇る.

小噴火 (D), 17 時 18 分~17 時 35 分, 灰色噴煙稍多量噴出し, 200 m 昇る.

小噴火 (D), 17 時 56 分~18 時 18 分, 灰色噴煙稍多量噴出し, 200 m 昇る (気象要覧, 1973 年 2 月).

2 月 15 日, 11 時 13 分~11 時 40 分, 黒灰色噴煙中量噴出し, 300 m 昇る (象要覧, 1973 年 2 月).

小噴火 (D), 11 時 55 分~12 時 10 分, 黒灰色噴煙稍多量噴出し, 300 m 昇る.

小噴火 (D), 12 時 24 分~12 時 38 分, 黒灰色噴煙稍多量噴出し, 300 m 昇る.

注 96, 2 月 11 日, 14 日の小爆発を経験した浅間火山観測所のスタッフは, 次の噴火について或る予測を立てた. その方法は, 今回の一連の噴火についてその活動パターンを調べ, 噴火前における類似した地震活動, 噴煙の状態などを考察して予測を行うものである. 前回 14 日 11 時 35 分の小爆発では, 確かにこの方法は有効であるとの確信を得た. 2 月 15 日の午後にも, 爆発を予期される地震活動と噴煙の状態が出現した. そこで然るべき

機関、事業所に連絡するとともに、観測所では展望の良い2階の窓辺に観測計器、カメラ、16mm撮影機などを用意して待ち構えた。そして予期したとおりに爆発が発生したのである。

この方法は、浅間山の一連の活動が或る定まったパターンで発生するような活動形態を示す場合には、極めて適切で有効と考えられる。ただし、この方法を実行するには多年にわたる地震の観測、解析の経験と噴煙の観測経験、そして浅間山の噴煙状態が十分に観察できる場合という条件が絶対に必要である。

2月15日、小噴火(C)、16時56分、注96、に述べたように火山観測所の2階窓際で山を観察中に爆発した。

はじめ火口より噴煙がむくりと頭を出し速い速度で上昇した。その前は白煙が極めて微かに認められる程度であった。噴煙が噴出し上昇をはじめてから暫くして(恐らくは10数秒くらい)「パーン」と乾いた割合高周波で力強い音響が聞えた。それが爆発音であった。昔の噴火観察の報告書にしばしば見られる銃の発射音という表現がまさにぴったりの音響である。爆発音が聞えるとともに、鳴動が聞え始めたがさほど長くは続かなかった。爆発音が聞えて間もなく山体の上部に火山弾落下による土煙がいくつか見え始めた。かなり上空に上がった噴煙から、正面に見える山体の右肩に火山雷が落ちるのが確認できた。この火山雷は24コマ撮影の16mmフィルムには1コマに映っているだけであった。噴煙は4,000m上昇したという。

やがてターンターンと大型の火山礫が屋根に落下する音が聞え、次第に不定形な硬質火山礫の落下が激しくなった。観測所(旧館)2階の窓の前には、新館に向う通路の屋根があり、その屋根に落下して飛び跳ねる礫が、窓から飛び込んできて、危険を感じるほどであった。なお、この噴火の水上公式による運動エネルギーは、 4.3×10^{18} エルグである(下鶴・他、1975)。

火口からは噴火後も連続的に噴煙を噴出し東側に流れていた。夜に入っても小噴火が続き降灰が見られた。

23時50分頃まで脈動が連続したので、この間は小噴火が連続したものと推定される。翌朝、浅間火山観測所の周辺は灰色の世界となっていて、観測所玄関脇の石楠花の花蕾が灰を被り大層印象的であった。

この噴火による気圧変化は1.8mbである(気象要覧、1973年2月)。

2月16日、17日、18日の連続的小噴火。

2月15日16時56分の小爆発後、火山性脈動が23時50分頃まで続いた後、一旦止み、2月15日07時頃よ

り再び出現し、同時に微噴火が発生し始め、17日03時より18日21時まで、およそ3,900回以上を数えた。個々の微噴火にはそれぞれ噴火地震が対応し、噴火の間には火山性脈動が相当の振幅で記録されている。

噴煙は千ヶ滝、中軽井沢、軽井沢方面に流れ、細かい火山灰が多量に降った。降灰は17日02時頃まで続いた後次第に収まったが、03時頃より再び活発となり、鬼押し出し方面では鳴動が聞えた。17日夜半には風向きが変わり、降灰は北東方面に移って、黒豆河原付近に細かい灰を降らせた。17日夜半から連続した微噴火は相当な鳴動を伴い、観測所でも窓ガラスを震わせた程度であった。微噴火は20~60秒の間隔で発生した。18日には、連続した微噴火の噴煙の塊が、噴出時間の間隔に応じた距離で、連なり流される見事な状景が観察された。微噴火の止んだ後には白煙を多量に噴出していたが、鳴動は引き続いて聞え、火映が北側から観察された(下鶴・他、1975)気象要覧(1973年2月)では次のように記されている。

2月16日、微噴火、07時14分~10時55分、灰褐色噴煙多量噴出、220m、東側に降灰。

小噴火、10時55分~15時55分、黒灰色噴煙極多量噴出、1,500m、南東側に降灰。

微噴火、15時55分~19時00分、黒灰色噴煙極多量噴出、500m、南東から東側にかけて降灰。

小噴火、16日19時00分~17日01時37分、噴煙多量噴出、1,000m。

2月17日、微噴火、01時37分~06時58分、灰白色噴煙極多量噴出、500m。

微噴火、06時58分~18日21時10分、灰褐色噴煙極多量噴出、鳴動を伴い北東側に降灰。これらの記事は下鶴・他、(1975)の論文にあるような小噴火が続いた時間を示しているだけなので、同論文を参照する必要がある。

2月18日、微噴火、連続、17日より連続(気象要覧、1973年2月)。

2月20日、小噴火(B)、09時47分、火山観測所付近は深い霧と小雨が時々降る中で「ドーン」という鈍い音と鳴動を伴いながら爆発した。爆発地震は比較的速やかに振幅が減衰している。数分後、小浅間上空あたりの雲の切れ目から黒い噴煙が北東方面に流れて行くのが望見された。火口から4km離れた県境(国境ともいう)から観測所近く約1.5kmの幅一帯に火山礫や火山灰が降った。11時30分頃には200km離れた福島県郡山市で雨に混じって降灰があったとのことである。

この噴火の空振は神奈川県箱根町宮下でも聞えた。多分外聴域に相当しよう。この噴火の水上公式による運動エネルギーは 1.0×10^{19} エルグである（下鶴・他、1975）。

3月9日、小噴火（D）、16時59分、灰白色噴煙中量噴出し200m昇る（気象要覧、1973年3月）。

3月10日、大噴火（B）、08時30分、今回の一連の噴火中で一番大きい噴火である。大きなパンという爆発音によって建物が揺れる程で、浅間火山観測所では台所と地震計煤付け室の窓ガラスが3枚割れた。

黒色の噴煙は上昇するにつれ頭が三つに分かれ、こぶしを振り上げたごとき形となりつつ成長した（下鶴・他、1975、にはこの噴火の写真が添付されている）。噴煙は約10分間継続し、穏かな西風によって東の方向に流れた。地震計の観測から、観測所付近に火山礫が降下してきたのは、噴火地震発生後4分38秒であることが分かった。峰の茶屋付近は噴煙の主軸の下にあたり、大小の礫や軽石が降ったが、降灰は比較的少なかった。今回の一連の噴火では、この噴火で始めてパン皮状火山弾および軽石の多量の噴出があった。なお、北側斜面に小規模の火砕流および融雪による泥流が発生した。前橋市で1cm大の礫が降ったほか、水戸、足利あたりまで降灰があった。この噴火の水上公式による運動エネルギーは、 1.6×10^{19} エルグである（下鶴・他、1975）による。

気象要覧（1973年3月）によれば、爆発音が2回聞えたとある。また爆発による気圧の変化は0.9mbと報告されている。

注97、この噴火における軽井沢測候所の気圧変化は、噴火の規模に比べてかなり小さく観測されている。気象要覧報告によれば、軽井沢測候所からこの噴火は観察されていない。したがって測候所は霧（雲）の中にあっただと考えられ、霧あるいは雲が噴火による気圧変化を弱めたとも考えられる。

浅間山の東方に位置する東京大学浅間火山観測所（標高1,406m）と南に在る気象庁軽井沢測候所（標高1,001m）とでは山体を望む上でかなりの違いがある。火山観測所が雲海上に出ることがしばしばあるので、この噴火はそのような状態で発生したとみられる（観測所付近ではこの噴火の撮影が可能であった）。

3月11日、小噴火（D）、11時36分、灰白色噴煙中量噴出し400m昇る。

小噴火（D）、14時49分～16時40分、灰白色噴煙稍多

量噴出し500m昇る。

3月17日、小噴火（D）、15時06分、灰白色噴煙稍多量噴出し400m昇る（象要覧、1973年3月）。

4月18日、小噴火（C）、03時15分、「ドーン」という軽い爆発音を伴って噴火した。爆発後数秒して闇の中から山頂をうかがうと、山頂より2,300mあたり東前掛付付近まで赤熱の噴出物で覆われ、一瞬、山の形が浮かんだがすぐ闇に戻った。鳴動は非常に短時間で終わり、火山雷の発生も見られなかった。噴煙は東方に流れ、峰の茶屋付近を中心に、小豆から大豆大の礫を4～5秒間降らせたが火山灰の量は極めて少なかった。峰の茶屋付近における 1 m^2 当りの礫の量は約120gと少なく、爆発地震の最大振幅の大きい割りに、継続時間の短い（2分30秒）極めて単発的な爆発であったと考えられる。この噴火の水上公式による運動エネルギーは 8.4×10^{18} エルグである（下鶴・他、1975）。

気象要覧（1973年4月）によれば、爆発音を伴い、灰色噴煙を極多量噴出して4,500m上昇した。気圧計による気圧変化は3.7mbであった。

小噴火（D）、08時43分、灰褐色噴煙少量噴出し400m昇る。

4月23日、小噴火（D）、10時45分、灰白色噴煙中量噴出し、300m昇る。

小噴火（D）、13時20分、灰白色噴煙中量噴出し、500m昇る。

小噴火（D）、16時00分、灰白色噴煙中量噴出し、500m昇る。

小噴火（D）、17時56分、噴煙中量噴出し、400m昇る。

4月24日、小噴火（D）、07時23分、灰白色噴煙少量噴出し、400m昇る（気象要覧、1973年4月）。

4月26日、小噴火（C）、爆発音を伴い灰色噴煙多量に噴出し4,000m上昇する。空振は小さかった。気圧計による気圧変化は3.0mbであった。東北東方面に降灰があった（気象要覧、1973年4月）。

爆発音は比較的大きかったが、鳴動は殆ど伴わず、1分30秒～2分で終わる極めて短い噴火であった。これまでの一連の噴火活動と比較すると、爆発音を伴った噴火のうち、この噴火の継続時間が最も短く、また、放出された噴出物の量も最も少なかった。この噴火の水上公式による運動エネルギーは 4.6×10^{18} エルグである（下鶴・他、1975）。

小噴火（D）、10時10分、灰色噴煙中量噴出し300m昇る。

小噴火（D）、10時14分、灰色噴煙中量噴出し300m

昇る（気象要覧，1973年4月）。

5月，24日には17回の噴火があった。また，12，23，25，27，28日には火口上空に火映があった。12日には鳴動を観測した。

5月24日，小噴火（D），14時10分，灰白色噴煙中量噴出し300m昇る。

小噴火（D），14時15分，灰白色噴煙中量噴出し300m昇る。

小噴火（D），14時30分，灰白色噴煙中量噴出し300m昇る。

小噴火（D），14時52分，灰白色噴煙中量噴出し300m昇る。

小噴火（D），14時54分，灰白色噴煙中量噴出し400m昇る。

小噴火（D），14時57分，灰白色噴煙稍多量噴出し400m昇る。

小噴火（D），15時05分，灰白色噴煙稍多量噴出し300m昇る。

小噴火（D），15時23分，灰白色噴煙稍多量噴出し300m昇る。

小噴火（D），15時29分，灰白色噴煙稍多量噴出し500m昇る。

小噴火（D），15時39分，灰白色噴煙稍多量噴出し400m昇る。

小噴火（D），16時09分，灰白色噴煙稍多量噴出し500m昇る。

小噴火（D），16時47分，灰白色噴煙稍多量噴出し600m昇る。

小噴火（D），16時55分，灰白色噴煙稍多量噴出し600m昇る。

小噴火（D），16時56分，灰白色噴煙稍多量噴出し600m昇る。

小噴火（D），17時01分，灰白色噴煙多量噴出し800m昇る。

小噴火（D），17時25分，灰白色噴煙稍多量噴出し800m昇る。

小噴火（D），17時30分，灰白色噴煙稍多量噴出し700m昇る。（気象要覧，1973年5月）。

6月，1，14日には山頂火口上に火映を観測した（気象要覧，1973年6月）。

1973年浅間山活動の要約

2月1日，大噴火（B），11年3ヶ月ぶり（1965年5月23日の小噴火を除く）に爆発，山麓では空振によるガラスの破損，自動車のフロントガラスの割れる被害発

生，火山灰は南東に流れて太平洋に達する。3日，小噴火（D）1回，5日，小噴火（D）1回，6日，小噴火（C）1回，（D）4回，8日，小噴火（D）1回，9日，小噴火（D）10回，10日，小噴火（D）3回，11日，小噴火（C）1回，（D）7回，13日，小噴火（D）7回，14日，小噴火（C）1回，（D）4回，15日，小噴火（C）1回，（D）3回，その後連続噴煙，16日・17日・18日，時折の休止はあったが，連続微噴火が続き大量の火山灰を噴出する。20日，小噴火（B）1回，神奈川県箱根町で音響聞える。

（2月噴火回数，大噴火（B）：2回，小噴火（C）：4回，（D）：41回以上，多数）

3月9日，小噴火（D）1回，10日，大噴火（B）1回，観測所のガラス割れる。11日，小噴火（D）2回，17日，小噴火（D）1回，（3月噴火回数，大噴火（B）：1回，小噴火（D）：4回）

4月18日，小噴火（C）1回，（D）1回，23日，小噴火（D）4回，24日，小噴火（D）1回，26日，小噴火（C）1回，（D）2回，（4月噴火回数，小噴火（C）：2回，（D）：8回）。

5月24日，小噴火（D）：17回。

6月，火映。

130) 1982年（昭和57年）の活動

1980年代に入り1981年には3月7日～11日，8月10日～12日，さらに1982年1月17日には火山性地震が群発した（日本活火山総覧第2版）。そして4月26日には，9年ぶり（1973年5月以来）に噴火した。

4月26日，小噴火（C），02時25分，突然に噴火した。

軽井沢測候所では地震計（A56型，300倍）に，最大振幅35ミクロンの噴火による地震が記録されたが，爆発音等は観測されなかった。この噴火後微噴火が06時40分頃まで断続した。軽井沢測候所では，02時50分から06時00分まで降灰があり，120g/m²の火山灰を観測し，08時30分まで火山ガスの臭いがした。この噴火による降灰は，下層の北東風と上層の北西風に乗って，長野県の一部，群馬県南部，埼玉県南東部，東京都東部，千葉県西部で認められた。（降灰分布図は，気象要覧，1982年4月，に記載されている。降灰の総量は地震研究所の調査概算によれば，約2万トンである（気象要覧，1982年4月）。

噴火の概況，目撃談，

一北麓の浅間園には当夜当直者が2名いた。当直室は南向きで窓を開くと浅間山が見えるようになっている。「窓がガタガタという音がして，風かと思窓を開

けると、ドーンという音が聞えた。それと同時に、火柱と稲光が見えた。火柱が立ったすぐ後、火口より真っ赤なもの（火砕流）が下に向かって流れ出た。噴火中（10～15分程度か）地鳴りが聞えた。地鳴りの他にジューという音も聞えた。これは雪が融ける音だと感じた」という。

一北東側群馬県浅間牧場付近の人によれば、「鳴動が暗闇の中でかなり大きく聞え、外へ飛び出してみると、山頂火口上空で閃光（火山雷）が何筋も見えた。この光景に驚いて家から飛び出して来た」という。

一南の軽井沢町大日方付近でも火山雷が見えた。

上記、噴火の概況は、下鶴・他（1982）より引用した。同論文には噴火の観測結果および解析結果が詳細に報告されている。

10月2日、小噴火（D）、09時58分、群馬県長野原町の浅間牧場や鬼押出園に、極めて少量の火山灰が降った（気象要覧、1982年10月）。

1982年浅間山活動の要約

1973年5月以来9年ぶりに噴火が発生した。

4月26日、小噴火（C）1回、未明に突然噴火した。北側に火砕流が流下し、雪を溶かして土石流が流れた。火山灰は南東に流れ太平洋に達した。

10月2日、小噴火（D）、北側山麓群馬県長野原町の浅間牧場、鬼押出園などに僅かな降灰があった。

131) 1983年（昭和58年）の活動

4月8日、中噴火（B）、01時59分、噴煙は夜間のため観測できなかったが、中程度の爆発音が聞え、軽井沢測候所（火口南7.7km）の地震計には、最大振幅125ミクロンの爆発地震を、また自記気圧計には1.4mbの空気振動を記録した。噴火の際火口上に電光と火柱がみられた。爆発音は火口の東50km離れた前橋地方気象台や火口の北東約170km離れた若松測候所でも聞えた。浅間山周辺には火山灰や火山礫が降り、山腹（南斜面）の一部で一時山火事が発生した。また、火山灰は長野県のほか、関東地方北部から福島県の一部で認められ、太平洋岸に達した。この噴火による被害はとくになかった。この噴火発生の直前には、火山性地震の発生回数は非常に少なくなった（気象要覧、1983年4月）。

132) 1990年（平成2年）の活動

この年の3月より、よく1991年2月にかけてしばしば地震、微動が発生した。その間、7月20日に微噴火が

観測された。

7月20日、小噴火（D）、火口から東～東北東山麓の狭い範囲で微量の降灰があった気象庁（1991）。

9. おわりに

現在までに様々な形で提示されていた浅間山の活動の記録について整理をおこない、活動の内容を記述した。浅間山の活動の長期的な推移を考察するためには、記録の質、精度等を同等に整えることが望ましい。しかし、時間の流れとともに、浅間山活動の観察者の注目点が異なっていくといった変化が生じてくる。例えば、20世紀前半における噴火による農作物被害をみても、戦前は農作物のうち、とくに養蚕に關係する桑葉の被害が重視されていた。現在では浅間山の噴火の影響を受ける地域の農産物の種類が大きく変化していると考えられるので、将来の噴火発生の際に生じる被害の質的变化が懸念される状態である。

噴火による直接的な人命被害防止については、過去の被害の経験より考えれば、巨大噴火の場合を除き、20世紀におけるような噴火活動の場合、その対策はある意味では極めて容易である。20世紀における人身災害は、山体上部の噴火による危険区域内において、すべてが発生している。したがって、被害を防ぐにはその危険域に立ち入らなければよいのである。通常の住民居住域では、特異な例外を除いては、人身被害は発生していないからである。ところで、山体上の危険域の安全を守るための噴火予知は、100%の精度を要求されよう。現状に於いては不可能なことである。この事実は十分に認識しておく必要がある。

現在では、主として防災の観点から火山噴火の予知方法の確立と、情報伝達の迅速化が社会的な要求として求められるようになった。火山活動監視観測に別の要素が加わったことになる。さらに、観測者の火山活動活発化情報の発表に関しても、利害関係者に対しての内容説明がある程度必要であり、それを怠ると風評被害発生等という思いがけぬ批判を受けることになる。

一方、現在浅間山は少なくとも、活発な活動状態ではない。最近新鮮なマグマが火口底に上昇し噴火したのは、1973年の活動で、以来30年を経過している。このことは浅間山の大きな噴火を実見し体験した観測者、研究者が減り、未経験の観測者、研究者に代わりつつあることを意味している。火山の活動を観測・研究しその噴火を予知するために決定論的、あるいは確率論的手法いづれを用いるにしても、噴火活動を知り、理解していなければならぬのは当然である。20世紀における浅間山の

噴火を観察し、出来るだけ同様な表現で記述した本報告が、新しい浅間山観察者の噴火についての、理解の一助となることを希望するものである。また、浅間山周辺に居住する人々に浅間山の活動の危険性を周知する上に役立てば幸いである。

謝 辞

活動記録の整理に際して、地震研究所荒牧重雄教授には資料収集にご協力、ご助言をいただいた。おなじく宇佐美龍夫教授よりは貴重な資料をいただいた。また、気象庁関係の資料収集に関しては、宇平幸一、山里平両博士にご協力いただいた。ここに厚く御礼申し上げます。元東京大学地震研究所所員行田紀也氏、同じく現所員小山悦郎氏には、浅間火山に関して多くの助言をいただいた。心より御礼申しあげます。東京都防災専門員笹井洋一博士には、原稿作成に関し助言をいただいた。原稿査読において懇切な指摘をくださった地震研究所都司嘉宣博士、及び匿名の査読者に厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

荒川義則, 1980, 仁和3年(887年)信濃北部の地震に対する疑問, 気象庁地震観測所技術報告, 第1号, 11-14.
 Aramaki, S., 1956, The 1783 activity of Asama Volcano, Part, 1. *Jap. Jour. Geol. Geophys.*, **27**, 189-229.
 Aramaki, S., 1957, The 1783 activity of Asama Volcano, Part, 2. *Jap. Jour. Geol. Geophys.*, **28**, 11-33.
 荒牧重雄, 1981, 浅間火山の活動史, 噴出物調査および Disaster Map と災害評価, 噴火災害の特質と Hazard Map の作製およびそれによる噴火災害の予測の研究, 文部省科学研究費, 自然災害特別研究研究成果, 50-82.
 浅間山研究会編, 1910, 浅間山, 小諸小学校刊, 23-203.
 浅間山山麓分去茶屋報告, 1922, 浅間山爆発に関する件, 学芸, **39**, 152.
 地学, 1894 a, 雑報, 浅間山の鳴動, **6**, 236.
 地学, 1894 b, 雑報, 浅間山鳴動詳報, **6**, 295-297.
 地学, 1899, 雑報, 浅間山及白根山の噴出, **11**, 589-590.
 地学, 1900 a, 雑報, 浅間山異常実況, **12**, 180-181.
 地学, 1900 b, 雑報, 浅間山の危険, **12**, 240.
 地学, 1906, 雑報, 浅間山鳴動, **18**, 354.
 地学, 1911 a, 雑報, 浅間山の爆発, **23**, 435.
 地学, 1911 b, 雑報, 浅間山の爆発, **23**, 435.
 中央气象台, 1900, 気象要覧, 付録, 浅間山噴煙概況, 11-16.
 中央气象台, 1912, 気象要覧, 1月, 10-12. 2月, 12. 7月, 13.
 中央气象台, 1913, 気象要覧, 2月, 8. 5月, 15-16. 6月, 16. 7月, 16. 8月, 19.
 中央气象台, 1919, 気象要覧, 8月, 213.
 中央气象台, 1921, 気象要覧, 1月, 285.
 中央气象台, 1922, 気象要覧, 1月, 19-21. 2月, 48. 3月, 76-81. 4月, 115-117.
 中央气象台, 1923, 気象要覧, 2月, 43-44.
 中央气象台, 1924, 気象要覧, 9月, 261-262. 10月, 302.
 中央气象台, 1927, 気象要覧, 10月, 668-675.
 中央气象台, 1928, 気象要覧, 2月, 128-140. 3月, 201-202. 6月, 397. 7月, 458-459.

中央气象台, 1929, 気象要覧, 9月, 660-664. 11月, 795.
 中央气象台, 1930, 気象要覧, 4月, 316-317. 6月, 534-541. 7月, 643-644. 8月, 780-785. 9月, 867-881. 10月, 975-976.
 中央气象台, 1931, 気象要覧, 3月, 409. 6月, 836-837. 7月, 987. 8月, 1137-1159. 9月, 1342-1344. 10月, 1487. 12月, 1746-1850.
 中央气象台, 1932, 気象要覧, 2月, 237-239. 3月, 83-389. 4月, 524-526. 5月, 663-667. 6月, 829-832. 7月, 996-999. 8月, 1172-1173. 9月, 1346-1347. 10月, 1478-1485. 11月, 1699. 12月, 1848.
 中央气象台, 1934, 気象要覧, 1月, 2月, 412-414.
 中央气象台, 1935, 4月, 298-299. 5月, 381-382. 6月, 484. 7月, 576. 8月, 665. 9月, 807-808. 10月, 900. 11月, 993-994.
 中央气象台, 1936, 気象要覧, 2月, 256-257. 3月, 347-348. 4月, 454-455. 7月, 748-750. 8月, 847. 9月, 949-950. 10月, 1079-1081. 11月, 1176.
 中央气象台, 1937, 気象要覧, 1月, 105. 2月, 208. 3月, 347-348. 4月, 454-456. 5月, 509. 6月, 612-616. 7月, 721-728. 8月, 834. 9月, 922. 10月, 1020-1021. 11月, 1129. 12月, 1241.
 中央气象台, 1938, 気象要覧, 3月, 302-303. 4月, 440-442. 5月, 582-588. 6月, 734-738. 7月, 862-870. 8月, 1000-1005. 9月, 1156-1161. 10月, 1180-1186. 11月, 1346-1347. 12月, 1241.
 中央气象台, 1939, 1月, 106. 2月, 226-230. 3月, 348. 4月, 467-468. 5月, 623-625. 6月, 744-745. 7月, 881-882. 8月, 1009-1010. 9月, 1113. 10月, 1238. 11月, 1349. 12月, 1464.
 中央气象台, 1940, 気象要覧, 1月, 87. 2月, 185-188. 3月, 290. 4月, 398. 6月, 607. 7月, 824. 8月, 974. 9月, 1113-1114. 10月, 1241-1242. 11月, 1394-1395. 12月, 1522-1523.
 中央气象台, 1941, 気象要覧, 1月, 98-99. 2月, 232-235. 3月, 401-402. 4月, 589-590. 5月, 790. 6月, 979-981. 7月, 1170-1171. 8月, 1354-1356. 9月, 1515-1516. 10月, 1686-1688. 11月, 1847-1848. 12月, 1976-1980.
 中央气象台, 1942, 気象要覧, 1月, 69-73. 2月, 191-196. 3月, 340-343. 4月, 484-487. 5月, 627-630. 6月, 761-762. 7月, 117-118. 8月, 275-280. 9月, 430-434. 10月, 561-564. 11月, 683-685. 12月, 789-791. 946.
 中央气象台, 1943, 気象要覧, 1月, 96-98. 2月, 197-199. 3月, 370-375. 4月, 506-508. 5月, 631-634. 6月, 774-775. 7月, 120-121. 8月, 254-255. 9月, 474-475. 10月, 613-614. 11月, 762-766. 12月, 891-893.
 中央气象台, 1944, 気象要覧, 1月, 32. 2月, 33. 3月, 33. 4月, 33. 5月, 31. 6月, 33. 7月, 33. 8月, 37. 9月, 28-29. 10月, 32-33. 11月, 28-29. 12月, 46.
 中央气象台, 1945, 気象要覧, 1月, 40. 2月, 31-32. 3月, 32. 4月, 33. 5月, 27. 6月, 25. 7月, 23. 8月, 23. 9月, 27. 10月, 29. 11月, 26. 12月, 25.
 中央气象台, 1946, 気象要覧, 1月, 27. 2月, 26. 3月, 28. 4月, 31. 5月, 32. 6月, 31. 7月, 34. 8月, 29. 9月, 31. 10月, 30. 11月, 29. 12月, 45.
 中央气象台, 1947, 気象要覧, 1月, 32. 2月, 33. 5月, 41. 7月, 45-47. 8月, 45-46. 9月, 37. 10月, 27. 12月, 27.
 中央气象台, 1948, 気象要覧, 1月, 31. 2月, 28. 3月, 27. 4月, 27. 5月, 29. 6月, 32. 7月, 30. 8月, 30. 9月, 32. 10月, 26. 11月, 28. 12月, 25.
 中央气象台, 1949, 気象要覧, 1月, 30. 2月, 28. 3月, 30-40.

- 4月, 28. 5月, 25. 6月, 33-34. 7月, 33-34. 8月, 38-40. 9月, 1-34. 10月, 34. 11月, 30. 12月, 36.
- 中央气象台, 1950, 気象要覧, 1月, 38-39. 2月, 30. 3月, 31. 4月, 39. 5月, 40. 6月, 47. 7月, 50-51. 8月, 57. 9月, 46-47. 10月, 40. 11月, 44. 12月, 46-47.
- 中央气象台, 1951, 気象要覧, 2月, 49. 3月, 52. 4月, 60. 5月, 52. 6月, 58. 7月, 61. 8月, 59. 9月, 52. 10月, 67. 11月, 48. 12月, 47.
- 中央气象台, 1952, 気象要覧, 1月, 49. 2月, 52. 3月, 64. 4月, 59. 5月, 60. 6月, 76. 7月, 66. 8月, 67. 9月, 62. 10月, 69. 11月, 60. 12月, 55.
- 中央气象台, 1953, 気象要覧, 1月, 57. 2月, 52. 3月, 58. 4月, 64. 5月, 67. 6月, 70. 7月, 84. 8月, 74. 9月, 74. 10月, 56. 11月, 66. 12月, 49.
- 中央气象台, 1954, 気象要覧, 1月, 54. 2月, 48. 3月, 53. 4月, 62. 5月, 68. 6月, 68. 7月, 73. 8月, 74. 9月, 104. 10月, 58. 11月, 63. 12月, 51.
- 中央气象台, 1955, 気象要覧, 1月, 61. 2月, 61. 3月, 61. 4月, 81. 5月, 63. 6月, 78. 7月, 81. 8月, 76. 9月, 116.
- 権藤成卿, 1932, 日本震災凶謹攷, 文芸春秋社(東京), 395頁.
- 群馬県史編さん委員会, 1980, 群馬県史, 資料編11, 近世3, 群馬県, 1110頁.
- 早津賢二, 1994, 新潟焼山火山の活動と年代—歴史時代のマグマ噴火を中心として—, 地学, **103**, 149-165.
- 久松潜一(監修), 1974, 改訂新潮国語辞典, 新潮社(東京), 2170頁.
- 飯島 聖, 2002, 軽井沢測候所浅間火山観測90年, 気象, **46**, 17624-17630.
- 今村明恒, 1931 a, 1926年より1930年にいたる日本火山活動の概況(其一), 地震, **I**, **3**, 54-59.
- 今村明恒, 1931 b, 1926年より1930年にいたる日本火山活動の概況(其二), 地震, **I**, **3**, 123-131.
- 今村明恒, 1942, 増訂大日本地震史料第一巻を読む, 地震, **I**, **14**, 89-94.
- 今村明恒, 1944, 降毛考, 地震, **I**, **16**, 55-62.
- 石川高見, 1930, 昭和4年9月18日浅間山爆発報告, 験震時報, **4**, 161-185.
- 伊藤徳之助, 1919, 大正八年三月十四日の浅間山の噴煙(第1報), 気象集誌, **38**, 130-135.
- 市川徳一, 1930, 追分より見たる浅間山噴火の状況, 験震時報, **4**, 191-192.
- 梶間百樹, 1930, 昭和4年9月18日未明の浅間山噴火に就いて, 験震時報, **4**, 145-160.
- 軽井沢測候所編, 1956, 浅間山爆発史集, (685-1955年), 372頁.
- 軽井沢測候所編, 1959, 浅間山爆発史集, 追録第1号(1956年-1958年), 373-406. 同追録第2号(1959年1月-7月), 407-419. 同追録第3号, (1959年8月-1962年7月), 420-428.
- 軽井沢町誌刊行委員会, 1987, 軽井沢町史, 自然編, 59-76.
- 加藤常次郎, 1915, 浅間山最近の状況, 東洋学芸雑誌, **32**, 690-691.
- 加藤常次郎, 1917, 浅間山の状況, 東洋学芸雑誌, **34**, 625-626.
- 加藤常次郎, 1920, 浅間山火口底の状況, 東洋学芸雑誌, **37**, 521-522.
- 加藤常次郎, 1921, 浅間山動静報告, 東洋学芸雑誌, **38**, 472.
- 河内晋平, 1983, 八が岳大月川岩屑流, 地質, **89**, 173-182.
- 河野常吉, 1890, 浅間火山大噴出の記, 地学, **13**, 1-16.
- 川崎 敏, 1974, 浅間, 木耳社(東京), 398頁.
- 火山, 1935, 火山消息, **I**, **2**, 1号, 166, 2号, 210.
- 気象庁, 1955, 気象要覧, 10月, 70. 11月, 62. 12月, 59.
- 気象庁, 1958, 気象要覧, 10月, 73-74. 11月, 66-77. 12月, 74-75.
- 気象庁, 1959, 気象要覧, 4月, 86. 7月, 82. 8月, 128-129.
- 気象庁, 1961, 気象要覧, 8月, 82-83. 9月, 111. 10月, 97. 11月, 69.
- 気象庁, 1965, 気象要覧, 5月, 60.
- 気象庁, 1973, 気象要覧, 2月, 28-31. 3月, 30. 4月, 31.
- 気象庁, 1982, 気象要覧, 4月, 39-41. 10月, 46-47.
- 気象庁, 1983, 気象要覧, 4月, 37-39.
- 気象庁観測部地震火山係, 1959, 日本噴火誌, 348頁.
- 気象庁, 1975, 日本活火山要覧, 1975, 119頁.
- 気象庁, 1984, 日本活火山総覧, 482頁.
- 気象庁, 1991, 日本活火山総覧(第2版), 483頁.
- Kuno, H., 1962, Catalogue of the active volcanoes of the world including solfataras fields, XV, *Japan, Taiwan and Mariana. I. A. V.*, 332 pp.
- 黒坂初太郎, 1917, 浅間山状況, 東洋学芸雑誌, **34**, 755.
- 黒坂初太郎, 1919, 大正八年二月十四日浅間山爆発の件, 東洋学芸雑誌, **36**, 364-368.
- 黒坂初太郎, 1921 a, 大正十年六月二十一日午後五時四十分浅間爆発の実況並に観測報告, 東洋学芸雑誌, **38**, 406-407.
- 黒坂初太郎, 1921 b, 大正十年六月二十九日午前八時半頃の浅間小爆発報告, 東洋学芸雑誌, **38**, 367.
- 黒坂初太郎, 1921 c, 大正十年八月十二日午後六時頃の浅間地震報告, 東洋学芸雑誌, **38**, 406-407.
- 櫛谷国松, 1894 a, 浅間山噴出遠望, 地学, **6**, 347-348.
- 櫛谷国松, 1894 b, 浅間山景況(寄書), 地学, **6**, 460-461.
- Lamb, H.H., 1970, Volcanic dust in the atmosphere; with a chronology and assessment of its meteorological significance., *Phil. Trans. Roy. Soc. London A*, **266**, 425-533.
- 前橋測候所報告, 1919, 東洋学芸雑誌, **36**, 431-432. 595-598.
- 松村 明編, 1988, 大辞林, 三省堂(東京), 2616頁.
- Milne, J., 1886, The volcanoes of Japan., *Trans. Seismol. Soc. Japan*, **9**, 1-180.
- Minakami, T., 1935 a, The explosive activities of volcano Asama in 1935.(Part 1.). *Bull. Earthq. Res. Inst.*, **13**, 629-644.
- Minakami, T., 1935 b, The explosive activities of volcano Asama in 1935.(Part 2.). *Bull. Earthq. Res. Inst.* **13**, 790-800.
- 水上 武, 1935 c, 最近の浅間山の活動(1), 地震, **I**, **7**, 319-339.
- 水上 武, 1935 d, 浅間火山中央火口丘の相対的上昇と火口底の昇降変化, 震研彙報, **13**, 318-327.
- 水上 武, 1940, 浅間火山最近の爆発により噴出せる火山弾の分布と爆発のエネルギーに就いて, 火山, **I**, **4**, 141-155.
- Minakami, T., 1942, On the Distribution of Volcanic Ejecta. (Part 1.) The Distribution of volcanic Bombs ejected by the recent Explosions of Asama, *Bull. Earthq. Res. Inst.*, **20**, 65-92.
- 水上 武, 1955, 浅間火山, 北佐久郡志自然編, 128頁.
- 水上 武・平賀士郎・内堀貞雄・宮崎 務, 1959 a, 噴火と火山に発生する地震との研究(第2報), 特に浅間火山の噴火予知の問題に関して, 火山, **II**, **4**, 115-130.
- 水上 武・故佐久間修三・茂木清夫・平賀士郎, 1959 b, 噴火と火山に発生する地震との研究(第3報)特に浅間火山および有珠山(1944年)の地震の震源と火山, 火山, **II**, **4**, 133-151.
- Minakami, T., Utibori, S., Hiraga, S., Miyazaki, T., Gyoda, N. and Utsunomiya, T., 1970, Seismometrical Studies of Volcano Asama, Part 1, Seismic and Volcanic Activities

- of Asama during 1934-1969. *Bull. Earthq. Res. Inst.*, **48**, 235-301.
- 村山 馨, 1979, 日本に火山 (II), 大明堂 (東京), 276 頁.
- 武者金吉, 1935, 火山の活動に際して観測せられたる光象, 地震, **I**, **7**, 159-164.
- 武者金吉, 1941, 増訂大日本地震史料, 第 1 卷, 鳴鳳社 (東京), 945 頁.
- 長野測候所追分支所, 1930, 浅間山山麓被害調査, 験震時報, **4**, 97-213.
- 長野測候所, 1930, 昭和 4 年 9 月 18 日浅間爆発管内に関する調査, 験震時報, **4**, 197-213.
- 中村清二・山崎直方, 1911, 浅間山火山近時ノ活動ニ就キテ, 震予調報告, **73**, 1-16.
- 西澤技手, 1913, 西澤技手の報告, 東洋学芸雑誌, **30**, 37.
- 小鹿島果, 1894, 日本災異志, 思文閣 (京都), 859 頁.
- 大森房吉, 1910, 浅間山ノ噴火ニ就キテ, 震予調報告, **67**, 1-27.
- 大森房吉, 1911, 浅間山ノ噴火ニ就キテ, 第二回, 震予調報告, **73**, 29-101.
- Omori, F., 1912, The Eruption and Earthquakes of the Asama-Yama. I, *Rep. Imp. Earthq. Inv. Comm.*, **6**, 1-147.
- Omori, F., 1914a, The Eruption and Earthquakes of the Asama-Yama. II, [List of the volcanic Earthquakes instrumentally registered at the Asama-Yama (Yunotaira) observatory in 1911 and 1912.]. *Rep. Imp. Earthq. Inv. Comm.*, **6**, 149-226.
- Omori, F., 1914b, The Eruption and Earthquakes of the Asama-Yama. III, [Remarks on the Seismographical Observations at Yunotaira in 1911 and 1912.]. *Rep. Imp. Earthq. Inv. Comm.*, **6**, 227-257.
- Omori, F., 1914c, The Eruption and Earthquakes of the Asama-Yama. IV, [Strong Asama-Yama Outbursts, Dec. 1912 to May 1914.]. *Rep. Imp. Earthq. Inv. Comm.*, **7**, 1-215.
- Omori, F., 1917, The Eruption and Earthquakes of the Asama-Yama. V, [List of the volcanic Disturbances instrumentally registered at the Asama-Yama Seismological Stations, 1913 to 1916.]. *Rep. Imp. Earthq. Inv. Comm.*, **7**, 216-326.
- 大森房吉, 1918a, 日本噴火志上編, 震予調報告, **86**, 236 頁.
日本噴火志下編, 震予調報告, **87**, 116 頁.
- 大森房吉, 1918b, 浅間山噴火口の変遷, 東洋学芸雑誌, **35**, 554-555.
- Omori, F., 1919, The Eruption and Earthquakes of the Asama-Yama. VI, [Notes on the Eruptive and Seismic Disturbances, 1911-1917.]. *Rep. Imp. Earthq. Inv. Comm.*, **7**, 329-456.
- 大森房吉, 1921a, 浅間噴火概報, 地学, **33**, 373-380.
- 大森房吉, 1921b, 大正十年六月四日の浅間山爆発に就きて, 東洋学芸雑誌, **38**, 316-319.
- 大森房吉, 1921c, 大正十年六月二十一日の浅間山破裂に就きて, 東洋学芸雑誌, **38**, 319-320.
- 尾崎喜左雄, 1971, 火山噴出物堆積と遺跡, 一志茂樹博士記念論文集, 723-744.
- 佐藤伝蔵, 1910, 明治四十二年十二月浅間山破裂, 地学, **22**, 196-223.
- 坂口 豊, 1984, 日本の先史・歴史時代の気候, 自然, 5 月号, 18-36.
- Sakuma, S., 1951, Damage on Window-panes by the Air-wave of Explosion of Volcano Asama on Sept. 23, 1950. *Bull. Earthq. Res. Inst.*, **29**, 605-615.
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋 (校注), 1980, 日本書記下, 岩波書店 (東京), 627 頁.
- 下鶴大輔・内堀貞雄・行田紀也・小山悦郎・宮崎 務・松本時子・長田 昇・寺尾弘子, 1975, 1973 年の浅間山の噴火活動について, 震研彙報, **50**, 115-151.
- 下鶴大輔・行田紀也・鍵山恒臣・小山悦郎・萩原道徳・辻浩, 1982, 1982 年 4 月 26 日の浅間山の噴火, 震研彙報, **57**, 537-559.
- 新村 出編, 1983, 広辞苑第三版, 岩波書店 (東京), 2667 頁.
- 震予調記事, 1918, 浅間山噴煙, 東洋学芸雑誌, **35**, 502.
- 震予調記事, 1919, 東洋学芸雑誌, **36**, 252-253.
- 震予調記事, 1921a, 浅間山の噴火に関する件, 東洋学芸雑誌, **38**, 84-86.
- 震予調記事, 1921b, 活動概況, 東洋学芸雑誌, **38**, 90-92.
- 震予調記事, 1921c, 噴煙報告, 東洋学芸雑誌, **38**, 272-273.
- 震予調記事, 1921d, 噴火に関する件, 東洋学芸雑誌, 313-314.
- 震予調記事, 1922a, 浅間山噴火に関する件, 学芸, **39**, 59-160.
- 震予調記事, 1922b, 浅間山噴火孔概況, 学芸, **39**, 140-141.
- 関谷 博, 1959, 浅間山の火山活動の解析 (第 1 報), (統計解析の部), 験震時報, **24**, 1-10.
- 田口龍雄編, 1943, 日本気象史料綜覧, 中央気象台, 248 頁.
- Takahasi, R., Minakami, T., 1937, Tilt Observations during the recent Activities of Volcano Asama. *Bull. Earthq. Res. Inst.*, **15**, 465-491.
- 寺田寅彦, 1935, 浅間山小爆発の二例に就て, 震研彙報, **13**, 801-805. 東京大学地震研究所編, 1981, 新収日本地震史料, 第一巻, 193 頁.
- 東京天文台編, 1829-1985, 理科年表, 丸善 (東京).
- 東京天文台編, 1997, 理科年表, 854.
- 堤 健六・市川徳一, 1930, 昭和 4 年 9 月 18 日浅間山爆発報告, 験震時報, **4**, 187-190.
- 内田正男 (編著) 1981, 日本暦日原典, 雄山閣 (東京), 560 頁.
- 宇津徳治, 1981, 関東・中部地方およびその周辺の地震活動 (1904 年~1925 年), 震研彙報, **56**, 111-137.
- 脇水鉄五郎, 1892, 浅間山の記, 地学, **38**, 55-61.
- 和達清夫・益田クニモ, 1935, 続本邦噴火概表, 験震時報, **8**, 163-168.
- 渡辺 慧・藤原咲平・深瀬一郎, 1932, 昭和 6 年 8 月浅間山爆発調査報告書 (昭和 6 年 9 月提出), 験震時報, **6**, 181-217.
- 八木貞助, 1921, 大正 9 年 12 月浅間山爆発の概況と其の噴出物に就て, 地質, **28**, 170-178.
- 八木貞助・中条正勝, 1929, 浅間山昭和 4 年 9 月の爆発に就て (一), 地学, **41**, 744-753.
- 八木貞助・中条正勝, 1930a, 浅間山昭和 4 年 9 月の爆発に就て (二), 地学, **42**, 18-31.
- 八木貞助・中条正勝, 1930b, 浅間山昭和五年六月の爆発に就て, 地学, **42**, 645-647.
- 八木貞助, 1936, 浅間火山, 長野, 信濃教育会北佐久部会, 信濃毎日新聞, 519 頁.
- 山崎直方, 1911, 再び浅間火山ノ活動ニ就キテ, 震予調報告, **73**, 17-18.
- 山崎直方, 1936, 天明三年浅間山噴出の実況, 震予調報告, **73**, 20-28.
- 保田柱二, 1921a, 大正 10 年 6 月 4 日浅間山爆発観測報告, 東洋学芸雑誌, **38**, 314-315.
- 保田柱二, 1921b, 大正 10 年 9 月 13 日爆発に関する記事, 東洋学芸雑誌, **38**, 451-453.
- 保田柱二, 1929, ニュースと史料, 地震, **I**, **1**, 754-756.
- 地震, 1930, ニュース欄, **I**, **2**, 9 号, 610-611. 10 号, 674.
- 地震, 1931, ニュース欄, **I**, **3**, 4 号, 250. 7 号, 446-447. 9 号, 582-585. 10 号, 644-645.
- 地震, 1932, ニュース欄, **I**, **4**, 1 号, 47-48. 3 号, 178-179. 4 号, 256-258. 5 号, 323. 6 号, 297-298. 7 号, 446-447.

浅間火山活動記録の再調査

8号, 517-518. 10号, 649.
地震, 1934, ニュース欄, **I**, **6**, 2号, 113-114. 3号, 161. 8号,
461.
地震, 1935, ニュース欄, **I**, **7**, 2号, 129. 5号, 264-265. 6号,
303-305. 8号, 465. 9号, 509. 10号, 549. 昭和10年
(1935) 浅間山噴火資料, 峰の茶屋日記, 558-564., 11号,
595. 12号, 647-648.
地震, 1936, ニュース欄, **I**, **8**, 3号, 147-148. 4号, 217-218.
5号, 270. 9号, 479-480.
地震, 1937, ニュース欄, **I**, **9**, 4号, 189-190. 5号, 235. 7号,
328.
地震, 1938, ニュース欄, **I**, **10**, 4号, 173. 5号, 214. 6号,
258. 7号, 318. 8号, 365. 9号, 414. 10号, 461. 11号,

506-507. 12号, 555.
地震, 1939, ニュース欄, **I**, **11**, 1号, 35-36. 2号, 98. 3号,
143. 6号, 299. 7号, 451-452. 8号, 394. 9号, 451. 10
号, 503.
地震, 1940, ニュース欄, **I**, **12**, 1号, 38. 4号, 181. 12号,
566-567.
地震, 1941, ニュース欄, **I**, **13**, 2号, 52. 7号, 219. 8号,
258. 9号, 296.
地震, 1942, ニュース欄, **I**, **14**, 2号, 68. 6号, 154. 7号,
182.

(Received May 23, 2003)

(Accepted January 13, 2004)